
ONE PIECE ~ Two one ~

環 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ～ Two one ～

【Nコード】

N2868P

【作者名】

環 円

【あらすじ】

「運命が神様の画く物語なら、わたしはそのひと筆だけでも変えてみせる」

手のひらの喪失感を感じていた20年の月日の夢の先に、生まれた世界は大海賊時代真っ只中だった。平和の象徴である東の海で兄弟達と共に育ち、双子の方割れであるエースと共にあるため、様々な選択をしてゆく。そんな少女の物語。

01・カエルヒ（前書き）

ご来観ありがとうございます。

こちらONN PIECEの二次創作を綴らせて頂きます。

原作0〜60+現在連載号のネタばれをふんだんに含む内容となっておりますので、ご了承の上宜しくお願い致します。

また私自身の独自解釈等も入っておりますので、原作と違うよ？と言う場合もございます。

少々堅苦しい前置きとなりましたが、お楽しみただけると幸いです。

01 - カエルヒ

指先に触れるもう一つの手。握りしめた手が触れ合う。温かな場所。

母は云った。

まだだめよ。そのままできて。

わたしは頷く。

もう少し、眠っているね。

うとうとと、戻る。

うつつにみるまどろみへと。

あ。

目尻から流れる涙で目が覚めた。指先が頬を濡らした跡を拭う。瞼を擦りながら周囲を見回すとまだ暗く寒い。布団の中で暖を取り目が慣れるのを待ってから時計を見ると5時を回ったばかりだった。このまま二度寝すれば幸せだろうと思いつつももぞもぞと毛布の中で手足をはみ出しながら、背伸びする。

テレビを付ければ、ちょうど天気予報をしている所だった。

『今日の天気は全国的に晴れ、からりと晴れ洗濯物を干すには良

い一日となりそうです』

カーディガンを羽織り、ストーブを付けて前髪を髪留めで押え、
ばたばたと洗面所へと向かえば、パクリと歯ブラシを銜えこむ。

水を入れスイッチオン。放っておくと湯が沸くティファールは便利だ。朝の必需品とも言えるだろう。

洗顔しさっぱりとしたところで、窓越しに空を見た。

青が広がり、雲ひとつない。

ゆつくりと窓を開ければ冷たい風が室内へと流れ入った。

ぶるりと身が震える。けれど凜としたような、朝の空気が好きだった。ゆつくりと空に昇ってくる朝日も、そして軒先から聞こえてくる雀のさえずりさえ、今日という日常の始まりを知らせてくれる。肩にかかる髪が風にたなびく。高層ビルによって切り取られたように見える空の向こう側を見れば、だいたいの一日の様子が分かる。晴れの日と雨の日とでは風の匂いが違うのだ。

「夕方から雨。傘は必需」

唇から洩れる声は、朝の澄んだ空気の中に溶けてゆく。

軽めの朝食を取り、道着に着替えて庭で軽く体を動かした。大抵は型を取るだけで終わる。祖父が生きていた時は相手をして貰っていたが、今はひとり、呼吸を乱さないようにひと通りを流すだけだ。

太陽の光が燦々と照りだしてくると汗を流し、服を着替える。いつもはここでタイムアウト、自転車に乗り駅へと向かうのだが今日は随分と早起きしてしまったため、時間が余っている。

本棚からどれにしようかと迷っていた指先が一冊、を選んだ。

『星の航海術をもとめて』

友人たちからは本の虫と言われてしまうほど、家の中には部屋ごとに、様々なジャンルの書が並んでいる。その殆どは父や母が蓄え

ていた書物だ。だがそろそろ、自分が買った本達も、部屋をひとつ占領しそうな勢いであるのは間違いない。

友人達と大学の帰りに本屋によれば、最後の最後まで粘るのが常だった。

どれもこれも、読んでみたいものばかりで目移りしてしまうのだ。

「飽きないねー」

友人達は苦笑しながら、行くよー、と声をかけてくれた時に手にしたものが、その日の戦利品だ。

「好き過ぎるってのも面倒だよな」

そう言われても仕方が無い。これだけは引けない、こだわりだった。

好きなもの。いつもそう返答する。

紅茶を入れ、時計にタイマーをセットし、居間のソファアーではらりとページを捲った。

手の中にある本には、口承でのみ伝えられてきた航海の技法を、カヌーに乗った若者の大冒険を添えて書かれている半フィクションものだ。読み返す度に何度、眼前に広がる青を瞼の奥に思い浮かべただろう。

大学を卒業した後、仕事をしながら船舶免許を取ってもいいかもしれない。

そんなことを思う。

そしてどこか南の島で小さな小舟を操りながら、実際に青の視界へ旅立つのも楽しそうだと想像した。

出来るかどうかは置いておき、やってみたいこと、を夢見るのは楽しいし、もし今、出来なかったとしても、いつか、できるかもしれない。

小さな頃から感じる、海への憧憬は今も変わらず続いている。

久々に懐かしい夢を見た。

母の中に居た時の、優しい暖かさでもいうのだろうか。

小さな時、どうしてひとりなの？と両親に何度も尋ねていたのだという。ひとりではなかった、もうひとり、寄り添うように眠る存在が居た筈なのに、と。

生まれる時も難産だと聞いた。

陣痛が弱く、まるでまだ体内に留まって居たいと願っていたようだ、と。

ふと視界が揺らぐ。

アラームが鳴る前に時計の針を確認し、ぱたん、と本を閉じた。帰りにデパートに寄ってお総菜でも買ってこよう、と財布を確認する。今年も今日で終わりを迎える。紅白を楽しみにしながら、明日を迎えれば、20歳の誕生日だ。

書きかけのレポートが入ったカバンを手に、家を出る。

夕方、突然の雷雨が交通機関を麻痺させた。

夏場は珍しく無くなったゲリラ豪雨だが、真冬の発生は余り見られない、という。

雷が避雷針へと幾つも手を伸ばす。

何かを引き裂くような、爆音。

そして停電。雷を苦手とする人々が悲鳴を発する。

人々はみな、足止めされた場所で空を見上げた。視線を落としていた携帯や時計、本等から、パトカーと救急車のサイレンがこだまする黒く立ちこめた雲を。

眠りから覚めると見知らぬ天井が見える…気がした。まどろみが強く、いまいち意識もはつきりと持てない。

ここはどこだろう。まず考えたのはそれだった。

大学から帰る途中で降り始めた雨に傘を取りだし、駅に向かっていたはずだ。

思いの外激しい雨粒にしっかりと傘を持ち歩いていた。

…確か、雷が凄くて…

ぼんやりとした視界がもどかしい。倒れてしまったのだろうか。病院、にしては賑やかな声が聞こえるような気がする。

ここはどこだろう。

おばに、連絡がいつてしまったのだろうか。もしそうならメンドクサイ事になりそうだと思いながら、目を瞬かせる。

荷物の中には学生証と定期しか入っていないかったはずだ。ぎりぎり大学で止まっているだろう願いを祈っておく。

とりあえず起きなければ。

そう思って手足を動かすが、いつものようには動かせなかった。しかもなぜか急に不安が湧き出して止まらなくなる。抗おうとしても理性より、感情が優先され、言葉にならない音が泣き声に変わるまでそう時間はかからない。

「なにやってんだい、ホント下手だねえ」

賑やかさが終わらない周囲から、そんな声が聞こえた。

「おかしいのう。つい今の今まで寝とったのに」

困ったような表情を浮かべる男から、同年くらいだろうか、かつてのありし日を知っている老婦人が、必死に泣き声をあげる、赤子をひよいと抱きかかえた。

「ほうら、安心おし。周りがうるさいから、びっくりしちまった

んだよねえ」

心地よく揺れる腕の中で、はふう、と息をつく赤子に老婦人は語りかける。

「もう大丈夫だよ。ごつごつとしたガーブさんの腕は固かったかい」

「……」

わしはこういうのは苦手なんじゃ。

大きな巨体した、白いものが目立ち始めた男が胸を張って言う。

その意識はどんなもんだと自慢しているようにも聞こえる大きな笑い声だった。

祭り囃子のような人々の声が周囲を取り囲む。男の寄港に、多くの人が沸き立っているようだ。聞こえてくる言葉は、うたげ、飲み放題、料理。

楽しいな声音が多く響いている。

そこに至る前。

確かな意識を持っていたとはいい難かったが、随分と長い間、波の音を聞いていたような気がしていた。

口元に寄せられる甘い液体が喉を通過していた時以外はずっと寝ていたようなものだから、確とした記憶では無かったがそれでも耳に覚えている音はそうそう忘れないものだろう。

とある小さな村に、巨大な船が港についた。特色ある船は遠く海原を進んでいる姿を見るだけで、どこに属しているのかを如実に表す。

それは世界を守る船だった。しかも着した村では特別な意味も含んでいる。

港に着いた男はゆつくりと村へと入ってゆく。

良く見知った場所なのだろう。

両手に生まれて数か月しか経っていない乳児を手に掴んで道を進んでいる。

途中で出会った、道の先に住む住人だろうか。歓迎を親しげな言葉で放ちつつ、道すがらを共に歩く。

特色ある船、は軍艦だった。

村に近づくと、増えてゆく人の群れをかき分けるかのように、水兵が中将、とその男の名を呼んだ。

「なんじゃ、なにか…」

こそりと伝令を耳元で報告すると、放っておけと面倒くさそうに一蹴する。どうせ任務という枠から外れているのはいつものことで、そこら辺に漂っている海賊船の3つ位を沈めれば帳尻が付く。

聞けば物騒な会話だと誰もが思うはずのものを堂々としていても、周囲の人垣は全く崩れない。それどころか、近頃沖合に黒い髑髏旗を付けた船が見えるのだと不安を口にする者達も居る。

「分かった。後ほど行かせよう」

海軍線を見ればこの海域から出ていくだろうが、と黒い口髭を蓄えた口角が上がる。がしかし男、ガープ的には海賊^{それ}よりも優先すべき事項があった。

己が船長を務める軍艦には、両手に握る子供らが使っていたベツトや身の回り品が乗せられている。それをこの村にある自宅に運ばなくてはならない。

今日明日くらいは村に滞在できるだろうが、本来向かう海域へ出ずに、大周りともいえる航路を取っていた。全ては双子をこの村に届けるために船長特権で下したのだ。これからこのふたりは、この島で暮らす。

すやすやと眠る赤子らは、周囲がどんなに騒いだとしても起きなかった。

時折薄く目を開くものの、すぐにまた、眠りの中へと落ちてゆく。生まれが生まれであるだけに、外に出たとしてもすぐに動き回らずもない。

「ガープさんの孫かい、その子らは」

「可愛いじやろ。エースとアン、という」

じよりじよりとガープがふたりを頬元に寄せ頬ずりをし、何を思い誤ってか、盛大な高い高いを始める。

後方、海側より荷車を引き、押していた海兵が遠くに見える小さな、上空に放り投げられる何かを見れば慌てて駆け寄ってきた。

首もまだ座っていないのになにしているのかと上司に注意し、慌てて抱きとめながら自宅へ到し、手持無沙汰なガープをも働かせて家の装丁が整ったベットへと寝かしつける。

そうして目を覚まし、お腹が空いたのか、それとも人肌が恋しかったのか。泣き始めた女兒をガープが抱けば、余計に泣き叫び始めたのを見かねて、老婦人が取り上げたと言う流れだ。

まだぐずぐずと、いつ泣きだすのか解らないご機嫌斜めの状態ではあるが、一応は老婦人に抱かれるのは納得しているかのようにも見える。

アン、は深呼吸をし、一体何がどうなっているのかを確認する。

棚上げしておきたい問題は山とあるが、泣いている場合では無い。自分の手が小さく、理性よりも感情が優先される状況に戸惑いもあったが、幼い頃母に抱っこして貰っていた時の懐かしい気持ちと同じ感じがし、危害を加えられる訳ではないと、警戒しながらも良く見えない。

確か生まれたばかりの頃は明暗しか識別できず、成長するに従い視力も発達したはずだ。本の虫であったが幸いなことに、眼鏡のお世話にならずに済んでいた。眉を寄せじーっと覗きこむ、輪郭を凝視する。

そしてはつと気付いた。

おじい、ちゃん？

懐かしい顔がそこにあった。また会えるだなんて、夢でも見ているのだろうか。手を伸ばし笑いかける。

「おお？」

「ガープさん、抱いておやりよ」

大きな掌が体を包む。ごわごわとした腕に戸惑いを浮かべながら幼子を抱く男の顔はいつもよりも優しい感じがした。周囲の声がひそひそと、だが確実に聞こえるような大きさで子煩悩ぶりを発揮し始めているガープを噂する。

「エースは良く寝る子ね」

お腹が空いたのかしら、それとも…

村の女達はガープから乳児を再び取り上げると、てきぱきとミルクを飲ませ、着替えを終わらせた。もう一人は掛けられていたタオルケットを蹴飛ばし、大の字になって寝続けている。その横へ、うとうとし始めた幼子を横たわらせた。

触れ合う手が心地よくて、そのまま瞳を閉じる。

今まで何かが足りなかった。手を伸ばせばあるはずの何かが、どこかに行ってしまったような気がしていた。

よかった、横に居る。

感じていた孤独感と違和感が全て消え去っていた。

ところで？

押し寄せる眠気を理性でどうにか横に寄せて、考える。

先ほど自分を抱いた人物は誰なのか、と。

最初は祖父と思ったのだが、なんだか違う気がした。身長は高くはあったが、あんなにごつごつはしていなかったはずだ。しかも髪がまだ黒かった。

なぜに赤ちゃんまで成長が退行しているのかも解せない。

そしてふと気付く。記憶がふたつある、という事に、だ。

…っ

瞬間こめかみに感じた痛みにも目を瞑る。

モンキー・D・ガープ。

彼は世界の”正義”を守る世界政府直属の海上治安維持組織、海軍本部中將であり、未来に生まれてくるだろう弟の祖父に当たる。

弟…なにそれ。

流れ込んでくる何かを必死に振り払おうとするが、拒めない何かがある。が、とんと流れ込んでくる。

清濁など関係無い、渦だ。

針を刺したような痛みは次第に脳全体を苛む苦しみへと変わる。

それはまるで、古い記憶をまつさらな、新しい今から重ねられるだろう月日の為に塗りつぶされるかのような感覚だった。

いわゆる死、というモノの体験とでもいうべきか。

人は生まれる前の記憶を持たない。時折、例外的に保持したまま生まれてくる個体もあるが、それは本当に稀なことだ。多くは生まれてからの記憶しか無いし、どこからヒトはやって来て、去るのか謎のままだ。

忘れてなんかやるものか。半ば意地だったともいえる。かつての自分、今の自分。

かつての境遇、これからの断片が小さな体に駆け巡った。声をあげれば、祖父が何事だと己の身を再び抱き上げる。息が苦しく、空気が欲しくてぱくぱくと口を動かした。

泣いているつもりは無かったが、生理的に流れる体液が頬を伝う。

長い、長いふたつの世界をたゆたいながらみていた、現が重なる。……わたしは母を此方でも失っているのか。

妊娠も42周を越えると過期となり母体へ多大な悪影響を及ぼす。また胎児を守っている胎盤の機能不全も起きやすくなり、医療が発達していたあちら側ではこの事実が発覚したその日に誘発分娩がおこなわれていただろう。

しかし。此方側ではその処置すら難しい。置かれている状況も変わっていただろう。

こちらの母はふたつの命をこの世に送り出し、力尽き果てた。

『……女の子ならアン、男の子なら……エース』

母の声は慈しみに満ちていた。

「彼がそう決めてた……この子たちの名は……」

忘れまい、と願う。

いつかこの事を、エースに伝えるまでは覚えておきたい、と強く願った。

生まれてきてくれてありがとう。かつての母はアンではない自分にもそう言ったからだ。

声は出なかった。ほろほろと流れ落ちる涙を拭く事も出来ずに、ゆがむ天井をただ見つめる。

記憶は残った。ぐらぐらと脳が揺れ、飲まされたばかりだったミルクを吐き出したい欲求にかられるが、口を両手で塞いでなんとか耐える。一度口に入れたものは、出さない主義なのだ。

情報を振りかえって思ったのは、向こうに戻る術を考えるより、こちらをまず何とかするべきだろう、ということだ。

あちらでの生活は、確かに一般的な普通とは少々違っていたが、こちらと比べると十二分に平穏な部類に入る。

受け入れた。受け入れざるを得なかった。

否定しても何かが変わるわけでもない。

夢であれば覚めるのを待てばいいが、まぎれも無く現実であるように感じられた。

逃げ場所など無いならば、非現実的であつたとしても受け入れて対処した方が絶対に良い。

原因をいつまでも探し求めるより、結果から次の手をどうするかを考えるべきだ。

与えられた情報を上手く使って乗り切る術を思考する。

どうすればいい？

この小さな体で出来る事は限られている。

体はまだ自由に動かせないが、首が座り始める前後であるならば、せいぜい生まれてから3カ月から4カ月ごろだろうと目算が付く。

未来を先見させられるというのは、余り気持ちの良いものではないというのも分かった。確実に起きるかどうかはこれから確かめなければならぬが、こういう者はきつと起るべくして起るものなのだろう。

様々な事情が絡み、預けられる経緯も理解する。
だがしかし。

自由奔放な悩を持つ義祖父の取るこれからの行動は、放任や放置などという言葉では生ぬるい。例えるならば土に埋める種を海水に浸す、ご飯だと肉食の生きた獣の前に放り出す。あげればきりが無い。

根本的に何かが間違っていると、アンは力いっぱい叫びたかった。あちらで良く言う、目に見えぬ何かの存在が起因していると言うならば、首元を引っ掴んで文句を一言、言っただとしても罰は当たらないはずだ。

「さて、この子たちをどうするかじゃが…」
明日にでもあいつらに預けてみるか。

誰を指しているかは明白だった。
どういつ未来が待ち構えているかが分かっているけど、対処出来なければ意味が無い。坂道を転がされれば、平面な下に辿り着くまで転がり続ける。

あいつ、とはこの村から見える裏山、コルボに根城を持つ山賊ダダン、だろう。

窃盗、詐欺、殺人。

山賊ゆえに自分たちが生きてゆく糧を手に入れる手段が暴力であってもためらわない。

ある意味哀れだ、とアンは思う。山賊を生業にしている誰もが、最初から暴力を振るう側ではなかったはずだ。

弱肉強食、力を持たない者から淘汰される場所で生きていれば、持たざる者は持てる者から奪い取ってなにが悪い、と考え至るにさほど時間はかからないだろう。

人間は基本、獣だ。両親と幼いころから確立された教育で考える知恵を得、思考し、理性を育む。

子は親の背中を見て育つ、とは名文句だ。子供は周囲を見て、親のまねをしながら大きくなってゆく。言葉や知識も然り、だ。

ダダンの下で育てばそのまま親を継いで賊の頭になるか、はたまた

たグレて自分の一家を旗揚げするか。もしくは反面教師として真逆の路を歩むか。

3つあげた選択肢の中で、最も行きつくに難しいのは最後だ。

この人、おじいちゃんはこれを望んでいるのだからうけれど。

難しいだろうなあ。

ため息をつくときと幸せが逃げてゆくと言われるが、果たしてどれほどついているのかアンは判らなくなってきた。

結局、ガープはそろそろ灸を据えなければならない頃合いになっていた腐れ縁のダダンをはじめとする山賊たちを半壊状態に陥らせ、今までの罪を問わない代わりに二人の赤子を押しつけた。

その”話し合い”の凄まじい事。半ば目を回しながらアンは確かに見た。

脚から生み出された空気を切り裂く音が耳に届いた瞬間、山賊たちは鋭い刃で切り裂かれたような傷を負った事を。拳銃の弾をいともたやすく回避し、相手に肉薄するまで瞬きをする暇も無かった事を。

余りの恐怖と痛みに叫び出す者や逃げ出す者たちもいる。

蹴りで呼び起こす鎌風は嵐脚、銃弾回避は紙絵、瞬間的に移動したのは月歩ゲッポウというものらしい。

優しく何かが教えてくれる。

名を上げた3つの技は海軍で教えられている体術のひとつで、ひとつひとつを一式と称し、使い手達を〴〵式使い、と呼ぶ。

この術を会得する為には長い年月を必要とする為、海軍内でも使い手は一握りだ。習得しようとしても出来ない人員の方が断然多い。

「ガープ、お前はいつもそうだ！厄介事の度にあたしんここに来

んな！」

ぼろ雑巾のようになりながらも、ダダンとは立ちあがり叫ぶ。

二人は旧知の間柄なのだろう。出かける時も『友人』に会いに行く、と言っていたからだ。

「もう一度言うぞ。お前が育てろ、ダダン」

「だから誰の子か聞いてるんだよ、あたしはっ！」

切れた皮膚からぴゅーと血が怒りにまかせて叫ぶダダンから飛んだ。

「お頭っ」

手下のひとりが止血に走り寄り、緊迫した空気が再び流れだした瞬間、義祖父が大暴れしている時も寝ていたエースが目を覚まし力の限り泣き叫び始める。

手を伸ばしても身長分以上の距離が足りない。大丈夫だと伝えようと言葉が発せない。

かたややくつたりと回る景色を瞼を閉じ隔絶したアンは思う。

あんまり怒ると出血多量で死んじゃうよ、おばさん。おじいちゃんも手加減するならもう少し優しくすればいいのに。筋肉馬鹿なんだから。これは血筋？この島の風土？Dの名前を継ぐ人っていうのはみんな可愛すぎるほど直線たりする？

普通の生まれたてであればこんな事は思わないだろう。

だがさらりと毒舌が吐けるくらいには意識を保っていた。精神的に、ではなく肉体的に耐えられる負荷までが限界だったが、大分意図して物事を昨日より今日と、見られるようにはなっていた。

まさか、と。アンは思い至る。

ダダン是一家を束ねる頭であったが、女でもある。ほんの少しでも母性本能に火が付く事を願っていたとか…。

自身の考えを、そももう力いっぱい、思いつき地平線の彼方へ

と放り投げた。

ダダンという人物に文句を言うのはきつと、お角違いなのだろう。女だてらに頭を張るのは、氣概が無くては出来ない事だ。もしかすれば優しい人物なのかもしれない。ただ幼い身の上で、たらいまわしにされるのだけは遠慮したかった。山賊という打ち止め感のある小さな組織に、横のつながりがあるとは思えなかったが。

海軍の仕事もあり手元で育てられない環境だとは言え、預け先をここを選ぶガープの内心を覗けるものなら見てみたかった。

お前達を立派な海兵にしてやる。そう何度も、アンがアンとして意識を持ち始めてから何度も聞いていたからだ。

海軍に入りたいのなら、それなりの預け先もあるような気もする。たとえば引退した同僚とか、良く耳にするセンゴクという人物に相談すれば何か良い方法を見つけてくれるかもしれない。

そう思いながら、アンは違和感を覚える。

与えられた情報が真実である、という前提ではあるのだが、自分達を引き取り、義理とはいえ祖父となってくれたこの人物は父との約束を守った。

死を迎える自分に替わって、生まれてくる子供を頼む、そう一方的に言われた言葉を、果たしたのだ。

母が長期の間、胎児を己が体の中に留め続けたのも、海軍がとある偉業を成し遂げた、父から連なるその血を根絶やしにするために放った者らから守るためだったはずだ。

義祖父は本来、抹殺側に立つ。

世界の決定に従うべき立場でありながら、母の出産を見守り、こうして生まれたばかりの乳児を、自分の息がかかった安全な場所に連れて来てくれたのだ。

生まれてくる子には罪は無い。

たしかにそうだろう。親の罪を子に着せるのは時代錯誤もいいところだ。

だが犯罪者の子供としてレッテルを張られ、逃げるように居住地を変えている二次的な被害者となっている存在があることもまた、事実だった。

守られている。

意識や知識があつたとしても、何の役にもたつていなかった。

無力だと言うつもりもない。ただ動きようにも動けない事情がある。なにせこちらでは生まれたばかりなのだから。

東の海は最も穏やかな海とされ、^{イーストフル}辺境に位置するこの国は一応、海賊に襲われにくい場所であろうとは推測出来る。

「じゃあない、お前ら。こいつらの面倒みてやれ」

背を向け去る義祖父を見送る。

こうして二人はダダンのもとで暮らし始める。

どんな生活が待っているかは蓋を開けてみなければわからないが、恐々と触れてくる手は温かった。

今は静かに時を過ごそう。

秒針は進み始めた。時を巻き戻す事も、無理に進める事も出来ない。
い。

一秒づつ、刻まれてゆく。

今は早く大きくなること。行動出来るようになる事。走れるようになったら…

出来る事をひとつづつしてゆこう。

そう心に決めアンは瞼を閉じた。

02 - ふたり

時間の流れは、鼓動の早さに比例すると聞いたことがあった。ゆっくりであればある程、時間がゆつたりと過ぎる、という。生き物の中ではゾウが最も長く、ネズミが最も短いらしい。寿命を心臓の鼓動時間に換算すると、心臓が20億回打つのだそうだ。どんな命も20億回分の寿命を手渡され生まれ来る。

緑が青く茂る中を、アンは走っていた。向かっているのはフーシヤ村だ。

7年の月日は、怒涛のように過ぎていった。

何がどう凄かったのかを説明しようにも、ありすぎてどれから話していいのかが判らない。生まれてからすぐ、あちらの常識が全く通用しないだろう事は、だいたい分かつてはいた。だがここまで常識と非常識が混在しているとは思っても見なかった、というのが偽りざる本音だろうか。

その為、こちらをよく知る必要が出てきた。あちらと同じような社会が形成されているならば、もっと理解が早く進んだだろう。

だがしかし。そんなに甘いものではなかった。

これならば記憶を一度真っ白にし、何も知らないままに受け入れた方が早かっただろう。向こう側の記憶を一切奪われずに過ごせている現状に後悔はしていなかった。ただ先入観がどうしても邪魔をして、否定したくなる事柄があったのもまた事実だ。

時折夢が世界の成り立ちや、過去にあった情景、そして未来を示唆する景色を残してゆくが、それが本当に事実であるのかを調べる必要が出て来た。まるっと全てが信じられず、ひとつの方向からでは無く、多方面からの情報が欲しかった、という事情もある。

義祖父が休暇を取って島に戻ってくる度にねだった本が、フーシ

ヤ村の一軒家を占拠する日も近いのではないかと思う位だ。

月日が流れるのは早いもので、アンがアンとして、こちらの世界に来てから7年、の歳月が過ぎていた。

アンは知識を求め本の虫に、共に生まれたエースはのやまを駆け廻り、めきめきと野生児に成長するという真逆を走っている。

仲は良いほうだろう。村に住む友人たちの姉妹や兄弟達と比べてみても、どちらかと言えばくつき過ぎだと言われるかもしれない。村という比較的安全圏内で暮らす同い年達よりも、山賊が狩場とする山で、その山賊達と暮らしながら日々、フーシャ村や森を超えた先に広がる場所へ走って移動しているのだから、体力も持久力も半端無く付いてくる。

自転車があれば楽なのだろうが、整備された道など無いに等しい。海岸沿いもほぼ、崖が続く。ならば足を使うだけだと、自然に徒歩になったのは言うまでもない。

4年前、アンに弟が出来た。

正確に言えば、アンとエースを引き取ってくれたガープ義祖父に孫が生まれ、お前達の弟だと明言された、のだ。

そして今日という、5月5日、弟は5歳の誕生日を迎える。

弟の誕生日は毎年、厄日だった。

そう。義祖父が帰って来るのだ。

今年は一体何が起こるのか、予想だにつかない。アンに出来る事は、弟と一緒に持ち運ばれた先で、サバイバルを行うくらいだ。毎日人間がほぼ立ち入ることの無い自然の中で暮らしている双子にとってみれば、場所が変わるだけで、生きてゆく生活そのものへの変化は無いに等しい。

与えられた情報の中でも、”D”とつく名の面倒さを体験する良

い日、とすらアンはこの頃思うようになっていた。

弟の名はモンキー・D・ルフィ、世界に刻まれた予定では、海賊王の名を継ぐ者として記されている。

全ての始まりを手に入れ、新世界という限られた者だけが行きつける海で、父が次世代に託した宝を頭上に掲げる。それがやんちゃ盛り真っ只中のルフィであるというのだから、驚きだ。これはエースも知らない、アンだけの秘密だった。

森を下っていると、思い出す。

彼女が乗る小舟を見つけたのはアンだった。3歳になり、ようやく村長から貸出の許可が下りたばかりの本を海が見える森の端で早速読み始めようとページを開こうとした時だ。海原の中に何かを見つけた。

「ねえ、エース。あれ船だよな」

「どうした？呼んだろ」

しばしの間を置き、アンへ木陰を提供していた木の上から声が掛かる。

アンはゆっくりと人差し指を海の方に上げた。示される方向をエースは目を凝らして見る。

「…船だな」

「あのまま進めば主に会うよね」

主、とはフィシャ村から幾分か進んだ大陸棚を超えた辺りに出てくる海王類だ。体長は小舟ならば簡単に噛み砕き呑み込んでしまうほど巨大な海洋生物で、種族を共通して凶暴な性格なため人間からは恐れられていた。

「何とかならないかな」

「したいのか？」

アンはこくりと頷く。あの船にはわたし達の弟が乗ってるの。

弟、という言葉に何の事だと眉を寄せるが、わかった、エースは頷き唇の端を持ち上げる。

「まかせろ」

ふたりは漁師が使う船をこっそり拝借し、もう一回り大きな船に乗っていたただ一人の女性と合流。久々の得物に食いつこうとしていた海王類の鼻っぱしをふたつの拳で殴りつけ急いで船を岸へとつけた。

「海底でのたうちまわっていればいいよね」

「なつてんじゃね？」

大きく口を開けたその中に、今が旬と言われる決して動物が近寄らない、触れるだけでも手が腫れてしまう死の辛さを体感できるという実を放りこんでやったのだ。

村長の元へと案内する道すがら、幾つかの言葉をやり取りする。

「勇敢ね」

困ったような、知っている誰かを投影しているような言葉に、アンは「褒め言葉として受け取っておきます」そう返答した。

今から思えば、3歳児のすることではない。村に行けば村長に怒られ、マキノに心配して貰いながら、好物のマフィンを食べていたが、あれは黒歴史と呼んでもいいくらいだ。

母となる人が持っていたのは、ガープの息子であるドラゴンからの手紙だった。

臨月を迎える前に、と契りを交わした男からフィシャ村へ行くよう諭され重身の体で海を渡ってきたのだ。

すぐさまガープへと連絡を村長は取った。

そう、伝書鳥だ。村長の家に飼われている鳥はガープが普段詰めている海軍本部へ飛ぶよう訓練でんてんむしされている。

時間差なく用件を伝えられる電伝虫があればすぐに呼べるのであ

ろうが、そんな都合のよい生き物はこの村にはまだ、ない。

女性はガープが帰って来るまで村長の家で見て貰える事になり、アンは胸をなでおろした。

「ありがとう…」

母となる女性は言った。

「元気な赤ちゃんを産んでください」

短い出会いだったが、確かに感じる命の育みに気持ちが高ぶったのを覚えていた。

アンは山を下り村へと急ぐ。確か定期船が到着するのが今日だったはずだ。ガープは確か5歳の誕生日を迎えるルフィに山とプレゼントを持ちかえると言っていた気がする。なぜか嫌な予感しかしない。

背負ったかばんには本と、包帯、ガーゼ、傷薬が入っていた。どこに飛ばされてもめげない、くじけない、諦めない気持ちは覚悟完了済みだ。

本当は今日、エースと一緒にグレイターミナルへ行く予定にしていたのだが、頭を下げて行き先を変更させて貰っていた。

心配の種がふたつ、どちらを優先するか気持ちがせめぎ合う。

そもそもは、1歳のルフィをどこぞの無人島に放り出そうとするガープを止めたのが始まりだった。見張り役を付けて送りだすからと笑い、拳句の果ては「お前たちはワシの孫だからな、大丈夫じゃろう！立派な海兵になれ！」とのたまい、アン共々ジャングルの中へ置き去りに。そしてその次の年はコルボ山の幾つか向こう側にある名も知らぬ山の谷へと突き落とされ、人喰い虎の巣へ、風船をくくりつけられ大空への旅…そしてまた今年もやってきた誕生日が今日という訳だ。

エースは余り村に近寄りたがらなかった。町とは違う。村人たちはみな、良い人ばかりだと分かっていても、人の傍に居るのが辛いと感じていた。

その気持ちは、痛いほどアンには分かる。

この国の、忘れられたようにぼつんと存在するフーシャ村を除いた人々は、どこかしら病んでいるように見えた。

あちらでもあった。けれどここまでは酷く無かったはずだ。

大人たちは子供に理解出来ようも無い、と平気で傷つける言葉を発した。人を見下す言葉をこよなく愛し、己より強い力には美辞麗句を並べすり寄る。

7歳の子供が受け止めるには重すぎる痛みもあった。

実際に何度か、エースは端町で暴行事件を起こしている。

ゴールド・ロジャー。

ダダンが放った一言で、父の名を知ったエースは端町で顔見知りになったチンピラ達に聞いたのだ。

『ゴールド・D・ロジャーを知っているか』と。

町の人達にしてみれば唯一悪態を付ける事の出来る相手だ。故人でもある。幾ら悪口を言っても報復されはしない。

結果、チンピラ集団が立ちあがらなくなるまで、エースは暴れ回った。

生きた年齢をすべて足してよいのであれば、アンは27歳、子供の時間を繰り返してはいるが少しでも成長できていれば、と願う。

エースは今頃森の中を自由気ままに遊んでいるのだろうか。少し意識を集中すればわかる。もやもやとした気持ちが始まってきた。少し頬を膨らませ拗ねているようにも思える。

「エースったら……」

母の胎内に長くいたおかげなのかそれぞれがどこに居るのか、相手を呼べば意識は伝わり大体の位置も掴むことが出来た。

「無茶…してるなあ」

木の枝に長い体をまきつけた巨大な蛇を、鉄パイプひとつで立ち向かっている。ひとりよりふたりでかかった方が勝てる確率が高いが、男は時としてひとりで立ち向かいなくなる、などと格好良い事を言いつつ、ガーブ義祖父にコテンパンに伸ばされては森へと入り、強さを求め走り回っていた。

そういう時は決まって、限界まで暴れ尽くす。

エースはアンと別れて行動している時、何かに取りつかれたかのように攻撃的になった。

一緒に居る時はしっかりと、存在を確かめるように手を握り締めるのに、だ。

森を渡り海を見回せる場所に出る。青の色を平たく見れば、船影はまだ見えない。

アンは回れ右、と進んできた道を僅かに斜めにエースの元へ急ぐ。木々の間を潜り抜け、道なき路を身軽に進んだ。生まれた時からある意味サバイバルだ。これくらいなんという事は無い。

養い親であるダダンは最初こそおむつ替えやミルクを与えてくれていたが、よちよちと歩き始めたふたりの遊び道具としてナイフを渡したり、言葉を知り歩きはじめると掃除、洗濯から始まり靴磨き、武器磨き等をさせた。雑用をこなす手は、いくらあっても足りない、という状況だったからだ。

アンはこの時、短刀の使い方を教えてもらい愛用の武器とした。雑用の仕事は丸つきり無駄ではなかったと思っていたが、エースは違った。ある日森へと入り、獲物をしとめてきたのだ。最初は兎、鳥類が続く、仔イノシシ。これはアンも一緒に狩に出かけ捕った得物だが、エースは森の中を器用に渡っていた。アンも雑用をほとんどにやった後、ふたり揃って森で一夜を過ごす事も多くなり、数日

ダダンの家に戻らない生活が当たり前になってゆく。

友達が出来てからは彼が居る”不確かな物の最終駅”グレイターミナルまで毎日走り、他愛も無い話をしながら宝さがしをする日々を過ごしていた。通称ごみ山、は無法地帯となっている。弱者は強者に虐げられ、暴力は日常茶飯事だ。力を持たなければ生きてはいけない。だが瓦礫の山だからこそ、集う者達も居る。

”不確かな物の終着駅”グレイターミナル、それはスモークバーレーを彷彿させる場所だった。

実物を見たことは無い。写真でのみの知識、だ。

ひとつの山から丘へ。

かつて在ったゴミの集落は発展のしわ寄せと皮肉をこめて”マウンテン”と吹聴される。これ以上叩かれると国のイメージを損ねるとし、閉鎖されたが山に変わるゴミの行き場は他にも存在していた。ゴミは無くならない。

貧困の象徴には首都やその周辺に住む人々から出された不要物が毎日大量に運び込まれ、その中から廃品回収を行い僅かな日銭を稼ぐ貧民が暮らして行ける住処へと変わってゆく。

同じだった。

”不確かな物の終着駅”グレイターミナルにはありとあらゆるごみが壁の内側から集められ、日に2度廃棄される。ゴミを漁る並びも強者順だ。

食べ残された残飯、気に入らなくなったと捨てられた衣類、傷がついてしまったからと捨てられた家具、へこんだ鍋や破けた本、必要とされたありとあらゆる物が大門から吐き出された。大量に積み重なった町での不用品を漁り、生計を立てている人々も少なくは無い。

海岸線近く、山に沿って半月型を描く街を守る石壁の間。

ごみ山に住む人々によって持ち運ばれる財産は、ダダンの家から

直線に下った麓にまで裾を拡げていた。

幾年掛けここまで広がり作られたのか、想像も出来ない。ただア
ンが生まれた年には既に存在していたらしい。となれば、最下層に
埋もれた積載物は、10年以上も昔にこの場所へ廃棄されたと考え
ても良い訳だ。

欲は人を突き動かす原動力でもある。しかしその風景は、欲の行
く末というよりか、人間の未来のようにも思えてしまった。

”不確かな物の終着駅”^{グレイターミナル}には様々が混在している。無いものを探
す方が難しいくらいだ。他国から流れて来たもの、ごみ山で生まれ
育つもの、町で住む資格を奪われたもの、生まれに関係無くすべて
がごったになって存在し、至る場所にスラムを形成していた。

太陽によって熱せられたゴミから自然発火した幾つものくすぶりが
白い煙を立ち登らせている。ふたりにとつて初めて本当の友人が
出来たのもここだ。ごみ山にはたくさんの子供たちが居た。多くは
捨て児なのだという。暇だからと育てられ、気まぐれに捨てられる
小さな命は小さな体を震わせ寄せ合っていた。無法地帯に置いての
最弱者たちといえるだろう。

匂いに至つては最悪だ。最初は余りの悪臭にアンはその場で食べ
たものをすべて吐き出してしまった。鼻を切り落としてしまえば、
少しはましになるだろうかと本気で思索したくらいだ。

それでも人間は生きている。劣悪な環境の中で、生き抜いていた。
ごみ山に居を構えた人々は津波のように吐き出されるゴミを再生^{リサイクル}
利用し再生物資を町へ売りに行く。しかし売った僅かな金を石壁を
でる前後で奪われる事もひっきりなしだ。

嗚咽が止まらないほどの匂いの中、息絶える命も多い。大人子供
問わず、固く頑丈な壁に阻まれたゴアの首都と此方側、”不確定な
物の終着駅”（グレイターミナル）は、隔絶された世界だった。

言わずもがな、ごみ山の海岸線側は海賊の根城にもなっている。大小幾つか、ただのチンピラの寄せ集まりも中にはあったが、一番大きな集団と言えばブルージャム海賊団だろう。この国、ゴア周辺をテリトリーとし海と陸、両方を行き来しているようだった。

ごみ山の頂点^{ボス}、それが彼ら、だ。規模としては乗組員50人、陸でのみ活動をする動員30人ほどの集団だろうか。貴族と癒着し、金品や荒事を引き受ける代わりに、ある程度の犯罪を黙認されている。

賢いやり方だと、アンも思う。いつ切り捨てられるかは貴族の気分次第ではあるが、利用価値を見出して貰っている間は身の安全を保障されるわけだ。

ならば海に出ている間に捕まれば良い訳だが、どうやら海軍も人手が足りないらしい。

ゴア王国周辺に海軍の船が通るのかかるのは稀だった。

^{イーストフール}

^{レッドライン}

^{グランドライン}

東の海は赤い土の大陸と偉大なる航路で区切られた4つの海の中で最弱と言われている。しかし海に出れば海賊が、陸に上があれば山賊がたむろしていた。

海では海軍が支部を置き取り締まりに明け暮れ、陸ではそれぞれの国が軍隊でもって征伐する。

だがゴア王国では賊の多くを放置したままだった。罰せられるのは壁の内側に入って来た不届き者だけだ。いくらゴミ山で助けくれと声を上げて、町の人々は聞く耳を持っては無い。

町に住む事を許されない家に生まれてきたのが悪いのだから仕方が無い、という考え方なのだ。

「怨むなら自分を生んだ親を憎めばいいじゃない、可哀そうね。平民に生まれたばかりに」

貴族たちは平気で、蔑みの目を向け、言葉を放った。

SIDE エース

「後ろガラ空き」

「必要ないだろ、アンが居るのに」

「頼りにされて、嬉しい…けどっ」

アンはナイフを抜き、眼前に迫り来ていた巨大蛇の鼻先を一閃させる。

鱗を突き抜けた刃がつけた傷から赤い血が飛び散った。

蛇は逃げない。再度、増えた獲物を丸のみしようと大きな顎門を開く。

「ここ、怪我してる」

頬を指先が通った。笑みを含んだ優しい気持ちが流れ込んでくる。

気配が近づいてきているのは感じていた。途中で引き返して来たと分かった途端、何かに勝ち誇っている自分に気がつく。

時々ふらつと姿が消える時はジジイが無茶振りを発揮している時だ。アンはジジイの孫を随分と気にしていた。

おれたちがダダンに預けられ、どういう思いをしてきたのか身にしみているからだろう。

ほっとけないんだろう。

けどおれとそいつ、どっちが大事なんだよ、なんて聞きたいけど言えるわけないしさ。

アンが村に行くって言った時、…そりゃ悔しかったさ。アンはおれの半分だ。

ジジイの孫なんて放っておけばいい。ひとりじゃないんだ。

気持ちは伝わる。だから言葉を飲み込んだ。困った顔をさせたくなかったのもある。

「今日のご飯は唐揚げにしようか」
「いいな」

ダダンが作る料理は塩コシヨウをかけて、ただ焼いた肉が多い。けどアンが作ると旨いんだ。村で料理を覚えてくれる人がいるらしい。

やられてばかりじゃ格好悪いからな。鉄パイプを握り直し、走る。お互いの背を預け合いながら、おれは木の幹を伝い大きな口を開く蛇の頭部へ後方から鉄パイプで打撃を与えた。この巨大蛇には毒は無い。とぐろの中に巻き込まれたらおれたちなんて簡単に絞殺されちまう。蛇の尾がアンを捕まえようと伸びたが遅い。ヤツの尻尾がアンの元へ行き着いく頃には既に俺の横にその姿を移していた。

器用なんだよな。多少空間が空いた場所でも器用に空中を歩くんだ。海軍のヤツがやってたのを見よう見真似てみたら出来たんだってさ。ジジイにも何度か教えて貰ったらしい。おれももうちょっとで出来そうなんだ。

アンが蛇の注意を引き、おれが得物をしとめる。蛇の頭蓋骨を粉砕すれば…

「今日の飯はお前だ！」
一撃必殺！余裕だった。

蛇はぐったりと力を失い、重力に従い地面へと落下する。適当な蔦草を引きちぎり息絶えた晩飯を運びやすく結び、ふたりで担いでゆく。ダダンの家は現在地から岩場と川を渡った先だ。

「ねえ、エース。一緒に行かない？」
アンが誘う。

村に降りるのは正直、気が引けていた。だってよ、おれたちは口ジャアの血を引いている。あいつの影がおれにも覆いかぶさってい

るんだ。

端町で聞いた言葉が耳の奥で繰り返される。おれがやったわけじゃない。おれが殺したわけじゃない。

「大丈夫だよ。もし何かがあつたらわたしが止める。心配しないで。怯えないで」

だけとお前だつて同じ血を引いてるんだぞ、人殺しの血を。分か
つてるのかよ。

「けどね、エース。お父さんだけじゃない。お母さんの血も引
てるんだよ、わたしたちは」

母の前では父もただの男だったのよ？

大丈夫だよ。おとーさんが暴れ始めたら、お母さんが止めてくれ
る。つてさ。

楽天的過ぎるよな。

でも、何度も救われているんだ。もしひとりだったら、なんて考
えるとぞつとする。

生まれてきて良かったのかと何度も問いかけた。ジジイは生きて
みればわかるつて言つてやがったけどよ、いつまで生きていれば分
かるのかは教えてくれなかった。

「少なくとも、お父さんとお母さんは私たちを待つてたよ。守つ
てくれた」

分かりにくいけれど、ガープ義祖父おじいちゃんもわたしたちに激甘だと思つ
よ？

それはねえだろう！

それだけは断固否定してやる！

ありえねえ！

アンが笑う。

同じ服を着て、後姿を見るとおれたちは瓜ふたつなのだとよく言われていた。仮の親らしいダダンですら間違うくらいだ。一家の誰もが何度も、おれとアンの名前を呼び間違えていた。アンは恐れていない。

サボすまねエ。今日はそっちに行けなくなった。

アンと一緒に、資金調達してお前のところに行くはずが、なぜか、いつの間にかフリーシャ村に行くことになってる。

船貯金は明日から頑張るからな、今日はマジですまねエ。

ふたりでダダンの家へ得物を持ち帰り、おれたちは、おれも渋々とフリーシャ村へ向かった。

おれはやっぱり村に入るのをやめた。
港へは行っただ。着いたばかりのガープを出迎え、村の前までは着いて行っただ。

「そうか、エースお前も海軍に興味を持ってくれたか！」

「違う！アンがどうしても言うからついて来てやってただけだ

！！！」

「エースちゃん抱っこしてやろう！」

「やめろジジー！！」

おれは少し離れたところでアンを待った。牛をかこつてある柵の上に座る。海からの風が村の方に吹いていった。

今日ジジイの孫がら歳になる。誕生日なんてダダンに祝って貰おうなら、ひと仕事手伝えと言われるに決まっていた。

アンも殴られようが罵られようが、一度としてダダンの仕事に着いて行っただ事はない。引きずられても途中で逃げ出し、戻ってきていた。

間接的に人を害する手伝いをしているのだから、これ以上はしたくない、という。同罪ならばなにをしても同じだと一家の誰かが言っても、頑として動かない。

ダダンの得物は主に町方面や他の村の奴だけど…おれもこのどかな村に住むヤツから何かを奪いたいと思えなかった。

おれたちはいつか海に出る。

海に行くためには船が居る。資金が必要だった。

船は高い。ちまちまとゴミを拾って稼げる額でもなかった。

じゃあどうするんだよ、って言う話になる。

まじめに搾取されながら生きている奴から奪うのは論外として、パツと浮かぶのは貴族が住む高町に入って銀行を襲う事だ。けど一発で指名手配されちまう。船を手に入れる前に捕まるなんて馬鹿げていた。

そうなればおのずと手段は限られてくる。

人殺しも…、ってところでアンが口をはさんで来た。

「ふたりとも飛躍しすぎ」

アンの目が座っている。口元には笑みを浮かべているのに、だ。

「海に出るな、とは言わない。ふたりをきつと海が呼んでいるんだもん。けれどももう少し穏便だと嬉しいな」

話し合いの結果、チンピラから巻き上げるのが一番だと結論した。

元をたどればまじめに働いて搾取されてるやつ金なわけだが、そこまで考えてたら何も出来なくなってしまう。

出会って意気投合し、貯めだした船貯金は着実に、額を増やし続けている。

「だから何度言えば分かるの！義祖父おじいちゃんの頭の中はお花畑かつ。ルフィを木樽に入れるな！だから餓死するしないじゃないのよっ」

アンの声が頭を横切ってた。

「ルフィも少しは抵抗してっ」

孫はすでにジジイに対して抵抗する気力を奪われてるようだった。

「義祖父おじいちゃん酷い、何気にちよっと本気とか。それ覇気でしょ！わたしまだ7歳なのに、手加減、手加減を申告しますっお嫁にいけないなっちゃう！」

腹を抱えて笑ってしまった。どういう状況なのか、手に取るように分かってしまった。

「何だ、アン負けてんのかよ」

（分かってるなら助けてエースっ）

おれは走り出していた。アンが待つ場所へ。

03 - シャンクス

船が見える。

”不確かな物たちの終着駅”グレイターミナルからの帰り、エースがその影を見つけた。

「こつちに向かって来てるな」

進路が変わらなければいずれフーシャ村に着くだろう。

立ち止り緑の木々の間から見える小さな影を見つめる。3本マスのキャラック船だ。

ここ1年ほど、フーシャ村を拠点にして東の海を辺境を巡っている海賊達だった。

いい船だよな。

何度目かの寄港の時、港に泊まっていた船を見てエースが言った。おれたちも早くこんな船に乗りてえよな、とも。

いつか海原へ出る。それは二人に共通した目的だった。否、サボとルフィを含めれば4名、全員が飛び出そうとしている。

大海賊時代だから、ではない。それぞれが、それぞれの目的の為に海に出ると決めている。明確な理由が出せていないのは、唯一、アンだ。

シャンクスは3人を船に招いてくれた事もあった。

錨は下ろしたまま、甲板の上で食糧の積み込みの手伝いをしたり、貴重な本を読ませてくれた。

しかし船への誘いは皆無だ。

海の過酷さ、危険度、それだけでは無い。海賊と名乗れば最後、海軍から追手がかかる。例えば小物であっても、だ。

敵は海軍だけではない。同業者達にも狙われる。名を知られる前

は新人狩^{リキ}りを楽しむ数多くの賊たちに。名が売れ始めれば賞金稼ぎ（バウンティーハンター）は海軍から出される指名手配書を手に襲いかかって来るだろう。

海の上では力ある集団だけが航海を続ける事を許される。

生半端な覚悟では海の藻屑となり消えゆくだけだ。

お前達にはまだ早すぎる。力を蓄えろ、そう言われているような気がした。

「エースは明日もサボのところに行くのでしょうか？」

否定の言葉は無い。最低限、偉大なる航路を航行出来る船を手に入れようと思うならば、最低5000万と換算しても凄まじい金額だ。それが2隻分、まだまだ資金は足りない。

「行つて来いよ」

大振りのイノシシと戦いながら、眉を寄せたままのアンにエースは言う。

「そんなにおれとサボが心配か？」

「ううん、違ふの。ちよつと色々考え事をしてて」

難しい本ばかり読んでるからだ。エースはにしし、と笑う。その間にもイノシシは勢いを付け鋭い角牙をエースに向けて振りかざしていた。

倒木や岩場を飛び跳ね、追撃をかわす。

「行つて来い。悪夢を夢のままにしてこいよ」

エースは知っている。どんな夢を見ているかを。飛び起きる度、こぼれた涙を拭ってくれる。

隠し事はしない。してもばれてしまう。ならば初めからしないほうがましだ。

岩場の一角に追いたてられたエースは鉄パイプを構える。背には3メートルを優に超える壁石が横たわっていた。

最後の一撃とばかりに、イノシシは駆けた。脳天を何度も殴打さ

れたせいで目の前の何かにぶつかりに行くという凶暴性だけが表に出てきている。

「ありがとう、エース。でもね、最近村へ行くとおれもエースとアンのところで暮らすから連れて行って言われるの」

岩場の上で、持ち運び用の鳶を用意しながらアンは肩を落とす。

「一緒に暮らせんの、もうちょつとの辛抱なんだろ」

「……」

軽い足場の振動の後、パバリと砂埃が舞った。

夢の覗き見しすぎじゃないのかと思えば、垂れ流ししすぎだ、とエースが額を小突く。

「じゃあ明日は別行動、ってことで」

狩った得物はぺろりと平らげられた。毎日の食事を作らせて貰っている身としては、すっかりと空になるのは嬉しいのだが、毎日の献立を考えるのも一苦労なのだ。ちなみにメニューは鍋にした。

イノシシと聞けば、やはりボタン鍋だろう。

最近是一家全体の実入りが少なくなったらしく、野菜や果物の苗を裏庭に植え、畑が広がるようになっていた。そこには各々の性格や、好みが色濃く出るため、見ているだけで楽しかった。

保存食にジャーキー作ろうと思ってたのになあ。あの大きさじゃ、もう残らないか。

洗いものを終わらせ家の中に入ると、小さな火を熾したままの居間では、寝息を立てた大人達がいろいろ転がっていた。久しぶりに酒が入った為だろう。

アンは囲炉裏の回りで満足そうにしている寝顔全てにタオルケットをかけ、自分も寝床である小さな物起き床の上で包まる。エースは既に風呂にも入り、寝ていた。そう、不貞寝、だ。わしゃわしゃと黒髪を撫で、伸ばされた手を握り、目を閉じる。

朝、夜明けとともにおきだしたアンは朝食の用意を始めた。米粥を炊き日干した魚を人数分用意して暖炉のところに置いておく。早く起き、食べたもの勝ちだがそこまでは構ってられない。

家を出る頃にはすっかり朝日が昇っていた。ふたりはもちろん、自分達の分はしっかりと食べて出る。走ってそれぞれの目的地に向かうのだ。体力が尽いてしまえばその場で倒れてしまう。

北と南、分かれ道で背を向ける。

「氣イつけて行つて来い」

「サボによろしくね」

アンは道すがらにある木によじ登り、海が見える高さで目を凝らす。

船が通る航路は大体決まっていた。村周辺からゆっくりと視野を広げる。

いた。

きらきらと輝く青の中にしっかりと見える船影がある。風が順調に吹けば、昼過ぎには到着するだろう。

前回シャunks達が寄港した時の話は、マキノや村長、ルフィ本人から聞いていた。

どうしても船に乗り込みたくて、ナイフを頬に突き立てた事や、ヒグマと名乗る山賊が来た事、悪魔の実を食べた事も、教えて貰った。

『海の秘宝』とも言われている悪魔の実を食べた者に様々な特殊能力を授ける。

形状は何らかの果物に似ている事が多いという。唯一共通であるのは果皮、果肉に唐草模様があること、だ。味は共通してすこぶるまずい、とのこと。

シャunksの船に招待された時見せて貰ったが、悪魔の実を集めた図鑑が存在している。

『一目瞭然 悪魔の実辞典』

希少であればある程、^{コレクター}収集家達の間では高価なもの、として取り扱われていた。最低額でも1億は下らないという。

ルフィが食べた実は『ゴムゴムの実』だ。デザートに食べたというのだから、弟らしい。

今までに分かっている種類は大きく分けて3つに分かれる。【超^{バラ}人系】^{ミシヤ}【動物系】^{ソオン}【自然系】^{ロギア}だ。

超人系はルフィが食べたゴムゴムを含む、通常ではありえない極めて特殊な体質になる、何かに作用して魔術的な効果を及ぼすモノが含まれている。3種の中では種類が一番多いとされ、時々、ぼつかりと、海に浮かんでいるのだとか。

動物系はその名の通り動物への変身能力が身に付く。人間よりはるかに力強い動物達の力を手に入れた能力者は、戦いにおいて力関係がノーマルの人間と比べ天と地の差が開く。特別な幻獣種と言われる、希少価値の高い実も中には含まれていた。

そして最後が自然系と言われる、体を自然物そのものに変え、自在に操る力だ。3つある中で最も希少と言われ、自然現象そのままを体現している。そのため物理攻撃を無効化したり受け流せるという絶対防御を得る事が出来るという。

とはいえ。

実際に能力者、実を食べた者と戦って見ない事にはどういう力を保持しているかは分からない。ルフィのように実物が傍に居るならば、試せようがそうそう簡単に出会える能力者でもないだろう。

ルフィが旅立つまで11年、運命の輪が回り出す頃には、何かに誘われるように能力者達とある場所に集ってゆく。それまで生き

ていられたらいいのだけれど。

今から心配していても鬼に笑われて終わってしまう。その時が近づいてくれば、その時に必死に考えよう。悔いが残らないよう、生きるしかない。

店内はがらん、としていた。

昼飯時を過ぎるとPARTY BARも夕方になるまでは閑古鳥が鳴く。

アンはルフィを誘い、軽食をマキノに作って貰った後、いつものようにカウンターで本を開きながら会話に耳を傾けていた。

「もう船長さん達が航海に出て長いわね。そろそろさみしくなってきたんじゃない？ルフィ」

「ぜんぜん！おれはまだ許してないんだ。あの山賊の一件！」

グラスを磨きながらマキノはくすりと笑む。もっとかっこいい海賊だと思ってたんだ、と膨れるルフィに、あんな事をされても平気で笑ってられる方がかっこいいと思うわ、と話す。

「マキノはわかってねエからな。男にはやらなきゃいけねエ時があるんだ！」

「そう…ダメね私は」

「うん、だめだ」

ひとりで村に暮らすルフィにとって、マキノは甘えられる存在だった。アンの事はどちらかと言えば友達、と言った感じだろうか。

アンにしてみても、マキノは大切な人には変わりが無い。料理の仕方や、裁縫も彼女から教えて貰っていた。

窓からは気持ち良い風が入って来ている。

「ルフィ、もう少ししたら…」

会話が一段落したところを見て、アンが話し始めようとしたその時、蝶番が鳴る。

「邪魔するぜエ」

扉を押しあけて入った来た人物達は濁った眼をした男達だった。ルフィが小さく、「げ」と嫌な顔を露骨にしたことで把握する。奴らが件の山賊達だ、と。

自らを客だと大きな声で叫び、酒を寄せと荒げる。

下品だった。飲み方も、食べ方も、言葉ですら。まだダダン達の方がよっぽどましに見える。

次々と注文を繰り返す男たちに、マキノは酒類を運び続けた。ルフィ、関わった方が負けだよ。シャンクス達は言っていたのだでしょう。こんな事は他愛の無い事だって」

「けど、けどっ！！！」

拳を握りしめ、目尻にはうつすらと涙が浮かんでいる。

くやしいのだ。大好きな人の悪口を言われて、それでも関わるなと言われ、何も出来ない無力さに唇を噛んでいる。

気持ちは痛いほど分かった。けれどここで相手の言葉に乗れば、わざわざ相手の土俵にまで下りてやることになる。

「やめろ！！！！」

ルフィが椅子を飛び降り、山賊達に向かって叫ぶ。

「シャンクス達をバカにするなよ！！ 腰又ケなんかじゃないぞ！！！！」

マキノが止めに入る。

「…ルフィ」

アンはゆっくりとルフィの前に立った。

無謀だがまっすぐだ。自分の事ではなく、大切な人をなじられ腹を立てている。悪い事では無い。だが、まだ早い。

アンは真正面から山賊達の眼光を受ける。

顔を貸せや、と言われ、ルフィとアンは外の路に出た。

ずらりと賊たちにふたりは取り囲まれる。男達はにやにやと気持ちの悪い笑みを顔面に貼りつかせていた。

「下郎が、この子に触れるな」

アンは山賊頭をけん制する。

しかし子供相手に賊たちが怯む事は無い。

家々の窓からは村人たちが事の顛末を固唾をのんで見守っている。銃や短刀を持つ賊たちに成す術を普通はもたない。善良な人達だ。

「くそオ！！おれにあやまれ！！！」

「ルフィ、前に出ないで！」

引つ張られ、殴られ、投げられてもルフィは立ち向かうのを止めない。

ボスを含めて15人、やって出来ない事も無いだろうが、銃や刀を誰もが手にしている。力を使わずひとりで片すには少々厳しい状態といえた。

「ちくしょう！！！！絶対許さねエ！！！！」

「ルフィ！」

落ちていた木の棒を拾い、振りあげる。しかし子供の、振りかぶりだ。ゴム人間になっても毎日体を森で鍛えている訳ではない。

「危ない！！！」

賊頭の足が、転がり込んだアンの背を捉えた。四つん這いになつても弟を守る。

「アン！」

青ざめた顔が歪んでいる。

「全くもう、無茶するんだから……」

ぐつと力を込められても動かない。

「このガキどもがア」

「その子たちを放してくれ！」

村長の声が聞こえた。マキノが呼んでくれたのだと、アンはそちらへちらりと視線をやる。

彼女は心配そうに村長の横で立っていた。

「ルフィが何をやったかは知らんし、あんた達と争う気も無い。」

失礼でなければ金は払う！！その子たちを助けてくれ！！」

腕の下で、ルフィが小さくつぶやく。村長、と。

「さすがは年寄りだな。世の中の渡り方を知ってる。だが！」
ふぐつ

横腹をふいに蹴られ、アンは横倒しにされる。賊の足がルフィの頭に当てられた。

「駄目だ、もうこいつは助からねエ。なんせこのおれを怒らせたんだからな……！！！」

山賊頭はご立腹だった。山ざる、ルフィの一言はまさしく、その像を言い当てている。

売り飛ばすのをやめ、ここで殺してしまおう、ボスザルがすらりと刀を抜く。

「ボスザルさん、覚悟は出来てるかしら」

「ガキがなにを」

山賊達が一步、前に出る。

体をくるりと回し、アンは立ちあがった。上等な服では無かったが、友人たちを出迎えるのに砂まみれでは頂けない。反撃するため、拳を握った。

その時、不意に声が掛かる。

「港に誰も迎えが無いんで何事かと思えば」

村長たちの後方より歩みを進めたのは、赤髪の男、シャンクスだった。

「ルフィ、お前のパンチは銃のように強いんじゃないのか？」

「うるせエ……」

「アンも真つ白だな」

「ちよつとおめかししてみただけだな」

軽口が叩けるなら上等、とばかりに、赤髪の唇が弧を描く。

「何しに来たか知らんがケガせんうちに逃げだしな。それ以上近づくと殺すぜ、腰抜け」

山賊の言葉などどこ吹く風のように、シャンクスは近づいてきた。取り巻きのひとりが銃を抜いて、赤髪の男のこめかみに当てる。下卑た笑いが聞こえてきた。以前と同じように、シャンクスが振る舞う、そう思っているのだろう。

「銃を抜いたからには命を懸けるよ」

声音は普段とは変わらない。ただ声に込められた意志が違っている。

「あア！？ 何言ってるやがる」

「そいつは脅しの道具じゃねエって言ったんだ…」

直後に響く銃声。引き金を引いたのは誰だろうと見ると、いつも骨付き肉を食べている巨体のラッキー・ルウだ。

山賊達は突然の事に啞然とし、卑怯だと声を上げる。

弱者を虐げるのには長けているが、強者と対峙した時、どうしていいのかが判らないのだろう。山賊達の目の前に立つのは、海賊達だ。

シャンクスはゆっくりと、山賊達にも分かるように言葉を並べてゆく。

「おれは酒や食い物を頭からぶっかけられようが、つばを吐きかけられようが、たいていの事は笑って見逃してやる」

麦わら帽子の向こう側にある目が殺気を帯びた。

「どんな理由があろうと！！おれは友達を傷つけるヤツは許さない！！！！」

山賊頭は侮蔑の笑いを上げる。そして取りまきたちに指示を飛ばした。

殺せ、海の上に浮いているだけの海賊が、山賊にたてついた報いを受けさせろ、と。

動いたのは副船長だった。

抜刀し向かい来る山賊達の初人の額にたばこを押しつけ転倒させると、ライフル銃を構えず持ち手の部分を鈍器に見立て次々と殴り

倒した後、改めて銃口を山賊頭に向けた。

強い。

しかし、それはそうだと、と邪魔にならぬようこっそりと横手の柵の前に避難したアンは思う。

船と言っ限られた足場の上で、生死をかけた戦いを何度も潜り抜けて来た猛者たちなのだ。陸にくすぶり焼け焦げた山賊達では相手にならないだろう。

仕掛けてきたのはこのガキどもだとまくしたてる山賊に対し、「どの道賞金首だろう」とシャンクスは切り捨てる。

話し合いなど対峙し銃を抜けば余地は無い。

実開かれた血走る目、食いしばられた歯はぎりぎりと言を立てていた。

舌打ち、の後、煙幕が上がる。

「し！し！しまった！！油断してた！！ルフィが！！！！どうしよう！！みんな！！」

落ちつけとラッキーが肉を食べながら叫ぶ。副船長に至っては呆れつつも、ヤソップと次の手を考えているようだった。

夢を見る。

水面が揺れる青の中、赤が流れ出す。手にはルフィ、痛みを噛み殺し笑う顔。

事の始まりをマキノから聞いた海賊達は森に向けて駆け出してゆく。

「待つて、シャンクス、副船長、みんな」

アンの声が喧騒の中、静かに響き渡る。ぴたりと皆が足を止めた。「シャンクス、ルフィはあっち。走って追い掛けても間に合わないから飛ぶ」

アンが指さした方向は海だった。

全員がアンを見る。いつも本を読み、静かに笑っている少女の顔

は真剣だった。信じてもいい、シャンクスは直感する。

「運べるのはひとりだけ、皆は走って。みんなの船の近く、主が小舟を狙う」

小さな手がシャンクスの指を握る。

瞬間、眼前に青が広がった。

「ルフィ！」

「アン！シャンクス！！」

空からアンとシャンクスのふたりが落ちてくる。嬉しさの涙だらうか、弟の目尻に大きな粒が出来上がっていた。

山賊は子供の声に何事だと空を見る。

アンがルフィを抱き、アンをシャンクスが抱く。

悪魔の実を口にした能力者は、一生かなづちになるというハンデを負う。しかも海に身を浸せば、足をばたつかせることすらできずに沈んでしまう。もともと水という水に溺れていたルフィは、余計水に嫌われた体になっていた。出来るだけ弟の顔を肩の上までくよう、抱きしめる。

「もう大丈夫、ルフィ」

アンは必死にしがみついてくる弟を抱きしめた。

水しぶきが大きく跳ねた直後水面が盛り上がり、山賊が乗る小さな小舟が大きな顎口に噛み砕かれる。

主、だ。

ぎろり、とその眼光が人間3人を捉える。

「失せろ」

静かな一言は背筋を凍らせる力を持っていた。びくり、と海王類は身を硬直させる。

腕の中のルフィは震えていた。背から感じる圧迫感もきつい。重圧はどんどん増してゆく。これを真正面で受けている海王類は生きた心地がしないだろう。

主は本能に抗えなかった。どぼん、と沈み込むように巨体は海の中に消える。

「おい、泣くな男だろう」

しゃくりあげる声は止まらない。海は青いまま、横たわっている。

「それにしても凄いな、今の。瞬間移動か」

「…内緒…にして…おいてくれ…る、と…うれし…い、かな」

「ジャングズ!!! アンが!」

意識を保つのが困難になりかけて来た時、確かに聞こえて来た。小舟を出しシャンクスを助けに来た賑やかな声の数々が近づいてくる。

もう大丈夫。

アンは飲み込まれるまま意識を手放した。

ゆっくりと目を開く。体がだるかった。まだ布団に包まっていたというまどろみの気持ちを押し分け、むくりと上半身を起こし周囲を見る。しらない部屋だった。大きなベットの上でぼーっと周りを見回す。簡素な部屋だ。必要最小限にとどめられた実用的な一室、とても言おうか。重厚な机の上には地球儀と海図が一枚置かれている。

覗きこんでみると東の海にある島々の名前があった。

「すごいな、さすが双子つてところか」

声に顔を上げる。立っていたのはシャンクスだった。

聞けば3日も寝ていたという。

「怪我…したの?」

「ああ、大事ない」

左腕には包帯が巻かれていた。山賊が乗っていた小舟の木片が左腕を直撃したのだという。骨も折れていないし、ただ少し傷ついただけだと笑う。

やはり刻まれた時を変えようとしても、修正機能が働き元の形に補おうとする作用があるのだろうか。未来をある程度知り予測できるといえど、油断は禁物、なのだろう。

「エースに聞いた。おれを守ってくれたんだって？」

夢の事を話したのか、と小さく舌打ちする。あんなに秘密だと言っておいたのに。それだけ意識を感じられなくなったエースが焦ったということなのだろう。アンであっても、エースが消えたと感じたなら確実に慌てふためく。断言できた。

「アンが消えたってそりやもう凄い陰相で飛び込んできたんだ」

当の本人は眠り続けるアンの様子を心配しながらも今日も元気に飛び出して行ったという。サボが待つ”不確かな物の終着駅”グレイターミナルへ向かったのだろう。ダダンの家からと比べ、距離的に約2倍の行程を走破している事になる。早めに出発しないとひと仕事する時間も無い。なので身の安全を一応、守ってくれているシヤンクスにそろそろ起きそうだから頼む、と言いつ残していたらしい。この3日間、シヤンクスはベットを奪われただけではなく部屋を追い出された事、その間は副船長と一緒にむさくるしい夜を明かしたと笑いながら教えてくれた。

「マキノさんが昼飯を用意してくれたんだ、食べるだろ。ルフィも来てるぜ」

「うん、お腹ぺこぺこだよ」

奪い合いの食事の後、物資が運び込まれた船は岸を離れた。船影はゆっくりと遠くなつてゆく。見送りの人は手を振り、航海の無事を言葉していた。

ルフィは流れる涙そのままに、夕焼けの空をいつまでも見ている。この場を集っている一味以上の仲間を集めて海賊王になるというルフィの宣言にシヤンクスは自身の麦わら帽子を預けた。

かつて父からシヤンクスに譲られたいわくがついている、年季の入っている帽子だ。何度も修繕され、大切に使われているのが分かった。

” 偉大なる航海”^{グランドライン}の軌跡が次の世代に手渡され、時は進む。

03・シャunks(後書き)

誤字脱字等ございましたらお知らせいただけたら嬉しいです。

04 - ポルシェーミの一件(1) (前書き)

前後編です。

04・ボルシェーミの一件(1)

ガーブがやってきた。

7歳を迎えるルフィの誕生日に合わせて帰って来たのだろう。ダダンに預けたふたりの様子も必ずと言っていいほど、帰郷の際には見に来ていた。いつもは単身で登って来るはずなのだが、なぜか今日はルフィの声も聞こえる。

海賊王になるというルフィの声、悪魔の実など食いおって！という義祖父の声。

海兵になるかどうかはさておき、とうとう待ち望んでいた日がやってきた訳だ。

シャンクスが海に出てから、ルフィは村に下りてきたアンに自分も鍛えて欲しいと言ってきた。自分の弱さを認め、強くなりたいと願う弟に、アンは曜日を決めて村に足を運んだ。基本的な体力を養わねば、森に入ってもすぐに膝をついてしまうだろう。

コルボ山は深い山林が広がっている。その殆どが人の手の入らない、自然の、食物連鎖の上に築かれている。人が立ち入らない場所というのは、それなりの理由があるから『立ち入ってはならない場所』として流布されるものだ。

特にダダンが暮らす山の中腹辺りは、唯一縄張りを持つ主たちが立ち入らない中立地域ともいえる場所となっている。理由は簡単だ。長年ダダンがああ場所に居を構え、罾を張り巡らし、野生が近づかないように奮闘した結果だった。以外にダダン一家は強かった。なまじ徒党を組んで事に当たってはいいない、という所だろう。

悪魔の実を食べたとはいえ、ただの村の少年であるルフィが直、森で生活すればどうなるか。生まれつきの幸運を持っている節があり、起るとは思えないが、最悪の事態が起きてしまった時は、直、

死だ。

村に下りるようになったアンは、時にはエースも加わえて、砂浜で走り回っては疲れ果てて寝転がり、平野の鹿などを捕りに行つて共に色に有りついたり、慌ただしい日々を送っていた。”不確かな物の終着駅”^{グレイターミナル}に住むサボにも弟分の話は伝えてある。一緒に来ればいいと誘うが、彼はゴミ山から動かなかった。

叫び声があがる。

愛ある拳には悪魔の実の効果も打ち消されるようで、覇気を纏っていないガープのゲンコツはルフィの脳天にモロ直撃した。痛さと言つたら、脳心頭を起こしてしまいかねないくらい、ガツンとくる。しかも男二人には容赦なく、たんこぶが山と築かれる事も少なくは無い。

以前町に連れていつて貰った時には、いつもの行動を普通にしかしたエースの頭上にはタンコブの塔が出来たほどだ。日常的な不確かな物の終着駅^{グレイターミナル}走破ルートでは無く、村から船に乗り港を繋ぐ航路であつたのも悪かつたのだろう。有り余つた体力がそうさせてしまったのだろが、そこら辺は自業自得とアンは救いの手を差し出さずに、みつちりと愛の鞭を受けて貰った。もちろんその後の慰めは忘れなかったが。

「おじいちゃんこんにちは。ルフィを連れてどうしたの？」

「アンか、また少し大きくなりおつて。元気で何よりじゃ！」

「だずけて、アン、イデデデデ！」

ようやくほつぺたを放して貰えたルフィはアンとエースの方へと歩いてくる。

「ガープさん！！ ホントもうボチボチ勘弁しておくれよ！！
あいつらもう10歳だよ」

「こり以上我々じゃ手に負え二ーよ！！」

騒ぎを聞きつけた面々と。

外へ呼び出されたダダン一家は口々にふたりの悪童ぶりを吐露する。

しかし用件とは引き取りではなく、引き渡しだった。

「よし…じゃあ選べお前ら。ブタ箱で一生終えるか、こいつを育てるか」

目を瞑ってやってるお前らの数は星の数だ…！！！！

とはどこかでも聞いた覚えがあるセリフだなあとアンは首をかしげる。

「そりやまー捕まるのもやだけど」

時々監獄の方がマシじゃないかって程このふたりでほとほと参つてんのに、それに加えてあんたの孫、ですか。

ダダンだけではなく、一家の誰もが顔色を青色に変えている。

ねえみんな。みんなのご飯、ほぼわたしが作ってるんだけど。台所仕事が出来るわたしが居なくなったらみんな困ると思うんだけど。

0歳児でこの家に預けられた時は、当番制で回されていた家事その他の状況を思い返せば、ぶるりと身が震える。現代的な生活を送っていたアンには、耐えられない状況が見えてくるまで、時間はかからなかったのだ。小さいながらも体が自由に動けるようになった3歳ごろから、ダダン一家を叩き直したのは言うまでもない。

幼児のお願い、は絶大な威力を誇るのだ。

ちゃんと言われた最低限の雑事はやってるのだけけどなあ。アンは日々の雑用をひとつづつ数えてみる。

ダダン達からしてみれば基本言う事を聞かない。最近は鉄砲玉のように帰ってこない事もある。持ち帰る獲物が最近大型化してきた。もしかして自分達より力を付けちゃってる？最近では暴れても手がつけられないよ？という状況なのだろう。

アンはエースを見る。

眉がひくひくと動き、邪笑みを浮かべた口元は今にも爆発してしまいそうな形相をしていた。

野牛を狩り終えてすぐだというのに、野生児は体力がまだあり余っているようだ。

「エース、ルフィを頼んだぞ!!」

「……」

エースは応えない。ただ唇を真一文字に結んで、ガープを見ていた。

「決定ですか!!!」

「…なんじゃい!!!」

ダダン達が涙を流して必死に抗議しても、ガープに一睨みされて終わりだ。

「お預かりします…」

義祖父とダダンの初遭遇は、まだお互いが10代だった頃と聞いた事があった。既にその頃ダダンは山賊に身を襲やっしており、フーシヤ村へ強襲に入った時に初めて出会ったという。

言わずもがな、コテンパンに伸ばされたそう。

詳しい話は酔いつぶれて聞き出せなかったが、意外につきあいが長い、という事は分かった。

「おれ、山賊大っつ嫌いなんだ!!」

その日の夕食時、ルフィは言った。暖炉を囲む面々も困ったような、腫れものにどう触れようか思案しているのが分かる。

「黙れクソガキ。あたしらだっておめエみたいな預けられて迷惑してんだ!!」

この場に居たくなければ好都合、勝手に出てゆき勝手に野垂れ死ねとダダンは叫んだ。

あの肉もこの肉も、このふたりが獲ってきた野牛の肉だ!! あたしらにも分け前を渡すことで食卓に並ぶんだ!!

仮親の言葉はまだまだ続く。

要するに、山賊稼業が不況と言いたいのだ。

森には意外と食べ物が溢れている。ただ一家を養えるだけの量を毎日確保できるのかと聞かれたら、出来ない、と答えざるを得ない。この周辺は大型の野生動物が余り寄りつかないからだ。

言うなればこの一家の主な収入源は窃盗、詐欺、だった。ルフィに人殺しまでやって貰うと示唆する。だが祖父には告げ口するなど言うのも忘れてはいなかった。

一日に一度、コップ一杯の水と茶碗いっぱいのお米。

保障される食はそれだけだ。

後は自分で勝手に調達し、勝手に育てと言う。

同じ事を言葉を理解し始めた頃に言われた記憶がある。

だからエースは狩を始めた。

「わかった」

「ん…わかったんかいっ！！！！泣いたりするトコだそこはア！

！！」

ダダンの突っ込みに笑いがこみあげてくる。以前祖父に無人島のジャングルへ投げ込まれた時に、口に出来そうな物は大抵試し済みなのだ。既に平原で一緒に獲物を捕えて食べた事もあるルフィに、泣いて慈悲を乞えという方が無理な話だった。

「ルフィ、分けてやるから食べ、食って寝ろ」

がつがつと肉に齧りついていていたエースが一切れ、ルフィに渡す。既に風呂は済ませていた。水を入れ火を焚き、沸かすのはふたりの仕事として、一応、振り分けられていたからだ。

アンはまさかの行為に、吃驚して食事の手を止める。まさかルフィに食事を分け与えるとは思わなかったのだ。

小さな男二人は、異常な食欲を見せている。分けられた肉の殆ど

は、エースの皿にあった。アン自身の肉は既にルフィの腹の中に収まっている。小食のアンをいつも大丈夫か、とエースは気遣うが、どこにそんな容量が入る隙間があるのだろうと毎食ごとに不思議に思っくらいだ。

そうして翌日から追いかけてが始まった。

「ダダンの根城から山を下り」不確かな物の終着駅^{グレイターミナル}まで走り抜けるには確実に進んでも2時間はかかる。

ふたりで最初たどりついた時は行くだけで1日、帰りに1日半かかった距離だ。しかも帰りは山を登らねばならない。その途中で夕飯用に狩も行うのだ。

そのため。

「おれたちは今日から振り向かない。後を追って来い。山を抜ければごみ山が広がる場所に出る」

そこまで一緒に来れたなら、翌日からは一緒に行こうね。

初日から崖下に落ちたルフィを助けに行こうとするアンを力づくで止め、喧嘩しながらダダンの家に戻ると案の定、まだ帰ってきてはいなかった。

「今ここでおれたちが助けに行ったら、あいつはひとりじゃ何も出来ねエヤツになる」

助けに行きたい気持ちは同じだというエースに、アンは頷き差し出された手を握った。

仮親はとうにふたりの事を見放している。確かに情はかけてはくれているのだろう。義祖父と同じく、分かりにくい部類ではあったが、幼い頃はそれなりに可愛がってくれていたようにも思う。

だが口が悪かった。どこで野垂れ死んでしまっても、ガープには事故だと報告すればいいと思っている事、”鬼の子”と呼び、万が一預かっている事を政府に知られたらどういいう目に合うのかなどな

ど、姿を見せなければ平然と言葉にしてしまう。

エースは思う。ひとりぼっちでいたなら、とうに壊れてしまっていただろう。人を憎み、世界を憎み、蔑む全てが壊れてしまえばいいと願う。そして生まれてくるべきではなかった命である自分を憎む。死にたいと願う。どうして母は、自分を生んだのだろう。死ぬなら母と一緒に死にたかった。

心が悲鳴を上げる。感情の矛先は怒りに変わり、悲痛な叫びすら闇の中に埋もれてゆく。

子供は身近な人物達を感情に敏感に感じ取る。どうやら大人になると忘れてしまうものらしい。蹲^{すくま}ったエースをアンが抱きしめた。

ひとりであつたなら、きつと闇に飲まれていただろう。けれどふたりいる。鬼の血を引いていようが、生まれて来たのだ。父が待ち望み母が守った命は鼓動を打っている。このぬくもりは幻では無い。

3日目の夜、ルフィは帰って来た。谷底にある狼の巣に入りこんでしまったらしく、全身に切り傷を負っていたのは分かっていたがふたりしてルフィを抱きしめた。化膿している傷が無い事を確認するとアンとエースは湯を沸かし、弟の汚れを落とした後、傷薬や包帯を巻き軽食を口に突っ込んで一緒に眠りへと落ちる。

近道であるワニの巣の傍、狩り場である岩場、蛇の群生地帯、ルフィは追い掛けては見失い、禿鷹に飛ばされても毎日、毎日ふたりの背を追いかける事を止めなかった。

雨の日も風の日もルフィは必死に追いかける。

森の主である大型の虎や熊をやり過ぎたのも一度や二度では無い。しかしその度にルフィは何らかの助けを得て、窮地を脱していた。

ある時、その一部始終を見ていたアンは、ルフィには持つて生ま

れた天運に感謝した。

ひとりでは生きていけない事を知るルフイには、合いの手が入る。それは山に入ってきていた狩人であったり、その地域を縄張りに持つ二番手の獣であったりと様々だったが、ルフイは必ず切りぬけた。アンはエースが放って置けと言っても、時々食べられる木の実やキノコを教えながら、通った途の痕跡をこっそりと残す。人があまり通らないけもの道を好んで通るエースだったが、幾つかの道順を知れば、好む地点が幾つか重なっているのが分かる。そういう中継点を弟へ教えつつ、アンは日々走った。そうしてルフイは生傷絶えぬ追跡が3カ月を超えた頃森を初めて抜け出る。

「エース！アン！」

数分も開けず姿を現したルフイにふたつの手が待っていた。

「来たな」

「よく来たね」

エースのぶっきらぼうな言い方にくすくすと笑みながら、アンはルフイを招く。

「おえっ！！くっせ〜何だここ」

森が途切れた向こう側に広がる景色は、混沌としていた。鼻が曲がってしまいそうなおいもそうだが、光景に目を見張る。

「最初はそうだね」

「慣れちまえばどってことねエよ」

3人は道なき道を通り途中で分かれエースは門へと向かう。

「エースどこ行くんだ？」

「門の方で、ちょーっと…ね」

犯罪が蔓延している地帯とは言え、気軽に強奪へ行きました、とは言えない。

アンは通れる場所と近づかない方が良い辺りをルフイに教える。

「入り江の方は特に行っちゃだめよ。ブルージャム達が居るから」

「なんだそいつら」

「山賊と海賊を足して、2で割った賊、かな」

ルフィは嫌な顔をする。山賊と言う名がつくモノに拒否反応を起こすようだ。

グレイターミナル

”不確かな物の終着駅”からゴルボ山に近づいたところに小さな森がぼつんと存在している。ゴミは木の根元まで広がり、足の踏み場もない。ゴミの悪臭も凄まじいが、まだこの森に入ると緑の香りがほのかに匂い、気分的にも緩和されているような気がする。山へはこの森からでも入る事が出来た。

待ち合わせの木に登り待っていると、サボがやってくる。

「お。来たな、新入り」

シルクハットにゴーグルを付けた少年が木をよじ登って来る。

「おれはサボだ。ルフィだろ、話は聞いている」

差し出された手に、ルフィは応えた。

「お前から話を聞いて3カ月位か。アンもスパルタだよな」

サボの言に少々もの申したかったが、ぐっとそこは言葉を飲み込む。

そうすれば今日の稼ぎを既に終えたサボが、エースは一緒では無いのかと得物が入った袋を置き、尋ねてきた。

「大門の方に向かったけれど、途中で会って無いよね」

このごみ山全てが足場であり通り道だ。いくらでもすれ違いはある。

自己紹介を兼ねて、雑談をしているとエースの気配が近づいてくるのが分かった。いつもより周囲を警戒し身を隠しながら此方へやって来る。足跡を残さないよう木によじ登り、周囲を見回した。

「誰も、今のところいないよ」

グレイターミナル

森の中に”不確かな物の終着駅”に住む人々が入って来る事は少なかった。

森には時々、野獣が下りてくる。エースならまだしも、ただのか

弱い人間に敵おうはずもない。

「うわー！！　　すげエー！！　　おれよりすげエー！！　　大金だぞ、どうした！？」

「大門のそばでよ、チンピラ達から奪ってやったんだ。どっかの商船の運び屋かもな」

得意げにエースが口角をあげる。

この森にはこっそりと宝を隠せる洞が多く空いていた。ゴミの集積でいびつに盛り上がった幹も多い。ゴミが重なり化学反応で何かしら影響が出ているのかと思ってしまうくらい、奇形を見る事が出来た。

「海賊貯金はいくらあってもいいからな」

一体幾ら貯めれば海賊船を買えるのか。男二人はいつもその話で盛り上がる。

「お前ら海賊になんのか！？　　おれも同じだよー！！」

貯金を隠し場所へ納め、海賊談議に花が咲いた。アンは変わらず肩かけ鞆に入れて持ってきた本を読みつつ、話を小耳に挟む。

「モーガニアには成らないようにね。どうせならピースメイン希望かな。宝の地図を見つけて、誰からも奪略せずに海を渡れたら一番なんだけれど」

「モーガニア？　ピースメイン？　宝の地図！？」

ルフィが目を輝かせている。

友達と兄弟と、こんなにも楽しい時間を過ごせるなんて思ってもみなかった。

あくびを誘うのどかな時間が暫く過ぎた頃、そこへ数名の男達が声を荒げた状態で森へと入ってきた。

梢が風で立てる葉擦れの音が大きく響く。エースはルフィの口を塞ぎ、サボは身を低くして隠れた。

「ここらじゃ有名なガキだ。」エースとサボ”あとアンといったか。お前から金を奪ったのは…その”エース”で間違いないんだな

「！！」

「はい…情けねえ話です。油断しました」

子供たちがこの辺りをうろついているという話でも聞きつけて来たのか。大柄の男とチンピラが数名森へ足を踏み入れる。

「呆れたガキだぜ。ウチの海賊団の金に手エつけるとは……！！」

しまった、あのチンピラ、ブルージャムんとこの運び屋だったのか。

やべエ金に手エだしちゃった…

本物の刀もってんぞ、手下のポルシェーミだ。

あいつイカれてんだ！！

ひそひそと小さな声で眼下に見える男たちを見定める。チンピラは良い。まだ戦える相手だ。問題はやはりポルシェーミだった。

この男との戦い負けた人物は、確実に拷問にかけられ死ぬ。子供であろうと一切容赦しない鬼と言われていた。生きたまま皮を剥がし苦悶の表情を見るのが楽しみ、という残酷な思考の持ち主として知られている。目を付けられ息絶えた者も少なくない。

サボはそういう、不確かな物の終着駅内で囁かれている噂や話を拾ってくるのが上手かった。
グレイターミナル

通り過ぎるまで息を潜め、一気に岩場ルートから山へ逃げ入るしか手は無い、と話し合う。入ってしまったら此方のものだ。

「あれ、ルフィは…」

「あ」

アンの顔からさーっと血が引くのを感じた。

逃げ出すにしても体が一回り小さなルフィは先に駆け出さねばアンやエース、サボのスピードについてはいけない。だからわたしと一緒に少し早めに出発しようね、と二人話していた直後の事だった。

「放せ！！！！ コンニャロー！」

すぐに動く、と勘違いしてしまったルフィは下におりてしまったらしい。

エースとサボが額に手をあて、最悪だ、と呟いている。

何事も無くルフィをただの孤児だとその場に放置してくれれば御の字だ。

アンは祈るような気持ちで、見守る。

「一応聞いておくか。エースというガキが俺達の金を奪って逃げた。知らねエよな」

しばしの沈黙の後、緊張した面持ちで口を開く。

「し…し…知らねエ」

視線が泳ぎ口をとがらせる子供に、男は啞然とした。

”こいつ嘘下手！！！！”

「よしよし、知らねエなら思い出させてやるよ…安心しろ…！！」

あの馬鹿…エースのつぶやきはルフィへ向けられてはいるが、アンへの言葉でもある。

一途に、素直に生きて来たルフィに嘘を期待する方が無理なのだ。まさしく漫画やアニメに出てくる、がく、とうなだれる思いをアンは現在進行形で体感していた。

ポルシェーミが放ったのか、チンピラ達がルフィが捕まった辺りを入念に調べ始めている。下りたくても下りれない。

「貯金の事あいつ口を割ったりしないのか」

「わからねエ、移動させた方が……」

ひそひそと交わされる言葉の間に、アンは割り込む。

「しない。ルフィは絶対に言わない……」

確信だった。嘘は付けないが秘密は守る。

しかしチンピラ達が引く様子が一向に訪れない。時が刻一刻と過ぎてゆく。

焦燥感だけが雪のようにゆっくりと降り積もっていった。最終手段としての移動方法をアンは持っている。だが使えば最後、

脱力感と共に耐えきれないほどの睡魔が襲ってくるのは実証されていた。以前ルフィを助けるためシャンクスを連れて空間を飛んだ時も3日意識を失っている。

「どうしても身動き出来ねエ状態になったら、それで行くぞ」
「アンは頷く。」

「その代りちゃんと運んでね。置いてきばりは嫌よ?」
財宝よりも、もっと大切な宝を取り返しに行くのだ。迷っている暇などは、ない。

05・ポルシェーミの一件(2)

太陽が西へと傾き始めると”不確かな物の終着駅”グレイターミナルでも人々の動きが緩慢となる。今日も一日、生き残れたと言う安堵と、またやってくる明日の為に寢床へと潜り込む、そんな時間だ。

首都から排出された不要物も使えそうな再生物は根こそぎ持ち去られ、残るものはここでも使えない、ゴミだけとなる。

だがそんなごみの山に群がる小さな影があつた。伸ばす手は短く、小さい。

日が暮れるまでの短い間だけが最弱者である子供達がゴミを拾える時間だった。周囲の様子を伺いながらそつと隠れ家から這い出し、小さな手で残り物を懸命に探し始める。

”不確かな物の終着駅”グレイターミナルには小さな入り江があつた。

このごみ山での頂点であるブルージャムが率いる海賊が船を停泊させ拠点にしている場所だ。周辺は平らに整地され、木の幹を削り出して作った柱を突きさし、簡素に組み上げられ垂れ幕が張られている。家として使っている訳ではないが雨風をある程度しのげるよう建てられていた。

停泊する船の一室では待つことにしびれを切らし始めた男が凄みを増し、船員のひとりに向け眼光を飛ばす。

「遅エなア、オイ……」

背筋を冷たくする目がぎろりと動く。睨め付けられた船員はたまったものではない。

「今日の責任者は誰だ？」

「ポルシェーミの野郎です、ブルージャム船長！」

船員より人でなし、と言われるほどブルージャムは簡単に人を切り捨てる。その様はまるで、ぼろ布のようだった。いつ自分もそう

いう風に扱われるか、分からない。海賊達は細い細い綱を、毎日渡っている。野心を秘めた鋭く細められた目が語る。

お前達の代用品などそこら辺に捨てるほどあるのだと。遠回しになど言わなかった。だが男達はブルージャムに使われる他、生きる術を知らない。

「もう日が暮れるぞ……」

金に光る懐中時計を確認し、ゆっくりとドスの効いた声が発せられる。偶発的に同席となった船員は、生命の危機を感じていた。船長は感情のまま引き金を引く事を迷わないから、だ。

「あの野郎。金を持って逃げたわけじゃあるめエなア……」

「いやアまさか」

すぐにポルシェーミの野郎を探しに行かせます！

無言のまま眼球だけでいけ、と命ぜられた船員は部屋を飛び出た。

「使えねエなア、おい」

獰猛なつぶやきは暗く沈み始める部屋の中に落ちる。

SIDE アン

「いい？移動する先の座標は確かにその地点だけれど、上下のどちらかに出現するかは運だから、そこはよろしく」

3人は船貯金を隠した場所より探しまわるブルージャムの一味から身を隠すように、死角を見つけては木の上部へと登っていた。下に下りれないのだから仕方が無い。

ピンポイントで探しに来ないという事は、ルフィが沈黙を続けているという証拠だとアンはふたりに言い続けていた。ポルシェーミが拷問を行う場所は入江と門の丁度中間地点辺りにある。

流れ着いた軍艦の鉄板を屋根に使い、贅をサンドバックして遊べるよう太い木を梁とした頑丈な作りになっていた。なぜ知っているのかといえば、以前アンが仲良くしていた女兒を救出に行った事があったからだ。ポルシェーミは小児性愛^{ペドフィリア}だった。簡単にいえば幼児

を性的欲求の対象とする性的倒錯者だ。もつと簡単にいうなれば、13歳以下の女の子がとてつもなく危ない。ポルシェーミの半径5キロ圏内から対象年齢者は逃げてええ、といった感じだ。ロリコンならまだ愛でるだけなので許容も出来ようが、手を出す危険人物に近寄るべからず、なのである。

アンとて移動した先で倒れるのはご免被りたかった。ルフィを運ぶのも大変だろう。荷物にだけはなりたくはない。瞬間移動は肉体的疲労より精神力がごっそり持っていられるような感じがしていた。鍛えるにもどうすればいいのか、分らない。

学生であつた時を思い出す。10年前ともなると、かなり記憶が曖昧となっているが、試験勉強が嫌で、集中力が切れた時は大好きな本を読む事に没頭していた。楽しくて寝食を忘れ、気がつけば朝を迎えていた事も多々ある。

集中力。

好きな物であれば長続きするが、嫌いな物であればすぐ切れてしまふ。

結局はやろうと思う気持ち次第でなんともなりそうな気もしていた。マラソン走者達は例えコンディションが最悪であっても走り通す事を諦めたりはしない。困難であるほど、強敵が居並ぶほど気持ちが集中するという。

やろうという強い意志があれば、どんなに辛くとも耐える事が出来る。

要は気合、だ。そして振りだしに戻りかけ、やめた。

内部に足りなければ外部から取り込めばどうだろう。

呼吸を整え、自身を自然の中に溶け込ませる。此方に来て意識してやった事は無かった。風に耳を澄まし、木の中を通る水を感じ、その下にある大地を感じる。空には太陽の温かさがまだ残っていた。

夜の帳を下ろす闇がゆっくりと進んできている。

世界に包まれていた。たくさんの気配を感じる。

切り絵のように取り出された一部では無い。繋がっている。

フーシャ村ではマキノが訪れ始めた村人たちと話していた。村長も奥さんとの会話の最中だ。様々な人の声が聞こえる。

ルフィも見つけた。泣きながら耐えている。

ほんの少しだけアンは木から力を分けて貰った。緑が風に揺れる。応援されているようにも聞こえるのが不思議だ。

心が軽く弾む。

SIDE エース

アンの変化が手に取るようにおれには分かった。何かを考えていたかと思うと、呼吸をゆっくりとし始め、片手を空へと伸ばす。サボとふたり、いらいらとし始めていた。このまま待ってたとしても埒があかねエ。それなら正面突破した方が早いと、鉄パイプを手に立ちあがった時だった。

ぞくり、悪寒が走る。耳鳴りと大音量のなにかが流れ込んできた。

「お待たせ、じゃ、飛ぶね」

アンはにこりとほほ笑む。

頭痛え。くらくらと揺れる視界に、ぎゅっと目を瞑る。

「無理して飛ぶ事無いんだぞ、おれ達あそこまで走っていけるんだ」

サボが鉄パイプを握り締め、アンを見る。

「大丈夫だよ。場所の把握は済んでるし、動けると思う…たぶん」
語尾が小さくなって顔を背けるのは確信がないからだろう。

なんとか頭を振って眩む感覚を振りはらう。

「たく、お前も世話やかせんよな」

おれは上目づかいで頬を膨らませるアンのを頭を撫でた。きつと無理をさせる。だけど、やめろと言った所で聞く訳も無い。

「まかせろ、お前が倒れてもおれがおぶってやる。安心しておれよ」

「うん、じゃあ…その言葉に甘えるね」

「いい加減に吐きやがれ!!!」

ポルシェーミの声には焦りが含まれていた。ゴム人間である子供に鈍器は通用しない。ならば刺つきのグローブではどうだと殴ってみれば効果覷面だった。それから数時間、脅しと甘言を繰り返すが、麦わらは口を開かない。

「コイツ…叫ぶ気力も失ってます」

聞こえてくるのは血が滴り地面に当たって跳ね返る水音と、小さくなったしゃくりあげる声だけ。

「…たぶんもう何も喋らねエし…正直ムゴくて見てられねエ…」

「!!」

チンピラの悲痛な言葉の答えは、拳だった。

「ガキをかばうヒマがあったらエースとサボを捜して来い!!」

命が危ないのは自身だった。時刻はとくに過ぎている。船からこの場に使いがやって来るのも時間の問題だ。そうなれば問われる。ポルシェーミは背筋に嫌な汗を感じながら、ブルージャム船長の己よりも冷たい、双眼にぶるりと身を震わした。

今まで何人も見て来ていた。言われた仕事をこなせなかった者たちは全て、このごみ山の一部と成り果てている。

早く何とかしなければならなかった。ポルシェーミとて命は惜しい。逃げ出したかった。しかしどこへ逃げると言うのだろうか。この島国で、ブルージャムの手から脱せる場所などどこにもない。早く、早く何とかしなければ。

それだけが思考を支配する。

周辺では出入りの激しいあばら屋を遠巻きで見ている人々が居た。
「あんな子供を……」

町の保安官を呼ぼうかという声も出るが、このごみ山では法律が通用されない。しかも貴族に上納しているブルージャム達はこの国において、特にごみ山での犯罪を黙認されている。そう、私掠を認められているのだ。見捨てられた地で幾ら死体が増えても、町に住む事を許されている人々にとっては、ああ、そうなんだ、と軽く聞き流せる程度の話に過ぎない。

「いわねエ……！！！」

秘密を守り通す麦わらに、ポルシェーミも刃を抜く。

「ならば死ね……！！！」

「「やめろおおおお……！！！」」

重なる声はあばら屋の壁を砕き、地へ着地する。姿はふたつ、おれとサボだ。

「こいつだ！！ こいつが金を奪ったんだ！！ 畜生オ」

腕に包帯を巻いたチンピラの一人が、残った指先でおれを指す。

「来てくれたならありがてえ。こいつの口が固くて困ってたんだ」
ポルシェーミの大きな手がルフィの首を掴んだ。おれとアンの名を呼ぶ。

「今助けてやる、待つてろ。」

「サボ……！！」

大男はおれの声に視線を一瞬こちらへ向ける。

「ウオリヤアア……！！！」

サボが小さな体の利点を使い後方へ回り込んだのち、後頭部を力いっぱい殴打する。

周りに数人たむろうチンピラ達は翻弄されてばかりだ。あっけにとられていた奴らが後ろから切り込んできても無駄なあがきだ。

目が後ろに付いてるみたいにな、おれには分かる。

サボの会心の一撃を受け巨体は顔面からゴミが散らばる地面へめり込んだ。そのままチンピラのひとりが持っていたナイフをサボは奪う。あいつのスリはおれが知っている奴の中でもとびきりだからな。

「逃げるぞエース！！！」

縄を切ったサボがルフィの体を抱え上げ叫ぶ。

「先に行け！！！」

「バカお前！！！！！」

駆け出し始めていたサボは足を止める。砂埃が舞った。

「一度向き合ったら、おれは逃げない！！！！！」

「やめろ！！！！ 相手は刀持ってたんだ！！ 町の不良とわけが違
うぞ！！！！」

おれはポルシェーミを見据える。背にはサボとルフィがいた。誤差が無いよう、アンも力の限りこの場へと飛んだ。

「オイ……少し魔がさしたんだろ？」

大人しく金を返せよ、悪ガキ。

余裕を浮かべ粘っこい黄色い歯を覗かせた大男の顔が歪む。返したところでその力を振るうのは止めねえだろう？

「安心しろ、おれ達が有効に使ってやる」

「馬鹿言ってるじゃねえよ！！！！」

怒りを満ちた形相が刀を振り下ろす。鉄パイプを構えるが、細いそれは奴が振るった剣によって先の丸まった部分が断絶され、刃の先が額を通った。避けきれず鋭い痛みが走るが構わない。

「ガキどもが……お前等に負けたら、おれあ海賊やめてやるよ！！」
おれは自然と笑みを浮かべていた。

その言葉に二言はねえよな。大人の都合を並べて、あれは無かつた事に、なんて事はさせねえぞ。

「やめさせてやる！！！！」

ちよつと待つてろ、そう言つてルフィを地面に置いたサボがおれの横に揃う。

それぞれが鉄パイプを構え地面を蹴った。

「遅せエよ」

おれとサボのふたりがかりでポルシェーミへ向かう。必死に払い、打ち、突く。

視線が捉える。いつの間にも後ろに回ったのか、巨体の後方にはアンが居た。いつもの顔じゃあねエ。一切の感情を消した、仮面が張り付いている。そしていつもは手にしない、手に握った鉄パイプを力任せに振りかぶった。棒はヤツの側頭部を直撃し形を変える。そのまま勢いで身を回転させ太い首元に蹴りまで入れていた。おっかねエ。普段怒らねエアンが切れると、ジジイよりも怖いと思う時がある。それが、今だ。

ポルシェーミの体が浮く。おれは鉄パイプを捨て、拳に力を込めた。脂肪が詰まった腹へ、歯を食いしばった一撃が、食い込む。

後部側面、そして真正面からの力は逃げ場を求めて唯一の方向へと向かう。その先にはあばら屋を支える柱があつた。衝撃を受け、ぐらりと揺れる。

「サボ急げ、崩れるぞ!!」

サボがルフィを、おれはアンを抱え背負い、山を登る。休憩場所がある滝つぼの岩場を目指し、走り続けた。追っ手は来ないみたいだな。きつとあばら屋を掘り起こすのに必死になつてゐるんだろう。

アンはフラフラになりながらも焚き火を起こして、おれ達が水辺から上がつて来るのを待つていた。

傷口を洗い流したおれたちの手当を終え、満足顔で倒れる。その傍でルフィが変な顔して泣き続けていた。

「お前…悪リイ、クセだぞ、エース。本物の海賊相手に、」おれは逃げねエ”なんてさ。　なんでそうお前はヤバい方に自分から行

くんだよ。死んだら元も子もねエんだぞ」

そんなこといってもよ…お前達が後ろにいたからじゃねエか。奴らがお前達を追ったらどうすんだよ。

違う。

サボがおれの目をじつと見て言った。

「お前が死ぬと、おれが困るんだ」

突然の一言に言葉が詰まる。胸がどきりと跳ねた。

「こんな事しちゃってブルージヤムの一味はもうおれ達を許さねエだろうな。この先…追われる」

サボの心配は当然なんだろう。けどやっちゃったもんは仕方ねエ。割り切るしかねエけどそう簡単に割り切れるほど、簡単な問題でも無いっていうのも、分からなくもないけどさ。

サボが頭を抱えてあれこれと考えぶつぶつ言っているのを聞きながら、おれは予備に隠しておいた鉄パイプを試し振りする。けどどうもしっくりとこない。前に使ってた棒やつのほうが良かった。

「怖がつだ…死ぬじがどぼつだ」

ルフィは傷の手当て中もずつと泣いていた。

「ああああ!!! うるせエな、いつまで泣いてんだ!!! おれは弱虫も泣き虫も大っ嫌いなんだよ!!!」

イライラする!!! アンが無茶するのはこいつがいるからだ。お前さえいなけりゃ、あのおっさんと戦う事も無かった。金魚のフンじゃねエんだぞ。

おれが叫ぶと嗚咽していた声がぴたりと止む。

「ありがとう…たす…助けてくれで…ウウ…」

「てめえ!!!」

「おい、おい。エースなに怒ってんだよ。礼言ってるだけだろ」
サボが慌てて止めに入る。

んだよ、止めんなサボ。こいつにはちゃんとやってやらなきゃわ

からねエんだ。

「ブルージャムの奴らは性別、年齢問わず平気で人を殺す。なん
で言わなかった」

しゃくりあげながら、話せばもう友達になれない。ルフィは涙を
必死にこらえ言う。

「なれなくても死ぬよりましだろうが。なんでおれと友達^{ダチ}になり
たいんだよ」

「アンが教えてくれたんだ。一緒だと楽しいって」
耐えきれなくなった涙がぼろぼろと零れる。んだよこいつは。

「だって…だって他に！！ 頼りがいねエ！！！」

フーシャ村には帰れない。山賊にも世話になりたくない。手をの
ばしてくれたアンと、同じ手のひらを持つエースだけが寂しさを紛
らわせてくれた。

時々帰って来る祖父以外は誰もいない部屋にぼつんとひとりきり
になる。

「…1人になるのは痛エのより辛エ！！！」

親が居ないのは知っていた。

その代り、村全体でこいつを育てているんじゃないのか。あ
んなにも村人達に囲まれて、構って貰えてそれ以上何を望むって言
うんだよ。

「お前、親は」

「じいちゃん以外にいなエ」

ルフィは鼻をすすって、必死に涙をこらえながら言葉する。

孤独の苦しさは身に試みている。ジジイが居ない分、村の奴らが…

「…おれがいれば辛くねエのかよ…」

ルフィは頷く。

「おれがいないと困るの…か」

こくり、とルフィが再び頷く。

町の奴らは言っていた。

ロジャーにもし子供がいたら？

そんな奴がいたら困るだろうが、なあ！

そいつは生まれてくる事も生きる事も許されねえ！

なんたつて”鬼”だからな！

嘲笑を繰り返した。

誰もかれも同じことを口にする。おれ達は存在すら許されていない。

「お前はおれに…生きててほしいのか？」

「当たり前だ！！」

嘘ではないと、分かった。まっすぐにおれを見ている。お前は必要としてくれるんだな。アンが…構いに行くわけだ。

「そうか…でもおれはお前みてえな甘ったれ嫌いなんだ」

いろんな感情が胸の中でごわごわしやがる。んだよこれ。

「おれは7歳だぞ！！お前みたいに10歳になったら絶対泣かねエしもつと強エ！！！」

「おれは7歳んときはもう泣いてなんかねエよ！！ バカはお前だ、一緒にすんな！！」

賑やかな声にむくりと身をアンは起こす。

「うるさくて眠れねえ？」

サボが鉄パイプを肩に担ぎ、此方を見る。

「うっん、盛大な兄弟喧嘩してるなあって。ちょっと嬉しくなってます」

エースが心の内に隠し持っていた声がようやく聞けた。

ただそれだけなのに、どうしようもなく感情がこみあげてくる。存在を認めてくれる誰かがいるだけで、生きていたいと願える。

いやあ。サボの一言も結構効いたなあ。さらりと殺し文句言っちゃう所が罪だよな。

「ところでよ…」

「あー、ごみ山にサボ帰れないね。どうする？」

今日の事で少なくとも、ブルージャン海賊団には命を狙われる危険性が出てきたわけだ。奪った宝もきつと秘密裏に探し出す算段をしているだろう。3人の後をつけて場所に辺りを付け、そして奪いに来る。大人達にしてみれば、子供らが隠し貯金を殖やしてくれているようなものなのだ。急いで取りに行く必要など無い。満タンになつてから、ゆっくりと手に入ればいいだけの話なのだ。

アンは思案する。

「サボが良ければ、ダダンおばさんのところに来ればいいと思うな」

ダダンがどういう声を上げるのか、分かつてはいたがサボなら大丈夫だろう。上手く一味をおだてて、丸く話を納めてくれるに違いない。エースは散々くそばあだと罵るが、以外に面倒見のいい所があるのだ。お願いすればきつと、置いてくれるだろう。

案の定、ダダンはムンクの叫び宜しく、新たに転がり込んできたサボに驚愕の声を上げた。

コルボの悪童たち。

山や深い森の中で猛獣を狩り、町の不良たちやごみ山の犯罪者、入り江の海賊達との戦いに明け暮れ、その名は壁を越え王国の中心街にまで届くほどになる。

「アンちゃん、無事で何よりじゃのう。溜飲も少しはくだった…」
数日後、ごみ山に住む老人からアンは聞いた。

ポルシェーミが死んだ、と。

船長が放った銃撃で、頭を射ぬかれゴミ山の一部になったという。罰が当って清々した、そう暗い目を光らせ、老人は言った。

06 - 絆

ゴア王国。

それは東の海の^{イーストブルー}辺境にありながら最も美しいと言われる国の名だ。美しく整備された広場や、街並みを歩く人々もまた軽やかに、幸せそうな表情をしている。

来る祭典を控え、王国を挙げ世界貴族である^{てんりゅうびと}天竜人を迎える準備に余念が無い。出席されるご予定のジャルマツク聖は殊の外東の海の中でゴア王国に立ち寄るのが楽しみにしているとお言葉を賜れた。式典は前夜祭から催される予定となっている。

定期船は各所より出航。問い合わせは運航事務局まで。

ニユース・クーが持つてきた新聞を片手に、アンはサンドイッチを食べていた。

場所は中心街にあるオープンカフェだ。野生的な生活をしていると、時々、あちらで良く口に使っていた食べ物欲しくなる。そういう時はこうして偶に食べに来ていた。たまごときゅうり、ツナとトマト、ハムとレタスの組み合わせが絶妙すぎる。

山での生活は充実していた。ルフィが来て、サボと一緒に暮らすようになり毎日が楽しい。

なぜ町に居るのかというと、本を買いに来たのだ。海へ出るまでに最低限、知って居なければならぬ知識は以外に多い。サボと一緒に航海術を読み、調べ、学んでいた。

あと足りなくなった包帯や絆創膏の買い出しも兼ねている。

端町で分かれたエース達は美味しいものを食べてくると言い残し走って行った。行先を聞かなかったが、向かう先はほぼ決まっている。その内騒ぎを起こすだろうし、それを追えば良い。

横並びにある白のテーブルには身なりを正した町の人々がそれぞれの時間を楽しんでいた。

背もたれに寄りかかり、周囲を観察する。人々の波にまぎれてせつせと清掃に励むクリーナー達が働いていた。クリーナー、とは掃除を主な職とする人達の総称だ。手にもっているのは箒と下におろせばぱかっと口を開くちりとりだった。彼らが細々と働き続けてくれるおかげもあり、中心街の各所にはゴミひとつ落ちてはいなかった。回収されたものはすべてまとめられ、”不確かな物の終着駅”グレイターミナルへと運ばれてゆく。

最近見る夢は大きな炎だった。全てを覆い焼き尽くす赤の炎の中に声が響き渡る、ただそれだけの風景が続く。

思い当たる節は確かにあった。

しかし食い止めようにも方法が思いつかない。

今から火事が起こるとごみ山の人々に噂と流すとする。その噂は門を守る軍隊の耳にも入るだろう。情報は高町のさらに上に住む王に届けられる。その話は王宮内にも広がるはずだ。そうなればこの計画を練りついていた人物がより慎重に、そして確実に推し進められる方法を考えるだろう。目的はゴミを燃やす事、だ。強硬手段に打って出てくるかもしれない。一番良いのは、火事の原因が配置された後、火事になるとごみ山の人々に伝え逃げて貰うこと。けれどこの方法でも被害者は必ず出るだろう。全てを救えるわけではない。しかし救いの手を出来るだけ伸ばしたいと言う気持ちも確かにあった。

暦はゆつくりと確実に刻まれている。

前いた場所でもそうだが、こちらでも歴史の改ざんが当たり前のように行われているようだった。年号は幾つか、歴史を持つ国々よって違っているものの、世界政府が奨励している作り上げられた歴史年表に当てはめれば現在は1513年、となる。

歴史は作り変えられやすい。

記憶媒体が発達していたあちらとは違い、誰の目に触れても真実だと知らしめる方法がこちらには少ないからだ。あっても利用できるのは数限られた、一握りだけだろう。時計やランプ、医療用精密がそこそこ出回っている町の状況を見ると、きっと洗濯機やテレビ、掃除機、乾燥機くらいはあるだろうなあと思像出来る。

PCやネット環境は多分無い、はずだ。もしあれば、様々な議論が世界で活発に行われるだろう。世界政府として情報の統制を行っている節が強いため、流通するのは余り宜しくない。

可能性がゼロでは無いが出回っていないものとして空を飛ぶ飛行機、ヘリコプターなどだろうか。偉大なる航路では磁気異常があるというし、常識が通用しない気候変動も起こっているというから、飛ばせない、というのが理由だろう。

ディーゼルエンジンもこれだけ機械が出回っているのだからあるだろうと思いきや、どれだけ探しても本の中には見つからなかった。世界のどこかにはあるのかもしれない。けれどもし、隠されているのだとしたらどうだろうか。

これもまた、空白の100年に纏わる、異端知識つてとこかな。

発明の手順がてんでばらばらで、何がどう繋がって実用化されているのかを予測できない。

石炭で動く機関車は水の都で稼働しているし、船舶の一部にも使われている可能性は否定できなかった。けれど、どんなに探しても、海洋面積の方が大きな世界であるとしても、産業革命が起る気配が微塵も見えて来ないのはなぜだろうと考える。意図して起こさせないようになっているのかもしれない。けれど海軍にはDr.ベガパンクという発明家が在席している。そのほかにも役に立つか立たないかは兎も角として、研究者は世界にたくさん居た。

統制された世界で、果たして起り得るかは微妙だとは思うが、避けて通れない通過点でもあるだろう。

世界はどう先導されている？

隠匿されようとも、真実を追い求める何者かによって、いつかは白日のもとへ晒される。

歴史とは誰が作り、誰が認定しているのか。情報を誰が収集管理し、放出しているのか。小さな疑問が違和感を探り当てるのも難しくは無く、全てが必ずしも真実を語るものではないと知る。

アンは会計を済まし、路上の流れに紛れる。

思いの外お財布が軽くなってしまうていた。端町にも美味しいサンドを出す店があるのだが、治安の関係上で、たまに絡まれるのが難点だ。ここ中心街まできてしまえば、ブルージャンの手下達とも出会う事は無い。ゆっくりと買ったばかりの本も流し読み出来る。

ポルシェーミの死後、2回ほど入り江の海賊達と戦ったが、どちらも痛み分けで終わっていた。さすがに荒くれ者達が束になって掛かって来ると、防戦一方になっていまい。此方の手勢はたったの4、対して賊達はその都度人数を補強してやってくる。サボは手先の器用さを生かし、何らかをかすめ取るのを忘れなかったが、最近は相手の警戒も強くなり、その他がなかなか成果を上げられない状態が続いていた。

中心街の広場を抜け、問屋街に向かう。

そこで安く売りだしていた柔らかで厚めの生地をまとめ買いする。薬として珍重される薬草や熊の肝、鱈皮などを引き取ってくれる相手を見つけたアンは、3人に隠れてこっそりを小金を貯め、引越にに必要な物資を町に来る度、持ちかえていた。海賊貯金の多

くはエースとサボが集めた大切な貯蓄だ。どうしても必要であれば使ってもいいという了承を得てはいたが、やはり使うには気が引けるお金ではある。

大抵のものは3人が調達して来てくれた。

アンが購入しているこの布も、欲しいと口に出せばエースとサボが持ちかえって来るだろう。

しかし、どうしても抵抗を感じてしまう自分がいる。ダダンに無理矢理強襲に連れて行かれそうになった時も必死で抵抗し逃げ出した。結論的に長年染み付いた、モノを金銭で買うという習慣と倫理はなかなか砕くのが大変だ、ということだ。

「食い逃げだア……！！！」

通りを歩いていると、ガラスが割れる音が響き渡る。しかもその現場は真上、だ。

「誰か捕まえてくれ……！！！」

（アン、行くぞ）

声が届く。飛び出してくるタイミングを合わせたのだろうか。きらりと頭上から落ちてくるガラスを避けながら、アンは走る。

「ぶはーっウマかった」

「言つたら、だから……！！！」

4階の窓を飛び出した兄弟達は店の旗を支えるポールを器用にかむ。そして店先を飾るファッショントに身を弾ませ、通路に降り立った。手には相変わらず鉄パイプが握られている。

アンはその、つき破った店の佇まいを見、大きなため息をつく。数年前と但し書きがつくが、ここの料理はなかなかいけると義祖父に連れて来て貰った店だったからだ。

アンはいつも思う。

町に住む、特にこの界隈の人々は学習能力がないのだろうか、と鉄パイプを持ったままの格好で、いつもどうやって席まで辿り着けるのかが不思議でならない。

「それ貸せ。スカートなんて穿いてるんじゃない走りにくいだろ」

「あ、うん。ありがとう」

両手で抱えていた紙で包まれた布をエースが奪い取り、片手で抱える。

「またあの3人組か!! 常習犯だ! なぜ店に入れた!!」
町のガードの声が聞こえる。路を歩いていた人々は何事が起ったのかと周囲を見回す。

「逃がすな、その子供4人を、誰か、取り押さえてくれ!!」
日ごろの運動不足が祟ったのか、治安維持を生業とする服装をした男がこちらを指さし息を切らせながら応援を求めていた。

どちらの世界も30代は運動不足世代なのだと、くすくすと自分だけしか分らないネタで笑みを含む。

端町に逃げ込めば追手を巻くなど容易かった。そこから門を抜け、グレイターミナル“不確かな物の終着駅”を走り山へ入ればもうこちらの領域だ。

「サボ!? 待ちなさい、お前生きてたのか!!! 家へ帰るんだ!!!」

身なりの良い紳士が制止する。だが急に止まれて言われても、はいそうですか、と止まれるわけが無い。

アンはちらりとその人物を見た。シルクハットを被った、壮年の生活環境が豊かな男だ。その服の至る所には意匠を凝らした花の紋がある。3本つけた羽飾りは貴族である事を示す、表象だ。シンボル

この国では貴族それぞれが各家によって形や色が違う花紋を持っている。

基本的には花、を模して象形されていた。唯一、王家だけは動物を模するという。が真相は解らない。もう一段上の壁向こうには、一

般市民が安易に近づける場所ではなかった。

…サボのベルトにある花の模様、あれは貴族印だったんだ。
アンは杖を振りあげてサボの名を呼び続ける男から、前方を走る
エースへと視線を移し、障害物を越えて不確かな物の終着駅グレイターミネルを越える。

中間の森を通過し、コルボ山の麓から中ほどにある滝つぼを横切る。そしていつもの休憩所まで一気に走り抜け、エースとルフィはサボに詰め寄った。

「おれ達の間には秘密があつていいのか？ 話せ」

ふたりの声がハモル。こちら辺、一字一句違えない所が双子で生まれた自分よりシンクロしているのではなかるうかとアンは思いうらいだ。

エースとルフィの教える攻撃にさすがのサボもまいった、と降伏し話し始めた。

さっき呼びとめた男は自分の父である事。ごみ山で生まれてなどおらず、両親もちゃんとふたり健在である事。そして、生まれがゴア王国貴族階級である、事。

「お前らにはウソをついてた…ゴメンな」

エースとアンが初めてサボと出会ったのは、確か5歳の頃だ。

お互いの行動範囲が似通っており、毎日では無かったが数日に一度、必ず顔を合わせれば、自然に会話を交わしあう数も多くなっていた。

意気投合した後は中間の森を待ち合わせ場所とし、そこから日々、お宝を探したり、端町でその日限りの日雇いをこなして海賊貯金を始めた。

そういえば、と思い出すのは一体どこに住んでいるのか、それぞれが話さなかった事だ。

聞かなくてもどうでもよい事、だったが気にならなかった訳では

ない。

ある時、サボが今日からこの森に住む事にしたんだ。その身、ひとつだけで宣言したのはいつだったか。

『海賊貯金もすぐエ貯まってきたるだろ。もしものの為に幾つか、移す隠し場所も作りてエし、丁度いいんだよ』

そう言ったのは丁度1年くらい前だった、はずだ。

サボの声が小さくしぼむ。

ルフィは謝ったからそれでいい、と許したが、エースが理由を尋ねた。

なぜわざわざごみ山に居たのか、を。

サボは唇を噛みしめる。

両親が繰り返す言葉は決まっていた。

「お前は将来王族の娘と結婚出来る男になれ。そうなれば我が家は安泰だ」

「あなたもきつと幸せになるわ。そう決まっているの！！」

「こんな絵などなんの足しにもならん。勉強してきなさい。そして私を早く楽にさせておくれ」

「王族の子と喧嘩！？　なんてはしたないの！！　貴方の怪我なんてどうでもいいの。凶器持ってた？　関係無いわ！　なんてことでしょ早く謝罪しに行かなくちゃ。お詫びの品も必要だわ」

思い出される記憶は苦々しいものばかりだ。

「あいつらが必要としているのは、地位・と、財産・を守り増やしていく」誰か「でおいじゃない」

おいじゃなくても構わない。

王族と結婚できなきゃおれはクズ、その為に毎日勉強と習い事。

おれの出来の悪さに両親は毎日ケンカを繰り返す。そんな姿を、見ていたく無かった。

幹を背に座り込んだサボがため息をつく。

「あの家におれは邪魔なんだ」

親がいても独り。縋れる相手もない。次第に呼吸が苦しくなつてゆく。

”ごみ山には近づくなよ！！　あそこにあるのは人の形をしたゴミだ……！！”

「貴族はごみ山を蔑み、地位と名誉と金の計算に明け暮れる。…あの息の詰まりそうな”高町”で何十年先まで決められた人生を送るより、こっちに居る方がずっといい…」

独白が、終わる。

「そうだったのか」

エースは一通りの話を聞き、そう言った。

サボは足掻き苦しみ、5歳という年端もいかない年齢から己を殺し逃げ出してきたのだ。

貴族の生活がどういふものなのかはピンとこないが、アンが思い至ったのは歌舞伎のあと取りだった。子供が一族の芸を全て受け継ぐ義務を、生まれて来た時から背負わされている。何かを背負っているという意味では、エースやアン、ルフィ、そしてサボも変わらない。

アンはちくりと胸に痛みを感じる。

一度大人になって、再び子供を繰り返したからこそ分かった。人間の子供は、親という存在が無ければ生きてはいけない存在だ。野生に目を転じれば、確かに生まれたてはか弱く、親の庇護が無ければ弱肉強食の理によって捕食されるか、自然に淘汰される。だが人間はひとり立ちするまでの最低年数が長い。エースやサボ、そしてルフィは普通という枠から飛び抜けているからこそ、10という年齢でここまでやってのけられる。あちらで生活していた時の10才時、何が出来ていただろうか。

アンは溜息と共に、エースと自分がかかえる秘密を乗せる。

以前、エースがゴール・D・ロジャーについて聞き回っていた際に、それとなく関係を察してはいるようだが、しっかりと話している訳ではなかった。その内に、お前達も話せ、と言われそうな気がしないでもない。

アンがひとり思考の海に浸っている間に、男達はすっかり仲直りをしてしまっていた。なんだかんだと言い合いながら、仲がいいのだ。そして話台はいつか出る航海に移っている。

必ず海へ出よう、この国を飛び出して自由になるのだと誓いあっていた。

世界を見回り叙事伝じふでんを書くのだとサボが夢を語れば、エースも負けじと顔いっぱい笑顔を浮かべ、生きた証を刻みに行くと叫ぶ。手段を選ばない、とはエースらしい言い方だ。

「おれはなあー!!」

ルフィは興奮し手を握り締め、両手を空へ突きあげる。

「海賊王に!!! おれはなる!!!!!!」

「「は??」」

ルフィの宣言に、ふたりは声をはもらせる。

「…お前は…何を言い出すのかと思えば…」

爆笑していたサボも将来が楽しみだと腹を押さえて続けた。

「アンは?」

ルフィが目を輝かせ走り寄り、切り株に座るアンをじっと見つめる。

「ん?」

問われた答えを探しながら、弟の頬をびよんと伸ばす。さすがゴムだけあってよく伸びる。

「ちよつとまで」

どう答えようか思案している最中、サボがまじめな顔をして、全員が船長になりてエってマズくねエか?と口に出す。確かにそれぞ

れの目的が違えば、向かう先も異なってくるのは当たり前だ。

「思わぬ落とし穴だ。サボはてつきりウチの航海士かと」

「お前らおれの船に乗れよー」

と言ったところで、全員の視線が向くのはアンだ。

「そうねえ。3人ともが心配なんだけれど。誰か一人には絞れないからどうしようか」

唯一の船員候補に3人の思惑が交差する。

「――将来の事は将来決めよう」

三竦みが暫く続いた後に、エースが切りだした。

「もしかしたら皆バラバラの船出になるかもな!!」

木の空から取り出してきたものは、1本の瓶と4つの杯だった。

ダダンの棚からこっそりすくねて来たのだろう。酒の趣味だけは特別に秀でている彼女のコレクションの中でも、一番良い瓶を持ってくるとはさすがエースだというべきか。度数もさることながら、香りだけで酔える代物だった。それを少量とはいえ、10歳と7歳児が飲んでも大丈夫なのだろうか、口元が引きつる。

「お前ら知ってるか？盃を交わすと”兄弟”になれるんだ」

注意ながら続く言葉は、耳に心地よく響く。

「海賊になる時同じ船の仲間にはなれねエかも知れねエけど、おれ達の絆は”兄弟”としてつなぐ!!」

どこでなにをしても、この絆は切れない。

「これでおれ達は今日から!」

「兄弟だ!」

「おう!」

アンも心に決め杯を打ちならす。

夏から秋へ、秋から冬へ。季節は移り変わってゆく。

義祖父からの追撃をかわすために独立宣言をダダンに渡し、清水が沸く水場に近い巨木へ引越してから毎日がいっつもよりも短くなつたように感じていた。

秘密基地は義祖父に見つかからない為の隠れ家でもあったのだが、いつの間にか4人で暮らすための拠点となつてゆく。ダダンの家から不確かな物の終着駅グレイターミナルへ向かうよりも、秘密基地からの方が断然早い近道を発掘出来たからだ。

食事や風呂は変わらずダダンの家で取っていたが、寝るときは拠点へと戻る。

バラバラに暮らしていた頃より、一緒である方がなにかと都合もよかつた。

鉄砲玉ふたりに、抑止力ふたり、とバランスが整つたからだ。

端町で喧嘩となれば真つ先に狙われるルフイが殴られると、エースがプチ切れて暴れまわるのをサボと二人で止めたり、賑やかしくなつたダダン宅での食卓で成長期の3人が大人顔負けの食欲を見せたり、今まで倒せなかつた森の主でもある熊やトラと引き分けるまでになつていた。

主との対決は、船長宣言をしている3名の内、勝つた者が残りのふたりを従えるという約束がアンの知らないうちに交わされていたと言つ経緯がある。それぞれのテリトリーを持つ主達は、アンという存在に限ればなぜか大人しくつき従う。上位として見ている訳では無いようだが、自然の一部として認識はしているようだった。そこにあるのが当然である存在に、わざわざ牙を向ける必要があるのか、と言つたところなのだろう。

「あなた達の領域を犯すつもりではないの。ただ少しだけ、私の兄弟達に付き合つてあげて」

来る日も来る日も繰り返していた主との対決が、兄弟達の力を底上げし凶暴さに磨きをかけてしまったのだが、それは仕方無いとア

ンは諦める事にした。

楽しく幸せな時間は駆け足で過ぎてゆく。

「マキノー！！ 村長！！」

その日は絶対に昼を越えた辺りでダダンの家に帰って来る事をア
ンに約束させられていた兄弟達を含む一家は、山道を上がって来る
3つの姿に声をあげた。

もちろんダダンもマキノ手製の酒が届き、狂喜乱舞している。
樽を運んできたのはアンだった。

「ったく、おれに頼れよな」

「吃驚させたかったんだもん。エースに隠すの凄く大変だった」
マキノが持参したのは酒だけでは無い。兄弟達の服もあった。

「あなたがサボ君ね。初めまして、会えて嬉しいわ」

今日は宴会だーと騒ぐダダン一味達の横で、村長から小言を貰っ
ているルフィのまじめな顔が、なぜか笑いをそそる。

「アンがせっせと生地を集めてたのはこれだったんだな」

「うん、みんなも服きつそうだったし。わたしもお年頃だもん」
サボが笑う。アンも笑み自然に口元に浮かんだ。

「ずっと続けばいいよな」

サボの言葉に、アンは頷く。

「でさ、船を作って貰う順番は総当たりがいいんじゃないかと考
えてるんだ」

「それだとルフィが一番最後だね」

今日もひとり辺り33戦プラス1は全てルフィに黒丸が付いてい
た。

夢は続いている。

今度も悪夢は夢のままにしておけるだろうか、とアンはひとり暮れなずむ紅の空を見上げた。

06 - 絆（後書き）

おまけ

10歳なのにお酒飲んで大丈夫なの、君達！？
その後、の事をちよつと考えたらこうなりました。

口に含んだ瞬間、味よりもまず苦さが舌全体を襲った。かつて嗅いだ事のある香りだ、毒では無い。
ごくろり。

アンはかつて薬を飲み干す時に使っていた必殺、鼻をつまんでごくろん戦法を使って何とか呑み込んだ。
ひとくち、されどひとくち。

ゼミの帰りに多少は嗜む事はあったが、この体で口にするのは初めてだ。

「あーん、えーしゅー、さぼー、おれくるくるまわる、すげエぞ
おー」

「なんかぼーってなるな」
「もういっぱいいつとくか？」

「ちよつとストップ！未成年の飲酒は禁止されて…ない…かわかんないけどそれ以上飲んじやだめえええ」

瓶のラベルに書かれた文字は。

『Brandy』

飲むときはちゃんと確認すればよかった…

千鳥足になりながらも瓶を狙うサボの魔の手から身をよじらせ回避したアンはそんな事を思い、倒れた。

一話を使う量が無いので此方へ。

風邪のぶり返しが危険です。皆さまもご自愛ください。
いやほんとに、薬がきつくなると大変なんです…

07 - 焰群の山（1）

視野が真っ赤に染まっていた。

炎が幾つもの柱を上げている。途切れることのない悲鳴、逃げ惑う人の影が揺れ動く焰の中に映っている。

エース！サボ！ルフィ！

名前を呼んでも炎が立てる轟音に邪魔されて届かない。

立ち尽くしている場所は見たことのない景色のように思える。

だがそこは、小さな頃から何度も足を運び、幾人もの友達を得た不確かな物の終着駅^{グレイターミナル}だ。

分かっていた。

これが夢だ、と。

熱くも無ければ苦しくも無い。

けれど涙がこぼれていた。人が息絶えてゆく。

この炎が上がる原因が何であるのか、分からない。止められない。嗚咽が漏れる。

何とか出来る術が欲しい。

SIDE エース

静かな夜だった。フクロウの鳴き声も聞こえない。

アンがまた唸されている。夢を見てるんだろう。

おれたちがもっとガキだった頃、その夢を共有したことがある。繰り返しみる夢は最初、陽炎みたいにはつきりしない。けど日を重ねるにつれ、次第に鮮明になってく。

丁度おれ達が海賊貯金を始めた頃に、悲鳴が聞こえるって言い出した事があったんだ。そんな時はおれも引きずられて何度か見た事もある。血の匂いがする焦土に、ひとりの、今のおれ達くらいのヤツ

がこつちを見ていやがった。顔も覚えている。そいつはおれをみて言った。『罪を背負った忌まわしきは…さつさと死ね』

アンは今、炎に苦しんでいる。

額に触る。熱い。

こりやダダンの所に連れてった方がいいな。

何日か前から調子が悪そうだった。

いつもなら躓いたりしねえ場所で転がったり、食も進まずすぐに横になりたがってたんだ。

おれ達でフオローに回ったけどどうも動きがおかしい。昨日の朝の段階で発熱してたから、一日安静にするよう、念押しして出かけた。動いてないと口で言っても、おれたちは繋がっている。観念して寝てみたいなんだけどな。盗んできた薬も効いてないみたいだし。どうする。

「エース…」

「ん。水飲むか」

いらない。そう小さく答えて、伸ばした手が掴んだのはおれの腕だった。そのまま自分の頬へと持つて行く。

「手が冷たくて気持ちいい…」

いつもはおれのほうが体温高いのにな。

狭いながらに我が家となったこの場所は、安心して眠れる。

ルフィもサボも大の字になって寝ていた。

木の上に作ったのはなんとなくだ。下に作るよりカッコイイって理由だったかな。

設計から組み上げまでほとんどサボが作った。ダダンの家と比べたら小さいけどさ、おれたちにとってここは大切なアジトだった。

体を丸めて眠りに落ちるアンの髪に触れる。

柔らかい。

この熱は、炎だ。夢がアンを遊ぶ。
海へ出たいとこんなにも思うおれにアンは、”お父さんみたい。
梓には嵌らない。嵌められない。エースは自在に形を変える炎ね”
と、言ったことがある。

おれは覚えてねエけど、母さんのこともアンは覚えていた。

おれなら半身をこんな目にあわせたりしねエのに。

翌日おれはアンをダダン達に任せ、一足遅れて”不確かな物の終^{グレ}
着^{イターミナル}駅”へと向かった。アンと練習した剃^{ソル}つていうジジイが使つてい
た技は習得済みだ。多少距離が開いても追いつける。

ついでに一通りは、ジジイから仕込まれていた。

「これで二人も海軍一直線じゃな！」

って言つてたけど、そうそう簡単になつてたまるかつての。

でもなア、アンは覚えてるんだろうか。

あいつ脇くすぐられて、うんって言つてた気がするんだよ。条件
が条件だし、ジジイも仕事で忙しそうだからな。来るとは思えない
けど。

「サボ！ルフィ！」

「来たな、エース」

合流したおれ達は一気に山を下る。

待ち構えられていた。

おかしいと思つてたんだ。ここ数日、ブルージャムの手下がおれ
達の姿を見ても追いかけて来なかった。どの道を通るのか、どこへ
向かうのか、見張つてやがつたんだ。

「サボを返せよ！！！！ブルージャム！！！！」
ルフィが叫ぶ。

おれ達は捕まっていた。腕を掴まれていて身動きできねエ。

サボはもう、軍隊の方へ引き渡されちまつてる。

「返せ」とは意味の分からない事を。サボは家の子だ。子供が産んで貰った親のいいなりに生きるのは当然の義務なのだよ。学の無い小童どもに言った所で通じる訳もないか」

見下げる目には蔑みがある。おれが一番嫌いなやつらが持つてる目だ。

見たことがある顔だった。そう、以前サボを呼びとめたやつだ。

「ゴミクス共め…家の財産でも狙ったのか。息子をそそのかし、家出を強要して」

違う。おれは否定する。

だがサボの親がその口からこぼす言葉は、反吐が出るくらい気持ち悪いものばかりだ。いい加減おれも力チン、とくる。

言わせておけばいい気になりやがって。誰がそそのかすかよ。

サボは自分の意思でお前の元から去ったんだ。いいなりだと…子供はお前らの人形じゃねエんだ。勝手に未来を決めんなよ！

ブルージャム一味のひとりが拳を振る。けど遅い。子供だと舐めてかかると怪我するぞ。

おれは振りおろしてくる拳を受けず外側ではなく内側へ滑り込み、屈伸し力を溜めた拳を腹にめり込ませる。

「ぐはっ」

手を出してきた男があおむけに転がった。

だが多勢に無勢で、おれはブルージャム率いる男達に捕らえられてしまう。

がらくたが地面を成すそこに体を押しつけられ、頭蓋骨を踏まれる。

「くそっ、どけやがれ！」

必死にもがくけど、動かねエ。っていうか蹴るな！

「コラ海賊！！子供に手を出す際は気を付けたまえ！！」

サボの親は飛び散った泥を払い、汚らしい、消毒せねば、と心

底嫌そうな感情を顔に表した。

「やめてくれよ！！ … おれはそそのかされてなんかいなく」

心からの叫びは途中で止まる。

父親が手でサボを殴ったのだ。

「うるさいぞ、いつからお前は口答えする子になってしまったんだ。全ては奴らのせいだな、可哀そうに。さあ家に帰ろう。そしていい子に戻るんだ」

ブルージャム一味から、町へ続く門を警備する黒ずくめへサボの身が渡される。

「後は頼んだぞ、海賊ども」

「無論だ、ダンナ。もう代金は貰ってるんでね。このふたりが二度と坊ちゃんに近づけねえよう、始末しときます」

愛想いいブルージャムの声が気持ち悪い。サボはその声の裏側にある真意に気付いてしまった。…言うな、おれ達ならどうにでもなる。だからサボ、言うなよ。

だけどその願いは聞き届けられなかった。

「…何でも言うこと聞く、言われたとおりに生きる…だからこの二人を傷つけないでください。大事な兄弟なんです。お願いします」
ルフィがサボの名を呼ぶ。振り切れと、叫んだ。

「おれ達なら大丈夫だ、一緒に自由になるんだろ！！？」

シルクハットで顔を隠し、サボは歯を食いしばっている。なんだよ、これは。こんな別れはねえだろうが。

「サボ！」

名前を呼んでもサボは振りかえらなかった。

おれはそのまま、町の中に消えて行く背を見てる事しか出来ない。

残されたおれ達はブルージャムの一味に連れられ、やつらのアジトへやって来ていた。暴れるルフィを取り押さえられ、おれも踏みつけられて逃げようにも逃げられなかったのもある。

「くつろげって言うのは無理だろうからな。その場でいい」

ブルージャムはどかりとソファーに腰を下ろす。

入り江の横に作られた船長専用の建物だった。さすがに以前殴りこんだ所とは広さも、中に詰める護衛の人数も違う。

「まったくわからねエもんだな。評判の悪ガキのひとりとは貴族様だったってわけだ。わざわざ”高町”からごみ山をバカにする為にやって来るとは…おめエらも内心見下されてたんだろうな」

「バカ言え！！ サボはそんなヤツじゃねエ！！」

「そうだ！！おれ達は兄弟なんだぞ！！」

酒瓶を持ったブルージャムが口端を上げる。

「貴族に生まれるなんてことはな、頑張って出来るような事じゃねエ。幸運の星の元に生まれるってこった」

出来るモンなら変わって貰いてエよ…

心底羨ましいのだろう。サボの気持ちも知らず、貴族に生まれたかったと言った。

「おめエら、奴にはもう近づくなよ」

そうしなけりや今ここでお前らを殺しとかなきゃならねエ。兄弟を想うならあいつの事は忘れてやりな。それが優しさってもんだ。大人になりやわかる。

ブルージャムはゆっくりとまるで子供に言い聞かせる親みたいに言い聞かせてくる。

ポルシェーミの一件での因縁もあるが、アレはもういい。むしろ強エ奴は好きだ。歳は関係ねエ、と。

「ところでよ、今人手が欲しいんだ。駄賃も出す。なあに、簡単な仕事だ。手伝わねエか？」

何を？

おれは尋ねる。

「さあな、お国のするこった。俺達もこの地図の通り、旗の着いた木箱を置けって聞いているだけなんぞな」

ブルージャムが手を放した紙が床に落ちた。

こういう時サボやアンならどうするだろう。ルフィはおれを見ていた。

…手伝った方が身のため、か。眼前のブルージャムの後方に立つ男達が刀に手を当てている。後ろからも低い笑い声が聞こえてきていた。

「わかった」

おれは頷く。サボも今日の明日なんかには動かないだろう。

折りを見て、助けに行く。あの壁の向こうに迎えに行つてやる。はつきりあいつの口から、戻ると聞くまで、おれは絶対に諦めねエ。

SIDE サボ

火の手が上がる。聞いて愕然とした。

この国の汚点を全部燃やす。そう養子のステリーは言つたんだ。山と積まれたゴミだけじゃない。人も、全部まとめて、燃やす、という。

吐き気がした。

その汚点を作りだしたのはこの石壁の内側全なのに、ごみ山に住む人間にしわ寄せを全て背負わせるつもりでいる。

「くそ、これをなんとかしてあいつらに知らせなきゃ…アンが言つてたのはこれだったんだ」

何力月も前から決まっていた。時間をさかのぼれば、夢を見始めた時期と符合する。

世界政府の『視察団』が東の海を巡っているという。その一団が3日後、この国に到着する。

以前に読んだ新聞にも確かそう書かれていた。

今回は世界中で最も安全な海と云われている東の海域へ”天竜人”

がやってくる、と。

王侯貴族は特に今回の来国を待ちわびていた。
そりゃそうだろう。

ゴアって言うこの国は、天竜人に憧れるが故に全てを模してんだから。世界がひれ伏す権力を持つてるやつらに気に入られたら、この国の注目度も上がる。数年に一度各国の王達が集まって会議がされるらしいけどさ、そこでの発言力も大きくなるらしいんだ。

権力の頂きは赤い土の大陸レッドラインにある聖地マリージョアだ。ごく一部の血筋が、大昔に世界政府を作ったという理由だけでずっと君臨している。

疑問に思った事は無かった。世界が広すぎて、分かりづらかったっていうのもある。

首を傾げたのはアンだった。

なぜ、と当たり前のことでも疑問をぶつてくる。そして分かるまで、自分が納得出来る答えにつきあたるまで調べていた。

フーシャ村のルフイの家には、本が溢れてるんだ。村長から借りるだけじゃ足りなくなったとかで、町の本屋に通っていたくらいだ。手に入れられる種類は値段の関係もあったけど、ふたりでよく議論もした。

世界の縮図。

そう言ってしまったって、この国はおかしくない。

壁の内側に暮らす人々は、不必要である、と判断したモノをすべて廃棄する。こちらとあちら、線を引き差別した。しもじみん

世界で最大権力を持つ天竜人もおれ達の事を下々民と差別し、区別した人間を奴隷にするという。この国では奴隷制度が認められてないから、ごみ山の人間を嘲り侮蔑する。自尊心を満足させるために誰かを貶めることさえ厭わなかった。

いつだったか、こういう話をしたことがある。

「サボは国って何だと思う？」

「え……」

泳ぎ疲れて岸边に上がり、火にあたっていたおれにアンは尋ねた。突然問われて、考える。

「生まれた場所、人が集まる場所、貴族が大きな顔をして……」
思いつく言葉を並べてみる。

「うん、国は人が集って形成される。リーダーを決めて纏まりが出来たらそれが基礎。力を持つものが持たざる者の上に立つのは自然なこと。誰だって率先して引張ってくれる人が欲しいと願うから。指導者になるのは持つ者の責任でもある。けれど、支配者が支配者でいられるのは人々がいるからだ、そういう事に……」

貴族の人達が早く気付けなければいいのだけれど。この国が、本当に終わってしまう前に。

まだ貴族の生まれだって話す前のことだ。
知ってたんだろうな。エースやルフイみたいに驚いてもなかったし。

おれに貴族の中に戻らざるを得なくなっても、頑張れば中から変えて行くことも出来るんじゃないかって教えてくれたんじゃないかって思う。

けど、アン、もう駄目なんだ。

ステリーもおれの事をゴミ人とか臭エとか、抵抗も無くさらつと使ってる所を見ると既に貴族っていう毒に侵されてる。

しかも今の生活が永遠に、ずっと永続的に続くと信じて疑っちゃいない。

イーストブルー

東の海が比較的安全だと言っても、いつ均衡が崩れるか分からないのにな。

窓の向こう側じゃ軍隊の奴らがブルージャムを使って、油と爆薬

を配置している最中だと言う話をしている。

どうなってるんだ、この町も。人も。嫌な気持ちにしかならねエ。木と壁をよじ登り部屋に戻って一夜を明かしても、高町は静かだった。ただ風が強い。火が放たれたら全てが燃えきるまで止まらないただろう。

家庭教師が休憩に入ったところで、おれは家を抜け出す。そして高町を歩く何人かに声をかけてみた。

「そんな事はみな知っているが、それがどうしたのかね？」

「可燃ごみの日でしたわね。しっかりと窓を閉めて用心しませんと。ゴミが部屋の中に入って来てしまいますもの。汚らしい…思い出させて下さってありがとう」

「それは皆が黙認すべき事だ。もし高町以外の誰かに漏れたらどうするのかね。我々は特別なのだ。君も貴族の子なら自覚を持ちなさい」

知っていた!!!

誰も彼もが知っていた。

この町はイカレてる!!! これから大勢の人が死ぬと分かっているのに、何事も無く飯を食い、勉強しろという。

すぐそこで火事が起こされるんだ。

それなのにどこか遠い世界の出来事のように語る。

何が美しい国、だ。

上手く隠しているだけじゃないか。

綺麗な物だけを集め、雅やかな物だけを留め、少しでも傷つき壊れたら新しいものと取り変える。

貴族だってそうだ。王族に見向きされなくなったら没落する。だからすり寄ってるんだろ！

王国の中心に近づけば近づくほど、思考や言葉が顕著になる。おれはもう、ここじゃ生きていけない。生きていたくない。

「家出少年を見つけたぞ！あそこだ！」

エース…ルフィ…アン…

お前達だけでもごみ山から逃げろ。

この国の人間は今夜、”汚点”という名の大虐殺を、焼き捨てる気なんだ。

07・焰群の山（1）（後書き）

07 - 08と前後編です。

久々の夜更かしです。

明日の朝、起きれるか心配です。

ゴア王国って需要が高い国だと思うのですよね。ごみ山が無くなった状態を見て、物捨てすぎ！と思ったのは私だけでは無いはず…あとどこら辺まで機械類を出していいのかを悩んでいます。

デジタルカメラがあるなら、絶対にエンジンもあるだろう！

外燃だけじゃなくて、内燃もあるんじゃない？って思ったんですよ。

異端知識としての区切りがどこらへんにあるのか、見当もつきません！

08 - 焰群の山(2)

北の空が赤く染まっていた。暗闇の中に見える粉じんは大量の黒い煙を空に舞い上がらせ、東へと流れてゆく。

「お頭、町じゃねえ。」不確かな物の終着駅^{グレイターミナル}が燃えている！

隠すことなく舌打ちをしたダダンは厳しい表情のまま煙草に火を付けた。

「お前ら、ガキどものねぐらは知ってるね」

見て来いという指示を受けた一味のひとりが駆け出す。

「…おばさん、家には誰もいない。ふたりは…炎の中に、いる」
駆け出していた男がつんのめり転がった。

なぜそんな所にふたりが居るのかアンには分からない。分からないが、伸ばした意識の先は確かにごみ山だった。しかもブルージヤムまで近くに感じる。サボが居ない理由を探して視線を彷徨わせる。

熱で朦朧とした意識が語りかけを邪魔をしていた。エースの様子が、視えない。

「アン、おめエは寝てなきゃだめだ」

マグラが浅い息を繰り返しながら、外へ出てきたアンを抱きあげる。

「行かせ…て」

だめだ。ダダンはアンにぴしやりと否定する。可愛くないクソガキだとしても、弱っている状態で放りだすのはばつが悪かった。

「寝てな、いつもは簡単にすり抜けるマグラからも逃げられねえんだ。あたし達が探しに行く。何人か残って、アンを見張ってるんだ。残りは行くぞ、ついてこい！」

寢床へ連れて行かれたアンは、額に冷たいタオルを乗せられる。

熱は身を焼くように、じりじりとこがしている。

待って、私も連れて行つて。

声は届かない。

たくさんの悲鳴が聞こえる。友達や、顔見知りになった人、横切った事があるだけの人。

そのすべてから叫びがあがっていた。

町からは動揺と、不安、嘲笑、そして安堵と興奮が伝わって来る。その中でひととき大きな声があった。

サボ、だ。

兄弟の身を案じ、逃げると叫んでいる。

大門の前では軍隊が炎を逃れて町へ入ろうとする命を狩り取っていた。

誰が一番多く射落とせるかのゲームが行われている。

サボのそばに、感じたことのある気配がひとつあった。

義祖父やルフィによく似ている。

芯の通ったまっすぐな想いは、触れていても嫌な気はしない。

朦朧とした意識の中、浮遊感に任せて一気に不確かな物の終着駅グレイターミナルまで至る。

ひととき大きな絶望と怒りを発しているのはブルージャムだ。

体よく切り捨てられたのだと知るまでにそう時間はかからない。

黒幕は単体では無いだろう。規模が大きすぎる。となれば王か。

違う。高町全体、だ。最終的な指示を出したのは王だが、以前からごみ山を処分する進言が行われていたようだった。使われたのはハイエナのように足元をうろつく海賊だった。

燃やす見返りに貴族にでも召し上げると言う餌でもぶら下げられたのだろう。

歴史を紐解いてみても上流社会と言われる場所では表立っての抗争はない。覇権争いは水面下でじわじわと行われるのが定石だ。決して表沙汰にはならないよう真綿で首を締めあげるがごとく、ゆつくりと策謀を達成させる。誰もが気付かない間に、蜘蛛の糸に絡めとって突き落とすのだ。そもそも血統を重んじるゴアの貴族社会に下賤な血を混ぜるわけではない。

貴族という煌びやかな生活美や権力、ブルージャンはその表側の姿だけを羨み欲した。足元を掬われているなど、思いもつかなかっただろう。

アンは不思議と笑んでいた。

あちら側でむさぼるように本を読み、得ていた情報が、よもやこんな所で役に立つとは思いもしなかったからだ。

それよりも気になることがあった。エースとルフィが動いていないのだ。火事で周りが火の海であるとはいえ、足がすくむ二人では無い。

内側では無く、肌を焼く痛みを感じた。捕まっているのだ。何かに捕らわれている。

こんなところで寝ている訳にはいかなかった。

「アン、お頭の言う事を聞け。お前が行っても足手まといだ」

いつもなら振り払える手も、今は全く敵わない。

涙がこぼれる。

無力だ。

大切な人を助けにすらいけない。

力が欲しかった。

誰かを打ちのめす力ではなく、守るために力が欲しいと強く願う。あちらでも願った。

両親を返してください、と。私の大切な家族を奪わないで。

けれどその願いは叶えられなかった。どんなに泣いても、この命と交換しても構わないとすら叫んだとしても死んだ者は戻ってこないのだ。神や悪魔に願ったところで、差し伸べられる手や囁きは無い。

誰もいない空間にたったひとり残される虚しさはいつまで経っても心を苛む。

もう二度と失いたくなかった。

大切な存在を。

死んでも助ける。

アンは自分のために残ってくれたふたりに、ごめんなさい、と伝え姿を消す。

炎は森にも迫っていた。

火の子に揺れる木々の葉が、熱にあぶられ茶色く変色し始めている。

エースの元に飛んだはずが、全く飛距離が足りず途中で落ちてしまったようだった。幹に寄りかかり呼吸を整える。カラカラと乾いた喉が痛かった。内外からの熱さで焼けそうだと思いながら、夕焼け空のよりも赤い揺れ動く炎の生まれる場所に目を凝らす。

きつと火の中に居るエースとルフィはもつと熱い。弱音を吐きそうになる唇を嚙み、力を解放した。跳べる。跳んでみせる。そう自分に言い聞かせ、アンは空間を結ぶ。

2回目の移動は炎の中だった。ふたりはここでも無い。もう少し入り江の方になったかと、膝をついた体を持ち上げる。門の近くに來すぎていた。思い通りに点と点を結べない。

耳に届く音以上の声が響いては去ってゆく。音がさざ波のように引いては押し寄せてきていた。

「アンちゃん」

小さな声が自分の名を呼ぶ。

「どうして、こんなところに…いつもは森の方に夜は！」

呂律がまわらない唇で言葉を放てば、びくりと幼子達が身を縮める。

「パンをくれるって。いつも叩いてくる人達が居なくて…ほどこしだから食べていいって言うから…」

幼子達が咳を繰り返しながら、アンへとしがみついてくる。ここに住まう子供たちの多くは捨てられた者たちばかりだ。サボのように自ら家を出、不確かな物の終着駅へとやってくる方が希少だと言えるだろう。町に暮らす、端町という国からすれば汚点ともいえる貧しい人々が暮らす貧民街ですら、出来れば切り捨てたいと願っている貴族達である。仕方が無いから、底辺の仕事でも良ければさせてやると、哀れみと蔑みという名の慈愛で囲ってやっている、そういう意識なのだ。

血の気がさつと引いた。

王は自らが生み出した負の遺産であるこのごみ山だけでは飽き足らず、そこに住まうしか生きてゆけない人々まで、そこまでして確実に人を焼き殺したいのか。

アンは炎の向こう側に見える王宮を見上げる。

「そこまで人の命を軽薄するか！心乏しい者たちが！」

叫びと共に周囲の炎が円形に掻き消え、黒く焦げたゴミからは白い煙が上がった。

炎から身を守る場所を見つけた人々がどんどん集まって来る。腹が煮えくり返っていた。

人の命など顧みられてはいない。分かっていた。理解もしている。限られた特権の人々のみが幸せを謳歌出来る世界だと言う事も、分かっていた。

貧困も良しとしよう、差別されたって構わない。

不平不満を胸に押し込めながらも、この場で生活している人々はただ生きていたいのだ。

「なぜそれだけの事が、許されない！」

風が生まれる。

大きな渦だ。ゴミを吹き飛ばし、えぐり取り路が出来る。

「アンちゃん、船だよ！」

幼子達が指す指先の向こうに、巨大なマストが見える。

「ガレオン船……」

なぜそんなものがこのごみ山に停泊しているのかを考えている暇などない。

死に直面して嘆いていた人々が一斉に動き出す。アンも3人の幼子達の手を引いて船を目指した。

黒い船にはドラゴンの意匠が施されている。

「自由の為共に闘う意思のある者は！ この船に乗れ！！」

呼びかけに応え下ろされていた縄梯子を伝って、人々は船へと登ってゆく。

自由。それは魅惑の言葉だろう。

今まで抑圧されて生きて来たごみ山の人々にとってもみれば、初めて手にするものだ。

「自由ってなあに？」

「もう誰からも叩かれたり、奪われたりしない事。やりたい事を言葉にして出来る事」

幼子達はアンの言葉にきょとんとしている。意味が分からないのだろう。

「もう少し大きくなったら分かるようになるわ」

「アンみたいに本も読めるようになるのか？」

「ええ。いろいろな事も学べる。もう恐れなくていいの」

列はだんだんと長くなる。

下に降りて来たのは船員だろうか。誘導により喧嘩などは起きていないようだったが、ひしめき合う人々の姿があった。

アンは背にひとり、片手にひとりづつ抱え、空を蹴る。

ふわりと体が持ちあがり、子供たちが声を上げる。炎の中とはいえ、広がる景色に瞳を輝かせていた。空を飛ぶなど、一生に一度あるかどうかだ。

船を見下ろせる高さからゆっくりと船頭へと降りる。

そこにはフードを被った、気になる人物がいたからだ。

「こんばんは。あなたがこの船の船長さんですね」

男の眼光がアンを見定める。

「…炎を払ったのは君か」

男がゆっくりと言葉する。周りに控えた人物達は動かない。

「この子たちを宜しくお願いします」

「…ヴァナタは一緒に来ないの」

大きな顔の人だなあ…

見たままの感想をそのまま思う。

「今ヴァターシの顔が大きいって思っチャブルね!？」

「あーうー、えと。はい」

「考えたんかい!!」

どこかしらから聞こえてくる突っ込みは無視して幾分か視線を和らげた男にはほ笑む。

「ドラゴン。貴方とはきつとまたどこかでお会い出来るでしょう」

ああ、なるほど、と確認した。大切な弟へ血を繋いだ人なのだ。そりゃ触れても嫌な気などするわけがない。意思の強い目は義祖父やルフィと同じだ。どこまでも先を見つめている。

だけれど自分とは混ざらないものだとも感じていた。

革命は劇薬だ。どうやっても必ず血は流れる。

だからこそかつてアンが意識を持っていた場所で、過去起こったとされる無血で行われた名誉革命が、背景がどうであれ尊いと言われる所以だった。

ドラゴンの目尻が和らぐ。瞬間、アンは姿を消した。

「瞬間移動!？」

誰かが消えた少女を見て口にする。

「逃した魚は大きいかもしれないツティブルわよ」

男は何も語らない。しかし静かに笑みを浮かべていた。

SIDE エース

サボは分かってくれる。今はルフィと、そしておれの命を優先しても、サボは笑って許してくれるだろう。

長い時間をかけて貯めた金だ。でもそれは元は誰かの物であって、おれ達自身が得ていた金じゃない。

泡のようなもんだ。

「宝の場所は教える。山のふもとにある木の洞だ。よく見れば幹に登った跡を見つけられる」

「いい子たちだ。じゃあそこまで一緒にいて来て貰おうか」

嘘という可能性もあるからなあ。

ブルージャムの目が爛々としていた。いつちまってる。

「フザけんな!! そんなことやってるうちに逃げ場がなくなる

!! お前らだけで勝手に行けよ!!」

「ガキの分際で…俺をこれ以上怒らせるなよ」

かちやりと撃鉄^{ハンマー}が鳴る。

奴は本気だ。

「ガキの集めた財宝を頼りにしてでも…俺は再び咲いて、貴族どもに復讐すると誓ったんだ！！！」

ブルージャムの目からドス黒い感情が噴出していた。くそ、こいつらおれ達を放しやがらねエ。

「おめエらの兄弟もそうだろ。あいつらは己を特別な存在だと思つてやがる。その他の人間は全部ゴミだ！！！」

「違う！！サボはそんな安っぽくねエ！！！」

「いいや、違わんさ。お前らも大変だったな。貴族の坊ちゃんがわざわざこんな場所まで来てつるむ理由なんざ知れてるだろうが。お前らは優越感に浸るためだけに利用されてたんだよ！！！親が大金持ちのあいつになんの心配がある？全てが保障されてるあいつになんの危機感があるってんだ！！ 貴族の道楽に付き合わされたのさ。腹の中じゃお前らを見下して、鼻をつまんで笑ってたのさ！！！」

「それ以上…サボを悪く言つなよ」

腹の底から吐き出す言葉は自分に言い聞かす言葉でもあるそうだ。ブルージャムはおれ達を罵る為^のに言ったんじゃない。正直力チンときていた。兄弟を馬鹿にされて、黙つてられねエ。けど、この喧嘩は買つべきじゃない。

「おれ達を放せ」

「そうだ！！ サボはただ自由になりてエだけだ！！ 放せ！！」

ルフィが自分を捕まえている一味の腕にかみつく。固い肉でも噛み切る頑丈な歯だ。噛まれた男が悲鳴を上げ、背の刀を抜く。抜きざまに鉄パイプを切り裂き、ルフィへ振りきる。

血が吹き出た。

「ルフィ！！！」

男がとどめを刺そうと地面に落ちたルフィの腹へ向かい剣をたてる！！

「ルフィに手を出すなア~~~~~!!!!!!」

ドクン、とおれの中が波打つ。何かが噴き出す感覚に一瞬あつけにとられる。

くそっ、んだよこれ。

周りのやつら全員泡吹いて倒れやがった。

ブルージャンを除く8人がその場に横たわる。

「何をしやがった!!!! 胡散臭エガキめ!!!!」

おれの腹に奴からの足蹴りが入る。咄嗟のことで避けられなかった。

いつてええ。しかも踏むな!!

「殺してやる。全員、俺以外の全てを殺しつくしてやる!!!!」

「エース!! やめるオ~~~~!!!!!!」

引き金が引かれる。死を覚悟した。

「やめねエか海坊主!! エースを放しなア~~~~!!!!!!」

ブルージャンは炎の中から飛び出す斧に、左手で引き抜いたサベルで止める。そして間合いを取るように、後方へ飛び退いた。

「ダダン……!!!!!!」

ルフィの声に顔を上げる。目の前に一味が勢ぞろいしている。

「やっといた!!」

マグラがそう言っつて事は、まさかおれ達を探していたのか。

「サボの奴がいニーが?!」

「サボは無事だ。ここにはいねエ」

だらだらと血を流すルフィにドグラが駆け寄っていた。

「てめエ……コルボ山のボス猿だな……」

「山賊ダダンだ!! 何の因果かこのガキ共の仮親登録されててね」

大分短くなった煙草を吐き捨てると、くるりと身を翻し、叫ぶ。

「逃げるぞ！！！」

「ハイ、お頭！！！」

「エースも急げ」

マグラがおれに声をかけてくる。おれは動けない。ブルージラムの目が言ってるやがる。殺しつくしてやる、ってな。

「おれは、逃げない！！！！」

ダダンが足を止めてエースを見る。

「そいつはヤミとけ！！！！　ブルージラムのヤバさはハッキリじやニーぞ！！！！」

子供が粹がつていいレベルじゃねエ？そんなこと端から分かってんだよ！！

「お…おれも！！！！」

「ダメだ！！　ルフィ、お前出血してるだろう！！　早く止めねエと！！」

ブルージラムが一步前に進む。

ダダンが盛大に舌打ちを響かせた。

「エースはあたしが責任を持って連れて帰る」
行け！！

その声に一齐に駆け出す。

「ダダン、アンはどうした」

炎がちりちりと肌を焼く。目が離せねえ。視線が外れたら奴は動く。

「家で転がしてある」

…あいつがじっとしてるわけないだろ。やっぱりさっき感じたのはアンだな。熱出てるのに何しに来てるんだよ。

「女に…子供…少し腕に覚えがあるくらいで過信すると血イ見るぞ」

戦場で生き残るのは『強者』と『臆病者』だけだ。『勇者』は死

ぬと相場が決まってる。

ブルージャムが気持ち悪い顔して饒舌に語った。いつでもかかってこいという余裕の表れってやつか。

「タバコ切れか。と落ちつかねエな」

面倒臭そうな物言いに隠れて、さっさと終わらせるぞ、と暗にダンは含ませる。

「言ってる…すぐに終わらせてやる」

09 - 選択

さざなみが打ち付けては引いてゆく。潮の満ち引きが終わらない、自然の営みを象徴するかのようにつづく波打ち際に、アンは居た。空には今にも落ちて来そうな程の星が瞬いている。手を伸ばせば掴む事が出来そうだった。

手紙をくしやりと握りしめる。

目を通したそこにはサボらしい几帳面な文字が綴られていた。「広くて自由な海には、いろんな不思議が眠ってるんだ。たとえばこのドーン島、ゴアの国は元々、移民なんだ。知ってるか？」いつも横を向けば、暴れまわるエースとルフィを見守るように、横に立つ姿があった。

すぐに何かへ飛びつくふたりに次いで、ポジションはいつも3番手か4番手。

ふたりが喧嘩をし始めた時はじゃんけんでどちらを止めに行くか決めたり、木を削り弓矢を作って狩を楽しむ工夫をしていたり…考えより体が先に動く暴走ペアを、サポートし合っていた。

いろいろな話もした。

たくさん本を読み、語り合った。

世界の景色を、埋もれたお伽話を見に行くと楽しげに笑っていた顔が思い浮かぶ。

けれど、サボはここにはもう、居ない。

ドグラから話を聞いた時は、嘘だと一蹴した。

サボがそんな危ない橋を渡るわけが無い、制止を振り切ってアンは町に飛んだ。

しかしドグラが言っていた事は本当だった。この国を訪れた、世界貴族が乗る船を横切った小舟を天竜人直々に手を下したのだ、と砲により炎が上がり、沈没した船は世界貴族が到着すると、すっかりと忘れられてしまったらしい。

だれも助けには行かなかったのだ。

世界の中心に有られる、やんごとなき存在を手厚く迎える方が、国王を初め王侯貴族だけでは無く民衆までもが優先した。

仕方が無い。

アンは諦められなかった。もしそれが自分の身に起こっていたならば、仕方が無いと諦めていただろう。ただアンがそうやって受諾したとしても、エースやサボ、ルフィはアンのように動いたと断言できる。友達として、兄弟としての絆は時間では無い。どれだけ心を通じ合わせる事が出来たか、なのだ。

目撃情報を集めて回った。

子供がひとり乗っていたのは確かだが、船の残骸を引き上げた時には姿が無かったという。沖に出る海王類にでも食べられたのだろうと語った人は苦い顔をしていた。

その日、アンはどうやって戻ってきたのかは覚えていない。ダダンの家に帰り着いた頃にはどっぷりと日が暮れていた。

エースは一晩木に縛り付けられ、翌日この海岸で声を上げて泣いた。

ルフィは悲しみを隠すことなく感情のまま泣き、まだ眠っている。

そしてアンはひとり、闇の中を見据えていた。

サボの夢など片鱗もなかった。

余計な情報ばかり押し詰めて来て、肝心な、兄弟の事が解らないなどあり得ない。

アンはただの受信機なのだ。伝聞は選べない。世界が放つ、刻まれた時間を全て把握するなど、出来はしないのだ。という事を今更

ながらに痛感する。

何かある時は夢が教えてくれると過信していた。

火事の件も、シャンクスの件も、近い身の回りの出来事が記憶に残るほど夢に出続けたからだ。

サボは高町に捕らわれていた。兄弟を心配し端町まで抜けだし、逃げると叫ぶサボをなぜ最初に迎えに行かなかったのか、後悔が心を苛む。

貴族を嫌っていたサボが、陰謀渦巻く階級社会の中で自分を変えてまで生きてゆくなど考えられない。

エースの怒りも、ルフィの涙も、ダダンの制止も。それぞれがサボを思い行動していたのに。

わたしは身動き出来なかった。

悲しいのに涙も流れない。

硝子の破片が刺さったように痛いのに、心は寒々としている。

手を伸ばした先に水面があるならば、姿を映した向こう側に居るわたしはきつと笑んでいるだろう。

この気持ちを知っていた。

抑えなければならぬ。許されない衝動だ。

この手からこぼれ落ちるならば、最初から無ければいい。もう一人のわたしが囁く。

”全てを壊しちゃえ” と。

”欲望の赴くまま復讐すればいいじゃない。世界を破壊する術はここにある”

「違う！復讐したって、誰かを傷つけたって、憎しみが、惨めさが深くなるだけよ！」

偽善だ。

些細な言葉、些細な行動で知らないうちに、誰かを傷つけてきている。

大切な物を作らないように生きていた。
必要以上に関わらないようにしていた。

けれど。

得てしまった。

大切な兄弟達を。

見回してみれば、優しい手ばかりが差し出されている。あちらでもきつとそうだった。

「ったく、お前は難しく考え過ぎなんだよ」

振り返るとエースが立っていた。

そのまま黙って背中合わせに座る。

火事が起きた日、ダダンとエースに合流は出来た。

ダダンが振るう斧と、使いなれた鉄パイプを持つエースが繰り出す手数に、さすがのブルージャムも追い込まれていた。1対2、幾ら徒党を束ね自身も腕に自信を持っていたとしても、周囲を火に囲まれじりじりと焼かれ続けているのだ。体力自慢であつてもじわじわと削られてしまう。

「お前らア…こんなことをして、ただで済むと思つてんのかア」
ブルージャムがしわがれた声で威嚇する。しかしふたりは恐れない。

喧嘩を売ってきたのはそっちだ。買ったからにはとことんやつてやるよ。

覚悟を決めたダダンは強かった。

時間経過と共に悪くなる足場も気にせず、エースは打撃の手を休めない。撃ち尽くされた拳銃は既に炎の中に消えていた。

「俺は返り咲くんだった！！ 奴らに復讐する為に！！ こんな所でしんでたまるかアアア！！！」

吠えた瞬間の隙をダダンとエースは見逃さなかった。

正面からダダンが、真横からエースが武器を大きく振りかぶる。

「ごみ山のボスザル、お前にはお似合いの最後だよ」

斧を振り抜いたダダンがゴミから噴き出した炎の中に消える、ブルージャムに最後の一言を言い捨てた。

「逃げるよ！！！」

「つたく、アン、起きろ、アン、寝るな、黒焦げになるぞ」

ブルージャムは余りの激昂で小さな影が炎の中に現れたのを察知出来ていなかった。もし気づかれていたなら、形成はあちらの有利になっていただろう。

「うあーえーすだあ」

からくも勝利を収めはしたものの、しかし既に回りは火の海で、逃げ場が無い状態だった。

「飛べるか？」

ふらふらするけれど、あと1度くらいならなんとか。エースに偽らない感覚を伝える。

「あん、いきまっす」

「ホント大丈夫なんだろうな……」

不安げな表情をみせる仮親に多分、と無理して飛んだ先は、大きく火を噴き上げる場所だった。ダダンはふたりを守り、全身に大火傷をおってしまう。しかし森はすぐそこだった。エースは力尽きたアンとダダンを背負い、狭間の森に流れる小さなお側の近くで隠れ潜んだ。そしてそこから町へ何度も医薬品や食料を盗みに行き、自身と仮親の命を繋いだ。

ふたりを守ったダダンは今、全身包帯まみれになって横になって

いる。

温かさが伝わってきた。

エースはなにも言わなかった。手のひらが冷たい指を探り当て、ギョツと握りしめる。

アンは膝を抱き、体温を感じながら声を押し殺すことなく、泣いた。

どうやら立ち直るのが一番遅かったのは自分らしいと気付いたのは、迎えに来たルフィの姿を見た時だった。ダダン達が寝静まった頃に出かけようとするエースから、大体の場所を聞いたのだと言う。

「腹減った！狩りに行こう！！」

いつもの鉄パイプを持ち、いつでも出かけられる用意をしていた。

「アン、17歳で出航だぞ」

「え…なんの話がよくわからないのだけれど」

首をかしげていたアンがもしかして、と思った事を口にする。

サボが18で成人として認められるから、17で海に出るって言うってあれ、かな？

「そうだ！！ サボの分まで海賊になるんだ！！」

人間生きている限りお腹は空く。

かなづちのルフィを陸に残し、穏やかな波へと身を沈めた。木を削ったくいを使って魚を追いかみ一気に突き刺す。いつの間に覚えたのか、ルフィが薪を拾い、火を熾して待っていた。

「ありがとう、凄いね、ルフィ」

えっへんと胸を張るルフィも成長しているのだと感じる。留まっているのは自分だけだ。

2 mを超える魚が焼き上がるまでには少し時間が必要だった。

「町の方はまだ片付けが残ってるみたいだから。当分あつちには行かねエ」

体のだるさも忘れて、飛んだ”不確かな物の終着駅”の閑散具合を思い出す。門が平行になるまで積みあげられていたゴミの量がどれだけ凄まじかったのか、現状を見ればわかった。大門からそれも随分と長い階段が見えていたからだ。高さで言うと大体、35 mくらいだろうか。

下に降りると銃を撃たれてしまう。生き残った住人を駆逐するように、上層部より言い渡されているらしい。壁の上から見た景色は、数日前までそこにゴミが大量に廃棄されていたとは思えないくらい落ちくぼんでいて黒い場所だった。軍隊による後始末が行われていたが、適当なところで撤収すると踏んでいた。

なぜならゴミとして様々な物を捨てることに疑問を持つてはいない王国内部の人間達は、同じ事をまた繰り返すだろうからだ。

海に潜り4日振りの食べ物をお口にしたアンは昨日、ふたりで話し合った事を聞く。

失わない為に強くなる。その思いは共通だった。

「中間の森に隠してた財宝は全部無くなってた」

木の葉で焼けた部位を掴み、口へ運びながらエースは言った。
財宝集めは終わりだな。

「その方がいいかもね」

同意を示しながら、アンは体についた塩を払い落した。当分の間はエースが言う通り、町に近づかない方がいいだろう。本当はこの機に乗じて、しておきたい事もあったのだが、自身で手を下すのが面倒になっていた。わざわざ掌を汚しに行かなくても、その内に自滅するだろうからだ。

衣服をまとったアンに、ぎゅーとルフィが抱きついてくる。

死、と直面するにはまだ、7歳という年齢は幼すぎた。10歳でも受け入れがたい現象ではあるだろう。しかし弟は理解している。意味を押しつけられたエースやアンとは違い、どういった種類の感情であるのかを含んで知っていた。だから生まれるべきでは無かったと自分の命を否定するエースへ、自然と寄り添った。必要だと叫び、遠ざけたのだ。

「アンも死なねエでくれよな」

「大丈夫だよ、ルフイ。わたしは、大丈夫。鉄砲玉のふたりを置いて、逝けるわけじゃないじゃない」

”悔いのないように生きる”

それは杯により結ばれた兄弟に共通する思いだ。

自由の対義語は専制、束縛、統制。この中で最も的を得ているのは専制だ。

サボは権力に殺された。支配者と置き換えてもいい。

どう足掻いてもこの世界の現状は一部の特権階級だけに富が集中し豊かに暮らしている。天に上る龍の如く君臨する世界政府の根本を作った偉大な王達の子孫が権の殆どを握っているのだ。

秩序を守る立場にある、海軍や司法でさえ天竜人の一言には敵わない。

腐っても鯛、ということわざと同じだ。彼らが白と云えば白、黒と云えば黒となる。

正悪は関係無い。天竜人の定めが全て、なのだ。強者の理屈は、いつでもまかり通る。

国に属して生活している限り、束縛は続く。

海に出る人達は少なからず、何かを断ち切って出てゆくはみ出し者だ。

国に住むことで得られる権利や安全を捨て、身一つで海原へと旅立つ。確かに自由だ。しかし身を守るすべは己だけとなる。だから思考の似通った者同士で徒党を組む。もしくは人を奪略し恐怖で縛

りつけた。

徒党は賊となり己の欲望が赴くまま、国の圧力に屈し生きる人々を奪略し自由を謳歌する。

脱する事の出来ない人々をあざ笑いながら、自由の意味を取り違え罪を重ているのが現状だ。

「自由に生きること。一番難しい選択だよ。それでもふたりは、自由を求める？」

生き方としては何かに所属するほうが楽なのだ。

自由を選びとれば、全において己で決断しなければならない。

「おれ…アンの言ってることさっぱりだ。サボは誰よりも自由を求めてた。難しいってことも、知ってただろ」

そうだね。

弟の言葉に頷く。

親から貴族であるならばそうであれ、と望まれ続け、姿を消しても探そうともせず。一応世間体も考え、形だけは取っただろう。けれど親自身が探しには来なかった。5年間も、サボは二重の生活を続けていたのだ。最後の一年は本格的に家出をしていたが、それでも4年間、子供の行動に不審を見つけられなかったなど、あり得ないだろう。

ゴア王国の上流階級そのものが、トリカゴなのだ。

そこで生まれ、育ち、小さな世界の中で老い、寿命を迎える。

ある意味、幸せなのかもしれないと、アンは思う。それだけ、でよいのだから。それ以上を考えずにいて、いいのだから。

けれどサボは知ってしまった。世界がそのトリカゴだけでは無い、と。

自由の意味を知ってしまったのだ。貴族社会だけではなく、ありのままの外を実感してしまったから、余計に居られなくなっただろう。心を捻じ曲げて、煌びやかな世界に留まるのを良しとしなか

った。

だから海に出ようとし、いよいよ戻されてしまった機に実行した。17という年齢を定めていたのにも関わらず、留まれなかったサボに吐息をつく。

……サボのバカ。

サボなら、6年とちょっとくらい、どうにでもなったでしょうに。死んだなんて信じない。信じてやるものか。

絶対に生きてなさい。死んだとしても黄泉の淵から引きづり出して呼びもどしてやるんだから。

焼けた魚を食べながら、アンはこの場に姿なき、サボへと語りかける。

「おれはシャンクスみたいな海賊になりてエ。そして海賊王になるんだ！……」

大きな葉に掴み取ったほくほくの白身を飲み込んだルフィが、大きな声で発言する。

アンはびくりと身を硬直させ、立ち上がり夢を語るルフィを見上げた。

弟が目標としている海賊の名は、遠く、この東の海にまで届いてきている。

その理由を何となく、アンには見当がついていた。その身にまとう雰囲気、海原と反するその赤の色が、より強く、青に誘う。しかもあの一味のメンバーは誰であっても魅力的だった。あんな仲間達と海に出れば、何があっても乗り越えていけそうな気がする。

「おれは悔い無く、自由に生きる海賊になる」

エースの瞳には強い意志が秘めていた。

そしてちらりとアンを見、問う。お前はとうするんだ、と。

「私も一緒だよ。悔い無く自由に生きたい」

けれども。海賊じゃなくても良くない？

アンはロマンを語り始めたふたりに、しまった、と思いながら苦笑した。

そして自分に言い聞かせる。

時間を浪費するな、人生は時間の積み重ねなのだから、と。

ここで立ち止まっている暇など無い。サボも留まる事を否定した。そのサボを消失した感情で自分を動けなくしてしまうのは、彼に対する侮辱だ。

遺体は上がっていない。生きている。勝手に殺してくれるなど、そう世界へ断言した。

「船だ！！」

ルフィーが立ちあがった。大きな船の船首には犬の像が飾られている。

大ガレオン船だ。色は違うが、黒い龍のガレオンを見たばかりのアンが言う。

「最近大きな船が良く来るね。祭典の船も含めて3隻目、か。軍艦が東の海に何の用があつて…あれ？あれつて…おじいちゃんの…船なんじゃないかな？」

アンの声にエースは、「げ、マジかよ」と心底嫌な顔をする。

「じいちゃん帰ってきたのか！！」

エースとは正反対の反応をするルフィを押しつけ、まじめな顔をして肩を掴む。

「逃げろ、アン、いいか。絶対にジジイには捕まるなよ」

「え、どういう意味」

「だからとにかく逃げろよ。おれも逃走には手を貸す。何があっても振り向くな。絶対に逃げ切れ」

その意味を理解するのに、そう時間はかからなかった。

10 - 約束

絶対に来るな、と言われても何の事だかさっぱりわからなかった。アンは悶々と義祖父と会っていた記憶を順に思い返してゆく。エースはルフィを連れ、村に向かった。

私もおじいちゃんに会いたいのに。ひとり留守番だなんて酷いよなあ。

けどエースがあそこまで念を押すのは珍しい。大概はお前の好きにしろ、って自由に選択させてくれるのに。わたしはさっぱり覚えてないのだけれど、おじいちゃんとなにか約束したのかな。この前来た時は普通に遊んで貰っただけだし、サボも居たけれど…友達だと紹介したらなんだか嬉しそうだった。まあ、いつもの通りおじいちゃんの一方的勝利だった訳なんだけれど。

お茶やお菓子をひとり占めして無いし、本は関係無い…よね。誕生日プレゼントはサボと一緒に用意済みだから、あとは渡すだけ。

ふっ、サボには悪いけれどエースがこのプレゼントを貰って喜ぶ様子はわたしがひとり占めさせて貰うんだから。勝手に居なくなっちゃうサボが悪いんだからね。

まあそれはさておき。

エースは一体何を原因に、フーシャ村へ行くなっって言っただろう。わたしなにかしたかなあ。脳みそとペンと紙以外の記憶媒体、携帯、携帯があればすごく便利なのに。文明利器を失って早10年、懐かしいと言うか手元に具現化しろ、というか、なんというか。

このもやもや感、凄くもどかしい、もどかしいと言うより痒いところに手が届かないんじゃないかと、痒い場所が解らないっていうか、あーもう！

考えても考えても埒明かず、ぱたりと仰向けにアンは寝転がった。体のたるさが瞼を重くする。ころころと転がり、本棚の前で行きついた。

指が止まったのは星の本だった。どの海を渡ってもすぐに自分の位置を知れるよう、動かない星を中心に、名付けられた形を覚えては星空に探して朝を迎えた日もある。

文字よりも絵が多い、ふたりでめくりあつたページに触れる。

木の家でゆったりと本を読み始めたアンとはうって変わり、エースは厳しい表情で近づいてくる船を見ていた。いつもは定期船に乗って帰って来るガープが、仕事の船を使う理由にも見当がついていない。

よりもよって今なのかよ。

エースは小さく舌打ちする。ルフィは単純に大きな船が近づいて来る様子に興奮しているようだった。

さすが海軍本部の大ガレオンだけあり、見る見る間に帆に風を受け近づいてくる。

もしかして、が外れて欲しかった。

しかしこの日に間違いなく入港してくる船の目的はたった一つしかない。

「アンをジジイにやるかよ」

ルフィは兄の一言に飛びあがる。

「じいちゃんアンを連れて行っちゃまうのか!!」

エースは答えない。言葉にすると嘘も真になってしまふ気がする。

港には村から船の影を見た人々が集まり始めていた。

「マキノ!!」

ルフィが姿を見かけ走り寄ってゆく。この時間であれば多少店を空けていても平気なのだろう。

「この時期に戻ってくるだなんて珍しいわね」
町では式典があったと言うし、東の海を巡る世界貴族という方達の安全確保かという声も上がっている。

船がゆつくりと着岸した。帆がたたまれ梯子が下りる。そして長であるガープを先頭に乗組員が次々と上陸した。

抱きあげた孫にメロメロ顔になった上司に代わり、平和の象徴である東の海ではあるが警戒は怠らないように、と副官であるボガードが下士官達に通達をしている。

「珍しいのう、エース、お前が迎えに来るとは」

「何しに来やがった」

いの一番に尋ねたのは目的だった。東の海の巡視であればよし、そうでなければ抗うまで、と決めてきている。

ガープはアンの姿がこの場に無い事を確認すると、ルフイを下ろし腕を組んだ。

「聴くなっ たな… お前も一緒に来るか？」

「ざけんな」

「じいちゃん、アンはダメだ！！ おれの大切なねーちゃんだぞ
！！」

言葉遣いの悪さに、愛のゲンコツが下る。

声にならない叫びがふたつ、その場で上がった。

「約束は、約束じゃからな。わしは果たしに來ただけじゃ」

にやりと笑む顔は、山で見るガープの姿とはまた違う。正義を表す白のスーツに、将校のみが纏う事を許された同色のコートを身につけた義祖父は海軍の一翼を成す中将の名に恥じない貫禄を見せていた。

敵対すると決めた相手だ。気圧されてたまるかとエースは目に力を込める。

「なるほど。隠したか」

笑みが濃くなる。

「中将、これはどちらへ」

「家に運びこんどいてくれ。わしもすぐ行く」

船から様々な物が、主に料理機材が海兵たちによって村へ運ばれてゆく。

村ではガーブの帰還に村を挙げて宴会の準備が始まっていた。どれだけお祭り好きなのかと思うくらい、村人たちは何でも宴にしまふ。この村の風土や村人たちの気性も関係してはいるが、大海賊時代の幕開けと共に、陸だけの恐怖に加え海からの恐怖に輪をかけた、これが一番の理由だろう。貴族諸侯、王族が済む町には軍隊があるが、小さな村々には駐在所すらない。ガーブが時折寄港するとは言っても、いつ襲われるか分からない環境にある。ならば皆樂しめる時にぱーっと騒ごう。日々の不安も宴の時だけは感じなくても済む。

「そういえば初めてじゃったな」

不意にエースは抱きあげられる。いつもの強引さが無く、自然に体が持ち上げられたショックもあって一瞬だが身が固まった。

「大きくなりおつて。たらふく誕生日ケーキ食わせてやるから待ってろ」

と言われて大人しく出来る訳もない。身を捻って地に足をつく。

久しぶりに会う村の人達に揉みくちやにされているルフイに構わず、エースは駆け出した。気が付けば追って来るだろう。

それに。

エースは思う。今だけでもぽつかりと空いた心の隙間を感じずにいられるなら、村に置いておいたほうがいい。

エースは森を走る。途中で丸々とした鳥を捕まえ、道すがらきの

こをいくつかひっこ抜いた。材料さえあれば、アンが煮るなり焼くなりして美味しいものに仕上げてくれる。

ログハウスについた時には両手が塞がるまでに量が増えていた。アンは眠っている。

うつ伏せになり本を読んでいるうちに寝落ちたのだろう。

時計の針が秒を刻む音がやけに大きく聞こえてくる。サボの姿が無いだけで、こんなにも狭いとすら感じていた部屋が広々とするものかと、エースはその場で座った。

書きかけのメモがしおり代わりに挟まれ、細かな文字で似通った記述がされた本の題名があった。

”読み書きくらいは出来るようになってくなくちゃな”

ダダンの所では鉛筆すら持ったことが無かった。アンが出来るならば別に必要ないだろうと見向きもしなかった識字だ。サボは両親に出来が悪いと言われ続けていたと言っていたが、エースにしてみれば十分すぎるだろうと思ったくらいだ。アンが途中で匙を投げて、サボは根気強くエースに教え続けた。その結果、世界で使われている共通言語のみではあるが、読み書きできるまでに至らせた。

サボって先生に向いてると思うな。エースにここまでさせたんだもん。凄いと云わざるを得ない。

それはおれが馬鹿だって言いたいんだな。

ううん、エースの事はなーんにも。サボが凄いつて言ってるだけよ？

そんな会話をしていたのがつい昨日の事のように思い出す。

「どれだけ考えないようにしてても、ふと思ひ出すものよ」

いつの間にか目を覚ましていたアンが、くあーっと背伸びする。まだ眠そうにうとうととしていたが、エースが持ちかえった材料をみ

て早速料理の準備に取り掛かっていた。

「で、おじいちゃんの用件ってなんだったの？」

ツリーハウスから少し離れた場所で鳥を捌き、4人で作ったかまどできのこを鳥をここと煮込みながら、入港時の様子をアンは聞いていた。

誕生日ケーキを義祖父が作ってくれるという話を聞き、心の底から嬉しそうな顔をする半身に、エースはため息をつく。

「お前覚えて無いのか？」

「…えと、何を…かな？」

本気で覚えていない様子を見せるアンへ今度こそ盛大なため息を放つ。

あのなあ。

おれでも覚えてたくらいなんだぞ。なんで忘れちまうかなあ。本心がさつくりとアンを刺す。

「だって本当に覚えてないんだもん」

エースは胡坐を書いた肢に肘を突き要約する。

まだ幼かった頃、ルフィが2歳を迎える前後にガープが同僚を連れ帰郷してきた話をすると、何となく思い出してきたのか、そう言えばそんな事もあったと口にした。

「でさ、ジジイがこの子らを海兵にするつもりだってもう一人の奴に言ってたろ。それだったら今からでも預かってやるうかってそいつがジジイに言ってたさ」

「あ…」

腕にスープを入れていた手が止まった。すっかり忘れていたという顔だ。

「だって海軍って、普通12歳からでしょ。入隊できるのって」
海軍の支部が人員を募集する張り紙を町に配布した際、記されていた募集要項に年齢制限が12歳以上の健全な若者、とあった。

だから、11歳の誕生日までに大きなケーキをおじいちゃんが作ってくれて、一緒にお祝い出来たら3年間だけついてゆく、と言ったような記憶を思い出した。額に手をあて、忘れていたかったと、複雑な心境を胸中に渦巻かせる。

「で、どうすんだ」

このまま海軍にはいつちまうのかよ、とエースの目が語る。

前例が無いからと言って、諦めるようなガープでは無いのだ。年齢制限があるなら、今回を特例として認めさせればいい。海軍では英雄とふたつ名がつく万年中將でもある。その孫が入隊するのだから、多少の決まりことはねじ伏せられる、否ねじ切るだろう。

「どうって…」

アンは自分がまだまだ弱い存在であると知っていた。違う。火事の日に思い知らされたのだ。

友達を、兄弟を助けに行ったはずが、助けられ、支えられている。この島は自然が溢れ、人が近づかない危険地域も多い。鍛練してゆけばそれなりに強くなれるだろう。海に出ても1年や2年、新人ルキから脱却し始めた猛者達に勝るとも劣らない力を付けることも可能だ。

しかし。世界は広い。

この世界の海は5つ。赤い土の大陸レッドラインの向こう側にある新世界は、東西南北というそれぞれの海で揉まれの上がってきた一団が“偉大なる航海”グランドラインという更なる洗礼を受け、試練と言うには厳し過ぎるふるい分けを乗りきった末に足を踏み込む事を許された果て近き海だ。

父であるロジャーが、何かを次の世代へ伝えるためにあえて“ひとつなぎの大秘宝”（ワンピース）を置いて来たと明言した場所でもある。

エースは瞬く間に、最後の海に辿り着くだろう。Dという名が導

くからだ。

その時自分は果してエースの隣に立っていられるだろうか。背を任せて貰える力量を果たして手にしているのだろうか。

女海賊として名を馳せている人物も確かに居る。

しかし腕力ひとつとっても男に比べ、どうあがいても女は劣るのだ。幼いころなら違いも些細だが、成長期を迎える頃には格差が生まれるだろう。例え今、たがいが互角であろうとも、頂きを迎えた後は加速度的に下へと向かってしまう。

弱さを認め、力量に合わないから背中を守り合う相手を誰か探せと言ったとしても。

エースはそれでも、きつと共に行こうと手を差し出してくる。

義祖父が自分達を海兵にしたい理由も分かっていた。

ゴール・D・ロジャーの血を引いた鬼子だと知れたとしても、父親とは真逆の路を歩く、正義の言葉を背負った存在であれば、殺さずの理由となる。なんだかんだと無理無茶無謀を素で行う義祖父ではあるが、家族、とりわけ孫には甘いのだ。

「ねえ、エース……」

名を呼ばれ、ぶつきらばうに声を返す。アンは静かにほほ笑んでいた。

「聞いてやる。話してみろよ」

お代わりの器を差し出しながら、エースは先を促した。

夜。

円を描いた満月に負けじと、焚かれた積木が赤々と炎を上げていた。

町の広場には幾つものテーブルが置かれ、人々が持ち寄った食べ物や酒が並んでいる。

その中でひととき大きなテーブルには、11段重ねの巨大ケーキが鎮座していた。少々形は歪んでいるが、夜空にそびえ立っている。「んだこれは…」

手を繋いで山を下りたふたりに、クラッカーの祝福が待っていた。山で自活しているというルフィの兄と姉に、会った事も話した事も無い村の人々が、おめでとう、と声をかけてくる。

「どうじゃ、アン、エース！！ワシのケーキは！！！！」

可愛いウサギ柄のエプロンを付けたガープが、仁王立ちでふたりを待ちかまえる。

「凄い！」

アンは感謝を義祖父に伝え、抱きつく。

後ほど知った事だが、ケーキ作りを会得するまで5年かかったと教えてくれた人物がいた。そう、ボガードだ。孫との約束を守るため、初年、次年共にスポンジ地獄を味わったという。3年目からは言わずもがな、だ。

主役のふたりが到着し、宴も盛り上がる。

音楽が奏でられ、歌を唄い、酒が入った樽が割られていた。

「これすっげえ美味かった！！」

こっそりと盗み食いしたのだろう。ルフィがケーキタワーを指さす。

「ケーキは最後だよ！さあさ、お腹いっぱいお食べ！！」

村の女性が頬を膨らませるルフィの頭をポンポンと撫でている。

ガープの帰還を祝つての宴が、いつの間にか村を挙げての誕生日パーティーへと変貌している状況に、エースはがっくりと肩を落としていた。

こいつら調子良すぎじゃねエか…

海兵たちも混ざり、いつもより、随分と騒がしくも愉快的な会場だった。

肉や魚、野菜を次々と皿に盛ってくれる村人に感謝しつつ、賑やかない中心部分からアンはそっと抜け出る。動きの先を読んでいたかのように、エースがそこに待っていた。

「アン…」

テーブルの上に皿を置き、瞳を見る。

「うん、もう決めたことだよ。後悔したくない。わたしはエースと海へ出る。その為の力を得に行く。だから少しの間だけ、頑張ってきて来るね」

強く抱きしめられた体が痛む。けれど押し返したりは出来なかった。

母の胎内で留まっていた時からずっと一緒だったのだ。そうやすやすと、割りきれぬ感情でもない。

緩んだ腕がだらりと下がる。肩に額が乗った。

今度はアンが、エースを抱きしめる。ほんの少し、身長差が出てきていた。

「約束。わたしは必ず戻って来る。だからそれまで、わたし達の弟を、よろしくね」

11 - ハジマリ

風音が空を切る。間一髪で避けた刃筋はすぐに目の前に迫ってきた。何とか回避し続けるものの、いつ切っ先が追い付いてくるか、わからない。背に冷たい汗が伝う。

これが”偉大なる航海”^{グランドライン}の、将校と呼ばれる人達の力なのだと、アンはぺろりと乾いた唇を舐めた。

「っ」

前方に受け身を取り、刃筋をかわす。体をボールのように丸め、剣士の後方に回り込むと振り向きざまに足を振る。

無理、届かない！

リーチの差を読んだ剣士が間合いを開ける。さすがに何度も死線を潜り抜けているだけあり立ち位置を把握するのが早い。

動きが尋常ではなかった。森にいたどの獣よりも確実に急所を狙ってきている。鋭い刃が何度も肌に薄くあとを残してゆく。

義祖父は木刀での訓練を許さなかった。既に海に出ているのだ。海賊船に遭遇する可能性も高い。ならば実戦に近い訓練をした方がよいだろうと、真剣を使つての対決になっている。

状況は見ての通り、アンに分が大分悪い。

けれど…

参ったとは言うものか。

何のために兄弟達から離れて、ひとり船に乗ったのか分からない！

半身の構えを取る。体は自然体のまま相手を見据えた。

「なかなかのものですね」

「…わしの孫じゃからな」

広い甲板を見渡せる特等席で、ガープは孫娘を見ていた。さすがに山で育っただけの事はある、先を読ませない動きに柔軟性を感じさせる。何かの流派を手本としているのか、それとも自然と手に入れたのか、変化に富んだ手数には技を見ることが出来た。

これはもしかすれば…もしかするのう。

あやつも無理に連れてくるべきじゃったか。

11歳になったばかりの少女は乗り込んだ初日から、下士官達の訓練に紛れ込んでいた。

雑用をこなす下士官達の中に潜り込み、洗い方を教わりながら要領よく、あつという間に終わらせてしまったという。その後は昼ごはんに誘われ食堂では話の中心に、いつの間にか長年一緒に航海した仲間の如く溶け込んでしまっていた。ガープが書類仕事を終え副官からの報告を受けた時、多少の驚きを覚えた。海兵たちは入隊が決まってはいるが、ガープ中将のお孫さん、ということで距離を測っていたはずだ。幾ら上司が気さくで上下関係を気にする事のない人物であれ、孫は別だろう、と海兵たちも考えていたからだ。しかしアンはそんな意識もなんのその輪の中に飛びこみ溶け込んだ。

元々人懐っこい性格ではあると思っただけではなく、ここまで馴染んでしまふとは上司としてだけではなく、祖父としてもまた予想外な嬉しさだった。

中将という地位は家族にも影響を与える。

親の権力を笠に、傍若無人に振る舞う輩も決して少なくはない。

「アン、六式を使ってみい…!!」

周囲からざわめきが起こった。後方に立つ副官、ボガードも片眉

を上げる。

心臓が悲鳴を上げていた。こんなに緊迫した空気の中に居続けていると感覚が否応に研がれてゆく。命をかけた戦いでは無い。ただの手合わせ、だ。本物の刀を剣士が使っているとはいえ、殺気を纏わせてはいない。けれどどうして心躍るのだろう。

剣士の方も最初の考えを訂正せざるを得ない状況となっていた。ガープの孫とはいえ、まだ11歳になったばかりの少女が相手だ。すぐに音を上げるだろうと思っていた。斬るつもりなど無く、もし刃を振りかぶったとしても寸止めすれば良いだけの話と軽く考えていたのだ。

しかし中将は言った。六式を使ってみろ、と。

小さな体で、体を苛めぬくと言葉すら生ぬるい、鍛錬を積んだ所で使い手になれるかどうかすら分からない体技を、使いこなす事が出来るのか。

カチャリとつばが鳴る。

動いたのはアンだった。剣士の眼前から一瞬で姿を消す。剃だ。後方に現れた姿を捉え、剣士は取り押さえようと手を伸ばす。しかし掴んだのは残影だった。既に姿は横手に回り込み手のひらを脇腹に添えられている。後方へ剣士は飛び退くが懷に飛び込んだきた小さな体が、みぞおちに拳を突き上げる方が若干速かった。

体重の割には重い一撃が腹部にめり込む。鉄塊を拳に纏わせつきあげたものだと気付いた時には、人垣の中に沈んでいた。

「ごしにゃんありがとうございますた…」

ぺこりと一礼したアンも、仰向きにそのまま倒れる。

慌てて若い海兵達が駆け寄った。

「目を回しているだけじゃ！！ 休めばすぐ元気になるじゃろう

「……」

階段を下り、ぐったりとしている体を引き受けガープは、倒れた剣士を労い、その他の海兵達へ訓練へ戻ろつよう言い渡すと、自室へと向かった。

出航時。

ルフィが泣いていた。

誕生日ケーキは宴に参加した皆で美味しく食べ終わり、それぞれが家路についた頃、アンは約束を果たしてくれた義祖父の手を取り、海軍への入隊意思を告げる。

破顔するガープの笑顔には安堵が刻まれていた。やはりこの身に流れる血を憂いていたのだろう。

その後は家族団欒だった。

お風呂も大きな掌でごしごしと洗われ、温かな湯船の中で水を掛け合う。

久しぶりに家族4人で大きなベットに横になった。

枕を取り合い、布団を奪い合い、最終的には祖父の大きな体の上が3人の定位置となっても豪快な寝息を立てる祖父は健在だ。

朝食はマキノの店で済まし、港へと向かった。

港へ続く一本道では、誰もが無言で。兄弟でアンの手を握り締める。

行つて欲しくは無い。

唇をかみしめた口元が、言葉を飲み込む。

船は既に出航準備を終え、帆を下げる時を静かに待っていた。

「アンが、アンが行っちゃう、エーズウウ」

「泣くな！おれが一緒に居てやる。アンは必ず帰って来る、だから」

ら泣くな！男だろ！！」

手のひらがただ離れただけなのに、こみ上げてくる寂しさに涙が浮かぶ。

「アンお前もだ！泣くな！」

エースは額を突き合わせ、弟に言い聞かせていた視線をアンに投げ、指さす。

「うん！行つて気まず！！」

むくり、と体を起こす。

横に寝ているはずのエースとルフィの姿が見えないことに、はてと首を傾げた。慣れない揺れに、船に乗っているのだと思ひ出す。

ちゃんとご飯食べてるかなあ。

ちゃんと傷の手当ては出来てるかなあ。

喧嘩して無いかなあ。

ダダンおばさん達にちゃんと説明してくれてるかなあ。

想いの先は兄弟達に向かう。

寝台から降りると、机が目につく。山と積まれた書類を見ると、この船に関する資材関係の帳簿から訓練度合いを示した各部署からの報告書など、てんでばらばらになって置かれていた。

頑丈な机に腰をおろし、ささつとまとめ直してゆく。

こういう分配は、卒論を書く先輩達の資料をまとめる手伝いをしたこともありお手の物だ。

クリップを引きだしから見つけると、とめてゆく。

「ほとんどの書類、おじいちゃんがサインしたら済むようにはな

ってるけど…」

本当にこの世界の化学はどういうレベルなのかと思う。

「…付箋まであるし」

このままでは不備ではねられるだろう場所へ次々に貼ってゆく。

「起きたか」

湯気立つコップを持って、義祖父が入って来た。久しぶりに嗅ぐ
コーヒーの香りだ。

「わしの代わりに書類やってくれとるのか」

「まとめただけ。おじいちゃんのサインが必要なのもいもん」

どかりと椅子に寄りかかり、義祖父は書類を手にする。

「ここのページ、多数量の記載が間違ってる。ずれてきてるから、チェックして貰ってみて」

バラバラ過ぎて見る気も失せていた雑多な書類仕事、すっかり、
殆どと言ってよいほど片付いていた。

どこで手習いした、とは聞かない。

フーシャ村にある、ほぼ在るだけの家には手作りの本棚が幾つも
据えられ、様々なジャンルの書籍が所狭しと並んでいるのを見てい
たからだ。帰郷の際にも幾つか持ちかえっていたものの、蔵書とな
っていた量は、ガープが想像していた以上に増えていた。

村長から本を借り、全て読みつくすと次は町の古本屋を梯子して
いたらしい。余りにも買った本が大漁で持ち運べない時は、村長宅
に輸送ペリカンが何十羽も群れになって押し寄せて来たのも一度や
二度では無いと聞いている。

こりやわしの船で預かった方がいいかもしれん。

配属は基本、入隊した艦が受け持つ。支部で有能そうな人物がい
れば、艦で引き取ることも可能だからだ。

しかしアンの場合はガープの他に1名、配属を希望している人物
がいた。

「ところでおじいちゃん、行き先変わったの？」

「急にどうしたんじゃ」

いや、だって。なんとなく？孫娘にも明確な理由が分かっていないようで、難しい顔をして考え込んでいる。

船は先ほど東の海を抜け、風地帯へと入った。風の力を蓄え自力航行を可能とした動力、システム工学の試作品も順調に稼働中だ。行き先が変わったのはつい先ほどだった。本部より行き先変更の通達が来たのだ。

”偉大なる航路”^{グランドライン}はコンパスが全く役に立たない海域だった。こ

の事実を知らずに航路に入る輩は後を絶たない。幸運にも航路に入れたとしよう。しかし流れる海流も、風の流れすら一定の方向を保ってはいない海だ。同じ場所をくると回り続け、新たな島に上陸することなく果ては無人船となり浮かび続ける。故に、”偉大なる航路”^{グランドライン}は海賊の墓場とも呼ばれていた。

唯一この航路で舵を取る方法は、各島々を繋ぐ指針を辿る他ない。その道具を『記録指針』^{ログボース}という。しかしこの指針では、島に到着する度次々と行き先が書きかえられてしまう為、ひとつ前の島に戻ろうとしても出来なかった。

永久的に磁場を記録する『永久指針』^{エターナルボース}だけが唯一固定した道標といえるだろう。

「本部に直行するはずじゃったが、途中W7へ寄る」
ふうん。

アンは気の無い振りを装うが、内心は心臓がバクバクと鼓動を打っていた。夢を過信しない、与えられた情報を鵜呑みにするものか。そう思い決めたが、今までその夢に何度も助けられて来ている。

昨日見た夢は最初から現実味を帯びていた。しかも以前お世話に

なつた面々が首を揃えて捕らわれていたのだ。

アンは考える。シャンクスを助けられた時と、大火事の時と何が違うか、を。

それは圧倒的な量だ。

大火事はひとりで何とか出来るレベルを、越えてしまっていた。全てを救えるなど、思い上がりも甚だしい。けれど自分はそれをするようとしていた。

出来るならば全員を。手が届かないならば知っている者達だけでも。

甘い考えだった。

知っている者達ですら、手が足りなかったのだから。それにより、大切な兄弟をひとり失っている。

だから自分の力量をまだまだ足りない、と認めた。精一杯背伸び出来る範囲も把握する。

これからは基本的な力量を底上げし、何とか出来るレベルをより広くしてゆくことだ。

定められた方向を変えるには幾つかの方法がある。真正面から力ずくで行おうとすると押し寄せる何十倍もの重さに耐え、いなさなくてはならない。けれど物事とは、人と人がさまざまに何かを積みあげた結果ともいえる。ならば組み上げる最中に細工をしこめばどうだろう。ほんの少し根元を揺り動かすだけで先は広がる。ただし、長年にわたる仕込みが必要なため、即席で行うのは難し過ぎた。

ならば暗躍はどうだろう。

上手く手を後ろか回して、物事を上手に片づけていた友人が脳裏によぎる。

手際がいいというか、謀略家の域に入っていたような気もするけれど。

アンは向こうで生活していた時も、余りそう言うモノには関わっていなかった。というよりか、関わりたくないようにしていたという方が正解だ。教授達が勢ぞろいする手前、どうしても、という場合を除きお断りしていたのだ。どんな関係でもさらりと流してしまう。飄々とした人だとも噂されていたのも知っている。

出来るの？自分に問う。

違うでしょう？

問い掛けてきた自分に笑む。

「出来ないと決めつけない。やってみないと分からない。動かないと始まらない」

諦めの悪さには自信があった。諦める事を、諦めたくらいなのだから。

船の航路はぶれず、水の都へと至るだろう。

「トムさん達元気かなあ」

小さなつばやきは楽しげな響きを含み、風に乗った。

沈みゆく町、ウォーターセブン。

ここは昔から造船業が盛んな島としても有名だった。

少しづつではあるが町にかつての賑わいを取り戻そうと、苦境であつても木槌やかんなの音を絶やすまいとする職人たちの手によって支えられている。

水の都にはもうひとつ有名な物があつた。

それは海列車だ。波間に揺れる線路を通り、近隣の島3つを結ぶ。もうひとつ、特別路線があるが一般が使う事はほぼ無い、司法の島へと続く路だ。

”海列車”を生み出した人物の名はトム、という。機関車の名は制作者からとられ”パッフィン・トム”と名付けられていた。

4本の線路を全て完成させた造船技師は、14年前に下された執行猶予後の判決を待っている。

司法船が到着するまで残り7日。

アンはドックに入った船から降り町を歩く。

宿はドックの近くに運よく取ることが出来た。中央街の一件を貸し切り一軍が駐屯している。久々に大勢の船乗り達を迎えた町は、ほんの少し活気づいているようにも思えるから不思議だ。

遠くへは行かないように言い聞かされていたが、アンは細路に入り段差も気にせずふわりと体を空に踊らせる。眼下に見えるのが裏町だ。月歩を使い、大地を走るかのように舞う。表には1から4までのドックが並び、裏手に回ると5から7までのドックがある。

この島に到着するまでの間、もう一度正式に六式を義祖父より習

い直した。寝る時間を削り、ひとりでは無くふたりでああだこうだと話合いながら、技の特性と効果を自分達の身で確かめあつた結果、高低差を気にすることなく飛び降りれるまでに至っている。

一番の収穫は遠く離れていてもエースと会話は可能である、という新事実だ。今までとは違った環境になつたせいかお互いを意識し合うようになっているため、より強く結びつこうとする力が働いているのだろうか。ある程度 of 感覚も共に出来るようになっていゝるには吃驚した。

普通ならひとりですべてを理解しなければ使いこなすのが難しいが、アンとエースに限つてはふたりで感覚を共有出来る利点を使い、人の倍以上の速さで技をものにすることが出来た。

つい先日には覇気という力も持ち得ていると判明し、より一層孫の教育に余念が無くなつた義祖父の様子をも伝える。

（音の波が来るあれだろ）

（そうそう。覇気つて大きく分けると2種あるんだつて。ひとつは相手を察知する力。そしてもうひとつは悪魔の実を食べた相手にも打撃を与えたり、守りの力に変化させるもの）

伝わる先ではふうん、という思いが帰つて来る。

そして3つ目。

大きくふたつと言つた後で続く数字を言われ、いぶかしむ顔が浮かぶ。

霸王色の覇気、というモノもあるらしいよ。

相手を威圧する力。受けた相手は意識を保つていられない意思の力だという。

暫くの後、大火事の日にお互いが使つたあの感覚に辿り着いた。海軍側にはこの力の使い手が居ないという。義祖父が語るには、ロジャーの一味もこの力を使おうておつた、とのことだ。父をこの世で探すのは無理なので、学ぶなら使い手を探さねばならない。

（考えても分らん時は、しねエ方がいいな）

全くもってその通り、とあくびを噛み殺しながら、アンは頷いた。

風を感じながら眺めるウォータセブンは島そのものが町、と表現しても違^{たが}わない。毎年決まった時期に町を襲う高波が無ければ、このような構造にはなっていなかっただろう。まさしく産業都市と言っても過言ではない形をしていた。以前来た時よりは復興しているが、まだまだ道半ば、といった感じがする。

改築や増築で多少の変化はあったが、見慣れた街並みはそのままだった。

懐かしい風景に知らず知らず口元に笑みが浮かぶ。

途中の露店で水牛肉の串焼きを1本買い、歩きながら食べていると後ろから声が掛かった。

3人組のチンピラだった。

「見かけない顔だなア。そのかばんの中身、俺らに見せてくれるか」

「本しか入って無いよ」

「見せろってというのが聞こえなかったか？アア？！」

こういう輩はどこにでも居るものなのだなあと3人組を眺めた。見せて収まるものならば、と鞆を放り投げる。

「んだよ、鳥類辞典？ほんとにこれだけかよ。つまらねえなあ」

男達は鞆ごと水路へ本を放り投げる。

どぼん、と水音が立ち本が沈んだ。男たちが去ったのを確認してから水路へ入ろうとすると、果物を売る行商人が待てと制止した。手に持つさおで器用にびしょぬれの鞆をひっかけ手渡してくれる。

「お嬢ちゃん、災難だったなあ」

「いえ、拾ってくれてありがとう。助かりました」

ぺこりと頭を下げ、アンはため息を落とした。まだ町は荒んでいる。

本を落とされるくらい、どうという事は無かった。乾かせばまた見ることが出来るから良いのだ。

けれど人の心は一度擦れてしまうと、なかなか元には戻らない。手を差し伸べてくれる、誰かが現れたとしても、容易ではないと知っていた。

トムズ・ワーカースの本社は少し変わった所にある。

5と6番ドックの間にある「橋の下倉庫」にひっそりと居を構えているのだ。会社としての許可は町から発行されていないが、この会社の社長であるトムは海賊王の船を造った人物でもある。

そう、宝樹アダムを材とし”偉大なる航海”グランドラインを一周したオーロ・ジャクソンの建造者だ。船大工であれば一度は己の手で触つてみたい材のひとつとして宝樹の名があがる。

彼が作った海賊王の船は現在もどこかに隠されているという噂があった。なぜならロジャーの足跡を洗い出す最中でも、船の行方は依然と知れなかったからだ。

船員の誰かが、大切に保存しているとアンは考えていた。いつかまた、海原で風を受ける日をどこかで待っているというのなら、探してみるのも一興だと思う。

とてつもなく腕の良い船大工であつたとしても。

海賊王の船を造つたという事実が公になると世間は一気にトムに對して風当たりを強くした。

それだけ”偉大なる航海”グランドラインを制覇した男の影響力は世界に對して計り知れなかったからだ。

新たな時代の幕開けを宣言した男が処刑された後、トムは断罪された海賊王の船を造つた罪を問われた。

造られた船には罪は無い。

海賊が乗ればそれは海賊船となり、商人が乗れば商船、海軍が乗れば軍艦と呼び名を変える。

しかし世界政府は決定した。”海賊王”に関わった全てを抹消する、と。

エースとアンは母と、己の死後子供を頼む、と遺言を託したガーブの手で守られ、生まれ育ってはいるが、大きな声を上げて自らの出生を言えるわけではない。

知れたら最後、オハラの子と同じように追われる身となるだろう。

「こんにちは」

会社のドアを開け中に入るが誰も居ない。

となれば、皆がいる所はたった一か所だ。木槌の音が聞こえないのは、昼食時間なのだろう。

ココロさんのおにぎり美味しいんだよなあ。

と緩んだ口の端からこぼれそうになっていたものを飲み込み、空を駆ける。

眼下に広がるのは荒波を越え船としての役目を終えた木材や機材達が眠る場所だった。足場を確かめながら進むと聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「トムさん!!」

余りの嬉しさに思わず大きく膨らんだ腹に飛びこむ。そうそう、この弾力が懐かしい。

「たっはっ……!!っ……!!……!!」

おにぎりを持ったまま、魚人が笑う。

「ンマー!アン!」

突然の来客に、それぞれが声を上げた。手紙のやり取りはしていたが、直に合うのは以前の突発的な別れ以来だ。

「アイスさんもお久しぶり。うわぁココロさんのおにぎりだ…美

味しそう。ひとつご相伴になってもいいですか」

ぐーと鳴った腹の音に照れ笑いしながら鉄パイプの上に座る。横には角界ガエルのヨコヅナがいた。ぷにぷにと柔らかな久しぶりの感触を堪能する。

「大丈夫、食べないから」

以前来た時と変わらない顔が、揃っていた。

「それでどうしたんだい？また飛んできたんじゃないだろうね」
ココロがおにぎりを手渡しする。アンは残念ながら、と前置きした。

「今回は船で来たの。ちゃんと海流に乗って」

アンは中央街を指をさす。

「そついや、海軍旗が朝通つたな。それに乗って来たのか。たっはっ……！！っ」

トムが豪快に笑う中、アイスバーグはおにぎりをほうばるアンを見る。

「入隊は決まっているけど、まだ正式な階級は貰って無いの。だからそんなに警戒しないで」

困った顔をする少女に、そう言うことにしておこうか、と視線を反らした。

「で、フランキーが武装船を造り続けている、のも変わらないのね」

周囲に転がった船が現状を物語っていた。トム曰く、そろそろ3号が出来上がりそうなのだという。

「度を過ぎた凶器は、造るもんじゃない……」

アイスバーグのつぶやきは的を得ていた。武器を手にするならば、それ相当の覚悟をしなければならない。その道具で人を殺してしまつかもしれない可能性を常に心に留めておかなければ、造ってはならないのだ。造り手はその責任を否応なく、背負わされる。その代

表的な例が、目の前にいるなら、なおさらだ。
小さな震えが走った。

「町の様子を見てきたけれど、まだ厳しいのね」
海列車が煙を上げて駅へと入ってゆく。

記録ログに関係なく、町と町を結ぶ線路は完成した。しかし他の町に住む人々は水の町の現状を知っている。商売するにしても要らないのなら他に回すだけ、と足元を見るのだと言う嘆きも耳に入ってきた。

「たつはっ……！！　だが人間に活気がある。希望は繋いだ。これからだ。結果はすぐにはついて来ねエよ」

トムは弟子に根気強く待つような言葉をかける。

「やるだけの事をやったら男は、ドンと胸を張ってりゃいいんだ……！！！」

有言実行を成してきた男の言葉は重い。

アンがこのウォーターセブンを初めて訪れたのは、3歳の時だった。瞬間移動という能力があると自身で把握し、好奇心に駆られ初めて飛んだ先がトムの腹の上だった。もちろんその場で力尽き、意識を失ったのは言うまでも無い。飛ばれた先のトムも就寝後の出来ごとだったため、ココロが発見し起こすまで腹の上に子供が寝ているなど気付かなかった。

丸一日と半日が過ぎた辺りに目を覚ましたアンが見た最初は、ヨコズナの顔だ。

ぷにぷにで温かいカエルに飛び付いたアンがそのぷつくらとした腹に噛みついたのは後々の笑い話となっている。

1カ月ほどの滞在だったが、アンはその間この水の都を走りまわった。どこかしらヴェネチアに似た雰囲気を持つ町が好きになって

しまったのだ。

どこからともなくやって来た子供を追い立てず、好きなだけここにいればいいと言ってくれたトムには何度お礼を言ってもいい足りないくらいだった。胡散臭いと怪訝な目を向けて来ていたアイスバグも数日の内には手を引いてくれるようになり、大人しく仕事を眺めるアンと打ち解けるのも時間がかからなかった。

廃材を利用して海王類を倒すと意気込むフラウに声援を送ったのを覚えている。

出会いも突然だったが、分かれも突然だった。

エースの呼び声を頼りに、東の海へたどり着いた後はもう一度行こうと試しても壁にぶち当たるような感じで行けなくなっていたのだ。年に一度、手紙を送り安否を知らせてはいたが、こうして面と向かって話すのは7年ぶり位になる。

今日は泊って行くのかと聞かれたアンは、出来れば、と返した。

多少行方不明になっても、義祖父は慌てないだろう。海兵達にも船がドックに入っている間は自由行動してよし、と通達されている。司法船が到着すれば護衛の任に当たるだろうが、それまでは召集される事は無いと踏んでいた。

7日間で出来ることを考える。

まずは廃船島に転がる、危ない船の処分は出来るだけ迅速にしなければならぬだろう。

夢で見た司法船は何者かの砲撃を受けていた。何者かが、夢の中に出てくるあの黒服達がトムが持つ抑止力を奪う為に、何らかの工作に利用される可能性が高い。

次いで、設計図も出来れば隠し通せればと願う。

兵器は基本、殺しの道具だ。現存する世界の技術を使えば復元も可能となっている。

あちらの世界では兵器が抑止力として使われていた。武力を持っていると知らしめることで、戦いそのものを抑える効果を狙う。しかし兵器を持たない国は危機感を募らせる。いつその兵器のターゲットに据えられるか分からないからだ。だから拮抗した力を持つと、より強力な殺戮兵器へと手を伸ばす。

図面を残した人物はなにを未来に願ったのだろう。

今は世界政府が全てを支配している。かつて、世界政府と呼ばれる前の前身、それと戦う勢力が存在していたのは確かだ。敗者側が残した兵器群を今になって勝者側が求めている。

ロジャーの死によってもたらされた、大海賊時代という迷惑な概念を一気に駆逐する為の力を欲したのか。それとも全く別の目的が隠されているのか…。

これ以上、推測でのみ物事を判断するのは危険だ、と考えるのをやめた。

とくんとくんと聞こえる鼓動が耳に届く。アンの寝台はトムだ。

こうしてうつ伏せになっていると小さな頃を思い出す。

「ねえトムさん。そのまま聞いて」

アンは小さな声で囁く。

「何日か後にマヌケ面した男がトムさんが持つ設計図を狙ってやって来る…名は多分、スパンダムだと思うけれど自信ない」

政府が嗅ぎつけている通り、設計図をトムは持っている。隠し場所もこの部屋だ。なし崩し的に一度見せて貰った事がある。

機関車の技術は間違いなく過去の遺産を応用して作られていた。

外燃エンジンに関しては蒸気機関、水蒸気を利用して過熱と冷却作用による膨張、収縮を運動エネルギーに変えて動かす、という知識以外知らなかったが、改めて図面を見ると簡単なようで難しい作

りをしていたのを覚えている。

過去の遺産には故意に描き損じられていた箇所があった。それを見つけ設計図を引き直し、この町のためにと希望を組み上げたのは全てトムの業績だ。

ただ駆動系をそのまま転用した初代機関車は暴走列車としてレングア倉庫に放置されたと手紙にあった。眠れる暴走機関車は、いつか使われる時が来るのだろうか。生まれて来たなら走りたいよね、走るために作られたんだもん。そんな事を思った。

うとうととする意識の中で、願う。

「死なないで……」

大きな、みずかきがある手が体に触れ、ぼんぼんと背を撫でた。それが答え。アンは少しだけ安堵し、眠りの中へと落ちてゆく。

13 - 設計図

司法船到着まで後3日。

アンはフランキーの海王類殲滅艦をアイスバーグの手を借りて、最新式を除く全てを解体し終えていた。いい汗をかいたと額を拭うふたりに、創造主が非難の声を上げる。

「おい！それは次のに使うんだ！切り刻むなアン！」

「えへへ。やっちゃった、ごめんね」

昨日までの解体作業には造り主のフランキーも参加し、今は35号に乗り海王類とガチバトルをしている頃だろう。

説得は案外、簡単だった。

いつもは喧嘩の末に、アイスバーグが勝手にしろ！とフランキーを切り捨てて終わるのが常となっているという。よくよく放置された作品群を見てゆくと、埃がつもっていたり、突撃時の衝撃を受け切れず壊れたままの戦艦が転がっていた。どれもこれも分解して新たに組み立てれば、35より強力な兵器が作れそうな感じがしたのだ。

ということで、アンは单身、フランキーの元を訪れ、提案を試みた。

解体する理由を提示したのだ。

「ねえ、34までの部品、全部使ったら、36って凄い船にならないかな？滞在できる時間も短いし、腕のさえ渡りを見てみたいなあ。フランキーってトムさんが一目置く位凄いんでしょ？よ！世界一の船大工候補！」

フランキーおだてりゃ船壊す。

アンに言わせてみれば心根が素直だった。期待されると口ではあ

あだこうだと文句を言っても応えようと。どこかの誰かさんと本当にそっくりだ。

そして今日も木槌の音を飽きずに聞いていた。

木と木が打ち鳴らされ、かななによつて削られる音に耳を済ませる。不意に踏みしめる音が雑に混じった。慌てて身を廃材の中へもぐりこませる。

「アン？」

アイスバーグが姿を消した少女の名を呼ぶ。

その時トムも気がついた。此方側に向かつてくる幾つかの足音に視線を向ける。

「どうもこんにちは。あなたですか？造船技師のMr・トム、とは」

青い空から何か落ちてくる音がヒュルルルル…と聞こえ、真上を仰ぐ。黒い点が重力を受け、スピードを増し此方に落ちてきているのが見えた。

「いやア、捜しました。すいませんが…」

トムの目は、話しかけてくる男では無く、黒い丸を追っている。

「少々お話を」「させて頂きたい」「わ…」「たしは」「サイフ

アーポールNO5のスパンダヴァ」

直撃した。爆音と火薬が上げる黒い煙がもわもわと空へ立ち上ぼる。

弾はトムに話しかけていた男をも吹き飛ばし、落ち行く体は廃材の中へと頭から突き刺さった。

付添の4名が名を呼び助けに駆けつける。

よくもまあ、見事に突き刺さるものだ。とアンは影から見守っていた。しかも爆風の最中になにか話していた気もする。どれだけ頑丈な体をしているのだらうと、こそーり覗き見した。

「おう！悪イ！！ 誰だか知らねエが祝砲が当たった！おい、アン！見て見るよ！あいつどこ行きやがったんだ」

バトルフランキー35号帰還。

しかも仕留めた海王類を引つ張つて来たようで、波間に巨体がぶかぶかと浮いている。

あー。あれ焼いたらきつと美味しいだろうなあ。

船の食事は確かに栄養価も考えられ、美味な食が並ぶが、長年の食生活により野性溢れた食事が無性に恋しくなっていた。

ダダンが作る大味の、塩コショウを振りかけただけの肉が懐かしい。

あとで捌こう。焼いて食べよう。それでいこう。拳を握りしめ、喉を鳴らす。

「あのバカはまた…性懲りもなく……！！！」

アイスバーグがハンマーを振りかぶり、帰港したばかりの35号を打つ。

「何度言わせるんだ！次から次へとこんな戦艦造り続けやがって！！！！ これもおれが処分してやる！！！」

「だー！！ てめえやめろアホバーグ！！！」

これがココロさんが言っていたいつもの喧嘩の風景、だろう。

「別に人を攻撃するわけじゃねえだろうが！！！」

「お前の意思どうこうじゃねエ！！！！ 凶器を存在させた責任を問い掛けてんだ！！！！ バカンキー！！！」

戦艦も道具だ。存在しているからには、使われる事もあるだろう。フランキーに限らず、第三者の手によって。

「トムさん、何とか言ってくれよ！！！！ わが社の面汚しだ、こ

「いつは!!」

「たっはっ……!!……!!……!!……!!……!!」

豪快な笑いは必死の形相で叫ぶ男の声さえもかき消していた。
何度目かの叫びでようやく全員が気が付く。

「あんた、だれ？」

「聞いてなかったんかい!!」

政府の役人が帰った後、トムはアイスバーグとフランキーを呼んだ。背中にひつついて離れないアンも含め部屋の中は冷たい空気が漂っている。

「大切なものをお前達に預けたい」

そう言って机の上に置かれた紙の束を見て、アイスバーグは驚愕する。

「造船史上最悪の”バケモノ”だ」

政府がこの設計図の存在を嗅ぎつけ動き出していた。

自身が持つていては危ない、と新たな世代に手渡す事を決めたのだと伝える。

怖いけれど受け取る。冷や汗を浮かべながら口にするアイスバーグとは真逆の反応を示したのはフランキーだった。

「まだ分かんねえのか!!　こんなもんこの世に存在させちまったら」

「ああ、世界は滅ぶ。たっはっは……!!」

にこやかに笑うトムの後ろから、淡々とした声が響いた。

「違う、世界は一度、半分滅んだのよ。その戦艦の名はプルトン。冥界の王の名を冠した戦艦兵器。製造されたのは大昔のここ」

「がたりとアイスバーグが立ちあがる。」

「なぜ知っているかは聞かないでね。どうして知っているのか、

わたしにも説明が出来ないから」

人差し指を唇にあて、アンは静かに笑んだ。

この設計図は世界のどこかに眠る、同型船がもし使われそうになった時、対消滅させるために残されたと推測していると言葉を繋げる。

収納されていた蒸気機関車の設計図を取りだし、アイスバーグが受け取った古紙の一枚と並べた。

「世界政府は異端知識として封じた技術を欲している」

図を見比べていた視線がアンを厳しい表情で問う。憂いを浮かべた瞳は、到底１１歳の少女の物とは思えなかった。

「過去は既成事実だから、変えられない。変化するとすれば、これからの時間なの。わたしは世界政府を擁護している訳じゃない。トムさんをロジャーの船を造ったからと言って断罪するのは間違っていると思うし、プルトンをはかりごとをしてでも手に入れようとするあの男の事が大っ嫌い」

年相応な表情に戻ったアンはトムの横に座る。

「大海賊時代で一番苦しんでいるのは、普通に暮らしている人々だよ。兵器を手に入れた世界政府が、戦禍を拡大させるのは目に見える」

バスターコールという、海軍による無差別虐殺方法が実在しているのだ。

眠り続ける兵器を、無理矢理叩き起こす必要など無い。伝説という夢物語は伝説のままにしておく方が良い時もある。

「どうしてもわたしのことが信じられない、というのなら。とっておきの秘密を言っネ。煮るも焼くもどーんと好きにするがいい！」

胸を張って宣言した後、トムが笑う。

「…あのなあ、そんな爆弾おれ達に投げるなよ」

「ンマー、その自信はどこから出てくるのか脳みそ開けてやろうか」

「ついでだ。わしの不安要素も二人に言っておこう」

しきりに笑った後、そう言ってトムが提示したのは、幼い少女の写真が写る手配書だった。

SIDE スパンドム

設計図は間違いなくあいつが持っている。

世界政府、諜報機関サイファーポールの権限を最大限生かし、手に入れた情報だ。間違っているはずはないのだ！それなのにあの魚はオレ様に、諜報部員なら自分で調べると言いやがった。

既にお前の調べはついているのに、だ。

”司法船の約束”なんぞ冗談じゃねえ。

奴が大罪人でなきゃ、オレが困るんだよ。

五老星に繋ぎをつけ、折角得た権限が取り上げられてしまう。

闇の正義を執行できる椅子は新たな権力を手に入れるための第一歩なのだ。こんな所で牛歩なんぞ踏まされてたまるものか。

父のようにこの手に掴む。期待されてるからなあ。張り切っちゃうだろう。

CP長官の座の座り心地は絶大に気持ちがいいだろうなあ。オレは親の七光でも気にはならないんだが、どうしても功績が必要らしいからな。上と話をつけるのも大変な重労働だよ。いちいちお伺いを立てなきゃ何も出来ないなんて、面倒くさすぎる。だからオレはそんなもんが不必要な所まで登りつめやるのだ。

罪状なんざ作り出せばいいだけの話なんだからな。

オハラ的一件でも、嬉しそうに真相を酒を飲みながら話してくれ

たっけ。

今度はオレが、してやる番だ。

全てがオレを敬いひれ伏すのを想像をするだけで、何とも言えない高揚感が沸き出てくる。いいねえ、いいねえ、そうでなければならぬ。なにせオレは、世界を支配する政府の暗部を担ってるんだからなあ。

今までオレの思い通りにならなかったことなどないのだ！
知ってるだろう？

オレを怒らせるとなあ、皆殺しですら簡単にできるんだよ。正義のための尊い犠牲としてなあ。

誇りに思えるだろう？

オレの立身出世の役に立てるんだからな。這いつくばらせてやろう、愚民共よ。この世界をまあるく納めている影の役者たるオレに、さあ、さあ！

10年以上続く大海賊時代に終止符を打ち、あの高みに君臨するのはこのオレだ。

古代兵器を手に入れた暁には、今までオレ様に苦汁を飲ませてくれた奴らに試し打ちを受けさせてやろう。

「さんざん苦労を重ね調べ上げて得た好機をみすみす棒に振ったまるか！！」
チャンス

そういえば廃船島に船が転がっていたはずだ。

呼び寄せた工作部隊にそれを操作させ、司法船を襲わせるのも悪くない。

オレは中央政府の象徴だ。愚民どももまさか同じ政府で襲撃を考えるなんざ思いつきもしないだろうしな。よしよし、このプランで

いくか。もし目当ての船が無くても、あつらえばいいだけの話だ。

オレは指示を出す。

さあ、Ｔ・ワーカーズ、このオレ様をここまでこけ下ろしてくれた罪を償って貰おうか。

お前ら自身の身でな。待っている、すぐだ、すぐに思い知らせてやる。

14 - 凶器を生む腕

さすがに4日間、連絡なしの外泊はダメだったらしい。

義祖父であるグループは街中なのだから多少放っておいても死にはしないだろう、と放任を推奨していたがその他が黙ってはいなかった。

数人がグループを組み町の表裏を探しまわっていたのだ。

アンはといえばほくほく顔で宿に向かって歩みを進めていた。

思いの外切りだした肉が大量になってしまった為、トムから小さな荷台を5つ借り、電車のように繋げて水路横の通路を地道に歩いていたのだ。

何か騒がしいなあ、と裏通りから表に出た時に海兵達とばったりと出くわした。

どこに行っていたのかと怒る者、安心したと肩を丸める者、誰もがアンの事を心配していた。

していなかったのは、自由人の義祖父だけだ。

初めての感覚にくすぐったくなりながらも、声をかけてくれるひとりひとりに、ごめんなさい、を伝える。

宿に着くと、ボガードから静かに言い聞かされ、義祖父には楽しかったか？と問われた。

もちろん答えはYES、だ。

持ちかえった荷台の山はすぐさまどこかに運ばれて行った。その際に塩焼き希望と伝えるのも忘れない。どこで貰ったのかと聞かれても、満面の笑顔を浮かべるだけだった。

「食べきれないからって、分けて貰ったの」

宿の料理長が腕まくりをし包丁を手に奮闘し始めた頃、アンは義祖父に連れられるまま部屋に入る。

広い部屋だった。窓からは遠くに海が見える。観葉植物が置かれた室内には、ソファや簡易のキッチンまで付属していた。

そして一番目を引くモノと言えればやはりそれだろう。白い山。船から運び込まれた書類が床に積まれている。

「おじいちゃん、これなに…」

たった4日で書類がこんなに溜まるものだろうか。

「ほとんどが訓練報告書じゃ。ほっとけ、それよりもそれに着替えてみい」

並ぶベットのの上には、白の衣類が置かれていた。

「まったく。わしじゃなく、お前の世話を焼きたがる奴らが多くて困っておる」

緑茶を急須で注ぐ義祖父に、わたしもーと茶碗を持ってゆく。

1年に二度は必ず、休みを取り様子を見にガープは山へやって来た。

その殆どは成長を確かめ普段足りていないスキシップを補う為という名の肉体言語だったのだが、お土産も忘れず持ち帰って来ていた。

どうしてもゴア王国で手に入らない本をねだったのも一度や二度ではない。しかしすっかり者の義祖父は忘れて帰って来るのも多かった。しかし、必ずと言って持ちかえって来ていたのはワの国の緑茶と、せんべいだ。

アンは緑茶をいつも楽しみに待っていた。お茶の香りは懐かし景色を思い出させてくれる。堅焼きせんべいも然りだ。

家の近くにあった、手焼きのぼたばたや、七味せんべい、海苔せんべいなど、思い出しただけでも味が思い浮かぶ。

手に取り広げて見ると、制服だった。帽子はさすがにサイズが無かったため用意されてはいないが、ちゃんとアンのサイズに仕立て直されていた。

「階級は本部についてからじゃな。今は私服でもかまわん。しかし…司法船が港についた後はそれを着用せい」

義祖父の言に、はて、何か自分もするのだろうか。疑問に首を傾げているとソファアに座ったガープが大きなあくびを放つ。

「司法船にはわしらがW7に停泊しとるのは伝わっておる」

その先に続いた言葉は、アンに衝撃を与えた。

お前にも警備に当たって貰うことになったとるんじゃ。

ちよつと待つておじいちゃん、わたしそれ困る。待ち伏せ作戦の計画がああ。

心の叫びに向こう側でびくりと身を震わせたエースは放っておき、こめかみにしわを寄せ、急いで予定変更プランを練り直す。どうしても、1隻、一番渡つて欲しく無い危険な船舶が敵に奪われそうな気がした。敵対相手は夜の闇に紛れて工作するなどお手の物だろう。フランキーの大切な船を使わせてなるものか。必死に考えても、何も思い浮かばない。だけれどなんとかしたかった。

アンは義祖父の横にちよこんと座りガープの袖を掴む。こうなれば実力行使だ。力押しするのはアンの流儀では無かったが、今回はかりは仕方が無い。

どうした、と目で問う義祖父に

「ねえおじいちゃん。ちよつと裁判の日、暴れるかも…しれない。何事も無ければ、何もしいけれど、そうなたら許してね」

ほほう、と楽しそうな笑顔が浮かぶ。

「わしにも言えんことか」

「ううん、最近この海域に商船ではない船が頻繁に出るんだって。司法船って豪華客船にも見えるから危険だよねえ」

「…それは確かな情報か」
「ほぼ」

アンは立ち上がり着替えてみる。

仕立てられた制服に袖を通し赤のリボンを胸の前で結んだ。海兵が普段身につけるリボンは、青と決まっているが、適当な長さのモノが無かったのだらうと勝手に納得する。

「この服を着たら、気軽におじいちゃん、って呼べなくなっちゃうね」

「そうじゃのう。けど呼んで貰って構わんからな。わし気にせんし」

暢気のんきだなあ、とアンは思う。しかしこの気の良さが、義祖父のよい所でもあった。ガープ中将、を船に乗る誰もが悪くは言わない。上司である事実は横に置いて、ひとりとして居ないのだ。

自由奔放で、破壊魔で、どこでも寝落ちて。ああ、この寝落ちるのは一家の遺伝みたいなものだから関係ないかと思ひ直す。けれど、艦の誰もが義祖父を慕っていた。

長く中将と言う責任ある立場に立ち続けていられるのも、この人柄だからだろう。

年功序列ではないが、力の衰えた老兵は第一線を退き新人育成などの後方育成に回るのだという。この歳になっても中将という肩書を背負っていられるのは、さすがとしか言いようが無い。

ところでおじいちゃん。

急須持ったまま寝ないで？その鼻ちようちん壊してもいいかな。

「おきろっ！！」

アンの大音声によって海兵達が駆けつけるといふ、後に常習化する祖父子喧嘩がここから始まった。

裁判の判決まで残り24時間。

司法船が到着したとの報を受け、アンは義祖父と共に4番ドック

前に停泊した世界政府の船舶へとやって来ていた。

戦艦よりは小ぶりだが、中央にはエニエス・ロビー、世界の法を司る裁判所と同じ造りの建物が在している。中は裁判所というより教会のようだった。

義祖父はなにやら裁判長と話をしている。耳をすませば聞こえるだろうが、盗み聞きは無粋だろう。

待機を言い渡された列で、アンはこっそりと仲良くなった海兵から、エニエス・ロビーについて話を聞いていた。

不夜島と呼ばれる特殊な立地に司法の砦はあるという。夜が来てもその島の周囲は決して闇に包まれない。世界政府という光が不変である、との象徴も含んでいるらしい。

「アンもその内に行けって言われるぞ、エニエス・ロビー」

「なぜ？」

「六式の道場があるからさ」

身体能力が高く、資質が認められた人員が集められ厳しい訓練を行っているという。

しかもこの島はサイファーポール、略してCPという海軍直属の情報収集機関の本拠地となっていて、集められたメンバーから史上最強と言われるチームが結成される、との密かに囁かれてもいるそうだ。

「CPはやだなあ……」

野心ばかりが大きく、無能な上司にはつきたくは無い。

しかし勿体無いと海兵達は言う。給与が全然違うんだ、と。

危険な仕事に対する報酬が膨大なのは、当たり前前の話の話で……

「終わった。帰るぞ!!」

アンも居並ぶ海兵達と同じように拳手敬礼に習う。順次歩き出す背中を追って背を壇^{だん}に向けると、視線を感じ振り向いた。先ほどまで義祖父と話していた裁判長がアンを見ている。孫娘の話題も話し

たのだろうか。ぺこりと一礼して列を追う。

当日は大勢の住民が押し寄せてくるだろう、ということでガープ中将率いる一軍は港の周辺の警備に当たるといふ。船の出来上がりは明日らしく、結審の時間には船を浮かべられない。

「で、どこら辺からの予定なんじゃ」

さあ。そこまでは。

にやにやと楽しそうな義祖父に問われても、言いようが無かった。夢では方向まで確かめられない。あっちっぽい、という不確かさであれば伝えられるが全方向にまんべんなく目を配った方が対象物を見つけやすい。

「おじいちゃん、楽しそうね」

「まだ隠し玉があるじゃろ」

さあ。それはどうでしょう。

わざわざ手の内を見せるほど素直では無い。爪は隠すに限る。それがたとえ肉親であっても、だ。

「じゃあお爺ちゃん、ちょっと出かけてくる。遅くても朝には帰るから」

「行つて来い!!!」

行かせるのか!

朝帰りなどなんのその。義祖父は海兵達の突っ込みなど気にはしない。

「大丈夫。危ない事はするけれど、怪我しないように頑張るからやるんかい!!!」

ガッツポーズをするアンに、義祖父で鍛えられた皆の突っ込みが炸裂する。

「えへへへ」

やっぱりガープ中将のお孫さんだ。

と言う声がどこからともなく聞こえてくる。

心外な。おじいちゃんよりましだと思っけれどなあ。頬を膨らませて抗議するが、頭を撫でられ頬を突かれ、揉みくちゃになって終わってしまう。

ちゃんと帰って来ると何人もと約束し、アンは町中を走る。幅のある水路も一飛びだ。昨日鞆を拾ってくれたおじさんを見つけ手を振る。最初は吃驚していたものの、笑顔で振り返してくれた。本を投げ捨てた3人ともすれ違う。

その中のひとりがアンに気付き、顔を引きつらせた。

「…ほどほどにね？」

ごくり、と喉が鳴る音が聞こえる。それ以上は何も言わない。

階段倉庫を横切り廃船島に降り立った。

受注を受けていた船も仕上げに入っているようで、細かな微調整をしているアイスバーグを邪魔しないようトムに抱きつく。

「似合うじゃねエか。わざわざ見せに来てくれたのか。たっ…！」

！…！！…！！ ケツサク

「馬子にも衣装だな」

「うわ、さりと酷い事言われた」

アンはトムから降りる。

「フランキーは？」

尋ねるとアイスバーグがくい、と親指を浜辺の方に向ける。

「懲りずに36号造ってる。あのバカンキーが…！！」

「なら35は壊してもいいよね」

「手伝おう」

待つてましたと言わんばかりに、大振りのハンマーを手にしたアイスバーグがにやりと笑う。

アンも拳を握り、35号へ迫った。

「待て待て待て待て！！ まだ壊すな！！ おれの大切なバトル

フランキーなんだ!!」

両手を広げ、必死の形相で制止する。

「…この戦艦がもし、使われたらどうするつもりかな」
にこやかにアンは問うた。

「何に？」

「司法船の砲撃に」

さらりと恐ろしい事を口にするアンをアイスバーグも何事かと見る。

「上手く裏から手を打つとか、暗躍してこっそり工作するとか。考えても全然いい方法が浮かばなかった。苦手って言うのもあるんだけど正面突破しか思いつかないんだよね」

何の話をしているのか、フランキーにはさっぱりだったが、アイスバーグは気が付く。

「設計図…」

アンは無言だった。

「それとこれとは話が別だ!!」

「司法船を襲撃した犯人なら街の人達は喜んで差し出すよね。CPもそっちの方がひっ捕らえやすいし。法的にも、ね。海軍にも裏組織があるみたいなの、しかも相手は此方側の都合なんて知った事じゃない」

「おれの船はそんなことしねエよ!!」

バカンキー、アイスバーグはそうつぶやく。結局解っちゃいのだ。

「例えば、の話をしようか」

アンは廃材として足元に転がっている一本の鉄パイプを足で器用に立て、手にする。

この鉄パイプ。トムさんやアイスさん、フランキーが手にすれば船の一部となり、向こう側の岸を目指す船の一部となるでしょう。けれどこれをわたしが持った場合、武器に変わる。この木の破片だってそう。わたしは人を傷つける道具に出来るよ。

「こういう風に、ね」

アンが振りかぶった鉄パイプが風鳴りを起こした瞬間、その先に形を残していた船尾楼が凄まじい音を立て破壊された。

だから壊す。憂いのあるものはすべて。

「ここまでやっても、相手は何手も先を考えて回り込んでくるだろうけどね」

権力とは麻薬だ。一度味わってしまうと、より強い刺激を求めて次々と欲してしまう。

「フランキー、起ってからじゃ遅いんだ」

いいか、おれ達の腕は、この世に凶器を生む腕だ。例えお前にその意思が無くても…凶器は構わず誰かを傷つける。それがお前にとって大切な人間でもだ。

いつになく静かな声で、アイスバーグは語る。

「覚悟はある？自分の造ったものが誰かを傷つけ、トムさんの冤罪を本当の罪にしてしまう可能性が起きたとしても、この船は自分のものです、と胸を張って言う自信、あるのかな」

強い意思が籠った目に、フランキーは思わず身を引いた。

「アイスバーグ、アン、それくらいにしてやんな。明日という判決が下っても、ドンと受けてたつさ！！」

どっこいしょ、と今まで静観していたトムが立ちあがり、ぽんとふたりの肩に手を置く。

「ヤダ。抵抗くらいさせてよ、トムさん」

張り詰めていた空気がぷつん、と途切れた。

「35の動力、全部切断しとくよ…」

「ンマー、ならおれが今からしてやる。船大工技師じゃないと、直せないような切り方だな」

脱力し足に力が入らなくなったフランキーに代わり、アイスバーグが船に乗り込み口元に濃い笑みを浮かべる。

「…手加減しろよアホバーグ」

多少納得がまだ出来ていない顔をして、フランキーは悪態をついた。

15 - 判決の行方

爆音が轟く。

一度に飛んでくる弾の数は7、どうしてもひとつふたつは取りこぼしが出来てしまう。マストが折れ、船は炎が立ち始めている。

港は阿鼻叫喚の様子を見せていた。耳をつんざく、悲鳴が煩いほど聞こえてくる。

海軍の一部隊が駐屯しているといっても、大砲の弾を受け止めたり、追撃したり、叩き斬る力を持った戦力は案外少人数だ。

義祖父も陸側から砲弾を投げ、撃ち落としてくれてはいるが、爆風がこちらに熱を含んで大量に流れて来ていた。

おじいちゃん、熱い、熱くて痛い。もうちょっと向こう側で当ててくれないかな。

わぶ、と黒煙を浴びながらアンは煤を手の甲で拭う。

義祖父へは無論、声は届かない。

小型船が3隻、どれも武装を施された船だった。

だが夢で見ていたような、手に負えない破壊力では無い。

フランキーの戦艦を昨日きっちり処理したことで、見続けていた夢が途絶え未来が方向性を変えたのだ。

しかし本来の流れを補足するように、敵側に強力な砲が与えられている。

全てでは無い。

だが弾を打ち出す砲のいくつかは、バトルフランキーに積まれていたものだった。浮かんでいる船も廃船島のどこから調達したものだろう。撃ち出される弾の攻撃力もさすがに強力だ。既製品にフランキーが独自の改良を加えた特別砲は、射出時に二重の爆発を行わせ弾の威力の底上げする。目についたものは叩き壊すか分解する

か、の2択をしていたのだが、どうやら昔の型や作りかけで放置されていた砲が再利用されているようだった。

覇気を守りとして纏い、鉄塊を使って弾をはじいても掌がビリビリと痺れてくる。

ウォーターセブンへ辿り着くまでに多少は持ち得る力をかさを増したものの、このままでは歩が合わない。そんな事を考えていると後方より声がした。

「まだ右方向の詰めが甘いですよ」

「ボガード副長！」

鉄弾が真つ二つに割れ、爆風を生みだす。

煙はもちろんアンを直撃した。風の関係でどうしても被ってしまったのだ。火薬を含んだ爆風を受けて、既に服も体も真つ黒になっている。

「中將からの言葉です。首根っこ押さえて来い、だそうですよ」

「待つてました！了解！！」

司法船を足場に剃と月歩で砲弾を弾いていた体が空を駆ける。

目指すは3隻の船、出来れば操っている人員の確保だ。

「思い通りになんかさせるものか」

強い意志が言葉に籠る。

司法船の中では砲撃が続く中、ひとりの人物が壇上に座したまま目をつむっていた。

「裁判長もお早く！！ 集まっていた住民の避難、全て終わりました！！」

何者かが司法船を狙っている。

という噂を聞いた。

ガセである可能性も高いがしかし、もしものためにお伝えする。

昨日、中將が帰り間際につぶやいた言葉を裁判長は反芻^{はんすう}していた。

この日に司法船がW7へ入港する事実を、町の人々は知っているはずだ。海賊王の船を造った人物とは言え、この町を憂い、海列車という希望を造り出した男でもある。

免罪であることが既に決定されていた。

判決はこの施設の中で言い渡されることによって、効力を発揮する。

司法船を攻撃すること自体、罪問われる行為だ。

誰が何のために起こしたのか。

今日この場で無罪が確定すると困る人物が紛れ込んでいるのではないか。

裁判長は示された事実だけを元に、己の良心へと問うのが仕事だ。裁判長自ら、基となる事件の詳細を調べに赴く事は無い。調べた情報を集めるのは他の機関が行うからだ。

通常、世界政府が危険人物であると判断を下した極悪人の場合、こうして司法船を送りだす事無く特殊部隊が身柄を確保し、そのままエニス・ロビーに連行される。出されると言う事は、罪ではあるが許容されるべきだと暗に示されているようなものだ。

真相は果たして。

光が当てられるのか否か。

裁判長は爆音が鳴り響く中で深い息をつく。

その頃スパンダムは双眼鏡を手に、司法船から上がる煙を満足そうに見つめていた。

海軍中將がこの町に駐屯していると知り多少の動揺はしたものの、計画は着々と思い通りに進んでいた。廃船島と呼ばれる場所にあるはずの船が見当たらず、多少の時間は食ったものの諜報部員達は想像していた以上の働きをしてくれた。

パーフェクト、という言葉はこういう時にこそ使うものだろう。
計画に落ち度はない。

『正義のための犠牲』とは、なんと甘美な響きを持っているのだろうか。

「さあ、裁判を始めようぜ。トムズ・ワーカーズ……」

ある程度のダメージを与えた武装船は、廃船島に戻ろうとしていた。岸にはトムとアイスバーグの姿が見える。時間との戦いだっ
た。

「そう…正義のための犠牲、ね」

音も無く静かに1隻の船の上に降り立つ姿に、黒のダイバーズ
ツを着込んだ男たちがおののく。急いで海に逃げようとする姿にア
ンはありったけの威をぶつけた。ぷかり、と波間に3つの背が浮か
ぶ。

覇気だ。

まだうまくコントロール出来ない為、広範囲に余波が及んでしま
うが今回ばかりは致しかたない。自身にもぞくりとする感覚が走る。
自らの内にある畏れだ。頭をふり、振り払う。
かぶり

舌を噛まれて自害されるとあとあと面倒なので、引きあげた男達
に転がっていた麻のロープを使ってさるくつわを作り噛ませた。世
の中には変わった趣味を持つ人達も多いようで、フーシャ村の書庫
には縛り方事典なるものもあつたりする。主な用途として、獲物を
持ち運ぶ時、便利だなーというそれだけで結び方を練習したのだが、
こんな所で役に立つとは思ひもなかった。

3人を個別に縛り上げ、それぞれが動くとき縄が食い込んで痛みが
倍増するように、結合してから港へと船を移動させる。

その際にアイスバーグとトムに手を振った。目の良い二人なら、見えるだろう。見えてください。半ば願いだっただ、大きくバツを頭の上に作り、教える。来ないで、と。

放心状態から回復したアイスバーグが遠くで見える姿に最初は首を傾げていたが、ぽんと手を打ち合わせ走り寄るのをやめた。指でサムズアップしその場で手を振る。そこへフランキーが合流した。

「トムさん、大丈夫か!？」

「なあに、まだ何も起きてねえよ。ところで今日はしっかりズボンを穿いてるな」

「見んのそこじゃねえだろう!！」

フランキーは観点のずれたトムの言へ、迷わず突っ込みを入れた。そして遠ざかってゆく船に、よく知った顔を見つけ、つぶやく。

「…アンがいる」

「ドーンと何かやらかしたな」

三人は船を見送るがしかし、不意をつくように後方から声が降った。

「さあーて、我々も向かいましょうか。司法の場へ」

港では医師が飛びまわっていた。

突然その場で気を失うという、怪奇現象も重なっててんでわんやと騒ぎになっている。

さすがに義祖父や同乗していた海兵達は幾度かの経験があったため、冷静に状況を判断し対応しているものの、裁判長や護衛の将校は気を失ってはいないまでも何か落ちつかない心持のようだった。乗組員達に至っては殆どが倒れ泡を吹いている。

そこへ襲撃犯を連れて来たと宣言する男がやって来た。スパンダム、だ。

「ご安心を皆様！！ 襲撃犯は我々、C P 5が仕留めました！」
声高に両手を後部に戒められた3名の人物を広場へ押し出す。
人々から声が上がった。

世界政府の役人が連れて来たのは、ウォータセブン再生のきつかけを作った人物達だったからだ。

トムがなぜこんなことをしたのか、と。裁判を待てば罪が消えただろう事を。そして結局は海賊王の船を作った職人は、魚人という種はやはり野蛮人なのだと罵る声さえざわめきの中に発せられる。

「どうもお初に… 奴らの身柄は我々に…！！ 取り調べをした
いので」

握手を求める手に、裁判長は応じる。

「ああ、君達も居たのかね…」

証拠品の船を港へつけた所へ耳触りの良くない声と見るに堪えない表情を浮かべた男の横顔が見えた。

目が腐りそう。アンは視線をがつり反らせる。だが見ないわけにもいかなかった。男の後方には、アンが助けたいと願う3人の姿がある。

この場に連れて来られる際、抵抗したのだろう。ところどころに赤い染みが見えた。

簡易ではあるが、テーブルと椅子が用意され、そこに裁判長が座る。

裁判の判決はここで下されることとなった。延期は無い。
向かって右側にスパンダムが、左側に義祖父が立つ。

覇気をモロに受けた3人はまだ目を覚ましてはいない。成り行きをとりあえずは見守る事にした。

木槌が打ち鳴らされる。

「まずは…」海列車”の件。見事という他に言葉は無い。これから先、このウォータセブンの発展に深く貢献してゆくことだろう。それによって…前科、G・ロジャー^{ゴールド}の海賊船製造の罪は今日、免罪となる」

しかしながら…

「先ほどの襲撃はお前達であるという言が上がつている。なぜ罪を重ねた」

「ふざけんな!!」

裁判長の言葉を遮るように叫んだのは فرانキー だ。

襲撃犯では無い、本当の首謀者は スパンドム という バカ野郎だ、と主張するも周囲からは嘲笑がわく。そんなことあり得ないという笑いだ。

「政府機関の C P 5 が司法船を沈めてなんの得になるって言うんだ!!」

「全く、バカなのはお前だよ!!」

フランキーは強く歯を噛みしめる。大笑いする政府機関に反論すら出来ない。

「カティ・フラムと言ったかな!!? そもそも我々は船に乗っていた君らを”現行犯”で仕留めたんだぞ!!」

「廃船島には居たが船には乗ってねえ!!」

「では襲撃の船は君たちのものだと言う証拠を持ってきても構わないのだがね!!」

勝ち誇った物言いに何を言っても無駄なのではないかと歯ざしりし、フランキーは叫ぶ。

「あんな船、おれのじゃねえ!!!!」

その瞬間、トムは掛けられていた手の枷を引きちぎり、フランキーの頬を殴る。

回りを囲っていた人々が騒ぎ始めた。海軍も銃を構える。

「トムさんが…初めて…フランキーを殴った！！！」
アイスバーグは驚きのあまり、膝立ちになる。

「”おれの船じゃねエ”！！？ フランキー…それだけは…言っちゃいけねエ！！！」
トムは見ていた。

打ち捨てられた古い型ではあったが、まぎれもなくフランキーが作った砲が船に積まれていた事を。

どんな船でも造り出す事に、”善”も”悪”も無い。この先お前がどんな船を造ろうと構わねエ。

だが…

「生みだした船が誰を傷つけようとも！！ 世界を滅ぼそうとも！！！！ 生みの親だけはそいつを愛さなくちゃならねエ！！！！ 生みだしたものがそいつを否定しちゃならねエ！！！！ 船を責めるな！！！！」

びりびりと震える空気の中、師匠が弟子を諫める。

そう。どんなに疎まれる、世界にはた迷惑な命であっても。父と母、そして義祖父は大切に守ってくれた。それと同じく船にとってフランキーが父であり母なのだ。

アンはトムの言葉に涙が出そうだった。

「造った船に！！！！ 男はドンと胸を張れ！！！！」

静寂が生まれた。

トムの口が何かを伝える。ふたりの弟子が、師匠を見上げた。

そして視線を上げたトムが見据えるのはスパンダムだ。

自分の造った船を…その一部であれ汚れない船をこんなことに使われて…悔しかろう。

そしてトムが動いた。大きな体に見合わない速さで距離を埋め、スパンダムに拳を振り下ろす。

しかし。

「魚人、暴れるな。ここは仮設といえども神聖な裁きの場だ」
間に割って入ったのは、アンだった。

トムをアイスバーグとフランキーが座す場所まで吹き飛ばす。

「よくやった!!」

スパンダムが喜びの声を上げるが、耳が汚れる、しゃべるな、と心の中で呪詛のように唱える。

「ガープ中将閣下、遅くなり申し訳ありません。裁判長、このようないでたちで失礼致します」

アンは敬礼を取り、引きずっていた3人の男を放る。

「報告致します。司法船を襲撃していた船舶を操っていた3名、確かに捕らえました」

「御苦労」

腕組していたガープがにやりと笑む。

裁判長も少女の衣服が火薬とすすで汚れ、海に入っただのか濡れたままの姿を見た。そして昨日退出の際にぺこりと頭を下げた人物だと知る。その上で船を守ってくれていたのはこの小さな人物だったのかと結した。

「襲撃犯はあそこにいる者たちではなく、今この場へ連れて来たこやつらなのだな」

「はい」

アンははつきりと応える。

視線が向くのはスパンダム、だ。どういつことなのかと、質疑の聲が放たれる。

「船に乗っていた被告らを”現行犯”で？」

裁判長の言に、男はしどろもどろといいわけを始める。誰もに聞こえるよう、裁判長は大きく息を吐き、もつといいと制止した。

「冤罪、を持ちこんだという認識で構わんな、C P 5」

裁判長は声高に宣言する。

「前科、海賊船製造の罪は海列車の件にて無罪とし、司法船襲撃の件はC P 5の確認不足のため冤罪とする！！ ただし、未遂といえど政府機関関係者に危害を加えようとしたのは明白である。暴行未遂に関しては後日通達するものとし、裁判を閉会とする。以上だ」

襲撃犯をひっ捕らえろ！！

ガープの声に、海軍が動いた。余りに固く、解くのも一苦勞する結び方であるため、ずるずると引きずられてゆく。

「わしが魚人の身柄を預かるう。裁判長、よろしいかな」

「中将でしたらお任せ出来るでしょう」

スパンダインがトムはこちらで…と言おうとしたところを、すかさずガープが言葉を割り込ませる。だがしかし、海軍預かりになるならば、こちらに引っ張って来る事も出来よう、と追言は避けた。形は違っているものの、連行出来るのには変わりが無い。

再度手錠をかけられ、連れて行かれようとするトムが一言、フランキーに語る。

「フランキー、おめエ…自分を責めるなよ」

まさか政府に設計図を狙われるとは…ロジャーの件でわしは不利な立場にいたな。

小さな声はまだ続く。

アンの名前を呼んじゃなんねエよ。

解放された弟子たちにココロが駆け寄っていた。一度も視線を合わせてこなかったアンに、どうして、という思いをフランキーは抱える。

「トムさんはもう…助からねエよ……」

連れて行かれる先は、エニウス・ロビーかはたまた海軍本部か。どちらにしろ、もうこのウォーターセブンへは戻って来られないだろう。

ココロが唇を噛みしめて言う。

あそこへ向かった罪人が帰って来たためしは一度だってねエんだ、と。

「…も汚ねエヤツらの一味か」

「いや、トムさんを守ってくれたんだ。あそこで殴れば、問答無用であいつらに連れて行かれてた。爺さんなんだってよ。悪いようには…ならないと信じる」

それでも。

フランキーは立ちあがる。

「ココロさん…アイスバーグ…おれ、やっぱ無理だわ」

意気揚々と引きあげようとするスパンダムへ、フランキーは肉薄する。手にはこん棒が握られていた。力任せに振り切る。死んでも構わなかった。トムを廃船島から、ウォーターセブンから自分から奪おうとするこの男が憎くて仕方が無い。暴れても何もならないと分かっていた。けれど気持ちに整理などつけられなかったのだ。

なんの為に、大切な船を解体した！

設計図を守る？

んなの関係ねエ！ トムさんを連れていかせない為だ！！ おれはまだ、教えてもらいたいことが山ほど残ってる！！！！

「フランキー！！！」

「今度はトムの弟子が暴れ始めたぞ！！！」

「スパンダムさんの顔がまがった！！！」

少し離れた場所でアンはその様子を見ていた。

「止めなくてもよかったの、って顔に書いてるよおじいちゃん」

「はて、そんなつもりはないんじゃないかな」

「止めるものか…顔もついでにまがってしまえばいい」
くすくすとは笑いを含む。

計画が頓挫すればいいわけをする。悪を背負いきれていない小物などどうでもいい。

世界政府は文字通り、世界を統治している機関だ。定められた法の範囲内であればあらゆる行為は正当化される。

人の命など関係無い。従わぬ者であれあなおさら、世界にあれば害するものだ。法を守る為なら多少の犠牲は致し方無い。尊い犠牲者として石碑に刻んでやる。必要だからこそ策を講じた。あいつは世界を滅ぼす兵器の設計図を持っているのだ。

と、ここまで開き直っていたなら清々しさすら感じられるだろう。しかし中途半端だった。いいわけなど見苦しいだけだ。興味も無い。

既に様々な所がまがりきっているのだから、ついでに顔も成形されればいいのだ。根性もあそこまで歪になっってしまうえば、もしカウンセラーが居たとしても修正する気すら失せるだろう。

「わしらも明日には出航じゃ。列車に乗る裁判長を見送って来る宿で先に風呂でも入っとれ」

アンは素直に、義祖父の言に頷いた。

ここから先、出来る事は何も無い。干渉できる範囲から、物事が出て行ってしまった。

数時間後。

トムが海列車に積み込まれたという町の人々の言葉を信じたフランクキーが、海列車を止めるために立ちはだかったという話を、アンは聞く事になる。

16 - 海軍本部

ウォーターセブンから数日で、本来の目的地へと到着した。

青い海の中に浮かぶ、三日月形の島には大きな建物が中央にそびえ立っている。

壮観だった。夜更かししすぎて眠い目もぱちりと開く。

水の都も綺麗な街並みをしていたが、頑丈であれと造られた、どつしりとした本部の姿はさすがに目を見張った。

日の当たる時間に甲板に出るのも久しぶりだ。きらきらと光る青のまぶしさに目を細める。

本部に着くまで最低限の訓練と雑用を終わらせると、船底にある牢でいろいろな話をするのが日課となっていた。昼ごはんも皿に積んで下を持って行き、トムと一緒に食べる。大きな体をしている割にはそんなに量を必要としなかったため、アンが持ちこむ量で充分だった。

「心配するな。CPには渡さん」

裁判の夜、アンは義祖父に全てを白状させられていた。

だから短い航海の最中、アンが船底へ通うのを止めなかった経緯いきやつがある。

夜の鍛錬だけは変わらず続けていたが、エースからは今回の件に關して、やっぱおれ海賊の方が気楽だ、と言わせてしまった。海軍の全てが汚れている訳ではない。ただ白いままでは処理できない、大人の事情といういろいろがあるのだらう。

無い方が望ましいけれど、組織を運営する為、社会生活上、やむを得ず必要とされる物事……必要悪もまた世界にはある。

エースには思うがまま、やりたいようにすればいいと、それだけ

を初日に念押しされた。

そのほかは他愛の無い、ルフィーがワニにまた丸のみされたとか、幼い頃に放り投げられた谷に向かっていているだとか、マキノが服を届けに来てくれたとか。

森での生活を、瞼を閉じれば思い描く事が出来た。

（そういえば”不確かな物の終着駅”に人が戻って来てるって言うたのは？）
グレイターミナル

（ああ、お前が言ってた通り、ゴミの投棄が始まったんだ。門が開いてる間は軍隊が銃を撃ってくるけど、ありや威嚇だな。締まった後に生き残った奴らが漁ってるみてエだぞ）

ふうん。

焼かれてから2カ月、でもまあそんなものか。とアンは指折りながら片手で腕立て伏せを続ける。

（あとルフィーが剃を覚えてぞ。次は空を飛ぶんだと張り切ってる）
（わたしやエースも使うから、時間の問題とは思ってたけど）

弟は動体視力が小さな頃から優れていた。しかし体がゴムであるため普通の肉体を持つ人と同じ訓練をしても習得には至らなかったのだ。能力の特性を生かし伸縮、を傾ける術を考えだし、手にしたという。

（発想の転換、柔らかいね）

（まあな、体も温まっただろう。さっさとやっちゃまおう。今日は大分走ったんで眠いんだ）

そして船が着岸する。離陸準備をし港へ降り立った。

船は3日の停泊後、新たな航海に出ることが既に通告されている。アンは海兵達にまた明後日、と挨拶をし義祖父と共に本部へと向かう。

まず通されたのはガープの部屋だった。

なぜか途中から義祖父に抱えられて部屋まで連行されると言う、意味不明な事をされてしまい、今はちょこんとひとり取り残されている。

戻って来るまで待つておれ、と言いつ置かれ、それきりだ。

待つている間は茶でもせんべいでも好きに飲み食いしても良いと聞いていた。

部屋は思いの外、綺麗に清掃されていた。それはそうだろう。一応、中将殿の執務室なのだ。ぱつと見の外見からは想像できなかったのだが、外と中のイメージが違った。内装というよりは、中見まると洋風の雰囲気漂っている。全体としての外観はどちらかと言えば中華風の佇まいをしているのだが、義祖父の部屋に持ちこまれた中身はほぼ和風。なぜ置が執務室に敷かれているのかと不思議に思えば、義祖父はカーペットが気に入らなかつたらしい。海軍本部は外と内、そして各部屋の中身がてんではらばらと言う不思議な建物だった。

二間続きの隣を覗いてみると、簡易の宿泊所になっていた。

布団がひきっぱなしになっていたので窓を開けて干してみる。

見栄えが悪いとか苦情が来るかもしれないが、受けるのは義祖父だ。気にしない。

トムは本部内にある牢に投獄されると聞いていた。

ボガード副長が責任をもって連行すると、目深にかぶった帽子から優しい目を細めて言うていたから、本当だと信じる。

義祖父以外が身柄を引き取りに行っても、出さないという手続きにしているという。

ここを抜けだしてトムの気配を頼りに見に行ってもいいのだが、距離的に大分遠い位置に感じていた。廊下を通って行くとなると、すぐには戻っては来れないだろう。ここは義祖父に頼るしかない。

アンはお茶でも淹れるかと、動き出した。戸棚からまずやかんを発見し水を入れ、次いでコンロに乗せ沸かす。

同じく取り出してきた急須に湯を注ぎ、新しい布を上にかぶせ蒸らせるためしばし放置。

窓からは温かな風が流れて来ていた。暑くも寒くもない。

”偉大なる航路”^{グランドライン}に分布する島国は、春夏秋冬という4つの気候のうちどれかを基本として持っている。4つの季節が頻繁に入れ替わると言う自然環境の厳しい場所もあるらしいが、たいていは基本気候から揺らぐことは無い。

となればこの島は春か秋、なのかと考えながら、お菓子がありそうな棚をがさごと探す。

かりんとくと、しょうゆせんべいが見つかった。そのほかチョコレートやビスケット、飴類、そしてなんのために収められているのか、干し草まである。

木の大きな器をすすいで綺麗に水気を拭き取り、中に形を整えながら入れた。

これでいつ義祖父が帰って来ても、ゆっくりお茶が飲めるだろう。ソファで早速入れたばかりの緑茶をすすする。

飲み慣れた味はやはり格別だ。コーヒーもあったが、牛乳が無いとあちらでも飲めなかった。紅茶ならばストレート可能だが、コーヒーだけはどうも舌が受け付けない。

コンコン、とノックの音が聞こえた。

アンは立ちあがり、ドアをそつと開ける。

「失礼する」

中に入って来たのは壮年の男だった。丸眼鏡をかけ、海軍の帽子に等身大のカモメのオブジェクトをつけ、アフロな髪型をし、あごひげをみつあみにした。ちょっと変わった風貌の人物だ。

厳しい眼光が降る。

それをアンは真正面から受け止めた。殺気や敵意が感じられなかったからだ。

ドアの前でずっと見つめあっても仕方が無い。

「今お茶を入れていたんです。おじさんもいかがですか。義祖父ももう少しで戻って来ると思います」

「もらおう」

しばしの間を置き、男が応える。一緒に連れて来ていた仔ヤギも中に入り、小さな鳴き声を上げた。

「かわいい」

「生まれて3カ月ほどだ。以前飼っていた子が産んだのだ」

おやつがあつた棚にはなぜか、干し草まで常備されていたのを思い出し、取り出してくる。義祖父が用意する訳は無いから、ボガード辺りがもしも、を想定して備えたのだろう。

それから30分後、義祖父が帰って来た。

「センゴク！！なぜ自室に居らん！！待ちぼうけてしもうただろう！！」

「お前がいつまでたつても来んから来てやつたんだ」

「あ、おじいちゃんお帰りなさい。センゴクおじさんとお茶頂いてます」

三者三様の言葉がぶつかり合う。

ふたりのにらみ合いを掻い潜り、湯を注ぎ茶を入れる。こぼこぼと香りを放ちながら湯気が立ちあがった。

「はい、おじいちゃん。睡魔に襲われる前にどうぞ」

どかりとソファーに腰を下ろし、荒い息をつく義祖父の前に茶を置く。少なくなっていたセンゴクの湯飲みにも追加を足し、所定の位置へ急須を置いた。

黙ったままのふたりの様子をしばし伺っていたが、何かお話があ

るようだから出ておくね。中庭があるみたいだから見てくる。
そう言いアンは一礼してドアを閉めた。

「本当にお前の孫か、ガーブ」

「文句あるのか。孫は孫じゃ」

肝が据わっているのはいい事だ。殺気は込めてはいなかったが、新兵達が背筋を伸ばし委縮する程度の威圧はかけた。さらりと受け止めてしまったのにはさすがガーブの孫と言う感想もないことはない。場の空気を読んで退出するのは全く似てはいなかったが。

後はどれだけ度量を持っているか、だ。

「六式は仕込んである。覇気もある程度使いこなす。3つ目も多少はコントロール出来ておる」

せんべいをバリバリ食べながら、ガーブは何気なしにさらりと言
い放った。

「…覇王色か」

「司法船を襲った輩を捕まえたのはアンじゃ」

センゴクは腕を組む。

覇王色の覇気を持つ人材は貴重な戦力と成り得る。

4つの海を駆け上がって来る海賊と、その先にある新世界で猛威を振るう大海賊達の動きが活発さを増してきているのも悩みの種だが、海軍全体の人員不足もセンゴクの頭を痛ませる種でもあった。ある一定の力量までのし上がって来る人員は数多く居る。だが人の上に立ち、指揮できる人材となれば、一気に定員を割るのだ。

「使えそうなのか」

「それは見てみればわかる」

中庭と思っていた場所は海兵達の訓練所だった。緑に囲まれ、ベンチや噴水もある。ぱっと見、公園のようにも見える。広場の中央

にはむき出しの土があり、まるで運動場のようだ。

廊下では上の階級者に会う度敬礼をしなければならぬらしく、アンは途中人の姿が途切れた瞬間を見計らって窓から外へ飛び出した。目指す場所までそんなに高さは無い。飛ばさず、木の中だ。幹を伝って下に下りると公園のような場所にはぐったりとした姿に至る所に転がっていた。

笛の音が鳴る。もうそんな時間かと男達は体を持ちあげ、日の当たる砂地に向けて歩き始めた。

「おい、集合時間だぞ早く来い」

「え、あ、ええ？」

3列に並ぶ海兵達の真正面には訓練の指揮を執っている男が立っていた。マントを羽織っているという事は、ボガード副長と同じ将校なのだろう。

これから行われるのは、1対1の模擬戦であるらしい。将校が説明している。その間は休めの態勢を取り、身動きせずに聞くのみだ。アンは小さなあくびをかみ殺す。義祖父の船では訓練中、余り待機させられる事が無かったからだ。随時体を動かし続け、腹を満たし、風呂でその日の疲れを洗い流せば泥のように眠る。そしてまた朝が来れば体を動かし、の毎日だった。

次々と将校に、海兵達は倒されてゆく。

そして後ろから4番目、アンの順番が巡って来た。

小さな姿に、将校ははて、と首を傾げるが海兵の制服を着ているのだから、どこかの部隊から紛れ込んだ新兵だろう、そう思考で完結したようで、かかって来なさい、と手招きした。

「宜しくお願いします」

アンは構えを取る。基本は自然体だ。将校は木刀を構える。間合いを取り、相手の出方を見ていた。視線が小さな体に集まってゆく。

ただ立っているだけなのに、将校もなかなか打ち込みに入れない。

いつまでも立っているだけでは時間が勿体ないと、アンは姿を消す。海兵達は自分たちの目を疑った。

アンの視線は将校を捉えたまま、動かさない。手刀を相手の手首にとん、と入れる。緩んだ掌からこぼれた木刀を指で器用に拾い、もう片方の手でそのまま将校の手首を掴み前方へ引つ張った。

将校は反射的に子供の力に負けじと踏ん張るがしかし。重心が後ろに下がった瞬間引つ張っていた手を放し、腰のあたりをトン、と押した。将校の体が尻もちをつく。

とどめに首元へ木刀を添えて終わりだ。

一瞬の事だった。

回りも一体何事が起ったのかと、目を丸くしている。

「逃げたぞ、追え！！！」

空気がざわめいた。

アンは建物の向こう側に意識を向ける。

発砲音が聞こえた。金属製の物がなぎ倒される音と、肉が砕ける殴打音が耳に届く。

何事かと将校も我を取り戻し、立ちあがった。

「イザドー！！！！ 止まれ！！！」

「剛腕力のイザドーが逃げ出したぞ！！！」

海軍本部に召集される海兵は支部と違い、ある程度の実力を持つ人材が集められると聞いていた。イザドーと言う人物は懸賞金5800万を掛けられた海賊らしい。1億で大佐が出張る目安だと船で教えて貰っていたのを思い出す。その半分なのだから十分、ここにいる人員で事足りるような気もしていたのだが、なにやら港の方でアクシデントが発生したらしい。

「ねえ、港から東の方に逃げた場合、まわりこめるのはどっち？」

「それならあつちに通路があるが…」

「案内してくれる？」

「いや、訓練中だし、持ち場を離れるわけには」

軍隊では上司の命令は絶対だ。しかしアンはまだ、何処にも組み込まれてはいない。

「行き方を教えてください」

アンは本部内部には他にも海兵が居るから大丈夫と言われたが、それでも、と食い付いた。

「普段上の命令が絶対なのは、指揮者の指示が情報の裏付けがある確なものだから。でも今は非常事態かもしれない。発砲があったよね。たくさんの人が倒れているよ。傷ついた人を救えるかもしれないのに…自分が行っても何も出来ないだなんて決めつけるのは早計すぎと思わないのかな。動く気の無いのならそこで指をくわえて傍観してたらいいよ」

回り込む通路があると言われた方向へ、言葉を吐き捨てて走る。

殆どの海兵がぼかんとしていた。

だがその中でも、動きだした人員がぼつぼつとアンの背を追う。

「おい、お嬢ちゃん。こっちだ、こっち」

「いい啖呵切ってくれたなあ」

喧騒が次第に大きく、近くなつてゆく。悲鳴も聞こえてきた。

懸賞金と実力は比例しない事も多いという。海軍から指名手配が掛かるのは行った行為と、残された残骸の悲惨さで決められているらしい。上手く立ちまわり、村があつた事すら分からなくなるまで破壊し、消してしまえば奪略し大量殺人しても要は懸賞金が掛けられない。

なんという適当な賞金額設定。

「どうするんだ、お嬢ちゃん」

剛腕力のイザドーという人物を捉えたアンは、相手の目的を考え

ていた。

ふたつ名が示す通り、相当力が強いのだろう。まともに受けてしまえばたちまち全身の骨が砕けてしまう可能性もある。

この本部まで身柄が運ばれてきたという事は、公開処刑されるのだろうか。もしくは取り調べの後、監獄へ。

過去に一度だけ脱獄者を出したのと言われる、大監獄に行くくらいなら、最後の大暴れを本部で行おうという魂胆なのか、この場所を死に場所として定めたのか。

指揮者を探す。しかし将校のマントを羽織っている人物の姿が見えない。囚人を連行する時、付き添うのでは無かったのか。

「射撃が出来る人、居る？」

どんなに体中を鍛え鉄壁の防御を誇るといっても、弱点は幾らでもある。

「もし出来るなら、誰も上の人が出来なくて危なくなったら目を狙って。眼球は鍛えようと思っても早々出来る場所じゃない」

出来る、と答えたひとりにそういう置き、アンは駆けた。

まだ対等にやりあえる人員が到着した様子が無い。

義祖父も上の方にいるはずで、こういう暴走を止めるのを嬉々としてやってきそうなもののだが、その様子も無かった。ボガード副長を含む船の皆は宿舎に戻ると確か言っていた気がする。となれば、グループ中將の船に乗っていた乗組員達と合流するのは諦めた方がよさそうだった。

息を整え拳に力を集中する。

剃で一氣に距離を詰め、相手を撃つ。壁に衝撃が伝わり、蜘蛛の巣状にひび割れ、崩壊した。男の体はそのまま外へと吹き飛ばされる。

「無事な人は怪我をした人の救護に回りなさい！！　まだ動ける人は誰か対処できそうな上の人呼んで来る！！　力及ばない人は無

理に対応しなくても構わない、自分の出来る事をして！！ 走れ！」

アンは希望を飛ばす。海兵達はびっくりと身ぶるいし、動き始めた。曹長や軍曹クラスがわんさかと居るはずなのに、指示を飛ばされなければ自分の意思で動ける人員が居ないってどういうことよ。そういうのが軍隊なんだろうけれど、上が潰されたら一気に瓦解するのは痛すぎじゃない。

そんな悪態をつきながら、瓦礫から置き上がってくるイザドーと対峙する。

「お前かあ、ガキは大人しく母ちゃんのおっぱい飲んでればええ……」

アンは答えない。

「今のは久々に痛かった……おらあどうせ投獄いきさあ。なあ、おらあ殺すんか」

「やだ」

きつぱりとした一言に、イザドーは大きな笑い声を上げる。

「わたしは貴方がこの場で暴れたからそれを止めに来ただけ。生きるか死ぬか、苦しむか楽になるかを決めるのは自身だよ。海賊になったのなら、覚悟してたのでしょう」

もつともだ、と獰猛な笑みを浮かべる。

「ほじゃおらあの最後の相手してくれるか」

間近で見るイザドーは大きかった。見上げてもあごの下が見えるだけだ。顔を見ようと思うならばもうちょっと下がらなければならぬ。

「大人しくはしてくれないのね」

小さなため息は振りかぶられた両腕を振り下ろす風圧にかき消された。数ミリ、体の横を拳が通過する。力は強い、だが森の猛獣たちや、ボガード副長の剣撃よりは遅い。

アンは再度振りあげられ、迫る片腕の肘に向かって拳を当てる。下への遠心力に加えて横からの力が加わり、男の体が左側に弾け飛ぶ。しかし男は何度も立ちあがった。

その度に少女によってあちらこちらへ飛ばされている。
その様子を見つめている幾つもの視線があった。その中のふたつは、ガープとセンゴクだ。

アンはため息をひとつ落とす。祖父が下りてくる気が無いのが分かったからだ。感じる視線のどれもが、ひとつとして動かない。試されている。

なんのために、は愚問だろう。

義祖父はアンが力を欲しているのを知っている。自らの力でもぎ取ってみろ、そう言っているようにも思えた。

「…その命、要らないの？」

アンが静かに尋ねる。自らの身を痛めつけるように、イザドーは何度も何度も立ち向かってくる。

広場で知り合った海兵による銃の援護射撃が何度も入っていた。目という部分を狙うには至らなかったが、体に幾つも銃弾の跡が生々しく出来ていた。

「おらあ海に出るしか生きられなんだ。陸にうちあげられちゃ…死んでんのと変わらねえ。船の奴らは全部死んだ。船長もだ。どうせなら海でおらあ死にたかった…」

ぽたぽたと滴る血が土に染み込まれてゆく。

「じゃあ貴方の命、わたしが貰っても…いいの…ね？」

イザドーは大きな笑みを浮かべて頷く。最後の相手になってくれるか、と聞いて来た男の言葉が思い出された。覚悟していたのだから。

生きるために、今までは猛獣を狩った。その命を取りこんで今まで生きて来た。

けれど、今は、この男の命を終わらせるために殺す選択を迫られている。

刈り取られた命を、その肉を食べるわけでは無い。

ただ奪うだけの行為だ。

男はこれまで、たくさんの人を殺してきたのだろう。生きるために。ただ毎日を懸命に生きている人達の命も奪った凶悪な人物なのかもしれない。けれど。

奥歯を噛む。

男は、この手による死を望んだ。ひとつの命として。

剣の扱いはあんまり上手じゃないから、痛いかもしれないけれど。落ちていた、折れた刀を手にはアンは拾う。そしてその背に飛び乗りイザドールの首を一閃した。

噴水のように噴き出る血が全身を濡らす。

海兵達は歓喜の声を上げた。小さな少女が首を取ったのだ。

刀を捨て転がった頭部を拾う。イザドールは満足げな顔をしていた。「おやすみ。つぎ生まれてくる時は、穏やかな生であれば……いいね」

いくつかの視線が消えるのを感じながら、アンは言った。

17 - 紅と碧

聞いたことの無い時計の音で目を覚ました。
振り子が揺れ、時が刻まれてゆく。

ここはどこだろう、と周りを見ませば月明かりに照らし出された室内が見えた。

簡素な部屋だ。必要最小限の物が、ベット周りを中心に手の届く範囲、もしくはほんの少し動いただけで届くように配置されている。服は…着替えられていた。タンクトップとスパッツという軽装だ。はて、こんな服持ってたかと首を傾げても、鞆の中に入れて来たのはマキノが作ってくれたTシャツとズボン、ブラウスとスカートとの2組だけだ。

血まみれだったからなあ。とアンは両手を広げ、視線を落とす。寝ている間にお風呂も入れられたのだろう。体から良い香りがしていた。

ふと横を見ればベットには見知らぬ男性が、横たわっている。否、全く知らない相手では…ない。かつて一度だけ会ったことがある人物だ。

あーうー

しがみついたまま寝落ちてしまったのかと、記憶を手繰り寄せ手で顔を覆った。

頬が熱い。

ベットがきしむ。いつの間にかアイマスクを上げた男がこちらを見ていた。

「…眠れないのか」

「いえ、先ほどまで十分意識を大放出して寝させていただきましたし

た」

なぜかそこに正座して姿勢を正す。

「おいおい、知らない仲でもないだろうに。そんなに緊張されると困っちゃうんだがなア」

何をだ！！

と叫びたい気持ちは少々横に置いておき。

よく義祖父が奪い返しに来なかったものだ、尋ねてみた。

「ああ、ガープさんはセンゴク元帥と戦ってたからな」

なんで…戦ってたの。

センゴク…元帥？

はて、お昼間にあつたおじさんの名前も確かそうだった気がするのだけれど、ふたりいらつしゃるとかじゃないよね。

思考がそのまま声に出ていたらしい。

「仏のセンゴク。ふたりも居たらあの人も少しは楽になるんだろうが…まア別にどうでもいい」

さいですか。

「夜明けは冷える」

そついいながら枕の下にあつた腕を伸ばし、ぽんぽん、をベットを叩く。ここへおいで、と呼ばれているようだ。夜気が冷たく肌に刺す。ぶるりと、体が震えた。

遠慮がちに指定された場所に転がる。暖かな布団が肩に掛けられた。大人の肘枕も初体験だ。

「おれは睡眠が浅いんだ。ゆっくり眠るといい…日が昇ったら起

「すよ」

へえ、そうなんだ。

エースやルフィみたいに寝たら最後、起きない人種がいるように、眠りの浅い人も当然いるよね。などと考えながら温かさに包まれてまどろみの中へ落ちてゆく。

記憶を整理するように、夢は赤から青に視野が移ったところから始まった。

アンは歓喜の声が渦巻く場所から一瞬にして姿をかき消した。わき上がっていた声が静まり返る。能力者だったのか、という声がぼつりと出た。

あんなに小さな少女が悪魔の実の力を有し、海を荒らしまわっていた賞金首を打ちのめした事実、また歓声が大きく轟く。

当事者はそんな声など我関せずと、身を空へ躍らせていた。

ここでは無いどこかへ。おじいちゃんが心配するだろうから島の中で海に接する所。

この頭部だけでも死に場所と望んでいた海へ、願わくば故郷の海まで流れつけばいいと、飛んだ場所は中央の湾内ではなく、外輪だった。この島の軍関係者が暮らす街並みからも離れている。出入りする船が良く見えた。この外輪にも有事の際には船を係留するのだろう。船を留め置くふ頭にもなるよう、簡易施設があった。

アンは手にしていた頭部を小波が打ち付ける向こう側へと投げた。最初は波間を漂っていた頭部だが、次第に外洋へ流れる潮に乗り、ゆっくり遠のいてゆく。海に届けて、と願った時、何かが体を通して

していった。声では無く意思、とでもいうのだろうか。

大丈夫、きつとイザドーは故郷の海に帰れる。確信めいた何かが、少し心を温めた。

これから多分に、あるだろう。

海軍旗を掲げている船に乗る以上、海賊船を見つければ殲滅、拿捕は当たり前なのだ。

死に物狂いで応戦する海賊達に、手加減など出来るわけが無い。

少しでも手を抜けば、自分が死んでしまうのだ。

アンにはここに来た目的がある。エースと一緒に、海原へ出る為の力を得に来た。それまではなにがなんでも死ぬわけにはいかない。

刀を拾った後、迷いが無かった。あれば綺麗に骨まで切れなかっただろう。刃を引いた感覚は、条件反射だった。初めて命を絶った手が小刻みに、今震えている。

罪悪感はある。けれどためらいはなかった。

しかも思うほど、落ち込んでいる、というわけでもない。何か淡々としていた。森で獲物を狩っていたからだろうか。またそれとも違う気がする。

昔ドラマで殺人を犯した人が血がべったりとついた手を見て、狂気の叫びを上げていたシーンが放映されていた。その後、胸を押さえて、犯人がおう吐もしていたっけ。

なんだか他人事のようにだった。

紛争が世界のどこかで起きていて、緊張が高まって来たと報道が伝えても、どこか遠い世界で起きている自分には関係の無いと意識を反らせる話とよく似ている。戦争の写真展に行き、悲惨さを目にしても、その後、友達と平気でレストランに行き食事をしていた、

そんな感じだ。

ああそうか。

ゴアの貴族達も、ごみ山の事を、こういう感じにしか思っていないかったんだ。

他人の身に起こっている間は、どんなことでも陳腐にしか見えな
い。

こうして該当者側になってみて初めて知るのだ。隔たりを。

チリリン。

聞こえてきた自転車の鐘にどこからだろうと視線を揺らす。きら
きらと輝く青の中をを自転車が走っていた。思わず凝視する。

すごい！

その姿を見た素直な感想がそれだった。

器用にタイヤが通る部分だけが凍り、車輪を走らせている。
堤防も兼ねているその場に座り、アンは自転車を見ていた。海の
上を走れる、便利な機能を持つ自転車を借りられるなら、気晴らし
にポタリングしてもいいかもしれない。そんな事を考えながら、空
を見上げた。

海と同じ色をした空には、真つ白な雲が浮かんでいる。

今の状況だけを切り取れば、穏やかな午後をのんびりと過ごして
いるようにも見えるが、姿が姿だ。服に染み込んだ朱も乾いて酸化
し、黒く変色してしまっている。

歩いて戻るのが億劫だった。

おじいちゃん迎えに来てくれないかなあ、と耳を澄ますと、本部
の方からざわめきが聞こえてくる。また何かがあったのだろう。

「…あらら。こんな所に誰がいるのかと思えば…えーと誰だったっけ」

自転車を止め、男がゆっくりと歩いてくる。

海から堤防までの絶壁もなんのその、氷の坂道を作り登って来たらしい。なぜすべりおちなかったのはさておき、自然系の能力者だと気付いた。男はアンの傍に暫く立っていたが、数分しないうちに疲れたと、その場に横たわる。

陽気はぽかぽかと暖かい。

レジャーシートを敷き、お弁当やお茶を持って魚釣りでもしていたなら、どんなに良い一日と思えただろう。

ため息が漏れた。

「…心の整理は…つきそうかい」

初めて、だったんだろう。

男の声が背から聞こえる。

「…だったら、どうだっていうんですか」

「どうも…ならねえはなア」

そう、どうにもならない。もうすでに命を貰ってしまった後なのだ。戻す事は出来ない。

「ちよいとこっち向きなさい」

少し首を動かして後ろを伺うと、男がじつとこちらを見ていた。バツが悪い。自分自身で納得が出来なくて、膨れているだけなのだ。

方向を変えると、大きな手が頭を掴んだ。そのまま男の胸に顔が押し付けられる。

「なにすんのー!!」

力任せに顔を上げる。

「気を張るのも疲れるもんなんだ。…ちよっとは休みなさい」

誰かが傍にいてくれる。

それだけなのに、涙がほろりとかぼれた。

初めて兎を殺した時も、エースがこうして受け止めてくれたっけ。

無理に流れを止めようとはしなかった。奪った死であっても、その命を貰ったのは自分なのだ。

アンだからこそ、イザドーは命を差し出した。うぬぼれであってもいい、そう思う。

これから無差別に命を奪う事もあるだろう。対峙して、望まぬ命も狩るだろう。

正義の名のもとに、死を下す組織が海軍だ。お墨付きを貰っている、死への送り人と言っても過言ではない。

いろいろと覚悟していたはずなのに、全然出来て無かったなあ。

男の鼓動が耳に心地よく、服を掴んだまま目を閉じた。

そして朝に至る。

勝手に使っても良いと言われたカッターシャツの腕をまくり、ボタンを止め、膝の辺りで結んで簡易のワンピースのようにして立つは台所だった。

しょうゆがある…

冷蔵庫にコンロ。

義祖父の部屋ではあえて無視したが、ここにもあちらにあった生活必需品設備が揃っている。これを夢見る心地と言う以外に、なんと言っのだろう。

アンは両手を握り、誰にともなくありがとう、と何度も叫びたい

気分だった。

原始的な生活が基本にあれば、どこでもサバイバルが可能ではある。

しかし。世界の文化レベルが歪こひじでおかしいとしても、この感動はひとしおだった。

酢も塩もある。

冷蔵庫の中には少々しおれてはいるが、レタスも丸ごとあったし、卵も紙袋の中にたくさん入っている。

この大量の卵をどうやって食べているのかと聞けば、ジョッキに割り入れ、毎朝飲んでいるという。

一緒に飲むかと言われたが、昨日のお礼もあるから朝食を作らせてほしいと願い、立ってるわけなのだ。

「さて、久々に腕を振るいましょうか」

朝になれば起こして貰える約束をしていたはずが、どうにも寝心地がお互いに良かったらしい。飛び起きた時にはすっかり明るくなっていた。出勤の時間を聞くと、残るは1時間余り、手際良く料理を作ってゆく。

冷蔵庫で凍っていたパンにバターを塗りチーズを乗せトースターへ。ハムを重ね、その上に卵を落とす。レタスはぬるいお湯につけておき、しゃきしゃきとした触感に戻しておく。コーヒーが好みだと言っていたので、豆を引きコーヒーマーカーへセットした。

電力が何処から供給されているとか、誰が機械を作ったとかはもう、面倒なので考えない。

存在している恩恵を、素直に受け入れることに、する。

大きめの皿にパンを半分に切ったものと、ハムエッグ、野菜を添えて出来上がり。

冷凍庫に牛乳までが凍らされていたのには目が点になったが、何かに使うのだらう。見なかった事にした。

食卓用のテーブルに醤油さし、即席マヨネーズ、それぞれの皿とコーヒーを置けば完成だ。

普通サイズの胃であれば、これくらいで大丈夫だろう。

アンはささつと後片付けをし、隣の部屋で転がり続ける男を呼びに行く。

「出来ましたよー、えつと…クザンさん」

青雫と呼ばれる男の名は、余り表へ出ない。確かそうだったはず、と思い出して呼んでみた。

「……名前、教えてたか…」

のっそりと現れた長身が席につく。

いや貴方、有名人じゃない。

アンはコップに湯気立つコーヒーを注ぎながら思わず突っ込んだ。海軍本部大将、赤犬、青雫、黄猿の名前はニユース・クーが運ぶ新聞を賑わせているからだ。

最初はお手頃価格だった新聞も、最近は値上がりの傾向にあり、毎日買うとバカにならない金額になるのだと嘆くダダンの読み終わりを見せて貰っていた。

あちらの世界のように月極めの契約があれば少しは節約になるのだろうが、こちらでは毎日、ニユース・クーを捕まえて購入しなければならなかった。

はつきり言っただ面倒という他ない。郵便局のように、配達業務を組織し、取り仕切れば一攫千金とはいかないまでも、相当の資産を稼げるのではないかと思わなくも無かった。

それに。アンはことりとテーブルにコップを置きながら、

「大分前、おじいちゃんと一緒に島に来たことがあるでしょう」
その時に教えてくれたじゃないですか。ということにしておいた。席に着き頂きます、と手を合わせパンに齧りつく。

クザンからはそれ以上言及される事無く、ぱたぱたとアンは食べた食器もささつと片付け、洗剤水に浸されていた服を見に行く。

脱がせた時に水に浸けていてくれたと聞いたからだ。手作りしてもらった制服は案の定、血でどろどろになっていた。ちよつとやそつとでは落ち無い染みになっている。一応捨てる前に、血抜きを試みてくれたらしい。どれだけ洗濯を重ねたとしても、元のような白に戻る事はないだろう。

まるでこれからの自分のようだと、苦笑する。

どうやって義祖父の元に戻ろう。

制服を見下ろしながらぼーっと考えていると、怖れ多くも抱いていつてやるよ、という声が掛かった。

「いやいやいや！そこまでして貰うのも」

「…どうせ行き先は一緒なんだ。言う事聞きなさい」

「…はい」

今まで言い聞かせる系の大人達が皆無だったせいかな、諭されるとはい、と頷いてしまう。

義祖父のように、無理矢理にでも連れ行こうとするなら、いやだと言いきれもするのだが、どうもこの人物との相性が良いのか悪いのか、いまいちよくわからない。

結論的に言えば、しっかりと抱えられて、海軍本部の一番偉い人物の元まで連れて行かれるのは必定だろう。アンは観念し、宜しく願います、と伝えた。

18 - 会議のメイン

その部屋は異様な空気に包まれていた。

クザンよりついさつき聞いたばかりの事情に身が固まる。

今日、これから不定期に行われる、大将、中將を含めた会議が開かれるのだと言う。集まるのは大概、支部の代表から委任を受けた副官が多いらしい。だが今日ばかりは、なぜかバスターコールも真っ青という面々が揃っていた。

平時でも出入りが激しいここ、海軍本部でも会議の日は慌ただしくなると聞いてはいたものの、この張り詰めた空気はいつもと違うようだ。

全ての視線がクザンと、抱きかかえられていた少女へと向かう。

昨日の報告はこの場に集う将達には通知されていた。11歳の少女がたったひとりで、多少捕縛時の戦闘で弱っていたとはいえ、剛腕力のイザドーの首を取ったのだと言う事実をだ。銃撃での援護は多少あったものの、現場を目撃していた海兵達は新たな仲間を歓喜をもって受け入れている。

しかもガープ中將の孫であるとは何処からともなく漏れた話も重なり、厳しく律してはいるものの大物が海軍入りした興奮は冷めてはいない。

片手で支えていたクザンがそろそろ電池切れしつつあるような気配を察知したアンは、自力で床に降り立ち、彼の席であろう場所へ引っ張り座らせ、自分は意味ありげに笑う義祖父の側へと移動し隠れる。その際にサングラスをかけた人物に笑いかけられたが、どうして良いのか分からず多少顔を引きつらせ逃げて来ていた。

「おじいちゃん、わたし場違いなんだけど」

「いいんじゃない、膝に座つとれ」

この義祖父はなんとという無茶を言うのだろう。

これ以上視線に晒されたくないのに、針のむしろの上に座れという。

ずらりと年配者が並ぶ席で、大声を上げ退出を求める抗議など出来ようもない。

しぶしぶ、座るしかなかった。

自分自身を人の目に見せるのはどこか、気恥ずかしい。

服もクザンから借りたままの姿だ。女の子としてどうよ、という思いもある。

森で気にしていたら走れないが、ここではやはり、俯いてしまう。

何か気がまぎれる物は無いだろうかと視線を動かせば、長机の上には資料が置かれていた。他の将達はぺらりとめくって中身を確認している。

義祖父が手をつけようとしなかった紙束を手前に引きよせ、中身を見てみた。

止められるかと思いきや、出されている茶をすすろのみで、横からも注意が飛んでこない。

ならばと速読した。

4つの海の状況と、新世界、そして王下七武海の状態だ。

そして新たにその七武海に任命される式典が行われる日取りも書かれていた。

5年前、赤い土の大陸を素手でよじ登り、聖地マリージョアで大暴れした冒険家の話は今でも様々な場所で語り草となっている。そもそも魚人海賊団は冒険家、フィッシャー・タイガーがマリージョアで解放した奴隷たちを身受けして発足した集団だ。人間嫌いであ

った彼も、奴隷であつた人間に関しては懷を開き、仲間に迎え入れたという話も聞いたことがある。

その際シンボルマークとされたのが太陽だつた。

天竜人の奴隷の証として焼き押される刻印を包み込み、別の物へと変質させてしまったのだ。

この印はもはやお前たちを縛るものではない、と。

フィッシャー・タイガーが死去した後、分裂した魚人海賊団を取りまとめたのが、ジンベエ、という魚人だ。幾つかの船は袂を分け、いずこかに姿を消したというが、最盛期と遜色ない規模を今も誇っている。

政府は魚人との和解も含め、彼の七武海入りを強く要望したという経緯が簡単ではあるが記載されていた。

そして最後のページに、革命軍の記述があり義祖父から分けて貰つたお茶を噴き出してしまいそうになる。

祖父をそーっと振り返るが素知らぬ顔だ。

おじいちゃん、ちよつと、これやばいじゃないの。

火事の日に触れた意識には、この世界を変革すると言つ強い意志が輝きを放っていた。

あれはもう、止めようと思つても止められない。

既に齒車は組み上がつてしまっている。

新世界にも動きが見えていた。

シャンクス達が最後の海に突入していたのだ。

フーシャ村を発して、1年ほどだろうか。怒涛の速さだ。

さすが路を知っているだけはある。が、父と渡つた、同じ路を進んではないだろう。

新しい勢力が”偉大なる航海”^{グランドライン}を目指し流入している様子が、ありありと示されているのに対し、政府側も武力拡大を進めてはいるが、なかなか良い報告が上がって来ていない様が数字に表れていた。海賊を取り締まる海軍が、日々強力になってゆく海賊の力を借りなければ、治安を守る事さえままならないのだろう。

これをどうにかしようと思うならば、今の体制では無理だ、と言わざるを得ない。

まず4つの海と、”偉大なる航海”^{グランドライン}では兵のレベルが天と地ほど、^{グランドライン}とは言い過ぎだが離れている。配置されている責任者の質もいまいち良く無いからだ。

ニユース・クーが運ぶ新聞の他に出回っている地方紙には、海軍の腐敗と題する記事が多少ではあるが紙面をにぎわす事もある。

海軍に入隊を希望する人員が少ない中、海賊となり暴れまわる人口は右肩上がりだ。

将校がいくら配置されても、小さな器で最大まで栓が開け放たれた流水を受け切れるはずもない。

しかも陸とは違い海での行軍が主な部隊の訓練は時間と費用がかかる。

基本的な動作は陸も海も変わらない。

兵を訓練し、装備を配給、補給を確実に行いかつ、船上では的確な指示を受け動けるようにする。軍として集団行動するのには訳もちゃんとあるのだ。

それは数の原理、に他ならない。数が多ければ多いほど、ぶつかり合った時、有利になる。

それに加え海上では陸での4行動全てに於いて、的確に作業できる能力も必要とされた。

基本、揺れ動く船の上で戦闘は行われる。砲撃戦にしろ、切りこむにしろ、無駄を省いた効率的な行動が求められるのだ。

多数の戦艦が入り混じっての混戦にでもなれば、指示通り行動するだけでも地上とは違い、航海能力も必要となる。

軍では上官の命令は絶対だ。

不服従や独断専行は、こちらとあちら、世界が変わっても軍隊においては何れも罪となる。

その代り、指揮者の行動はもたらされる情報に基づいて、的確に行わなければならない。

海軍は志願制を取っている。

国ごとに体制は様々だが、徴兵制度を取り入れている国軍の錬度はさすがに高い水準を持っている所が多いようだった。

会議は順調に進み、4つの海で補強が必要な個所がいくつか示される。

東の海は残念ながら、話題にも上らない。北の海で少々、騒ぎを起こしている海賊団があるという。

そして新世界の話題はやはりシャンクスだった。

赤髪が今まで空白地域であった場所を埋め、皇と呼ばれるひとりになったという。

「四皇…か」

誰かがそう言葉する。

皇とは”偉大なる航路”グランドライン三大勢力のひとつだ。

新世界と呼ばれる、航路後半の海に皇帝の如く君臨する大海賊を指しそう呼ぶ。

”白ひげ”エドワード・ニューゲート、カイドウ、ビッグマムの列に、赤髪のシャンクスが新たに名を連ねる。

赤髪海賊団に属する人員が書き出されたりリストを指でなぞりながら、随分と遠くに行ってしまったんだなあとアンは手配書を見て思う。

新世界と言う広い海である仲間たちと騒ぎつつも賑やかで、冒険に満ちた航海しているのだろう。いつかの再会を願いながら、資料を閉じる。

革命軍に対しては要注意としながらも、海軍として表立った行動を示さず、となった。

彼らの行動は海ではなく、陸で行われていたからだ。

各国からの要請が無ければ、表立った軍事介入は出来ない。中央政府からの命が下れば、その限りにあらず、だが海軍はその名の通り海での行軍が主だ。

海上航路の安全を確保する。

その為に海賊達を取り締まっているだけでもこんなに苦勞している状況なのだ。国の騒動まで出張つてられないのが実情だろう。

これが海賊による国家転覆であれば話が別、となるがここに座る将たちの悩みしわをこれ以上増やすのは止めておこう、とアンは口をつぐんだ。どうせ確証のない話で動くような組織では無い。

そして最後の議案が話し合われる。

「ほれ、アン呼ばれとるぞ」

思考から我に返ると、全ての目が自分を見つめていた。

だからなんで、わたしの名前が呼ばれるのー！！

心臓がバクバクと音を立てて緊張度数を示している。

「お…おじいちゃん、わたしどうなるのかな」

「どうもこうもならんわい。あの箱の中から、ひとつボールを取ればええ。わしのじやと目印をつけたからな、よく探すんじやぞ」

「それ結構無理あると思わない？」

祖父と孫の会話を聞いていた右隣席の男がにこやかにアンに声をかける。

「初めまして、モモンガという。ガープ中將には日頃お世話になっている」

差し出された大きな手を、アンは受けた。

「考え事をしていたようなので簡単に説明すると、君を育てたいと希望した人が多くてね。向こう側のテーブルの人が小さなボールに字を書いているだろう。それを君が選ぶんだ」

真正面に近い場所に座る、センゴクが視線を動かすとアンを見る。昨日の獲り物が終わってから、あの少女を受け持てるならば自分が、という嘆願が幾つも重なった。厄介事を持ちこんでくるガープが少しでも大人しくなるならば、連れて来た当人に任せようと思っていたところ、そう言えばと青雉からもそう言う願いが来ていた事を思い出し、3年と言う短期間であるなら大將に付かせてみるのも悪く無い。そういう旨をガープに伝えたところ、大喧嘩になった。長い付き合いの2人だ。ある程度のところではガープが逃げ出し、センゴクも後追いをしないのがいつもの常だった。

が。今回はかりはガープが粘ったのだ。

嘆願に来た中將以上の役職者に対し、どのような方法を取れば一番丸く収まるかを、センゴクは思案した。元帥命令とするのはたやすい。しかしガープが荒れ、今以上に厄介事を持ちこんでくるのは遠慮したかった。ならば、当人に選ばせればよい。公平をきし、抽選と言う方法で。

大体の事情をアンも理解した。
セングク元帥も、胃へかかるストレスが振り切っているのかもしれない。

前線、後方支援問わず、どれくらいの人から期待されているのか分からなかったが、出来るだけ無難な、出来れば義祖父のところが一番いいな」とアンも願う。

「あたしゃ、つるだ。書類見せて貰ったよ。アン、うちにおいて初めまして、おつるさん。いつも義祖父がお世話になってます」
年配者に上からの視線は失礼として、膝から降りぺこりと頭を下げる。

「どこら辺がアンタの孫なんだろうね」
「おつるちゃん……」

資料のまとめ方を絶賛された。
いつもあれくらいだと、あたしゃ助かるんだがねえ。というため息混じりにはガーブは聞こえなかったふりをする。いつもこういう渡し方をしているのだろう。

そうしている内に、じやらりと音を立てる箱が目の前に到着した。覗いてみると結構な数が入っている。

階級は准尉と先ほど告げられた。最初からその位に任じられるとは思いいしなかった。しかし孫と言う立場を優遇して任命されたわけでも無いようだ。ある程度の力量は認めて貰えている、という表れだと前向きに考えることにする。

箱の中をてのひらで探った。手触り的にはピンポン玉のようだ。さらりとした触り心地がする。

おじーちゃん、分かりません！

見上げる義祖父の顔は頑張れと応援しているようにも、なるようになれと慰めているようにも見える。

いつまでも玉を転がし遊んでいる訳にも行かない。

個数がありすぎて、目印をつけたというガープの玉が見つからなかった。

覚悟を決めて、ひとつのボールを握る。

ひきだした手のひらには黄色のボールが握られていた。

書かれている名前は、ボルサリーノ、とある。

「アン、どうしてわしのを取ってくれなんだ」

「ごめんなさい。いっぱいありすぎてわかんなかったの…」

「これで決まったな」

センゴクの声には安堵が含まれていた。孫が自分で選んだならばガープも文句を言うまい、そう考えた思惑は見事に的中したといえよう。

アンも義祖父の膝を下り、誰かと見回すと、先ほど視線が合った長身のサングラスをかけた男と目があった。

よくよく見てみると、とある俳優さんにそっくりだ。本人と言っ
てしまってもいいかもしれない。映画やテレビで見ていた顔が目の前にある。北の国から、とか土曜ワイド劇場とか、御家人斬九郎とか、よく見ていたテレビに出ていた人のそっくりが目の前にある。
クザンも実はそっくりだなーと思っていた人物がいた。

義祖父に連れられ、黄猿とふたつ名で呼ばれる大将の元に挨拶に行く。

「先ほどは失礼しました。ポートガス・D・アンです。宜しくお願ひします」

名は父名ではなく母名を名乗ると、エースと決めていた。父の名は余りにも危険すぎる。

「ボルサリーノさん、アンの身柄引き受け、代わって下さいよ」
会議終了の号を受け、出席者たちが部屋を後にし始めた中でクザンがアンを抱きあげる。

「もう君は男を手玉にとってるのかい？怖いねえ」

「そんなわけありません！！」

力いっぱい否定する。手玉にとれるわけがないだろう。これは玩もてあそばれているというのだ。

「クザン大将、下ろして下さい。ってそこでアイマスク下ろして寝ない！わたし抱き枕じゃないんだから」

ガープは大将ふたりに構われる孫を腕を組み眺めている。

「面白そうな子じゃけ、来年はこっちにも回してもらおうか」

そう赤犬が側を通る際に、声をかけた。

その手があった。

ガープは退席しようとするセンゴクににやりと笑う。元帥は見なかったことにし、部屋を後にした。

「じゃあ行こうか」

アンは義祖父とクザンにほほ笑み、敬礼し上司の後を追う。

「ガープさん、来年はおれが……」

「黙つとれ、来年こそはわしの元へ連れ戻す」

19・シャボンディ諸島

「あれがシャボンディ諸島」

空に立ち上る巨大な樹木が立ち並び、陽の光を受け七色に輝くシヤボン玉が浮く幻想的な風景に、初めてここを訪れる海兵達から自然と歓声を上がった。アンも甲板掃除も忘れ、身を乗り出し眺める。

突然の出航を命じられ、2日かけてやって来た場所は”赤い土の大陸”^{レッドヘルト}を間近で見上げる事の出来るシャボンディ諸島と呼ばれる場所だった。

厳密には島では無い。

マングローブの木が群生して陸地を形成している珍しい場所だ。

木は全部で79本、それぞれに人々が住み施設が立ち並んで町となっている。

この諸島にやって来る事になった経緯は、これからきつと判明するだろう。

ときどきあるそうなのだ。

世界貴族である天竜人からの呼び出しが。

世界貴族は幾つの特権をもっている。

ひとつ、世界の全てを自由に出来る発言が出来ること。

ひとつ、奴隷を持つ事を許されていること。

ひとつ、海軍本部大將を召還できること。

拳げるとキリが無いが、主だったものはこの3つだ。

今回の呼び出しは3つ目の権利を行使した。

彼らにとって海軍もまた、小間使いに過ぎないのだろう。

はてさて、どういう用件が伝えられるのやら。
アンは持っていたブラシを肩に担ぐ。

「まったく嫌になっちゃうよねえ。わっしもぼおちぼ忙しいし
イ」

早く終わるといいですね。

清掃終了の指示に従い、ストライプのスーツを着た男の横を通り
過ぎる。

一言で大将といっても性格はやり様々だ。この地位にまで登り
つめる人間であればこそ、なのだろうが個性が強い。軍属になって
まだ日は浅いが、段々と顔見知りも増えて来た。

例えば世界貴族からの呼び出しひとつとっても分かるように、動
く大将はほぼ固定している。

赤犬大将は一度航海に出してしまうと簡単にはマリンスフォードには
帰って来ないため召集不可。青雫大将はふらりとどこかへ視察に自
転車で向かい、連絡が入ってもなかなか捕まらない。よってご用命
に関しては海軍本部と聖地の行き来を頻繁に行っている黄猿大将が
自然に対応する体制になっているという。

現海軍本部の頂きに立つセンゴク元帥を初め、現場指揮を直接取
る3名の大將共々、悪魔の実の能力者という豪華な面々が揃ってい
る。

アンの身柄を得たボルサリーノこと、黄猿大将はピカピカの実の
能力者だ。

ピカピカの実というのは便利な能力で、一瞬のうちに諸島へ移動
する事も可能らしい。アンが使う瞬間移動とどちらが早く着けるか
という競争が勃発しかけたが、

「わたし、諸島に行ったことが無いので飛べません」

という返答により、あえなく延期となった。

一度訪れた場所には大抵距離があっても行くことが可能だ。しかし制限もある。はつきりとした事はまだ分かつてはいないが、能力の暴走が無い限り、訪れたことがある場所、という制約が付く。

また物体の中には移動不可だった。人に限らず物にも存在概念がある。それぞれの形を侵す事は出来ない。その形の外に接点を持つ事は可能だが、内部は幾らやっても弾き飛ばされてしまう。ただし物体の内部に体が収まる以上の空洞があれば別だ。例えば建物、洞窟、この2か所への移動は可能だった。

ウォーターセブンへ飛んだ初めての移動時、トムの腹部到着の謎はこれで解けた……ということにした。

唯一可能であったのは、母の胎内にいた時だけだ。あの時は体では無く、精神だけがあちらとこちらを移動していたようにも思える。

こちらで既に、11年の歳月が流れ、あちらがどうなっているのか全く分からない。

20年連れ添った、あちらの母が生んでくれた体の安否も、実は気になってはいたが確かめる術が無かった。

生まれながらにして持つ、能力に関しては検査中だ。

自身で理由を考えてみると、あちらとこちらの行き来、が何らかの影響を与えているのかも、とは思うものの結論には至っていない。ルフィの言うとおり、不思議能力だな！ が一番しっくりくる。

それにしても、この出撃、警邏けいろうに行くより気が重い。

アンは舷側の縁に乗り出していた身を戻し、ため息をついた。

先日。

土鍋で炊いた白米が蒸れ終わるまでの間、なぜか赤犬膝の上に座ることになってしまったアンが身じろぎする。

このような状態に至ったのは少し時間を遡らなければならない。

偶にはあるが物事がすつきりと、終わる事もある。右を向いても左を向いても何も無い。

久しぶりに机の上から書類が消え、訓練もないばかりと空いた時間が手に入った。

航海中であれば少しでも体を休めておこうと思ったり、同僚の仕事を手伝ったりしに行くのだが、ここは陸だ。

勤務時間内ではあったが気が合った部隊の友人たちとゆっくりと昼食を食べ、のんびりと午後の実務も終えた。

いつもの夕方は他部隊との訓練で時間超過が当たり前だったが、これもまた順調に進み定時に終了する。

こんな事は滅多にない、と同僚達は町に繰り出して行った。

アンは晩ご飯はなににしようかなあと悩みながら買い物をし、家路につく。

そうして引き戸を開けるとなにやら見慣れないわらじが玄関にあった。

家主の靴もちろんある。

居間を覗いてみると、着流しに袖を通した黄猿と赤犬が縁側で将棋を指していた。

会議の席で一度見たきり、このマリンフォードで珍獣とも呼ばれるサカズキの視線を感じるや否や、ふすまに隠れる。

「取って食いやせん」

駒が打ち鳴らされる音が静かに響く。

「オー…嫌われちゃってるねえ。この銀は頂いちゃいますよお」

別に嫌っているという訳ではないのだが、苦手、ではあった。義祖父も強面をしているが、大将赤犬はもつと怖い。いつも何かに怒っているような、そんな感じがしていたのだ。人間という生き物は随時、怒り続けていられる生き物では無い。眉の間に深く刻まれた皺には、何かしらの理由があるのだろう。しかしそれをどうしてかと聞けるほど、赤犬との距離は近くは無かった。

勝負が長引き、夕食を共にすることとなったアンは、下ごしらえを終えた後、お茶と菓子をもってふたりの対局を眺めていた。時間を置いて鳴る駒の音に耳を傾ける。勝負は、見ていて面白かった。

「ちびっこいのはこれに興味があるんか」

「ええ、まあ…」

不意に話しかけられ、こくりと頷く。

実際のところルールは余りよく知らない。あちらの祖父がテレビで将棋や囲碁の対局を見ていたり、ひとり将棋をしていたので、どいう物かは知っている、という程度だ。

湯呑みにはいった緑茶をすすりながら、赤犬が、こっち来い、とアンを呼んだ。

「ずるいねえ。アンはウチの子なんだよ」

「来年はわしが貰い受ける言っただじやろっ」

そこ、おじさん二人。

わたしはものじゃないっていうの。

ひとり突っ込みを炸裂させる。

アンに関して海軍上層部の評価はまずまずだった。なぜか下士官達の評判もいい。義祖父は話題に上る度何かにつけて、わしの孫じ

やからな、を連発しているという。

しかし海軍に所属する全員がアンを好ましく思っている訳では無かった。あからさまな態度を示す者、悪口こつそりと噂する者、実に様々だ。

けれどアンは人間らしい行動を疎ましく思わなかった。

誰だって羨ましいものは羨ましいし、なんであいつだけ、と思う気持ちも分かる。

だから気にしていなかった。自然体でいる自分を、相手の希望に沿って変えるのも変な話だろう。

悪辣な性格なら、頑張つて変えてみる、と考えられたかもしれないが、今のところは素直に育っていると思つていたからだ。多少歪んでいても、そこは女性として生まれた特権、愛嬌で補えばなんとかなるだろう。

「1年ごとに引越すするのも大変なんですよ」

出来るだけ荷物を増やさないようにには努力しているものの、私物は着々と増えて来ていた。特に服のかさばりが半端ないのだ。

当人はまだ未成年ということで、宿舎には入らず預かり先である上司の家で暮らす事となつていた。女性の下士官が暮らす寮で十分だと、特別扱いしないでと願つてもそこはガープが引かなかったのだ。

それならわっしの家で住むといいよ。とボルサリーノが何気なく発した一言で居候が決定したのが半年前くらいになるだろうか。

黄猿の部下一同との面通しから始まり、訓練への参加、報告書の書き方や備品供給願ひ等の書類仕事関係、他部隊との演習や休日の買い物、無人島の開拓、海軍の脳と言われるDr.ベガバンクの護衛プラス採血されたり等、目まぐるしい日々を送つていた。

書類の書き方ひとつとっても、定型紙が使われているとはいえ艦隊ごとに微妙に違う。

誰かに何かをさせようと思うなら、一番忙しい人物にやらせると言わんばかりの人使いだつた。息をつく暇さえ勿体無いと、本部に泊まり込みしていた日数の方が多いかもしれない。指折り数えるのが怖いので、途中でやめた。

「そうそう。明後日くらいにシャボンディ諸島に行くことになってるからねえ。飛べるんなら先に入っててよ。なんなら一緒に飛んでみようか。どっちが早く着くか見ものだねえ」

不意の一言に疑問の言葉が出た。

名前は聞いたことがある。新世界に至るためには必ず寄らねばならない島の名だ。

赤犬大将も、多少だが厳しい表情を見せていた。

「ボルサリーノ、もう連れて行けと言われたのか」

茶菓子にと添えた落雁を食べながら、そうだと頷く。

「あそこはいろいろとな、やつかいな場所じゃけ」

「軍服は脱いじゃあだめだよお？」

「はあい、気をつけます」

。 アンは素直に返事を返す。大将である両名がここまで念押しするには、ちゃんとした理由があつた。

天竜人はこの世界におけるピラミッドの頂上に位置する君臨者だ。800年前、世界政府を作り上げた20人の王の末裔であり、その血筋を今に伝える尊き存在として敬いの対象となっている。

その言はなによりも優先され、聖地以外に住む人々を下々民と呼んでいた。

もし天竜人が下々民の身を所望したならば、即座に応じなくては

ならない。

気に入られたならば妾や奴隷、観賞物として聖地に召し上げられる。

ただ海軍だけはそれが免除されていた。どんなに海軍所属者を望んでも、それだけは恩赦される。

「ちゃんと帽子も被ります、単独行動も慎みます。ボルおじさんも心配性なんだから」

苦笑するしかなかった。

彼らからどんなに罵詈雑言が降って来ても、言葉も拳も振りあげてはなかった。

世界貴族に対してはただ耐える、というコマンドしか選択肢が示されないからだ。

諸島に常駐している海軍の人達はきっと、胃に穴が開きやすくなっているんだろうなあ。

中間管理職並みのストレスが蓄積しているだろう想像は難しくは無い。

時計を見たボルサリーノはじゃあ今日の夜に出航しなきゃねえ、と立ちあがった。

その間にサカズキから将棋の駒の説明を受ける。

「形勢不利なんですね」

うむ、とサカズキが顎を撫でた。

将棋はお互いに何手も先を読み合うという。

「この手、継いでやってみたい」

微かに目尻が下がった赤犬の顔が優しげに映る。では遠慮なく、と思うまま駒を動かした。

「ビギナーズラックは怖いねえ」

とられていた金と銀を取り返すまで奮闘したものの、やはり手数を踏んできたボルサリーノには叶わず、敗退してしまう。

「…負けた、悔しい」

アンは膝から降りる。こんなことなら棋譜をよりこのみしないで、ほんの少しでも見ておけばよかったと思う。サカズキからはなぜか、頭を撫でられた。なんだかくすぐったくて、アンも笑みをこぼす。

その後、鯖の味噌煮と豆腐の味噌汁、野菜の小鉢を幾つかを食卓に並べ、しっかりと食べた後に後片付けまで終わらせ家を出た。

「ボルおじさん、戸締り宜しくお願いします」

駆け出す足音が遠ざかる。ここから港まで30分程度かかるだろう。日頃から運動不足だと悩んでいる少女はきつと、走ってゆくのだろう。

「次帰って来るのを楽しみにしとる」

「こりやぁ大変なことになりそうだ」

サカズキは一足先に黄猿邸を出た。沈みゆく夕陽が今日の終わりを告げている。

浮かべていた笑みを消し、静かに歩き始めた。

「とまあ、そういうわけだから出来るだけ初めての奴らは駐屯所から出ないようにな」

船の残留組からシャボンディ諸島についての注意事項を受け、いざ島に足を踏み込んだ同行組は、足早に歩く大将の後を追って、駐屯所へ来ていた。

「黄猿大将閣下、お待ちしておりました」

敬礼の列に迎えられ、敷地内へ入ってゆく。この駐屯地の責任者も建物の外で待っていた。

「ご足労頂き感謝いたします」

「それで、どういう状態になってるのか教えてくれるう〜？」
詳しい説明は中で、ということになり、同行組は待機を命じられた。建物の外で警備に当たる、駐屯地勤務の海兵達とこそそと話が始まる。

「女性はさすがになあ。昨日も連れ去られてたよ」

「ま、ここにいる海兵はみんな男だし、黄猿さんところのやつらも野郎だろ。そんなに心配しなさんな」

さすがに1カ月もこの島に詰めていると心身ともに疲労がたまるという話から始まり、世界貴族たちの横暴の数々が回りくどく巡る。この駐屯地外でこういう話はもちろん禁句だ。内部でも余り宜しくない傾向はあるが、全てを禁じてしまうとストレスが直接胃を攻撃し、この島に留まっていられなくなってしまうのだそうだ。

一応、わたし女なんだけどなあ。

乾いた笑いをこぼしつつ、がっくりと肩を落とす。

伸びていた髪をばっさり切ってしまったのがいけなかったのか。これからの成長に、いろいろと期待をかける。

「で、黄猿大将が呼ばれた理由っていうのは…」

同行組の関心はそのひとつだけだ。

海賊達もこの島の危険度は身にしみて分かっているため、コーティングが済むまで、大人しく待っているという。

コーティングというのは、海底深くにある魚人島という場所に向かう為に施さねばならない処理であるという。あちらの世界でも樹脂や薬品で素材の表面を薄い被膜で覆い、素材自体の保護や新機能をもたせたりする場合に加工されていたはずだ。主に防腐や防水、紫外線をカットするレンズ、一番分かりやすいのは車に施す撥水コートだろうか。

「シャボンディで行われる」コーティング」と呼ばれているそれは、

船全体を丸く覆うのだと言う。想像しにくいと眉を寄せるアンに、時間があれば見学に連れて行ってやると駐屯兵が言った。

ここシャボンディまで辿り着けば、あとは赤い壁の向こうに向かうだけだ。海賊達が憧れを抱く海、新世界は目の前に迫っている。だから新世界を目指してこの場にやって来たその年の新人達もここではひっそりとその身を隠すのだという。

なんでもなあ。複数の駐屯地勤務の海兵がこそつと声のトーンを落とし、

「ルナルディ聖の末息、デルハイド聖が7歳になり、初めてこのシャボンディに散歩に来るらしいんだ。その警護に、大将を呼んだって言う噂なんだよ」

そう囁いた。

過保護にも程があるだろう。

同僚のつぶやきに、まあそんなもんだろうなあ、とアンは苦笑する。

この島で天竜人に危害を加えようと思える一般民衆はいない。誰もがみな、自分の命が欲しい。触らぬ神に祟りなし、とはよく言ったもので、数百年という年月をかけて築かれた固定観念により、手を出そうと考えるらしいだろう。

膝をつき頭を垂れる。決して世界貴族を眺めるような行動をとってはならない。

この諸島に暮らす人々は、日常生活の中で抗うのがいかに無意味かという事を、身をもって見せつけられている。海軍は無礼講を許されている立場だが、下れ、と命じられた時は階級が大佐以下であった場合、従わねばならない。

「無事散歩とやらが終わってくれるのを待つしかないな」

駐屯兵達がため息をつく。昨日も人間ショップ^{ヒューマン}で歩き方が気に入らないと、天竜人によって3名の奴隷が殺されたばかりだと言った。遺体の引き取り先はここ、だ。

人の命は、軽い。この島特有のシャボンのようにいとも簡単に割られてしまう。

ここは”新世界”を目指すつわもの達が集う島だ。

名の通った海賊達、それに目を光らせる海軍と賞金稼ぎが島の内部で手ぐすねを引いて待ち構えている。

そして一番性質が悪いのは人攫^{たち}いだ。

海賊は人身売買されたとしても法には触れない。だが今は大海賊時代と言われている。船でこの諸島の海域に入ったどくろの旗を掲げる一味を捕獲し、売っているのだ。

その中でも人気が高いのはオークションだった。一か月に一度開かれ、奴隷制度を禁止していない国の王や世界貴族が顔を覗かせると言う。

ある意味、世界貴族に召し上げられた人物は幸せかもしれない。アンは思う。

飽きられるまでは例え見世物として飼われると言っても、一般以上の暮らしが保障されているのだ。家族から引き離され、不幸の身の上となった者、攫われ焼き印を押され囚われの身となった者。どれもみな、不幸せだ。

けれど、不幸せだと感じる事が急きるだけ、まだまし。とも思っただ。

もしごみ山で暮らしている幼子が、奴隷として召し上げられたとしたら笑顔で向かうだろう。

首輪をされても、ひもじい思いもしなければ、温かな寝床も与え

られる。

夢のようだというだろう。

幸せで満ち足りていると感じている人々がほんの一握りしか存在していない世界で、下を見れば限りなく、上を見上げれば頂上を薄雲の向こう側に見ることが出来る人々も結構な数がいるはずだ。

海軍は確かに、正義の名のもとに人々の暮らしを守ろうとしている。入隊を希望する人々は、弱きを助け、悪を挫く正義の二文字に憧れを抱く。ただ世界は正義と悪、この二つで分けられるほどシンプルな作りをしてはいなかった。光が強ければ強いほど、闇もまた濃くなる。そして白と黒、そのどちらにも属さない勢力が出てくるのは致し方無い流れだった。

シャボンディ諸島は、闇を抱えていた。世界の中でもとびきり深い闇だ。

傍には聖地マリージョアという闇を垂れ流す巣窟と、光とされる海軍本部も隣接していた。

つまるところ、正義も悪も同じ穴のムジナなのだろう。呼び名が違っただけだ。

しかし決して悪の道に進めと誘っている訳では無い。自分が信じる道を、しっかりとその両目で確かめて選択してゆくしかないのだ。この海軍で成そうとするもよし、どちらの色にも染まらず、灰色の路を進むもよし、あえて闇を背負うもよし、なのだ。

もしアンが囚われたなら、エースが死に物狂いで奪い返しに来るだろう。

己が身を滅ぼしたとしても、殴りに来る。そう思う。
それはすごく幸せな事だ。

「5日ほどここに滞在するよお」

建物の内部から出て来たボルサリーノが確かな歩みで門へと向かう。

「船に一旦戻り、説明するからねい。それとアン、ちょーつつちにおいで」

「はい、なんでしよう」

仲良くなった駐屯兵と別れの挨拶をしている最中、名を呼ばれてくつくと歩み寄る。

「これを至急、センゴク元帥に手渡ししてくれるかい。ちょちょーいと、飛んでいけるよねえ」

はい、と渡されたのはジェルミンケースだった。

大きく極秘、と太文字で書かれている。

「すぐに説明会開くからねえ」早く戻ってこないと始めちゃうよ」

「はい、急いで戻ってきます」

ずつしりと重いケースを持ちあげ、敬礼する。

姿が一瞬にして消え、現れた場所は海軍本部、元帥その人の真上だった。

「ご、ごめんなさい!!」

突如とどろいた物音に、室内、室外で待機していた将達が何事かと立ち上がり駆けつける。

「何でも無い…」

気配も兆候も無く降って来たジェルミンを受け止めた額をさすりながら仏のセンゴクはため息した。

落ちて来た本人は泣きながら平謝りを繰り返す。そんな海兵の姿を、駆けつけた中将達は生温かく見守った。

さすが、ガープ中將の孫だけある。
外さない、と。

20 - きらきら星

軍の朝は早い。夜間の見張りで無ければ大体、みな6時には叩き起こされる。

長年朝日と共に目覚めを繰り返してきたアンはこれよりももう少し早くに吊ベツトから降り、甲板の上で鍛錬するのが日課となっていた。

時間帯で言えば食堂を切り盛りする料理人達コックといい勝負だろう。

シャボンディ諸島滞在3日目、58番グロープに浮かぶ黄猿の船は今日もまた慌ただしい。

天竜人がホテルから出発するのが10時過ぎの予定になっていた。

大将は勿論のこと、選りすぐられた護衛が15名同行する。それまでにこなさなければならぬ仕事は山のように海兵達にはあった。

「じゃあちよつくらと今日もいつてきますよお」

黄猿を見送れば少し気の抜ける時間も出来るがしかし、三等兵以上の階級を持つ人員はこれからグループを組んで無法地帯へと繰り出すのだ。

街の警備に駐軍が割かれており、他のグロープまで見ている余裕が無かった。それを補うために、黄猿の持ち部隊が出ている、というわけだ。

「おい、アン。これも持つて行ってくれ」

「はい、副長」

事務畑出身の男が取り忘れていた書類にサインを書き込み手渡す。さすがに大将が乗る船だけあり、3名の副長がそれぞれの役割を分担し、多忙な大将を助けていた。活動範囲がマリージョア周辺と

新世界という事情もあり、乗組員には実力者が多く在席している。

アンは幾つかの書類束を受け取り、内容確認をした。間違いが無ければおつるさんのところまでひとつ飛びだ。

「助かるよ。この書類の期限が今日までだからな。いやあ、本当に助かった」

海軍では黄猿や革命軍に所属している賞金首、暴君に次ぐ3人目の長距離転移者に注目が集まっている。前者ふたりは悪魔の実によって力を得ているが、アンは違う。黄猿や暴君はそれぞれ、実の恩恵を受け、光の速さと衝撃で移動するのに対し、アンは点と点を重ね合わせるような移動の仕方をする。非科学的な現象に興味を引かれたベガバンクによる血液や細胞採取が行われ、化学班の手によって解析が進んでいるらしい。

自称口の堅い男である戦桃丸が教えてくれた話だ。

何も出てきませんように。

アンとしてはそう祈らざるを得ない。

「それじゃあ届けに行ってきます」

「ああ頼むよ」

マリンフォードでは今日も綺麗な青空が広がっていた。

おつる配下のひとりに書類を渡し、アンは船に戻る。

先日も将校達による訓練でこてんぱんにやられてしまっていた。

年齢を考えると強いほうだろう、と評価はされているが、まだまだ納得には至らない。特技ともいえる、瞬間移動も一日2回まで回数が増えたものの、やはり体のだるさは変わらずやって来る。

往復ともなればちょっとだけでも横になーらーせーてーえと目を瞑りたくなった。

しかしボルサリーノからは寝落ちを禁止されている。体を休めるのも大切な事だが、負荷を与え続けるのも訓練のひとつだと言われ、アンは必死に気を張っていた。

毎日本部へ行かされているのもその特訓の一環というわけだ。

体術を基本としているが、なかなか筋肉が付いてくれないのも悩みの種となっている。ボディビルダーのようなむきむきになりたい訳ではない。けれど必要な筋力くらいは欲しいと願う。その内ルフィにも腕相撲に勝てなくなりそうだと、部屋から布の鞆を持ちだしアンは甲板の上でストレッチを始める。

柔らかいなあとは言われていた。

足を体に対して水平にし胸をぺったりと床につける。10数え、そこから腕の力だけで体を持ちあげ逆立ちしそのまま後転で立った。

「准尉、ドレーク曹長は隊と共に先発しました。今日は0から9GRまでが範囲となります。以上報告です」

「ありがとう、お仕事の邪魔してごめんなさい」

床磨きをしていた少年兵に申し訳ないと場所を明け渡した。

「おーい、アン弁当持つてけ」

「ありがとう!」

今日の中身はと聞くと、サンドイッチとのことだった。

お昼が楽しみだと、料理人^{コック}にもお礼を伝え、船に持ち込んだ唯一の私品でる鞆を肩にかけ船から飛び降りる。

「僕もいつか、准尉みたいになるんです」

「はっはっは、まあ頑張りな、ひよっこ」

雑用に戻った少年は姿を消した年下の上官へ手を振った。

諸島は大まかに、10つつ区切られている。

ここ60番台が世界政府と海軍の出入り口であり、初日に訪れた駐屯地もここにあった。70がホテル街、50が造船所と海底にある人魚島へ行くためのコーティングをするための工房が連なっている。40が観光地、30が遊園地やテーマパークが広がる地域だ。

ここまでが一応の安全地域とされている。

駐屯している兵力では30から70までを守るのが精一杯だった。この島には独自の治安部隊も組織されているが、海賊相手に敵う訳も無い。残る0〜29はほぼ無法地帯となっている。ただしほぼ、^{ヒューマンショー}というのには理由があった。20番台には人間屋、いわゆる人身売買を生業とした業者が集っているのだ。そして1番にはこの島最大の人間オークション会場がある。

世界貴族達はよくこの場所へ奴隷を買い求めにやって来るため、海軍は無法地域とはいえ1カ月に数度会場周辺を重点的に守らざるを得ない状態だった。

世界貴族を守るために、この島でのみ残された悪法を守るため、正義の二文字を背負った人員が割かれている。矛盾だった。しかしこの矛盾に意見を進言出来る者などいないのが現状だろう。

世界貴族が何処に行くかはその日の気分によって変わる。

黄猿も昨日、月明かりの下で鍛錬するアンにあちこち振りまわされたとぼやいていた。仕事が一段落すると、時々付き合ってくれるのだ。覇気を鍛えるには、実態を持たない自然系と戦うのが一番効率がいい。昨晩は高速の体を捕まえ切れず、あっけなく目を回して終わりになっていた。光の速さについて行くのは本当に大変だ。それでも動体視力は確実に鍛えられてはいると胸を張って言えた。

島から発生するしゃぼんの上を渡り、目的地へ向かう。

SIDE デイハルド

地上とは思ったよりも退屈な場所だった。父上様がそろそろ僕に

も奴隷が必要だというからついて来たものの、見渡す限り面白いものなど一つも無い。これならまだ院で講師より話を聞いていたほうがまだ有意義だ。

「デイハルド、お前にはあれが良いと思うのだがどうだえ」

「…父上様のお好きに」

無くても不便ではありません、と僕は答える。

昨日今日と、無意味な時間を過ごしている。

「なんと無欲な。さすがが息子、最上級を求めるとは私も鼻が高い」

どんなものでも買い与えよう、父上様は言う。

それならば、ひとつだけあるにはあるんだ。

「ならばひとつだけ、買って頂きたいものが」

僕の言葉に父上様は難しい顔をする。

もう僕は飽きた。下々民達と一緒に空気を吸わないようにわざわざ殺菌した空気を吸い続けるのも面倒だ。早くマリージョアに戻り、研究したい題材があるのに何を父上様は僕に求めているのだろう。

家を継ぐのは大兄様だ。

たくさんの奴隷を引き連れ、貴族の名に恥じない振る舞いをされているではないか。気に入った奴隷や妻を聖地へ迎え、前途も明るい。

父上様もそんな大兄様を誇りにしている。

ならばこそだ。

傍流となる身なら、僕の事は放っておけばよいとすら思う。

どうしても父上様は僕の奴隷をつれて帰りたいようだから、わがままをひとつ言ってみた。

叶えられるとは思わないけどね。

そうこうしている内に午前のオークションは終了した。

父上様は冷やかしに人間屋へ寄るといふ。僕も一緒に来るかと誘われたけれど冗談じゃない。

「良い良い、デイハルド。お前は我が一族の中で唯一の本流であり最も頭の良い子だえ。ただの奴隷は似つかわしくないと思おうてあのような注文を付けようとは。面白い、大将に掛けおうてみよう。20ある家の内、最も栄誉ある我が家紋にかけてのう」

僕は案内役の黒服を伴ってホテルへと戻る道筋を歩く。

あの海兵は今日来ていないのか。つまらないな。

「護衛などいらぬ。僕は天竜人だ。逆らおうとする愚かな下々民もおるまい」

父上様から離れ、僕はひとりになった。

さあどこへ行こう。下々民を見続けるのも余り余興にはならないだろうがまあいい。

父上様から離れた僕ひとりを見て、下々民がそれでもひれ伏すかどうか見てやるのも楽しいだろう。

「最短距離でホテルへ向かう道筋はむこうか」

「はい。目的地は分かっておりますのでご安心を」

ついて来ようとする海兵に銃を向ける。

「来るな、殺すぞ」

行く先々で膝を折り視線を背ける下々の姿があった。

マリージョアでも父上様や大兄様達は奴隷を足にする。楽なんだけど世話が面倒なんだよな。飽きれば捨てればいいと姉様も言うけれど、興味のないものに時間を割く方が無意味だ。

「おお…デイハルド聖、ひとりで散歩アマスか」

「これはこれは、お久しぶりです。ロズおじさま、シャルリア姉

さま」

父上様が懇意にしている方とこんな所で会うとはね。

黒服が深く頭を垂れている。

ロズワード聖は奴隷を四つん這いに這わせ、此方にやって来た。

「デイハルド聖も七つ、そろそろ奴隷をもつお歳アマス。良いものは手に入りましたか」

「なかなか希望する物が手に入らず苦勞してます」

午前中に父上様とオークションに行っていた事をふたりに話す。

「まあ、お父上様ちょうどよいでアマス。お遊び用を一つ買ってくださいまし」

ならば午後にオークション会場に行ってみよう、とロズワード聖が話す。

「船長シリーズも新しいものが欲しいと思っていたところえ。ルナルデイ聖と待ち合わせて競るのも一興か」

僕はふたりと別れ、歩く。

不意に人の姿が途切れた。振り向くがいつの間にか黒服の姿が無くなっている。

「おい、どうなって…！」

SIDE アン

振り向きざまにかかとで鎖骨を砕く。地面に足を着く瞬間に嵐脚で回りを囲っていた男達をカマイたちで吹き飛ばす。

「わたしは海軍本部准尉、ポートガス・D・アン！ 去れ、人攫い！」

名を名乗っても男達は引かない。海軍所属である証は、左腕に巻いた青いリボンだけ。最小の制服でも大きかったし、伍長以上は私服の着用が認められている。だからわざわざ作り直さなくても構わないと言ったのが仇になっていた。帽子だけでも借りて被ってくれ

は良かったと思っても後の祭りなんだよねえ。入れたと思っていた帽子とバッチ、忘れてきたわたしが悪いってのは解ってる。

多勢に無勢だった。殺さず、とは言われていないけれど。

「あんた能力者かい。いい値で売ってやるよ。大人しく捕まりな
！！」

「くだい！」

倒しても倒しても何処からともなく沸いてきた。

ご飯を食べる暇なんかない。しつこいし、粘着してくるし、艦のみんなと合流できないし、ドレークもどこ行っちゃったのかな。あ、もう嫌だ。ねちっこい。

技を過信するな、覇気に頼りすぎるな、と幾つも決まり事をボルおじさんと交わしていた。

どんな力も鍛えられた体と精神があつてこそ、本領を発揮すると教えられている。なので使いたくてうずうずしていたとしても、極力使用を控えていた。

けれども、さすがに回りを囲まれると使わざるを得なくなる。

「ほんとにこの島、変だ」

治外法権だとしても、堂々と人間狩りを行うだなんて馬鹿げているとは思えない。

それだけ『奴隷』の需要が高いのだろう。

身分によって命が軽いだとか、重いだとか本当はしてはいけねえんだけれど、ね。

ここでは、それが普通でまかり通ってしまう。

手向かってくる男達へ出来るだけ手加減をしつつ、全てに泡を吹かせ走る。生き物って実は気を失わせるより、殺す方が簡単なんだよね。動脈を押さえるか切ればそれで終わりなんだもん。

それよりもちよつと急がないとダメかもしれない。近い場所で悲

鳴が聞こえたんだ。

マングローブをひとつ渡る。微かに残る気配は、命の残り香だった。

血みどろになって倒れている男を見つけたけれど、残念ながら息はもうしていない。

「この人、どこかで見たことが……」

記憶をさかのぼるとすぐに出て来た。世界貴族の後ろに立っていた人だ。

ということは、天竜人がこんな場所にいる、の？

ありえない、とは言えなかった。

人間が考えうる全ての想像範囲内は、0%に限りなく近くても可能性はある。

まさか、とは思う。

意識を集中した。広く浅く、感覚を広げ音を感じる。

木々の呼吸、波が小さく弾ける心地よい響き。その中に野太い声が混じった。

「あつちだ」

わたしは駆け出す。風の流れにたゆたうシャボンを足場に、空を飛ぶ。思いの外近い場所からだった。根の部分に行くより、バランス感覚があるなら此方の方が断然早く移動できる。

小さな子供が傷つき転がされていた。意識はまだある。冷たい視線をただ、男達に放っていた。子供の目じゃないよね。わたしやエースも良く言われていたけれど。

屈強そうな男が16名、民間人ではないだろう。普通の人は刀とか銃とかは持っていないものね。

「船長の仇だ。^{かたき}天竜人なんざ滅んじまえ！！」

わたしは振りあげられる刀の前に剃を使い身を躍らせる。覇気と

鉄塊を使い刃を防いだ。

「ん。引いて貰えたら、嬉しいかな」

大人がよつてたかつて、子供を虐めるなんてよくないよね。

天竜人が多くの人々にとって害悪になっている事実は、確かに認められるけれど。

子供には、罪が無いと、そう思いたい。

それにここはシャボンディ諸島、しかも今、黄猿大将が常駐している。

天竜人に手を上げればどうなるか、知らない訳でもないだろうに。

「正義ごつこのつもりか、ガキはすつ込んでろ！」

「そうだね、おじさん達にはその正義ごつこに付き合っ貰っちゃおうかな」

口元に弧月を描いて、わたしはナイフを抜いた。

赤い飛沫がマングローブの幹を彩ってゆく。

ひとり、ふたりと呼吸を奪った。筋肉運動により噴き出される命の雫が足元に水たまりを作った。唇を閉じていても、呼吸と共に入ってくる味に眉をしかめる。

それでも、これでもね。今でも激しい抵抗はあるんだ。

この手で命を狩り取ることに、慣れようと思っても出来なかった。けれどそれで構わない。奪った命分の業くらい、引き受ける。生まれた時から父の名によって疎まれてきた命だもの。生きるために奪う。ためらいはしない。

本当は見逃してもよかった。戦意を失っていたから。

だけれど最後のひとりを指銃で首を掻き切る。あちらこちらで紅の噴水が上がっていた。全てを沈黙させてから、額の汗を拭う。背にも嫌な、べたりとしたものをかいているけれど、まずはここから離れる方が先決かな。

血の匂いに咽る天竜人を抱きかかえ、少し離れた場所に移動した。

「もし。デイハルド聖、大丈夫ですか」

本来なら触れることも下々民は許されない天竜人の体だけれど、この状態で規則が、とか定められているとか言ってられない。軽く体を揺する。

けれどもうつむいたまま、此方を見ようともしなかった。

そうだよ、普通これが、7歳という年齢の反応だよ。

落ちついていられるわたしのほうが、おかしくなってきたのかもしれない。

まだ海軍に入って半年、しか経っていないんだけど。嫌になっちゃうなあ。

わたしは呼吸を整え旋律を紡ぐ。

T w i n k l e , t w i n k l e , l i t t l e s t a r ,

H o w I w o n d e r w h a t y o u a r e !

U p a b o v e t h e w o r l d s o h i g h ,

L i k e a d i a m o n d i n t h e s k y .

T w i n k l e , t w i n k l e , l i t t l e s t a r ,

H o w I w o n d e r w h a t y o u a r e !

そう、きらきら星、だ。

あちらで使っていた言葉は、なぜか此方で使うと聞いた事も無い言語に聞こえると言う。

歌は心を和ませる。

こんな時に、と思うけれど、こんな時だからこそ、だからかな。

「…それはなんというものののだ」

「きらきら星と言います。夜空に瞬く小さな星を歌ったものなんですよ」

「そうか」

落ち着きを少しだけ、取り戻せたようで何より。

「立てますか、きつと心配してます。帰りましょう」

差し出した手のひらに、小さな手が重なった。

21 - 証

海兵のひとりが天竜人によって打ちすえられていた。

影から見守る人々も余りの悲惨さに顔を背けている。海兵は誰一人として動かない。

ぽたり、ぽたりと紅い滴が大地に落ちた。剥き出しの根にはべったりと血がこびりついている。そして赤い色を混ぜたシャボンが大様々な形を成しふわりと舞いあがった。

鞭を持ち怒りに震えている男はルナルディ聖だ。大きく肩で息をし、それでもまっすぐにその眼光を反らさず放ち続けているのはア
ンだった。

事の顛末を確かめに走った海兵はまだ戻って来てはいない。

体中が血みどろだった。

致命傷ではないものの、手足に撃ち抜かれた銃創からの出血で意識が朦朧もろうとし始めている。

始まりは殺害を明記された書きなぐりの文字が海軍へ届けられた事、だった。

天竜人のみが身につけられる特殊な衣類の切れはしと共に、紙を持参した人物が居たのだ。その人物は既に殺されてしまっている。報を受けてやってきた天竜人に、役立たず、気分が悪いと弾が尽きるまで撃たれ苦悶の中、灯を消したのだ。

解読が難しい文字羅列をどうにかこうにか解き明かし、警戒体制と捜索隊が無法地帯3か所に出発した後、父親であるルナルディ聖にも現在の状況が伝えられた。

激しい叱咤を受けたのは黄猿だ。

なぜひとりで行かせたのだと、海軍関係者をなじる。

7歳にもなったのだから、ひとりで行動する事も覚えなければならぬ。お前の好きなようにするが良い、海軍もあれの後を追うな、今動けばその海兵に名誉の死を与えてやろう。息子の邪魔をしてくれるな、と言っていたのにも関わらず、だ。

世界貴族は人間を、同じ生き物として見てはいない。
ペットでも無い。

家畜は腹に収まると言う栄誉すら得るが、人間はそれ以下だと明言している。

無理に護衛をつけても良かったが、動かすなと言われたならそれまでだ。

殺されると分かっている部下を出さねばならない時もあるが、今回の場合は息子の背が見えなくなるまで、動こうとする海軍に向かい銃を聖が構えていた。

少し間を置き、探して後をつけるよう数名に通達したものの、この広いシャボンディ諸島だ。少人数で事に当たるのは難しい。

それでもこの島に訪れていた他の天竜人と会話していたところを見つけ、後を付けさせていたのだ。

しかしここでも邪魔が入った。

「丁度良いところに海兵が居たアマス。この奴隷は飽きたから引き取るアマス。ふふふ、今ここで殺すのも楽しそうな余興アマス」
そう言ってこっそりと抜け出ようとした海兵すらも呼びとめ、捜索隊を瓦解させた。

打った手をことごとく破ったのは天竜人自身だ。

しかしその責めは全て海軍に押しつけられる。海兵達にとって、これが日常茶飯事だった。

感情を押し殺し、天竜人の御用聞き、手足だ、小間使いだと言わ

れても、その声すら聞こえないふりをしてやり過ごすしかなかった。

目の前で公開処罰されている同僚が、まだ年端もいかない子供が滅茶苦茶にされていても手を出せない立場に、歯を食いしばっている人員は多かった。

アンはそんな心の声に痛みも忘れてくすぐったく思う。

感謝こそすれ、なぜ見ているだけだったのかと糾弾など出来はしない。

世界は全て平等では無いからだ。誰かが裕福を堪能していれば、誰かが貧困に喘いでいる。

唯一同じものは時間だけだ。

だから境遇などどうでもよかった。毎日を、生きている時間を無駄にしないこと。

生きているのか死んでいるのか、分からないがサボに誓った約束だった。

そしてなぜかじくじくと、脳内麻薬で麻痺していた傷口が痛み始めると思い出されたのはルフイだ。

あの時よく我慢してたよね、偉かったねえ。

いまさらながらに思い出す。

話せばひとりになってしまふ。泣くなと言われ、涙を目の中に貯め込んだルフイが受けた暴力は、これよりももっと酷いモノだっただろう。掴んだ手のひらの温かさを手放すくらいなら、体が傷ついても構わない。強い意志を以って、痛み、心に挫けず耐えていた。

眼を反らさないで。

真摯な瞳に誓った願いを違わない。

アンは約束を守った。

決まり事では無く、交わした約束を優先させた。

その結果がこれだ。けれど心は晴れ晴れとしていた。きつと言われるだろう。我を通すな、と。

そう言われたら、きつとアンはこう言い返す。

「譲歩して自分に嘘をついて、相手を傷つけたら…きつと後悔する」

だからこんなことくらい、どうという事は無かった。

誰もが動けない。

アンが受けている仕打ちは、海兵達にとって理不尽なものだった。しかし聖にとってはあり得ない出来事が続いた人生最悪な一日となってしまうている。

天竜人の側にいつも付き従い、天竜人の言葉を肯定する男が何者かによって殺され天竜人が攫われただけでも大事であるのに、やんごとなき身分の世界貴族に触れかつ抱きかかえるなど、言語道断な事例が今日だけで指が幾つも折れてしまうほど更新されてしまったのだ。

侮辱だった。

我が子を穢されたと、ルナルディ聖は激昂し続けている。

「よくも、よくも下々民の分際で…！！！」

聖がアンを踏みつけた。

泣いて許しを乞うのならまだ可愛げもあるだろうが、銃を撃つても、鞭を肌がうつ血し切れたとしても、声ひとつ上げはしない。

「人間にしておくのも歯痒い、どうしてくれようかのう」

「…っ」

頭部をぐりぐりと地面に押しつけるように足を動かしながら、ルナルディ聖は思案する。

末子が奴隷にと望んだのはこの下々民だった。このまま聖地へ召し上げ、水絶ちの刑などで遊んでも楽しそうだ、と邪笑を浮かべる。

海軍所属者をここで召し上げる前例を作れば、これからの遊戯にも幅が広がる。

黄猿に向かい今すぐにこの下々民を聖地へ輸送するように、命じようと唇を動かそうとした。

「…お父上様、その足を下ろして下さい」

人垣を割り、介抱されていた次代の天竜人が歩みを進めた。優雅に父の前で一礼する。

しかしルナルディ聖は驚愕した。

息子は下々民と同じ空気を吸わないように、保護されていたシャボン^①を身につけてはいなかったのだ。それどころか聖地で暮らしているそのままを晒し歩いている。

だが人垣を作っていた人々は幼いながらも威厳ある姿に、息を飲んでいた。

「おお…もう体は良いのかえ。清めはまだ済んではないようだ
が…許そう、この父に触れることを許してやるえ」

両手を差し出す父に一瞥し、デイハルド聖は道を開けるよう指示する。

「お父上様、これは僕のもんです。なにをなさるか」

「そうであるの、そうである。愛しのルナルディ、お前の代わりに”しつけ”をしておったところだ」

汚らしいものを見るように、あからさまに嫌な表情を浮かべる。

しかしその息子は、父の制止も無視し膝を折りアンに触れた。

「ヒイヒイヒイ、何をなにをするえ！」

気でも触れたかと父は後ずさる。

全く、成すがままにされおって。逃げれば良かったものを。

小さなつぶやきに海兵達が耳を疑う。

「すぐに手当てをして貰う。今しばらく我慢せよ、死ぬな、命を聞き届けぬなら今ここで殺してやるう。どうだアン？」

父の悲鳴すら気にせず、言葉を続ける。

「あははは…死なないように、は…頑張ってみる…よ」
数時間前とは全く違う表情をするようになった、少年に笑いかける。

「いつか認めさせる。お前は僕の物だ。心しろ」

半狂乱に近い状態に陥った父に一瞥したデイハルド聖は海軍に命じる。

「この者の命を救え。その灯を消してみろ、今ここにいるお前達全ての命は無いものと思え。連れて行け」

身勝手な言い分だった。しかしその言により、海兵達に動く機会が与えられる。

担架に載せられたその横にデイハルド聖が歩み寄った。

「これは僕がお祖母様より賜った、大切なものだ。必ず返しに来い」

小さく頷くアンの胸に、身に着けていたビーズアクセサリを置いた。それは天然石で作られ、素朴だが色鮮やかな玉が並んでいる。

「それまでに掌握しておこう。楽しみに待っているがいい」
血が手につくのも構わず、握らせる。

担架が動き出す。霞み始めていた目に、大きな手が映った。
付き添いで黄猿が歩いている。

握りしめられただるう手のひらには爪が食いこみ、色を変えている場所があった。

「ごめん…なさ…い」

内臓のどこか傷を追っているのか、喀血する。

「ゆゝつくりやすみなさいねえ。ちゃんとお仕事したんだよ、偉い偉い」

船から駆け付けた医師が気管を確保しながら、応急処置を施してゆく。どこもかしこも傷だらけだった。体の中も外も、ある意味生きていくのがおかしいと言える状態といえる。

「すまん…おれがお前を待てばこんなことには…」

「気に…しちゃだめ。わたしが…しくじったの。ドレークは、悪く…無い…」

話は後にしてくれと、船医が駆け寄った海兵を押しつけた。

「怖いねえ」

医師達に部下を任せ、残った部下達に振りかえる。

あの天竜人の価値観を短時間で変えてしまうほどの影響力に思わず口癖が発せられた。

清濁併せ呑む少女に、感化された天竜人がどう変わって行くのか、不謹慎と言われるだろうが黄猿は楽しみにも思えた。

なにがあつたと聞くのは野暮だろう。

「さあて、キミ達。さつさと後片付けしちやおうか」

半狂乱に陥った父を元に戻すため、天竜人としての威厳を下々民に見せつけた、とデイハルドは元の出で立ちに戻った後伝えた。

「恐怖や権力で平伏させるのは簡単です。ですが獣にも劣る下々民に慈悲を与えるのも世界貴族としての器量とは思われませんか」

「おお…さすがだえ。愛しいデイハルド」

父は我が子の手を取る。

渡したビーズは聖地に自ら来させるための道具だというと、なんと頭の良い子だろう。そう言って抱きしめた。

たわいない。

海軍所属者を任務中に聖地へ召し上げた前例はない。仕事外でのシャボンディに来ていた海軍所属者を連れて上がった事が何度かあっても、本部や聖地役人からの申請で恩情を出さねばならなかつ

た。

無理に連れてこられた場合は、法律に則って返さねばならない。だが自らの足でやって来たならば、そこに留まるとするなら、法には触れないのだ、と。

その後父の勧めに従い、奴隷を購入した。

聖地マリージョアでは奴隷を所有することが、社交界入りが認められる証となる。

活きのよい奴隷はやはり、オークションに限ると父親の言に黙って頷いていたが、要は巡り合わせだ。小さな人間屋にこそ息を潜めた強者が居る可能性もあるだろうと、半ば遊び感覚で手近な店に入ってみた。

大きな展示用に設えられてた硝子越しに、10ほどの奴隷が陳列されている。その中からデイハルドはひとりを指さした。

「お父上様、これにしても構いませんか」

選んだ種は人で性別は男、名をランという。

「そんな軟弱そうな奴隷でいいのかえ。あれのような大きさを、ほれ、そのメスなど良いと思うがのう」

「初めての奴隷ですから。潰しが利く方がなにかと」

捨て値で売られていた男を引き連れ、聖地へ戻るゴンドラへ乗り込む。

一度背に乗って見ると良い、と言われ、試してみるが心地は最悪だった。

わざわざ奴隷に乗る理由が判らない。

悪しき風習と聞いたが、こんなものは邪魔以外の何物でもないだろう。

生まれたときからこれが普通とされていた。疑問や拒絶の感情は無いが、絶対的に必要かと言われたら、そうでもない。

世界の体制が根元から崩されてしまえば、真つ先にその憎悪が向けられるのは世界貴族であるのは明白だ。父を初め、マリージョアに住む誰もがこの世がひっくり返るなど、考えた事もないだろう。デイハルド自身もアンよりには信じられない話を聞かなければ、聞いた今でも受け入れ難い事実として胸の中に横たわっている。だが聖地は緩慢な怠惰が満ちていた。

地上に住む人間達にとつては鬼畜の所業だと言われる行為が横行している場所だが、そういう事までもしなければ退屈過ぎるのだ。世界を支配し続け、それ以上の高みが無い場所に立つという苦痛もある、という事だ。

停滞ほど面白みに欠ける世は無い。だからデイハルドは学問へ逃避した。

しかしデイハルドは世界を転がす最初のひと駒を手に入れた。ならばせざるを得ないだろう。これからの未来、退屈こそが最大の楽しみと言えるような、過度な時を過ごさねばなくなるだろうからだ。

デイハルドは奴隷から降りる。

鎖を奴隷の背に乗せ、手ぶらで歩き始めた。

よつんばいの男からなぜ、という声がつぶやかれた。

「生きる目的を失い自暴自棄になっている奴隷には必要無いだろう」

男は天竜人とはいえ、子供に言われるとは思ってもいなかった。

「理解したか。お前に生きる理由を与えてやろう。海原に出たいと願うなら、そうだな、機会もあるだろう。それまで僕を守れ。そうすれば面白いものも見せてやれるだろう」

デイハルドは運命的な出会いを果たした。

何もかもが虚ろで色あせていた世界が、たった数時間のうちに輝かしいまでに彩^{あや}なした。

ならばこのまま色鮮やかなまま、初めて自らの物にしたいと欲した存在の為、世界を遊び場とするのも楽しそうだと思ったのだ。

「さて、何から始めようか」

男は見上げる。自らの主人となった天竜人を。

囚われ諦めていた。願いも望みも、生きることすらも。硝子の向こう側を見ながら、このまま朽ちても構わないとすら考えていた。

運命というものがあるならば、こういうことをいうのだろうか、
と自然と頭を垂れ傳かすいた。

22 - 静養

縁側でぼーっと光合成するのが最近の日課となっていた。

作務衣さむえを着、和帽子を被り、お茶をすする。完璧に純和風の生活だ。

運ばれた当初、負っていた傷は医者が嘆くほど酷い状態だったそう。医者がかき集められ緊急の手術が行い、なんとか繋げられる個所を繋ぎ、失われた血を補充したという。

なされていた本人はずっと気を失っていたわけで、何がどうなったのかは医師と看護師、同僚や上司から聞く他ない。口で表現できないくらい、血みどろだったという。背中などは筋肉が裂け、骨が見えていたとか。

当日、船医がシャボンディでは十分な治療が出来ないとし、足が早い小型の快速艇でアンはマリンフォードへと運ばれた。そこで執刀に当たった医師が本当にまだ生きているのか疑ったくらいの傷であつたと、ぐるりと回った噂もようやく、耳に入ってきた。

その部位も今やすっかり皮膚が定着している。撃ち抜かれた両手足も弾が貫通していたのが幸いして早々と癒着した。

その後病院からは10日ほどで出ることが出来、2重の意味で医者を驚かせてたのもいい経験だ。

獣並みの治癒力と言われたが、全くもって本人に自覚は無い。けれど生まれてからずっと森で生活していたのが影響しているなら、義祖父に感謝せねばならないだろう。

森では基本弱肉強食だ。弱ったモノから捕食される。怪我をする、イコール弱ると同意義の場所で暮らしてきた。人間に限らず生物には自己治癒力が備わっている。死を回避するため、細胞が活性化したのであれば、御の字だ。それに今回、こんなにも回復が早まった

のにはもう一つ裏がある。タネはエースだ。

肉体が意識を手放している間、ずっとアンはエースと一緒に行動していた。

久しぶりに見るルフィも相変わらずマイペースで、食事の風景も殺伐として変わっていない。

成長期に入ったエースは少し一緒にいなかったただで、ぐんと身長を伸ばしていた。負けじと牛乳を飲んでやる！と叫んだところで、体は今、ベットの上に括りつけられていて動けない。

そらみる、と勝ち誇られ、カチンとしたのも筒抜けだ。

森の生活は変わらず続いている。

ふたりきりになった事で、狩りの仕方も変わっていた。

（すごいルフィ、今のすごく伸びてた！）

「ん？　なんかアンに褒められた気がしたけどきつと空耳だな！」

（いや、ここにいるんだくれだね？）

その横でエースが大笑いした。

「んだよエース」

むすーとした表情をする弟の頭をアンは撫でる。

（ルフィってば可愛いなあ、もう）

精神が体を離れていると体の治りも遅くなると気付いてからは、ほどほどに行ったり来たりを繰り返す。

（ところでサボとわたしのプレゼント、身につけて無いんだ）

ある夜に聞くと、帽子に付けようかと思っている、という回答が帰って来た。

（帽子かあ）

お互いのことがある程度筒抜けだとしても、こっやって意思疎通しなければ分らないこともある。

そうこうしている内に体が無いと不便になってきた。

話も出来る、同じものを見る事も出来る。

しかし、味や匂いは共有できなかったのだ。

ふたりの食欲に触発されて、お腹が空いて来たようにも感じる。

ならば、とエースが提案した。

おれからアンの体良くなれって願ってみようか、と。

精神的な繋がりが増すと肉体への作用も生まれるらしく、エースが一方的に回復祈願をした結果、あつという間に肉体の損傷が軽くなった。しかし肉体という器が形を取り戻すと、ココロだけを飛ばす事が難しくなってしまったのだ。久々の再会は、あつという間に終わってしまった。

だがしかし回復祈願にも注意点が加わる。片一方の治療が早くなる代償に、もう一方がその代わりと言っては何だが、体力と精神力、共に大量消費してしまうのだ。

現在進行形で初めてエースが風邪をひき、倒れている。

これでおれも馬鹿じゃねエ、と喜んだそうだが、鬼の霍乱かくらんだよ、とダダンに言われてしまったらしい。生まれたてを渡されてこのかた、病氣一つしなかったエースがぱたりと倒れた時、一家全員が明日にも世界が終わってしまうのかと嘆いたそうだ。ルフィもエースが死んでしまうと大泣きしたらしく、おちおち病氣も出来やしねエと困りながらも嬉しそうに語るエースには笑みが浮かんでいた。

今度はわたしがお返しするね、と自分の体を癒しながら、エースも良くなれーと願っている日々だ。

先日の診察で体中に巻かれていた包帯もとれ、運動も軽くではあるが始めている。

マリンフォードを1周するのは軽くも、ちよつとでも無いと突っ込まれたのだが、やることが無く暇を持て余している状態だった。ごろごろ転がっているのも飽きたし、かといって本部に顔を出せば

寝てると追い出される。本を取りに帰ってもいいのだが、移動は禁じられていた。

しかもなぜかこの居間に見張り虫が配置されてしまい、動くに動けない状態となっている。どれだけ鉄砲玉と思われているのだろうか。なので大人しくしているしかない。

「じー」

見張り虫の視線に手を振る。

「本屋さん行こうかなあ」

仰向けで見る空はまだ青い。

黄猿も時間を作っては、此方の家に戻って来ていた。

先日も帰港したサカズキからも将棋を指しながら小突かれてもいる。

義祖父からも痛い一撃を貰っていた。無茶をするにも程がある、と本気で怒られたのは初めてで吃驚してしまった。

しゃらりと耳に石が打ちあわされ流れる音が届く。

シャボンディ諸島で手渡されたビーズアクセサリは、希少な天然石を使って作られた、高価な品だった。世界貴族である聖の印が刻まれたプラチナ片が鎖骨の上で揺れる。

そのままつけてしまうと胸下までできてしまう為、3重に首に巻いてある。鏡を見て、首輪みたいだと思ったのは内緒だ。

昨日マリージョアに別件で訪れたボルサリーノから世界貴族からのお咎めは無し、と言う電話を受けた。詳しい内容は避けられたが、後日追って、沙汰が下ると言う。

デihalド聖は元気かなあ。

ルフィと同じ歳であるのに、全く違うタイプの少年だった。

高飛車でこの世の中心に立っているような物言いをし、けれども

見知らぬ世界の話に目を輝かせて聞き入っていた俺様気質の天竜人だ。

助け出してから駐屯所に行きつくまでいろいろな話をした。世界のこと、自分達のこと。それぞれが井の中の蛙だと笑いあったのが数日前の出来ごとのようだ。

前にいた世界でも勝ち組と呼ばれる、セレブ層が存在していた。どちらかというと、アンも裕福だった方だと思っている。帰る家もあれば、両親や祖父が残してくれた貯蓄があったし、大学も奨学金を受けずに通っていた。そんなに多くは無かったが、アルバイトをして自由に使えるお金もあり、プチ贅沢をしていた記憶がある。

貴族たち、とはそういうものだと思っていた。

同じ世界に住んではいるが、余り触れる機会の無い遠い世界の住人達。テレビの向こう側に広がる、芸能界という場所も似たような感覚だろうか。

馴染みがあるのは居酒屋とか、ファミレスとか、そう言う辺りで、接点などあるうはずもない。

意識の違いも顕著だろう。

この世界では最下層に生まれた。真ん中と一番下は身を以って経験しているが、一番上が何を考えているか、あまり良く分からない、が本音だ。

ただ想像は出来る。

支配者側であるのは確かだ。

しかし話を聞く限り世界を動かしている節は無さそうだった。政治的な判断は、別の組織が担っていると言っていた。

世界政府も組織的にピラミッド構造となっているのだという。頂点が世界貴族であり、世界政府を統括している。

政府の下部組織として海軍、裁判所、刑務所が存在し、政府に所属する形で、それぞれの国が連なっていた。政府に従わない国も実は多い。非加盟国の末路は悲惨だ。既に国の形を成していない、慨形化された島も多く存在している。

加盟国は毎年決められた額の国税を支払う。払えない国は非加盟国へと転落し、世界政府公認の奴隷産出国となるのだ。

権力を振るう立場に立つ者を五老星という。たった5人でこの世界を動かしている男たちがいた。

過去から今に続く、流しこまれた偽りない、ただ淡々と事実だけを映したフィルムのような記録を読めば、世界貴族とは祭り上げられている、体のいい偶像だった。

どうやって選出されているのかは情報が少ないため断定出来ないが、世界貴族の中から選りすぐられた人員が五老星として選びだされ、手のひらの中で思うがまま世界を転がしているのか、もしくは世界貴族とは関係の無い、また別の集団があり、その中で教育を受けた人物達が職に付くのか。

解っているのは実権は他所にあり、世界貴族の殆どは聖地の中に隔離され血筋や文化などを守るためだけに存在しているっぽい、という事だけだ。

まあ、そのまんまだよね。

思い浮かべるのは国家の象徴とされた一族だった。

ここら辺の詳しい内情は、もぐりこんで調べるのが一番だ。しかし、聖地に行く術など持つてはいない。

アンはぬるくなつたお茶を飲みきる。

立ち上がると青い電伝虫がよきつつのを出した。

「見張るのが仕事なのは分かってる、逃げないってば。お茶のお

代わり入れに行くだけだから、だからついて来なくてもいいって」

実は退院し此方に戻ってきてから一度だけ、抜けだした事があった。

止むにやまれぬ事情があり、こつそり数時間だけ抜け出たのが速攻でばれた。

そう、この監視専用の電伝虫がこつそり連れて来られていたのだ。義祖父が逃げ出さないわけが無い、と言いきつたらしい。

そりゃね、暇なのが一番嫌いなんだけれども。

本でもあれば気がまぎれるし、そのまま寝落ちるのもやぶさかじゃないのよ。

けれど、けれど。

行動パターンを読まれるほど、悔しい事は無い。

「お水かけてあげる。こつちおいで」

アンは見張り虫を呼んだ。毎日顔を合わせているとやっぱり愛着も出てくる。

日に1度、こうして庭の水やりをする時に、水浴びをさせていた。電伝虫は本当に不思議な生き物だ。

これで電話をかけたり、監視カメラの代わりに出来たりするのだから、存在自体が面白過ぎる。

機械では無い。ちゃんと生きているしふにふにしている。ルフィには負けるが、弾力性はかなりのもので殻の中は住処になっているのを確認済だ。

水浴びが好きなのはかたつむりだから当然としても、何を食べているのかが不明だった。

部屋にあけてもねとねとする液は出ないし、本当に不思議生物だ。

体が痛まない程度に、動かす。

だがはやり暇だった。こういう時はやはり出かけるに限る。

メモに買い物に出ると書き、電伝虫のうずまき部分にセロテープで貼りつけた。

これで誰が来ても、大丈夫だろう。ついて来ようとする見張り虫にすぐ戻ってくるからと言いつ聞かせ、服装はそのまま、草履をひっかけて飛び出す。

荷物は布鞆と財布だけだ。

背を押す風に足をかけ、空を駆ける。

街並みが眼下に広がった。久々の外だ。

着地の際多少の痛みを感じたが、生きている証、と道を行く。

向かったのは商店街だった。夕方だからだろう。海兵達の家族が暮らす地区が隣接しているためか、賑やかだった。商業地区の向こう側には学校などが固まる教育施設がある。アンも本来なら、学校に通っている年齢だ。傷だらけになりながら、体を鍛えていると時々恋しくなる。

友達と黒板に落書きしたり、給食を食べていたこと。放課後のクラブ、中庭にある遊具で高才ニやかくれんぼ、運動場でのドッチボール。

大学に通うようになってからは、学食で友達とお菓子をつまみながら音楽を聴きまわしたり、課題のレポートを数名で分散して楽にこなしたりと、楽しかった時間を思い出す。

あの頃は疑っていなかった。

幼い頃は明日が来るのは至極当然なことで、家に帰れば母がおかえり、と出迎えてくれる誰かが居てくれる事が普通だと思っていた。テレビを見ながら宿題をして、父の帰宅を待ってご飯を食べ、お風呂に入って眠る。

懐かしい顔が脳裏に浮かんでは消えてゆく。

あちらで過ごしていた子供時代と、今は違う。

森で生活していた時は疑問に思わなかったが、母親と手を繋いで歩く同じくらいの年頃の子どもたちは、猛獣と戦った事も無ければ、人を殺めた事も無い、か弱い存在だ。

見下げるこの手は命を奪う事が、できる凶器だ。

けれどあちらでの経験が、疑問を持たずにただ力を振るうだけが良いとしない、抑制となっていた。怖い、と思えるならまだ大丈夫。アンは深呼吸した後、人ごみの中に紛れる。

風がふわりと髪を撫でた。

最近、風や海や、木々や空が、語りかけて来るような感覚が強くなっているような気がしていた。

「慰めてくれているの？」

誰に言うでもなく、つぶやく。

アンが本当に知りたいことに関しては、世界は全てを語らない。まるで自らの足で探しだし、その目で確かめると囁いているようにも思える。

知識は本の中には無い。どんなに本を読み情報を得ても、それはただ知っているだけだ。知識とは得た情報を様々な形に展開させ成果に結び付ける能力だ。

父は全てを知ったという。

けれど何を知ったのかは探れなかった。

17を迎えるその日、きつと海原へ身一つで漕ぎ出るだろう。

それぞれの探し物をしに、海へと出る。鞆はひとつ、その中にたくさんの気持ちを詰めて進むのだ。

今は鞆に入れる、大切な宝物を集める刻。

慌てなくてもいい。

きつとまだ間に合う。まだ猶予が残っている。

本当に時間がないのであれば、もっと騒がしく、伝えようとする意思があるはずだ。

「それまでは力を蓄えなきゃ」

暮れなずむ夕日が鮮やかな暖色を残す空へ向かい、手のひらを伸ばした。

こんな所で迷ってなどいられない。

23 - 利する行い

背中が合わさる。

お互いの側面には能力者の男が煙草をふかして大きな斧を肩に背負っていた。

残るはただ一人。

「たつたふたりだけで俺の相手が務まると思ってるのかア」

言葉と態度で威圧をかけてくるこの男の名は巨斧のイグラ、懸賞金は4800万ベリーの賞金首だ。

ここまで船を発見してからおよそ10分余りだろうか。海軍本部に戻る途中にばったりと遭遇してしまった運のない海賊船だった。

「西の海出身だったけ」

「知らん。ともかく捕らえるぞ」

遠路はるばるお疲れ様、と手を合わせる。

「偉大なる航路」^{グランドライン}の折り返し地点までもう少し、というところで大將が乗る軍艦に出会ってしまったこの船には、50人を超える乗組員が居た。

ある一定ラインの力量以上を持っていなければ、墓場とも言われるこの航路では海軍がわざわざ手を下さなくとも、自然が勝手に淘汰してくれる。

「偉大なる航路」^{グランドライン}とはある意味、分離器と同じ役割を果たしていた。小麦粉を篩^{ふる}う、試験に篩^{ふる}って落とす。そう、選別の場だ。

ここまでたどり着いた船ならば、実力も相当なものだろう。^{グランドライン}しかし、上には上が存在するのもまたこの「偉大なる航路」の条理だ。

サーベルとメイスを持った相方の号令でアンは走る。

斧は船上での戦いでよく使われる武器だった。腕っ節に自信があるならば、カトラスよりも有用な道具となる。これは相手の船に乗り移る時、舷側に斧を突きさしてよじ登る際に利用された。登山のピッケルのように、斧を使うのだ。

イグラは巨大な斧をもともせず振りまわす。さすがはふたつ名、伊達ではない。

ふわりとアンは風に乗る。斧が作りだした圧を使い上空へと舞いあがった。

相方であるドレークは甲板を走りイグラに迫る。

柄を手のひらで器用に回し、イグラは大きく振りかぶった刃をすくぐに手元へ引きもどす。

巨斧から生み出された圧で舷側が弾け飛んだ。

「危ない」

マストの上にアンは立つ。

ドレークが交戦中の相手は動物系の能力者らしい。変身した姿はどう見てもウシ科だろう。

「モデル、か」

悪魔の実はいくつか同一に分類される種が出回っている。特徴的な姿だった。なにを食べたのかなあ、と観察する。

イグラの場合を例にとれば、ウシウシの実モデル、バイソンやキリン、ホルスタイン等が該当するだろう。悪魔の実辞典を見れば、動物系の多様さは面白いほど存在していた。希少な実も数多くあるのも動物系のすごいところ、だろう。千差万別なのが動物系の特色かもしれない。

悪魔の実は店で売られている訳でも、どこかの島に生っている訳でも無いとされていた。話に聞く限り、ぶかぶかと海に浮いているのだという。知らない間に手に入っていた、という棚からぼた餅的

な入手もあつたとか無かつたとか。

どこからともなく発生する唐草模様の実の出所は未だに世界の不思議と言われている。

たまに噂で、屋台やら露店が出ているとも聞く。

正義の二文字が入ったコートがマントのように音を立てた。

こんな邪魔な物、纏いたくは無かつたが規則で身につけなくてはならないのだという。

「ドレーク、油断大敵だよ」

がつちりと両の武器で斧を捉えられたイグラは、バケモノじみた脚力を持つだろう脚でドレークを打つ。

肘で咄嗟に防御を固めたが勢いよく舷側に背から衝突した。

アンは身の軽さを用い海賊の攻撃をかわしながら武器を拾う。

「武器系はあんまり使わないのだけど」

肉弾戦は慣れたものだった。日常的に相手をして貰っているのが黄猿ともなれば、否応なしに体術も上達するというものだ。

紙絵で斧による攻撃をことごとく回避する。視線は拾った武器に落としたままだ。

「ねえ、海賊さん。大人しく捕まる気は無いですか」

……返答は、無い。

当たり前だ。大人しく捕まる海賊などいないだろう。特に船を仕切る船長ともなればなおさらだ。己の為にこの海を渡っている。

「高みの見物をしていると思ったのだが」

「そんなわけありません」

戦線に復帰した相方に武器を投げる。視線は交わさない。受け取ってくれると解っていた。

正面から相手とやり合うのは、アンの戦い方では無い。相手の力を真っ向から受けず流す。どんなに相手が強力な一撃を放ってきた

ところで、力が向かう方向性を変えてしまえば、おのずと隙が生まれる。

動と静、形に2種あるとするなら、ドレークは前者、アンは後者の方だ。

身を屈め脚に力を蓄えたドレークが体勢の崩れたイグラの顔面にメイスを、懷に潜り込んだアンが鉄塊で強化した拳を腹へ打撃した瞬間、骨が碎ける音が響いた。

どこかの骨が折れたのだ。腹には骨がない。どこが碎けたのかは推して知るべし、だろう。

その場でイグラは白眼を剥いて絶命する。

「…捕らえるんじゃないのか」

「仕方がない。これは事故だ」

終わった事を手を振って軍艦の海兵へと伝える。

海軍所属者が賞金首を捕らえたり死体を引き渡しても懸賞金は出ない。報奨金という形で多少は出るものの、賞金稼ぎ達と比較した場合、ご愁傷様、と言われる額だった。

アンは接舷した軍艦から乗り移って来る海兵達と共に船の搜索に入る。

階級が上がっても、ドレークとの組み（コンビ）を解消しなかった。今あるこの位は自らの実力に見合ったものでは無い、そう感じていたからだ。黄猿の艦に乗っていた誰もがあの新聞を閲覧していた。だから嫉んだり距離を置いて接する仲間はこの艦にはいない。

それどころかより一層優しくされていた。それどころかこんな子供に負けていられないと、奮起さえしている。

愛用の武器を腰に戻したドレークも船内へ突入の準備を整え先行した。視線だけでまたあとで、とお互いに挨拶し合い別方向へ進む。

「アン少佐、捕虜を発見したそうです」

「ありがとうございます、すぐ向かいます」

自分よりも年齢の高い、海兵に頷いて階段を下る。

復帰初日、黄猿に伴われてやっていたのは海軍本部元帥の部屋だった。

幾度か使いを頼まれて来た事があるものの、ドアから入るのはこれが初めてだ。

悪寒しかなかった。

にこやかに横を歩くボルサリーノは、いつもと変わらず飄々としている。

中に入ると数人の中将が待機していた。その中には義祖父の姿も見える。

おじいちゃん、なんでいるの、とは言えない。この部屋では発言を許されたものだけが声を言葉にできる。

「ポートガス・D・アン、召還により参りました」

ようやく言い慣れた所属と名を名乗り、敬礼する。

センゴク元帥はアンをじっと凝視した。顔が引きつっていないだろうかと、内心びくびくものだ。

天竜人に関してのいきさつは既に聞き及んでいるだろう。

しかも入隊年数が浅いのにに関わらず、30日も負傷の為に休養してしまっている。

詰問を受けるのだろうか、それとも何らかの処罰を言い渡されるのだろうか。

どちらにしても心臓が痛かった。

しかしセンゴクから直々に受けた明言は驚くものだった。

よくぞ声を押しとどめたと、アンは自分を褒め称える。

それくらい衝撃的な物だったのだ。

開いた口が、開いたままになるようなそんな話だった。

もし許されていたなら、叫んでいただろう。何をどうしたらこうなるの、と。

そもそも昇格の理由が、聖地マリージョアに入国出来る最低限の階級の授与だった。

降格こそあれ、なぜ昇格。

義祖父がにやにやとしながら投げて来た新聞には、攫われた天竜人を救い出した英雄の孫、という見出しが出ていた。

内容を読む。嘔き出しそうになった。

否、もし飲み物を口に含んでいたなら嘔き出していただろう。

『特筆すべき事柄は、この若き海兵は英雄と呼ばれるガープ中將の孫に当たる、という事だ。 齡11歳で入隊を許された若き英雄候補は、高貴な血筋を未来に伝える若きデイハルド聖を悪名轟くルンデリヒト海賊団から救い出した。 聖地では救出を高く評価し、世界政府としては異例の恩賞を授与するという。』

これどういふことかと、義祖父を見た。 にやにや笑いは止まっ
てはいない。

諦める、と目が語っている。

裏がある、のだ。

たった30日で何かが起こった。 聖地に戻ったデイハルドが何かをしたと考えるのが妥当だろう。

しかし、だ。そう簡単に状況が変わるものだろうか。
そうして気付いた。

プロバガンダに使われたと悟る。

なんの為に、かはとりあえず横に置いておき、言葉を切り椅子の背を向けたセンゴクを見た。

「近日中に聖地へ訪問するよう、要請が来ている。招待状も渡し
ておこう」

赤い土の大陸で何かが起ったのだ。何があったのかはわからない。
ぞわぞわと背筋に悪寒が走った。

服の下に身につけたビーズに触れる。

彼にこのビーズネックレスを手渡された時、なんと言っていたのか。意識が朦朧としていて、記憶が飛んでいた為に覚えてはいなかった。

目の前がクラリと揺らいた。出来るならばここで気を失った方が
楽かもしれない。

退出してよし、との命が下り、アンは平静を装い、部屋を退出す
る。

いくつかの通路を通りすぎ、階段を下りたその先角を曲り、人通
りが無い場所で座り込んだ。

「早急に物事が進み過ぎて意味わかんない」

背中に嫌な汗が滲んでいる。

体の傷はすっかり癒えたが、今度は心臓を思いつきり締め付けら
れている気分だった。

アンも確かに、海軍を利用していた。

エースと同じ方法では追い付けない、だからここにやって来た。
海軍も同じだ。アンを利用する。

文句など言うつもりはない。世の中はお互い様で成り立っているからだ。

「…ボルおじさんが出航って言ってたから、船に行こう、船に。その前に衣装室だったっけ。受け取る服があるとか何とか。うーあー何がどうすればこうなるの」

アンが退出した元帥室ではガープがセンゴクとボルサリーノのやり取りを見ていた。

真実の報告も、虚偽の報告も両方、海軍本部トップには伝えられている。

「子供を祭りあげるには、少々やり方がきたなくはないですかねえ」

「上の決定だ。なんともならん」

大將は肩を竦める。

世界情勢は根元を世界政府が握り法と秩序を敷いているものの、海賊という無法者が次々と溢れだしている状態だ。いくら取り締まっても追い付かない。しかも海賊達の質が、昔に戻りつつある事に、センゴクは危惧を覚えていた。

大海賊時代が封を切られた当初は、海賊王の遺産を探すため大勢の海賊達がここ、”偉大なる航路”^{グランドライン}を目指した。しかし10年余りが過ぎ、海の支配や力こそ全てという考えがゆっくりとだが水面下で大きなうねりを作りだしている。

ゴールド・ロジャーは荒くれ者ではあったが、世界を牛耳ろうとはしない悪党だった。ある意味、御しやすい勢力だといえよう。ガープが担当していた海賊だが、海軍の旗を遠くに見つけたとしても、

此方から仕掛けなければそのまま素通りしてしまうような男だった。

しかしセンゴクが大将であつたころ、担当していた海賊はこの世の支配者になる事を望んでいた。

海を支配し、陸をも支配する。世界政府すらも牛耳ろうと野望を抱いていた。

政府としては前者より後者の方が厄介だ。

触らずと決定したが、海賊よりも革命軍の方が次第に脅威となるだろうとセンゴクは予見していた。しかし政府は動かずとの決定を下している。

政府機関である海軍は、その決定に従わなければならない。

そこに出て来たのがガープの孫だった。

世界の常識として、世界貴族は尊ぶ存在と流布されている。

世界貴族があつてこそ、人間は繁栄できるのだ、と広報されていた。

海軍の成果もアピールせねばならない。世界貴族を救った海兵、という見出しは絶好の宣伝でもある。

「わっしはわっしの職務を全うしましょう。ご安心なすって」

黄猿も踵を返し、部屋を後にする。

残ったのはセンゴクとガープのふたりだけだ。

「あの子をどこまで御せるか。見ものじゃのう」

楽しげにせんべいへ齧りつく同僚にセンゴクはその表情を厳しくし、影を落とす。

闇が深い場所だった。

海に最も近い底なのだから、当たり前と言えば当たり前だが、陰湿な気配が漂っている。

餓えた匂いもあった。海兵達は嗅ぎなれない空気に吐き気を催している。

普通はそうだよな。

アンは気にせずたすたと進む。

”不確かな物の終着駅”グレイターミナルに比べれば薄いものだ。

「無理しないで。もう駄目だと思ったら、外の空気を吸って来て下さい」

海兵達が入れ替わり立ち替わり、階段を上がる。

空気が動けば多少は入れ替わるかなあと考えながら、触れてくる意識にお疲れ様、おやすみなさい、と語りかける。

そう。

ここではたくさんの命が失われているのね。

海兵達が持つランプの灯りが幾つもの姿を照らし出していた。

女、男、子供。

同じ檻に年齢も性別も無差別に投獄されている。

ひとつだけ同じであるのは、恐怖に支配された顔だった。

「もう大丈夫」

身を震わせていた老婆へ手を重ねる。生気を失っていた目がゆっくりと動いた。

「身元の照会をお願いします」

なんの為に捕らえられたかの想像は容易い。海賊は村や町を襲う。

航海中に見つけた船が商船や同業者ならば攻め込み財を奪い取る。

未知を求めてこの海を往く船は少ない。

だからこそこの海でも海軍は必要とされていた。多少の汚職や武力威圧があっても、賊達に日々の生活を奪われるよりましだからだ。

世知辛い世の中は、あちらも此方も変わらない。

甲板に上がると大将直々に船医を連れ乗り込んできていた。

「下の様子はどうかねえ」

「捕虜が20名ほど船底に、その他はまだ搜索中です」

巨斧のイグラ他、抵抗してきた乗組員の殆どが死亡という状態も合わせて伝える。

「この航海が終わったらボール引きだけどおし来年もわっしの引いて貰う訳にやあ出来ないよねえ」

「…あれは完全ランダムです。運です。諦めてください」

来年こそはと手ぐすねを引く、大将中将たちが今か今かと待ち構えている時が、刻一刻と近づいてきている。

幾度かの航海と休みを挟みながら、配置換えまで残るところ3カ月。

勤めてまだ1年も経っていないのに、海軍内で爆発的に知り合いや顔馴染みが増え、黄猿の艦に所属している環境もあり聖地からの呼びだしも何回か受けていた。

軍務として出かけるのはまだ良い。大将に引っ付いて帰れるからだ。

しかしそれだけでは終わらない。必ず世界貴族が住む地区への招待が入る。

出来るだけ丁寧に断り続けているものの、一度ならず三度ほど、

デイハルドが海軍本部の出先機関である招待の館へやって来ていた。館は世界政府の招集に王下七武海がやって来る場所でもある。先代の元帥であるコングもまた、この館で役人として職についていた。

義祖父からは怒ると凄まじく怖い人だと聞いていたものの、そうでもなく、優しいご年配という印象だ。

デイハルドは家督を継いでいた。

家族の殆どが不慮の事故にあい死んだのだと言う。

その割には落ち込みもしていなければ、涙も見せてはいない。どちらかと云えば楽しそうだった。

生きる目的を見つけたと語る瞳には気負った様子もなく、社交界のやり取りを聞かせてもくれる。

彼方の島では半身であるエースがすすくと背を伸ばし、柔軟な筋肉を付け始めている。負けていられない。

わたしも少しは強く、なれてるのかな。

甲板の上で聞こえる海兵達を見ながら、視線を空へと投げる。

アンは頭上に輝く太陽のまぶしさに目を細めた。

24 - 王下七武海

七色のシャボンがふわりと宙に浮き漂う。大きな窓からは淡い光が差し込んできていた。

衣擦れの音が響く。天竜人の衣類は全て絹が使われていた。独特な光沢が放たれている。

「明日は式典があるそうなのだ。アンは来るかな」

ヤトロファ・クルカスの樹液を集めた陶器の器を持ち、玉を吹きだしながら前方に控える男へデイハルドは問いかけた。

「さあ、な」

返って来る返事はいつものごとくあつさりとしている。

最初から有意義な返答が戻って来るとは思っていない。

広い室内には豪華な机と座り心地の良さそうな椅子があり、書類が数枚散らばっている。

壁一面には本棚が並べられており、ぎっしりと詰められた蔵書が納められていた。

想い人が興味を示している空白の100年を含んだ、古書もこの中に存在している。

くつくつと声を含みながら、本気で悩んでいたかの日を思い出せば、自然と声が出るといふものだ。

「僕の物になってしまえば、ここにある本も自由に読めると言うのに」

秘密は自分で探す、と強情を張り幾ら好意を抱いていると行動で示してもことごとくこちらの気持ちに気付かない鈍感な人物を想い笑む。

「ラン、センゴクへこの手紙を届けてくれ」

インクを付けた羽ペンで何行かの文字を書き、蠟で封をする。
宛名も差出名もない。

しかし一族を示す蠟印を見れば、誰から届いた手紙であるかは一目瞭然だろう。

「解った」

手紙を受け取り、男は背を向ける。短く切られた鎖が揺れ、小さく音を立てた。天竜人の奴隷の証である、蹄の焼き印がくつきりと黒く。背に浮かび上がっている。

鎖を引き抜けば爆発する首輪と、この紋章だけはどうにもならなかった。

奴隷にわざわざ所有物の証をつけなくとも、首輪だけで十分逃走防止にはなるはずなのだ。青海で海賊をしていた人物達でさえ、この首輪の威力を真の辺りにすれば逃げ出す気力も削がれるだろう。

普通の人間ならば頭部が吹き飛ぶような代物だ。

初めての下界探索から帰って来てみれば、変わり者というあだ名が定着していた。

下々民を使わず己の足で歩き、どここの馬の骨ともつかない野蛮人をを側に置いているなど、少々普通を逸脱した生活をしているからだろうか。

回りの目がどう自分を見ようと、噂しようが知った事では無い。

ここマリージョアでは最近幽霊騒ぎが起きていた。

偉大な20人の王、その末裔である天竜人だけが暮らすこの都で、何人もの行方不明者と死者が出ている。

誰が疑わしいのか。

猜疑心が都を静かな町へと変貌させていた。

だがしかし、また数十日もすれば以前と変わらない有様に戻るだろう。

犯人が見つかったからだ。

なんという事は無い。悪魔の実を研究する下々民の学者が昨日取り押さえられたという。

犯罪者は内部では無く外部から来たものだ。早く捕まえて首を切れ。

天竜人は口々に、警備に入った海軍将校達をまくしたてていたと聞いている。

ただ犯人が外部犯であった事が何より天竜人達を安堵させていた。内からはあり得ない、そう思っていたとして、もしも、という疑念を恐れていたのだ。

なぜなら使用人は全て奴隷に孕ませた半端ものが任を勤めている。生まれた瞬間より主人には逆らわないよう幼少のころより感情を抑えられ厳しく躰けられた人形のような者達だ。体を差し出せと言われたならば、どこであろうと命に従う。

だからこの都に從來から住む人物の犯行では無い。そう言う主張を行うわけだ。

しかし毎日平和が続いても、飽きるものだ。だから天竜人は奴隷を買い求める。

購入したばかりの奴隷は実に刺激的だ。

首輪や焼き印で縛らなければならぬくらい、活きが良いおもちゃと言える。

デihalドの一族も、全てではないが行方不明者に名を連ねていた。

それぞれが持つ自慢の奴隷を見せ合う品評会に出かけたまま、帰らなかったのだ。

長兄である大兄と、次男である小兄、そして父。

マリージョアでは血が最も重きとされている。一族内結婚など当たり前前にあり、他王との交わりも少なく無い。ただ決められた範囲内での交配が、忌子を生み出していた。

知的障害を生まれながらに持ち得る子の実例が増えたのだ。

20の家はしっかりと守られてはいるが、本家と傍流を比べると前者の方の出産率が劇的に下がっているという。子が生まれない上、障害を持ち得る子に家督を譲るのは家の沽券こけんが下がるとし闇に葬られる事もままにある。

デイハルドは本妻から生まれた。

大兄と小兄はそれぞれ、お気に入りの子だ。

一族の中では末子であるデイハルドに家督を譲るべきだという意見があったものの、迫る老いには父親も勝てなかったようだった。後見人として長男を任じて、権力を振るうのが大好きな天竜人の典型ともいえる性格をしている大兄だ。正当なる濃い血を引く末子を策略に嵌める可能性もある。次々代の家督継承者第一位としてデイハルドを指名し納めた。

デイハルドはそもそもはそう言う争いごとに全く関心が無かった。継ぎたいものが継げばいいと、幼心に思っていたくらいだ。見るもの、聞くものすべてを瞬時に理解し、世の中は至極退屈なものだとばかり思っていた彼の価値観を一瞬で塗り替えたのが、あの日であり、出会った想い人だった。

とはいえこの天竜人が脈々と続けている奴隷制度や血脈を変えようと思っている訳でない。下々民にとっては天竜人の生活様式そのものが不快なのだろうが、元からこの環境で育っているデイハルドにとってはそれが普通だった。使うか使わないかは別としても、だ。

家督は代々、男子が継ぐ決まりとなっている。

今現在は行方不明の父の代理として、この家を任される立場にデ
イハルドはあった。

成人になる歳まで待ち、父兄が戻らねば椅子に座り続けることにな
るだろう。

手紙にはたった一文しか用件を書いてはいない。

どういう反応をするのか、想像しただけで楽しかった。

その人物は捉えどころが無い。

全てを肯定し、あるものを受け入れる寛容さを持っているのに、
変なところで意固地さを見せる。陽炎のように揺らめき、近くにあ
るはずの姿がいつの間にか遠くへと移動している。手を伸ばしても
触れられないのかと手のひらを向ければ、握り返せるほどすぐ側に
立っていた。

天竜人という位を認めながらも、定められた法より交わした小さ
な約束を優先する心根もまたおもしろい。会うたびに新しい発見ば
かりする。

難解だと差し出された方程式すら見ただけで答えが解ってしまう
というのに、あの人物だけは全く理解できない。

返しに來いと渡したビーズを律儀に身につけている所も、年上な
がら可愛いとすら思える。似合っているのだからそのまま持ってい
ると良い、そう言った時の吃驚したような、頬を染めた笑顔がまた
可愛いのだ。

「さて。どういう返答をしてくるか、楽しみだな」

こつこつと机を指で叩き、窓の外へ視線を投げた。

「初めまして。魚人海賊団の皆さま方ですね。わたしは海軍本部、黄猿直下ポートガス・D・アン少佐です。新たな七武海へ就任される海侠のジンベイ殿をお迎えに参りました」

シャボンディ諸島61GR。

そこには大船団が寄港していた。

新たな王下七武海を迎える式典が開かれるまで数時間と迫る中、海軍の伝書バットにより指定された場所にやって来たのはあどけなさが残るひとりの少女だった。

歳の頃は10歳前後だろうか。

船へ続く一本道に居並び、睨みをきかせていた魚人達があっけにと取られている。

少女は指定時間5分前に現れ、そよ風のように列の間を通り抜けた。

並みの海兵ならば歩きだす事すら出来ないだろう。階級が高い将校であっても、多少は緊迫した気配に表情を固くする。

だがそんなそぶりを全く見せる様子なく階段を登り船に立つ。堂々とした出で立ちだ。

「わしがジンベエだ。お前さんが海軍からの使者か」
「そうです」

魚人海賊団船長、海侠のジンベエ。
大きな人だなあ。

アンは首を大きく持ち上げ、ほほ笑む。

懸賞金2億5000万ベリー。

赤土の大地を素手で登ったと言われるフィッシャー・タイガーが取りまとめていたタイヨウの海賊団を、彼の死後受け継いだジンベエサメの魚人だ。

水族館で悠々と泳ぐ姿を飽きることも無く見続けていた記憶がよぎる。つぶらな瞳が可愛くて、水槽をずっと見上げていた。世界は違うが、何となく親近感を覚えてしまう。だから自然に頬が緩んでしまうのかもしれない。出来るだけきりっと、顔を引き締めてみる。

この役目を言い渡された時は貴重な休みが1日潰れてしまうのが悲しくて嘆いていたが、受けて良かった、と当日の今になって思い直していた。

センゴク元帥ナイス選抜。

シャボンディで一泊した後はエース達と冒険に出かける約束をしていた。それとはまた別の用件で定規や図面の買い出しに行かねばならないのだが、それはそれとして今は任務に集中しようと試みる。しかし待ちに待った明日がようやくやってくる期待感に、胸の高鳴りを抑えきれなかったのも確かだ。

だから魚人達に多少睨まれたところで、ばきりと折れてしまう軟い心などではない。

「してここから聖地マリージョアまで大分距離があるようじゃが、どうやっていくつもりなのか教えてもらえんか」

「ここから直接、会場へ飛びます」

少女の言葉に誰もが何も言えなかった。飛ぶとはどういうことなのだろう、と。

「魚人海賊団の皆さまはこの場で暫くお待ちください。式典は1時間ほどで終わる予定となっています。終わりましたらジンベエ殿

をこちらにまたお送りしますので」

飛ぶ、というのは空中を行くのだろうか。
ならば目の前の少女は能力者、その年齢で海軍所属もあり得る。
タイヨウの海賊団に属していた面々がその眼光を少女へ集中させた。

「船長が不在になるのは不安かもしれませんが、少しの間だけお借りしますね」

よく通る声が魚人達の耳に届く。
触れてもいいですか。

ジンベエを見上げ、少女が首を傾げる。

「構わんが…」

そう言いながら大きな手のひらが差し出された。

トムと同じ、指と指の間にひれが見える。そつと触れれば、温かった。

ありがとう、感謝を伝えたい指をアンが握る。

「少し上空に出ちゃうと思うので、受け身だけは取って下さいね」
少女がそう言った次の瞬間、ジンベエの姿が船上から消えていた。
魚人達は自分達の目を疑う。あの船長の体が瞬く間に無くなって
いたのだ。

この世の物とも思えない手品を見たような気分だった。

「どうなってるんだ…」

そのつぶやきに応える存在は居ない。面々は1時間後を待つしかなかった。

受け身を取れと言われたジンベエも瞬間的に風景が変わった事に
目を疑っていた。

周囲にいた魚人達の姿は無く、眼下には手入れされた芝生が広が

る庭のような場所が見える。

下から見上げる人物もいた。見知った顔もある。全て海軍関係者だ。

ジンベエは少女を引きよせ腕に抱き、地鳴りを立てて大地へ立った。

砂埃が舞う。

人間は魚人を見ると誰もが一步後ろへ下がるものだ。だがこの少女は嫌がるそぶりを見せず、反対にしがみついて来ていた。しかもジンベエは海賊だ。海軍所属者であったとしても、身構えられるのが常だった。それがたとえ、タイヨウの海賊団の時から受け継がれてきている、殺さずを守ってきた集団であろうとも、だ。

かばってくれてありがとう、アンはジンベエに礼を伝える。

思っていた高度以上に出てしまっていた。最近は座標をぴったり合わす事が出来ても、上空に行きすぎてしまう。海の中や土の中だけに出現不可、それだけが救いだろうか。

「海峡のジンベエ殿、お連れしました」

出迎えに来ていた元帥に向かい、敬礼する。

式典まで15分となっていた。アンは出席者と別れ、待機所へ向かう。

会場は結婚式が開かれる教会のような、白で統一された建物で行われていた。

周囲は手入れされた庭が広がり、小さいながらも薔薇園もある。

さすがに出席者は海軍関係者のみ、のようだ。

他の6名にも新たに加入する人物の名を通知する伝書バットなり、鳩が飛ばされているはずだが、今のところ誰ひとり来ては居ないようだ。

世界に散らばる七武海は揃いも揃って曲者ばかりだという。

アンもまだ、ひとりにしかあった事が無い。

ジュラキール・ミホーク、鷹の目とふたつ名で呼ばれる世界最強の剣士だ。シャンクスと若い頃からライバル関係にあり、今もまだその決闘が続いていると聞いていた。本人にあった際、それとなく聞いてみたのだが真実らしい。

強き者、にしか語らないとの言で、手合わせになりかけたが一応、及第点は貰えたようで話しかけても背に帯びた長刀を抜かれる事は無かった。

その他の構成はドンキホーテ・ドフラミンゴ、海賊女帝ボア・ハノンコック、サー・クロコダイル、ゲッコー・モリア、そして。

あれ、もう一人だれだったっけ。アンはうーんと唸るがどうしても思い出せない。

喉まで出かかっていたのだが、諦めて歩きだした。

でもまあ、わざわざ見に来る暇な人はいないよね式典。

というのがアンの感想だった。

七武海に加入する際、己も通過している儀式のようなものだ。

中で何が行われているか、見ようと思えば出来る。けれど中には入らない。

式典というのは、大概眠くなるのがオチだ。

デihalドに見つからないよう、どこかに隠れていようかと思案している大きな影が行く手を遮る。

逆光でよく見えないが大柄な男だった。身長はジンベエと同じくらいだろうか、と思っていると勝手に両の手が上に上がった。それを男が掴み上げる。

何事！？

アンは暴れようとするが手足の自由が利かない。

人氣が全くない通路の壁に押さえこまれる。

男は特徴的なサングラスをしていた。太陽の光を受ける髪は金、ピンク色の羽毛のコートは膝までをすっぽり覆い隠している。

「あなたは誰？」

そう尋ねようと口を動かそうとするが、叶えられなかった。顎をくいと上に向けられ男の顔が近づき唇を割る。

口内をねっとりとした舌が這いまわった。慣れた舌使いだ。上手いなあ。

アンは絡められながらもそんな事を思う。

経験の少ない女性がこれをやられると、この男の手の内にころりと入ってしまうだろう。多少でも経験があれば、上手いなあ止まりだが、いつまでも男の成すがままになっているのも癪に障る。強引な男は嫌いでは無かったが、名前くらいは名乗って欲しかったと思いつながら吸われるままに弄ばれていた舌を引いた。

未成熟な体で良かったと、この時ばかりは幼い体に感謝する。

アンとてやられてばかりでは面白くない。攻勢に転じてみた。

男の舌甘噛みし、先端で相手の裏側をなぞる。口内で追いかけてくれば応じながら、意外と良い歯並びをしている歯牙から口蓋に至れば、ゆっくりと男の喉仏が動く。

唇が離れ吐息が吐き出された後、互いを見れば浮かべていたのは笑みだった。

「ねんねかと思ったんだが」

「そちらはお盛んなようで」

唇を拭いた男の手が再び顎にかかる前に、アンは手首を捻り床へ降り立った。

そのまま回し蹴りを放つ。男は軽く、かわすが構わない。ようは体が離れればいいのだ。

「フッフ！！　　やっぱおもしれエ。どうだ、おれの女にならねエか？」

「さて。お名前も存じませんのに」

アンは光が差し込む方向へ歩み、振り返る。

「口づけはもう少し甘いものが好みなんですよね」

細められた瞳は少女とは思えない妖艶さを宿している。だが色を売る職業の女とは違う色つやだ。

「ごきげんよう、そう言つて去る背に、男は笑い声を上げた。

「フッフッフ！！　　気の強エ女は嫌いじゃねエ。いつか言わせやるよ、お前からおれの女にならせて欲しいってな！！」

アンはひらひらと手のひらを振る。

振りながら後ろから聞こえる声に、それだけはある得ないなあ。ペロツと出した舌が悪戯のように紅を深くした。

25・夕闇の赤

1年はあつという間に行き過ぎる。

義祖父に連れられ、やって来た海軍本部も今では見慣れた場所になつていた。

あつた出来事を数えてみると、濃密な日々を送っていると改めて思う。

元帥の部屋にボールは既に用意されていた。センゴクが座る机に置かれていた箱に手を入れて、選択を掴み取る。

見届け人は元帥と義祖父、黄猿と丁度本部に戻って来ていた赤犬だった。

義祖父轟沈。

「おじいちゃん、来年があるよ！元氣出して？」

2年目の配属先を決めるボール選びが終わった。

あれほど引く前に、印をつけて貰ったところで解らないと言っておいたのに、今回もまた頑張つたらしい。

ガープは久々に孫の抱き心地を確かめ、大きなため息をつく。

「孫の成長を傍で見守つてやりたいのじゃがのう」

黄猿も有能な部下が異動してしまい、残念だねえと腕を組んでいる。

おじいちゃん、おじいちゃん？

傍で見守りたいならなんでダダンおばさんところに、わたしとエースを投げやったのか、膝をつきつめて1時間ばかりお話しよつか。

にっこりとほほ笑みながら、小さな声で囁く。

「おお、そうじゃわし、仕事があつたんじゃ。アン、次の休みの時には一緒にフーシャ村に帰ろう、じゃ」

そう言つてガチャリと扉を開けた義祖父へ、

「いつてらっしゃーい」

と淡白に返事を返せば、

「惜しめ、バカ者」

こつん、と頭上をゲンコツが下る。痛みは無かつた。

祖父を見送つた後は、ボルサリーノ大将へ礼を伝える。

黄猿の艦から、赤犬の艦へ。

勿論の事、下宿先も変わる。

階級は変わらず少佐のままだ。

「引つ越しはおいおいで構わん。すぐ船を出航させる、用意せい」

「はい」

アンは新たな上司の背を追う。

サカズキはボルサリーノと比べ、戦艦で海を往く日数が長い。1年365日中、おおよそ200日は海の上だ。

今までは黄猿の元で海軍本部を中心に近海を回っていたが、これからの日々は”偉大なる航路”グランドライン上全てが仕事場と化す。

詳細を知っているのは、たまにおつるの下で書類整理を手伝っていたからだ。

陸上勤務とは違い戦艦に乗っている海兵は、船から降りてからまとめて休みがやって来る。大体1カ月の航海の後に支給される連休は5日から7日前後だ。

アンの場合兄弟達の元に帰ったり、聖地に呼び出されたり、隠れ島にせつせと器材を運んだり、休日にも活動的に動いていた。

ゆつくりと休まなくても毎日元気で走り回れるのは、若さ故の無茶もある。そしてもう一つ、何かをしていないと手持無沙汰になってしまうという、困った生活習慣に陥る事があった。

こればかりはあちらから持ってきてしまった気質だから仕方無い。貧乏ヒマ無し、と何かを探しもとめてしまう。

そつという時顔を出すのが、おつるが責任者を務める参謀室だ。

そもそも参謀というのは高級指揮官の幕僚はくりょう――軍隊においては司令部に直属し、軍の作戦、用兵などの一切を計画し指揮官を補佐する将校を指す。

だが海軍本部においては表立った指揮者に対し、意思決定に際して進言や献策を行うだけでは無い。全ての事務と名のつく仕事の総括も行っていた。

経理、資材調達、事務全般、庶務などなど、幾つかの課には別れているが、全てを束ねているのが参謀長、おつる中将だった。

常に修羅場と化しているこの部屋は主に実戦部隊から、物資使用後の資材調達願いや、次の航海へ出る為の金銭要求などの書類の山が幾つも築かれている。紙の山はアンにとっては心落ちつく空間を作りだしていた。

おつるはアンの手持無沙汰な状態を知っていたため、こつそりと訪ねると優先的に書類を回してくれていた。

追い返したりはせず、そつと居場所を与えてくれたのだ。しかも仕事が出来ると示してからは、職員達から諸手を挙げて歓迎されるようにもなっけてゆく。

黄猿関係の書類はここでの処理を考え、出来るだけ紙の容量を抑えた報告書を心掛けていた。目を通す必要のある枚数を減らせば、それだけ許可も早く通るからだ。

准尉の時は多少、報告書を書く事はあれど余り書類を見る立場では無かった。がしかし、少佐に格上げされてからは報告を聞く立場になってしまったのだ。書類仕事に追われて、鍛錬がおろそかになったり、エースとの組み手が出来なくなるのは避けたかった。となれば、やり方を工夫するしかない。

なんだかんだと書類に関しては、ここでやり方を盗みながらやりくりしていたわけだ。

けれど当分は来れないなあ。

アンはサカズキに置いて行かれないよう小走りで後を追いつながら、通りすぎた部屋を見た。

艦に着くと赤犬艦に所属する海兵達がいつでも出航できるよう、準備を整えて待っていた。

赤犬が艦に上がると同時に、副長が指示を出す。

艦長の後について船に乗り込んできた小さな将校の姿を見て、ざわめきが起っていた。表面では何事も無く作業をしているが、ちらちらと視線が向かって来ている。

「…風舞いが来た…」

風舞い。

いつの頃からか呼ばれるようになったアンのふたつ名だ。

呼ばれるたび、まだ、誰の事だろうと思ってしまう。

風のように舞いながら戦う様子が呼び名として定着してしまっていると、黄猿の艦でも聞いていた。挨拶を早々と済まし、部屋に案内される。そこは長年赤犬の補佐を務めている副長との相部屋だった。

解らないことなどがあれば、気軽に聞いてください。

強面の赤犬とは違い、物静かで優しげなおじさまだった。

アンよりも年上の娘がふたりいるという。

「大將は余り言葉が多くありませんが、堅実な方です。海賊討伐ともなれば多少、厳しい面も覗かせますが……」

その多少、を経験する機会はずぐにやって来た。

黄猿の艦に一度飛んで、私物を持ってこようかと思っていた矢先、海賊船と遭遇したのだ。時間にして出航から3時間余り、夕日が傾き始めている。

望遠鏡でどうにか見えるか、という位置にはためく黒い旗に向け、赤犬は迷うことなく進路を変えさせた。さすがに乗組員の誰もが急旋回後に何が待っているかを熟知しているようで、船内が慌ただしくなる。

アンも船首像に近い、舷側でよく目を凝らす。

見たことがある旗だった。進路はシャボンディ諸島では無い。そこから、出て来た船だ。黄昏時ほど、目に宜しくない時間帯はないだろう。凝視していた瞳がしばしとずる。

視覚での感知は止め、六感での探索を始めた。そう、覇気だ。

懐かしい気配がした。

感覚を研ぎ澄ませば、遠くの景色も視ることが出来る。

…なぜにこんな場所にいるのかな、シャンクス。

舷側の縁でがくりと肩を落とす。

船の距離は遠い。相手には追い風、軍艦には向かい風だ。

幾ら海軍の船が造波抵抗を出来るだけ小さくし、走行速度を高めているとはいえ追いつける距離では無い。

あちら側も軍艦の艦影を捉えたらしく、上手く波を切り、海流に

乗った。

となれば、声が掛かるのは時間の問題だろう。

あの人の性格からして、見逃す、という行為はあり得ない。

黄猿であれば、遠いけれど追ってみて、駄目なら駄目で構わないと言っただろう。

それぞれの艦によって、性格がまるで違い、面白かった。

大将が動いている。向かっているのはここ、だ。大体何を言われるのかも予想が付いていた。行つて足止めを行うか、そのまま殲滅して来い、の2択くらいだろう。

「行つて止められるか。旗はまだ確認出来とりやせんが」

足音が止まる。艦の中央で指揮を執っていた赤犬がアンの元へやつて来たのだ。

軍艦側が逆光となつている為、見難い状態ではある。

まだあの船が誰のものなのか、こちらは把握していない。

誤魔化してもいいが、必死に望遠鏡を覗く海兵達が余りにも必死な形相をしているのが気の毒で、真実を伝えることにした。

「切り込めとおっしゃるなら行きましょう。ただ戦果は期待しないくださいね」

眼光が理由を問う。

「あの船、多分だけれど赤髪です」

周囲がざわめく。

四皇のひとりがわざわざ新世界から出て来てくれているならば、探しに行く手間も省けたと言わんばかりに、赤犬は出撃命令を出す。

「では挨拶だけでも」

にこりとほほ笑んで、アンは敬礼を取る。その瞬間、姿が掻き消えた。

初めて瞬間移動を目の辺りにした海兵達が声を上げる。
赤犬の目は夕陽の中に隠れた敵船を睨みつけていた。

SIDE ???

「お頭アこのままだと逃げ切れそうそうだぞ」

「…そうか、ならいい」

海軍の戦艦が遠くに見える。

それぞれの進行方向は同じではあるものの、左右のぶれがあった。
この船は右側へ、海軍の船は左側へ。

潮の流れも、風も、味方しているのは此方側だった。

ぶつかるなら海軍であろうと、他の海賊たちであろうと容赦はない。
ない。

この海は誰のものでもないんだ。

自由に渡る分には無駄な争いなんてしないほうがいい。

と、思ってたんだがな。

突如現れたひとりの海兵が甲板に降り立つ。

小さな姿だった。少女だ。

正義のマントを一人前に羽織っている。影の中に見える目には殺
気など無い。

薄く笑んだ唇だけが逆光の中、光を受けていた。

「何モンだ！ー！」

乗組員クルーのひとりが声を荒げる。

ああそうか、こいつは知らないんだな。

騒ぎに何事だとベックやルウ、ヤソップが出て来ていた。

気付いた奴らはにやにやと面白げに様子を眺めている。

「こんばんは。シャンクス」

少女が親しみの声音を含み、おれの名を呼ぶ。

「この野郎！！！」

「おい、待てそいつは」

止める間も無く、乗組員^{クルー}のひとりがナイフを抜き飛びかかった。

少女は木の葉がひらりと落ちるように避けながら、足払いをかけた勢を崩した男の首筋に軽く手刀を一発当てる。肩に力が入っていない、いい動きだった。

おいおい、一撃か。そいつそれでも、結構やる方なんだけどなア。起きたらちつとばかり揉んでやらんといけないな。

「おい、誰か、そいつの手当て、してやれ」

おれの声を聞きながら、倒れた男の体をひょいと飛び越え、海兵がこつちに歩いてくる。

何が気恥かしいのか、えへへ、とはにかみながらだ。

「お久しぶり。何年ぶりかな。会えて嬉しい」

「だなあ、で、どうしたよ、アン。海兵なんかになっちまって。おれアてつきりお前も海賊になるかと思ってたんだがな。それ辞めてウチに来るってのはどうだ。楽しいぞ」

残念。

腕でバツを作り、ごめんなさい、と続ける。

「今はまあ、なんというか、その、ね？」

何か思うところがあるんだろう。聞きたい話が山ほどあるんだがゆつくりと出来る時間もなさそうだな。

全く、思いがけないことが、この海ではよく起る。

東の海で別れたきりのアンと会うとはなあ、今日はばあぁと宴

にするか。

「ニュース・クーの新聞見たぞ」

少し離れた場所から掛かった声に、アンはしどろもどろし始めた。
「副船長、あれはなんというか、その。いろいろ事故が多発してまして」

顔が一気に赤くなる。何かあったんだな。沈む夕日のせいだけじゃなさそうだ。

なんだよ、教えてくれねエのか。薄情なやつだな。面白い話なんだろう？

柔らかい頬を引っ張って尋ねるが、うんともすんとも言わない。
手強くなって、まあ。でも先に本題、片付けちまおうか。

「で、お前あの船に乗ってんだろ」

「うん、赤犬大将も乗ってる。で、足止めというか挨拶に行つてくるという名目で、こっちに飛んできたから少々お相手願いたいんだけど。ダメかな」

首を傾げて尋ねられてもなあ。

「おーい、誰かアンの相手したいヤツいるか？」

さっきので一撃だろ。

海軍の中で要注意人物として名前が上がりつつある、少佐殿の相手が出来そうな奴はいたっけか。

「お頭がやってやりやええんじゃねエか？」

おいおいヤソップ、そんな楽しそうな事言っなよ。おれ本気で遊んじゃうぞ？

「おれ達ア、高みの見物としゃれこんでるんで、まあゆっくりやってください」

ベックマン、お前までそんなこというのか。

「シャンクスが相手してくれるの？わーい」

両手を挙げて、嬉しそうにアンが声する。

お前本当に海兵か。爺さんにそっくりだぞ。

「なにしに來たんだ、全く」

おれはアンのでこをはねる。

そう言えば東の海でもそうだったな。船に來ては本を読んだり、誰かと打ちあつてたり。まだまだこいつもガキつてこつた。あんときのノリのまんまつて訳だな。

「よし、負けても文句言つなよ」

「シャンクスこそ、海に落としてやるつ。でも勝つたら、お願い事ひとつ聞いて欲しいな」

「お願い、か。言ってみるよ」

本当に、いいの。つて再確認しながら見上げてくる黒曜石に、おれは頷いた。

「じゃあ、うん。お願いします」

海軍艦が追つて來る手前、いつまでも静かじゃ何やってんだと思われるだろうしな。

「覚悟しろよ、アン」

「もちろん、あ、でもちよつとは成長したところ見せたいから、頑張るね」

つてことで話がまとまつたんならやる事は決まつたな。

「おいお前ら、アンに襲われてる感じで暴れろ！」

宴にすんなよ、お前ら。騒ぎ過ぎても海軍つてやつは疑つてくるからな。

つて言つても結局宴になつちまうんだろうけど、海賊だから仕方がねエよな。

「よし、來い」

おれは剣を抜き構える。

話題の少佐の力、見せて貰おうか。

夕暮れ時の、美味しい酒を飲む時の、話がひとつ出来そうだな。

ミホークと会ったら是非教えてやろう。海軍にちみっこくてももしれエやつが居るってな。

くくっ、こっち側に遊びに来て正解だった。さあて、ちょっくら遊ぶか。

26・モーガニア(1)

以前、アンがアンとしてではなく暮らしていた世界でも、海賊は存在していた。

頻繁に出現する海域はインドネシアだろうか。

有名どころはソマリア海賊だが、襲える海域が紅海しかない。無政府状態の国であるとはいえ、しっかりと護衛をつけて通過すれば、被害はおきにくい場所だ。

ところ戻ってインドネシアだが、ここは複雑な入り江が多く海賊家業を行うにはもってこいの狩場といえた。経済的に圧迫された地域では普段、農地を耕し暮らす農民が、突如海賊へと変貌する。

狙うのは護衛が薄い、中国、中南米船籍の船、もしくは漁船が多いという。

奪うものは足のつきにくい商品だ。

凍った魚など、自分達が獲って来たものと言い張れば、買い取る業者としても確かめる術は無い。そんな身なりをして獲れるはずが無いだろう、とは言わないのだ。安く仕入れることが出来れば、利益も上がる。市場が求めている高級魚は特に、短期間で売り払われ元々の出所がうやむやとなってしまうのだった。

結局のところ、海賊という存在が横行する理由は、与えられた境遇の格差と、宗教という思想に寄る所が多い、という事だろう。それぞれの国と、思想を否定するものではない。所変われば品が変わり、違っていても当たり前だからだ。世界が共通して同じ考え方をし、同じ文化を共有している方が恐ろしい、とも思う。

アンが知る最古の海賊は、シュメールだ。

文明発祥の地としても有名だろう。歴史はシュメールから始まる、

と言われるくらい歴史学では定説となっていた。

この文明の事を覚えているのには理由がある。

人類最初の文明と言われているが、その担い手であるシュメール人がいつ、どこからやって来たのかわかってはいない。しかも文明には段階を踏んだ発展というものが不可欠だ。しかしこの文明には踏襲した跡が殆ど見受けられなかった。

誕生の瞬間から高度な文明体系が整っていたという不思議な特徴を持っている。

そう、どこかで聞いたような話だ。

こちらの世界でも似たような話が転がっていた。

オハラが健在であり古文書を解読すれば、もしかすればヒントが見つかった可能性もあるが、廃墟と化した町で知り得る情報は限られている。

隠された歴史以前の文明には、判明している幾つかだけではあるモノの類似した接点があった。もしかしたら、此方側の文明が向こう側に渡ったのかも、というSFじみた想像をして楽しみながらけもの道を歩く。

ポーネグリフ

”歴史の本文”には始まりの文明については刻まれてはいない。

本文を作ったその当時の歴史が表記されているだけだ。

しかもパズルのように様々な情報が形を変えて言いかえられえいたり、あちこちに単語として散りばめられている。

石碑を作った人の遊び心、とするには余りにも巧妙な仕上がりがある。全ての碑文をただあるがままに読んだだけでは、いくつかの古代兵器が眠る場所と両勢力がどのように戦争に至ったのかを読み取るだけしか出来ないように工作されていた。

石碑本来の役割を隠すために、当時の人々は懸命に考えたのだろう。

いつかこの本文の中に隠された、本当に伝えたい、遺された本文を読み解くためのロジックを解き明かし、導く人物が現れるだろうと願って。

道標となるよう、頑丈に作り上げた先人の根性が伺える。

なぜ知っているのか。

それはアンにも説明が出来ない事だった。

かつて考古学の聖地と言われていたオハラ^{ポーン}の学者達や、バスターコールの生き残りである少女のように古代文字を解読出来るほど、アンは全てを学んではない。

人がDNAという設計図によって形作られているように、アンの中にも最初からこの情報が存在していた。

この世界で覚醒した段階で刻みこまれた、とする方がしっくりとくるだろうか。

使っても、使わなくても、どちらでもいいように。

世界は強要しない。

もし追うのなら目指す方向だけを照らしても構わない。そう言う感じだ。

けれど歴史の本文^{ポーン}に関しては今、優先的にわたしが追うべき事じゃないよね。もし未来で追い掛ける誰かと歩みを同じくするならば、手助けしてもいいかもしれないけれど。

そんな事を思う。

オハラの学者達も、父も、事を急ぎ過ぎていたらしい。

時が満ちていれば案外簡単に行き着ける場所も、満ちていなければ辿り着くまで困難がまわりつくようになってるのだ。ただ海賊王と呼ばれる父の場合は、あと押しがあった。迫りくる死の前に、強く知りたいと願ったからだ。

だから世界は手順と段階を踏んで訪れる誰かを待ちわびているか
のようだった。その方がアンにとっても、探究者側となった場合、
追い掛ける楽しみとなるので、ありがたくはある。

考え事をしながら歩いているとあつという間に町へ到着した。引
きずっていた捕虜もまだ気を失ったままだ。大柄の男を背負っても
どうせ足と手が地面をこすってしまう。なので平たい道が多い場所
では引っぱって来たのだ。

「少佐」

町の広場に辿り着くと、蒼白に近い顔色をした海兵が走り寄っ
て来た。

海賊の拠点となっていた町の解放と、海賊達の一掃は順調に進ん
でいるように見える。

広場周りの建物は、見るも無残な姿のまま放置されていた。
サカズキの冥狗が炸裂したのだ。どろりと蠟燭ろうそくのように溶けた残
骸がいたる所に残っている。

「どうかしたんです？」

何か問題が発生したのかと、先を促した。

「それが…森に逃げ込んだ残党の、搜索が難航しておりまして」
大人しく投降した元からこの地に暮らしていた住人達とは別に、
外部からやって来て海賊業をそそのかした人員が森へ逃げ込んでい
た。

船で出ている海賊船の乗組員は今頃、全員海の藻屑と化している
最中だろう。

この町は元々、小さな村だったという。並ぶ町並みを見れば、漁
村であった名残は殆ど無い。だがここに暮らしている人々の多くは
まだ、漁業を生業にして人達が憤ましかに暮らしていた。

”偉大なる航路”内にある島とはいえ、主だった次の指針を指示するような記録を持たない、わざわざ海賊達がやって来る事の無い島だった。主なる島に付属する、小さな島で磁力を貯めるには弱過ぎて、ものの役にも立たない。たまにそういう島の欠片も存在する。

ある日漂流者達が打ちあげられていたという。

村の人々はその漂流者達を助けた。

だがしかし、その漂流者達は海賊だったのだ。

その年は作物も漁業も不作で、人々は困り切っていた。

それでも海賊達を助けたのは、親切心からだ。自分達より困っている人達ならば、と手を差し伸べた。

仇となるとも知らずに。

海賊達も当初から、その本質を頭わにしていた訳では無い。感謝の言葉を重ねながら、手段を示したのだ。

助けられた者達は囁いた。

貧しき者が富んでいる者から物資を一時的に奪っても構わないのではないか。

このままではこの村に住む人々すべてが飢えて死ぬ。

死をただ黙って待つのか。

村の男達は腹を空かせて泣いている子供達の姿を見かねて、甘言に乗った。

商船を襲い富を得、食料を手にしたのだ。

確かにその年の飢えは凌がれた。その時だけという取り決めだったはずだったのだ。だが一度覚えてしまった掠奪りゃくたつの魅力に取りつかれてしまった者もまた多かったという。汗水たらして日々働かずと

も、奪うだけで何でも手に入ってしまうのだ。楽して金が、物資が手に入る。豊かな生活が出来る。元の生活には戻れない。

流れ着いた海賊達はこの村を拠点に、次第に船を大きく作り変え、勢力を拡大していった。そして幾つもの被害が報告されながらも、根城とする港が見つからず海軍も打つ手を失っていた。

しかし海軍が補給に立ち寄った町で、この海賊団の一員達を捕縛することが出来たのだ。無論、赤犬大将はこの海賊達を絞め上げ、場所を吐かせた。

そして今に至る。

「全部で7名でしたっけ」

広場に捕らえられているのは、アンが捕まえた男を含めて5名。残り2人だ。

町の外に広がる森は、意外と深い。

危険な獣はまだ見かけてはいないが、熊や虎も生息している。

分け入っている海兵達が遭遇するのも、時間の問題だろう。しかしながら、気が重い、赤犬大将へ報告を出しに行く時間になっていそうな気がした。

サカズキは部隊を分散しても、片方だけに責務を軽く分け与える男では無い。

出来ない物事を無理矢理にさせる訳ではないのだが、出来ると踏んだ仕事の完了を求めてくる。よくある、他人にも厳しいが、己にも厳しく当たる、人物であった。

「大将に報告は…」

「まだ、です」

その方が賢明、とアンは頷く。

電伝虫が鳴っても、取らないように念を押す。

海賊、に関わる全てに対し、赤犬は妥協を許さない。

初めて会った時の印象そのままに、いつも怒気を含んでいた。ポルサリーノの家にやって来て、将棋をしていると幾分は和らぐものの、こうして同じ船に乗るようになり、なぜ、という問いかけに変わっている。

サカズキは自分の事を話さない。

黄猿の船はどうじゃ、や、稽古を次の休みにつけてやろう、という話はしたが、自らの事は沈黙を続けている。この船に乗り込んだ今、でもだ。

かつて一度だけ聞いたことがあった。

ご家族はいらっしゃらないのですか、と。

その時、サカズキは静かに笑んでいただけだった。

触れて欲しく無い傷があるような、顔だったのを覚えている。艦に乗っている時は見せない表情だ。

「あとふたり、時間までになんとか、捕まえてきます」

時間をぎりぎりまで遅らせてください。

そう願って、アンは気を失った男を手渡し、身をひるがえ翻す。

赤犬がこの諸島に散らばっている海賊団を壊滅させるまでそう時間はいかないだろう。もしくはもう終わっているかもしれない。

アンを筆頭に30名、この島での後片付けを任されてから2時間余りが経過している。

ゆっくりとしている時間は無い。

だがしかし、久しぶりの森は、場所は違えど居心地の良さを感じていた。

海の上では匂わない、土や緑のよい香りがする。

ビバ森林浴。

義祖父についてゆくと決めたあの日、こんなことになるうとは思
いもよらなかった。

経験にはなっている。

出て来た時よりも、確かに技も力量もついてきているとは感じて
いた。

けれど。

わたし、あと1年とちよつとで海軍、辞められるのかな。

そう。

予定では一番下の雑用から始め、下士官どまりにするつもりだっ
たのだ。将校にあがるつもりなど全く、これっぽっちもなかった。

予定とはあくまで予定。

人生は氣に入らないからとゲームのようにリセットを押してやり
直し出来ない。

これは向こう側でも、失敗して現実に打ちのめされる度、思っ
てきた。

引き際を間違わないようにしなきゃ。

見聞色を最大限の範囲に広げ、森を駆けた。

途中で熊に襲われている海兵を助けたり、蛇に丸のみされそうに
なっていた海兵を引きずり出し、ゴリラと対峙している海兵の助っ
人をしながら、どんどんと奥へと進んでゆく。

さすがに海賊達はここを長年拠点として滞在していただけあり、
島の隅々まで探索済みのようだった。途中で縄トラップや網を使っ
た捕縛トラップなどが行く手を阻む。効果的な仕掛け方だった。落
とし穴には猛毒を持つ蛇がうねうねとどろろを巻いていたり、

鋭く削った木の杭がささったものまで多種多様だ。

しかし陸上に行く海兵達と違い、アンは木の幹を渡り、蔦を使って移動していた。

殆どの罾は対地専用で空中からの追跡は視野に入れられてはいない。

能力者が居ない限りはこれで十分事足りる。

（おれも手伝ってやろうか）

（うー。そっちに飛ぶの面倒なんだけど）

不意に声が聞こえた。

エースだ。

あちらでは丁度、夕食の狩りが終わり一息ついているようだった。

（わにめしいいなあ）

頬と唇が緩み瞬間的に景色が変わる。足場になっていた幹が消え、宙に浮かんだ。踏み損ねた足が浮遊感を生む。崩れたバランスのまま落下した。

「おかえり」

アンの体を支えたのはエースだった。筋肉が付き始めた腕で、受け止める。

「…わにめしに釣られた」

その場でアンは脱力する。考えてみればお昼を食べずに森の中を走り回っていた。

木の実でもつまめば良かったと今更思っても後の祭りだ。不意に口へ放りこまれた果物に頬を緩ませる。

さすがエース、腹減りの状況をよく分かってくれた。

「アン、おれも行くぞ！」

「ルフィ、海賊のおじさん達を捕まえるのよ？」

「モーガニアだろ。海賊でもおれ、そっちは大つつ嫌いなんだ！
！」

自信あり気にルフィが両手のこぶしを握りしめる。エースから大体の事情は実況中継によって伝わっているらしかった。

「もしかしくなくても、力試しするつもりでしょ」

不敵な笑みを浮かべる半身はただそれを濃くするだけだ。

今現在移動を繰り返せる回数は3回、ふたりをドーン島まで送り返してその日は終了となる。

アンは頬を掻いた。エースを中心に膝には自身が座り、その背には弟がしがみついている。兄弟ふたりから、だめかと瞳の奥を覗きこまれると、ダメだと否定しにくかった。

欲に負けた結果だから仕方無い。何とかしよう。

双子の膝の上から芝生へと座りなおし、採って来てくれていた果物を完食する。

立ち上がり海軍のコートを羽織りなおせば、アンは兄弟達と手を繋ぎ空間を結んだ。

目指すはツアモツア諸島、ビトフェ島。

現れた視野は島が上空から丸ごと見下ろせる位置だった。

東の方角で黒い煙が上がっている。

エースも落下しながらそちらを見ていた。

その間に島の立地を確認する。

「唯一の町があそこ、トヘロという町ね、で、森が残り全部。西側に湖がある。海岸線は町の周辺以外、切り立った絶壁が続いているから気をつけて。特にルフィ、落ちたら沈むからね」

あれが、赤犬、か。

言葉にしない声が聴こえた。

遠くの青を見る目が、サカズキの姿を捉えたのか。

「急ぐんだろ、アン」

「すっげエ！！！！ 空、すげえ！！ おれゴムだからな！！ 落ちても大丈夫だ！！ 次はもっと上に飛ばしてくれ！！」

「ルフィ。興奮しすぎて何言ってるのか自分でも分かってないね？」

エースは足を下に体勢を傾け、月歩を使い速さを相殺し始めた。
アンもルフィの手を取り、同じく空を駆ける。

「競争だぞ、残るはふたりなんだ」

拳を合わせ、緑の中へと落ちてゆく。その際にひとつの約束を交わした。

「よし、アン覚悟決めとけよ」

「ふっふーん。わたしだって負けないもん」

「おれも負けないぞ！！」

3人の間に、火花が散った。

27・モーガニア(2)

ひとえに海賊と一括される海の荒らし屋達だが、実はふたつに分類する事が出来る。それがモーガニアとピースメイン、だ。

モーガニアはただ無法に奪略を繰り返し生殺与奪を思いのまま振るう荒くれ者達を指す。そしてピースメインはそのモーガニアを主な獲物とし、初めて踏み込む未知の地で冒険を楽しむ者達を指した。

ビトフェ島を根城に、商船を襲っていた海賊達は前者になる。

ではピースメインとはどういう集団か。

最も穏便、と言い表すなら領地をもつ海賊団だろう。独自の港を持ち、大海賊の名を以って他の海賊達から襲われないよう庇護を与える。その代わりに、多少の金銭を貢ぎ受けたり、または寄港地として使わせて貰う、など利害が一致あつた関係を結んでいた。

しかし5つの海で黒い旗を掲げている海賊達の殆どはモーガニアと言っても過言では無い。特定の拠点を持ちある程度の収入源が無い限り、ピースメインで航海するのは難しいのだ。しかも海賊同士で争っても実入りがあるとは限らない。隠された財宝を一度でも見つければ、懐は確かに潤う。見つけ続けられなければ、乗組員を養えず船は崩壊に至る危険性もはらんでいた。

銃声が響き渡る。

「もしかして、わたしがはずれ引いた?！」

アンは足を止め、茂みの上に顔を出す。発砲音が繰り返されていた。

急いで道を引き返す。

兄弟達はそれぞれ、戦闘に入っているようだった。

アン自身、海軍に身を置いていて思う事がある。

あの森で生活していた時は自分がどれくらい強いのか、測る目安が無かった。手合わせをしていたのは兄弟間と、たまに帰って来るガープ位だ。死力を尽くして戦った経験が全く無い状態で立ち位置がどの辺りなのか調べようが無かったのもある。

所属してみてもはつきりとわかった。

コートを羽織ったばかりの将校となら、大多数対1で戦ったとしても勝てるくらいの実力があつた、ということ。

悪魔の実の能力者と対峙した場合は敗北する可能性もある。ルフィのようにまだ、能力を把握し切れていない場合は各々が持つ能力とのぶつかり合いになる。勝ちをもぎ取れる可能性もあつたが、使いこなしている者との対決は危険度が跳ね上がった。それだけ悪魔の実がもたらす恩恵はでたために強力過ぎなのだ。

エースは未だに無敗だった。

以前島に里帰りした際、アンは50戦中7回ほど、ルフィに負けてしまっている。

エースと戦えば、勝率は2分の1となっていた。その内に弟と同じくエースに勝てなくなりそうだとアンは思う。

力で敵わなくなるなら、技を磨けばいい。

そう思って日々鍛錬しているものの、やる時は殆ど、エースと一緒だった。

差が縮まらない。

これをどうにかしようとするなら、悪魔の実を食べた方が早そう
だ。

アンは時々そう思う。

けれど湯船につかなくなるのは避けたい。力の抜け具合がどれほどなのか見当もつかなかったが、全日シャワーだけで済ませている黄猿の様子を見ると、やはり食べる気が失せてしまうのだ。

お風呂はやっぱり、一番の御馳走だもん。

アンは力説出来た。スーパ―銭湯でもいい。あの白気立つ温かな湯の中に肩まで浸かっている間の至福感を。あれ失うのは余りにも惜しすぎる。

怪我をしていた休暇中、黄猿と何度か一緒にお風呂に入り背中を流させて貰っていた。が、胸板以下の湯量でなければ、滑った場合危険だという。能力が封じられるのは”海の水”限定ではあるが、泳げない弊害は真水にも及ぶ。息が続くのなら沈んでいられるだろうが、人間は水中で呼吸することが出来ない。

なぜかアンと一緒に湯船に入った時のみ、脱力感が弱いらしく近々温泉に行こうと誘われていた。黄猿も若かりし頃は温泉が好きだったらしい。温泉成分の多くはミネラルだ。海の水、ほどではないが効果がほんのりと身にしみるのだという。

もし手に入れたら。

もし手に入れたとしても。

それはきつとエースの口に突っ込みそうな未来しか、思い浮かばなくなっていた。

「”ゴムゴムの”っ！！！」

大きく拳を振りかぶりながら、ルフィは銃弾を回避する。

本来ゴム人間となったルフィの体に、銃弾は効かない。受けた方が相手に銃弾を返せてお得なのだが、それは禁止されていた。

アンから、実の能力に頼るべからず、と言われていたからだ。
お姉ちゃんのお願ひ聞いてくれるかな。そう言われてしまうと、
ルフィは弱い。それは姉だけでは無く、兄にも共通する弱点だった。
どうしてもこくりと頷いてしまふ。だからルフィは言いつけを守り
ながら暴れる。

剣やナイフなど、斬る道具であれば身を傷つけられても、鈍器系
に関しては痛みすら感じなかった。

「ヒストル銃”！！！”」

撃ち出された拳が銃を乱射しながら逃げる男の胴に拳をあてる。
背からの追い討ちだ。森で戦う猛獣よりもあっけなく倒してしま
い、あっけにとられてしまふ。

「なんか物足りねエ。しかもハラへってきちまった」

木を一本折り倒し、止まった男の体はびくびくと痙攣している。
その横で座り、ルフィはべろんと舌をだして尻をついた。

そう言えば肉、肉があった方向どっちだったっけ。

ルフィは周りを見回すが、鳥の鳴き声が聞こえるだけで方向が解
らない。

男との出会いは匂いだった。

美味しそうな肉が焼ける匂いに誘われ向かった先で、男が鳥を火
であぶっていたのだ。肉汁が焚き火に落ち音を立てる、そんな状態
に遭遇したルフィに我慢など出来るはずもない。

おれにも分けてくれよ、とルフィはその男の元へ駆けた。

男は突然現れた少年に驚き銃を放ったのだ。

「来るなっ！！」

「いやただ旨そうな匂いがしたから、おれにも分けて欲しくて」
撃ち込まれた弾を他の方向へ飛ばしたルフィがなおも近づく。

男は能力者か、と後ずさった。

「…海軍なんか捕まっただまるか!!」

男は恐怖に目を見開きながら銃を撃ち尽くし、悲鳴を上げて逃亡した。

「あー、お前もしかしてアンが追ってるやつだな。覚悟しろ!!」

そんなこんなで追い掛けている内に、肉の場所がどこかわからなくなってしまう。周りは見慣れない風景ばかりだ。

「晩飯までまだ時間あんだよなあ。きのこでも探すか」

腹の音が聞こえ、腹減りを再確認し、ばたんと倒れる。

鳥の丸焼が落ちて来ねエかな。来ねエよなあ。

麦わら帽子をかぶり直したルフィの目の前に、鳥の丸焼が突如出現した。

「おおっ おれに食って欲しいんだな、いっただっきまーす!!」

「くいしんぼうさんめ」

がぶり、と肉に食いつく姿を見て、くすくすと笑う声に、ようやぐ鳥が勝手に歩いて来た訳ではない、と気が付く。

「ふがががふんぐぐぐ」

「いつも食ってから話せて言ってるだろう、ルフィ」

「エース!! アン!!」

ほぼ丸のみ状態、ごくんと喉を鳴らせ弟がふたりの名を呼んだ。

そしてちらりと見たのは折れた幹の根元で白眼を剥いている男だ。

「なあアン、海賊ってこんなに弱いもんなのか」

弟の問いに、いえいえ、とアンは首を振る。

「ここを根城にしてる海賊団が弱いだけ。シャンクスは…昔より強くなったよ」

海にぼちゃりと落とされた日の事を遠い目をして思います。

「それにしてもエースだけじゃなく、ルフィにもっていかれると

は思わなかった」

男達を追い掛ける前に、もしエースとルフィふたり揃って捕まえられたなら、もう胃に入らないというまで、ケーキを食べさせるという約束をしていた。もしアンがひとりでも捕まえた場合、引越しの手伝いをして貰う事になっていたのだ。

「にししし」

弟との笑い声に、参った、と言わざるを得ない。

「それじゃ巻いて運ぶね」

鵯を切り男の体を結ぶ。手足を背でひとつにまとめてしまえば、動くに動けないだろう。その状態でルフィの手を借りて、棒に吊るし肩に担ぐ。エースが仕留めた男は既に、町の近くに転がしてあると言う。

赤犬が到着するまでにこれで全員、捕まえることが出来た。

上陸チームに知らせれば、きっとみんな、胸をなで下ろす事だろう。

その上で問題なのは、この二人をドーン島まで送りに行くための口実だ。

わにめしに釣られたなんて言えない。言えるわけが無い。

黄猿の艦に乗っていた時のように、毎日瞬間移動を行い、心身ともに疲労状態にさせられる事は無くなっていたが、その分、起床、就寝時間関係無く、戦闘に明け暮れていた。

だから、そのおかげという訳でもないような気もするのだが、跳べる回数も増えている。

だがしかし、わに飯に釣られ、なおかつ兄弟に捕縛を手伝って貰い、それを送りに行きたいなどは到底、サカズキに報告など出来はしなかった。

どーしょー。

ボルおじさんみたいにお仕置き付きで赦して貰えるとは絶対的に思えないんだ。

急に百面相し始めたアンに兄弟達が首を傾げる。

「アンどうしちゃったんだ？」

「さあな。わいの調理方法考えてんじゃねエ」

アンの状態をしっかりと把握しているエースは、さらりと悩み続ける半身を余所に、さらりとそんな事を弟に言葉する。

「おおつ、アンのめし、久しぶりだ！」

そこつ。アンはびしつと指をさし、

「唐揚げとてんぷら、希望があるなら先に言つてよ！後であれ食べたいこれ食べたいって言われても作らないからね！」

と宣言した後に、「じゃ無くて！」

手のひらを握り、エースへと叫び、そうして悩んでいるのが馬鹿みたい、と吹きだして笑う。

いつ以来だろう、こんなに笑ったのは。アンは目尻に溜まった涙を拭きながら、思い返す。海軍に入って、いろんな事を経験していた。けれど、生きること楽しいと思えていなかったかもしれない。強くなる、それだけを目指に日々を必死に生きていたからだ。

なにやってるんだろう、わたし。

空回りしている時はいつも、サボが肩にぽん、と手を置いてどうした、と声をかけてくれていたのだった。しかし彼は今いない。いつまでも頼っていてはダメだと、無意識にこわばらせていた頬を緩ませた。

兄弟達も笑い出したアンにつられ、笑顔を浮かべる。

風が木の葉を揺らし、大地を駆ける。

映像を視た。

白昼夢、とでもいうものだろうか。

「アン……」

エースが目くばせする。

視えたんだ、エースにも。

ほんの数秒の出来事だった。けれど一体何を示唆しているのか、思いつく節が今から起る。

正義の形が人それぞれだとして。固めた意思や決意を貫こうとする思いが強硬に走らせる気持ちだとして……

誰かが止めなければきつと、このマグマのように止めど無く熱を帯び続ける怒りが静まる事は無いだろう。

未来への分岐点に今、さしかかろうとしている。

噴火し続ける大地に種が運ばれてきても、芽吹かない。いずれは冷えて固まり、命を育む場所になるだろう。しかし人の心にくすぶり続ける憎しみや怒りを、忘れぬように、劣化しないよう留めている人物が掲げる信念は、正義の名を借りた、ただの殺戮だ。

どこかで断ち切らねば、第二、第三と後に続く人が出現する。

ほむい

焰の陽炎が本物に変わらないように、アンは知らせてくれた世界に感謝した。

「急ごう、船がもう、港に着く」

3人は森を駆ける。

月歩が使えるなら空を走った方が早い、あと一歩というところで躓いている弟に無理しないよう伝え、大地に行く。エースが町の近くで転がしておいたという男を回収し、アンが引きづりながら広場を目指した。

エースとルフィは絶対に何があっても姿を見せない、とアンに約

束し近場で待機する。本来ならばこの場にいないはずの人員だ。

海兵がアンに向かって敬礼した。

捕まえて来た二人を含めれば、主犯が全員首を揃えることとなる。

電伝虫での連絡で、もう暫くすると軍艦が再入港すると伝令が伝えられた。

そして広場にはこの町の住人も集められている。

大將からの沙汰がこの場で下されるらしく、海兵達が命令に従って呼び集めたという。

幼い子供達までいた。母親に抱きかかえられ、母から伝わってくる不安にぐずっている赤子もいる。

先ほど見せられた景色と瓜二つだった。

大丈夫。

アンの胸中には、確信にも似た自信がある。

赤犬が厳しい表情をして見下げていた。

副長以下、最低限を船に残し、赤犬は海兵を引き連れ再び町に上陸する。

町全てを破壊し、住人をも全て海賊行為に加担した罪により焼き滅ぼす。

そう宣言した大將にアンだけは否定の言葉を口にした。

「わしに逆らう気か」

答えは諾、だ。

「殺戮を止める。それが命令違反になったとしても」

紡ぐ言葉には力が込められ、見上げる視線に迷いは無い。

「おじさんが…サカズキおじさんがやろうとしている事は、海賊達が町を襲いその場所に暮らす人達を殺す事となんら変わりがない。目的の為に無意味な犠牲を強いるのは、間違っている」

アンが住人達の前に立ちはだかる。

既に赤犬の手のひらは溶岩と化し、いつでも処刑を敢行出来る体勢に入っていた。

風が強さを増す。

気持ち良い位晴れ渡っていた青い空がいつの間にか黒い雲に覆われ、今にも雨が落ちてきそうだった。

「エース、アンがあぶねエ!!」

「…行くな、今行けばお前もアンに巻き込まれるぞ」

え？

飛び出そうとしていたルフィは力を緩める。どういう意味なのかと、兄を振りかえった。

「見てろよ。アンの本領発揮はあんなんじゃないんだ。六式が使えたり、瞬間移動が出来たり、受け流しが上手い事、なんかはまあ、すごいけどな」

エースは思い出しながら語る。

初めての命を狩った日から、アンは食を取らなくなってしまった数日があった。

ほろほろと泣いては眠る、を繰り返していたのだ。

その時、自らの身を差し出すように、鳥達だけでなく小動物が火の中に突っ込んだ。人間は物を食べないと死んでしまう。生き物がアンに食べられる為だけに犠牲となったのだ。

こんな事は望んではいない、そうアンが叫ぶと、次は木の実や果実が運ばれてきた。それも食べきれないほどの量を、だ。

ようやく一口、美味しいとほほ笑んで食べるまで、運んできた獣たちはその場に留まり続けていた。

今から思い返しても不思議な光景だ。

「ルフィ、あいつが森で怪我したの見たことあるか」

「…ない！　いつも手当てしてくれるほうだ」
だろ？

エースの言葉は続く。

かつて森の主と対峙していた時もそうだった。アンだけには頭を下げ、大人しくその鼻先を撫でさせていた。

「世界はアンに甘く優しい。世界がアンを傷つける事は絶対になり。怪我をする時は決まって人間が、狂気を向けた時だけだ。見てろ、あのオヤジ、今に驚いた顔するぜ」

面白そうに笑んだエースの視線の先では、今まさに事が起ろうとしていた。

「そこをどかンと言うならお前ごと天誅を下しちやるわい！！」
赤犬の手だけではなく、体やマント、顔までもがどろりと黒煙を伴った岩石となって熱を帯び赤く迫る。

突如大粒の雨が降り始め雷鳴が轟いた。

アンの後方では住人達が目を閉じ悲鳴を上げている。

しかし両手を広げ立ちはだかる本人は視線を反らす事無く、サカズキを見続けていた。

氷塊すらも一瞬で蒸発させると言う堆積を増したマグマが目の前に迫る。

土砂降りの雨が水蒸気を生み、辺りを霧が満たす。

海兵達も目を覆った。

絶対的正義を掲げる海軍の中で、最も苛烈だと言われる赤犬に逆らって生き延びた命は無い。敵味方関係無く、赤犬は悪と見なした全てを容赦なく始末してきた。迷いなど微塵も無く粉碎してきたのだ。一撃で何もかもを無へと化す。

だが痛みの声を上げたのは、赤犬の方だった。

アンがかざした小さな手のひらに、大きな拳が人の手に戻り止め

られていたのだ。

意志のぶつかりあいだった。

悪魔の実の能力がなぜかしら無効化され、小さな体が何十倍もの体積を持つ大将を片手で受け止めている。

海兵達の目が見開かれていた。

「なぜじゃ…」

「サカズキおじさんが、無慈悲だから、だよ。外にも、内にも、だから止められる」

アンは手首を返し、サカズキの手首を握る。そのまま横手に関節をひねった。

大将の体が空を舞い、肩から地に落ちる。

赤犬はすぐさま飛び起き使い慣れたマグマの力を使おうと試みるが、体が変化しない。言葉無くアンを睨めつける。

「ここに集っている町の人達は、自分達の罪を認めている。もう二度とこんな事はしないと誓っている。おじさんの心の中では、一度でも悪となった存在は、そのままなんだろうけれど、人は善と悪のふたつを振り子のように揺れ動く存在だよ。全くの善、全くの悪という人間はごく少数」

既に海賊行為を行っていた男達の殆どは命を散らしているだろう。海軍によって一度は手入れされた町だ。監視も入る。

運よく生き延びここに帰って来れた者達がどういう道を選ぶのか。真っ当にこれから生きる事を、もう一度海賊を続けようと声を大にして叫ぶ事を、住民たちの選択を待てと暗に示す。

静かな声は誰の耳にも届いていた。

「許せと言っている訳じゃないんです。行いと罪とし、罰を受ける事を是とした人達が、立ち直る時間をあげてください。執行猶予、というものです。人は浅慮せんりょを省みる事が出来る生き物だから」

許されたわけでは無い。

町の人々は、少女の言葉に俯いていた。

「もし、それでも同じ過ちを繰り返したならば。その時に断罪すればいい。ことごとく。海軍が今までしてきた、真上から神がこの地上を、見るがごとくの殲滅を」

だれもがぞくり、とした。

言葉ひとつでこんなにも背筋が凍るものかと、その場に膝をつく海兵までいたほどだ。覇気では無かった。少女が纏う、空気とでもいうのだろうか。

「そんなに言うんなら、この件、お前がきっちり始末せい。…頭をよう冷やして船に戻れ。部屋で待っちよるからのう」

踵を返す赤犬へ、その背が見えなくなるまでアンは敬礼を続ける。海兵達は縛り上げていた海賊達を連れて船へと戻っていった。

「ふう」

肩の力を抜きその場で背伸びをする。雲が割れ、光が差し込み人々を照らしはじめた。

どんなに言い繕ったところで、艦の頭である大将の判断にNOを突き付け、軍規を犯した事には変わらない。

どんな処分が下っても、アンは受け入れるつもりだった。このまま海軍から除名されたとしても、自分の取った行動に責任を持つ。

「生き残った人達で、新たな暮らしを建て直してください。…生

きて罪を償って下さいね」

柔らかくほほ笑む海軍将校の少女に、町の人は頭を下げる。

「きつと、必ず」

誰かが発したその言葉に、お願いします、とアンも深く礼を返す。

「すごい、7色だ！」

空は青を取り戻し、虹がかかる。

子供達の歓声に目を細め、手のひらを空にかざした。

28 - サカズキ

ノックを戸惑っていた。

部屋で待っている、いつもの顔で言っていたサカズキの顔が脳裏に浮かぶ。

たらりと汗が頬を伝った。暑くは無い、緊張の証だ。どこか表情も固まっている。両手でふにふにと頬をほぐすが効果が無い。もうこのまま入ってもいい気がした。どうせゲンコツが待っているのだから、無理にほほ笑んで入室しなくても構わないだろう。

ちなみに報告書はまだ書いてはいない。

兄弟達の寝顔を眺めてから、アンはこっそりと帰ってきた。

月はまだ頭上にあり、波は静かに、船を潮の道に誘っている。

ドーン島にふたりを送り届け、久々のダダン宅でわにめしとてんぷら、唐揚げ、照り焼きを思う存分食べてきた。

ご飯の最中に眠気がピークを迎えるこの癖は何とかしたいモノの、兄弟間及び義祖父も素敵なタイミングで場所を問わず良く寝落ちてしまう。

これは一族特有の呪いなのかと思わなくもない。

焼き飯の中に顔を突っ伏したまま、兄弟が揃って寝落ちた時はどうしようかと思ったくらいだ。

その時はサボと手分けして寝床へと運んだが、起きるや否や、二人とも取り合うように食べ残しを胃に詰めていたのを思い出す。

今回は帰ると伝えていた訳では無い。最初の頃は海兵の姿で戻ったアンに、ダダン一味が総出で森に逃げ込むなど驚いてくれていたのだが、頻繁に帰るようになってさすがに慣れてくるらしい。突然の帰宅にもダダン達は驚かず、厄介者が増えたと悪態をつきつつも普通に迎えられてしまった。しかもおかえり、と言ってくれなが

ら頭をぽんぽんと撫でてくれたのが嬉しくてはにかんでしまったほどだ。

夕食の後は兄弟達と大きな木の桶に湯を張り、風呂へと入った。久々に体や頭を洗いつこし、囲炉裏の前でほっとしている間に寝落ちていたらしい。最近はツリーハウスで寝起きするのを止め、ダダンの家ではなく、自分達で建てたそれぞれのあばら家で暮らしているのだと聞いていた。出来はそれぞれまいちだが、雨風はしのげるからいいのだそうだ。今日ばかりは3人で川の字に、懐かしい小さな小部屋で転がっていた。押し開きの窓から差し込む月光に照らしだされたふたりの頬に口づけを落とし、アンはそのまま戻ってきたというわけだ。

アンは意を決めノックする。

もしかしたらもう眠っているかもしれない、そう思いながらも遠慮がちに、小さく叩いてみた。

「…入れ」

起きてるし。

溜息が落ちる。

船内は見張りに立つ夜番だけが眼を擦りながら、勤めについているだけの時刻だ。

殆どの海兵が夢の世界に旅立っている時間だった。そう、草木も眠る丑三つ時、一番人間の眠りが深いと言われている。

「失礼します…」

蝶番が鳴る。

呼吸を整え、中へと入った。

ランプの光が淡く照らす室内には、様々な書類が几帳面に整理された棚がおかれている。

視線は書類に向いたままだ。

沈黙が流れる。

「出過ぎたまねをしてしまい、申し訳ありませんでした」

最敬礼まで深く上半身を折り、アンは謝罪の言葉を口にする。

赤犬からは小さなため息が漏れ出た。この感覚は、困った孫をどうしてくれようか、というガープから放たれていたものと同様の、生暖かい視線を彷彿させる。

「報告せい」

「はっ、ビトフェ島トヘ口につきましては付属する王国に書状を既に出しております。海賊の根城になっていた監督責任の不備を、海軍の連隊を駐屯させ、監視を兼ねるよう……これから報告書を。始末書も提出します」

「畏まらんで構わん、わしも時間つぶしに始めただけじゃけ楽にせい」

と言われてふにやりとその場に座れない。

船に乗っている限りは上司と部下、なのだ。

マリンフォードの家にいる時は、黄猿の事も名前と呼んでいたが、艦では流石に控えていた。赤犬の艦に乗ってまだ半年も経っていないが、艦内の様子は大体把握している。

この艦は軍隊として一番形がしっかりとした組織が成りたっていた。

上司の命令は絶対であり、敵前逃亡など許されはしない。臆病風に吹かれた海兵は自害しろと前もって通告されている。

誰でも死にたくは無い。逃げ出したいときだってある。

だがこの艦では認められていなかった。

戦闘に続く戦闘が、次第に心を蝕んでゆく。生死に無関心になつてゆくのだ。成らざるを得ない、成り得なければ相手を殺せず、自らが死ぬのだから。

生き残りたければ正気ではられない。

そんな環境がこの艦にはある。

比べてはならないことなのだけれど。

アンは義祖父と黄猿の艦の様子を知っている。義祖父は気安かった。海賊との戦いもあるだろうが、義祖父の元、一丸となって立ち向かう形だ。黄猿の艦も海兵同士の協調がとれ作戦時には一貫性の行動をしていた。それぞれが信頼し合い、役割分担をしっかりと成し、戦う。

赤犬の艦は、どこかよそよそしかった。

人間はひとりでは生きていけない。それはこの艦に乗る誰もがわかっている。

だが親しくなるのが怖い、とでもいうのだろうか。

大将自ら前線に立って戦うものの、死傷率が最も高いのもこの艦の特徴といえるだろう。

アンが乗り込み、にこにこしていると、周りに人が集った。

笑顔は敵を作らない。

どこか安らぎを皆が求めているのがわかった。

アンも出来るだけ前線に立ち、立ち回ってはいる。しかし既にもう何人も、海へ弔いの花と共に流した海兵達の姿を見ていた。

軍艦に乗る限り、生と死はいつでも付きまとう。

けれど納得はしていなかった。まだ何とかなる、何とか出来る。

人の上に立てる者は、その背を見せねばならない。

無理を押し通し、やれ、と命じても足がすくむのは当たり前なのだから。

「よう止めてくれた。礼をいう」

赤犬が書類に落としていた視線をゆつくりと上げる。

その目尻には微かだが優しさがあった。今ならば、教えて貰える

かもしれない。

「サカズキおじさん、聞いてもいいかな」

今までどうしても気になっていた事を尋ねてみた。

どうしてそこまで頑なに、海賊を滅ぼせと言うのかを。

「どこから話せばいいのか、そうじゃのう」

息を深く吐き出しながら、サカズキは目を閉じる。

かつて居た家族の事を、ぼつぼつと語り出した。マリنفォードでは無かったが、^{グランドライン}偉大なる航路”内にある賑やかな都に居を構えていた遠い思い出を。

「わしはこういう男じゃけ、仕事にかまけてしもうての。一緒に行く約束をしていた旅行の事すら忘れとうた」

仕事を懸命に頑張る父親に、娘も息子も、妻も文句を言わなかった。

父が頑張って海を巡っているからこそ、不幸になる人が減る。

帰って来ないのは寂しいけれど時々かけて来てくれる電話が嬉しい、と。

しかし。

楽しんで来いと切った電話が、家族との別れとなってしまったという。

悪い巡り合わせは重なるもので、家族が乗った船が嵐に巻き込まれ、ようやく脱した後海賊に拿捕されてしまったのだ。近海を航海していた赤犬が救援に向かったが、時は既に遅かった。

海賊は容赦なく、物を奪い人を髑り、いずこともなく姿を消していたという。

生き残りはいなかった。

赤犬は残されていた娘に送った人形を見つけ、その場で吠えた。

決して許さない、この命が尽きるまで海賊と名のつくもの全てを殺し続ける。

そう心に決めたのだと話を結んだ。

「…ご家族の事はとても残念です。私も両親を人の手により奪われていきますから、その気持ちは痛いほどわかります」

あちらでもこちらでも。

あちらにはもう、血の繋がった肉親はいない。こちらには一緒に生まれて来たエースだけだ。杯を交わし、兄弟となったサボも今はどこにいるのかわからない。ルフィという可愛い弟が出来た事だけが、唯一の救いだろうか。

「死んだ人にはもう、生きているわたし達に何かを伝える術はありません。仇をうつて欲しいのか、それともその手を血で染めるかと願っているのか。想像するのは、生きているわたし達なんです」

返して。

どんなに願っても、叶えられない望みの虚しさはいつまでたっても心を苛む。

「戦う事が、おじさんの生きる意味になっているのだとしても…もう、許してあげたらどうですか。おじさん自身を。戦い続けることで贖罪にするのはもうやめて、赦してあげてください」

アンは苦笑しながらも思いを伝えた。

ゆっくり歩み寄っていた椅子の横で、サカズキの大きな手に手のひらを重ねる。

じっと自分を見つめる、生きていれば父親の年齢に近いサカズキの頬にキスした。

お休みのキスをするような、照れくさいような、親愛の口づけをした後、ドアの前まで駆け行く。そして振りかえり、アンは敬礼では無く、ぺこりとお辞儀をし部屋を後にした。

ばたん、と扉が閉じる音を背で感じる。

空を見上げれば東が白んでいた。

そろそろ船のみんなが起き出してくる時間帯だ。

お腹が減ったなあと食堂へと向かう。料理人達が仕込みを始めている厨房に身を乗り出し、つまみ食いを願う。その後あーんと口を開けた。

「腹減ったんか。アンちゃん、ちょっとまてな。味見さしてやる」
「うわーい」

聞いたぜえ。赤犬大将を目の前にして引かんかったらしいなあ。その細っそい体で無茶すんじゃないやねえよ？

既に話は巡り巡ってこんな所にまできているとは。

「えへへへ。いやあ、なんていうか」

勢い、ではないものの今まで溜めこんでいた全てを放出してしまったので、軽い気持ちであるのには変わりなかった。

「まかないで悪いんだが、ほらよ」

口に突っ込まれたのはパンだった。朝食時に並ぶ、ふっくらとした柔らかめパンだ。その中にハムとスクランブルエッグ、レタスが挟まれている。

口の中に幸せが広がった。

「アンちゃんはほんとに美味そうに食うなあ」
「ほんほおいひいでふもん」

もぐもぐとリスのように頬を膨らませて、答え。そこで気がつく。昨日のわにめしからあげてんぷらてりやき食戦争の余波に。ゆつくりと食べていては自分の取り分が無くなってしまふ。そんな食卓に参戦した翌日は、気をつけねばならなかったのをすっかり忘れてしまっていた。

「あの、その、いつもはこんな食べ方しないんですっ」
ごくりと飲み込んでから慌てて取り繕っても、料理人達コックのにこやかでさわやかな笑顔の前に繕う事が出来ず、顔を赤くして飛び出していった。

「面白い子だなあ」

「この艦の癒しだな」

「笑いも含むんだろうけどなあ」

小さな背を見送ってから、料理人達コックは仕事に戻る。

しかしアンは知らなかった。こっそりと撮られていた写真があった事を。

後日、回収作業に奔走するアンの姿をまたパシヤリと映す料理人達が目撃されるのだが、それはほんの少し未来の話だ。

朝日が昇り海兵達が持ち場につき始める。

「海賊船発見！！　あの旗は懸賞金総計1億3500万、トルツウーガ海賊団です！！」

見張りからの声に、海兵達が一斉に動き出す。

指揮を執っているのは丁度甲板に出て来ていた副長だった。

大砲に弾が込められ、武器を手にした海兵が甲板に集まって来る。さすがに戦闘に特化された集団だけはあった。

朝日が昇る空に、何十門もの大砲の黒い煙が上がる。

アンは切り込みを主とする部隊に配置され、海賊船と接触する時

を待ちかまえていた。

「少佐、あんたの後についていいですかい」

「お前、ずるいぞひとりだけ」

何名もに声を掛けられ、内心慌てながらも黄猿仕込みの集団戦の展開を用意する。

「うん、お願いします。ペアを組んでお互いの背を守りながら、無茶しないで進んでください。海賊船の頭、船長はわたしが押さえます」

黄猿の船では、背中を守り合う相方が居た。

しかしアンは海軍での相方は彼ひとりと決めている。

異動の時もドレークは見送ってはくれなかった。同じ海軍に所属しているのになぜ別れの挨拶をしなければならないのか、と言って背を向けたのだ。

階級が上がっても、所属する部隊が違っていても、お前意外とは組まん。

そう云われてしまつては他の誰かと組むわけにもいかなかった。

接舷し、海兵が海賊船へとなだれ込む。

グランドライン

”偉大なる航海”後半へと向かう、海賊達を見くびつてはいけな

い。
空を抱きしめてアンは飛ぶ。風舞いの名が叫ばれていた。

黄から赤へ、異動を知る海賊達は少ない。

「トルツウガ、お相手願おう！」

正義のコートが風を受けて音を立てる。海兵へと振りかぶられていた拳を足で払い、嵐脚で周囲をなぎ倒した。そうして敵船の上にふわりと降り立つ。

賞金首になる男達は揃いも揃って大きな体をしていた。大抵は見上げなければ顔が見えない。その為死角がどうしても出来る。

横殴りの金棒が視野に映る。

避けられなかった。咄嗟の事で鉄塊も間に合わない。

骨が折れるのを覚悟で、腕でガードする。

「なにしちよる。ひとりで突っ込むなと指示したのはお前だろうが」

溶岩の拳が海賊達を襲う。

「赤犬大将！！」

海賊達が口々にその男の名を呼ぶ。絶望が戦意を鈍らせた。

「えええい、惑うな！！ おのれら！！」

トルツウーガが海賊達を鼓舞する。

赤犬にとって今までは海賊を滅することのみが正義だった。

憎み続けてきた全てが、溶けることの無いと思っていた心のしこりが娘のような子供の一言で融解していた。思いがけない贈り物にも多少だが、自分自身で驚いていた。許し、そして知る。

これから決して、海賊に同情も容赦もしないだろう。

家族の代わりでは決してない。しかし心の空虚を確かに埋めたのは、鉄砲玉となり海賊の真つただ中に、自らの姿と見間違えてしまふほど無謀にも身を投げ込んでいた少女だったのだ。

「わしの娘に手え出すとはいいい度胸じゃのう」

今までとは違う言葉の温度だった。海兵達に無理を強いて来た、海賊に背を向ける事無かれ、とはまだどの海兵も言われていなかった。負傷して後方に引いても、生き恥を晒すとなじりもしない。

それどころか仲間を庇い後方から前線へと加わりうとする海兵に、助力すら差し出していた。追い打ちをかけてくる海賊の前にマグマが立ち塞がる。

赤犬の艦に所属する海兵達にとっても、初めての戦いだった。

「おじさんの過保護」

紙絵を使い海賊が撃つ銃を避けようと動くが、岩石の壁に全て飲まれ届かない。

ぼそりとつぶやいた言葉に、にい、と赤犬が笑んだ。

「そんな所にぼさつといつまでも立つとるからだろ」

今まで見た事の無い表情だった。しわを寄せ、難しい顔をしてはいない。

海兵のひとりが目を疑った。思わず目をこすり、確かめた位だ。

その顔は反則すぎる。

アンは思わず片手で顔を覆った。もう一方の手では海賊からカタルを奪い取り、顎にその柄で打撃を叩きこみながら、ほてりを隠していたもう片方を手放し、指弾を放って複数の相手をする。サカズキの参戦であつという間に海賊船の清掃が終了となった。

海軍側の死者は零に抑えられ、帰還する海兵達の顔にも勝利を祝う笑みが浮かんでいる。

大きな手のひらが頭に乗った。

「ようやった」

戦線指揮をやり抜いた小さな娘を労う。

万人心を異にすれば、則ち一人の用無し。すなわ

それが形となった戦いだっただ、それだけだ。

「赤犬大将、それはわたしではなく、是非ともみんなに伝えてあげてください」

そうじゃのう。

大きな指を握り艦へ戻りながら、アンは聞いた。驚くような一言を。

やったあとその腕に思わず抱き付く。海兵達は何事だと、そんな大将と少女を見た。

29 - 休日

時々は口から魂がこんにちはーと出てくるくらい、ぼーっとしたい一日もある。

幾つもの戦果を上げ帰って来たマリンフォードで、引越作業が急ピッチで進められていた。

黄猿の艦は残念ながら任務のため出払っており、合鍵を使って荷物を数キロ離れたサカズキの家に運んでいたある日の午後。

トラックがあれば一気に運べるのだが、細い路地のその向こうにある新たな居候先には入れる幅の道がなかった。

「お茶が美味しい…」

アンはふう、とほっこりとした吐息を吐き出す。こんなにもゆつたりとした時間を、ひとときであるうとも得られる幸せに、頬を緩ませる。

赤犬艦に乗りこんでからの日々は怒涛と表現する他なかった。

戦いのろしが上がれば、有無を問われる事無く、前線で指揮を執りながらの戦闘が始まる。

1カ月半の航海の内、ほぼ3分の2は戦闘を行っている状態と言っても良かった。それらは勿論、訓練では無い、実戦、だ。

だがまだそれだけなら良しとしよう。所属に振り分けられたのは、上司が存在する分隊だったからだ。取りまとめをする頭には据えられていたが、基本的に上から下りてくる命令に従っていればよかった。

だがしかし、赤犬の艦内では配置換えも頻繁に行わるのだ。

年齢や所属年数よりも実績が何よりも優先され、例えその年に入ったばかりの新兵であろうとも実力が伴うならば、幾つかの跳び昇格を大将の申告により行われた。

今回、アンはその昇格の中に巻き込まれてしまった、という訳だ。

海軍本部内の階級はそのままだったのだが、艦内で、出来れば座りたくなかった座席に下ろされてしまっている。元からこの艦には2名の副長しか在席していなかった。だから3つ用意されている副長という職務に、適任者がいれば就けるは当然だというのだ。

元からの副長達は主に、新しい副長が仕事に慣れるまでの間、後方支援に回っよう大將より言いつけられている。戦闘時、大將が真横についてくれるとはいえ、初めは自分の耳を疑ったほどだ。だがしかし。

「それくらい出来んのか。黄猿は甘やかしちゃったんだのう」
赤犬からの売り言葉に、アンは力チンときて買ってしまう。

ボルサリーノからは基本的な指揮のやり方を1年で仕込んで貰っていたからだ。1年間とはいえ面倒と見てくれた小父に対して、悪口を言われるのは癪だった。

あとで嵌められたと気付き後悔したとしても、一度口に出した言葉が無かった事には出来ない。

「やってやろうじゃないですか」

大胆不敵にも胸を張り、言い切ったアンに赤犬はにやりと笑んだ。口車に乗せられていた、と本格的に気がついたのは、同室の副長が戦いごとのデータを整理していたのを見た時だ。

「あなたの成長には目を見張るものがありますね。叩きがいがある、そう大將も思っておられるのではないでしょうか」

そう言って提示された資料には、事細かなデータが載せられていた。

その全て、赤犬が副長ふたりに言いつけてとらせていたアンの成長記録に他ならない。

叩かれ続けたら身長伸びなくなっちゃう。

少しばかり目の付けどころが違うのではないかと思いつつも、同

室の男は両手で頭を押さえる少女に、笑みを浮かべる。

内心で背丈を気にするアンを余所に、大将による仕込みは順調に行われていた。

このまま海軍に所属し続けるなら、次世代の幹部にもなれるだろう、という現上層部の判断からだ。

ガープもあと数年奮闘し、この孫に跡を継がせるか、とも思案しているらしい。

そう言う話も回り回って聞いていた。

また悪魔の実の力を無効化したという話は、幹部内で話題になっている。

世界を破滅に導く、いくつかの悪魔の実の力も抑えられるのか。

もし出来るなら脅威の危険度を格段に減らす事も出来る。

例えば白ひげが所有する、グラグラの実の能力をも無効化出来るのかと期待がかかっているからだ。

センゴク元帥立会いの下、実験が行われたが発動条件は曖昧だった。

ただアン自身の身に危害を加えようと試みた際、悪魔の実の能力を使用した場合に限り非発動が確認された。

「多分ですけど、青雉大将や赤犬大将が、氷や溶岩の力をわたしを対象とした場合に非発動になるんじゃないかなあと」

肉弾戦のみを両大将とさせて貰った際には、ダメージが直接通った。

結論を述べればアンに死をもたらそうとするなら、直接攻撃のみが有効手段となる。

センゴク達が期待した、能力の範囲攻撃についてだが、この効果

が働くか、と問われても現段階では不明としか言いようが無かった。試すならば大がかりな用意が必要となるからだ。現状試験的な実験を行うのは厳しかった。白ひげが表に何らかの形で姿を現した時に一発勝負するのが無謀ではあるが妥当か、とも考えられる。

大海賊と呼ばれる白ひげと対峙するとなれば、海軍とて無傷ではいられない。多大な害をお互いに被るだろう。それだけ新世界に君臨する四皇は手出ししにくい勢力といえた。

だからこそこの稀有な能力を使いこなせられるなら、とセンゴクは思案する。

今まで厄介事しか持ちこまなかったガープが、ここへきて今までの負債を全て回収したような感じだ。

ひなたぼっこしながらお茶を飲み終えたアンは与えられた部屋を見る。

縁側の廊下続き、居間の隣にある十畳ほどの部屋だ。

木の箆笥に、座布団、机。この家も純和風で落ちつく。

庭にはサカズキが手入れをしている盆栽が幾つか置かれていた。庭にある池には鯉が泳いでいる。

赤犬自身は休日返上で本部に詰めていた。

大将ともなると出撃以外に会議や事務処理など、雑多な用務が積み増しされる。その補助を担う役目が、副長達だ。アンを除くふたりも確か、今日も大将に付従い本部で仕事をしているはずだった。

片づけをした後、時間があるなら差し入れでも持っていこうかな。アンは積み重なった段ボールの箱を腕まくりしやつつけ始める。全てが終わった後すっきりと片付いた室内でごろりと転がった。

台所にはみずみずしい香りを放つリンゴが籠に入れられ置かれて

いる。

休日初日にサカズキを連れ、商店街で買い出したのだ。自分の食材を買い込み冷蔵庫に収納している。だからいつボルサリーノが訪ねて来ても、お酒とつまみを出す用意は出来ていた。把握済みの台所で戸棚の中から小麦粉やチョコレート、アーモンド、冷蔵庫からは卵と牛乳を取り出し慣れた手つきで下準備し始める。

オーブンを温めておきさっくりと生地を混ぜ合わせた。鍋もフル稼働だ。

次第に甘い香りが室内に漂う。

焼き上がりを待ちつつ適当な大きさの手下げかごを見つけ、チェツクのナプキンを敷く。その上に皿を置き、準備は完了だ。

お茶を入れ直し縁側で本を開いた。

座布団を二つに折って胸の下に置き、うつ伏せに寝転がる。

艦ではなかなか読む時間が無く、積んだままになっていた書籍だ。主に植物図鑑だが、中には医学の本も混ざっている。

読み始めてすぐに柔らかな日差しに眠気が誘われた。ぽかぽかとした陽気に思わず頬が緩む。

このままうとうとするのも気持ちいいよねえ。

そんな事を思っているとオーブンの出来上がりを知らせる音を鳴らした。ぱたりと読みかけの本を閉じ身を起こす。大きなあくびを我慢せずに放ち、目をこすりながら台所へと向かう。

出来上がりは上々だった。

甘さ控えめのアップルパイと、ロッククッキー。

パイは皿の上に移し、クッキーはいくつか袋に詰めてつつかけを履いた。

普段着はこのマリンフォードに来てから定着した作務衣だ。本部に行く場合、本来なら着替えて行かねばならないのだが、暫し考えた後でずぼらする事にした。どうせ届けるだけだ。

鍵を閉め、道に出る。

時計は丁度、おやつ時を指していた。

出来るだけかごを水平に保ちながら、近道を走る。そう、家と家の間の塀の上や、屋根など、障害物に阻まれない路、だ。

本部にも真正面からではなく、横から侵入した。

基本海兵しか存在しないこのマリンフォードでは、抜け道が多く存在している。

一時的に囚人を捕縛し、捕らえる堅牢周辺の警備は厳重だが、その他は案外、網目が大きい。その分人の目での確認がされていた。ふたつの目も数多く集まれば、侵入があってもすぐに目視される。その他、覇氣使いが特に重要な部分を警護している為、見回りに就く海兵達に気負った様子は無い。自然体で役目に当たっている。

かくれんぼみたいで、たまにはこういうのも楽しいよね。

アンは気配を様々なものに紛れさせつつまずはとある中將の執務室へと入り込む。

そう、義祖父の部屋だ。

鍵はかかっている。誰かが中に入っても、難しい顔をして書類に向かっている。

「おじいちゃん、ここ、訂正すれば計算合うと思うよ」

「おおそうか。そろばんそろばん……ん、アンか。茶ア入れてくれ」

はい。

そう返事し茶葉を急須に入れる。

「ところでのう、よくここまでそのなりで入って来れたもんじゃ」

「いろいろあるの」

香り立つ緑茶を淹れた湯呑みを机に置くと、義祖父からほれ、となにかが手渡された。

これに通ってきた道を書き込め、とよくよく広げて見て見れば、海軍本部の詳細が記された地図だ。

「お前にかかればすぐに新しい経路なんぞ見つかるじやろう」

それに、どの場所へも飛びこめる能力があるのだからと言われてしまう。

「あのね、おじいちゃん。瞬間移動は便利だけど疲れるんだよ」

アンがその能力を使う時、心の中に思い描く風景や形象が絶対的に必要だった。

最も楽に飛べる方法は人物だ。

その人を具体的に思い描いた像さえあれば、確実にその場へ飛べた。

乱暴ではあるが、写真があれば行こうと思えば至れる。

「おじいちゃん赤ペン」

ひょいと投げられた太いペンを受け取り、幾つか侵入しやすい入り口を書き込む。

「出やすいところは？」

「全部書きこんどけ」

「適当に」

記憶していたばれても構わない死角にバツ印をつけた。

アンは一度見た物は絶対に忘れない、絶対記憶の持ち主では無い。適度に物忘れもすれば、うっかり忘れてしまう事柄もある。

この絶対記憶、一部ではあるが実はサヴァン症候群という疾病の可能性が高いとされている。

原因は特定されていない。脳にまつわる、多くの部位に関してま

だまだ不明な未知の領域が存在しているのだ。

能力の例としては書籍や円周率などの暗唱。有名なのは読んだ本を瞬時に記憶する、という人物だろうか。

映画でも取り上げられた事のある題材だ。

映像記憶や絶対音感もこの類に入る。

多くの事柄を覚えられる訓練を、やっているか否か。

一番簡単なのは言葉と映像を結びつけて記憶する方法だ。異なる言語を覚える場合に使われる。

アンはこれを場所と物を結びつけ記憶していた。いわゆる目印、だ。

「はい、おじいちゃん」

孫から受け取った地図をガープは面白そうに眺める。

「こりゃあ大規模改装が必要になるな」

長年この本部を仕事場としてきた祖父だから分かる事情もあるのだろう。

ふとアンは義祖父の机にある手配書を手に取った。

新しく刷られたものなのだろう。しかし見た事がある顔が載っていた。

「おじいちゃん」

「何も言っな」

うん。アンも頷く。

手配書の枚数は3枚だ。そのどれもが見知った顔だった。

『革命家ドラゴン』、『カマバッカ王国の女王エンポリオ・イワソコフ』、『暴君バーソロミュー・くま』

揃いも揃って革命軍の顔が並んでいる。

最近の革命軍は怒涛の勢いで幾つもの国で活動を広げていた。

世界地図で言えばほんの一部でしかない。だがこの一部を全部にしようとしているのが革命軍だ。海軍もようやく、重い世界政府の腰が上がり、同時に、動きだしている。

先日になるが、実はイワンコフとアンは接触していた。

何処で知ったのか、アンが丁度ウォーターセブンを訪れていた際に待ち伏せされていたのだ。

用件は個人的なもの、だった。

あの顔だ。目立つかと思いきや、雰囲気を変えて女性の姿で現れ、吃驚と驚嘆が一気にやってきたのを覚えている。

話し方も独特だったしなあ。イワちゃん。

名前の呼び方も、そうね、ちゃん呼びしなっブルならヴァターシにも考えが…

などと言っていたから、その通りに呼んでみた。呼び方指定された位でどうということは無い。名を呼ぶ度に悶えるイワンコフが面白ったという理由で、また会った時にはするつもりだ。なにがどう気に入られたのかは全くもって解らず終いだが、初恋の相手にでもこの顔が似ているのかもしれない。

あれで女王様と王様を兼任してるっていうのだから、世の中、不思議だらけだとアンはそんな事を思い出しながら、甘さ控えめのクッキーを義祖父の机に置いて、窓を開け放った。

「そこから行くつもりか…」

「モチロン。サカズキおじさんの部屋、この真上だし」

「階段を使って行け」

えー、メンドクサイ。

ぶーぶーと文句を言う孫に育て方をダダンが間違えたのかとぶつくさつつばやき、思わぬところで野生児っぷりを発揮する少女へガ

ープは嘆息した。

「ついでにこれをおつるちゃんに届けてこい。わしからの用事だと言えはその格好で歩いても構わんじやろ」

えー。

アンは折角のかくれんぼなのに、と不平をこぼすがしかし。

新茶の袋を駄賃に貰ってしまつては仕方が無い。

服装の件を何名かに冷やかされながら、おつるへ書類とクッキーの差し入れを渡し、階段を昇って赤犬大将の部屋へと入る。

…中は修羅場つていた。

もくもくと仕事を続ける真正面のサカズキへ、ふたりの副官が賢明に書類を送り続けている。飲み物も既に空になってカップの底が乾いている様子だった。

入室してきた瞬間だけ赤犬の視線が上へ向いたが、すぐに元の位置へと落ち戻る。

アンは作業の邪魔をしないようカップを3つ回収し隣の部屋に入った。洗ってコーヒーの用意をする。粉と水を入れれば、自動的に黒い液体がたまってくれる。その間に小皿へと切ったパイを乗せ、立ち上る湯気の香りに目を閉じた。

開け放たれた窓からは海原が見える。

「…そう。ありがとう、なるほどね。次の目的地はそこか」

目を細めて青の向こう側をアンは見た。世界が運んできたいくつかの内緒話は生々しい死の匂いを含み、新たな種が確かにばら撒かれ始めている。

その中にひとつだけ、ようやく結実した知らせが混ざっていた。

“偉大なる航路”^{グランドライン}内にあるクライガナ島で長年続いていた戦乱が終わった、という報だ。両勢力共々、生き残りなく息絶えたのだという。

両者がどうして戦乱を始めたのか、当事者でもあるクライガナの住人達も、時代を重ね過ぎて知るべくもなかったのだろう。もしその術があれば、もっと早くに和解し、犠牲にならなくても良かった命もあつたかもしれない。

だがそんな感想を述べられるのは、あらましが分かるからだ。

世界的に見れば、ようやく終わった内乱の報に、そんなものもあつたと少しばかりの意識が向くだけに過ぎない。いや、向けられずにさらに、そうなんだ、と次の話題に視線をただ移す程のものでしかない、が大多数を占めるだろう。

自身が関わっていない出来事など、そんなものだ。

どこかの誰かによって引き起こされた、気まぐれなゲームだと知るのは、これから配当が配られる、参加者だった者達の子孫だけだが、彼らにしても事の始まりに興味を向けるなどはしないだろうとアンは思う。

彼らが向けるもっぱらの関心事は、これから起こる事、に尽きるからだ。

「さあて、世界をどう回し始めるつもりなのかな、ドラゴン？」

世界貴族の中では、革命軍が次にどこを落とすのか、が賭けの対象になっているという。

窓の外、広がる青の世界。

問いかけに応える声は、…ない。

30 - 新たな扉

その報は世界を駆け巡る。

今季最大の船団を組み、今か今かと新世界へなだれ込む準備を整えていた暴徒達を突然襲った偉大なる航路からの脱落という不運、そして海賊の脅威に晒されながら暮らしている人々にとっての光明は、たったひとりの少女によってもたらされたものだった。

億を超える能力者が船長を務める3隻の船をいとも簡単に壊滅させた力は、かの英雄ガープの若かりし頃を彷彿させるという。

一団全ての賞金額を合わせると3億を優に越える。

顔は写されてはいなかったが、その後ろ姿は世界の安寧を支える海兵としての象徴であるかのように、新聞の一面へ大きく載せられていた。

その存在は以前、シャボンディにて天竜人を救ったその人でもあると熱く、その記事を書いたであろう記者によって語られている。

まづったなあ。

その新聞を見た時、溜息を吐きながら思った感想がそれ、だった。アンは知らなかったのだ。

よもや海軍本部に所属している激写隊のひとりが、広報活動の為にシャボンディに丁度、来ていたという事を。

確かにむしゃくしゃしていたのは否定できない。

八つ当たりだった、とも認めよう。

だがしかし、見聞色を使っていたのにも関わらず、撮られていたのに気付けないとはなんという失態であろうか。不覚と言ってしまってもいい。

休日を終え、赤犬と暮らす家から港へ下りてくれば、いくつも並

んだ船の姿が目に入ってくる。年に一度、会議に出席する将達が駆る船が、一挙に介するのだ。

マリンフォードの船着き場に並ぶガレオンのひとつ、そこから丁度下ってきた義祖父に、髪をくしゃくしゃと混ぜられたのも新聞の一件に関してだった。

さすがわしの孫じゃ、と豪快に自慢してくれるのはいいとしても、だ。

「覇気で真つ二つとは、随分と腹の虫の居所が悪かったんじゃないか？」

と、面白そうに囁いて去る義祖父の背に蹴りを一発入れるくらいは、例え階級的には上であるが許されてもいいはずだ。年頃を迎える乙女をからかうと恐ろしいのだと、そろそろ分かって貰わねばならないからだ。

しかしながら、多少、やり過ぎたと思わなくも無い。

アンの壊滅させた海賊達に関してだが、幾つか気になる点もあった。それは偶然、近くを回遊していた大型の海王類が海上にまで浮上して来、奇しくも船団の船をばりばりと咀嚼しながら青の中に戻っていったという事実だ。確かに居てもおかしくは無い海域ではある。海へ沈み込み、海流に乗れば行きつく先は海底一万メートルにある楽園、魚人島だ。しかしアンには何かが引っ掛かって仕方が無かった。

海底で何かが起こったような、ぞわぞわと心がざわめく焦りのような感情が湧いてくるのだ。とはいえその感覚を確かめに行く術をもってはいない。

そういう思いがあったのだと忘れないようにしておくことだけが、今のアンに出来る事だった。

「で。デートはどうなったって？」

「デートじゃないってば！」

朝食をとり食堂に入ると、いのいちばんにそう、声をかけられた。

いくら否定しても、スカートを穿いた姿を目撃していた赤犬の部隊はにやにやと笑みを止めない。

マリンフォードの港に停泊しているこの船も、明日の朝には出航だ。

大將は既に本部へ副長二人を引き連れ出かけているという。

激写されたその日。

アンは首元にあるビーズアクセサリの主から呼びだされていた。久々にシャボンディへ散策へ向かおうと思っているから、お前も来い、という強制的なお誘いがかかったのだ。

会議の日取りの為、赤犬艦も不承不承ながらマリンフォードへ戻ってきており、海兵達も数日間の休みを順番に回しつつ得ていた。なので呼び出しをされても別段困らなかったのだが。

『ああそうだ。僕はアンの可愛い姿が見たい。だから私服で来るように』

受話器を置く前に突然言われた、言葉の羅列に目が点となる。既に向こう側は電伝虫を眠らせ、あちらからこちらへ伝えてくる音は無い。

「え。私服…しつ、私服!？」

しかも可愛いもの、という指定も入ってしまったている。

箆笥を開けば、中に詰まっているのは愛らしさなど無縁な、実用ばりの衣類ばかりだ。

軍務についている時は、スーツにコート着用が義務付けされている。だからおしゃれしたり、可愛い何かを買い出しに行く暇が無いと言えなかった。ただ単にアンがずばらをしていただけなのだが、確かに、女の子として最近、さぼっていたような気もする。

久々にお買い物ものに行こう。

そう決め、思い立ったが吉日と言わんばかりに、すぐさま財布を掴んで町へ買い出しに走ったのは言うまでも無い。

最低限の手入れはやっていたが、海に出ればどうしても力サカサとしていまうはだをつるんとすべく、泡風呂のシャボンや、整える程度に使っているパウダーなども買い足して、勝負用、ではないが何枚かの衣類を購入した。

そうして当日。

力を入れておしやれをし、待ち合わせの時間よりも場所に辿り着き待っていた。しかしいくら待てど待ち人は来たらず、近くのカフェテラスにすとな、と座って休憩がてら眺める事にした。いつもの格好であれば、聖地までどうしたのかと訪ねに行く事も出来るが、私服で行くのは遠慮したい事情がある。どちらかと言えば待つのは嫌いでは無かったから、飲み物を注文して流れゆく人の波を見るのもたまには良いとも思えた。

しかし、繁華街側にはあまりやって来ないはずの海兵の姿が、今日という日はやけに目についた。どういう事なのかと店員に聞けば、毎年恒例の大掃除の日、なのだと教えてくれた。

ああ、そういえば。

通知が来ていたと思い出す。

なるほど、デイハルドが青海に下りて来たくとも出来ない訳だ。

アンは飲み物を空にすると席を立ち、ゆつくりと町を歩く。街中を走りまわる海兵達はアンの姿に気づいてはいなかった。

こういう時、万人向けの顔で良かったと、つくづく思った。

美人であったり、特徴的な何かを持っていると、あの人は…と気付かれてしまうからだ。

ちゃりん。

公衆電伝虫に小銭を入れ、聖に連絡を取り、次に会う約束を交わしてマリنفォードへ戻ろうとしたところ、後方から声がかかった。

「あれ、ポート…ガス少佐？」

振り向けば人違いだったのかと声を小さくする、顔見知りの海兵だった。

「ああよかった。間違えじゃなくて。奇遇ですね、お手隙ならば駐屯所へどうぞ」

わたし今日はオフで。

そう言葉を放つ間もなく、丁度良かったと連れて行かれたのは、見慣れた建物だった。

慌ただしさが通常の5倍ほどに増したその場所では、様々な情報がまさしく、飛び交っている。

人手が足りないのはいつもの事だ。

しかし、休暇中の、今や若手の中では5本の指に入る実力者が来ていたとなれば要請されるのは至極当然だった。

いつもとは違う出で立ちのアンを見て、どきりと心動かされた海兵も多い。

軍服を着ている時はかならず隠しているうなじがすっきりと見え、ポニーテールをお団子にして止めた黒髪が新鮮だったのもある。

服もフリルがついた可憐とも言えるパステル系のスカートという、歳相応の装いにこれもまたよし、とサムズアップし合っている数名の姿もあった。

「アン少佐、40の海岸線をお願いできますか。本部へは連絡、入れさせて頂きましたっ」

「…はい」

海軍の腕章と帽子を借り、肩かけの鞆を預け、海兵達を引き連れてアンは指示された場所へと向かう。

シャボンディに暮らす人々にとってアンは、どちらかと云えば好

意的に受け入れられている存在だった。海兵としては異例、気安く話しかけられる存在だったのだ。

なぜならば唯一、他の世界貴族に対して物云える立場にある人物でもあった。

デイハルド聖がシャボンディにかの者がいる限り、その言は我と同等のものとせよ。

以前、聖はそういう通達を聖地と海軍へと出したのだ。今までただ、黙認しているしか出来なかった天竜人の横暴に、待ったをかけられる抑止力が現れたのは、海軍にとって、また住民たちにとっても一筋の光とも言えた。

確かにアンはその多大なる影響力を付加され、『振りかざせる権力のなんと魅惑的な事よ』を無双出来る状態ではある。

だがあくまでもその力の基礎となっているのはデイハルドに他ならない。

20ある創造主の血と家の中で、最も権力を持ち続けているのはデイハルドの一族だ。しかもその家長が彼自身である時点で、その庇護を受けるアンが多方面に与える影響力も本人が例え、望んでいなくとも強まってしまうのだ。

今まで権力というモノに無関心だった聖が、この短期間で手に入れたそれがいかに凄まじいものであるかを如実に示している。

「これからこの地区の海岸線をしらみつぶします。皆さんは安全な内地に避難してください。出来るだけ穏便には行いますが…何かあれば駐屯所まで」

凜とした声に人々は従う。

聖地に召し上げられそうになった、女性が何人も助けられているのを島の人々は知っていた。この人の言ならば、信じて大丈夫、そういう安心感もあるのだろう。

無理な海賊狩りも行わない、大概仲裁で終える。

島の人々にとっても、駐屯所の海兵達にとっても、救い主だった。しかしながら。

この日、この場所に到着していた、しようとしていた海賊達は運が無かったと言わざるを得ない。

黄猿、赤犬という大将に鍛えられたこの少女の強さは、億越えの海賊達にとっても脅威となりつつある。否、一部では既に認定されているだろう。3つ目の覇気を持つ、人の上に立つ資格をもった若き英雄に好意を向ける視線は多かった。

その雄姿を。

写真部が逃す訳もない。

大暴れの様子は聖地にも届いているだろう。取り寄せた新聞を見て、聖も大笑いしているに違いない。

次のリクエストを恐ろしく思いながら、朝食にぱくつく。

食堂で同僚達に囲まれ、聞こえてくる会話に、アンはただ赤く染まった頬を押さえるしか無い。

女つ気が少ない軍内では、ちょっとした恋話を小耳に挟もうなら、弄られる話題になる。そう、クリスマスやバレンタインなどに登場する一団と本質は一緒だ。

「もう。他人事だと思つて。今日で最後なんだから、優しく送り出してくれてもいいんじゃないかな」

「何をおっしゃる、アン少佐。今年もこの艦に乗って貰わなきゃ俺達が困るってもんです」

「…いあ、多分、ボール引きだから。結果は天のみが知る、だよ？」

赤犬の艦では恐怖縛りが無くなっていた。

あの怒火の塊だった赤犬が、たった一人の少女によって鎮火して

いるのだ。海兵達からしてみれば、居なくなるなんてとんでもない。

「今年はガープ中将が絶対^{おじちゃん}にわしんとこへ来るんじゃない！……つて気合込めてたし」

そう、この少佐は赤犬艦のマスコットであると同時に、英雄の孫でもあったと海兵達が思い出す。

「しゃーねえなあ。ま、ずっと居てくれんのが嬉しいが。どっかに行くことになってもいつでも戻っておいでな」

昼食のお代わりを作っていた料理人^{コック}の一人が焼き飯を運んできた。海兵のひとりが受け取り、待ってましたと皿に取り分けそれぞれが口に運ぶ。

「俺達、祈ってますから！！」

海兵達の出戻り祈願を受けつつ、アンはごちそうさまをして席を立つ。

「まあ、うん。引いてくるね」

そう言つて食堂を出た。甲板に出るまで、幾人もの海兵から声を掛けられては手を打ち合わせ、いつてらっしゃいと送り出された。

内湾には10隻を超える軍艦が並んでいる。

どの艦の持ち主も、海軍内で知らないものはいないだろう。

正門から本部へと入る。向かうは一番高い所、だ。

外から行くのが一番手つとり早い。けれどこんにちはーと、窓から元帥室に入るわけにはいかないだろう。義祖父の部屋なら安心して入れるが、さすがにセンゴクの部屋ばかりは憚^{はためか}られた。

懐中時計を開けて時間を確認する。

会議が終わるまで残り30分、余裕があつた。途中の路でボガード副長とばったり会い、久々に会話する。義祖父の船は変わらなか

った。北の海から東の海にかけて、革命軍の動きが活発になっており、出撃が増えていると聞きながら、副長から何枚かの手配書を見せて貰い、嘆息する。

主だったメンバーの顔は、知っていた。

あのごみ山で、幼子達を託した時に見ていたからだ。

「先日死亡が確認された七武海の新たな顔に、暴君が、というのは確定だろうか」

「暴君が？」

この件、アンにも少々後ろめたい事情があった。

死体にしてしまったのは、モノの弾み、というか勝手に被害に会いに来た、というか。

乾いた笑いが出てしまう。

「会議で決定されるんじゃないでしょうか。中將が部屋に忘れてくるだろう、会議の目録、お渡ししますね」

しばらく歩みを同じくしていた二人だったが、途中でボガードと別れる。

義祖父の部屋で待つように言われているらしいのだ。

アンも急いで階段を上る。

敬礼する海兵達へ返礼を返しつつ、会議が続いている部屋の前で待機だ。

そこには久々に会う黄猿の副長も居た。

小声でこっそりと話をすれば、なぜか赤犬の副官が割って入り、副長同士が、火花を散らし始めた。

「いや、だから。確率ですし」

今年度は幾つ球が入っているのか、想像出来ない。

年に一度の抽選が、年を追うごとに熱を帯びている。新世界の支

部長である巨人族の中将も今回は参加していると聞いていた。

あたりはたったひとつ。

センゴクは穏やかな表情で会議を見ていた。集まりが悪かった本部会議の進行が滞り無く進む起因は抽選を行うようになったからだろう。

ずれ込む事も無く、わざわざ目録を渡す船を出航させなくても済んでいる。

会議も残す所、当人を呼んでボールを引けば終わりだ。じゃらりと重みを増した箱が鳴る。

幾つかの深刻な世界情勢を話し合っていた時よりも、なぜか中將、大将達の緊張感が高まっていた。

たったひとり。されどひとり。

黄猿から赤犬へ移った際、今まで大人しくしていた新世界の海賊達が魚人島を通り、樂園と呼ばれる航路前半の海へ溢れだしてきた。まさに待ちかねたかのように、だ。

四皇の内3人は不動だと言うが、センゴクは果たして何かが起こる前触れのような、そんな気がしてならなかった。

前半の海で個別で動く傘下が幾つか確認されている。何かを探しているようだ、というCPからの連絡も入っているらしい。

”詩”^{うた}があると言う。

内容は分かってはいない。神出鬼没な歌姫が謡うそれは、ゴール

ド・ロジャーがあると告げた”ひとつなぎの大秘宝に”^{ワンピース}まつわる何かであると推測されている。

ポーネグリフ

”歴史の本文”に関しての資料は殆ど燃やされてしまっていた。かつてオハラという古代王国の研究、解読を進めていた考古学者達であれば何かが判っただろう。しかし今はもう存在しない島だ。西の海を記した地図からも名称が削除されている。無人、無名の島にはかつての砲撃痕すら、緑に埋もれ消えていると聞いていた。

全知の樹に集められていた膨大な文献が残っていたならば、分かった事もあつただろう。

正義の名の元、『バスターコール』を発動させたことに後悔はない。

あの時、あの措置は、必要不可欠だった。そうセングクは今でも思っている。

扉の外。

名を呼ばれるのを待っていたアンが閉じていた目を開く。

赤と黄の戦いはまだ続いていた。そこになぜか青も加わり過激さを増している。

人は黙していても言葉を発していた。

耳をすませば聞こえてくる。他愛も無い、今日のご飯はなにだろうか、とか、賭けに負けて一文無しになってしまった、とか。心の中に浮かべた声を人ぞんざいに扱う。

アンはひととき大きく聞こえて来ていたセングクの声を拾っていた。

唄は確実に広まっている。人々の目が、空白の100年に向かうのは時間の問題だろう。

アンも噂には聞いていた。

まだサカズキが中将であつた時。

聞いた過去を引きずっていた、帽子の陰から浮かぶ陰暗な目が告げる皆殺しの言。

クザンが選択した親友の願い。

それらを全て、アンは知った。

根絶やしにしても、意志は継がれてゆく。

犠牲を正当化しても、殺意を込めた言葉は世界のどこかを揺らめき消えはしない。

アンのように時々生まれる、世界の記憶を識った誰かが必ず問いかけるからだ。

正しいか、間違っているか、ではない。

このままの世界でいいのか。それとも違う流れを求めるのか、を選択しなければならぬ時が、ゆっくりとではあるが着実に近づいてきている。

扉が開き名が呼ばれた。

最後の一年はどこで過ごすのだろうか。アンは静かに室内へと入る。

31 - 書類の森から

ペンがたてる音、そしてインクの匂いがその部屋には満ちていた。仕事につく者達は総じて無口だ。

口を開いている暇があれば指を動かせ、目を見開け、と言わんばかりの仕事っぷりを披露している。

次々と運び込まれてくる白い紙束が窓際に積まれていた。

扉が開かれ、この部屋の頭であるつるの声と、もう一つ、聞き覚えのある声音に15名居る事務を主に業務とした海兵達が一斉に視線を向け、その場で歓声を上げる。

「つる中将！！」

「アンちゃん、待ってたよ！」

「やっと念願が叶ったね。この子が来たら鬼に金棒だよ」
歓声が本部のとある部屋から沸き上がる。

そう。

最後の年、アンはつるの部隊へ配属された。

義祖父は3年連続敗れ、それぞれの大將、中將達も肩を一樣に落としている。

ちらりと見たサカズキは腕を組み真一文字に口を結んでいた。

「サカズキおじさん？」

威圧感に振り向くと赤犬が不機嫌そうに眉を寄せていた。
黄猿がその横で柔和な顔を向けている。

「この一年で毒をすうつかり抜いてもらっちゃったのにねえ」
また溜まっていくのかと溜息している言葉の最中に、なんの話ですか、と突っ込む。

もう一人の大將はなにをしているのかと見回すと、今年も抱き枕

を逃した青雉が、貸し出し要請をおつるに行っているところだった。

「アン、わしまた1年待たんといかんのか」

「今年で最後だよ？…ね、おじいちゃんの球、見つけてみようよ」
こつという時は話題を反らすに限る。

ぱかりと開け、中身をかき回してみた。

名立たる中將の名前が幾つも見てとれる。入れ物を用意し、初めて誰がアンを欲しがっていたかを、手に取ってみる事が出来た。

大将の球はすぐに分かった。白では無く色付きだったからだ。赤、黄色、青、紫色。

紫色を関する名を持つ人物の名に心当たりが無く、誰のものだろうと見てみると、意外な人物の名だった。

「元帥？」

茶目つけを出し遊びで入れてみた、という。

「おのれセンゴク、お前のせいで今年もアンを取られてしもうただろう！！」

「文句は孫に言え、公平に球をいれておるだろうが」

元帥の言う通り、分母がプラス1されただけでそうそう確率が跳ねあがりはしない。

それは八つ当たりね、おじいちゃん。

アンはにらみ合いが始まった義祖父を無視して、名前を見てゆく。やつのことで義祖父の名前を見つけた。昨年までは細工をしていたと言っていたのだが、今年はなにもやっていなかったのだろうか。

工作、というか涙ぐましい努力はしてあった。

名前を太く大きく書いても、手触りで分からないから。

義祖父の人知れぬ苦勞に、涙がほろりとこぼれそうになる。

「今年は世界会議が開催されるのだ。実動部隊よりこのマリージョアに居てくれた方が助かる」

目は睨みあったまま、センゴクがアンに向けて言った。

「世界会議、ですか」

詳細はきつと目録にあるだろうと義祖父が案の定、置きっぱなしにしている冊子を手に取り、さっと流し読みする。

「階級もひとつ昇格しておる。ガープのように受け取らん、などと言ってくれるなよ」

先手を打たれた。

「はい、元帥」

義祖父は立ち直れないくらい打ちひしがれているようだった。

かける言葉が見つからない。

「あのねおじいちゃん、肩揉みするからね。だからね……」

「わし出来るだけ多くマリンフォードに戻って来るからね。おつるちゃんとこじゃなくて、わしんとこで暮らせ」

義祖父の顔が青かった。今まで見た事が無いような、色をしている。

そんなにシヨックだったのかと、アンはこくんと、義祖父に頷いてしまった。

「あ、でも……」

赤犬の家から義祖父の家までは4区画ほど離れた位置にある。再びの引越しいいとしても、だ。ちらりと見やるは今年の上司、だった。

おつるはどこに住もうと構わないよ、所属は渡さないけどね、そう言って笑む。長年の友人である義祖父の願いを聞き遂げつつも、仕事では妥協はしないと切り切った。

「アンおいで。早速で悪いんだけどね、仕事してくれるかい」

「はい、つる中将」

「おつるでいい、行くよ」

おじいちゃん、これボガード副長に渡しておくね。

振り向きながら義祖父にそう言い、出て来たが果たして伝わっているだろうか。

そんな事を思いながら、おつるの後を追う。

途中義祖父の部屋に寄り道させてもらい、ボガードへ冊子を手渡し書類の森へと到達した。

喜び勇んでいた事務達は暫しの休憩、と棚の奥にしまいこんでいた玉露を入れ始める。

「じつは羊羹ようかんがあるんですが中将」

「切っておいで。今日は慶福だ」

いつもは静かなこの参謀室も今この時だけは賑やかな声に満ちていた。

アンは早速書類の山の中に隠れる。コートは邪魔なので、畳でおつるの机にひとまず置かせて貰っていた。

事務机は小一時間ほどで運ばれてくると言う。電伝虫を使い、庶務へ連絡したのだ。

お茶と羊羹の皿を感謝の言葉と引き換えに受け取り、床に座り込む。

事務員たちが四苦八苦して全部の書類に目を通すのには理由があった。必要な紙一枚へ至るまでに確認すべき事柄が多く、最後の一枚に辿りつけないのが主な原因なのだ。

長年この方法で続いている為か、新たな定型デキストを導入したところで現場が混乱する。なので最終提出先であるこの部屋で処理を行うし

かない。

執務室に至るまでの廊下で、おつるからは好きにしてよいと許可を既に貰っていた。

以前からちよくちよくとお邪魔させて貰っていた実績が評価されているようで嬉しく思う。誰でもよくやった、と褒められると嬉しくなってしまうもので、アンはここに配属されたらやりたいと思っていた事を早速、実行に移した。

「前来た時も思ったんだけど、これ、未処理の書類が一括でここに置かれるから、ごっちゃになっちゃうんだよね」

ということ。

おつるにもう一度庶務へ連絡して貰い、空き棚を幾つか、一緒に運搬、設置をお願いした。

届いた棚を軽々と積みあげ書類を鑑別に仕分けてみた。

急ぎのものとそうでないもの、はとりあえず同じ棚に入れるが、付箋を貼り見て分かるようにしておく。プラスチックの書類入れがあれば楽なのだが、こつちではまだ見た事が無い。

素材が明確であるし、製造方法は不明だったが、職人たちへ頼んでみるのも悪くないかもしれない。そんな事を考えながら、アンはてきばきと書類を収納してゆく。

若手の新人、しかも期待の星がやって来た事で、いつもはピリピリとしている事務室の空気に花が浮いていた。

整理の仕方も、部屋の皆と会話をしながら進めている為、こうして欲しいという希望が出れば出来るだけ汲み採り、分別する。

書類を持って来た海兵がいつもと違う雰囲気にはびくびくとしていたが、所属する艦隊指定の個所に用紙を入れると言われると、

「ああ、これは分かりやすい。これからここへ入れればいいんだ

な？」

と好印象を持って貰えたのがアンにとって活力の素となった。

この部屋の住人達は日々忙しい。ぽっかりと開く一日は、艦隊に所属している海兵達よりも貴重だ。書類を捌くだけで精一杯で、こんなにも簡単に済む分別する時間すらとれないくらい、追い立てられていた。

ささつとではあるがものの30分ほどで終えたアンはぱくりと羊羹にぱくつく。

「アンちゃん、中佐に昇格したんだって？」

この部屋にも年配者が多いが、実戦現場とは違い軍律もそこそこ緩くなっている。なぜならば上下を余り厳しく縛ってしまうと、仕事が生にくいと論じているおつるの言に賛同している者が多いのだ。「そうなんですよねえ。今年で最後なのに、貰ってもいいものかと」

すっかり辞める気になっている少女へ、様々な人物から心の中で突っ込みが入る。

上層部が手放すはずが無いのだ。こんな優秀な人材、海軍から外へ出たらどうなるか、少し考えれば分かる。幼くしてこれほどの実力を有しているのだ。上が期待している値と、出奔した時の脅威度はイコールで結ばれている。

「うちにアンが来たからと言って、安心するじゃないよ。この子は引つ張りだこなんだ。他の任務に持って行かれそうな気配が濃厚だからね。今までよりもきつくなるかもしれないよ。それに……」

おつるは茶に息を吹きかけながら部下たちを見回す。

聖地マリージョアにて”世界会議”が開催される旨を直接上司から聞いた事務員達は揃って溜息をついた。参加国名簿を始め議事録その他、書類関係は参謀室が主に担当するからだ。

以前の会議より代替わりした王も多く、その確認作業も行わねば

ならない。

「こういう確認は海軍じゃ無くて中央政府の方でやって貰いたいたんだがねえ」

おつるは嘆息した。

政府の本部は聖地にあるが、出先機関はエニエス・ロビーに置かれている。

さすがお役所仕事だけあり、現場が幾ら困っているのだと急かしても、動きが緩慢でぎりぎりになるまで書類が下りてこない。俗に言ったらいまわしというヤツだ。

海軍が世界会議の予定を組むことになったのも、世界政府のずさんさからだった。

今で言う海軍議事文書、と呼ばれる世界会議議事録が作られる事となった事件だ。

世界政府にしてみれば、事件ではなかったのだろう。

つるは当時を思い出し失笑する。

政府の担当官と交渉したのがつるだった。今のように経験を積む前の、若かりし頃の記憶だ。

公文書管理を行っている、同政府内機関より問い合わせが入った。政府から世界会議の詳細をまとめた文書がそちらに届いたか、という内容だ。

虚偽してもなんら良い事は無い。正直に当時の上司から言われたとおり、相手に返信した。

時は既に1年を経過していただろうか。

だが海軍内では議事録がひっそりではあるが、存在していた。

警備に参加していた海兵将校が非公式ではあったが、開かれて間もなくの頃、何かがあった時にとまとめていたものが保存されていた

た。

7日間の記録は膨大だ。

将校がひとりですとまとめた書類には多くの不備が確認されていた。

しかしどこで情報を入手したのか、機関より仮として、海軍文書を納付して貰えないだろうか。

再度問い合わせが入った。

上司は文書に誤認があったとしても海兵を罪に問わないのであれば。

条件を付けて許可を出し、機関は承諾、正式文書が届くまでの間保管される事となった。

だがしかし世界政府の対応は驚くべきものだった。

海軍の方で既に出来ているならばそれを使えば良いだろう。不確かな部分については音貝トーンダイヤルを送るのでそちらで補完してくれたまえ。

その方がこちらとしても助かる。これからの名簿作りもそちらが受け持てば護衛をわざわざ申請する手間も省けるし、対応も早くに出来るだろう。同じ政府の機関なのだから、譲歩し合うのは当たり前だ。

という意味の分からない難解な文章がひとつで解決とされた。

送って来られた方としては、大迷惑か且つ仕事の丸投げに開いた口が塞がらなかったのは言うまでも無いだろう。

「まあなんだね。あちらさんに文句を言う暇があるなら、こっちでやっちまったほうが早いのは確かだ」

おつるが湯呑みを置き、眼鏡をかける。

「アン、そっちの方は上手くいきそうかい」

「はい」

元氣の良い返答が戻る。ホツチキスで書類を止めながら、挙げられた掌がひらひらと揺れた。全て、ではなかったが今までアンが所属していた黄猿と赤犬の部隊に限り、必要最小限の申請書をまとめ上げられているようだった。他の隊のものも数日あればざっと目を通すだけで状況を確認出来る状態となるだろう。

「来て早々悪いんだけどね。エニウス・ロビーに加盟国名簿を取りに行つて来てくれるかい。対象支部に連絡を入れないといけないんだ」

おつるの思いもよらない一言で、司法の島へ行くことになったアンは、翌日オニグモ中将の船に乗り不夜島へと向かっていた。

「ふむ、中佐は初めてと聞いたが。中央では絶景を望めるだろう」「なかなか来る機会もないので、楽しみです」

艦は出航の慌ただしさから脱し、乗った流れのまま目的地へ進む。タライ海流は通常の流れとは違い、3つの門を開閉し生まれる渦潮だった。

政府、その中枢機関である3つの施設を結ぶ海軍専用の海流だ。それぞれの門が開かれぬ限り施設内には入れず、一度渦潮に乗ってしまうと脱出は困難だった。だから海賊船はこの渦を避け、遠回りに航路を取る。

オニグモ中将は赤犬の隊出身で、何度か顔を合わせた事があった。手合わせも1度だけだが、相手をして貰った事もある。戦いの際にはその名の通り、蜘蛛のような姿に変わった。長く伸びた髪の下から、黒い自在に動く手足が左右に3本ずつ出現し8刀流となる。少々厳しい表情をする人物だが顔に似合わず、気の良い小父様だった。

しかし。いつもアンは思うのだが海軍の上役者ほど、いかつい顔つきをしている人物が多いのはなぜだろうと首を傾げる。

それだけ厳しい戦場を渡って来ているのだらうと想像するのだが、世界政府からの圧迫、柵がしわを深く、させているのは間違いない。

海軍には美形がほとんどいないと断言出来た。

海賊達の方が、まだ多いような気がする。

これから向かうエニエス・ロビーには絶世の美女が居ると聞いていた。そのほほ笑みに男達は見入ってしまうと言っ。

目の保養が出来るかなあ。密かな楽しみを胸に、アンはひそかな期待を胸に、青の先を見つめる。

書類の受け取りが主たる任務だが、昼食時が実は、待ち遠しかった。

赤犬の艦に乗っていた時、料理長が教えてくれたのだ。エニエス・ロビーにはオールブルーを探して新世界に何度も赴いている、人物がいると。

「オニグモ中将はこのままインペルダウンに向かわれるのですよね」

問いに頷きが戻ってくる。

実はこのは艦にレベル1に投獄予定の囚人たちが詰め込まれていた。

船は一度門に入り海列車の到着駅で一旦停泊、アンを下ろした後、に半周しながら簡易の裁判、司法の塔の屋上で11人の陪審員達が下す判決を受け、再び開かれた門から出て海底大監獄に向かう渦潮に乗る予定となっているという。

本来の手続きに則るならば、全て一旦囚人を下ろさねばならない。しかし今回は人数が多く、簡略で行われる、特例がとられていた。

「一度止まると船足が戻るまで多少の時間がかかるので、わたしここから飛びますね」

アンは月歩を使い、空へ向かう。

「風舞い、か。気持ちよさそうに行くもんだ」
オニグモがまぶしそうに目を細める。

司法の塔を横切る船から、アンは空へと駆けた。荷物は無く、身ひとつだ。大きく開け放たれた滝つぼへ呑み込まれてゆく海水を眺めつつ塔へと降りた。

チャパパパパ。

その場に降りてすぐ、何者かの声が聞こえ周囲を見回す。隠しきれていない気配をふたつ、その内ひとつは出来れば出会いたくは無い人物のモノだったが仕方が無い。

視線を向けた先に、あり得ないほど丸い物体が居た。

「なっ」

アンは突進してくる丸い物体を紙絵で避け、その背を手加減しながらもかかとを振りきった。破碎音と共に土煙が上がる。

「六式”遊戯”！手合わせっ」

丸いものがむくりと立ちあがると、目を瞑り、丸いものがなにやらつぶやいた。

「むむっ…測定不能！！お嬢さんもう一回殴ってくれー！！」

その声を聞いたとたん、背筋にざわざわあという悪寒が走る。

「やだ！」

アンは力いっぱい否定した。この人M属性か！！思わずそんな事を思ってしまう。

草色のおかつば頭に、チャックが付いている口。黒で統一されたスーツを着ている男が、さあさあ、とにじり寄って来る。

「近寄らないで変態っ」

来るなと叫んでも、にじり寄ってきたまるいモノを涙目になりながら思い切り蹴飛ばした。再び土煙が上がる。

「おかしいなー測定が出来ない。チャパパ」

ひいひい。

アンは得体のしれない生き物に後ずさる。

「…さすがは英雄候補といったところですね、お嬢さん」

見たく無い顔がそこにあった。

かつて一度だけ出会った事のある男、だ。フランキーに受けた傷が原因なのだろう。顔の一部に革製のギブスのようなものを取りつけている。

「…スパンダム」

「海軍の中にながら世界貴族の恩寵を受ける少女。その正体は英雄ガープ中將の孫娘…実に良い立場、良い位置ですね」

32 - 書類とCPと

CP9（サイファール・ナイン）。それは世界政府諜報機関の中で唯一、殺しという手段を以って『闇の正義』を施行する権限を有するグループの名称だ。

構成員は8名、スパンダムはこの2年の間に、彼が得意とする手法で長官の地位にまで登りつめていた。

トムの件で失態を犯したとはいえ、そこは姑息な手段をもともしない人物だ。

でつち上げの、様々な犠牲を用い父親が望んだ後継者の地位を手に入れ、前途有望であるらしい。中にはCP9でなければ出来ない、鮮やかともいえる妙技、手際もあるのだが目の前の男に賞賛する言葉を掛けるつもりはさらさらなかった。

トムの件において、気持ちの整理がまだついていないからだ。

わたしにだって執着ぐらいあるんだよ。

遠く離れた場所で聞こえてくる、へえ、という声に、アンは心外を伝える。

より分けていけば、手放せる物が多いだけで、これは絶対に離さないとしている固執もあるのだ。

しかも彼が、トムを陥れようと画策した理由というのは、組織内で総じられた理屈ではなく、個人的な昇進のため、であった。

大切な人たちを傷つけられ、行方不明の友人もいる中、そう簡単に割り切れ、許せるほど寛容な心をまだ持ち合わせてはいない。

ウォーターセブンで起ったあの後の出来事に、気持ちの落とし所がまだ、見つからなかった。

「その丸いのも、貴殿の部下か」

正義のコートが海水の落下により生まれる強風に大きく揺れる。

「そうだ。これはフクロウ、という。六式を習得していると聞いたものでね。その実力を調べさせて貰おうかと思ったんだが…」

この役立たずがっ

チャパパパパパ

スパンダムはフクロウというあるい物体を足蹴りにしようとするが、すい、と自然な動きでかわされ、まるで床を逃げ回る黒の甲殻類を追いかけ潰そうとしている様にも見える。

何処のコントかと思うやり取りが数分間続き、止めてくれるのを待っているのだろうな、などと思いつつも声をかける一言さえ面倒な気分になり、息を深くつく。

そうして、

「いや、もうそんなのどうでもいいから。わたし書類貰って早く帰りたいし」

こんなモノ等と関わってでは進む話も進まない。さっさと受け取って帰ろう。

アンは男ふたりに足払いをかけて床との熱烈な抱擁を与えた。

「案内してください」

「…承知した」

スパンダムは片手で顔を覆い、ちらりと少女を見やる。その口元はこれから伝えられる事、に驚き、すぐに私が悪うございましたと涙目になるだろう。

そうならざるを得ないからだ。

自らの高姿勢を変えることなく、サイファーポールの長官は立ち上がる。

そもそもここは、世界政府という組織の中でも特殊な部類に入る機関だった。

陪審員とは名ばかりの元海賊、それも死刑囚達がうるつき、侵入者を圧倒的な力でねじ伏せられる場所でもある。海兵の姿をしていればほぼ安全ではあるだろうが、女は別だという。なぜか、は実際

に見た方が早いだろうと、スパンダムは説明をわざと省いた。

「ですがご心配には及びません。お帰りになるまで、我々が護衛をするように遣っておりますからねエ」

海軍本部から丁重にアンの身柄を扱うよう、連絡が入ったとスパンダムは唇を歪ませた。

デイハルド聖が海軍本部へ視察に入ったと聞き、鳥肌が全身に立つ。

何しに来たの、デイ。

視察という名の拉致かと、本気で思い、汗が頬を伝う。

最近聖地へ行けば、彼が主に暮らす屋敷内だけではあるが、こんなことまでして貰って申し訳ないと思うくらい、世話を焼かれるようになっていた。それを彼に聞けば、お前の事を好意的に捉えているのだろう。気にするな。と言われるのだ。

それと。

不意に耳元でささやかれた声に、アンはびくりと体を硬直させる。スパンダムはにやりと唇の弧を大きく持ち上げながら、あなたにはCP9で最も強い男と戦って貰う予定になっているのですよ。

事も無げに発された言葉に、疑問符が飛び出た。歩みを進め、長官へ振り返る事無く、

「わたしは戦うつつもりなどない。書類を受け取り本部へと戻る」

ここに来た本来の目的だけを済ませ、帰ると言い切った。

「いいのですか。今海軍本部にはやんごとなきデイハルド聖がいらっしゃっているのですよ。オレは別段いいんですがね、時間つぶしを用意させて頂きました、などと厚かましく言つつもりも無いですし。どうぞどうぞ。それならば出先機関にご案内致しましょう」

長官の言い回しにカチン、ときた。

基本的にどんな悪人でも感情的に好き、嫌いの区別が無いアンだが、生理的にこの人物だけは受け付けない部類に入る。

ウォータセブンでも思っていた言葉遣いに堪忍袋が膨らんだ。それを表情に現すようなヘマはしない。しないが内心がふつつつと煮え立つ状態にはなっていた。

それよりも、だ。この男にアンと聖の関係を把握されているような言動をされた事が気に入らなかった。

マリージョアは世界政府の本部がある場所だ。噂話位は流れていてもおかしくは無い。世界が変わっても女性のおしゃべりは万国共通の娯楽であるからだ。

デihalドとアンのふたりを簡単に言い表すなら、世界の王と平民の娘、という身分違いも甚だしい関係だった。子供同士のお遊びならば周囲もまだ、可愛い盛りのじゃれ合いと思ってくれるのだろうが。

最近は何を越しつつ、ある。

CPは情報を扱う機関だ。そういう話にも敏いのだろう。

「…そのお心遣い感謝する。しかし手合わせといってもわたしな
どが相手になるかどうか」

CP9の最強と言えばひとりしかない。

13歳の時点で既にこの暗躍部隊に在席しており、とある王国が海賊に襲われ壊滅の危機に陥った際、世界政府より鎮圧のため送り込まれた人物だ。背には偶然にも政府の旗と同じ傷を刻まれている。殺戮兵器と呼ばれる彼だけを残し当時の騒動は終結していた。詳しい真相は世間に語られていない。政府によって事件が一部、隠ぺいされた状態で世に発信されたのだ。

ロブ・ルッチ。

アンも海軍が保持する情報のみに於いては、名前を知るに止めら

れていた。

流れてくる噂話、にもこの人物に関して、余りいい話を聞いたことが無い。というよりか、CP9に良い話、などあり得ない部署だ。所属している人間も了承して事に当たっているはずだ。

元から裏方の仕事を主に引き受ける機関だけあり、行っている事が全てが極めて表現するのが億劫になるほどの任務だった。長官であるスパンダムも世界政府にとって、波はあるものの役に立つからこそ、その地位につけた。父親のコネを自らのものとし、自尊心だけは人一倍大きく、権力に物云わせるのが当たり前であるものの、世界が定める正義に則り仕事をしている。

彼を長官として慕っている構成員はひとりもないらしいが、五老星にとっては動かしやすい手駒であるのは確かだろう。

正義が正義であるが為の闇を背負うCP9は、幼少の頃からCPの構成員となるため教育を受け、体技を仕込まれているという。

出来るだけ偏見の目で見ないようにしたいものの、一昔前に繰り返し報道で流れていた文句がなぜか重なる。

正義の為に、政府の為に。洗脳に近い気さえた。

繰り返し繰り返し、繰り返される言葉が次第に刷り込まれてゆく。所属している当人たちにとっては至極当たり前の環境なのだろうが、認知できないほど多くの情報が溢れる場所で暮らしていた経験のあるアンにとっては閉鎖され、制限された情報しか与えられない違和感がどうしてもあった。

分かっている。

情報とは価値ある言葉の繋がりであり、あちらのようにただで、ネットを調べれば手に入るもののほうがおかしい、と。

各国間では機密事項の奪い合いも行われていたが、それだけ世界が平和であったのだ。

屋上から階段を使い階下へとたどり着く。

思いの外司法の塔の内部は広がった。重要な情報を握る囚人たちへの拷問部屋もあるという。場所は教えて貰えなかったが、大体の空間把握であそこら辺だろうなあとアンは目星がついた。あと地下になにやら広い空間が広がっている。何処に繋がり何に使われるのかは分からなかったが、面白い構造をしているのは確かだ。

「セクハラです」

考え事をして歩いていたアンは、フクロウの背にぶつかる。

「はう」

顔面激突だ。鼻を押さえつつ、ちらりと前方を伺い見る。

真正面には黒の装いをし、網目のインナーとタイツを纏った女性が立ちはだかっていた。

「オレまだ何も言っただけなんだから」

しかし美人がスパンドムの先手を取り、言い放つ。

「長官は存在自体がセクハラですので」

セクハラというより、有害物質なんじゃあ。と、ここに居ると普段は垂れ流さない毒がぼろぼろと零れる驚きに自分自身を苦く思う。

けれど毒を吐かないと、このスパンドムと一緒にやってられないよね。

セクハラと存在を否定する女性に同意しつつ、アンに向けた視線ににこりとほほ笑みを返す。幾分か女性の表情が柔らかくなった気がした。

出るところは出て、くびれがあつて、これが噂に聞いていた美人かと思いきやCP9に所属するひとりで、カリファだとチャックの男、フクロウが教えてくれる。

かの噂美人はまだ別にいるという。

丸いのは会話が好きらしい。アンが探す”美人”は食堂に居ると教えてくれた。

ならば絶対に行かねばならないだろう。オールブルーの話も、聞きたかった。

そう言えば学生の頃もファミレスで弾丸トークを続けていた人が居たなあ、と思い出す。

ドリンクバーだけで何時間話し続けていたのだろう。レポート提出まで数時間と迫り、学友達は必至の形相で仕上げていたはずだ。

かくいうアンも必死になっていたひとりの中に入っていた。話し続けていた人は既に書き終えストレス発散中だったのは言わずもがな、だ。

丸いのを改めて良く見れば愛嬌のある顔をしていなくもない。大さ的にアンなどばくつと食べられて終わりそうな感じだが、いざとなったら飛べば済む。

「そちらが件の？」

「そうだー。可愛いお客さんだーチャパパパ」

フクロウが出合った初っ端に測ろうとしていたのは道力というCP9独自の強さ番付という。

武器を持ったこの島の、衛兵の実力を10とした際、CP9ひとり頭、幾らであるかを換算する。よく一騎当千、と呼ばれる働きをするつわものを指す言葉通りの数字だ。

ちなみにカリファは520、フクロウが640らしい。

それぞれひとりで52人分と、64人分の戦力、とみる。

「ルッチは2800だからなー。あんまり差があると一発で終わるんだー」

だから測ろうとしていたのかと、ようやく納得した。

その当人、ロブ・ルツチはと言うと、長官命令で相手をしろ、と命じられているらしく庭園の間で待っているという。嫌なのであれば断ってくれても構わないのに。そんな事をアンが思えば、長官という座につくスパンダムと彼ら、との間にはいろいろな感情が横たわっているのだと知る。

スパンダムも父親からそういう風に育てられていなければ、良いヤツ、になっていたのかもしれない。もし同じ職に着くにしても、彼らともっと、親しく、職務柄慣れ合いは難しいだろうが、笑いあえていた可能性だってあるのだ。

アンは流れ込んでくる意識に目を閉じ、切なさを閉じ込めた。

「以上です」

報告を終えた美人、カリファはそのまま踵を返し、どこかへと向かう。

スパンダムはその背を齒ぎりしながら見送っていた。彼は彼女に、全く上司として見られていないと外部からやってきたアンですら分かる。

政府から任命されているから、一応は長官様として見てやっている、節がありありと見てとれた。

「ねえちなみにスパンダムの道力は幾つなの？」

「驚くなー、なんと6だ！チャパパパ」

一般兵より弱いんだね

アンは苦笑する。いうなれば普通なのだ。ほんの少し、悪たくみに長けた、ただの人。

けれどスパンダムは以前、バトルフランクの弾を直接身に受け立ちあがっている。鉄塊を使っているようにも見えなかった。2年前に比べ、なくとも外見、内面共々、余り変わっていないように思

えた。

差異が見受けられるのだとすれば、以前よりも増した欲望、だろうか。

生命的ではない。どちらかと言えば金銭や名誉など、一般的には我欲と呼ばれるものだろうか。自分一人の利益、満足だけを求める気持ちだ。

しかし人間とはひとつの感情だけで構成されてはいない。

いくつもの気持ちが複雑に絡み合って、その人を構成している。今のままであれば、誰ひとり、スパンダムの事を助けてやろう、だとか、仕方が無いから言う事を聞いてやろう、などという優しさを貰えないだろうが。

きつと体質的に、内外ともに打たれ強いのかもしれないと、ひっそりと思う。

隊を率いる将に智も力もあれば言う事無しだが、実際にはどちらかに傾く。

目の前の人物は悪知恵が働く辺りで、智に含まれそうでもない。我こそは智将である、そう明言している人達からは苦情がきそうだが、一応そちらに寄せてもよいだろう。悪い意味で、という但し書きがつくだろうが。

味方側であつたなら、確かにその存在はセクハラではあけれど、汚れ仕事を率先して片付けてくれる便利屋ではある。敵側であれば虫唾が走るほど嫌な相手だが、それもまた適材適所に振り分けられた結果、なのだろう。

「言うな！！　オレは指揮官だからいいんだ！前線には立たんだらうか！！」

いや、それ上司として、指揮官としてどうなの。

アンは聞こえてきた会話に思わず、内心で突いた。

将はどつしりと構え戦線で戦う兵卒達を見守るのも大切な責務だが、余り後ろに下がりすぎるのもどうかとは思わなくもない。実際、黄猿も赤犬も、そして義祖父も、前線に立つ指揮官だった。

折角心持ち上げた評価をハンマーでたたき割りたくなるのを押さえつつ、聞き流していたフクロウの声に意識を向けた。

諜報機関の、しかも一番質が高くなくてはならない権限を持たされた部署の頭がこれとは頭が痛い。しかも、それでも任務がきつちり持ち回り出来ているこの状況が凄いと見えよう。長官の元で働くCP9のメンバーがどれだけ優秀であるかを如実に表しているようだ。

おつるが貰えるものを貰ってさっさと戻ってこい、と言っていた意味を今更ながらに痛感させられる。

先ほどから続いている、フクロウからの道力の説明をつまめば、六式という体技を極めた時点で常人の域を超えているという。500あれば十分超人と言われる域なのだそう。

自分の値がどれくらいなのか、知りたいという思いが無いわけではない。

サカズキと前線で戦っていた日々を思い出しても、六式で大概は何とかなっていた。覇気も霸王色を使う事は至って稀だ。ある程度は使いこなせるようになってるものの、頻繁に放って良い力でも無い。3つ目の覇気は自身を傷つける諸刃でもあるのだ。その訓練は想像していた以上に精神を痛め付けた。エースとアンはシャンクスからきっかけを得、無理矢理引き出したため、ぶり返しの余波が大きかったのもある。

本当ならば3つ目のそれは無理矢理起こす力では無い。自然と力量を増してゆく過程で、開花させてゆくのが一番だ。兄姉のように段階を踏まず叩き起こす方法は荒治療で、切羽詰まった状況で取られるだろう最終手段だった。

ちなみにルフィも片鱗をみせている、という。

さすが、Dの名を持つ血筋だけはある。

100万人に1人、と言われる覇王色の持ち主が、3名も同じ場所に固まっているのだから偏りが顕著だ。穿った見方をすれば、時代をうねらす点はどこにある、と言ってしまってもいい。

アンは常時、覇気を纏っている。纏うように教えられていた、と言うのが本当のところだ。そう、シャンクスからの提言だ。

武装色を多少苦手とするものの、見聞色を紙絵などと並行利用し使いこなせば、攻撃を身に受けずに回避し続けるのも難しくなかった。

しかしCP9は覇気を使わない。

もしかして無意識に纏っている武装色がフクロウの数値測定を邪魔しているのではないだろうか、とも考え解こうとしてやめた。

強さは隠していて損は無いのだ。

わざわざ露呈し見せびらかすものでもない。

「ルッチが断トツなんだけどなージャブラも結構強いんだー」
情報の泉と言わんばかりに、ぺらぺらと話す丸い存在のお陰で段々とCP9内の力関係が分かって来ていた。

元よりCP9は基本的に全員が六式を修め、並外れた身体能力を持ち合わせている。

全員の相手をアン一人が行おうものなら、厳しいだろう。どんなに強くとも、手数が多い方が有利になるからだ。ひとりひとりなら各個撃破していけば何とかかなりそうだが、体力の消耗が著しいと予想できた。

ただ仲間内は余り仲が良いわけではない、という。さすが仲間と

いう競争者達だ。

スパンダムに至っては、やはり長官の椅子にただ座っているだけという。

露ほども人望が無い。

だがここまで露骨に嫌われた上司も珍しいとアンは思う。誰からも嫌われるというのも、ある意味才能かもしれない。

それぞれが皆、これは飾りだ、と割り切っているだけかも知らないが。

そうしているうちに到着した、出先機関の扉をアンはくぐる。

スパンダムはじゃ、オレはここで。と通路を行き、ロブ・ルッチが待つ場所までの案内役として、まるいのが待っていてくれる事になった。

「失礼します。海軍参謀室から参りました、ポートガス・D・アーンです。書類を受け取りに……」

中に入って愕然とする。

件の部屋には、職員がたったひとりしか在席していなかった。

しかも、だ。

「あゝあゝ御苦労さまです。書類？ 適当にはいつてゐるんでえゝ取っていつてくれたら俺助かるっすゝ」

余りのだらけ具合に、場所を間違えてしまったのかと思ってしまうほどだった。

なんでもこの出先は本部勤めからしてみれば左遷と同様らしく、呼びもとされる可能性も絶望的なのだとかで、やる気がトンと起きなくなってしまうのだそうだ。

アンはそこら辺と言われた棚から、年度を確認し、国数の零れが無いよう見てゆく。備品として置いてあった書類入れも見つけ、埃を払って使用する。

書類にはパンチで穴を開け黒紐を通し、紙袋、キャリングケース

へと入れ持ち出し印を押して部屋を出た。

アンが出先機関で作業していた時間はものの10分ほどであるが、その間、男は全くアンを見ようとしなかった。まるで、既に死語になっている、窓際族、のようだと思う。

「あなたはそうやって自分自身に報われないと、可哀想なそぶりをしながら、朽ちてゆけばいい」

小さなつぶやきもきくと、彼の耳には届かないだろう。

そして待っていてくれたフクロウと向かうのは庭園の間だ。

扉をくぐると、まんま、日本庭園が室内に広がっていた。どれだけ和が好きなのだろうかと言いたくなるくらい、和風が広がっている。

しかも諜報部隊の中で最も秘匿されなければならない、構成員全員が顔を出しているらしい事実に顎が外れそうになった。

顔を隠すなり、こっそり見るなり方法はいくらでもある。

だが素顔をそのまま見せ、思い思いの場所でくつろぎながら、ドアをくぐったアンを見ていた。その面々には、スパンダムも混ざっている。

「ほう」

シルクハットをかぶった黒服の男が唇を釣り上げた。

口髭を長く伸ばした男と、腕を組み待っていたロブ・ルッチを除く全員が白眼を剥いて倒れたからだ。

「失礼、手練れが多数と聞いておりましたので…少々威嚇を」
少女の声音に冷たいものを男達は認識する。

空気が微震して鳥肌立った。

少しでも気を抜くと、意識を持っていかれそうな、体の中から精神を抜きとられるような、今まで感じたことのない畏れを、ジャブラ……口髭の男は感じていた。

ロブ・ルツチもそれは感じていた。しかし耐える、という部類ではない。

笑みを深くすれば、肩に乗っていた鳩がポトリと落ちる。

少女は穏やかな表情をたたえていた。

瞳は不動の自信、とでも言うべき輝きが満ちている。

「貴方がロブ・ルツチ殿、そして貴方がジャブラ殿ですね。初めまして、強き方々。わたしは海軍本部つる中将直下、ポートガス・D・アン中佐です。お見知りおきを」

久々に最大範囲で霸王色を展開した。部屋の外、階上階下でもバタバタと人が倒れているが意に介さない。この場所に面と向かつて、宣戦布告する人物達が現れた時、露呈するだろう慢心に警告を発した。なぜならば未来、そういう事が起こり得るからだ。簡単に突破されては世界政府の面目も潰れるだろうし、なにより、この島に居る者達に、進み来るその存在の礎となって貰わなければならない。

そしてもうひとつ。

道力2000、それを超えていると自分自身の覇気が耐えられる事実を知る。

良い目印だった。今の実力を語ってくれているかのようにも思える。

シャンクスからそれだけ出来れば大概は一発で意識を落とせるだろう。

そう言われたお墨付きではある。

さすがに赤髪本人や副長、主だった面々の意識を奪えはしなかったものの、十分な出来という。

各方向の猛者と言われていた乗組員の大人数は耐えきれずに倒れたままだったからだ。

しかし今、あの船では分からなかった程度が知れた事で、それより上を目指せる、目標が設定された。

肉体的な優劣をつけるなら、アンはどうしてもエースやルフィ、耐えた二人に負けるだろう。

しかしその分、技と質を磨き続けている。

CP9はその技を特化した集団だ。何処まで通じるか、試したい気持ちもたげた。

コートを脱ぎ、アンは畳んで書類が入ったケースを重ね、扉の近くにある石の上に置く。

「どうします？」

わたしはやってもやらなくても、どちらでも構いませんが。

異様に通る無邪気な声にジャブラは後ずさった。

海軍本部から書類を取りに来る将校の時間つぶしに少しばかり付き合っただけ。なあに、たかがガキひとりだ。お前らが負けるはず無いがな。世界貴族が面白い事に、そのガキに万が一勝てたら、何らかの外交特権をオレ様にくれるという。

まあせいぜい、遊んでやればいい。

そしてオレに外交特権を持ちかえれ。

不遜な態度をとっていた長官に、悪態をつきつつ、はあそうですか、と返答したジャブラは小さく舌打ちを打つ。

何処が遊ぶ、の域なんだよ。

真っ先に気を失い泡を吹く長官を睨みつける。

ジャブラは乾いた口内に焦りを覚えた。圧迫感は収まるどころか、重圧を増している。少女の皮をかぶった悪魔のように、見えた。悪

魔の実を食べ、能力者と畏怖される自身がただその姿を見ているだけで根負けしている。

「面白い経験だ」

ロブ・ルツチは肌に伝わって来る緊迫感に組んでいた腕を解き拳を握りしめる。

「それでは暫くの間、宜しくお願いします」

戦いは合図の音なく始まった。

33 - 乾き濡れて

拳が打ち鳴らされる。

それぞれが同等の力を、まるで組み手のように力量を読み合いながら受け放つ。

掌だけでは無い。足や肘、膝、あらゆる部位が凶器となっていた。それが六式を極める、同意義だからだ。

さすがに彼、は戦いに慣れていた。

物心つく頃より、CP構成員となる運命を背負い育てられただけのことはある。人間兵器と呼ばれる所以は冷徹な思考にあるようだった。容赦のない下段からの回し蹴り受けた肘が痛みを伝えてくる。鉄塊しか纏っていないければ、肋骨がきつと2、3本持っていかれていただろう。

鉄塊の強度は名の通り、鉄の硬さとされているが肉体の鍛錬度により、より硬くなる事も可能だった。最低限の基準値が鉄という物質に例えられているだけなのだ。

強い。

ただいなすだけでも、受ける部位がずれていたら一気にこの攻防は崩れる。

アンは武装色を解けないでいた。

しかも相手は本気ではない。それはお互い様、だろうが彼は何かを問うてきていた。

明確な意思ではない。くぐもつたなにかだ。

ふたりの間に間合いがとられる。相対する相手に呼吸の乱れはない。

「…聞いていた以上だな」

「それはどうも」

どんな噂が飛び交っているのか聞いてみたいような気もするが、しない方がきつと良いのだろう。

霸王色で気を失った者達が自力で起きあがって来るまでまだ時間はある。

そもそも、時計の針は思ったより進んではいなかった。

アンは戦いに心躍るタイプでは無かったが、海軍に入隊しドレークと組んで、または心強い赤犬の背を借りて海賊との戦に身を置いていた時は、こんなに空虚ではなかった。

彼と命のやり取りを行っている訳ではない。

だがロブ・ルッチの拳は乾いていた。飢えていた。欲していた。

何かを。

彼はスパンダムのように地位や権力には興味がなかった。

権力など身を縛る鎖でしかない。得る強大な力に比例する、責任を持たねばならないからだ。

人間の心というモノは、体外へ声を排出する。内心で思った事は、例え罵詈雑言であったとしても普通は他の人には聞こえないものだ。にこにこと接客しながら、早く帰って欲しいなあ、だとか、今日はこんなに眠いのはどうして、今日という日に限って仕事如山になるのだとか、宿題なんか面倒で、今やってるゲームの続き早くしたいのに、だとか。

思っている事は様々だが、内に向ける事は少ないだろう。

だが目の前に立つ男、ロブ・ルッチは数少ない内側に声を放つ者であった。

言葉で語らぬなら、拳で聞くまで。

アンの持ち味は速度だ。身の軽さを生かし、数多くの打撃を入れる。

その分威力が落ちるが、それは手数で補う。

しかしロブ・ルツチは、互いの間合いを掴みつつあった。僅かに届かない隙間を開け、拳を受けない。身を捻り、顎を狙っての蹴り上げも紙一重でかわされてしまう。

失望。違う。

落胆。違う。

悲しみ…では無く切なさ。

期待と落胆。

優越感と――――

煩い。
めんど

覗きこんだ途端、囁きが耳元で強制に聞かされるような感覚に、心が乱れた。

「つぐ…」

脇腹を狙った指銃がかかる。

そのままみぞおちへ拳が入り、上空へ体が舞う。朝食を食べて来なくて良かった、とアンは思いながら月歩を使いその場で体勢を整える。そして十分な間合いを取ってロブ・ルツチの後方へ降り立った。ダメージはそんなに多くない。だが痛みは感じていた。経験的に余り鉄塊を過信してはいけない。どんなに耐える技を使えるといつても、受けた打撃の負荷は体に蓄積していくのだ。

ざわめきが肥大していた。雑音が意識の集中を阻害する。発生源は目の前に立つ男だ。

アンは次々と形を成す感情を掴み引き裂く。

剃で間合いを詰め、覇気を一点集中、両手に集め連打する。

ロブ・ルッチが握りしめたアンの拳に対し、鉄塊を使用した。だがこの技は衝撃まで防ぎはしない。両の手で防げない打撃も数打出た。

向こうの世界で修めていた武術は、合気だ。

最初は手習い程度に始めた祖父との毎日が、いつの間にか自分を形作るひとつとなっていた。

掌から気合を放つ。テレビアニメのように飛び出したりはしないが、受けた体は内部に損傷を受ける。体の外側、筋肉を鍛えられても内蔵系を強くは出来ない。

これは、抑圧された声、っばいなあ。

アンはざわめきの正体を掴みつつあった。

考えられる余裕はまだ残っているのが、自分自身でも不思議だった。

このロブ・ルッチという人物は思いの外、仮面を纏って生きているようなのだ。

誰だって一枚や二枚、多ければ十枚位は持っているだろう。

もうひとりの自分、というより少しいつもの自分とは違うように振る舞ってみる、というレベルのものだ。

かくいうアンも幾つか使い回していた。

エースやルフィという時はそんなものを使わなくても自然体で接してられるが、海軍本部でそうはいかない。立場に因る言葉遣いを求められた。

本当は威厳なんていらないし、いつもと同じように接するのが一

番だ。しかし職場で上司達におじさん、とは声を掛けられないし、例え自分より年上であったとしても階級が上であればそれなりに振る舞わねばならないのだ。

はつきり言つて堅苦しいくて敵わない。
分かつてはいたが、分かつていなかった。

ロブ・ルツチの場合は幾つも、自分を守るために何十も同じ仮面を被らざるを得なかったのだろう。

CP9として世界政府の意に従う。従つてどんなことでも行つう。
行つうのは奪う事だ。

全て世界政府に既存する。きそん

既存とは以前から存在すること、だ。ロブ・ルツチという個人の考えなど必要ない。

まさしく兵器だ。

スイッチ一つで発射されるロケット、引き金一つ引くだけで放たれる銃の弾。

だが人間には感情がある。

心の奥底に押し込め蓋をしたところで、漏れてくるのだ。

ここから解放して欲しい、と。

性格の歪み、冷徹な思考もここら辺が原因かな。そう推測する。

アンの動きが多少ではあるが、いつものキレを取り戻しつつあった。

聞いて、聞いて、という声にお待ちなさい、と語り、意識を集中する。

聞くにも手合いをしている最中では、難しいからだ。

耳障りな雑音が消えたならこちらのものだ。

鉄塊を纏った指の先で空気を撃つ。親指でそれぞれの指を弾くのだ。

ロブ・ルツチは紙絵で避けるがしかし、連弾の後半をもろに受け両腕で防御した。

動きが止まったその瞬間をアンが見逃すはずがない。

剃で瞬発的に加速した体がロブ・ルツチの体を捕らえる。

上段から下段へ、地に足を着く事無く、アンは舞う。受けられるのは織り込み済みだ。受けて貰えるからこそ手数を当てられる。嵐脚がロブ・ルツチの頬に傷をつけた。

そのまま肩口に踵下ろしが深く入り鎖骨が碎ける。だが体勢は崩れない。そのままアンの片足を持ち放り投げた。

しかしただ投げられるだけのアンでは無い。勢いを殺す事無く、空中で身を捻り無理矢理、地へ足をつける。砂埃が立った。

「……久々に骨のあるやつと出会えた」

メキメキと体の形が変わってゆく。そう、悪魔の実の力だ。
レオバルト 豹。

背面の毛衣は淡黄褐色となり、腹面は白い体毛で覆われてゆく。頭部や頸部には黒い斑点が浮かび上がり、それが花のように並んだ。

六式と動物系ソオンの相性は格別に良い、とされている。

なぜなら食べた存在の、身体能力を純粹に強化する唯一の種だからだ。

人型、獣型、人獣型という3つの姿を取れるのも特色の一つといえるだろう。

ロブ・ルツチが好むのは、人獣型だ。

能力者の身体能力を基本とし、その動物並みの身体能力が向上する。それに加え動物特有の角や牙、体毛、尻尾といった人間に無い

部分も発露した。

豹は類似のチーターよりも手足が短く太い。その為チーターよりも力が強い分、速さが劣る。

だが実の力を使用した今は、先より十分に速度も力もアンを勝っていた。

多少の時間つぶしが闘いへと変わる。

少々揉んでやる、では、もうない。

男は鎖を己が手で外したのだ。好敵手、として認識したと言ってもいい。

獣が獲物を狩る眼光を宿し地を踏む。しかし口元に笑みが浮かんでいた。

アンは自然体で向かい打つ。

見聞色と剃を使い真正面でロブ・ルツチの側頭部を蹴った。相手は剃と月歩の複合技を使い鋭い軌道で迫って来たが、鋭角ゆえに急激な方向転換は難しい。速度に乗った体の軌道を変えればその分、重力という圧がかかる。だから落ちついてタイミングさえ合わせれば撃退は難しくは無い。

凄まじい破碎音が響く。勢いそのまま豹は生垣に背からぶつかり崩れ落ちるブロックの中、静かに立ちあがった。

剃、指銃。^{しがん}

ロブ・ルツチが間合いを詰め放つ一撃は空気すら裂く。

しかしアンも負けてはいない。何手も先を読む訓練は嫌というほど黄猿の艦で叩き教え込まれた。

紙絵でかわそうとする逃げ道をあえて残し、やむを得ず防がねばならない個所へは軽めに当て。鉄塊で防ごうとする部位へ右腕を振りフェイク、本命は先ほど碎いた鎖骨がある首筋へ、半身で受けた体を半回転させ肘で狙う。

ロブ・ルッチは再度認識を改めねばならなかった。

風舞いというふたつ名は間違いではない。月歩により常に空に浮いているのだ。支点をずらせ身の小ささと柔軟性を生かした動きに視点がぶれてしまう。

一撃はカリファよりも軽い。だが的確な狙いはカクより精密だと分析する。

ルッチは身につけていた技を繰り出した。

カミソリ剃刀、ガイチョウ嵐脚・凱鳥、オウレン指銃・黄蓮。

余りの速さに姿がだぶって見えてしまうほどの攻撃を、少女は必死に避ける。が全てを捌ききれぬわけもない。スーツの至る所が破け、ほつれていた。だが致命傷を与えている訳では無かった。生半端な道力ではない。己に匹敵する数値なのだろう。

だがそれがいい。

狂喜のあまり、自然に笑みがこぼれるのが分かった。他のCP9メンバーでは鍛錬にすらならなかったが、この目の前にある少女であれば全てを解放することが出来るかもしれない。

己に続き、二番手に着くジャブラですら30分も手合いすれば息が上がるのだ。

心ゆくまで満足した手合いなど、随分と記憶を遡らねば無かった。しかし、この人物だけは違う。

殺し合いを望んでしまった。喉笛を掻き切り、掻き切られる。

心が躍る。任務でもこんな歓喜を覚えた事は無い。自らの意思で続けたいと願った。自らの意思でこの者の命を欲した。

乾いた体に染み込む赤が癒してくれるだろう。
欲する咆哮が響き渡る。

対してアンは苦戦していた。

息が出来ない。攻撃する手が足りない。どんどん追い込まれてい状態だった。防ぐだけで目一杯だ。

その中でも厄介なのが黄蓮という技だった。鋭い人差し指とその爪が切り裂くだけでは無く身をえぐる。少しでも受ける手の指が触れると失ってしまうだろう。

集中力の持続、これだけは切らせてはならない。それでも一秒一秒が長く感じていた。

ロブ・ルッチはどんどん調子を上げて来ている。隠されていた感情の色が次第に強くなって来ていた。

このままでは、負ける。否、死ぬ。

鮮血が飛ぶ。

アンは避けきれなかった。指銃が袖を破り柔らかな皮膚を切り裂く。

ロブ・ルッチはぞくりとした。人間の血は全て赤い。匂いも鉄を含む独特だ。

紅だった。

何よりも鮮やかな、血潮に目を奪われる。

もつとその紅を……！！！！

「迂闊なっ」

ロブ・ルッチが伸ばしたた手をアンは両手で持ち、背負い投げる。お互いに随分息が上がっていた。

書類を取りに來ただけなのに、こんなにも激しい鍛錬ともいえる運動をするとは誰にも想像出来ないだろう。

不意にアンは身を起こそうとするロブ・ルッチを掌で制止する。

「わたしの血は、わたしのものだから。あなたにあげる事は出来ないから…その欲求抑えてくれないかな」

繰り返されるこの螺旋思考に触れているだけで、酔いそうになる。だがその中に気になる言葉が混ざっていた。

…アイスバーグ？

ウォーターセブンを代表する船大工となりつつある、友の名だ。

次々と流れ込んでくる情報に頭痛がしながらもある程度のところまでは読んだ。

ガレーラカンパニー、職長…これは未来だと知る。

目的はブルトンの、設計図か。

まだスパンダムは諦めていないらしい。近い未来、CP9を放ち探らせるのだろう。

なぜかそこには、大切な弟、ルフィが関わってくる気がしていた。先に船出するだろう兄と姉の背を追い、仲間を得て、来る。

それはそれで楽しみな未来だったが、その前にこの頭痛の元をどうにかしなければならぬ。

「分かったからもう、抑圧され過ぎて自分でも認識してなさそうだから言っておくけれど。エースに言わせたらわたし以上にだだ漏れだから」

刷り込みともいえる正義は決して覆されてはならない。相手を殺しても生き残り正義を正当化しなければならない。悪は滅ぼす対象ではない。闇は悪とは違う。闇に墜ちても正義の二文字が汚れなければ全ては正しい。

「CP9はそう言う集団だろうから、正義も人それぞれ意味も形

も違うから、とやかくは言いたく無いのだけれど。納得してからしなさいね。自分にそうだとウソまで付いてやる事じゃない。あなた後ろ向きに歩きすぎなのよ。ああもう、今度ね、今度。時間を取ってまた来るから。その時に積もる話を聞いてあげる。そのおじさん、このヒトを救護室に運んで。内臓破損してると思うし鎖骨と胸骨、やつちやつたと思うから」

戦いの初めから置いて行かれていたジャブラは呼ばれた事すら気付いていない。その犬！と叫ばれてようやく、呼ばれていたと知る。それほどあっけにとられていた。

最強と言われていたロブ・ルッチが敗退したところを初めて見たのだ。

しかも齡14歳の少女に、だ。

「お返事は？」

「お、おう」

ジャブラが駆けよって来る。

しかしまだだ、とロブ・ルッチは起きあがろうとした。

「全く、男ってこういう時不器用というかなんというか」

アンはため息をひとつ落とし、半獣化が溶けていないロブ・ルッチへと歩みより、袖口を裂き滲みだしている血をぺろりと舐め、口内に含む。そして鼻のあたりをむんずと掴み、犬歯がのぞく唇へと押しあて舌の上に、血を置けば、こくん、と喉仏が鳴った。

これで満足？

そんなに血が欲しいなら、自分の舐めときなさい。

少女らしからぬ行動に、ジャブラも言葉が無かった。こいつ手玉にとってやがる。

瞬間。

アンは殺気を込めた瞳で中華服を着た男を睨めつける。次同じような何かを思ったら殴り倒す。微妙な言葉の表現の差異でも殴り倒す。

視線だけで語られ、ジャブラはこくこくと何度も頷いた。逆らえば何をされるのか分からない。

「転がってる人達はその内に気が付くだろうから、放っておいても大丈夫。だからその豹の事、よろしくね」

ひらひらとアンは無事な手を振った。書類ケースを手に持ち、コートを掴んで振りかえる事無く去ってゆく背をジャブラは見送る。

「おいおい、なにお前まで脱力してんだよ。背負うぞ」

しばらくの後、向けられていた殺気がふと消えたのを感じるとジャブラはその場にしゃがんだ。

ロブ・ルッチは無言だ。こんな時くらい礼の一言でもあれば可愛げがあるんだが、と思う。

人の形に戻ったCP9最強の男を肩に負った。

海分本部のある場所で、アンは両手で顔を抑えて蹲っていた。

そこはベンチが置かれている、休憩所を兼ねた庭園だ。時間が時間の為、誰もいない。

じくじくと痛みを発し始めた腕の傷が、なんとか意識を羞恥でたうちまわりそうになる、自分の行動を制してくれていた。

芝生の上で、顔を真っ赤にし、悶絶する。

血に固執したあの男を大人しくさせるには、そうするのが一番だと思ったのだ。

また行く、という約束も言い捨てて来てしまっている。

この一年は主に内勤だろうから、時間は作れるだろう。しかし、

しかし、だ。

見開いたあの目が脳裏にちらつく。
わたしのばかああああ！！！！

「ネコに舐められたって、おも…思えばっ！！ 恥ずかしくな
んかつ」

キスは初めてでは無かった。だが自分から、この体で事成したのは始めてだったのだ。

思春期に突入した年頃の娘は、浅はかな、自らとってしまった行動に芝生の上で頬を赤く染め続けた。

その後数日の間、ネコという言葉聞いたアンが机の上で突っ伏す様子が見て取れた、という。

34・世界会議（1）

手を伸ばせば空が掴めそうだった。

海にいる時より雲が近くに見えような気がした。ここよりもはるか遠く上空、高度1万メートルには、空島があると言う。

おとぎ話や噂には聞くものの、本当にあるかどうかは確認されてはいない未知の国だ。

しかしアンはこの空にも国があると知っていた。

雲の化石、そう呼ばれる空を浮遊し続ける、水蒸気では無い雲があるのだ。

いつかは行ってみたい。そう願い、とある実験の際に機を得た。

父が歩んだ足跡を追うと言えば、きっとエースはむっつりとした顔をした後、心底嫌な表情をするに違いない。

だが行くな、とも一緒に行かない、とも言わないだろう。

「アン、何処にいる。僕から離れるなどあればと言っているだろう」

室内から声が聞こえた。

「デイ、こっち。中庭にいるの」

「この場所が気に入ったか。お前が好きだと言ったエメラルダスを集めたからな」

ふふん、と胸を張る少年と視線を合わせたアンは笑む。

「うん、嬉しい。ありがとう。でもわたし、今からお仕事行ってくるからまたあとで、ね」

髪型は朝、この家の召使たちに結われたキュート・カールのままだ。

服も実は海軍のものでは無く、特別に作らせたドレスに袖を通し

ている。

デihalドはこの後、アンを連れ世界貴族が主催を務める、立食パーティに出席する予定にしていた。海軍の用件で聖地を訪れていると聞いてはいたが、そんな事知った事では無い。その席でこれは自分のものだ、自慢を兼ねたお披露目をする方が断然、重要だったからだ。

「そんなもの他の海兵共に任せておけばよい」

高圧的な態度で見下した言を放つ少年の態度は、多くの、ここ聖地ではよく目にする風景だ。赤い土の大陸から見下ろす青海と同じく、天竜人は会議の為に集った王達をも下に見る。

アンから言わせてみれば、どっちもどっちの状態だった。

なぜなら王達は天竜人の横暴を受け入れてしまっているし、王達もまた天竜人の言をあわよくば取りつけようと虎視眈々と狙っている。

狐と狸の化かし合いのほう、よっぽど可愛いと思える程だ。

デihalドの指がアンの首筋を通り、ビーズネックレスに至る。

「さぼれ」

さらりと無体をおっしゃいますか。この世界貴族が。

アンがひくりと眉を動かせば、自分の意に従うのがさも同然であるかのように、腰に手をあててのたまった。

「そのネックレスがある限り、アン、お前は僕のものなのだ。そろそろ理解しろ」

「独占欲の塊め」

デihalドの頬をふにふにしながら、意地でも会議の方に行くと言い続けるアンに、我慢の限界を越えたランがくつくつと笑っている。

彼は聖地へ召し上げられてから、デihalドの奴隷兼、護衛、をしていた。

帯剣も特別に許され、背に押された天駆ける竜の蹄を露出させる

事、主人で無くても頭を垂れなければならない事を除けば、自由にやらせて貰っているという。

以前は何処からの商船に乗っていたと聞いた事があった。見習いとして初めての航海に出た先で海賊に襲われ、生き残った人々も次にやってきた人攫い屋に身柄を拘束されてしまった、のだそうだ。

人攫いを生業にしている者達は海賊以外の船も襲う。非加盟国のみだと宣伝し、もし間違えて捕らえてしまった場合には祖国に送還も行なうと触れ込んでいるが、そういう事例は殆どみられないのが現状だ。

本人が幾ら否定しても、買い手が付けば、その身は拘束される。特に美麗な容姿を持つ者達は容赦なく商品にされた。

ねえ。今ならば、出身国の王に情状を伝えて戻れるかもしれないよ？

何らかの用事で姿を消した聖の居ぬ間に、アンはこっそりと囁いた。

しかしランは国に戻るつもりはないと語った。ここの生活もまんざらではないと言いながら、聖の側にいる事が生きる意味になっている、と。

「それならわたしがでしゃばる事じゃないね」

それに、と続く言葉をアンは待ち。

「この身が尽きるまで御身を守ると誓ったしな」

ある意味殺し文句ともいえる文言に、アンは両手を握りしめる。かつて読んだ、海外作家の王女と騎士の甘い恋物語のような台詞だとつぶやきながら、なにかを想像している様に、ランはたじろぐ。

「ディも立場的には立派な王子様だもんね。騎士かあ、格好良いなあ」

ひとりで楽しそうにステップを踏む主人の想い人へ何を考えているのかとランは苦笑を洩らす。

そこにデイハルドがむっとした顔をして入ってきた。

「ラン、なにを言った」

戻ってきた小さな盟主がふたりの間に割り込んで奴隷を見上げる。独占欲の塊と言われたばかりのデイハルドがランを糾弾する。よもや、と邪笑みを浮かべつつある中、アンが王子様！と聖を抱きあげた。

目をぱちくりとして首を傾げた聖だったが、状況の説明を受ければ顎に指を添え、目を細める。

「ほう、アンは僕に王子役を所望するのか」

ならば、と地に降りたデイハルドはアンの手を取り、満面の笑顔でこう云った。

「お前がこの先海軍に居続けようとも、海賊となり海に降りようとも、死して屍となったとしても。僕はお前を愛し続けよう。だから僕の所有物だと理解しろ」

ついで、では無いが僕の用件を優先するが良い。

「もう、デイったら。最後の一言で台無しだよ」

うれし恥ずかしな心持で、アンは笑う。

自分を幸せにしてくれるという想いは、ただそれだけで心地よい。視線を合わせ額へ口づけを落とす。それは親しみを込めた思いだ。

「じゃあ行ってきます」

なんとか海兵としての服装を整え、コートを手に取り玄関へと向かう。

接吻の位置が違っだろう。

着替えの最中もメイド達が薄布で目隠しを広げている横で、デイ

ハルドは言い続けていた。だがようやく、手だけを握る関係から、こうして触れ合えるまでになったのだ。最初は真綿でも構わない。柔らかく手足を捕らえつつ、じわじわと手綱を手繰り寄せればいい。最終的に身をよじる事も出来ぬ程、がんじがらめにする予定なのだから。

デイハルドは腰に手をあて、頑として仕事に行くと言って聞かない背に溜息を、わざとつく。

「わかった。それならば僕もパーティを欠席しよう。一通り仕事を終えたら会議の席を見に行く余興へと行くとする。諸侯を見物しよう」と誘われているからな」

見物つてなにを。

アンはコートを纏い首を傾げる。ばさりと目隠し布が外されれば、凛々しく立つ海兵がそこにある。デイハルドは将校の手をとり、彼女が望む先へと向かう。

アンは”見学”というまいち、世界貴族の意図が判然とせず、考えていた。

見下すという行為は立体的だと、ここに来て嫌というほど体験しているが、彼らの思考が良く分からない時がある。そういう時は無理に理解せず、そういうものだと思っただけで棚上げしておく方が気持ち楽なのだが、騒ぎが起きれば海軍が動かざるを得ない。

「その時はその時、か」

アンはぱちん、と懐中時計を閉める。

聖に見送りされながら、召使たちが開く玄関をくぐった。

コートをなびかせ颯爽と歩く。

一陣の風が舞うように、その姿は青へ向かった。

ここは聖地マリージョア。

世界政府に加盟する国々が4年に一度、一堂に会し、レウェリー世界会議が行われる。

今回の議長はイルシア王国国王、タラッサ・ルーカスだ。

中にはゴア王国国王も座している。

主に議題に掛けられるのは世界共通の凶事や、対国間での輸出入などの取り決めなどだ。

聖地には今現在、実に100を超える国から最高権力者、乃至ないし権限を預けられた代表者とその従者が滞在していた。

言うまでもないが警戒は厳重だ。大將が1名、中將が3名、將校が200名、諜報機関CPも人数は不明だが人員をこちらに回し、何かが起きる前に対処している。

会議の招待者は世界貴族だ。

名目は世界の治安状態を確認し、5つの海に分かれて存在しているそれぞれの国の交流の為、となっている。がしかし、それぞれの海や国家間の利権が絡む、壮大な陰謀の渦がそこかしこで巻く場、ともなっていた。言うなればこの王達の会議は戦争勃発の危機を孕む、政界の中心地、でもある訳だ。

以前暮らしていた場所ではまったく触れる機会の無かった、どろどろとした政権のやりとりが、表面上穏やかに、水面下ではこれ以上無い苛烈さを含んで行われている。

なぜならここにはそれぞれの国の要人が集まっているわけだ。しかも公文書として公式的な会議事録としても残る。世界中の首脳が一か所に集まれば、些細な争いごとが後に戦争のきっかけとなりうる可能性も含むのは当然の結果だ。

アンは耳に聞こえてくる声音に出来るだけ集中し、だぶって聞こ

えてくる影の囁きを無視する。

基本的に海軍では各国々への直接介入は、原則的には行われない。今、こうやって会議の警備を行っているのは、王達を守るためではない。

世界貴族が住まう聖地にて、何事かを起こそうとする王を静粛させる目的で出動させられている。

ただし世界政府が悪と定める、海賊や反乱分子、今まさに話題に上っている『革命家ドラゴン』が関与する件に於いては即時介入が認められていた。

革命軍が数年に一度しか門が開かれな、聖地への扉が開かれるこの時を、黙って見過ごすわけが無い。

彼らの目的は”世界のあり方を変える事”だ。天竜人に手をかけたところで、五老星や役人たちが世界を回している現状を知っていれば、無闇な血を求める事はしないだろう。だが革命軍と一枚岩では無かった。母体組織にはいくつもの支援団体が付いている。ざっと調べてみると、その中にはぼつぼつと過激派が存在していた。ここでどう動いてくるか。革命軍のお手並みを拝見とばかりに、アンはある意味、楽しみにしていた。過激派のひとつやふたつ、きっちり掌握して上手く手綱をとらければ組織など動かせないともいう。

もし何か、予定通り事が起こればこちらも全力で阻止すればいいだけの話、だ。

革命軍の動きは最近頓に活発化している。

世界には多くの、天竜人を真似て国家運営を行っている島があった。

例をあげればアンが暮らしていたドーン島、ゴア王国もそうだ。

中央、中心。

権力と言つ美酒を知り離れられなくなつた者達にとって甘美な言

葉だ。

富は海の水とよく似ている。飲めば飲むほど喉が渇く。乾いていと知らずに、飲み続ける。

模範すること。

憧れだけで済めばいいが、大抵はそこで終わらない。

人々はいつか気付く。自分と周りの差異の理由を知り、なぜなのか、と。

身近な周囲だけでは無く、遠く離れた場所で起る出来ごとに、ふと疑問を思い起こす瞬間が。今の世界の形に疑問を抱き、知ろうとする動きは既に始まっている。なにも特別な素養が必要な訳ではない。なぜ知らずにいたのだろう。周囲を把握する、きっかけは些細だ。

議長であるイルシア王が危険性を説く意味をどれだけの、ここに同席する人の上に立つ者達が理解できるのか。

この作られた箱庭の現実を認識している王達がどれだけいるか。そもそもここに集う王、達はその国だけの王だ。世界政府のように広く浅く世界を見ている訳ではない。己の、国、その利益を優先するのは人としてごく当たり前の行動のように思える。

護衛として入室を許されたアンも表情を無にしながら、この場に集まった選ばれし者達の話聞いていた。170を超える加盟国がある世界政府加盟国だが、この王達の円卓会議に出席できる人数はたった30名程だ。

100を超す諸侯、これはデイハルドの言からだ、それらの欲望具合を見るのも一興という。

確かに世界貴族は世界の中心に立っている。世界にある多くの国さえ、天竜人からその土地を治めよ、と命じられ青海の諸侯が下々

民を集約している、と解釈していた。

だが誰も気付いていないのだ。

わざわざ命じられなくとも、己達は以前よりそこに住まい、営みを行っていたという、ただそれだけの事を。

革命軍の行動をアジェーション、という。

主な意味はそそのかす事、扇動、だ。

しかしもう一つ意味がある。

社会運動で、演説などによって大衆の感情や情緒に訴え、大衆の無定形な不満を行動に組織する事。

そう、反乱、だ。

不満を煽りくすぶっていた火を業火に変える。

どちらの陣営も等しく、死者を出す。先導者はドラゴン、大火事の日に初めて会ったルフィの父だ。

世界的犯罪者の父を、これで共通して持つことになっちゃうんだよねえ。

会議の様子を見ながら、アンはため息をそつと落とす。

父親が悪名にしろ偉大な功績を残して死んでしまった後、遺された子供がどれだけ思い悩むか、大人達は知らない。子供になにが分かると言っただろうが、子供は子供で様々を考え、傷つき乗り越えている。大人よりましだと言われるだろうが、子供には子供の苦労もあつたりするのだ。

その点を義祖父は気付いてくれていた。

子供たちを守るためにどうすればいいか、を考えてくれていた、
と思い…思う。たぶん。

そうこうしているうちに王達の質疑応答が活発にされるようになっていた。

その中でも目立っているのがドラム王だ。投げやりな、人を小馬鹿にしたような発言を繰り返している。

なんでも革命家に惑わされるような国政はやっていないらしく、他の国のような憂いは全く感じていないのだと言い切っていた。

ならば昨年医療大国と呼ばれた貴方の国から、多くの医療に関わる人々が追放された件について、それは良い政治と言えるのか、問い質してみたかった。

お陰で海軍の医療系人員が増強され棚からぼた餅状態だったのだが、彼を王として見上げなければならぬ民達の心情を慮れば安らかなではないだろう。国には王室が抱える医師20名しか居ないというのだから。

その言に抗議したのはアラバスタ王だ。

砂漠の国の王は民から慕われていると聞いていた。良王に恵まれた国はそれだけで幸いだ。それでも問題がひとつもないかと言われれば、否と言ふべきだろう。

この砂と太陽の国を標的を定めた人物が居るのだ。砂鰐、アンはそう呼んでいる。

争いの種から芽が芽吹こうとしていた。けれど伝える事は許されるのだろうか、言葉を呑み込んだままだ。夢が教える未来には、弟の姿を見た。そしてもうひとり、世界に住む人々から追われる存在となった人物の背もそこにある。

全くの対比だった。太陽と砂の、そして閉ざされた雪の、国。ふたりの王が対する様は、有智無智三十里という言葉通りに見える。

ただこの席でアンが声を出すのは得策では無い。様々な意見が飛

び交う会議を、一步引いた視野で眺めていた。

海軍を含む世界政府は土鍋のふただ。

余りに正義に固執するがため、世界を現状のまま持続させようとするが故に、蒸気が吹き出る穴すらふさいでしまっている。

これではいずれ下の鍋が割れてしまいかねない状態だ。鍋は人々を支える世界とするなら、その耐久力も限界に達するまで秒読みとなっているだろう。

やろうとしている事は分かっていた。かつての世界でも歴史として刻まれているからだ。

ドラゴンはこのふたを力任せに開こうとしている。

それもまた一つの方法ではあった。けれど溜まった熱量は大量の死と言う名の蒸気を生むだろう。この流れはもう止まらない。

幾つもの加盟国で、反乱が起き新しい同盟が組まれている。

世界政府を敵とした、まだまだ小さな勢力だが、いずれは大きな流れを作る力だ。

それすら世界政府の要人たちにとっては予想の範囲内なのだから、どこでドラゴンが動きを見せるのかが楽しみともいえた。

変わって海賊は鍋に穴を開ける存在だ。

現状では世界政府から渡航許可を得ていない船舶全てが海賊船と言つ名で一括りにされている。もしエースと共に船出をしたならば、許可を持たないふたりの立場は海賊となるだろう。

それも頭の痛い話だ。

エースもルフィも海軍には絶対に、入らない。

それは父の件もさることながら、兄弟間の約束が大きく緒を引いている。

不意に卓上ベルが鳴らされた。

初日の午前会議が終了した事を知らせるものだ。コートに隠しながらこっそりと時計を見ると昼食時間を大きく割り込んでいる。い
の一番に部屋を飛び出たのはドラム王だった。

バクバクの実という悪魔の実を食べたかの王は、大食漢としても
名を馳せている。

ここ聖地でそこら辺にあるものを口にしようものなら、王であつても世界貴族に罰せられてしまう。そのためドラム国から必要物資が大量に運び込まれていた。大小様々の検査にアンも駆り出された近日を思い出す。

アンも次々と退出してゆく王達の後を追う。それぞれの出身国から王が来ていた場合、優先的に護衛に付かされるのだが、アンはデ
イハルド聖の名を借りてそれを蹴り倒していた。

理由はふたつある。

それは大火事を起こした国王などに話しかけられなくなかったのがひとつ。

もうひとつはアンが世界貴族の寵愛を受けているという、噂が広まりつつあったからだ。

流したのは当の本人だろうと推測してはいるものの、尻尾切りしたよう
で辿りつけなかった。これを首を真綿で閉められるというのかと、実体験させられている最中だ。

そのせいもあり、気軽に同僚達と話しすら出来ない状態だった。誰も
がアンの、言動に耳を済ませている。CP9のフクロウの口についていたチャックが心の底から欲しかった。

海兵の詰め所で午後からの持ち場を確認する。

「…お疲れさん。どうよ、様子は」

「今のところ平穏ですね。各国の王達も、多少は内緒話しているもののいざこざは起きていません」

それはなにより。

急ごしらえとはいえ、一件の屋敷を仮設本部とし部屋に座る大将がアイマスクを下げてうとうとし始める。

「だーれーか」。青雉大将のやる気、どこかに落ちてませんか」

「無理だろう」

「そうね、無理だと思うわ。ヒナ同感」

「いや、そこまであからさまに言わなくても」

最初に毒ったのはアンだが、直下の部下に言われては身も蓋も無くなってしまうかと思う。

いつもは下士官達が行う作業も、この場所では将校が行っていた。そう、ここ聖地に足を踏み入れるには一定の階級が必要なのだ。聖地へ駐屯する一軍の殆どは青雉の部隊だった。

他の艦隊はそれぞれの任務に就いている。いつも聖地関係を受け持っている黄猿も今ばかりは、新世界に入っていてここに来る事が出来なかった。

センゴクが放った鶴の一声で青雉が駐屯することになったのだが、いつものごとく『だらけた正義』の主張が半端無い。

ヒナ中佐、スモーク少佐の2人とは何度か顔を合わせた程度の関係だったが、聖地赴任が決定した後、打ち合わせのなんやかんやで親しくなっていた。

なのでアンへの突っ込みも容赦無い。

「あ。悪食が出てきた…ちょっと行ってきます」

ほろりと本音が転がり出る。本部でもドラム王は要注意人物として挙げられていた。理由はいうもがな、悪食、その二文字に尽きる。臣下が必死に止めてはいるようだが、聖地入りした際にこの町を囲

む壁に喰らいつこうとした。

世界貴族の中では面白い能力者として、様々な物質を食べさせてみよう、という話が持ち上がったっているらしい。それもすっかりとアンは青雉に報告している。

幾ら海軍が駄目だと制止しても、海軍無勢がなにを言う。そう言うで一蹴するドラム王だが、アンが間に入れば、世界貴族の住居を破壊した罪となるのだ。

自重せざるを得ない。

「ああ…行つといで」

返事を聞かぬまま走り去った小さな背を、青雉は見る。

「スモーカー、アンを追え。出来るだけなにも無いよう、穩便に済ませろ」

敬礼する事無く、名を呼ばれた男は部屋を後にする。

「大将、ヒナも見回りに行つてきます。出来るだけ穩便に」

「頼む」

その他数名にも同じ事を命じ、対応に走らせる。

アン自身が権力に興味を持ってないと、傍から見てもこれ以上解りやすい人物は居ないと言わざるを得ない。多少の権限は行使しても、必要最小範囲内に押しとどめる。しかし本人が思っている以上に、少女の周りは物騒だった。しかもここ、聖地マリージョアでは特に、だ。

本部があるマリントードでは時々、抱き枕にしている可愛い妹のような存在だが、世界貴族の庇護をうけた人物、と言うだけで王達の目の色が変わるのだ。

世界の中心は確かにこの場所で、世界貴族に目を掛けて貰えたならば、国としての立場も発言権すら他国の優位に立てるのだから、必死にもなるうものだ。

だからゴア王が是非に彼女を護衛としてつけてくれないだろうか、と申請してきた時には久しくどう対応しようか、本気で悩んだ。海軍としては通例に則り、付けざるを得なかったが、自力で何とか蹴ってくれたのを好機と得た。はつきりと言って、今の形に落ち着き、海軍としても実は安堵しているのだ。特に上層部が。

しかしその只中に自ら向かってしまうのは、まだまだ子供である証拠だろう。

何事にも一所懸命なのは分かっている。ただ周りの大人ははらはらとしっぱなしなのだ。

いつもは苦言しか言わないサカズキからも、忠告が届いているくらいだ。

「ぼちぼち、火中の栗を拾いに行こうかねエ」

コートを掛けていたハンガーに手を伸ばし、のそりと動き始める。

35・世界会議（2）

喧騒が生まれていた。

スモーカーは合流したヒナと共に、遠巻きで経過を見守っている。海軍として関わる案件では無い。国家間の摩擦だ。

二人が出て行くとすれば、小さな権威が関わってきた場合のみに限られる。それまでは不干渉を貫かねばならない。

海軍がこの聖地マリージョアに駐屯している理由そのものが、青海の王達が天竜人に害をもたらないよう警護するため、なのだ。運良くこの場に、散策に来ていたなどという偶然があれば動けるが、世界貴族がわざわざ訪れる訳もない場所だった。

とはいえこの騒ぎは予定されていたものといえよう。

悪食こと、ドラム王がアバスタ皇女と接触したのだ。会議の席での憤懣^{ふんまん}は、食事を終えても収まっていなかったらしい。

ドラム王の一行は意図的にアバスタ王の陣営が充てがわれた館の路を通り、待ち構える気満々であったという。やられた以上をやり返す。

当然の報いだと思う者、関わらず傍観する者、それぞれの行動を見定めようとする者。

視線が幾重にも交差する中、卑猥な行為に走ったのはドラム王だった。ただすれ違おうとする皇女に、手が滑ったと手を上げたのだ。青海を治める王と同等の位を持つその家族、皇女であれば目礼だけで十分に挨拶となる。しかしドラム王はそれが許せなかったようだ。

目礼だけとは教育の程度が知れる。そう発言し大きく張り出した顎を反らせ、視線を下していた。しかも口元には余り品の良く無い笑いを浮かべている。

しかし皇女は健気にも、供が上げる非難の声を制し、ドラム王へ謝罪した。

そのまま何事も無かったかのように、にこやかな顔のまま歩き行く。

やや意外であつたのはドラム王だ。思い描いていた反応を返さなかつた皇女に興が削がれたと、大人しく立ち去つた。

ゆつくりとだがヒトの輪が薄れてゆく。一応だが、騒ぎはこれで収束となるだろう。

「ところでアンは見つかったの？」

「おれも探しているところだ。あのちっこいのどこ行きやがつた」互いに方向を決め搜索を開始する。海兵の姿自体は、各国の衛兵と同じく珍しくは無い。

ただ殆どの衛兵達の様子がそわそわとしている。何かを探しているようにも見える行動だ。

「別れて探しましょう。どこかの国に捕獲されでもしたら大事だわ」

同僚のつぶやきにスモーカーも同意する。もしそうなつて居たならば、あきれてものも言えない。仮にも海兵であるならば、万が一、にも無いと信じていたいが、相手はまだ子供だ。

そんなにあの子供ひとりが重要なかと舌打ちする。

スモーカーからすれば、そこら辺に転がっている子供と変わらないように見えるのだ。

誰からもちやほやとされ、いつもにこと笑いかけてくる子供を見ていると、苛立ちが噴き出してくる。ここは公園や遊技場ではないのだ。

いつのもタバコを吸えないのも、むしろくしゃする理由のひとつだが、そんな事はどうでもいい。

子供を見つけるのが最優先だ。
終わってから与えられた部屋で存分と煙を満喫する予定を立て、
雑踏の中に紛れた。

にぎわいに沸く町の、道ゆく人々の中をゆらゆらと歩く長身の男
がいた。

海兵から敬礼を受けながら気楽な散歩をしているように見える。
駆け寄る兵から報告を時折受けつつ、騒ぎがあつた路を横切つた。
目的地は特に定めてはいない。気が向くまま足が向かう先へ進む。

世界会議に出席する各国の王が連れてきた使節団はその国の特色
を見せ、博覧会のようにも思われた。5つの海に点在する国王が聖
地に集まるなど、一生に一度、経験出来たら運が良いと言われる。
ガープやおつる中將も若かりし頃、今のクザンのように警備に向向
いたと聞いていた。

その頃からここにある正義は不変だ。

世界貴族を頂点にし人々の暮らしを定めた、社会秩序を保つため
の規則や常識、ルールという名の思想である。

クザンは様々ある正義を否定する気はない。

その時、その立場によつて形を変える。今後の世界のため、と決
断した苦い過去もあつた。

徹底した正義は時に人を狂気に駆り立てる。

良い例が赤犬だ。以前よりはなりを潜めてはいるが、いつまた行
過ぎる行動を起こすか分かつたものではない。

しかもその抑止力となつていのはたった一人の海兵だ。英雄と
呼ばれるガープを祖父に持ち、実力も順調に付け次世代として期待
されている。

未恐ろしいと思う。

世話になったガープには悪いが、もし海軍から姿を消すならば、この手で始末しようと決めていた。かの存在は余りにも人を惹きつけ、中に入り込み過ぎるのだ。

あのサカズキから娘に何かあるうものなら覚悟しておけと、わざわざ連絡を入れてくる程の過保護ぶりだ。ボルサリーノからは何も音沙汰無いが、一報が飛べば新世界での任務を繰り上げてでも戻って来るだろう。

ガープにも最初言われていた。あれを取り扱うのはなかなか骨が折れる。余り深入りしすぎるな、と。

正義と悪は相反する言葉では無い。
とある事件が起こりその討伐へ向かった、ポートガス・D・アンが語った言葉だ。

そもそも善悪という熟語があるように、『悪』の反対語は『善』だ。

ではなぜ正義と悪、と並び使われているのか。それは意味が明確であるから、だろう。正しい事と悪い事、見て解りやすい。

海軍が正義を掲げるのは、正しい道義、人が従うべき正しい道理とされているからだ。世界政府が提唱する『法』によって、強く形に推されているのも要因のひとつではあるだろう。

人々は自分達を守る盾となる海軍をし正義として見ている。なぜなら長い時間をかけ、やり続けてきたからだ。世界政府は5つの海に蔓延る悪、海賊達を狩り続けてきている。その業績が今の信頼を築きあげていた。

しかし物事には表と裏がある。

その事件は明るみに出ないものだった。

本来ならばCP9が請け負うべき影の仕事だ。

センゴク元帥がなぜその時、彼女を選んだのか謎だった。今ならば予想でしかないが、世界政府が関わっていたのだろうと、言える。大将という椅子に座っていても尚、もたらされぬ隠された情報、それに関わっていた。

傲慢とも言える赤犬の正義を諫めた存在が、不義を放ったのだ。

「これから行う殲滅は、悪と心得なさい」

彼女の傍らに立っていたのはロブ・ルッチだったという。

率いたのはエニウス・ロビーに駐屯する、口の堅い男達ばかりだった。

その日、海へ気晴らしの散歩に出ていたクザンは、このマリージョアにアンが来た初日を彷彿させる風景を見た。堤防に足を放り投げ、ただ空と海を眺めていたのだ。

数日前にセンゴク元帥に呼ばれているとすれ違ったまま、姿を見なかった少女がぼつんと座っているのを、見過ごせはしなかった。何度もぐっすりとした睡眠を提供して貰っている身として、気にならないはずが無い。

明日からは参着する王達が持ちこむ荷物や人員の検閲が始まる。懸念があるならば、出来るだけ取り除いておきたかった。

3日後には聖地入りし、警備の任に就く。シャボンディ諸島の比では無い精神的疲労を蓄積しに行く場所なのだ。わだかまりがあるならば、今のうちに対処しておいた方が良い。

だが話しかけてもふるふると首を振るだけだった。

くるくるといつもは表情が面白いくらいに変わる少女が、放心に近い状態にあればおかしいと誰もが気付くだろう。

「大丈夫、ちゃんと慰めて貰ってきたから」

ひとりにして欲しいと願う少女を置いて、クザンは本部へ戻った。

そして権限を使い、なにがあつたかを知る。

感想としては、おいおい、これはないんじゃないの？だ。

世界政府の厳命にて行われたそれを、14歳に背負わせるには余りにも非情すぎる出来事だった。この件について本人は決して口を割らないだろう。

丸一日以上経って様子を見に行つた際にはいつもの笑顔に戻つていた。

つる中将の言に従い、書類を処理を行う。時折微笑を浮かべ同僚達と話しながら、ページをめくる。

書類無くこの部屋に踏み込もうなら、おつるに洗濯される危険性があつた。若かりし頃のやんちゃを、幾度も見られている相手でもある。適当な提出書類を幾つか制作し、持ってきた事に寝耳に水と言われたが、我ながら似合わないと思うものの、それは仕方のない事だと諦めた。仕事などやればやるほど沸いてくるのだ。本当はある程度置いておき、必要な分だけ処理するに限る。

その時は世界会議の打ち合わせと称し、おつると幾つか言葉を交わしその場を後にした。

クザンは探す。

何もかもを背負いこもうとする小さな後姿を。

姿を見つけたのはスモーカーだった。

黒服の、鳩を肩に乗せた男と何かを話している。

探し回る方の身になりやがれとスモーカーは肩を怒らせ子供の元へ向かう。

14歳といえば新兵としてようやく海兵としての階級が与えられ

るか否かという年齢だ。子供の家族はかの、ガープ中将であるという。祖父の七光で得た階級だろうと噂する声もあった。覇気という力を潜在的に持っているらしく、ちやほやとされている。

いけすかない子供だと思っていた。

輪の中心に自然と入り込み打ち解けてしまう。きつと恵まれた環境で育ったのだろう。

愛されて当たり前、持ちあげて貰って当たり前。軍隊ごっこがしたければ、どこぞで取り巻きを集めて勝手にやっていたらいいのだ。

スモーカーは幼い頃から、苦節を乗り越えて生きてきた。思い通りに事が進んだことなど、数えた方が早い方だ。偶然の産物とはいえ食べてしまった悪魔の実の力をものに出来てきた矢先に、命じられたのは子守りだった。

折角暴れられる部隊への転属が通ったというのに、予定は覆され、前線ではなく、子供の世話をさせられている。

反吐が出そうだった。

世界の王達の茶番劇を見せられ続ける苦痛が苛立ちを生む。

海兵だけに煙草が言い渡されているのも、我慢がならなかった。

さっさと仮設本部へ戻る為に歩く。

「おい、お前何をして……」

スモーカーは最後の句まで繋げられなかった。

ロブ・ルッチが首元に杖を突き付けたからだ。

「なにしゃがる……」

怒気を含んだ声音に、アンが両者を諫める。

ロブ・ルッチは一瞬スモーカーに視線を向けるが、すぐに外し先ほど見ていた方向を再び注視し始めた。

「ケムリン、もう少し待って……」

あと少しで。

「この場所は戦場と化す。だからもう少し自由にさせていて人々の避難誘導をしてくれると助かるのだけれど。」

そう言いながら懐中時計を取り出した子供が時間を確かめた。

「来る…」

それはネコだった。白の塀の上にちょこんと乗っている。

「ただの猫だろうが」

「たぶんあれだと思っただけけど」

質問に答えない子供に、スモーカーは力チンときた。それでも階級は一応ひとつ、子供の方が高い。待てと言われるなら待ってやると、腕を組む。

「ルツチ、わたし向こう側行っ方がいいかな」

「そこで待っている…あと5分だ」

行くなればおれが行く。

アンはその言に従い、頷いた。

「一体何の話をしてやがる」

意味の分からないやり取りが目の前で行われていた。説明を求めても、ぼかした言い方しかせず、言及は無い。スモーカーはぐいと細い腕を掴む。だが見上げてくる目は必死だった。

「あのにゃんこが、爆破するかもしれないの。間違いであればいいのだけれど…でももしそうなら、止めなきゃ」

その声は静かに、否定の願いを含んでいる。

もしそうだったら、その煙の力で火種を包み押さえて欲しい。

こんな場所で猫が変形するなんぞ、お前頭は大丈夫か。いつものスモーカーならばそれくらいは売り言葉に買い言葉、を返していただろう。

しかもこんな、くそつたれな世界貴族を守るため駐軍が行われているのだ。

狙われたくなければ、世界会議など別の場所で開催ばいい。不愉快さが更なる苛立ちを生む。

通りには人が溢れていた。

ここで猫が本当に爆破でもしたら、大事になるだろう。時間が刻々と近づき、そして到る。

当たって欲しく無い願いほど、高確率で現実となるものだ。

もことも猫がうねり始めた。体の中から何かが飛び出そうとしているかのように、突起が飛び出し始めている。

「ケムリン！」

子供が六式の技を使い空に飛び出した。

その場に居た王族とその配下達も何事かと悲鳴を上げ混乱し始める。

逃げる姿は生まれの違いなど関係ない。同じように悲鳴を叫びこけつ転びつして惑う。自分自身の身だけを守りながら、安全な場所まで到達しようとする。

「危ない！！」

水色の髪の毛、子供が人の波に押され、揉まれ危険範囲内に入ってしまった。

子供が軌道を変え地面に降り子供の前に立ちはだかる。

スモーカーは舌打ちしながら走った。言われたとおり、自身の体を煙に変化させ、猫であった何かを捕縛する。

しかしそれは爆発した。

大量の刺のような何かが周囲に飛び散る。自然系の能力者であるスモーカーはこれらごときで傷を負ったりはしない。

子供が子供を庇う。

迫り来る何かを体技を使って叩き落とし、肉体を強化してそのも

ので弾く。

「アイス壁板^{ウォール}」

その一言で、飛び散っていた何かは全て氷の壁に阻まれ、それ以上は拡散しない。

そう青雫大将の力、だ。

逃げ惑う王族達を逆流して歩いてくる姿が見えた。スモーカーは敬礼して出迎える。

「クラァ！！！！ 報告怠るなど言っておいただろうがア！！！！
ひとりで何やってんの！！！！」

「ご、ごめんなさい」

いの一番に直立不動になり詫言を放ったのは子供だった。見える横顔が引きつっている。

なんだこいつ。こんな表情も出来るのか。

スモーカーは意外に思いながらその横顔を見た。年齢を感じさせない話し方をしていたのは、作りものだったと知る。

「…おれに内緒でなあにやってんだ…サカズキさんにおれを殺させる気か。島何個消したいのか言ってみろ」

「いや、もうほんつとにそう言うんじゃない。ちゃんと説明します、油売ってたのも始末書書きます。だからほったひっひやらないれー」

一通りのお仕置きを受けた後、アンは解放されていた。青雫大将は検分の為、弾け飛んだ猫があった場所に立つ。

そこへ軽い身のこなしで男が地に足をついた。赤くなった頬を抑える子供が男の元へ走り寄る。

「ごめんなさい、追いかけれなかった」
「……」

青雫大将の声が近づいてくる。スモーカーは倒れていた水色髪の

子供を抱き上げ、その身の無事確かめた。

「ケムリン、彼女アラバスタ王のご息女だから丁寧に抱いてあげてね」

スモーカーは眉をピクつかせる。王族ばかりが集まっている認識はしていたが、よもやその身を抱えるとは思ってもいなかった。

「あらら。ロブ・ルッチ…来てたのかい」

腕を組み、静かに立つ男の名を青雉が呼ぶ。しかし男は何も答えない。

「どうも能力者が何名か入り込んでいるようですね」
「クルッポー。鳩がしゃべる。」

「お前さんがアンの助っ人か。…豪華じゃないの、この悪ガキがなにを企んでたのか洗いざらいしゃべって貰おうか…」

こめかみをぐりぐりされ、目尻に涙を溜めながら、アンはごめんなさいを繰り返す。

「はう。全部白状します、するからあ」

ついでにこの前の事も吐いて貰おうか。

青雉に迫られている子供をみて、スモーカーは唇の片端を上げた。

「アン、聞かせろよ。おれにもかませろ」

思わぬ人物から名を呼ばれ、目をぱちくりさせた少女を面白そうにクザンを見る。

「さあ…戻るぞ」

大将が声を周囲にかけ、海兵を撤収させる。

だがしかし、道すがら、こめかみへの攻撃は終ぞ終わる事はなかった。

36・世界会議（3）

あるところにひとりの優しい王さまが住んでいました。

その国は裕福ではなかったけれど、国に住む人々は優しい王さまとお妃さま、王子さまと平和に暮らしていました。

ところがある日のこと。

隣りの国の王から助けを求める手紙が届きました。

なんと隣の国に恐ろしい熱病が流行りだしたということです。王さまは不遇を嘆き、その熱病の特効薬である国の宝である木を何本も切り倒しました。たくさんの人が既に無くなっているらしいと聞いていた為、すぐに煎じて飲めるよう用意して家臣たちと共に向かったのです。

けれど訪れた王さまは吃驚しました。

熱病など起ってはいなかったのです。

隣国の王の狙いは、優しい王さまを殺す事でした。

そうしてお妃さまを攫いました。王子さまを殺しました。

隣の国は、隣の国になってしまいました。

「けれどその王子さまは生きていました。革命軍のひとりとなって。頼まれたの、友達に。止めて欲しいって」

海軍仮設詰所で青雉の膝の上であらしを全部、白状させられていた。

最近このパターンが多くなってきたようにもアンは思う。つい最近にも抜群の美兄に口を割らされたばかりだ。海軍に居着き過ぎているような気もする。人脈も軍繋がりが多く、どんどんと埋められる外堀に再度水を流し込むのが精一杯だった。

頭の上に青雉の顎が乗る。

逃げられない場所に確保されていた。

青雉の膝の上という最も恐ろしい椅子で、片腕をしっかりと握られている。

不確かな情報では海軍は動かない。

ではどうしたら良いのか。もっと上から命令が下ればいい。そう、五老星、それに並ぶ権力を持つ世界貴族の誰か。となればアンのつてはひとつしかない。

「で。お前さんの情報通り事が起きちまった訳だが」

ルッチがここに派遣されている以上、政府が動いている可能性が高い。しかも情報は隠匿されたまま、秘密裏に行われている。

「目星はついてるのか？」

「あ。うん、ちょっと待って。…大将、降りてもいいでしょうか」
スモーカーの問いに応える為、一旦手を放して貰い数枚の写真を手に戻って来る。

4枚を机の上に並べ、指で示した。

「名前はニーム。ニーム・ゼンダン。かつてクロトン国と呼ばれていた、南の海出身者。悪魔の実の能力者で、爆発に関する能力らしいです」

「あらら。これ危ないんじゃないの…」

革命軍がこの聖地へ紛れ込んでいる事実を聞いても、青雉を含めた戦隊の官達に動揺は見られなかった。いつもの事だから、だ。青雉大將が乗り込んだ場所で何事も無く事が済み、終わる訳が無い。

『コイツのいる所で平穩を求める方がおかしいってもんでしょう』
ルッチの肩にとまる鳩がやれやれと羽をすくめながら首を横に振る。その視線が向いているのはアンだ。

「うわ、ルッチひとつ。しかもハットリ使って言うのってどうなの!？」

そんなやり取りに、くすくすと下士官達から笑いが漏れた。

「で、その標的は？」

やれやれと背凭れに体を預けた青雉が目的の提示を促す。

「はい」

アンは世界会議の参加者名簿を青雉が座る引き出しから取り出し、最終項にある一国を指し示した。

「この国の王が、二ームの母君を奪った本人です。ただ…」

「ただ？」

スモーカーが疑問符をつけ、口を噤んだアンの次の句を待つ。

「実はその。デイハルド聖の、義理の母に当たる方になっておられまして…世界貴族の問題にも足をつ込む羽目になっちゃっから、出来るだけ個人的に…」

言葉尻が小さくなってゆく。

それでも義祖父であるガープに相談し、センゴク元帥からコング総帥へ話を渡して貰い、今の状況があると併せて説明した。

出てくる名前に度肝を抜かれた官達は多い。

よもやコング総帥の名が出てくるとは思いもよらなかった者達は、あんぐりと口を開いている。

青雉はそんな事だろうと思った、とアイマスクをした。

ロブ・ルッチは世界政府に属する。命令を下せるのは長官であるスパンダムか、それより上の立場にある人物だけだ。

高官を父に持ち、影響力を強める能ある人物も確かに存在している。だがそれは、何年もかけ積み重ねた功績により認められる力だ。誰が想像するだろう。

たった14歳の少女が世界の中枢にノックする扉ほつほつを持っているな

どと。

「なるほど。そわそわしていたのはそのせいだったのね。ヒナ納得」

必要以上に町の中を走り回り、情報収集していた理由の落とし所を見つけ、ヒナは頷く。

要するにニームという革命軍に属する人物を捕縛し、聖の義母を守ればいい訳だ。

ヒナがまとめた情報に、アンが苦言をこぼす。

「それが事情がもう少し複雑で…」

『…それ以上にまだ隠しごとか。喋っちまえよ、サアサア』

「もう、ルツチ。急かさないでよう」

数分の沈黙後、アンが観念して話し出す。

「ニームを聖地へ招待したのが、その母君であるジキタリス様なの」

聞けば聞くほど、部屋の温度が下がっていく。大将が実の力を使っている訳ではない。

「半端ねえな…」

スモーカーが煙草に触れようとした手に気付き、わきわきとし下げらる。

わたくしの可愛いニーム。

素敵な力を得て、この腐食した煌びやかな町へおいでなさい。破壊を望むのなら招待致しましょう。

わたくしの願いを叶えてくれるならば、可愛いニーム。

その力で以って、この偽りの絢爛たる町へおいでなさい。

権家の長を紹介致しますよう。

そうしてかわされた約束がひとつ。

”ゲームをするでおじゃる”

”せっかく世界会議という舞台が整っているのであるから、使わなければ面白くないのじゃ”

”己は革命軍に所属していると聞いているが間違いないのかえ”

”よいよい、ならばとくと聞くがよからう”

”こちらが用意するとある人物を屠れたならば。最大の援助を与えてやるうではないか。ただしみつつの約束と、ひとつの障害を用意させてもらうがね”

交わされた内容を、アンは口にする。

「約束とは、ひとつ、各国の家族である誰か。これは誰か明かされていません。知っているのはこのゲームに関わっている天竜人だけです。後ほどその人物では無かった、とならない為に、割り符が用意されました。半分の内ひとつは、ニーム、止めるべき相手が持つており、もう半分はジキタリス様が所持しています」

「ふたつ、その人物だけを狙ってはいけません。これは余興として組まれたものなのですが、数当てがなされています。示した数が一番近い誰かが勝者となる、という…」

「そしてみつつ、青海の王に危害を加えてはならない。この聖地で行われる会議は、天竜人達にとつてみれば退屈しのぎのひとつなのです。閉会されるとなにかと、いろいろあるらしくて。詳しくは聞くのをやめてしまったのですけれど。…最後ですが、障害はわたしと決められました。デイ、デイハルド聖がねじ込んだのです。尚わたしはこの事実を人に話してはならない、とされていますが、ぶっちゃけこめかみへの攻撃が嫌なので吐いちゃうんですが」

最後のそれは、ここに居るみんなが黙っててくれたら問題なしな

んだけれど。

アンはそこで言葉を切る。

実は秘密が漏れた時の算段もつけられてはいる。ばれたらばれたで、デイハルドの賭け金が倍増する、というものだ。

世界貴族達の間で繰り広げられている、心理戦の模様は割愛した。言う方も聞かされる方も言葉を失うだろうからだ。

遊戯だった。

官達はだれもが訝しんだ顔をしている。

スモーカーに至っては怒りをあらわにしていた。

「んなもんに従うこたあ無いだろうが!!」

怒りは最もだ。しかも相手が決めた取りきめの中で動かなければならない理由が余りにも不当すぎた。

「けれどそれがここの決まりなの。守らざるを得ない」

憤怒の表情を持ち、青雉の前にある机をスモーカーが破壊した。

「狂ってやがる……」

官のひとりが唇を噛む。拳を握りしめている者達も多い。

理不尽だった。何もかもが、ここという場所では人は、塵埃^{じんあい}だった。

「そうだよ。世界貴族ってそういう存在なの。自分たち以外の、この聖地と呼ばれる場所に住んでいる人達以外はどうでもいい」

アンは唇を弧に結ぶ。

「だから、かな。デイがわたしを指定してくれた事が嬉しくて仕方が無いの。たかが小娘と天竜人が言い放ったらしいし。絶対に止めてやろうと思えた。個人的感情になっちゃダメなんだけれど、助きたいから助けるんじゃない。気に入らないから助けるんだよ。そこを間違えないで。天竜人達の悔しがる顔を見る為にやるのが楽しい

んじゃない」

アンは世界貴族達がゲームとしたこの殺戮に、真っ向から立ち塞がる意志を示した。

海軍が”治安維持”に奔走するだろう事も予想に入れられている。

「…これが黙ってた理由です。納得出来ないだろうけれど、理解して貰えると助かります」

「…なにひとりで格好つけてんだ。この馬鹿が。何でもひとりで出来るなんて思いあがるなよ。正義なんてもんはなア多少だらけきってるほうが真っ当になんだよ」

ぐりぐりと、お決まりになったこめかみへの攻撃を行いながらクザンが静かに口を開いた。

込められた感情は零下の憤りだ。

アイマスクを上げ、青雫が部下に指示を出す。

「今聞いた通りだ。お前ら全力を挙げて阻止しろ」

青雫大将の、底冷えするような声に誰もが背筋を正し敬礼する。

そして午後からの会議が始まった。

将校は午前中と同じように、下士官達は平穩を装いつつ各所に目を光らせ警護に当たる。

会議が無事終了し、闇に包まれても海兵達に休む間など無い。

三つの約束の最後、青海の王に危害を加えない、がある為、少なくとも初日は滞在する館を破壊しはしないだろう。そう考えての事だった。

「そう言えば大切な事を聞き忘れていたわ」

二日目朝の集合時、ヒナがアンに問う。

「革命軍の友人にアンは止めて、とお願いされたわけよね。その本体の意向はどうなのかしら。ヒナ確認」

アンも問われてハツと気がつく。そう言えば忘れていた。

「単独らしい。というのは上層部に人脈が無いから」

につこりとほほ笑む顔に、怪しい、と誰もが思う。

「やれやれ、理由なんかが必要かい、ヒナ中佐」

相手は革命軍というテロリスト、海賊と同じ対消滅対象であるのには変わらない。

久々に活動的になっている青雉に各々が物事を進める速度を崩さ
れていた。テンポ

大将がやる気になっている事自体は喜ばしい。だがいつも適当に
やってくれ、とさじを投げる青雉なのだ。

誰もが何か、やりにくさを感じていた。

しかしやらないわけにもいかない。ヒナも指示に異存は無いと各
々が受け持つ場所へと向かう。

会議の会場は昨日にも増して、各国の衛兵が詰めかけていた。

それはそうだろう。この世界の中で最も安全な場所と言われている、聖地で傷害事件が起きたのだ。それぞれの王達は、自らの身を守るため、兵を引き連れ会議の席に着く。

その場に、今日という日は世界貴族が数名入室した。

鈴の音のような金属音が衣擦れと共に王達の耳に届く。

入ってきたのは3名だった。それぞれがシャボンディへ訪れる際、身につけるスーツを纏っている。そして一足遅れて最年少の少年が会議場へ足を踏み入れた。

各国の王達の数名が腰を浮かせる。

「よい、続けよ」

議長の後方に用意された椅子にそれぞれが腰を下ろし、部屋を見回す。

この会議の席に置いて、王達の発言はみな平等だった。論議なども行われる。

たったひとつの例外を除いては。

そう、この世界会議の席でも世界貴族の発言はなによりも重く受け取られる。

もしふたつの国を指し、戦争をせよと命じられたならば、許しが得られるまで行わなければならなかった。

先ほどまで悪態をついていた幾つかの席に座る人物達は、咳払いをし口を噤む。

諸侯――各国の王を面白そうに見つめるのは世界貴族達だ。

「のう、議長。タラッサ・ルーカス。昨日はなにやら町で騒ぎがあったと聞いたアマス。そちの家族は息災か」

ざわりと会場が揺れる。

海兵達は怪訝な顔をする者と必死に表情を取り繕う者、2者に分かたれる。

見聞色を会得している海兵達は、誰もが心拍音をいつもより多く打ち鳴らしている様を聞く。

イルシア王が立ちあがり頭を下げ言葉を選び発言した。

「天竜人の御方々、私わたくしごときの身をご配慮賜り至極に存じます。

この地には海軍大將他、有能な海兵が政府より派遣されており、また私をはじめとする各国の精鋭を引き連れ滞在させて頂いておりますれば、多少の事が起りまして我ら、微塵も不安などございません」

ならば許そう。

宮が紅の唇を弧に結ぶ。

王達は安堵の息をそつと吐く。ここでお開きになれば国毎くにごとの事情に因るものの、自国の利益を追えなくなる、一部も存在していたからだ。

会議はつつがなく執り行われる。

アンは其中でうとうととまどろみと戦っていた。昨夜一睡も出
来ずに朝を迎えていたからだ。若さで何とかなるだろうと思いきや、
眠りへの呪文は古文の朗読力セットに匹敵していた。ふたりの海兵
の陰になるように立ち、ごまかしてはいるが、ここで寝落ちるのは
余りにも危険すぎる。

うあー。なんか瞼がくつついて取れ無さそう。

踏ん張ってはいたが、危険線レッドラインを今にも飛び越えてしまいそうだった。

意識の向こう側ではエースが面白そうに子守唄を歌っている。

半身は思いの外、歌が上手い。カラオケがあれば、是非歌って貰
いたい曲があった。

（アン、起きろ。視えたぞ、ヤツの姿）

（ふえ？ 意識飛んでた）

ハッと気がついたアンが唇を拭う。

がつくりと肩を落とすエースから、言葉が伝わって来た。

（ニームだ。噴水広場にいる）

（はあい。じゃ今から行くねえ）

緊張感の無い答えを返し、アンは瞬間移動を使う。

現れたのは噴水広場の真上だった。いつもは見上げる噴水が斜め
下に見える。

丁度パレードが行われている所だった。楽隊を従え、色とりどり

の衣装を着た仮装者が踊っている。

大勢の人間がうごめく中、たった一人を見つけるのは難しい。だがアンにはそれが可能だった。ひとりだけではない。ふたりの見聞色が、ふたつの線が交わる場所を探し出す。

不意に脱力感がエースを襲う。

（おいアン、マジかよ！！）

このまま下に落ちれば重力と速度に加重が足され、肉体が損傷する。

エースは焦った。

森では獲った肉を焼いている最中だ。一応は安全な場所ではある。ルフイひとりでも、森に生息する動物ならば一人で撃退出来るだろう。

自らの体から意識を手放し、半身に添う。

くそつ、海軍なんかに行かせるんじゃないなかつた。

エースは勝手知ったるもうひとつの体に感覚を集中する。多少窮屈だが仕方が無い。

即効月歩を発動させ、体勢を整え、水しぶきを大きく立てた。

「待ちやがれ、逃げんな！！」

エースは叫ぶ。目標は見失ってはいない。

男はにこやかに笑んでいた。

男は動かない。動く必要が無かったからだ。

母が用意してくれていた大量の宝石を手のひらに掴み取る。

海軍が嗅ぎつけているのは知っていた。なんという幸運なのだろう、

男は天に祈る。

”手を出してはいけない海兵では無いもの”がわざわざ突っ込んでくれたのだ。

これを幸運と云わずになんというのだろうか。
各国の王達は会議が行われている館に全員集まっている。
この場所にいるのは、その関係者達だ。

パレードを眺めていた人々は突如空から噴水へ降り立ち、大量の水しぶきを上げ品が余り宜しくない言葉使いをしながら何かを追いかける姿を見、あっけにとられていた。

しかし昨日の話が脳内で結びつくや否や、大混乱へと陥った。
広場には4本の道がある。しかしそのどれもが、ごった返す。

集団心理に陥った人々は殺到する。

男は、ニームはボストンバックの口を開け、それを空に向かつて放り投げた。

赤、青、黄色、緑、橙、乳白色。ありとあらゆる色が青の空の元輝きながらばら撒かれた。

人々は視野に入った何かを見た。

ほんの一瞬だ。逃げる事を忘れ、色とりどりに目を奪われる。

「生まれる！！ 阿鼻叫喚よ！！！」

「させるかよ！！！」

指先にちりちりとした熱さを感じた。そのまま拳を握り、掌に意識を集中し放つ。

焰が生まれた。

炎に触れた宝石が爆発する。悲鳴が破裂音に混じった。

数日前アンが風を掴んで起こしていた様を真似してみたのだ。発生したのは焰だったが、些細な違いだろう。

「全部とはいかねエか」

つぶやく視線の先には鳩を肩に乗せたロブ・ルッチが佇んでいる。

「礼は言わねエぞ」

『…どうでもいい事だポッポー』

ハトを肩に乗せた男は、何十個と漏れた宝石を鉄塊を纏っただけの状態で、爆破、破壊していた。

食えない人物だとエースは睨みつける。

「そこのお前、おっさん連れてこっち来い！」

昨日アンがかばった少女を視界の端に見つけ、呼ぶ。無闇に脱出するより、中央部に居た方が安全だったからだ。落ちた宝石に触れなければ、だが。そこまで構う暇は無い。

ロブ・ルツチの助力を得ても、全ての宝石を撃ち落とせず白い石畳に紅の血潮がぶちまけられていた。上半身が吹き飛んだ身体、を踏みつけ人々は逃げ惑う。手を伸ばしたのだらう、指が吹き飛び絶叫を上げる女、を押しわけ4つある路へ入ろうとしている姿があった。

中央部は空隙を生んだ。技を放てる、悠々とした空間だ。

「はっ放せえ」

男はじたばたと腕で這って逃げようとするが、背に乗る小さな体が邪魔をして数ミリすら移動してはいない。

アンの体は能力者の力を奪うと云う。嵐脚を脛に当て骨を折り筋を絶てば、肉体的にも動けないだらう。

「母上が助けてくれる…母上がああ」

女々しく叫ぶ男へ、エースはガツンと踵を下ろす。

「うるせエ、黙れ。おれは弱虫が大っ嫌いなんだ。それに…命かける覚悟無くこんなところに来んじゃねえよ、アンの仕事増やしやがって」

腕を組み、冷たい視線を下す。

眼光の威嚇が放たれ、男は気を失った。

「胸糞悪い……」

エースは意識を喪失したままのアンを探しながら、空を仰ぐ。

そうしてつぶやくように吐きだした言葉に、水色髪の少女が心配そうに潤んだ両眼を見上げた。

37・イワレナイ罪

「ねえイワちゃん。本気？」

革命軍の本拠地であるバルディエゴで、アンはかくりと首を傾げる。

傍には革命家ドラゴンや暴君くま、その他の幹部達も顔を揃えていた。

ここは作戦会議室と呼ばれる、いくつもの机や海図マップ、電伝虫が置かれた部屋だった。

「アンちゃんと遊ぶのは私なのー」

「こつち来たら稽古付けて貰う約束、オレもしてたんだぞ！」

子供達が膝に置かれていた手を両側に取り合いながら、睨みあっている。

片や鬼こつこ、片やナイフ投げ、に付き合って欲しいらしい。

「はいはい、ふたりともわたしは世界にたったひとりしか居ないからね。取り合わないで。先に小父さんおじ達の難しいお話終わらせてからにしましょ」

くつついて離れないのは、かつて”不確かな物の終着駅”グレイターミナルで別れた孤児達だ。以前からたまに、手紙のやりとりしていた。

最近はいえ、マリンフォードにはさすがに革命軍所属の誰かが入ってくるのは難しいらしく、任務地や航海先でまとめて貰うのが常となっている。

手引きして欲しいと何度か声をかけられたが、ドラゴン以外からの頼みは全て断っていた。なぜならアンにとってみれば、彼以外の頼みを引き受ける理由が無いから、だ。

「また後でね」

子供たちが納得しないまま引き離されてゆく背をアンは手を振って見送る。

さて、と。

ぱたりとドアが閉められた音を背で聞きながら、アンは子供達が緩和してくれていた場の雰囲気へ、本腰を入れて対応しようと背筋を伸ばす。

視線が針のむしろだった。しかしこの程度でたじろぎはしない。

3大将を両脇に、センゴク元帥から睨まれる方がよっぽど怖い。

ちらりとイワンコフを見るが、いつもの大きな顔のまま笑んでいる。ドラゴンに至っては目を閉じ座したままの姿を取り続けていた。

出されたお茶も冷たくなっている。アンはそれに口をつけ、香りが付けられた茶をこくりと飲む。

ある日義祖父から手紙を手渡された。

艦隊が補給の為に寄った港で、息子から娘へ渡して欲しい、そう言われたらしい。

義祖父が警邏けいろう航海から帰り、暇な時にでも茶を飲みに来い。

誘われて行った先で無造作に放られた封筒に入っていたのがそれだ。開けてみると友人たちからの手紙、とメモ用紙に挟むようにして複数枚の写真があった。

「…おじいちゃん」

「確かに渡したぞ」

「あ、うん」

友人たちからの手紙には日常の生活風景が書かれ、メモには乱暴な文字で日時と時間だけが記されている。

義祖父に尋ねても、この件に関してはもう口を開かないと確信があった。

折角革命軍の本部に招待されているのだから、行くっきゃないだろう。

CPに所属する腕利きでも、本部があるらしい周辺の海流を超えるのに四苦八苦すると聞いていた。波を操る能力者が居るのかと思ってしまうくらい、その海域の流れは複雑怪奇なのだという。

ダメもとでアンはおつるに休みの申請を行ってみた。

いつもならば理由なき休みは却下される。しかし今回はやけにすんなりと通ってしまった。本当に貰えるのかと、おつるに何度も確認した位だ。

そして今に至る、のだが。

今回、呼ばれた用件がふたつあった。

ひとつは世界政府からバーソロミュー・くまへ、王下七武海加入を求めた最終返答期限が通告されたという。その真意について、だ。

なぜ白羽の矢を打たれたかは、大体的見当がついていた。

一般の海兵ならば知らないような事でも、聖地マリージョアへ頻繁に出入りするアンならば何か知っているのではないか。そう思ったのだろう。

だがこれはドラゴンの考えではない気がした。

確かに鮮度ある情報は必要だ。しかしなくてもどうにでもなるのではないか。

あればあった、で状況を把握しやすくなるが別段、重要な話では無い、とアンは思う。

幹部達がどうこう言ったとしても、判断するのはくま自身だ。

軍として動くならば、決定権はドラゴンにある。

今月初めに海軍の中に紛れ込んでいた革命軍の息がかかった人物達の、一斉摘発が行われた。暴君に限って言えば、勧告が出た後だ。動きを掴むも何も、アンが知る中でもかすりそうな物は無かった。

今までならばある程度の情報は手に入っていたのだろう。

海軍側としても全ての機密が、守られているとは思っていない。なぜなら組織として動く限り、人から人へ手渡される過程である程度は漏れ出てしまうからだ。

漏えいを前提に、情報を扱う機関にはブラフ - 偽情報やつたりを混ぜて放出するように提言してある。

手に入れられなくなった不安。これが冒頭の質問へと繋がった、と見た。

それにしても、とアンは義祖父の意味ありげなその時の顔が脳裏をよぎる。

最近頼に『ガープ中将』で止められている情報が意外に多いのではないか、そう思い^な做すようになってきた。義祖父の部隊に配属されている人員もそこら辺の采配に関して、使う時期に間違いは無いと信頼を置いているようだ。

とはいえ。

アンの立場は少なくとも、公的に、海軍本部中佐という、あとひとつ位が上がれば艦を任される階段に立たされている。それもあと数カ月だが、今はまだ責任ある立場だ。こうやって敵対勢力である革命軍の本部にお邪魔する身では無い。

それを丁度休暇なのであれば、行って来い。

送り出せる義祖父mp懷が、大きいのか破けていて底が無いのか判別がつかないのだった。

もつとも。

そんな事を気にしていたら、多方面、七武海や他の海賊達と仲良くなどできはしない。

状況に応じて対応せねば身が持たない、と赤犬の艦で過ごした1年で思い知った。何事もほどほどが一番だ。

「上の考えなんて分かるわけありません。わたしから情報を引き出そうとしても、無駄と言っておきましょう」

聞く方が御門違いです。

すばつとアンは切り捨てる。革命軍の幹部の一人があんぐりと口を開けた。ドラゴンに対し、失礼な物言いはなんだ！！　そう言う口をもうひとりがまあまあ、と押しとどめている。

アンにしてみれば、わざわざ来てあげている身、だった。それなのに罵倒される謂れは無い。幹部としては、こういう場で感情を顕わにするなど、いまいちと言わざるを得なかった。

それに七武海の選定に関し、知っているとするれば中將以上の役職者達、及び、五老星に近い者たちだけだろう。

おじいちゃんに直接、小父さんが聞けば済むんじゃない？

アンはドラゴンにそう尋ねない。

なぜなら義祖父はセンゴクや世界政府に革命軍に関して何も云わぬが、同じくドラゴンにも海軍側の情報を全く言わない。中立をとり続けている。

真意は本人の胸の中だ。

いくら考えても想像や予想でしかない。

個人的な考えでよければ、と前置きしてアンは言葉を続ける。

「考えられる理由は幾つかあるけれど、革命軍の幹部でもあるくまさんを手元に置いて様子を見るつもりなんじゃないでしょうか。革命軍に合流する前のくまさんって凄かったって聞いているし。2億3600万ベリーでしたっけ。革命軍幹部としての危険性が加わっ

て、ほぼ3億の懸賞金がかかっている。世界政府としてはそれすらも利用する算段なんだろうなあとはい思うけれど……理由はさっぱりです。五老星、もしくはそれらの命令を出せる誰か、に直接聞くしかないでしょうね」

ざっと考えを羅列してみたが、腑に落ちない点もやはりある。

外間的に世界政府としては、革命軍を世界を混乱に貶めるテロリスト、と発表した。

世界会議の決定を受けての宣言だ。

幹部達の顔写真を張りだし、海賊達と同じく賞金首とした。

だが海軍内部の動きを見る限り、活発に動いている気配は無い。見つければ対応するように通知は来たが、最重要討伐を命じられてはいなかった。

先だつては黄猿が、余りにも残虐の域を超え過ぎたとある海賊を捕らえ、インペルダウンへ収監したばかりだ。そう。世間から存在そのものをもみ消さなければならぬほどの行為を行う荒くれ者達
の存在抹消が最優先されている。

青海を治める多くの国々の中で、革命軍を会議の議決通り、脅威と捉えているのはまだほんの一部であるのが、実情だった。

ならばこそだ。

今のうちに革命軍という名のつくものを、吟味する。

海軍のように統制された組織ならば、調略してCP9のような位置づけで組みこむ事すら予定されているのかもしれない。

だが今考えていた全て、アンが知る情報だけで推測しただけだ。

本当の事は分からない。

思考にしても穴だらけで、もっと博識な、情勢を上手く読み解ける人物が居たならば。

もつとより良い答えを導き出してくれるだろう。

「はつきり言って、くまさんの方に関してはお手上げです。けれどインペルダウンへのご招待なら、可能です。軍を退役するまでの間であれば、ですが」

「…退役？」

幹部の一人がオウム返した。

アンはこくりと頷く。

「けれど革命軍にはお誘い頂いてもご一緒することは無い、と明言させて頂きます。ドラゴンの思想と、わたしがもつ世界のあり方はまたちよつと違うから。でも…」

につこりと笑うアンの言葉に、誰かの喉が鳴った。

「あなたが私の宝物を利用せず、繋がる糸を断ち切らないのなら、出来る限りの協力はさせて貰うつもりです」

ドラゴンが組んでいた腕を解き笑む。

「あるのか。5・5という場所は」

「ええ、ある。断言してあげてもいい」

「随分と簡単に教えてくれるじゃない。アンアン？」

イワンコフは表情を変えぬまま、小さな顔を覗きこむ。ドラゴンはこの、自らが組織する革命軍の、中核を担う幹部にも己の素性を明かしては居ない。

なのにもかかわらず、ゴア王国で出会ったこの少女にだけは知らせている何かがある。

「不服？」

細められる黒の瞳に、ゆっくりと首を振る。

ドラゴンの思想に共感し、歩みを共にしてきた長さがある時があるだけに、割り込まれた、やきもちの様な感情はあれど、この少女の事を嫌いにはなぜか、なれなかった。

言つなれば久々に現れた恋のライバルとも言つべきだろうか。

「いいえ。そういう不敵さ、好きよ」

ざわめきが起きる。

インペルダウン5・5は実在していた。入口も1か所だけだが知っている。

ではなぜ知ったか。

幼い頃育った、ごみ山でそこから脱出してきた人物から教わったからだ。

ではなぜその人物の虚偽でないと知っているか。

その場へ行った事があるからだ。

「凄く寒い場所だった。雪と氷に覆われていて氷像になっちゃうかと思っただくらい。今なら分かるけれどそこはレベル5（ファイブ）、”極寒地獄”と呼ばれている」

だからその場所に行きつく為には最低、レベル5に入らなければならない。

「ここに入るには懸賞金額1億を超える必要がある…けどイワちゃんは大丈夫だよな」

「ンゝフフ。そうね、問題なっシブル」

ウインクを飛ばすイワンコフからさつと視線を逸らし、ドラゴンを見た。

「目的は聞かないでよくね。準備が整ったら連絡を下さい」

アンはそう言い、革命軍幹部が呆気に取られるのも気にせず扉を押し出て行った。

「本当に信用出来るんですか」

よもやイワさんが…最悪の事態を考えてたひとりが口にする。

「騙されたならそれまでだったってこと」

そんな事にはならないだろうけれど。イワンコフは自信をもって

ウインクする。

「では始めよう」

言葉少なく、必要最小限の言だけを発していたドラゴンが語り始め、幹部達の会議が始まった。

夕闇が迫る丘に立つ背がふたつ、橙色の光を浴びている。

そこはかつて、兄弟の杯を交わした場所だった。何かに迷うと、必ずここに来てしまう。

現れた姿にそれぞれが振りかえり、手を伸ばした。

みつつの影が結ばれる。

「ここで待つてたらアンが来るって、エースが言ったんだ」

「そっか。ありがとう、ルフイ、エース」

ふたりの手をぎゅっと握る。

いつかの旅立ちは近づいて来ていた。確実な足音が響き、前に進んでいる。

あとどれくらい言葉を交わし、心をこうして繋いでいられるのだろう。

過ぎてゆく時に止まれ、とは願えない。

生きている限り言葉を生み続け、心を繋ぎとめようとし重ねる。

世界に偶然は無いのだと言う。

けれど定められた未来にしか、歩いて行けないのだと諦めるつもりはない。

そうではない未来を知っているからだ。

世界は大きな道筋を持っている。

だがそれは強固でありながらも移ろいやすい。軌道修正を行おう

と思えば出来る。

そうである未来を知っているからだ。

終わりの始まりへと、一片が着実に、ひとつづつ埋められてゆく。
どれくらい足掻けるのか、予想もつかない。

エースは選択した。

アンも選択する。

命の使い道を。

それはたったひとつだけ自分の掌に残された自由だ。

「アンとまた一緒に暮らせんの、もうちょっとだな」

「そうだね」

「ジジイが絡んでんのに、そう上手く行くと思うか？」

あからさまな表情が三様に浮かぶ。

無骨な義祖父がケーキ作りまで習って、アンを海軍へ連れて行つたのだ。このまま芋づる式にと考えているのかもしれない。

「おれは海賊王になるんだ！！ 海兵なんてならないぞ！！」

どーんと胸を張る弟に、兄妹はがんばれーと声援を送る。

「揺らがないね。ルフィの夢は」

アンに当然、とルフィが大きく笑う。

強さを求め、強くなると願う。

大切な物を取りこぼさないように。 ” くい ” 無く生きるために。

けれど。

一番大切な宝物はもう、今この手のひらに繋がれていると。

エースは気付いているのだろうか。

灯台元暗し、にならなければいいけれど。

今の心配事はそれくらいだろうか。

アンはすっかり身長差をつけられてしまったもつひとりの自分を見る。

「ん。どうした」

何と答えようかと思案している最中、腹の虫が飯を寄せという催促をたてた。

ぐう。

「晩飯か」

「今日はアンが来るなんて思わなかったからな！帰りに狩りするんだろう？」

聞けば蛇を2匹獲っただけだという。

「だけ、ってことはならないと思うな。わたしはふたりに比べて小食だし」

また食べる量が増えたのだろうか。その体のどこにあの容量が入るのかいつも思う。

「お前が食べなさすぎなんだ」

「一般的にわたしが食べる量が普通なの」

他愛の無い会話に笑みを浮かべる。

3人は太陽が沈む前に家へ戻る為、結んでいた手を解き森へと向かった。

「アーン、おれ焼き鳥食いてエ」

ルフィが放った不意の一言にアンは考える。

焼き鳥かぁ。フーシャ村まで飛んで買ってくるの面倒だよね。

でも水炊きいいなあ。おじいちゃんの好みで最近お魚ばかりだし。

鶏肉いいなあ。

「アーン、それ以上鳥の事考えるなっ。思考止める！！」

「ふえ？」

エースの声に顔を上げると、無数のが羽ばたきが夕暮れ空に黒を広げている。

「焼き鳥だああ！！」

「え……あ。ちょっと待って？」

横で叫ぶ弟の歡喜が遠くに聞こえるほど闇が一気に視界を覆い尽くす。

エースが生きた羽毛の下から半身を救い出した時には、見事に目を回していたという。

大量に追いつ返した鳥達の突撃から数日が経ち、つる中將の鼓舞が飛ぶ中、アンも机に向かい書類を捌いていた。申請書と在庫を確認し、倉庫へ問い合わせをする。物資補給の申請書はいつもの倍、届いていた。

それもそのはず、艦隊訓練が明後日に行われる予定となっており、提出ぎりぎりの今日、持ちこまれる書類が山のように届いていたからだ。

続々と艦船が、マリンフォードに戻ってきている。アンもどこかの艦に乗って、それに参加する手筈になっていた。どこに振り分けられるかまだ未定だ。

先日廊下でばったりと会ったセンゴクから茶でも飲んで行けと誘われ、希望があるならば聞くと行って貰えたので伝えてはあるのだが、それ以降なんの音沙汰もない。

中將の指示の元、事務兵達は淡々と落ちついて束をまとめてゆく。丁度お昼を回り一段落が付きそうになった頃、窓ガラスをこつこつと叩く音に事務員のひとりが気付いた。窓を開けると白い鳩が室内に入る。足首には書簡を入れられる小さな筒があった。

おつるが中身を確認する。

「届けるところを間違えちまつたみたいだねえ」

再度丸められ筒の中に入れられたそれを眺め、おつるは暫し思考した。そしてちよつと席を外すと言い置いて部屋を後にする。

数十分の後アンに出撃命令が下った。

能力者でもあるその人物を押さえるには力量が恰好であると判断されたらしい。

断る理由が無い為、おつるから目的と場所を聞きそのまま飛んだ。服装はそのままだが、本部からも近く海兵が寄港する率も多い。アンも何度か訪れた事がある。 ”カーニバルの町サン・ファルド”だ。

この町はいつでも賑やかだった。踊子の聖地とも言われ、世界中から踊りに命を掛けた者達が集い、劇場が軒を連ねている。

指定された場所は裏街だった。

どんなに栄えている町にも、貧困層が住む町並みが出る。

古びた石造りの家が立ち並ぶ一角に入り込む。人々の顔は表通りとはうって変わり、沈みがちで暗い。正義のコートを纏う将校がこの通りに一体何用なのかと、視線を向けてくる幾つかがあった。

しかし気にせずに通り過ぎる。裏側を住処とする人々であっても、よもや海兵に手を出しては来ないだろう、と思ったからだ。いつもの癖で苦手としている武装色を纏ってはいしたが、出来れば使わないようにしたいところではある。

手にもったメモで位置を確認しながら角を曲がり、階段を上る。

ピアノの調べが聞こえた。

この町にはふさわしい曲だ。かつて聞いた事がある。

ロベルト・シューマン、謝肉祭。有名な曲だ。

しかしこちらの世界では存在しない曲だった。

アンは扉を開ける。

そこは酒場だった。

「ごめんなさい、あの…マスターはまだ来ていなくて…」

海兵が扉をくぐるのは珍しいらしく、緊張した声が戻ってくる。

「あの、その曲…あなたが弾いていたその曲は」

いい曲でしょう？

幾許が張り詰めた空気が緩むと、指で鍵盤を打ちながら、懐かしむように口にした。

これは以前この酒場で働いていた人から教えて貰ったものなんです。

すごく変わった方で。けれどすぐに馴染まれて。

なんでも行き倒れていた人物だったらしい。この酒場のマスターがその人物を助け、介抱したという。

「異国の方のようで最初は話が出来なかったんですが、半年経った頃にはもう」

行き倒れていた。異国、言葉。

鼓動が高鳴る。もしかするならば。

「あの、そのヒトの行き先をご存じでは無いですか」

期待と不安が入り混じった感情が声を震わせる。

仮に、その予想が当たっていたとして、思い当たっている人物であるかは分らない。

「気の向くまま足の向くまま、この海を旅してみると言っていました。だから…ごめんなさい。海兵さんのお役には立てないと思います」

いえ、ありがとう。

アンは礼を述べドアを出る。

その人物はシノブという名だと教えて貰えた。本当はもつと長い名前だったそうだが、呼びにくいなら好きに、と言っていたらしい。出発点がここ、サン・ファルドだったのかは分からない。

異世界迷いこみの定番は無人島だ。かの人の始まりも、そうだったと聞いている。

どういつ冒険をしてきたのか興味あるなあ。

アンの想いはきっと、不謹慎なのだろう。

言葉が通じず、自分が一体どこにいるのか解らない状態なのであれば、どれほどの不安と孤独による狂気に苛まれたか、想像しか出来ない。

しかしアンにとっては初めての、巡り合いになる。

足取り軽く、細い通路を進んでいた。自分もかつてあちら側からやってきたとはいえ、此方側での生活年数が追いつこうとしている。どちらかといえば、旅人を出迎える側の心境に近いのかもしれない。

「思いがけない収穫。どうしよう、久々にわくわくする……けどその前に腹ごしらえ、かな」

香ってくる匂いに、アンは表通りへと視線を投げた。

お祭りの町には様々な肉料理専門店が並ぶ。

その中でもお気に入りなのが、ひき肉を使ったパスタ、だ。その店は生野菜も豊富で、季節の温野菜とチーズを使った炒め物も山盛りで出てくる。

以前兄弟を連れて来た時には、ペろりとその日の食材を全て平らげるといふ、珍事件を残したいわくつきの店でもあった。

指定された場所に近づくほど、ピリピリとした威を感じ歩みを止める。

おつるからはその場に居る全てを捕らえ、エニエス・ロビーに連行せよと命じられていた。

誰が居るのかは知らされていない。だが何となく気付く。
見聞色が使え気配が読めるところという時便利だ。

アンも気配を隠さず通路に立つ。

「お迎えに。エンポリオ・イワンコフ女王様」

護衛についていたふたりが銃を構える。

「キャンデイズ、安心おし。この人は敵だけど敵じゃないの。
言うなれば…そう！！ 秘密の花園への案内人！！！」

見事なプロポーションをマントの中から見せ、イワンコフはウィンクする。

ピンク色のハートがぼわん、と出て来てもおかしくは無い瞬きだ。
身長は男である時とほぼ変わらない。だがそのプロポーションは
殺人的なほど妖美だった。

「ンフフ。どおかしら今は！！ 女の気分〜ん！！！」

「うん、わたしはどっちも好きよ」

満面の笑みを浮かべ、アンは彼女、の名を呼ぶ。

さすがは一国の主を張る人物だ。

連行の際の決まりである、海楼石の枷を掛けつつ現状を伝える。

「ところでね、イワちゃん。たぶん今のままだじゃレベル5に行け
なさそうなんだけれど追加罪状なにが良いいと思う？」

「どういうことナブル？」

問いはもつともだ。

イワンコフは確かに革命軍幹部、ではあるがカマバッカ王国の女王でもある。

危険因子とされはいた。しかしその王国は世界政府加盟国でもあるのだ。加盟国から追従国への格下げも検討されたが、かの国に割く戦力が存在しなかった。それほどまでに、カマバッカ王国の守りは厚く攻め難い国でもあった。故に捕縛しインペルダウンへ収監する理由が足りい、という訳なのだ。

「判例を調べてみたんだけど、大概が王国内部の幽閉って事になってるのね」

簡単に噛み砕けば一生自分の国から出てくるな、となっている。裁判長に監獄行きを決定的にさせるには、いまいちパンチが足りない。

「入れておかなきゃだめ、って思わせる罪状なにかないかな」
いくつか候補が出るが、決定的な一撃とはなかった。顔が大きいとか、両性だとかは革命軍幹部という主だった原因には遠く及ばない。

お昼を食べ損ねた腹がぐう、と鳴る。家に帰ってもどうせひとりだ。晩ご飯を作るのが面倒で、最近はずばらしていた。このままいけば今日も食事抜きになりそうだ。

自分が食べなくても、エースが気が遠くなりそうなくらいがつつりと食べてくれているから良いか。

そんな事を思いつつ、

「あ……」

ぼん、と浮かんだ思考にアンが両の手を重ねた。

「ねえねえ。イワちゃん。わたしの頬にキスしてくれるかな。いい方法、思い付いちゃった」 つんつんと、自分のほっぺをつつきながら、にっこりと笑った。

世の中の人々を守るため、ならばきつと裁判長もそのまま、橋の方に行くがよろし、と通してくれるに違いない。アン的には新人類ニューカマーに偏見は無かったが、一般的には浸透していない指向はなかなか、受け入れられるまで時間がかかるというモノだ。

…これから監獄で増殖…

うつん、まあ、うつん、そういうことになっても少々アクの強い個

性が生まれるだけだから大丈夫、だよ。

ちよつとあなた、何様よっ！ イワ様の、イワ様の清い口づけを
求めるだなんて！！！！

キャンディーズが叫んでいるが聞こえないふりをする。

される本人はさあこい、と待ち構えているのに対し、行つ女王様
が頬を赤らめてくねくねと腰を揺らせている。

「じゃ…じゃあアンアン、いくわよ」

「どうぞどうぞ」

キャンディーズ達の絶叫と共に、後に言われる、謂われの無い罪
が確定した瞬間だった。

38 - プラス +

義祖父と膝を突き合わせていた。

ちやぶ台に用意してあった温かな緑茶も冷めてしまっている。

「…どうしてもだめか」

「…だって、3年っていう約束だったでしょう？」

これで何度目の応答になるのだろうか。アンはそれでもきちんと、義祖父と向きあつて言葉を示した。海軍に入隊し、属した年数は3年を越えた。

実際には3年と半年ほどが、ドーン島を離れてから経っている。

15の誕生日には休暇を貰い、兄弟達と一緒に祝った後、大まかなこれからの鍛錬方法と航海術の確認も兼ねて近場を回る為の出航計画も立ててきた。

後十数日で約束の期限が来る。兄弟達はようやくアンが帰って来ると首を長くして待っていた。

マリンフォードに来てからの月日、それはあつという間だったともいえる。様々な人から教えを受け、人脈も広がった。

森で過ごせば出会えなかった人物達も多い。特に海軍上層部など、海賊の身分で出会えば、殲滅対象以外の何でもないのだ。

話し、心触れて知った。なんら変わらない、と。

職業が海兵であるだけだ。そして海賊にも、同じ事が言える。

どちらが正しくて、どちらが悪なのか。

置かれている立場によって変わってくるのだろう。

そもそも白黒つけて区切らなければならないのは、世界の決まりを作っている政府側だ。

この“偉大なる航海”^{グランド航法}には、海賊が拠点としているからこそ栄えている町もある。犯罪者が隠れ住む格好の地にもなっているが、法

や秩序ばかりでは息が詰まる人物達も出てくる。少なくとも全部の町が当てはまるとは言わないが、自治がきっちり敷かれている島々もあるのだ。

それを悪と断じる事を、アンは良しと出来なかった。

一方通行だけでは無い視野を得られたのは、海軍に所属したお陰だと思っている。

まだ教えてもらいたい事は山ほどあったが、ここで一旦切らなければこのままずるずると、引きずり込まれそうな気もしていた。

その予感間違いでは無い。

そしてその願いは、アンの、ひいてはエースやルフィの身を案じての事でもあると、義祖父は信じている。

義祖父がアンを自らの後継者に推しているのは、たぶん、そういうことなのだろう。

「あのねおじいちゃん。わたし中將の椅子には座わないよ」

「なんでじゃ。このままここに居ればよからう」

皆お前を気にいっとるんじゃ。それにのう、エースやルフィもここに呼び寄せようと思つとる。

今更だった。

エースの意志は既に固まっている。

そしてルフィも17歳になれば海原へ飛び出してゆく。

「なあ、アン。少なくともわしの艦に配属されるまで留まれんかのう」

…譲歩。

義祖父の引き手にぐいつと引つ張られる気がした。

自分達を心配してくれているのは、重々伝わって来る。

父であるロジャーが里親として、義祖父をなぜ選んだのかが良く

分かった。同郷であり秘密を必ず守ってくれる人物として、また自らの代わりに愛情を育んでくれるだろう存在として、信頼していたのだ。

信じて頼る。立つ位置が全くの逆位置であるのに、ここまでの関係になれた両者は一体どんな戦いを繰り返してきたのだろう。

相対する立場でいながら、ここまで意志を通じさせられる相手と巡り合うのはそうそうないはずだ。海賊は海賊として、託す相手ならば他にもいたはずなのに、ガープという人物を父が選んだ理由を探してみる。

例えば副船長であつたレイリー、親交があつたビックラム、白ひげ。

衝突する度に培ってきた信頼と信用。

けれど父は義祖父に打ち明けた。自らの生命と引き換えに、押し付けた。必ず引きつけてくれるという確信めいた自信があつたのかもしれない。

意識で繋がるエースも、言葉に詰まっていた。

断われ。最初はそう言っていた口が、いつの間にか噤まれている。出自のしこりはシャンクスから話を聞いて、大分緩和はされていた。

町のチンピラや噂しか知らない酒場の男達が、どんな事を言おうともエースは手を上げなくなっていた。六式という戦技を身につけ、覇気という使い手を選ぶ才能を開花させてもいる。手を出せばどうなるか、分かっていたからだ。

血に酔ったアンがみせた、狂気を身近で感じとった経験も抑止力にはなっているらしいが、全く覚えていない出来事だった。そのおかげでエースには最近、頭が上がらなくなっている。

けれどエースを支えた一番の要因は、やはりルフィだろう。

アンも散々エースから危ないだの放っておけないだの言われるが、弟はそれに輪が掛かる。まっすぐに育ち過ぎている、とも言えない事もない。

戻って少しは曲がった考え方も教えようと考えていたのだが、自由奔放で捉えどころのないあの性格はあのままにしておいた方が良いでしょう。思うのだ。

まっすぐエースとアンを見えてくれる存在は、弟しかないのだから。

エースとアン、ふたりにとって弟は唯一の宝、だ。

少し穿った見方だが、義祖父もまあまあ、不器用ではあるが愛情を注いでくれている。

「ねえおじいちゃん。わたしがおじいちゃんの艦隊に配属される確率って、20人の中将プラス、3名の大將、また今年もセンゴク元帥がボール入れてきたら、合計24個。24分の1の確率なんだよね。わたし引く自信ないよう？」

ぎりぎりまで海軍に所属するとして考えてもあと2年だ。どう考えてみても、空理空論としか思えなかった。

（エース？）

（おれはそっちに行かねエぞ。ジジイが武力行使してきたら、抵抗するからな）

昔から義祖父は口癖のように、強い海兵になるのだと繰り返してきた。

それはきつと、父とは違う路を進んで欲しいという表れなのだろう。

追われ、いつ死するかも分からない生ではなく、誰かを守り生を

繋ぐ生き様を望んでいる。

（わたしはもうちょっとこっちで経験積んでもいいかなあって思う。出航の時には意地でも帰る…し）

（ジジイの気持ちも分かっているんだけどな。おれには無理だ。合わねエ。本当はお前にも帰ってきて欲しい。泣きじゃくるアンの顔なんて見たくねエんだ）

アンとしてはエースが海軍に所属したいと思うならば、すれぱいと思う。

しかしエースはアンを通し海軍が抱える、散々な矛盾や無理を重ねて泣き倒れる自身の姿を見せてしまっている。その中へ好き好んで入って来る…とは思えなかった。

それにもしも、だ。

海兵にエースがなったとして、その後、胸の内に抱え続ける想いはきっと、彼を苛み続けるだろう。そして海軍というトリカゴから救い主が必ずやってくるような気がした。

海の子は、海へと戻る。眺めているだけではきっと、満たされない。

たゆたう波間に、身を浸すために、手を伸ばしてしまふ。

（本音としちゃ、こっちに帰ってきて貰いたいんだがな。ジジイにべったりなのずりイぞ、アン）

ちらりと含まれた本音に、目をぱちくりとさせる。

なにがべったりでずるいと言ったのか。

もう一度聞き返す前に、エースが思いを伝えてくる。

（まあなんだ。帰って来れねエってなら、そこで待ってる。おれが攫いに行つてやるよ）

低く発せられた声は冗談に聞こえなかった。エースならやりかね

ない。

仲間を集め、あつという間に”赤い土の大陸”までやってきそう
だ。けれどそれもまた面白いなあとアンは思う。義祖父とエースの
ガチバトルだ。にやけた顔をし、想像で楽しむ。

思案して無口になったアンが、突然えへへへ、とめ笑い始めれば、
ガーブはその頬に触れる。

「なにを悦に入っておる。どうなんじゃ」

げんこつで語るのが得意である義祖父があえて、こうして座って
話す方法を選択している。

誠意には真正面から嘘偽りなく応えるべきだ。

「17歳。わたしは17歳になったら海に出る。海軍も辞める。

エースと一緒に果てある海に向かう。それでも良ければ、あと2年
ここに留まる」

それは海賊になるという宣言か。

義祖父の目が厳しく細る。

「わからない。でもこの世界では自由に海へ漕ぎ出す全てを海賊
と称する。ならばきつと、そうなっちゃうのだと思う」

嘘は言わない。

思っ心だけを伝える。

「そうか」

義祖父が足を崩し、冷えた緑茶に口をつけた。

「余り遠くに行くと、守ってやれんのじゃがのう」

絞り出される声にアンは、知ってる、と微笑みを浮かべて義祖父
が胡坐をかくその上に腰を下ろした。

「おじいちゃんの愛情は分かりにくいのが難点なんだけれど。わ
たしも、エースも、ルフィ…もたぶんきつと分かってる」

「ならこのまま手元に居れば良いじゃろう」

「うー、いやまあそうなんだけど。お父さんの事を差し引いても海への渴望を、エースは…わたしもだけど抑えられないと思うのね。ひとりで突っ走りそうだし、放っておけないし」

それはお前も同じだと、突っ込まれそうな気もしたが、あえてそこは棚の上にあげておく。

「あと2年か。短いのう」

げんなりとした声柄が落ちてきた。

「海軍か海賊かの2択しかないってのがね」

革命軍は最初から除外だ。

少なくともエースは、海賊としての生き方しか選択出来ないだろう。散々忌み児と言われ、自分の存在を認められない世界を見て来ているのだ。

海賊王の称号や自由を探しに行くのは方便でしかない。

自分を必要とし、受け入れてくれる誰か、を探しに行くのだ。

もう既に手元にある、と本人は気付いていなかった。余りにも近すぎると見えないのだ。

気付くまで待つべきか、それともひっぱ叩いても既に手にしていると分らせるのが早いのか。

海への渴望欲求に関して、ルフィの場合はシャンクスの影響が大きいのは言つまでも無い。

「おじいちゃん。お手柔らかにお願いします」

「全く、親子共々手を焼かしおつて」
でも可愛いでしょう？

返答はくしゃくしゃと撫でられた不器用で大きな手だった。

全力で引き留め工作をすると宣言されてしまったが、その時が来れば何とかなるだろう。

アンは手のひらにくすぐったさを感じ、笑った。

翌日、義祖父に連れられて向かったのはセンゴク元帥が難しい顔をして座す部屋だった。

そう、海軍本部で最も高い位置にある、元帥室だ。

なぜか3名の大将も同席しており、内心でアンは絶叫していた。

「で、どうなったんだ。ガープ」

アンはそつと武装色の纏いを厚くする。3大将の視線が痛いくらいに突き刺さって来ていたからだ。いつもは直立不動で立つのが軍規に記され、その通りにしていたのだが、今日ばかりは義祖父の後ろへと隠れた。

そして万が一の場合を考える。いつでも飛べるように心積もりしておかねばならないくらい、緊迫感で空気が冷たくなっているように思えた。

「引きとめには応じてくれた。ただし…」

元帥が腕を組む。

「今年含め2年じゃ。それ以降はわしゃ知らん」

おじーちゃん。

そんないい方したら、ほらほら。青雉大将がちょっと凍ってない？

表情を変えず、アンの前に立つ義祖父の袖を引く。

「永久的、では無いのだな？」

「センゴク、こう見えてもアンは女じゃ。嫁入りも考えてやらんとな」

ん？

アンも一瞬顔をしかめる。

一瞬義祖父がなんと云ったのか、理解できなかった。それは誰も

が同じだったようで、ぴたりと動きを止める。こう見えても、が余計だが義祖父の文句で場の冷たさが幾分かとけたようにも感じた。どの国も大概は親の許しさえあれば、大抵は16歳から結婚は可能だ。

「…確かに」

義祖父と赤犬以外は独身を貫いている。その二文字は考えていなかったらしい。

センゴクは相手を問おう唇を動かそうとしたが、言葉を飲み込む。

「…2年、やむを得まい」

唸るようにセンゴクが口を濁した。アンが天竜人のお気に入りを知っているからだ。

何度も聖がこのマリソフォードを訪れ、アンを指名し、町のカフエテラスなどで、多くの人々が目撃してもさほど驚かない程度にはなっていた。天竜人としては別格として扱われている聖だが、密かに一般市民達から仰ぐ存在として指示を集めているとも聞いていた。アンが聖地へ召し上げられるかは別として、2年は貴重な戦力が手元に残る。問題が先送りされる形となるが、今すぐ消え失せる訳ではなくなった。

ガープの説得には応じる姿勢を見せた若き幹部候補生に打つ、次の手を考えなければならぬが時は幾分か稼げはした事に、妥協の意を示す。

革命軍の動きも活発になってきている。

幹部のひとり、エンポリオ・イワンコフを捕らえインペルダウンへ投獄し、暴君を七武海へと招き入れ内部からの鎮圧を行おうと謀略をしかけてはいるものの、世界の情勢は安定しない。

政府から隠せと注文される事件も数多くもみ消してきている。その殆どを過去1年に至っては、ガープの孫である、ポートガス・D・

アンが中枢に入り込み行っていた。精神力の強さはC P 9のロブ・ルッチにも引けを取らないだろう。暗部を知っても弛まぬ意志を持っている。貴重な人材だ。

「では引いて貰おう」

溜息を隠さずアンは手をつ込む。

アンがひとりくらい海軍から去っても、世界の情勢が変わるとは思えない。

義祖父には伝えたが、17になるまでは島に帰ってもひっそりと大人しくしているつもりだった。多少は友人に会いに行ったり、新世界へ遊びに飛んだりするだろうが、海に出るつもりは無かったのだ。

アン自身は海賊、になる気などさらさないし、例えば世間があれは海賊だ、と指さし叫んだとしてもきっぱり否定するつもりでいた。海を渡るのに称号はいらないからだ。

青の海を往けるのは、海軍所属の戦艦と世界政府から渡航許可を受けた商船、或いは未開地調査船、そして海賊船だけだ。

あちらの世界のように、国毎の領海など制定されていない。

世界の基礎を作った20人の王達は海を誰のものでもないとした上で、誰もが平等にこの海を争い無く渡れるように設定された航路を往く許可証を発行した。所持した船とそうでない船が衝突した場合、どうであるかを明確にするためだ。

だがしかし政府の意図はもっと根深い場所にあった。海を往く船を把握し、渡航許可を渡す代わりに税を納めさせ貿易を操ったのだ。それは王達に莫大な富をもたらした。

金銭だけでは無い。近寄らせたくない各地を遠ざける為にも利用されたのだ。

800年前の体系は今も残っている。

維持され世界貴族たちの生活を支えていた。浪費される金銭は全て青海に住む人々から搾取されているが、これを知るのは世界政府内でも一部だけだった。

義祖父がまた今回も膝をつく。

ガッツポーズを決めたのは青雉だった。

ねえ、青雉大将。

さっきわたしのこと、殺す気満々だったのにその身の代わりの早さの理由、聞いてもいいかな？

アンは手にした玉を、胸のわだかまりを込めて青雉へと力の限り、投げた。

39 - オハラの子

オハラの子。

その語句を聞いてアンが思い出すのはひとりの少女だ。

造船技師であるトムが不安要素、と表現したその少女は弱冠8歳で考古学者となった、ニコ・ロビン。

かつて西の海に存在していた世界最大の図書館、『全知の樹』があつた島で暮らしていた人物だ。

今現在、そこに住み生活を営む人々はいない。

エースとアンがこの世に産み落とされた年に、バスターコールを掛けられ壊滅したのだ。その島に住んでいた住人達はことごとく死を与えられ、かつて住んだ事があつた、もしくは一定期間以上滞在していた人物も秘密裏に処理されたと聞く。

世界を真上から見下ろし、無慈悲にも全てを消滅させてしまう殲滅戦が行われたその地には多くの、守るために沈められた本の残骸が今も多く眠っているという。

「...で、わたしになにをお望みでしょう」

執務室で珍しく書類にサインをしているクザンの横でアンは問う。今まで副官としてつき従っていたヒナはアンの異動を受け大佐へ昇格後、艦を預けられ長として初航海に出ていた。

スモーカーはまだ直下に配属されているが、近々どこかの支部を任せようと言う話になっているらしい。

長年、青雉大将の副官をしている人物は、クザンの職務怠慢の煽りを受け新兵の訓練を任せに行っている。

そうしてアンは書類が終わるまで、お目付け役とし青雉大将の副長デビューも含めて、共にカンズメ状態にされていた。

異動と同時に大佐という階級も付与され、名実共に海軍の一翼と

して立てられている。

本人としてはボール引きの日に申し送りが行われたかった為、据え置きと思っていたのだがそうは問屋が下ろさなかった。

そう。

エンポリオ・イワンコフを単独で捕縛し、しかも該当の町で全くの被害を出さず、インペルダウンにまで護送した功績が、否応なく地位を押し上げたのだ。

もしガープの艦隊に配属されたならば、次年度には中將の椅子に無理矢理にでも座らせようとしていたセンゴクの思惑など知る訳もなく、アンは黙々と実務をこなしている。

「そいつのだな…」

ペンにインクを付けながら、青雩がちらりと視線を横に向ける。

「ちよちよいと行方…捜せねエかと思ったんだが…無理か？」

すぐに視線を外されてしまい、アンは小さく息を吐く。

「立ち入った話、聞いてもいいかな」

任務では無い、と悟ったアンが言葉遣いを砕く。任務中であれば、軍人として組織の上役である青雩大將に、このような話し方はしない。だが今は執務室にふたりきりだ。誰に聞かれる心配も無いだろう。

「まあ…なんだ。親友の忘れ形見、みたいなもんでな」

「彼女、が？」

聞けばかつてのオハラ大破壊を良しとしなかったDの名を持つ中将が、必死で守り抜いた少女がニコ・ロビンなのだという。クザンは親友の取った行動の末を見るため、島の外へ逃がしてやった経緯を語った。それ以来CPを使って居所を監視し続けていたのだが、

追手を撒いて姿を消してしまったのだと言う。

「どこかの組織に取り入って、隠れ家にしてるんだろうけどな」
悪意が込められた言葉にアンは次を待ったが、ペンが紙の上を滑り続ける音しか聞こえてこない。

話は以上だと、言葉ではなく態度で示している。

「知ってどうするつもり？」

「どうもしねエさ……」

ただ。危険視されている人物を監視も付けずに野放しにも出来ない？

「あのねえクザン」

航海中は空き部屋が無いからと、船長室が寝起きの場となつてしまい、そのせいで抱き枕化しているのはまだ良しとしよう。引つ越しが面倒だからと、義祖父の家から動かず団欒を楽しみにしていた幻想をぶち壊してしまった詫びとしてもいい。

けれども。

「なんかもう、妹に無理難題を押しつける兄みたいなの、この境遇シチュエーションはなんだろうなって思うんだけど、ねえ。どう思う？」

前任者であつたヒナには、していなかったはずなのだ。偶に休暇が合えば、カリファとも待ち合わせて、3人でどこかしらに買い物に行ったりもしていた。おつるの元で過ごした、1年間、本部勤務で繋がった友人は多い。その際には勿論、愚痴も出る。

女同士であればこそ出る話もあり、羞恥心が勝って耳を塞いだ事柄もあるにはあつたが、そういう関係は全く出てはこなかったはずだ。

青雫も他の大将達と同じく可愛がってくれるのは分かっている。

だが何かが違うのだ。義祖父のような無条件の愛情でも、黄猿や赤犬のような見守るようなものでもない。

この人物に関してはマリィンフォードに来たばかりの頃に感じた、よく分からない気持ちのままだ。

「…無理か？」

ちらりと視線を上げ、見てくるクザンに溜息を落とす。

「じゃない。けど…」

どう答えたものだと、アンは考える。

その人を思い浮かべれば大体の位置は把握しようと思えば出来た。だがあちらの世界にある高性能レーダーのように、完璧な索敵が出来るわけでも無いのだ。

占いのような不確定な未来ではないが、あくまでもここらへん、という大雑把な情報^{もの}になってしまう。

精度的には直に会い、その人物をよく知れば知るほど、確定に分かるが、ニコ・ロビンの場合は手配書の写真しかない。大雑把に、^{グランドライン}偉大なる航海にいるかも、としか現時点では分からなかった。

手を止め、青雉がアンを見る。

「オハラ出身者ならば。彼女が辿ってきた足跡を知れば、求めるものはたったひとつだけだと分かる。クザンも知ってるでしょう。そこで網を張ればいいと思うのだけれど」

数字の訂正をもとめながら、アンは地名を告げた。
はやりそこか、と青雉はアイマスクを下げる。

次の目的地は、太陽の国、アラバスタ。

アラバスタは”^{グランドライン}偉大なる航路”内にある砂の王国の名だ。航路内

中でも有数の文明大国として名が知られていた。そしてそこには”
歴史の本文”^{ボーネクリフ}という石碑がひっそりと眠っている。

大将であれば、この秘密を教えられているはずだ。

何かを思考する時、クザンが眠ったふりをするとアンは覚えてしまった。

青雉大将はやけにアンを手元に置きたがるのだ。

4回目にしてやっと目当ての人材を手元に置けたのだから、喜びもひとしおだったのだろう。共に過ごす時間が増えれば、ちょっとした仕草の意味も知れる。

最近頼に、クザンの来訪が増えていた。自分の部下となった人物を訪ねるのに難しい理由が要らなくなったからだろう。義祖父が留守の時でも、赤犬や黄猿、おつるに加え元帥までもが訪れる頻度が増え賑やかなガープ宅となっている。

かつて理想の家族を視た夢通りとはいかないが、優しくて温かな気持ちにしてくれる人が側に居てくれるのは、素直に嬉しいと思えた。

時々こちらへ泊りに来るエースやルフィと鉢合わせになってしまいそうになる度、肝がひやひやとするものの、その他は平穩無事日々となっている。

ただ命じられる内容が秘密事項を多く含み過激になっていくのが気になっていた。

このまま海軍から離れられなくする算段なのだろうが、アンとしては出ると決めたからにはどんな障害が立ち塞がるうとも、出る気満々だ。

先日などはセンゴクが義祖父と一献交わしながら、近々CP9が機密を追ってウォーターセブンへ潜入するという話をしていた。横

にアンが居てもお構いなしに、だ。

ちよつとそのふたり。

分かつて話してるでしょ。アイスさんにわたしがこつそり告げるとか思わないのかな。

本を読みながら、そう尋ねそうになった。

調べれば分かるはずなのだ。

アンがトムズワーカーズと関係を持っていたと、CPであればすぐに掴めるだろう。

当時はこんな事になると想像していなかったし隠す必要性を感じていなかった。アンが廃船島で飛び回っている姿を目撃している住人も多かったはずだ。

今年に入りアイスバーグはウォーターセブンにある、7つの造船会社をまとめ上げ、ガレーラカンパニーという造船会社を立ち上げた。しかも早々と世界政府御用達の札も得たという。かつての賑わいを取り戻した町の姿は様々な音で満たされている。その音をトムにも聞かせてあげたいと思うほどに、町は息を吹き返した。

彼の腕に惚れ続々と町の内部、そして外部から職人たちが集まってきているという。

さすがはトムの一弟子、託された設計図の隠し方にも工夫を凝らしているようだった。

ちなみにアイスバーグはトムが新世界で生きていると知っている。こつそりとふたりきりになれる暴走列車の倉庫で、定期的に近況を伝えてもいたからだ。

「……ちよつくら行ってくるかアラバスタ」

「クザンは仕事しててください」

アンは書類束を指さす。大半をすでにおつるの元へ送り済みではあるが、それでも次々と溜まってゆく紙束にうんざりとした気分になって来る。

今まで書類仕事をしてきて、放り出したくなつたのは初めてだ。

青雉の部隊に所属してみても分かつた事實は、長であるクザンの逃亡癖を補う為に副官が船の運航までを左右する権限を施行していた事だ。ヒナが艦を与えられ、即日任務につけた理由も納得できる。スモーカーも小隊を率いて、近場の島で暴れているという海賊を取り締まりに出かけていた。

万が一何かが起こつた場合、すぐさま電伝虫で連絡してくる手はずになっている。

実力的にはスモーカーも艦を持ち、部下を率いる立場になつてもおかしく無い力量を持っていた。だが地位に関してアンと同じく無関心である上、軍規違反を繰り返している為なかなか昇格とはならない事情が足を引っ張っている。

アンはそんなケムリンが好きだった。

本音と建前を使わなくても話せる、貴重な友人だったからだ。

よほどがなければ、スモーカーが対処するだろう。

手がつけれないならば、アンが青雉を連れて飛べばいいのだ。

よって部下が頑張つて散っている間、艦長たるクザンは日頃のサボりを挽回出来るまで執務室で監禁状態に置かれる事となつた。

はつきり言つて副官が優秀すぎるのも青雉逃亡の原因となるのだから、困つた話だ。

「行くならわたしが行つてきます。丁度ビビとも会う約束をしていたし、なにより今この部屋に監禁されてるって分かつてて言つて

る？」

「これは任務じゃねえんだ…副官動かすと問題があつてだな…休暇は余つてねえよなあ」

あるんだなあ、これが。

なぜか都合よく用意されている有給をちらつかせる。

おつる中将与本部に寝泊まりした幾日かの分が消費されずに残っていた。責任ある地位に就くと、私的な時間が大幅に削られてしまう。それは仕事柄、仕方が無いと言ってしまえばそうなのだが、この年齢から仕事中毒になるのもご免被りたくはあつた。

中身の年齢をこちらで過ごしている年月と足せるならば、結構な歳になる。丁度働き盛りと言われる年頃だが、17から先、今より忙しくなるのは目に見えていた。責務からは解放されるが、それ以上の責任が肩にのしかかってくるだろう。

生き急ぐ、ではないが限られた時間内でやろうとしている事柄が多いのだ。先日エースとたてた航海予定では半年で”偉大なる航路”前半を通過、となっている。
グランドライン

生きた海棲石と称されるアンが乗り込む船は、船底に同品を敷き詰めたのと同じ状態となる。なので動力さえあれば、風地帯を通る事が可能だった。

風を操る術を会得したアンであれば、風状態でも帆を膨らませる事が出来る。

しかし航路設定の段階で、躓いた理由をどこかで吐露したかった。だがこの愚痴を言える相手が居ないのが問題だった。

そうエースが望んでいる入口は双子岬だ。シャンクスから聞いている、絶景を見たいのだという。ルフィに聞いて、言えば、不思議岬と通過するのは当然とのたまうし、シャンクスに言おうものなら、他の寄り道先もきつと、エースに教え込むだろう。

東の海周辺から双子岬までの海図、そしてどの航路を選ぶかは行
つてからになるだろうが、近海の海流図を幾つか仕入れておいた方
が良いだろう。そして記録指針ログポースを辿つての航海に必要な物資の調達
先も考えておかねばならない。

アンとて”偉大なる航路”グランドライン内に存在する全ての島を把握している
訳ではないのだ。見聞色でそこら辺に島があると感覚で分かったと
しても、どういう島なのか、気候はどうなのかまでは分からないの
だ。

兄弟揃つて冒険が好物という、エースの性格を思えば絶対に寄り
道したがるに決まっている。

今まではもやもやしていた何かの感覚だとしか認識していなかつ
たのだが、ここ最近、”偉大なる航路”グランドライン内にある島々の磁気を知覚
出来るようになってきていた。だから世界を中央で分断する赤い土
の大陸まで突きあたり、初っ端からシャボンディ諸島を目指す事も
出来る。

目を閉じればログに関係なく、見聞色で見回せる範囲内の景色が
浮かぶのだ。

普通は磁気を辿つてでしか行けない一本道をジグザクに、島を選
んで進む事さえ可能だった。

この事実は、義祖父にしか伝えてはいない。

他の者に、とりわけDr・ベガバンクに知られた日には、何日研
究塔に軟禁されるか分かったものではないからだ。

「青雉大将、指令を。オーダーお望みのものを持ちかえりましょう」
その代り。

「ちゃんとおつるさんに書類関係出しておいてくださいね。急

ぎの分、あそこに溜まってますから。あと生卵の一気飲みで朝ご飯摂らないように。おじいちゃんが明後日くらいに帰ってくるので、仲良くしておいてください」

絶対に喧嘩はしちゃだめだと、次々と加わる注意事項に、青雉は柔らかな笑みを浮かべる。

「はいはい、解ったから。お前さんが居なくても気を付ける、だから安心して行つといいで」

青雉は己の横に立つ小さな少女の頭をぽんぽんと叩く。

幼児と言ってしまったって良い頃に一度、そして11歳から今まで、クザンはその成長を見守ってきた。海軍に入隊し、世話になつてきたガープにさされた、忠告も無視してしまうほどに、入れ込んでしまったと言ってしまったてもいい。

珍しい能力を発現させ、今まさに大輪の華を咲かせようとしているこの存在を、どうして手放せるというのだろうか。

この気持ちの落とし所は、まだ決まっては居ない。

ボルサリーノのように一歩引いた立場で手を差し出すような想いでも、サカズキのような家族へ向ける柔らかなまなざしとも違う。

これは。クザンは黒の瞳からすい、と視線を逸らした。

名前を付けてしまうには危険過ぎるのだ。

だから曖昧な態度をとり続け、この少女を遠からず、近からずの距離に置いている。

「お前のじいさんもそうだが…サカズキさんも、ボルサリーノさんも、そしておれも。アンの事が大切なんだ。手の届くところに…いてくれよ」

だがしかし、クザンの声にアンは頷かず、寂しそうに笑むのだった。

数日後、アンは砂の大地に降り立つ。

見渡す限り砂ばかりだ。

ポーンクリフ

”歴史の本文”が眠るサンディ島、アラバスタ王国には独自の歴史が残るほど永い営みが続いている。

その首都、アルバーナには大勢の人が暮らしている。

大きな円状の大地の上に建設された都市は砂に埋もれる事無くあり続け、少量とはいえ空からの恵みある祝福された地だ。

雰囲氣的にはエジプトやシリア、サウジアラビア、に良く似ているのだろうか。

居住する国から2度ほどしか出た事の無かったアンは、その殆どの知識を本やネットに依存していた。分からない何かがあると、キーワードを打ちこむだけで簡単に情報を得られる。

此方でも是非にそういう物を欲したが、無い物ねだりだった。

世界政府は世界が分断されたままを望んでいる。世界が狭まるのを良しとしないのだ。

宿で手続きをする。

王宮に泊まればいいのに、とお誘いを受けたがそうもいかない理由があった。

そう、探し人だ。

まだこの国には到着していないが、滞在期間中に砂を踏む可能性もある。

『明確な所在の確認』

青雉が命じた内容はそれだけだった。接触を禁じられもしなければ、捕らえろとも言われなかった。

「友人の選択の、その先を見る為に、か」

オハラに関しての資料は少ない。調べようと思っても、紙に残っ

ている情報が余りにも無く全く、分からないままだった。それならば、とアンは最終手段を講じる。

世界へなにかあったのか、その記憶を問うたのだ。

世界は容赦無かった。

膨大な量の記憶を得たその日、ずきずきと痛む悩を抱え、訓練中、八つ当たりというなの発散を行ったのは言うまでも無い。

だがそのおかげで、様々を知ることが出来た。

オハラの子、がどうやって生きて来たのかも、全て、だ。

非道ともいえる人の所業により行われた行為で、たった一人で生きなければならなかった境遇は確かに、酷いものだった。しかし同情はしない。憐れんでも過去は動かないからだ。悲しかったね、大変だったね、そう言われたところで、困惑してしまうのは当人だ。

本当に彼女に必要なのは、終の棲家であり、受け入れてくれる誰か、なのだ。

運命というものがある。

超自然的な力に支配され、人の上に訪れる巡り合わせ、を指し示す。もしくは天命によって定められた人の運。どちらにしても定められた路を選ばねばならない。

アンは抗う派だった。導き通りに進めば、望まぬ最後が訪れる。けれどこのまま道なき路を通ったとしても、結果、同じ場所へ続くのかもしれない。逆走すら、孫悟空がお釈迦様の掌から出られなかったように、目論見の中に含まれていたとしても、決して従順しないと決めていた。

なぜなら受け入れそれに従うのも運命ならば、抗うのも運命といえるだろう、そう思っていたからだ。

悪あがきだが、出来る力を得つつある。やらずに後で後悔だけはしたくなかった。

ぱちんと懐中時計を開く。

ビビ王女との待ち合わせ時間までまだ少し間があった。

タンクトップに半ズボンという動きやすい姿だが、この国では少々肌を露出しすぎな感じもしていた。じりじりと大地を照りつける太陽は、確実に肌を焼くからだ。このままの姿ならば数日で真っ黒になるだろう。それでマリンフォードに帰れば、どうなるか。

一番出会いたくないのがサカズキだ。

遊んじよる暇があるならわしが相手になってやろう。などと言いかねない。

運動不足は島で兄弟達と暴れて解消しているものの、赤犬のしごきはまた違った種類な為、出来れば遠慮したいと願ってしまう。

終わればまた、優しい存在に戻るのだが、それまでが恐ろしい。

この間などは3大將戦が行われ、コテンパンにされてしまった。ひとりで3人を相手にするには、まだ力量が及ばない。

けれど相手の実の力を思ったより広範囲で抑えられる感覚を手に入れたのは、思いがけない幸運といえるだろう。

「この国では既に、砂鰐さんが水面下で動いてるんだっただけ」
小さく言葉し、唇をぺろりと舐める。

顔までは知られていないだろうが、アンも名が知れた將校になっていた。だからという訳でもないのだが出来るだけ滞在がばれないようにしなければ、後々の工作が面倒になってくる。個人的な休みで様々な国や島を訪れていても、何か事が起これば名乗り、動かねばならないからだ。

特にアンの場合、デイハルドの影響を受け、治外法権を付与されている。行おうとは思わないが、どこであつても我がままに威を振えるのだ。

露店で衣類を見ると、色とりどりの衣装が並んでいた。

町に行く人々の姿を見ても、ターバンやフードを被り、薄手の長そでが多いように見える。

イメージ的にはそう、アラビアンナイト、のシンドバッドに出るような砂漠の国を彷彿させる服装が多い。

アンも何枚か、色を合わせながら購入した。

首元が締めまり長袖の先が大きく開いた、ウィッチスリーブブラウスに一目ぼれし、それに合うズボンとどこかの民族衣装のような前開きブラウス、そしてフード付きのボーダー柄のポンチョを選び、早速腕を通す。

郷に入れば郷に従え。

ではないが、それぞれの国の文化や食、色彩に触れるのは楽しかった。

それがたとえ、仕事に片足を突っ込んでいた、としてもだ。

荷物を一旦部屋に置きに行き、アンは再び町に繰り出す。

そして王宮に続く道を進んだ。砂漠地帯にも咲く花が、至る所に植えられている。

人々の顔には活気があり、聞こえてくる内の声も穏やかなものが多い。さすがに商人達の内心は金銭まみれだったが、商売人とはどこにあってもそんなモノなのだろう。

町行く多くの人々は、王の気質通り、人が人を大切にしている良い民だと言えた。

しかし、アンはこの国の情報を得るに当たって知ってしまった未来に唇を噛む。

これから起るだろう、最悪に人々は惑い苦しむからだ。

原因は七武海の砂鰐、サー・クロコダイル。

自身の能力を最大限に引き出せるこの国で、望みを果たそうとしている。

まとまりのない繊維を1本の糸に紡ぐように、彼は手駒を集め、組織を少しずつ、布を織るかのように形を持たせ始めていた。

今のアンに手を出す事は出来ない。なぜならば王下七武海は、政府の敵ではないからだ。

一体どうすれば、友人の助けになるのだろうか。

アンは雲ひとつない空を見上げながら、思案する。

40 - アラバスタ

太陽と砂と、風の国、アラバスタ。

延々とこの地に根付く命は、干ばつと闘ってきた。

ごく少量降る、天からの恵みと、位置を変えずこんこんと沸き出る水に支えられて、命が育まれてきている。人々は与えられた水を大切に扱いながら生きていた。

あと数年でその平和が崩れる。

どういう理由で崩れるかは分からない。けれどそれまでに、出来る事はしておくに限る。

友の有事には駆けつけるのが親しき者としての責だと思っていた。ただその頃、住処としている海はここでは無く、新世界であるはずだ。有事の際、気付けるか、がネックと言えるだろう。

アンは王宮に続く階段を上る。

町の中央に建つ王宮からは広く町を見渡せた。宮殿を中心に東西南北に分けられた街並みが広がっている。町に入るための門は合計5か所にあり、それぞれの町を行き来する行商隊の行き来も頻繁だ。

ここ、アラバスタの王が座す洛^{らく}は、砂漠の中にあって眠らない都とも呼ばれている。

この国の皇女、ネフェルタリ・ビビと出会ったのは世界会議の席だ。

かの悪食王に絡まれた後、落とした髪飾りを拾ったのがアンだった。その日は忙しく返せなかったが、翌日出会う機会があったらしく、その時に返却できたらしい。

推測が混ざっているのは、アン自身に記憶が無かったからだ。その日はやけにエースの機嫌が悪く、話を聞きだすにも一苦労だった。

けれどそのおかげでビビ皇女と文通をする仲となり、時々こうして家に招かれるまで良くして貰っていた。

王宮としても身元がしっかりとしている海兵であり、しかも年齢が近い者同士として温かく歓迎されている。

だがいつもは空からの訪問で、今回のように地上からこんにちはーと来るのが初めてだった。

近衛隊とは顔見知りも増えたとはいえ、門番をしているこの人物達とまでは面通ししてはいない。

「こんにちは。わたしはポートガス・D・アン、ビビ皇女との謁見に参りました」

にこやかに訪問を伝えたがしかし。

開門したのは1時間が経ってからだった。

門兵からひんやりとした陰を提供されながら、待つ事すら楽しいように、景色を眺めていた。

遠くに大砂丘が見え、太陽の光を浴び金色に輝いている。

この国に長く住んだ事が無いアンは、その景色を美しいと思った。実際には細かな砂塵が家の何処かしこにも入り込み、肺を犯す元となる。砂漠の中にある家屋は特に、風と共に舞う砂に埋もれ、刻々と姿を変えるうねりの中に消え去ってしまう事も少なくは無い。人々の生活を脅かすもの、だ。

けれど、それでも。アンは広がる景色を美しいと思った。その中にある人の営みが、きらきらと宝石よりも鮮やかな色をして輝いている。

だから待たされたとしても別段、苦痛でも無かった。

程良く門番の兵と仲良くなった頃、不意に後方で鉄門が小さく開

かれた。覗くのは幼い少女だ。

「ビビー！」

「アンー！」

ふたりは駆け寄り、黄色い歓声を上げる。

会ってすぐだというのに、お互いにまた少し背が伸びただとか、付けている髪飾りが可愛いだとか、女の子同士の会話に花が咲く。そうしていれば、ふとビビが疑問を口にした。

「どうしていつもの海兵の姿をしてないの？」

「ああ、偶にはこういうのもいいかな、って。久々の休暇だし、お店を巡るのも楽しかったよ」

だがビビはこんな場所で待ちぼうけさせてしまったのが、嫌だったらしい。

海兵の姿であれば、いつもの通り来てくれてさえいれば、こんなに心配しなくても済んだのに。小さくつぶやかれた思いに、ほほ笑みがこぼれる。アンは膝を折って視線を合わせぎゅっと両手のこぶしを握った友達に、ごめんね、とありがとう、を伝える。

「ううん、わたしもごめんなさい。アンったら名前しか言わなかったでしょう。近衛が止めてたの。イガラムが気付いて本当によかった」

門兵はふたりの姿を呆気に取られて見ていた。

会話からこの、楽しそうに景色を見ていた少女が海兵であり、王女の確たる御友人であると知ってしまったのだ。不審人物は役目として、門から先、通さずを仕事としている訳なのだが、判断を誤ったかと門兵達が視線をちらりと交わし合う。

「そうだわ、アン。パパも首を長くして待ってるの、こっちよ」

空と同じ柔らかな水色の髪の少女がアンの腕を引く。

お邪魔します、と今まで会話に付き合ってた兵達へ向かい、

「大丈夫、ちゃんとお仕事していたと伝えます」

日陰の礼を伝え、狭間から中に入る。海兵である証は、基本、本部から支給される衣類だけだ。帽子もあるが、腕章は殆ど使われない。一番手つとり早い身分証明は、コートだろう。あれには特殊な織り込み糸が使われており、偽物と比べればすぐ分かってしまう。だからその衣を纏っていないかったアンを、海兵だと知るのは難しいといえた。

少女達は中庭を通り、女官が使う細い通路を横切って、王が座す宮殿へと向かう。

繫いだ手の主は柔らかかった。歳相当の、女の子という感じがする。

海兵となり、海での生活が長いアンは、最低限の手入れはしているものの、どうしても疲労に圧されて何もせずに寝てしまう事もままあった。

「ビビの爪、きれいな」

「うん、マニキュア塗って貰ったの」

あちらにいた時は爪が割れないように、透明色を塗っていた。おしやれの為では無く、保護を目的として、だ。

ビビの爪を彩る色は、可愛いピンク色をしている。

「アンもして貰う？」

肩越しに振り返りながら、小さな友人が笑む。

「うー、わたしには似合わないかもしれない……し」

語尾がだんだんと小さくしぼんでゆく。仕事柄を思えば、綺麗に塗ったとしてもすぐにはがれてしまいそうな気もしたからだ。

「じゃあ後でわたしの部屋に案内するわね」

「あ、うん、ありが、とう」

アンははにかむ。女の子らしいおしゃれなど、殆どしていなかったからだ。

クザンから託された件もあるが、この国にいる間はめいいっぱい

遊んでもいいかもしれない。海軍に所属している身を忘れて、ただの女の子になるのも悪くは無い、そう思う。

海軍を離れ、航海者となった後はこうやって会う事すら出来なくなるだろう友人の背を見た。ただの海兵、でもこの出会いは無かっただろう。

ガープ中將の孫という肩書と、天竜人であるデイハルドの影響があればこそ、会えたのだ。個人で積み上げてきた実といえば片手で数えられるほどしかない。もう少し年数が経てば、独り立ちさせようと上層部は思っているらしいが、その時にはもうアン自身が海兵では無くなっている。

握られた手の温かさが心地良かった。エースやルフィとはまた違う、凜としてまっすぐな気質は確かにこの国の王女らしい、人と国とする包容力を持ち得ていた。

宮殿の奥へ進む途中、出会った宰相や全將軍に挨拶をし、執務室で政務を行っていた王へ顔を見せた後は、手紙でやり取りしていた、ボードの話となる。

「すごく楽しみにしていたの」

「手紙にもそう書いてあってもんね。始めて、はいつだって楽しいものだもん」

アンは早速、材料の調達をし始めた。

しかし木材はこの砂漠では貴重な資源だ。おいそれと切る事など出来ない。それならば、と王宮の一切を賄う、厨房の裏口へと連れていってもらい、そこで替わりになる物を探した。大人の胸に届かない背丈のふたりが黄色い声をあげながら走りまわれば、いつもは静かな王宮内が急に慌ただしくなる。

「はいはい、そこのおふたりさん、宝探しは外でやって下さいね」

くるりと髪を巻いた女性にばい、と外へ追いやられても、まだ行っていない場所があるとこっそり示し合えば、死角を利用して潜り込みを繰り返す。

砂漠で滑るボードは薄い板を使う。

元々はオーストラリアで生まれたとされる、サンボードは砂の斜面を板で滑り降りる遊び、だ。

滑り降りる疾走感もさることながら、慣れれば空中遊泳も可能となる。滑空とまでは行かないが、ふわりと身が浮く感覚が楽しめるのだ。スノーボードにも似ているが、必要な道具がボードだけという手軽さも魅力だった。

「この樽使えそう。もう少し削って足止めをつけたら、すぐに滑れるかも」

使い古され黒くなり、半ば放置されていた樽をひとつ見つけた。早速、譲ってもらい中庭でやりがんな槍鎧を借りて、アンががりがり削り削りゆく。

道具の使い方は簡単にだが、トムに教えて貰った事があった。アイスバーグには危なっかしいと言われ続けていたが、職人の、目から見れば知ろつとであるアンの手作業はどれもはらはらとするに違いない。

その様子をビビはクッキーをつまみながら眺めていた。

しかし数十分で見えているだけ、であるのが飽きたのか小さな小瓶を持ちだして来、アンの靴を脱がせ、爪先へ液を塗り始める。

「ビビ、くすぐりたいよ」

「動いちゃだめ、指に付いちゃう」

真剣なまなざしで筆を動かす友人に、今で無くともいいのではないかと聞けば、

「だって、外に宿をとっちゃったのでしょ。お風呂上りに塗りあいつこできないもん」

ときた。

時折、通りかかった護衛副官や王が、なにやら楽しそうにしているふたりの姿を眺めながら通りすぎてゆく。ナツメヤシの葉がさらさらと揺れれば、冷たい風が流れた。

小さな白のトレイにあったクッキーをぱくりとひとつ口に含む。元から湾曲していた板の加工は意外と簡単だった。

凹凸を作らないように、先へ行くほど薄めに削ってゆく。ただそれだけだ。

あとは足を引っ掛けて固定するベルトをとりつければよい所まで仕上げ、アンは木くずをまとめる。

「もうちょっと!」

ビビへ終わったと伝えれば、小指の小さな面をそつと塗っている最中だった。

「ビビ様」

「もう…これで終わり」

夕方前に伸ばしていた学びの時間だと、女官のひとりが促す。いつもは素直について行くのだろうが、今日ばかりは手こずっているようゆだと、引きつり始めた女官の感情を読み取ってアンは苦笑する。

だからという訳ではないが、気持ち良く誰もが王女さまを外に送り出せるよう、声をかけた。

「ビビ、もう少し日が傾いたら行こうね」

「うん!」

戻ってきたのは大きな頷きだった。

その後アンは執務室で休憩中であつた王の元を訪ね、夕方の外出許可を得る。

アンが身を以ってビビを守るとはいえ、王族を外に連れ出すのだ。

本当であれば誰かひとりでも、護衛が欲しい所ではある。

「王は政務がおりになるから行けないかもですが、チャ力さんかベルさんのどちらかが付いてきて頂けると助かります」

お誘いを掛けるとお互いに譲りながらも、最終的に両名とも付いて来て貰える事になった。なぜか王もそわそわと、出かける準備をし始めている。話には聞いていたが、奥様、王妃が身罷ってから、さらに子煩悩に磨きをかけたらしい。

「私の仕事を増やすつもりですか！！！」

仕事を放置し、そそくさと外出の準備を整えているのを護衛隊長イガラムに早速見つかかり、追いかけられてる姿が笑みを生む。

平和な国だった。王を頂きに、盤石の固きに置いた穏やかな国だ。脅かす影はこの国の全てを飲み込もうと、嵐を起こす。

「アン！」

薄青の空を見上げている不意をつかれ、後方から何かが飛びついて来た。

「…ビビ」

確認するまでも無く、いつも以上のやる気を見せ課題を終わらせてしまったという、王女様だ。

「ごめんなさい、わたし、いけない事、したかな」

「ううん、違うの」

首を傾げて心配そうに瞳を瞬かせる友人に笑む。もし今、語る事が出来、未来に起るだろうその計画を未然に防げるならば、どんなにこの胸の痛みが和らぐだろう。

しかし安易に時の流れは変わらなかった。

やろうと思えば出来る。だが行うにも代償が必要とされるのだ。起るべき未来、多くの人々を巻き込んで起こる出来事全て、その因果を背負う誰かが必要となる。

アンは友の身を抱きしめた。

出来ないかもしれないと思うのではなく、必ず来るから。その意志を込めて、抱きしめる。

「違うの、ビビがいっぱい頑張つて来てくれたから嬉しくて。ぎゅーってしたくなつたの」

その瞬間をぱしゃり、とレンズが捉えた。

押したのはイガラムだ。

町に砂砂団の友人が残るものの、友情を交わした人物は遠く、ユバというオアシスを囲む集落に暮らしている。

城内には同性の供は居ても、友は居なかった。

彼女の来訪が決まった時、王女の喜びようと云ったら、お世話する者たちまで嬉しくなってしまう位だった。

客人が持つてきたナイフを借り、仕上げの削りを手伝う姿は微笑ましく大人達の頬をゆるませる。

「ここに足を通して…足ベルトは調整できるように穴を多めに作つとくね。ビビでも滑れるように」

ネジでしっかりとベルトを木に止め、木くずを払う。木樽を使つたにしては良い出来だった。

早速乗り心地を確かめる。

「少し足が突っ張っちゃう」

「わたしの身長に合わせちゃったからね。でもビビもすぐだよ」
身長伸び悩みに定評のあるアンが、ひとり心で涙を流す。

弟にまで遂に、身長を抜かれてしまったのだ。

得意げに胸を張っていた弟がうらやまけしからん上に、嬉しくはしゃぐのが可愛すぎるものだから地団太を踏むしかなかった。

そして太陽が砂の海へと傾いた頃、アンの来訪を聞いていたテラコッタが特製のマフィンを持たせ、見送ってくれた。超カルガモと

いうアラバスタ王国最速の動物と言われるカルーと、護衛隊副官ふたりを伴って町へ繰り出す。

町のはずれにはナツメヤシが立ち並んでいた。

農園には細く長い用水路があり、豊かとはいえないが、細い流れが人々の命を支えている。

砂漠に住む人々にとって欠かせないのがナツメヤシ、だ。僅かな雨でも生き続ける事の出来るこの植物は砂を含んだ強風から、緑を守る柵のような役目を担っている。またその実は貴重な栄養源として重宝されていた。

水が豊富にある地域では余り食べない木の実だが、実は食物繊維やビタミン、ミネラルが豊かなドライフルーツでもある。アラバスタの人々は日々の営みの中で培ってきた知恵を上手く使いながら暮らしていた。

金色の光が砂漠を黒と白に分け、空には薄くたなびくような雲が広がっている。

昼間のように刺す熱さから、からりとした動きやすい熱気へと変わった夕闇迫る僅かな刻に、少女達の歡喜が風に混ざる。

ナツメヤシに囲まれた畑で汗を流す農夫達が顔を上げた。それは大傾斜から聞こえてくるもののように思え、手をかざし橙の光を遮りながら視線を向ける。

目を凝らすと小さな影があつた。それはまるで砂地を泳ぐ魚のようにも見える。

上空には大きな鳥が舞っていた。
それはこの国を守る隼はやぶさの姿だ。

「ああ…ビビ様がご友人と遊んでいらつしやるのか」
「この国は恵まれている。善き王が続くこの国は…」

農夫たちの声は、生まれてきた国に誇りを感じさせる音を含んでいた。

与えられた恵みの土地を、彼らは再び耕し始める。

歡喜の絶叫が黄金の丘に響いていた。

流れる景色は刹那に姿を変え、遠くの町並みが一気に迫って来る。毎年雪の季節には、ボードに行っていたから任せて、というアンにしがみつき、浮遊感を感じたのもつかの間、ビビはその景色に目を奪われていた。

大砂丘をベルの翼で登り、今までとは違う視線で王国を知った。

高い壁の向こうには緑の畑が広がり、視線をゆっくりと動かせば商隊なのだろうか。率いられたラクダの列が見える。

王国を包む砂漠は人の生活が行われている場所に比べ圧倒的に広大だ。だからこそささやかな営みに愛おしさを感じるのだろうか。

友が暮らす川の向こう側にある、オアシス、ユバ。

この国に住まう人々が父を支え、王国を形成している。

「人が国、いい言葉だね」

聞こえてきたそれは、父王が良く口にする言葉だった。

「でもね人はすぐに忘れちゃうんだ。こつこつと積み上げる事の大変さを」

だから既にあるモノを、奪おうと画策する。

誰かが頑張つて、頑張つて、作り上げてきた成果を奪っても、その人から奪った段階で、砂の上に建てられた我城になってしまうのに。奪い、掌中に収めた興奮からなのか、それに気付かない。

「信じていてね。誰もが疑いを持ち、もう駄目だと諦めたとしても。信じる事を、諦めないで」

そうすれば必ず、合いの手が入る。わたしも必ず、駆けつけてみ

せるから。

意味なんて分からなくてもいい。

聞こえた囁きに、頷く。

ほんの少し年上の友人が語った言葉を、ビビは胸に刻んだ。

その夜はささやかながらに開かれた宴が催された。

王族だけの食卓では無く、近しい臣下やその家族をも交えた立食だ。

近海で採れた魚介類が豊富に並べられ、厨房が力んで作ったという湯気立つパスタも数種類あった。砂漠でも力強く育つ、小ぶりのトマトをソースに使ったものと、山羊の乳とチーズをふんだんに投入して作られたスープパスタ。揚げ物や乾燥野菜を使ったマリネなどに舌鼓を打つ。したじつみ

「ねえアン、明日もやりたい!!」

ビビは事その他、サンドボードが気に入ったらしい。アンから譲られた後、小さな砂丘に登っては日が暮れきるまで乗り続けていた。

「そりや毎日乗ったほうが上達はするだろうけれど」

そんなに頻繁に外出すると、近衛達が大変になってしまいかねない。
うー。

ビビが悩み上げる声を出す。

「それに明日は高名な学士がいらつしやるのでしよう」

それもわざわざ航路を変え、とある論文を提出したビビの為にやってくるのだという。

「…ねえ、アンも一緒に」

「お邪魔…にならないかな。ビビが専攻しているその文学、わたしには難し過ぎるし」

ある程度の基礎知識はあれど、専門的な語彙が出てくると全く分

からなくなってしまう。

さらにビビに会いに来るというやつてくる学士は帝王学についても著名な人物だったはずだ。王までもが受けてみてはどうかね、と誘ってくるが、アンとしては受ける気などさらさらなかった。

なぜなら人の上に立つつもりなど無かったからだ。

資格が無い。

生まれに関しても、義祖父の守りが無ければ今頃、捕らえられいただろう。

もしくはオハラの子と同じく、逃亡生活が待っていたか。

中將になれば。

世界政府が手出し出来ない位置に潜りこんでしまえば。

それはとても甘美な誘惑だ。だが受ける事は出来なかった。

アンはビビと好きな物、嫌いな物をビビと取り変えながら食事を楽しんでいた。しかし、ふたりの口にそれぞれ、苦手な食物をテラコッタにより突っ込まれるという、涙目の事態になったり。白乳色の飲み物を山羊のミルクと間違って飲んでいたり、やくぜん躍然とした夜が過ぎてゆく。

「ねえアン。唄って。約束してたでしょ」

「んー。いいよう。唄う！」

上手くないけれど、それはごめんねー。

前もっての注意を明言し、息を吸う。

伸びやかな声は満点の星空に吸い込まれてた。

La、から始まる悠然な調べに、誰もがそちらに視線を向ける。

この世界では発せられない言葉の羅列だった。アンにとっては使い慣れ親しんだ音だが、こちらではまだ聞いた事が無い。

この地に眠る石碑に刻まれた文字は確かに残った。しかし発せられる音は忘れられてしまっている。ただあちらで使われていたとある言語に、歴史の本文はそっくりだった。^{ボーネクリフ}そして今、アンが歌っているこの歌が、そうだ。こちらの世界でこの発音を知っているのは、アンが把握している限り、シノブという名の人物しか知らない。もしかすれば父と旅を共にし、ラフテルに辿り着いた仲間達ならば聞いていてもおかしくはなかった。

かの人は庇護無く放り出された未知なる場所で、どういう思いをしているのか。

多くを与えられて生まれたアンには分からない。けれど。けれど。

出会いたいと願うのもまた確かな願いだった。

語られる音の葉はゆるやかな旋律の中で踊る。

何処までも続く世界に手を伸ばし。その先を見つめるあなたの瞳をその横で眺め。

ここにはもうあなたを引きとめるモノが無く。遠く旅立つあなたをいつまでも見守っている。離れられないここで。

わたしはここにいます。路に迷い始まりの地へ戻って来れるように。

まばゆい砂の光を集めて、あなたへこの詩と共に届ける。

ここで交わした約束はいつの時を越えたとしても。

この胸で生き続けいつか果たしに戻って来てくれるその時を待ち続ける。

「目を閉じた向こうに聞こえる様に、嬉しい事も、悲しみさえも、全て優しさに包みこんで風に託すよ……」

声は星空の中へ静かに消えゆく。

41 - 交差する路

小波が聞こえる。

アンは香水の町、ナノハナに来ていた。

町よりも少し離れた海岸線、そこで海に触れ今に潜る。

続く青が伝えてくる映像はここでは無いどこか、だった。

水がはねる音が波の中に飲み込まれてゆく。

標的はいずれ、この地に至るだろう。けれどいつかは分からない。
ここ”偉大なる航路”^{グランドトライン}は安定気候が続く海では無いからだ。

「どうしようかなあ」

休日もあと残り1日と終わりが迫っている。

本当は一度戻って書類の溜まり具合を確かめたかった。休暇を切り上げて帰り、家でゆっくりとくつろぐのもまた一興であるからだ。旅行から帰った足で大学に出向いた日、余りの疲労で何度も倒れそうになった事があるのだ。それからもう二度とやるものかと決めた経験の裏打ちもあり、本当は家に帰りたかった。

すぐに宿を引き払えるように、荷物はまとめ終わっている。来た時より衣類が多少増えたものの、手荷物は最小限度にとどめていた。

今日の服装は七分丈の前結びをするチヨリに、アラジンパンツ、ターバンを巻いた出で立ちだ。意外とターバンの使い勝手が良く、気に入ってしまった。

チヨリは大人用しかなく、後姿を見れば、多少、男っぽくはあるのが玉にきずだろうか。

エースであればちゃんと所定の位置に結び目がくるのだろうか、アンの場合は丁度お尻の下に来てしまっていた。

泣かないっ

胸なんかなくても生きていけるっ

申し訳ない程度にも無いぺったんに溜息をこぼす。

背丈といい、胸といい、育って欲しいと思っていた個所は、全くと言っていいほど発育不良だった。これはある意味、女性として生まれた身として、由々しき事態となりつつある。

胸なんてない方が楽だぞ。

ダダンも動きにくいって言ってるし。

向こう側から聞こえてくる声に、年頃の乙女には必要な部位なのだと呼びつつ、アンは手の甲で目尻を拭い、空を見上げた。広がる青は快晴だ。

報告も休みが終わってからで構わないだろう。なにせ、これは私的な休暇なのだ。仕事とは一切関係ない。青雫が首を長くして待っているのは分かっていたが、実はアンも彼女に並々ならぬ興味があった。

そう、オハラが悪魔、と呼ばれ、追われ続けている人物に。

ずっと前、トムがまだウォータセブンに居た頃、見せて貰った手配書の顔を思い浮かべる。当時、彼女は8歳の少女だった。あれから15年、年齢も23歳になっているはずだ。容姿も大分変わっているだろう。

クザンから個人的に頼まれた用件は、所在地の確認、だ。

そうなれば報告する言葉はたったひとつ、現在”グランドライン偉大なる航海”

内を航行中、となる。

これから1年間、アンも青雫の副官として、山のような仕事を捌かねばならない。

ニコ・ロビンがこの国へ到着するのを見届けるまで居続けるのは

物理的にも無理だった。

仕事を引き継ぐにしても、どこら辺に居るのか、位の目星が無ければCPでも追えない。

青雩経由で依頼する事になるのだろうが、その作業も此方側に回って来そうな気がしていた。

「とりあえず…やってみましょうか」

目を閉じて感覚を広げた。視野の先へ、風と水に誘われるまま、意識を伸ばしてゆく。

これだ、と教えられたのはキャラベルだった。

「へえ、珍しい。レドンダだ」

普通キャラベルはラテン帆を使って横風重視の構成となり三角形になっているものが多いが、レドンダは四角帆が使われ、追い風の恩恵をも受けられるようになっている。

船員はそんなに多くは無い。10名程度だろうか。

旗は黒、海賊船だ。

これならば霸王色を個別に放ち、ニコ・ロビン以外を眠らせた後ゆっくりと対面出来そうな気がした。

どうせ海賊船だし。

そういう思いがふと出てくる。ここ近年、海軍として海賊船を狩り続けていたせい、黒い旗に対して力を振るう事に戸惑いが無くなって来ていた。シャボンディでも出来るだけ殺生をしないよう、生きていたければ大人しくしているように海賊達へ言い渡している。けれど抵抗には力を用いてあしらわざるを得ない。

命に対しては変わらず尊厳を持ち続けている。

黄猿、赤犬、そして青雩と続く教育の賜物なのか、アン自身も余り良い傾向ではないと思いつつも、命を奪う行為を受け入れてしま

っていた。

目標物が明確でない場所への移動は、能力が不発の終わるか、世界のどこかへと放り出されるかの二択だ。失敗に終わるならまだいい。以前の実験時、インペルダウンへ飛ばされてしまったのには涙が出た。しかもレベル6、最下層だ。監視用の電伝虫に発見して貰うまで、数多の視線に晒され続けた。あれを生きた心地がしない、というのだろう。

今ならば少しは対抗出来そうだが、当時、といっても4年前は覇気も弱く、針のむしろに真っ裸で跳び込んだような状態だった。出来れば二度と、行きたく無い場所ではある。

呼吸を整え、船の姿を思い浮かべる。

たゆたう青の光が反射する海原、浮かぶ船。

掲げる黒い旗の海賊旗。

そして会いたいと願う人物の顔。

浮遊感が生まれる。

風の匂いが変わった。

そう、柔らかな日だまりと潮の匂いだ。

目をゆっくりと見開く。

眼下に一隻の船が青の海を進んでいた。

上空から見る景色は見知らぬ場所で、心がとくとんと楽しげに波打った。重力に従って落ちてゆく体を捻り、足を海へと向ける。

次の島は…

月歩使い体を空に浮かせて遠くを見る。

「運命ほつる町、フォレミア」

話には聞いた事があった。

進む道に迷ったならば、その町を訪れ、もう一度立ち止まった場所からどうすべきなのかと自分に問う場所であるらしい。占い師たちが集まっている町、でもあるらしく様々な怪しい店も軒を連ねているという。

「定めに導かれる、か。我らが弟の周りはいろいろと賑やかしくなりそう」

触れた未来に振り返る事無く、アンは空を舞う。

このまま進めば、彼女、は砂鰐と確実に出会っだろう。そしてそれぞれの願いを形有るものに変えるため動き始める。

「止めるべき？それとも…」

問いに答えは返って来ない。半身もだんまりを決め込んでいた。今から進む未来を悲観し、悪く考え過ぎているようにも思える。どうせなるようにしかならないのだ。方向を変えるには、それだけの覚悟が必要となる。

友の国だ。

しかし中途半端に関わる方がもつと悪い。

アンは世界の意志に触れ普通は知ることなど出来ない、理を読む。いい事も悪い事も、お構いなしに景色が流れるがごとく与えられる。

全てを救えなど出来はしない。

人の身で、全てを背負えるなどと思うのは傲慢だ。

例えば神様が居たとして、ひとつだけ願いを叶える力を持っている。その願いが今の悲惨な状態にな前に戻して欲しい、だとしても、全てを元に戻す事など出来はしない。いくら時を巻き戻したとしても、その人だけが同じ結果にならぬよう懸命に努力したとしても、周囲の意識が変わらぬ限り、同じ事が起こり続ける。

必ずどこかに違いが、誰かが気付いたとしてもすぐに忘れられてしまっただろう。些細であれば、あるほど顕著に、だ。

あの日、サボがひとりで海に出た日、アンは思い知らされた。未来を知る術を与えられていても、それを完璧に捻じ曲げられる程の力は持ち得てはいないのだ、と。

サボの夢など見なかった。片鱗すらなかった。

だがサボの叫びは聞こえていたのだ。

気付けなかった、その叫びが生きている証として、後回しにしまった。

あのお火事でさえアンが存在がきつかけとはなったが、運命を変えるまでには至らなかった。たくさんの人が死に、不確かな物の終グレイターミナル着駅は燃えた。変えるにはそれなりの対価と、現状という殻を突き破る力が必要なのだ。

だから同じ間違いはしないと自分に誓い、自らの能力が存分に発揮できる出来る範囲内で周囲に関わってきた。

指を銃の形にし、気配を探りながら目的の人物以外を狙い撃ちする。

広範囲、多人数を相手にする場合なんにも考えず力を放つだけがいい。けれど今回は的確に当てなければならなかった。

アンはとん、と甲板に降り立つ。

意中の人物は一体何事が起きたのだと、船内から出てきたところだった。

「こんにちは」

にこりとアンはほほ笑む。

霸王色は船に降り立つと同時に解いていた。

だが視線の先に立つ女性は驚きを露わにしている。

黒の瞳と髪はつややかで、長年逃亡生活を送っているようには思

えない。黒曜石のような輝きには内に秘めた様々な覚悟の色が見える。

追い求める事、託されたもの、背負った苦痛、死の願い。

「そう警戒しないで……という方が無理だよな」

甲板に降り立ったアンは対峙する。青雫が唯一、気をかけ興味を示し追い続けている存在、オハラの子、に。

「初めまして、ニコ・ロビン」

女性の名を呼ぶ。

SIDE ニコ・ロビン

その人物は音も無く現れた。

圧迫感が解放された後、見回せば誰もが意識を失っている。意識を刈り取られその場に倒れてしまった。

甲板に立つは、ただひとり。

まだ幼さを残すその面立ちには、思わず魅入ってしまうほほ笑みが浮かんでいる。

一步、脚が引いた。

「そう警戒しないで……という方が無理だよな」
溜息をひとつ、けれど視線は外れない。

「初めまして、ニコ・ロビン」

名を正確に紡ぐ。

故郷を追われてから、ずっとひとりで生き延びてきた。一時は受け入れてくれた、心やさしい人達も、己に懸った懸賞金を知るや、ころりと態度を変え政府へと突き出そうとする密告者になる。

紛れ込み追われ、逃げてきた。

幾度も幾度も繰り返されて悟った。人を信じてはならない。信じられるものは自分だけだと。

この船にも偽名で乗り込んでいた。

身分証明が必要な商船には入り込めない。そう、今乗るこれは海賊船だった。

雑用でもなんでもする、と乗り込ませて貰ったのだ。

本当の自分を隠し、能力者であることも知られてはならない。ありとあらゆる事をやってきた。

「…あなたは」

「わたしはアン。ポートガス・D・アン」

名を聞き、鼓動が跳ね上がる。

海軍本部において次世代の将と目されている人物の名であったからだ。

「わたしを…捕らえに来たのかしら」

答えはNO、問いを否定した。

「一度会ってみたかったの。ただそれだけ」

ニコ・ロビンはもう一步、後方に下がる。それだけの為に、わざわざ海兵が足を運ぶ事など考えられなかったからだ。

「真の歴史の本文を追^{リオ・ボーネグリフ}い求める人物に興味があったの」

本当よ？

そう続く言葉に、ニコ・ロビンは少女を睨みつける。

世界政府は歴史の本文の探索、および解読を死罪と定め禁止していた。^{ボーネグリフ}

それは歴史の本文に世界を揺るがす情報が残されている、からとして、世界を巡る考古学者を取り締まりし続けている。

「オハラの賢者達が何処まで読み進めてたのかは分からないけれど…このまま進めば、あなたが探し求める歴史の本文がある砂の国へ辿り着く。それを知れば残る石碑の続きも見えてくる、はずだよ」

世界中に点在する歴史の石のありかは、石碑を辿って来た、古代文字を解読出来る者にしか分からないはずの情報だった。しかも次、

とはいうものの指し示す先は余りにも不明瞭で殆ど特定できはしない。

それを、この少女は知っているかのように話している。

手に汗が滲んでいた。極度の緊張状態にあると、ロビンは己を冷静に分析する。

語られた言葉に疑問を唇を噛みしめ。

「わたしが誰かに話せば、あなたも重罪人よ」

「あー、そう言われてみれば。でも大丈夫、あなたは絶対に言わない」

確信めいた口調で、少女が言う。それに政府はこの世界の根本を成す、秘密を自分が知ると突きとめても、手出しは出来ない、と繋げた。

「…止めないの?」

「なにを、どうして?」

疑問を疑問で返されてしまい、ニコ・ロビンは答えに詰まる。

「知りたければ知ればいい。そして知った者の責として、手に入れた”それ”をどう扱うのか。選択してくればいい。わたしは止めないよ。止めたってあなたの真の歴史を知る欲望は抑えられないでしょう?」

「あなた…一体…」

ロビンは引いていた足を前に出す。

「歴史を解読する事で、血が流れるのは知ってる。不必要な涙も流れる。けれど始まる為には終わりを知るべきだともわたしは思ってる」

たとえそれが世界政府が打ち出す方針から外れていたとしても、抗い望みを持ち続ける人の背を押したいの。

そう、少女が語った。

偽りのない言葉、に聞こえた。

「生きて。あなたを守る仲間わたしではないけれど。未来で待っている、誰かの手を放さないように…」その手はアラバスタにある。その答えもその出会いが教えてくれるから」

「本当に？」

この世に生れてひとりボツなんて事は絶対にないんだで！！！
生きることを否定したあの日、生きる事を望んでくれた声が蘇る。

無言は肯定だった。こぼれ落ちるようなほほ笑みに、闇に沈みかけていた心にほのかな明かりが灯る。

「…どうして、教えてくれるのかしら」

「理由が必要？」

「できれば」

少女が考え込む。

ロビンはこれほど待つのが、苦しいと思った事は無かった。

「あなたがわたしの大切な…宝物に続いているから、かな」
それに。

「わたしひとりくらい、あなたを信じる人が居てもいい」

ぽつりとつぶやかれた声は、誰に言ったものでも無かった。

「…裏切るかもしれないわ」

震える声で言っても説得力無いよ。少女が笑む。

「…わたしは今まで」

「ああ、その点に関しては勝手にわたしがニコ・ロビンを信じてるだけだから」

あなたがとった行動が、その、勝手に信じた人にとって都合がよく無いモノだったって言う理由でさ、裏切られた、なんて。被害者

面するほうがどうかしてると思うよ。

言っている事がちぐはぐだった。

…涙。

目頭が熱くなる。

なぜかぼろぼろと流れてくる涙が止まらなかった。

閉ざした心に安易に入ってくる声が悔しい半面、安らぎをも感じ
てしまう。

「Dの意志が全てを紡ぐ。忘れないで。あなたの中にも、もう宿
ってる」

わたしが例え、死んだとしても、あなたがわたしの意志を継ぐ。

見上げてくる目は澄んでいた。汚れを知らないような、純粋な光
が宿っている。

その手がロビンの指を取った。

引く事を許さない強引さも含む。初めて触れた小さな手は、久し
ぶりに人の温もりを伝えるものだった。

42 - 東の島

「急げ救護班！！」

急を要する声が乱れる。村は炎に覆われていた。

死者の数は数名、それだけが不幸中の幸いだろうか。

海兵達は住人が避難しているという天然の洞窟へと向かい、軍艦の到着を叫んでいた。

しかしその声もまずはこの火災が収まらなければ聞こえないだろう。

炎がおこす上昇気流が、海兵達があげる声を飲みこんでいるからだ。

水源がどこにあるかも分からない場所での消火は骨が折れ難しい。大將がいれば凍らせて貰うのだが、生憎、現在、行き先を告げず、ポタリング中だ。

不在の状況に慣れつつあったが、副官となったアンはたまったものではない。

「火の回りが激しいから、建物を壊して！無事な家屋に移らないように！」

指示を飛ばしながら、自身も手にしたハンマーで燃え盛る家であったものを破壊してゆく。

ちりちりと肌を焼く火の粉の中を走り、砂をかけて火を押しとどめる海兵達を鼓舞する。

こういう時、水か砂、空間を圧迫し空気を遮断する能力者が居てくれたら楽なのに。などと不謹慎な事を考えた。

意外と知られてはいないが、消火の際、水と同じ様に効果を上げる物質があった。

それは砂、だ。

例えば焚き火をしていて、横の草に燃え移ったとする。水があればそれをかければいいが、無い場合には砂をかけると空気が遮断され、火は消えるのだ。

特に水をかけるとかえって危険な、油系には砂の方が効果が高い。ただまとまった量が必要とするため、手間ではあるのが欠点だろうか。あとは炎が炎であるために必要な、酸素を遮断できる能力が存在しえれば問題ない。

「離れて！」

倒れてくる梁に向かい、アンは手にもったハンマーを振り嵐脚と同性質の技を放つ。数名の海兵が、今のうちにとその場から立ち上がり、腰を抜かした同僚を引っ張り退避した。

真っ赤な炎の熱に浮かされ、力の手加減が出来にくくなりつつある自身に、眉をしかめる。火が怖い訳ではない。引けと願ったのは、自分の力が仲間を傷つけてしまいかも知れなかったからだ。

「ポートガス……！」

炎が風を帯び勢いを強める真っ只中に突っ込んだ副官へ向かい、海兵達が叫びをあげた。

その最中、粉じん爆発が起きた。海兵達が炎から逃れるように駆け出す。

空気中に浮遊している粉じんが燃烧し、その燃え広がりが細かに伝播したのだ。

海兵達はまだひとりの副官の声が聞こえるや否や、必死に脚を動かして逃げた。

「……熱い、痛い、髪の毛が燃える」

副官がふたり並んで立っていた。

少しふつくらとした体形の男が、余り期限が良くない、もうひとりの船長補佐へと優しい視線を投げかけていた。

「よかった」

誰かがぼつりとそう安堵を吐きだす。

炎の中に居た筈の姿が、避難に走った海兵達よりも先にその場に居たとしても不思議ではない。

能力者ではないが、瞬時にここない場所に移動できる特異的な力を持つているからだ。

船を実質上切り盛りする副官たちの姿に、海兵一同がぼつとした声を出した。

「まったく、あなたという人は無茶が過ぎますよ」

「エリキ副長」

炭ががこびりついた頬を、溜息と共にもうひとりの副官が指で拭く。

「船に戻ったら、いの一番に身支度ですね」

全く困った鉄砲玉だと腰に手を当てた。

「さあ、青雫大将が戻って来るまで、もうひと頑張りですよ」

エリキは大将艦の副長として、大将がその位に就く前からその立ち位置に座り続けているという。

年齢も青雫とさほど変わらない。

上の役職に何度もあがれただろうに、その全てを否定している、稀有な人物だった。

義祖父も好き勝手やる分にはこれ以上の役職は必要ない、と言い切るが、それでも中将という階級まで登っている。

エリキという人を見れば参謀タイプであると気付く。

大将の横に付き添い、思考による戦いを進言する。自分の役所はここだ、と決めているのだろう。

雰囲気的には時代劇でいう、黒田孝高にそっくりだ。テレビで見ている名前ならば、諱である官兵衛、という名の方が聞き覚えがあ

るかもしれない。

直接的な指揮も行うが、どちらかと言えば戦略的戦術を好む。

黄猿は遠距離からの砲撃を行い戦意を失わせ、赤犬は接舷し甲板戦に持ちこむ事が多かった。青雉の艦は相手の進行方向をあえて阻まず、逃げ道となる幅を不意に開けていると思わせておき、後方から正確な砲撃で海賊船を沈める戦術をとる。

ある程度の距離があっても潮や風の流れを読み、追い込むのだ。そして拿捕する。

クザンに連れられ出かけた際は、連れ帰るのが面倒だとその場で氷漬けにし碎いてしまう事もままあったが、船では大概、エリキの方策を受け入れ穏便に処理していた。

黄猿、赤犬、青雉と全ての大将艦に乗り、それぞれの特色を見てきたが、何もかもが面白かった。学び取ることがまだまだ多く、ある。

「ポートガス、洞窟に近い家屋に、死亡した海兵の亡骸と少女を保護しています。身元確認が出来る物を持っていなかったのですが、あなたなら面識があるかもしれません。行って見て来て下さい」

アンは返答し、現場指揮をエリキに任せてそちらへ向かう。

途中で茶飲み友達になった海兵のひとりと擦れ違い様に情報交換をした。

情報系を扱っている部署に配置されている彼、はアンが必要とするものを的確に持って来てくれる。

友人となつて間も無いが、アラバスタで偶然会った人物だ。

彼、も休暇を使って来ていたらしく。

丁度喉も乾いていたのでお茶に誘ったら快諾してくれ。

帰りの日程が同日だったので、瞬間移動で一緒に帰ってきた。その後、同じ部隊だと知った時、思わず再会を喜んで抱きつきに行ってしまったのが悪かったようで、クザンにいろいろと手ほどきされたと聞く。

最近、クザンの子守りが過激になってきていた。アラバスタから戻って来てから、特に、だ。義祖父の息がかかっているとはいえ、あまりに過保護過ぎた。１１歳の頃ならまだしも、１５にもなって懷に収まっているのは、どうかとも思うのだ。

人生２度目の思春期は以外に刺激的だった。あちら側では両親を亡くしていたからだろう。祖父の言をしつかりと守り、ある意味自分を押さえこんで生きていた。

だがこちら側では、目一杯、理不尽すぎる不満や反発を出す事が出来た。構ってくれる手を弾いても、こちらが疲れるまで相手をしてくれる。何事かにかちゃんとして喧嘩腰に発言をしても、それすら受け止めてしまう周りの弾力性に、ちゃぶ台を、文字通りひっくり返したくなるのもしばしばだった。

大人への階段を、登らせて貰っている。
そんな事を思いながら、彼、と別れた。

火の手は大分、収まってきていた。

赤く燃える焰と黒い煙を発見したと報を受けた時、今まで見てきた悲惨な奪略が行われた村や町の姿が脳裏を横切ったのは確かだ。

最悪の事態を想定し、艦は入り江へと入る。

生き残りは絶望的だろうと思いつながら、アンは月歩を習得している部下を引き連れ、先陣を切って上陸した。

海賊は。

多くの場合、奪略を行う。畑を耕し、羊や牛を育て、真つ当に日々を過ごす人々から、海を行く賊たちは強奪する。砲弾で家屋を打ち払い、剣や銃を持ち命を侵す。

海賊達も人間だ。生きてゆくためには食べ物が必要となる。

だが食物の多くは陸にあり、海で採れるものといえは魚くらいだろう。運良く海王類以外が釣ればいいが、ここは”グランドライン偉大なる航路”、そうそう狙った獲物が得られる訳もない。

基本的に港への上陸を拒否される彼らの選択肢はたったひとつ、強奪だ。

世界ではそれがデフォルト、選択肢が示されない場合、自動的に選ばれるもの、となってしまうていた。

だから海賊は『悪』、とされる。

しかも彼らにとって物資や金品など、世間の評判通り海賊らしく、奪うものであり使う為にあった。奪われる立場の人々がどれだけ苦労して手に入れたものであろうが関係無い。

そうさせる所以は、海賊が強者だからだ。

程度は徒党となっただけのごろつきから、億を付けられた凶漢まで幅広いが、海軍はその強者から、弱者を守り海を運行する人々を守るために存在していた。

しかし世界は広い。間に合わず、人知れず消えてゆく町もある。

アンは少女の横に座っていた。

住人が住んでいただろ家屋の多くが焼け落ち、焦げた木の匂いが充満している。

名前をヨーコという。この集落を守ろうとし、命を散らした海兵の一人娘だ。

海兵の名はクナギ。赤犬艦に乗っていた時の同僚だった。数週間前、久々に帰郷すると言う彼の背を定期船で見送ったばかりだ。アンも眠るように横たわる彼であつたものの、に実感がわかない。

何人もの死を見送ってきた。

幾人に死を与えてきた。

だがいつまで経っても、やり切れない思いが無くなりはない。

ヨーコは父の形見である帽子の下で涙を堪えていた。

その気持ちは、痛いほどわかる。

死を直視したのだ。

目の前で息を引き取る父の姿を見続けた。

周りを炎に囲まれているのに、どんどん冷たくなっていく父の側から離れようとしなかったという。

今、小さな少女の内がどんなに寒々としているのか、その影響がどう残るのかもアンには想像が容易かった。

かつてこんなものはもういらないと泣き叫ぶほどに味わった気持ちだ。

「アン副長、住人の代表者と洞窟内にて接触が出来たようです」

「お疲れ様です。先行していた方には労いを。当面の生活物資支援などはエリキ副長の指示に従って下さい。賊はわたしが追います」
海兵は一瞬言葉に詰まる。

いつもとは違う種類の、笑みを浮かべていたからだ。

能面のような、無表情であるのに、なぜか笑んでいると思わせる。

「…船、落とさないで下さいよ」

「捕虜もいるし、そんな無茶はしません。全面氷漬けにして始末書出すような、クザンみたいな真似、するわけ無いじゃないですか」
にっこりとアン邪笑む。その表情に、思わず声をかけた海兵が一步後ずさった。

そうしてアンはゆっくりと立ち上がる。

見回せば町に関してはほぼ鎮火しているようだった。

この町を襲った海賊達の姿は既に捉えている。

遠くに投げていた見聞色を手前に移行すると、森に移った炎に苦戦しているらしい仲間達の声が近くに聞こえてきた。木を切り倒し、迫る炎と戦っている。

アンは一か八か、この地に雨が降るよう願ってみた。天候を自由に操る能力など聞いた事が無い。だが向こう側では非科学的ではあるが、雨乞いの慣習が残る地もある。炎が上がり、たくさんの上昇気流が生まれた筈だ。失敗したとしても誰に責められる事もない。

どうせなら土砂降り希望、そんな願いを空に放つ。

どの海兵の顔もすすで汚れていた。やけどを負っている者もいる。だがそれらがあっても救助作業を行う顔には使命感が宿り、洞窟から出てくる住人の為の仮宿を用意し始めていた。

「…仇をとって…くれるの？」

途切れとぎれの声が耳に届く。俯いたまま、ヨーコが発した声だ。

「…本当はそうだ、って言ってあげられたら良いんだけど」

一度言葉を切る。小さな瞳が上向いた。

「悲しみの後にはきつと、自分に対するやり切れなさ、相手を憎む気持ちが出てくる」

だから仇は取らない。憎むのも止めない。

「あんたになんか、分かるもんか!!」

うるませた瞳でヨーコは小さな拳を何度も何度も、父と同じコートを羽織った人物へ振るう。

けれどその代り、この島が出来るだけ平和であるように、クナギが残した望みが叶うよう、ヨーコがこの島で生きてゆけるように。

「その障害を取り除いて、攫われた人を助けて来る」

アンはただ、ただ優しく受け止める。幼子が泣きやむまで、抱きしめ続けた。

「海賊、海賊って、みーんな猫も杓子も。他は無いのかって思うよねえ」

暫くの後、緊張が切れ泣きながら眠ってしまったヨーコを近くに居た海兵に託し、姿を消す。

一閃。

アンはナイフを抜いていた。

ダダンから貰い、大切に使っている小振りの刃だ。

生暖かい赤が降る。

この船の様子は遠く、カンソーン島、リトルイーストブルーからずっと見ていた。だから誰がどこに居るのか、それすら容易に分かる。

トン。

革靴が木を叩く。

一瞬で現れたその姿を、誰もが驚愕と共に見た。
「…宴の最中に、失礼」

アンが出現し、刃を振るったのは海賊の輪の中だった。

奪った食料と酒、そして僅かではあったか金品の分け前が終わり、宴が開かれている真つ只中、海軍のコートを纏った少女が現れ、一閃、豪快に笑っていたその顔のままの船長の首を文字通り切った。

ぬるりと線が入った場所から、首が斜めに滑り落ち、床に落ちる。

海賊達は慄く。

誰もが海兵を見た。

ぬらりと濡れるような、細められた目には非情な冷たさだけがある。

海賊達は陽気に笑い、酒を飲み、唄っていた。

だから未だ船長は笑っている。笑い声が響く中、血潮が噴水のよ
うに、血液が脳へと送られ続けていた。

船長である男は、自身が死んだと認識せず笑いさざめいている。
しかしそれもあと数分の事だ。

転がったその頭部を、海兵が髪を驚づかみにし、己の視線と合わせる。

「ねえ。わたしの同僚を殺したのはだあれ？ ごめんね。答えられないよね。ふふっ…聞く前に殺しちゃったから」

船員達は息をのむ。

それは天使のようなほほ笑みだった。小さな子供が無邪気に、向けてくるそれと、同じだ。

海賊達は飲んでいた酒の味すら忘れていた。

天国から地獄とは、こういう事を言うのだろっ、そう身の上で感

じさせられている。

真白なコートが紅に染まっていた。

海賊船に乗っていた者達は余りの光景に動けない。

圧倒的な力の前に、抗う気持ちすら起きないまでの畏怖に取りつかれていたのだ。

「海賊の末路は知ってるよね。今ここで選ばせてあげる。この場で自害するか、罪を償う為に縛されるか、それとも……わたしの手にかかるか」

男達の大半は、その声を全て聞き終わる前に、意識を手放した。

半日ほど経って、アンは再びカンソーン島を訪れていた。

身なりはどこにでもいる村の子供と変わらないような、Ｔシャツと短パン、そしてブーツの組み合わせだ。

海兵としての身分証は腕に付けた腕章のみだが、同じ艦の海兵が至る所にいるので必要無いともいえる。

だが一応、付けてきた。かつての経験からだ。

衣類の一式は大量の血を吸い、処分となってしまうた。

しかもみっちりとお説教も貰ってからの帰島となっている。

捕虜になっていた女性はことごとく嬶られていた。

島に戻る選択と、他の島に移り住む選択肢を提示したところ、全員が後者を願ったのは分からなくもない。

全ての部屋を調べ、隠れていた海賊を引っ張り出した後、アンは電伝虫でエリキに連絡を取った。

女性達に関しては、本部に居るはずの義祖父へ繋ぎを入れて貰えるようお願いする。元々東の海出身者達だ。故郷に戻るのも良し、新天地を求めるのも良し、管轄している義祖父ならば良い転居地を知っているだろう。

そんなこんなで震える海賊を見張りながら、迎えを待つ事一時間余り。

あるかと思っていた反乱も抵抗も無く、近場を航行していた黄猿艦が船体を寄せた。

乗り込んできたのは、中佐にまで地位を上げたドレークだ。

アンはいつものように、はしやぎながら駆け寄る。

がしかし。ドレークは姿を見るなり、盛大な溜息をその場に落とした。そしてアンの元へ一直線に進んだかと思えば首根っこを掴み、挨拶の言葉すら受け付けず艦隊の浴槽へと放り込んだ。

小言をぶつくさと言いながら体を清め、用意されていたぶかぶかの衣類に手を通し、外へ出てみると黄猿が待ち構えていたの言うまでもない。

「アーン。海賊船の船長の首、切っちゃったんだってえ？ 生きている海賊達はみいーんな震え上がっちゃってるし、恐怖が強すぎて自分で首を掻き切ってるのも居るらしいんだよねえ。なにをやったのかわっしに詳しく教えてくれるかなア」

「いや、その。えーっと」

執務室に連れて行かれ、肩叩きをさせられながら、じつくりと島が見える場所までみっちり、諭された。いくら強くなってきたとはいえ、単独行動な上、貴重な労働力になる海賊達を委縮させ過ぎては使い物にならない、などなど、だ。

青雉が不在ならばなおさらだと、ボルサリーノからお叱りを受けた。

青雉艦に戻る時に甲板に下りれば、ドレークから無言の戒めがやってくる。

「そんなにわたし、無茶してる様に見えるのかなあ」

「ああ」

即返される言葉に、アンはひとり落ち込む。

義祖父付きとはいえ、中將となれる位の實力といわれているのだ。これくらいひとりでも十分に対処出来る。

年齢に関して言うなれば、地位を落としてしっかりと監視下におけばいい、とすら思う。

「艦が別だからな。何かあった時、すぐに飛んで行ってやれん」
相方の言に、頬が緩む。

「でもこうして、時々は会えるのも、いいよね」

見上げてくる、につこりとした好意の笑みを向けられるとドレークは苦笑するしかない。

儚さを含んだ小さな背が砂塵のごとく消えてゆく像が浮かび、ドレークは咄嗟の思考をかき消した。この少女は、出会った頃からそうだ。自身の価値を、余りにも低く見過ぎる節があった。

「おれもまた、この次を待っている」

変わらず相方と、言ってくれる少女に言葉落とした。

青雉艦が見えると敬礼し、空を舞い駆けるその姿を見送る。

「さあて、わっし達は本部へ帰るよあ。全員、持ち場に就くようにねえ」

そうして艦に戻り、衣服を着替えリトルイーストブルーへと入った。

だぶだぶの服装では動きにくかったからだ。スーツの替えは持つて来ていたが、コートは一着限りの品だ。本部へ戻った時に、おつるを経由して衣装室に行かねばならないだろう。身長も大分伸び、既製品で片付くようになっただけ、以前と比べてましと思う。

最初の一着目は特注品だった。

なので貰ったばかりの頃、袖の揺らし具合が分からなくてほつれを作っては修繕、を繰り返したのも良い思い出だ。

「あれー。地面が濡れてる」

「副長、お疲れ様です」

港を警備する海兵へ敬礼を返し尋ねてみる。

するとアンが出かけてから間も無く、まさに恵みの雨が降り、町も森も、しっかりと鎮火したという。

願ってみるものだねえ。

そんな事を思いながら、月歩で青々とした葉に戻った木々の上を行く。

つんとした火事後の後に漂う特有の匂いがあるものの、炎の中で嗅ぐ熱と比べればどうというものでもない。

村では数本の煙が立っていた。

港で聞いたところによれば、炊き出しをしているのだとか。海兵の一部がアンを真似て森に入り、獲物をしとめてきたという。

「みんな逞しいなあ」

くすくすと、アンが笑う。

狩りを行った本人達が聞けば、本家本元には叶わない。そう口を揃えて言うだろう。

ドーン島では兄弟達と獲物を獲るのが普通だったが、一般的にそれは苛烈な生存競争サバイバルという代物だった。海兵として長く勤めていても、この類は実際に経験しなければ培われない能力といえる。

どれだけアンの元に配属された海兵達が訪れた島々で鍛えられたかは、言うに及ばないだろう。

夜の炊き出しをしているテントへ近づいてゆく。

周囲には幾つものランプが吊るされ、灯りが燈されていた。

「…黄猿大将より、連絡、受けましたよ」

こちらで待ちかまえていたのはエリキ副長だ。

あう、と言いながら、アンは後ずさる。黄猿からみっちり、耳にタコやイカ、ホタテがぶら下がるほどにみっちりとお説教を喰らったばかりで、これ以上は聞きたくないと耳を塞ぐ。

「私からはなにも言う事はありません。青雉大将が戻られた後は、知りません？」

「やっぱり怒られるよねえ」

自転車のベルの音が当分聞こえませんが、と願いながら、アンは再び、みっちりと厳しく注意される覚悟を完了させておく。

こめかみのぐりぐりは、最低限でもされるだろう。

「なんかもう最近、みんながおとーさん化してきてるみたいで」
それだけ大切に扱って貰っているとは分かっていても、年齢的に反発したくなる欲求の方が強い。

いわゆる反抗期だ。

エリキに連れられ、海兵も夕食を共に食べているという天幕へと足を向ける。

近づくとき笑い声が聞こえた。

海賊の襲撃があり、たくさんの家が焼け、捕虜も出たというのに。この村の人々は強く生きようとしている。

「あ、おかえりなさい」

「ただいまー」

ヨーコがアンの姿を見つけ、もじもじとしながら近寄ってくる。

海賊船でなにをしてきたか、は話さなかった。

捕まっていた人々は海軍で保護したので心配ない、それだけを伝える。

「おお、あなたがゴア王国出身の。初めまして、わしはこのリトルイーストブルーの村長をしておるファブルです。いやいや、ようこそ来て下さった」

そうここは東の海出身者が辿り着く不思議な島だった。

長年の付き合いがあるご近所のように、温かくアンを迎い入れる。くすぐったい気持ちを感じながら、遠慮がちに触れてくるヨーコの手のひらを握りしめた。

生きること。

それがずっとずっと繋がって、それぞれの日に一歩づつ未来へ進む力となりますように。

アンは村の食卓に混ざりながら、心からそう思った。

43・ゴール・D・ロジャー

まぶた
瞼を^{まぶた}ごしごしと擦る。

大きなあくびをひとつ、周囲を見回せば闇が広がるばかりだ。

黒一色。

それなのに自身の体は、しっかりと光が当たっているかのように見えているから、不思議な気分になる。

よう。

不意に語りかけられ、寝ぼけ眼のまま視線をそちらへ向ける。

「ああ、お父さん」

アンはたったひとりの名を親しみを込めて呼ぶ。けれどその声が父に届く事は無い。

海賊王、ゴール・D・ロジャーは既に故人だ。聞こえてくるこの声すら生前に残した思いのかけらに過ぎない。

「エース、エース、起きて。かけらだよ。貴重なお父さんの話聞けるよー」

半身を呼ぶが、ぐっすりと眠ってしまっているらしい。なんの反応も帰って来なかった。ルフィーに蹴られたのか、寝言を言っている。

「ふたりとも相変わらず寝相、悪いものね」

自身が入れば、いつも団子になって朝を迎える。兄弟揃って、布団の上を縦横無尽に転がるからだ。

アンはもう一度大きなあくびを放つ。隣にはクザンが寝ていたはずなのに、その姿もない。よって時計も見えない。何時であるのか

分からなかったが、まだ寝入ってからそう経っていないようにも思える。

「今日はどんな寝物語を聞かせてくれるの？」

アンは父の影に触れる。

それは万物の声を聞けたという、ゴール・D・ロジャーが残した足跡だった。

それは世界中の至る所にあり、何に反応するかは分からなかったが、時々こうして遭遇する。

本音を言えばもっと幼い頃に知っていられたら、と思う。

そうすればエースが父の名を知った時、これが父だと伝える事も出来ただろう。

悪意ある言葉を聞かなくても良かった。

あの壁の向こう側には、センゴクを始めとする海軍と政府がねつ造した、偽りの父の影しかなかったからだ。子供心にも、ちくりどころの痛みでは無い、えぐるような言葉を平気で大人たちは放っていた。

出身地がある海、だったから、だろうか。

ドーン王国内では特に、ゴール・D・ロジャーに対して、敵意を持っている者達が多かった。

何かはしでかしてはいるんだろうけれど。

ローグタウンから始まった父の旅は、最果ての島、ラフテルを経由し始まりに終わりをもたらした。

しかし旅立ちも父らしいと言えばそうなのだが、船も持たずに海に出ようとしていたのだから、もう少し考えろと言いたい。運良く、そこに、後の副船長、レイリーが居たから良かったものの、どうやって海賊王になるつもりだったのか。

いや、それよりも。

そこに偶然とはいえ居らされたレイリーという存在がいるという幸運こそがさすが、我が父と言った所かもしれない。やろうと思う事に対して、周囲の助力を得、必ず潜り抜ける。騒ぎの中心にいつも居ながら、障害をもつとせず颯爽と駆け抜けて行くのだ。

父の声はさざ波のように心地よく耳に届く。

在りし日の記憶を語る、声に誘われるように、アンは眠りの中へ入っていった。

聞き慣れない声で目が覚めた。今度はばつちりと、身を起こす。

そこは見慣れない風景だった。

いつもの語り草とは全く違う。うとうととしても続く、あの声は無い。

アンは船に、乗っていた。

夢であるはずなのに、波の音もそしてゆっくりと揺れる感覚も現実味を帯び過ぎている。

またどこかへ迷い込んだのだろうか。

そんな事を思いながら、視線を動かせばふたつのブラシが空に向かって突きだされていた。

「てんめえ！！ なにしゃがる！！ おれ様が今そこ、まさしく今！！ ブラシかけた直後っておめえも知ってるだろうが！！」

「わりイわりイ。もう一回やっといてくれ」

べつたりとでは無いが黒い足裏を見せ、そうそう船底へ行つたばかりだったのだと紅が笑む。そうすればピエロの鼻をもつ青の髪が逆立った。

「待ちやがれ！ 今日という今日はもう、許さねエ！」

ブラシを振り上げながら怒りの絶叫をあげる赤っ鼻と、赤髪の少年が甲板の上で楽しげに声を絡ませながら甲板をはしゃぎまわっている。

幼馴染、かなにかなのだろうか。随分と仲が良いらしい。

赤鼻が大きく棒を振り上げれば、ひよいと赤髪が射程距離外へ逃げ避け、帆の操作をしている乗組員達の間を駆け抜けた。

日常茶飯事のやり取りなのだろう。船員達の様子を見る限り、彼らのじゃれあいには放っておいても大丈夫なものであるらしい。

船の上から外へ視線を移し、見回せば広がる碧い海ばかりが広がっている。新世界にも何度か行った事があるが、こんな海の色を見るのは初めてだった。

そんなに大きな船では無い。

スループよりは大きい。フリゲートだろうか。

海軍でも、商船でもなかった。

真上を見上げれば黒い旗が風に煽られ揺れている。どくろの模様は見えなかったが、この船は、海賊船であるらしい。

「おいおいお前達、暴れすぎるなよ」

ロープを持った船員が赤の二人に声をかける。

（うわっ、危ない！！！）

樽の上に置かれていたジョッキが追いかけてっこによって動き、中に入っている液体と共に床へと向かう。

思わずアンは、飛び退くがしかし、それらは体を突き抜け向こう側へ音を立てて落ちた。

（な…何事ー！！）

エースの名を呼んでも、なにも聞こえない。いつもとは違う感覚だ。

それはまるで、断線しかけたイヤホンに付けているような、

という表現がぴったりかもしれない。

手のひらを広げてみると、半透明で透き通っている感じがする。

（わお。もしかして体から抜け出てたりするのかな）

肉体の感覚は、あるような、ないような、曖昧な状態だ。

（深く考えても所詮ない、気もするなあ。やめとこう）

アンは風に舞う木の葉のように階段を下りる。重力が軽い場所ではきつとこういう感じに体が浮くのだろうと、体験を経験としながら歩く。

雷が降る島や、炎が燃え盛る島、氷に閉ざされた島が新世界で確認されている。

ならば重力が軽い島もあるかもしれない。

きつとそれは、トランポリンよりも楽しそうだ。

（あの赤髪ってシャンクスだよ。そして赤鼻は、道化のバギー）
後者は東の海で名がほどに売れている海賊の名だ。サーカスのような船員構成らしく、眺める分には面白いというのは、支部に移った同僚の言だった。実力のほどは、東の海にしてはまあまあだという。

（シャンクスって童顔だなあって思ってたけれど……うわあ、これは意外に……）

一味を束ねる大頭としての渋い顔を知っているからこそ、無邪気に走りまわる赤髪の少年が彼以外何者でもないと思わせる。

しかもまだ、成熟した大人の顔をしていない幼さが未来と重なった。

青年時代、ということとは丁度ゴール・D・ロジャーの船に乗っていた頃、に当てはまる。

（ということは、生父拝見チャンス!？）

わくわくのし所が違っだろう。自分へ冷静な突っ込みを入れる。

（なるほどねえ。道化さんもお父さんの船に乗ってたんだ。意外だったなあ）

当時ロジャー海賊団に所属していた、多くの船員の話は分かっている。海賊としての悪名を欲しいままに、轟かせた王の船に乗っていた人物の名前がなぜか抹消されているからだ。

これは良い機会と、周囲を見回し顔を覚える。これがただの夢で起きた後に忘れてしまうものなのだとしても、貴重な拝顔チャンスであるわけだ。

アンが識るのも副長である冥王レイリー、ただ一人だった。父の名もゴールド・ロジャー、と本当の名を隠されている。

それほどに世界政府はDの名を世界に発信したくないのだろう。

死してなお名を変えられ、残る父に、感嘆すら覚えるのは確かだ。

『おれの財宝か？ 欲しけりやくれてやるぜ…』

死に際の言葉が、この大海賊時代を開かせたのだから、よくもまあおもちゃ箱をひっくり返したものだ。

『探してみる。この世の全てをそこに置いてきた』
それは嘘では無い。

だが我武者羅に新世界を彷徨つても見つけれないように仕組んでいる。

それはまるで世界を股に掛けた、パズルゲームだ。

「…いい風だな」

船室から凶悪な悪人面をした男が出てきた。頭にかぶった帽子には旗と同じ海賊印があり、特徴ある口髭を蓄えている。

子供がそのまま大人になったような印象を受ける男だ。船員からは船長、と呼ばれていた。

生前の父、だ。三白眼が良い味を出している。エースの眼元が悪いのは父が原因であると確信したアンは、男の子は母似のほうが格好良くなるって言うジンクスがあるのだと遠い母に願う。

「今日は面白いもんが乗ってるな」

男がちらりと視線を動かした先は、甲板に下る階段横にある飾り堀の上に座っていたアンだった。

「ロジャー、調子が良いからと言って無茶はするなよ」

ひと仕事を終えたような表情をして出てきたのは、花弁のような髪型をした男だった。

「こいつはクロツカス、この船の船医だ」

誰に話しかけているのかと、訝しげに思う顔を、クロツカスは浮かべている。

（お父さん、ちょっと。変な人になってるよ）

娘の声は父に届かない。

未来が過去に物申せる訳もなく、アンは身を躍らせ甲板へ下りた。その姿をロジャーが追う。

「また変なモノを見つけたな」

クロツカスに並ぶように立った男が口角を上げる。

「放っておけばいい。その内飽きるだろう」

（いやいやいや。その副船長。娘に飽きたら親としてどうかと思っよ）

この突っ込みもレイリーに届かないと分かっている、突っ込みざるを得ない。

（お父さんも凄い存在感だけど、さすがにこの人もすごいなあ）
シャボンディで本人を遠くから見た事もあるのだが、まだ一度も接触していなかった。

お互い見聞色で伺いあっているから、微細に言えば意識的には知人であると言えなくもない。

だが面と向かって会うならば、エースと一緒にいい。どうせ新世界に行くには、シャボンディでコーティングする必要があった。ならばその時でも遅くは無いと思っていたからだ。ひとりで父が相棒と呼んでいた男に会えば、どうしておれも誘ってくれなかったのだと半身がむくれてしまう。

「娘か息子か。今の状態じゃあ分かんねエな」

（未来を先読みするのは止めようよ、お父さん）

船首へとてこてこと歩くアンの背を、父が追いかけてくる。

「ほう、追いかけてくるつもりか。なら後幾つ島を渡れば、最果てかはわからねエが：お前等が辿ってきやすいようにしておいてやるう」

アンは苦笑する。

追いかけるつもりは、あったり、なかったり、現状では微妙なのだ。

（ありがたい事で。息子はお父さんの背を追いつける予定にしているみたいだし）

本当に海賊王、を目指しているかはさておき、だ。

（今ねえ、おじいちゃん：ガープ中将って言った方が分かりやすいかなあ。お世話になってるんだけれど、その孫は本気でお父さんの足跡を追うつもりでいるのね。わたしとしてはそっちの方を主で道標残しておいて欲しいな。その無謀さが一緒の方向を向き過ぎて、怖いくらいにそっくりなの）

こちらはなんとかするから。

伝わっているのかそうでないのか、分からなかったがアンはほぼ笑む。

弟の性格や行動を予想するならば、仲間になった友人達が苦勞す

るはずだ。

きつと父と同じように周りを巻き込みながら、父が幕を開けた時代の先に向かうに決まっている。

「くそ、あんまり上手く聞きとれねエなあ。お前ちゃんとメシ食ってんのか」

（あー。えーと。昨日のお昼ご飯抜かしました。書類まとめるのが忙しくて。…揺らいでる理由ってもしかして、それとか）

船首像でなにやら、楽しそうにする船長の姿を、多くの船員達クルーが見ていた。

偶に、ある奇行、だ。

誰の目にもそこに何かがあると見えないし、触れる事も出来なかったが、船長には何かを感じとっている、らしいのだ。

らしいというのは、副船長の言だ。

「ロジャーは…万物の声を聞ける。今回もその類だろう」

船員達はそれだけで、納得した。

いらぬ邪魔をして逆切れさせると後々、慰めるのが大変なので放って置くのが一番良い。

だがいつもよりも今日は楽しそうにしている。

注文や文句を言うのではない。珍しくも自身の話もしていた。

一体なにと、なにを話している？

レイリーはロジャーの視線の先を観察する。視覚にはなにも像を結ばないが、そこには確かに何かがあるような気がした。しかもロジャーと似て非なる何かだ。

もしかすればこの航海の終わりが見えてきたのかもしれない。
リーヴァス・マウンテンを超えた先にある、灯台守をしていたク

ロツカスに請い、ロジャーの苦しみを和らげてもらいながら目指した終着点が近づいてきているのか。

それは願いだった。

「そうかそうか、お前等に会う為には南の海に行けばいいんだな」
（何処からその情報を読み取ってるのか、不思議でならないんだけれど）

いつの間にか複数形になっている呼称に、どこまでも桁はずれな洞察力と、ここまで端的な情報でここまで思いつく、連想に手を上げる。

「新世界は誰もがでたらめと言うが、おれにとってはこんなにおもしれエ所は無エよ。いつまでも遊び呆けていてエんだが、時限爆弾を抱えちまつてな」

（病気？）

「不治の病って分かるか？」

（まあ大体は。ドラム行けばお医者様いっぱいいるよ）

「これがまた痛エんだ」

（病気って痛むと大概危険なんだってねえ）

父の弾丸話は続く。

「海賊が陸に留め置かれるなんてよ、ありえねエだろ」

（はいはい。病院嫌いもそこまでいけば立派です。お父さんはやりたいように思うがまま死ねばいいんじゃないかな）

その後が続く次世代の苦勞なんて知らず、ただ路を指し示せばいい。

「ほっほー。じゃあそうさせて貰おう」

父の言葉にアンは吹き出す。

いつの間にか噛み合っていた会話に視線を合わせた。

「まあ、必要ねエとは思うが知ってて損はねエだろうし」

そう言いながら父が取り出したのは、くしゃくしゃに萎れた白の花だった。

よく覚えておけ。これがおれが抱える病を緩和してくれてる。

「さあ、いい子はそろそろ起きる時間だ。ガープによろしくな」

手のひらが頬に伸び、ぐいっと頭を掴まれたと思ったや否や、その胸元に押し付けられた瞬間、周囲の景色が目まぐるしく変わる。

落ちていた。ゆっくりと瞼を開けば、登ってくる太陽が見えた。

朝焼けの光を受け、温かい始まりを告げる太陽が黒の闇と星の瞬きをゆっくりと覆い隠してゆく。

寝衣ねぎに使っている、膝下まで隠れるＴシャツが風を受けて大きな音を立てていた。ひんやりとした空気が現実だと知らせる。

「寝台で寝てたはずなんだけれどなあ」

眼下に見える景色は、夢で見上げていた色だ。海に向かって落ちて行く身を捻らせ体勢を整える。頭から海に飛び込むなど、冗談では無い。

普通の人間ならば、能力者でもそうだが、この高度から海に落ちれば確実に命を失うだろう。知っていたのか知らないでか。こんな場所に放り出すとは酷い親だ。

「お父さんめ」

父の軌跡を娘が追う。静かな水面には見渡す限り、船は見えない。
「あそこがラフテル」

全ての言葉が集まり、そして新たな始まりが生まれる場所を眺める。

「なるほどねえ。ALL BLUE、全ての青とはそういう意味なんだ」

4つの海の全てがある場所の秘密を知り、くすくすと笑う。だが流布するつもりは無かった。探しもとめる夢は、己の足で歩き手探りでもいい、その手に掴むものであるからだ。

アンは瞳を閉じる。

再び開けばまだ、その空は暗い。

見張り台に立つ海兵に朝の挨拶をし、降下の勢いを殺しながら甲板へと降り立った。

今なら言える。

父は、ゴール・D・ロジャーは本当にガキ大将だったのだと。誰よりも、なによりも。

世界という名の遊技場で、自らの名を道標に、歴史の本文と同じく色褪せずに残るよう、様々な場所に仕掛けを置いて逝った。

ボーネグラフィ

本当に、やりたいようにやり、思うがまま死んだのだ。

エースも父の背を追いつけると言う。

海賊王になる、という宣言はそういう事だ。

「偉大な父がいると、その子供は苦労するんだよね」

可愛い子には旅をさせる、ではないがスパルタ式教育法ならぬ、生まれた時からせんじんの谷巡りはさすがにいただけない。

その最たるは義祖父の教育法ではあるのだが、なんともはや、似た者同士であつたのだとしたくもない再確認をさせられてしまった

気分だ。

欲しいものがあるんだろ、やつらにも一言云つといてやった。なあにすぐだ。おれとルージユの子だろう。それくらい乗り越えて来ねエとな、お前たち？

そんな声が聞こえ、振り向くと桜の花びらが一枚、風に舞い空へ上がる。

「お父さんめ」

本日二度目となる、言葉を小さくつぶやく。声には刺ではなく、愛しさが含まれていた。

その小さな囁きに応える声は、ない。
ただ柔らかな風がアンの頬を撫でた。

その視線の先に見える、マリンフォードの島影にほほ笑む姿を、朝日が照らし始める。

44・目覚めの朝に

朝の冷たい空気に目が覚めた。空はまだ暗い。

目を擦り、あくびを放ちながら温かな布団の中へもう一度惰眠を貪る為に潜り込む。

あれ？

わたしは違和感に、いつもの揺れを感じない安定した感覚に跳び起きた。

「あ、そっか。今日はおうち……」
ぱたり。

わたしは布団の上に倒れ込む。

そういえばいつも側にあるはずの温かさもない。周りを見回せば、おじいちゃんの、マリンフォードにある家だった。ここに住んで2年、動かせない重量物もそこそこ存在感を増してきている。

鼻孔から息を吸い込み、肺に一旦留め、口からゆっくりと吐いた。

猫のように両手足をピンと張り、伸びをした。関節がぼきりと鳴る。

時計を見ればまだ4時を回ったばかりだった。日の出まで1時間近くある。

おじいちゃんってば朝が早いからなあ。夜も遅いくせに、なんできつかりと5時に起きるんだろ。歳を取ると早起きになるらしいけれど、センゴク元帥やガープ中将に限っては当てはまらないと思うんだよね。

昨日も夜遅くまで本部でお仕事してたみたいだし。

何時だったかは忘れちゃったけれど、一応はお帰りーとは言ったし……寝ぼけてたからなあ。お風呂入らずにそのまま着替えて寝てる気がする。

お風呂場、見てこよう。もし洗ったままだったらお湯、入れなきゃだし。

という事は、久々に朝ご飯一緒に食べられそう、なのかな。いつものごとくクザンも食べにくるだろうし……起きるしかないか。久々の陸なのに。まどろみたいなあ。

布団の中で数分ごろごろとしてみるが、眠気が来るどころかどんどんと目が覚めてきた。

溜息と共にのそのそと畳へ這い出ると、布団を畳んで押し入れの中に入れ、身支度をする。

早朝は肌寒い。ブラウスの上にカーディガンを羽織り、洗面所へと向かった。

その途中で台所を通り、やかんに水を入れ火にかけておく。おじいちゃんてばどうせ起きて来てすぐ、お茶って言うに決まってるんだから。牛乳は昨日買ったし、コーヒー豆も瓶に入れておいたのがあったはず。何を所望されても出せる準備は万端だもの。

縁側の木戸を開けて、風を部屋の中に招き入れた。

星の瞬きがまだ見える空には雲ひとつない。今日も一日、天気になりそう。

その方が洗濯物も干せるし、わたしとしても都合がいいのだけだ。

おじいちゃん、会議の後すぐに出航しちゃうのかな。予定聞いてなかったんだよね。

シャツ洗いたいんだけど、今日、また配属先変わるしなあ。

最後の年は任せておけって言ったけれど、何するつもりなんだろう。

なんだかちょっとだけ不安だったりするんだよね。

エース、おはよう。起きてる？そっちの様子はどう？朝だよー。
まだ夜明けてないけれど。

確か町に行く予定じゃなかったっけ。

わたしは意識で繋がる半身に話しかける。絶対に起こしてくれと言われていたから、いつもよりもつこく話しかけ続けた。

くぐもった声が聞こえ、寝ぼけた声で、おはよう、が続く。
うん、おはよう。

(アン、…飯。腹減った)

ごはん…って、わたし、マリンフォードに居るんだよ。今日はほら、一年に一度の会議で。お休みじゃないもん。

そうだよ、毎年恒例のあれ。

今回が本当の最後だから。ん、心配してくれてるの。

大丈夫、だつてずっと先の未来でわたし、海兵じゃないし。

あれ。言つて無かつたっけ。ごめんごめん。

ひとりでするい、だなんてひどいなあ。夢見は突然なんだから。一緒に寝てないと便乗出来ないってそれは、仕方が無いじゃないわ。わたし海兵さんしてるんだもん。それならエースがこっちに來てほら最近おじいちゃんが島に戻るならわしも行くってただこねるの知ってるでしょ。

艦が違つし、お休みも重ならないからいさめるのが大変なんだよ。う。

見張られてる…訳じゃないと思う。どちらかといえば構いたいんじゃないかな。

ん。え。どうしたの。
ルフィの姿がない？

また外に転がり出るとかは。この前はおトイレに夜行って、布団に戻らず力尽きてたんでしょ。朝露が冷たいのに、よく寝れるよね。

発見？

よかった。

はははは。引きずって行っちゃえ。

ゴムだから多少手荒らでも大丈夫だし。え、わたしが言っただけ、言っとかってどういう意味。

もう。で、どうするの。

ダダンおばさん達もまだ寝てるんでしょ。二度寝する？

でもほら、町まで2時間くらいで行けるじゃない。不確かな物の
グレイターミナル
終着駅を抜けてお昼過ぎに着けば、ご飯も食べられるし。

気分が乗らないなら仕方が無いよね。エースがいいなら別に構わないけれど。

朝ご飯もパンがいい？お粥以外のご飯が食べたいと。贅沢者め。

あー、うん、ちょっと待ってて。

昨日、商店街行った時に、1斤買ってきてる分あるからそれ持っていくよ。

肉！？

それはそっちで調達して欲しいなあ。コールスロー作るから、何とか肉は自前をお願い。

おじいちゃんの朝ご飯も作らなきゃだし。

朝からご飯炊くから……って。えー。こっち来て食べる？

どうせもっぱれてるんだからいいんじゃないかって、そりゃまあそうなんだけれど。

来てって言ったのわたしだけだよ。

クザンが来るかもだよ。

……………

膨れないのー。

前から思ってたけれどあいつとはどういう関係、って部下と上司に決まってるでしょ。

大丈夫、大丈夫だよ。

クザンは歳の離れたお兄ちゃん、って感じだし。構ってくれる理由もエースやわたしがルフィにそわそわしちゃうのとほぼ同じ感覚なんだろうと思う。

そーかそーか。エースはわたしがクザンの事を名前で呼ぶのが気に入らないと。

はいはい、エース愛してるよー。大好きだよー。

ホントだよ。海軍とエースのどちらかを選べって言われたら、迷うことなくわたしはエースの手を取るに決まってるじゃない。

いつまでやきもち焼いてくれるのかな。はあい、ごめんごめん。

クザンと鉢合わせてもいつか。小さい頃会ってるしね。

わたしがちゃちゃっと連れてきたって言えば、どうしてふたりが居るのか説明もつくし。

覚えてない？別に良いけど。

じゃあ迎えに行くから、ルフィ起こしておいて。

お風呂も沸かすから、入るなら着替えをお願いね。

顔を洗い、歯を磨き、櫛で髪をとく。

おつるさんに切って貰うようになった髪が肩の上を流れた。

カッターシャツに腕を通し、スリットズボンを穿いてエプロンを
つけ台所へ向かう。忘れちゃいけないのがお風呂の準備。ダダンお
ばさんの所ではドラム缶風呂だから、忙しいんだよね。

沸かしたお湯を木樽に入れて浴びる方が手っ取り早いし、そっち
の方が手慣れているというか。でも香木風呂がなんといっても最高
だと思う。温泉も捨てがたいけれど、ミネラル分が含まれている場
合、成分によっては能力者がおぼれる可能性もあるとかあるとか。
島国ばかりだもんね。

いびきが聞こえるから、まだおじいちゃんは起きてない、と。

お米を研いで土鍋に入れ、コンロの上に置いておく。次いでキャ
ベツに似た、なんて言ったっけ、この野菜。もうキャベツでいいや
って思ってるそれをみじん切りにして塩をかけておき、おみそ汁と
出し巻き卵、魚の照り焼きの用意をする。

そうそう、パンも忘れずに切らなきゃね。

兄弟が来るなら、1斤で足らない気もするんだけど。仕方無い。
この時間に開いてないだろうし、二重の意味での炭水化物で我慢
して貰おう。

来る予定にしてなかったんだから。

この家にはあの二人が腹10分目になるまでの食材が無いもん。
獲ってきてくれるはずの、肉に期待するしかないんだけど、ワニ
とか野牛とかだったらどうしよう。

最終手段的に、庭で丸焼き、かなあ。

炭、在庫なかった気がする。

エース、獲物出来るだけ小さいのをお願いね。

捌くの大変なんだから。海岸に持つて行って、そこで洗って焼くだなんて、島だから出来るんだからね。こっちじゃ無理……てもしかして角鹿追いかけてたりしない？

大きいの狙ってる？ 邪魔するな？

…うん、邪魔しない。任せるよ。

ルフィは置いてきたのね。

月歩使えろと本当に便利。森を一気に下れるから、平原に行きやすいし。

ゴムつて案外、六式に向いてないのかもしれないよね。剃と紙絵だけでしょ。会得できたの。

嵐脚もか。

それは似非で終わっちゃたんだ。打撃系特化かあ。

わたしも気をつけないと、そろそろルフィに勝率6割持つて行かれちゃうよね。

ふっふーん、まだ5割は保ってるもん。

しばしの沈黙の後、わたしはエースにお疲れ様、と声をかける。

群れから離れた、若鹿を仕留めたのだ。

エースに血抜きだけをお願いする。おじいちゃんとわたし、エースとルフィの4人で、ぎりぎり食べられるかどうかという量だから、干して燻製にする部位が欲しい所ではあるんだよね。

モチロン作った燻製は、兄弟のおやつにナリマス。

そんな事を思っていると、残るかバーカ。

にんまりと笑むエースの声が聞こえた。育ち盛りとはいえ、その量は難しいとは思っただけだな。

食べきるの？

はい。じゃあ全部焼いちゃおう。業務用のオーブンがあるから、一気に仕上げられるし。

ん。クッキー？

…クッキーも作って欲しいって。そんな時間ある訳ないよう。

この前、ダダンおばさん家で食べたのが美味しかった、って、それは新鮮な木の実と一味のみんなが集めてくれてたくるみのおかげ、なんだよ。

今度帰るまでにはまた集めておくって言っててくれたから、それまでは我慢…出来ないんだね。

そうだ、それならこの前わたしが作るの見てたでしょう。材料はあるから、エースが作ればいいんじゃないかな。

コックでもパティシエでも、男性の方が向いてるんだよ。

きつとうまく作れると思うな。

ほら、ルフィも喜ぶと思うし。そうしよう、ね？

本気で作るか否か、悩み始めたエースにわたしは笑む。

クッキーで思い出したけれど、サボも料理上手だったんだよね。

貴族だったのに、エースと肩を並べられるほど強かったし。知識もすごくて、ご飯だって。作るの手伝ってくれたのサボだけだもん。塩をかけて丸焼きは男料理の基本かもしれないけれど、偶には手の込んだ煮込みとかも食べたくなっちゃうんだよね。ほらわたし、あっち側の食生活を知ってるから、作り込みをしたくなるというか、ね。

だから調理器具が揃っている環境にある内は、美味しいモノが食べたいって思うんだ。

エースと話をしつつ、家の中をわたしはぱたぱた走りまわる。

お風呂の準備は既に整い、朝食の下準備も済んだ。エースが狩ってくれた鹿は血抜きをしてくれている。運んできた後に捌いて、焼

くなり煮るなりするための調味料の用意、くらいかな。

空を見ると白んできていた。

見上げる場所が違えば、なぜかその色を変える不思議な空の模様に目を細める。

新世界の青は、濃い。海も空も、見た事のない色を見せる。碧、

蒼、翠、藍。

極彩色じくさいしきが彩る。

マリンフォードから仰ぎ見れば、こんなにも優しい色をしているのにね。

新世界から逃げ帰る海賊達が、前半の海を楽園と呼ぶのも分かる気がする。

ログも前半と比べたら一本道じゃないし、しかも分岐もあるし、少し特殊な記録指針ログボースとよほど腕の良い航海士が居ないと苦労する場所だから。

1カ月。

丁度昨日、対四皇を想定した訓練を行い帰ってきた。

複雑な海流と刻々と変わる環境に、殆どの海兵が辟易とした状態となっていたのが意外だったけれど、何度も訪れ慣れ親しんでいるわたしにとっては良い刺激となった。

自由に能力を使っても、新世界だから、という理由で誰からも責められはしない。

覇気も久しぶりに使いたい放題だった。

ただ覇気を使うと、シャンクスや青い鳥さん辺りに見つかってしまつから、細々としか使えなかったんだけれどね。

風舞いって良いふたつ名を貰った、って思う。

別に風という空を流れる力を自由に、力と出来る訳じゃない。偶

に魚人達が使う空手みたいに、風を布地に見立てて引つ張ったりはするけれど、悪魔の実の能力者達のように扱ったりは出来なかった。けれど月歩を使って空を舞うわたしの姿を見て、誰もが鳥のようだと言う。

空を、海を駆ける姿はまるで、風と舞い遊んでいるようだ。

そうしてマリンフォードに戻ってきた。

けれどひとつだけ、懸念があるんだよね。

変な所で感のいいクザンが、シャンクスとの繋がりを、何となくだけれど察知されたような気がする。わたしの戦い方が、赤髪を彷彿させる、なんて言うんだもん。

確かに。確かにナイフを使う時は、その太刀筋を真似ているんだけれど、そこで気付かなくてもいいじゃないよね。

わたしの戦い方って、誰がどう見ても海兵式だと思っただけかなあ。

「…早いな」

大きなあくびを放ちながら、おじいちゃんが起きてきた。そう言えば空が明るい。

おじいちゃんおはよう。

はい、お茶。お風呂の準備終わってるよ。

ん。ああ、わたしは昨日の夜に入ったからいい。

今からわたしはエースとルフィ迎えに行くの。ふたりと入るってのはどうかな。

うつん、ちがーう。海兵になりに来るんじゃないの。ご飯を食べに来るのよ。

なあに、わたしだけじゃ不服？

説得するのならお風呂の中でどうぞ。

ルフィは分からないけれど、エースはお風呂入る気満々だから。

うん、じゃあちよつと行ってくるね。

エプロンを外し、椅子にかけてわたしはおじいちゃんに手を振る。

エースを思い跳んだ先はいつもの丘だった。東の海では既に太陽が水平線の向こうから顔を出しきっている。

「準備出来てるぞ」

「うはー。大きな獲物だね」

予想していた以上の大きさに、わたしはどうやって捌こうかと思案する。

それからエースの手を取り、ありがとうと伝える。

ご機嫌斜めでは無くなっているみたい。よかったよかった。

血抜きはすでに終わっていて、あとは筋肉の収縮が始まる前に切り分けなきゃいけないんだけど、どう料理すれば一番いいのかと考える。

まあ…なんとかなるか。

折角の命を頂くのだから、ありがたくお腹に納めないと、ね。

「ルフィ、おはよう。起きて？」

わたしとエースは獲物をダダン宅でおすわけをしてから、小屋で眠っている弟を起こしにかかった。

頬をぺちぺちと叩いても起きるそぶりを見せない。さすがルフィ。

「仕方ねエ、こいつこのまま背負って行っちゃおう」

そう言っただけでエースが弟の体を背に負う。目が覚めたらきつと吃驚するだろうなあ。

だって寝入った場所から遠く、マリンフォードにいるんだもの。びよーんと頬を伸ばしても起きる様子がない弟の顔は、幸せそうだ。

「とりあえずマリンフォードに行こうか」
「だな。ジジイの姿を見たら起きるだろ」

うん、わたしもそう思う。

いつものようにエースとルフィと手のひらを握り、空間の点と点を結ぶ。

鹿はエースが掴んでくれている。

縁側の先、石砂利の上に降り立つと、おじいちゃんが待っていた。

「よう来たな、エース、ルフィ」

おじいちゃんは腰にバスタオルを巻き、肩に手ぬぐいをかけた格好で、仁王立ちしていた。そんな恰好で胸張っても全然だからね。中将してる時は、さすが、って思う時もあるんだけれどな。

「お風呂入っちゃった？」

「今から入る。エース、ルフィ、お前達も来い。洗ってやろう。」

久々のじいちゃんじゃ、堪能せい」

相変わらず寝たままのルフィをむんずと持ち上げたおじいちゃんが、エースを連れてお風呂へ向かう。

「んん…エース、おれ…まだ…」

そうかそうか、お兄ちゃんの背中の中の居心地がそんなに良かったか。3人がお風呂入ってるうちに、ちゃきちゃきと解体作業、しようかな。おばさんの所に足は置いて来たけれど、まだ量あるしなあ。

皮を剥ぎ、部位の筋肉にそって刃を入れてゆく。皮はきれいに剥がせばなめして使えるんだよね。良く町に売りに行ってたんだ。ワニ皮って高く売れるんだよ。

兄弟達は骨付きのまま食べるのが好きだから関節で折り unnecessary 脂肪を削いでおく。

内蔵系には寄生虫がいるかもだから、良く火を通さないといけない。部位ごとに分けて、これは冷凍しちゃうの。

わたしも含めて、お腹が空いてた時は構わず生で食べてただけだね。

狩りをして焼けるまで、待て、状態なんだもん。我慢の限界が過ぎちゃうと、かぶり付いちゃうものなの。

お腹が空き過ぎてもうだめだっていうあの感覚は、こっちに来てから知った体験だった。

どれほどあつちが飽食だった、ってことだよな。

よしよし、こんなものでいいかな。

オーブンにも突っ込んだし、冷凍庫にも保存出来たし。

肉よし、パンと魚よし、ご飯も炊ける。おみそ汁と、出し巻き卵、野菜もたっぷり。

山もりのご飯があっても、きつとぺろりと食べきっちゃうんだろ
うなあ。

エンゲル係数高すぎだよな。

狩りして肉獲ってきてるだけ安く上がってるけれど、これ買った
らすごい値段になりそうだし。

「アン、腹減った！！ 肉、肉がいいっ」

もう上がってきたんだ。

「ちゃんと拭きなさい、ルフィ」

ルフィー！！ 言った側から濡れたまま走らないの！

エースまで一緒になっ…おじいちゃん！！

なに朝からハッスルしてるの。

孫が全員、この家に居るのが嬉しいのだろうけれど、60を過ぎ
た大人が羽目を外し過ぎるのもどうかと思うのね。

ほらほらみんな風邪引いちゃう。

そりゃね、わたしの煽りを受けて、エースが二次感染的に倒れるくらいだけれどさ。

野生児は風邪なんて引いた事無いのは知ってるよ。

でもね、そろそろいい加減に服着よう。真っ裸は良くないと思うんだよね。

お・と・な・し・く・しろっ

わたしは思わず、手におたまやしゃもじ、スプーンやフォークなどを投げつける。

狙い目は当然、急所しかない。男を大人しくさせようと思ったら、一番そこが効果覲面なんだもん。しかもわたし、投射、得意なんだよね。

そうそう。

家族水入らずで口から煙吐いてるがよろしい。

回復したら居間に用意してる服着てね。ルフィのはこの前、泊りに来たとき忘れて帰った服が残ってたけれど、エースはそれ着ておいて。

さすがに急所攻撃の効果は絶大だった。

わたし自身は男に生まれた事がないから、どういう感じが分からないんだけど、星が舞うって言う位だから相当なんだろうね。

でもまあ、ご飯前に暴れまわる方が、悪いって事で。

美味しく骨付き肉も照り焼き風に焼けたし、いやあ、朝からご飯づくり頑張った。

この時間になってもクザンが来ないってことは、あっちも不貞腐れてるっばいなあ。

抱き枕が無いと眠れないって、それって大人として、どうかとも

思っただけだ。

恋人のひとりやふたり、クザンならすぐできると思うんだよね。会議が終わったら、わたし、たぶんまた異動になるだろうし。

「おい、アン……これ、海兵の服じゃねエか」

あ、うん。そうだよ。水兵さんの服だね。

「エースサイズそれしかないんだ。コスプレと思って着ておいて」「こすぶれ、ってなんだ」

簡単に言っとね。そういう服着て遊ぶって思ってくれたらいいのよ。

変装、っていうか、忍者っていうか。

大丈夫、海兵ばかりだからエースがちよろつと紛れ込んでても分からないって。

それに。

おじいちゃんがこっそりと持ちかえていた、海兵用の服、こういう機会じゃないと着て貰えないだろうしね。

「お昼はおじいちゃんの船で食べようね」

すっごく美味しいんだよ。

ガープ艦なら乗っても大丈夫だろうし。みんな優しいし、口固いし。あの艦のみんなは心配いらないよ。

それと赤犬大将の船にね。

もう、なんで大将達の話するとすぐ膨れるかなあ。

なだめすかし、島に送るまでだからと渋々袖を通したエースの姿を見て、おじいちゃんが狂喜乱舞したのは言うまでもない、よね。

44・目覚めの朝に（後書き）

大変お待たせいたしました。

アン視線でのお話です。

殿方には申し訳なく。最後のあたり、もし悶絶させていたらごめんなさい。

45・ラストチャンス

「そろそろ下ろして頂けると、嬉しいなーなんて思っんですが」
何度めかの懇願を無視する青雉の背に、アンは溜息を落とす。

数分前の事だ。艦でエリキと共にまとめた報告書を手に、おつるの元へやってきたアンを上司である青雉が確保、有無を言わせず肩に担ぎ歩きはじめたのは。

拿捕、されていた。

用件はわかっている。会議に連れてゆくのだろっ。

しかも自分はいつものように椅子の上でまどろむつもりだ。

不貞腐れもここまでくると、嫌がらせにしかない。

膝の上にアンを置き、最後の最後まで仕事をやらせる魂胆なのだろう。

基本的に青雉は本部の決定に異議を申し立てなかった。一応の道筋として方針を受け入れ、そこから独自に多方面からの視野で解釈する。

その考え方は嫌いでは無く、どちらかと言えば好意的に捉える事ができた。

ただし、いつまでも子供扱いするクザンに対しては文句が山ほど積み上がってはいるのだが。

「そんなにひとり寝が嫌だったんですか」
もしかして一晩中寝つけず、ご機嫌が斜めっているのではないかと。

そう思い言葉すれば、ぴたりと歩みが止まった。
どうやら図星であつたらしい。

「クザン……」

アンは腰を捻って肩に両手を置いて身を起こす。そのまま体を後ろに倒せば腕の中だ。

大切に想って貰えるのは嬉しいし、ありがたかったが、妹以上の関係にはなれなかった。

それは他の大将も同じで、大切な部下、家族に似たなにか。友人、それよりも深く結び付くには、心のどこかで否定が入るのだ。

「大の大人が、拗ねないの。会えなくなるわけじゃないんだし」
頬に手を伸ばし、アンは苦笑する。

そのまま上半身を伸ばして頬に口づけした。

「いつでも朝食を食べに来ればいいのよ？」

ガープも孫の身に何も起らぬよう警戒はしているようだが、訪問や宿泊を否定してはいない。

「ご機嫌なおしてね？」

周囲の海兵がそのほほ笑みに頬を赤くした。とろけるような少女の、幼さと女らしさが同居した笑みに思わず目撃した者達は立ちつくしてしまう。

アンはそんなことなど露知らず、腕の中から飛び降りると手を握り、

「さ、行こう。エリキ副長が待ってる」

すたすたと、廊下に行く。

義祖父曰く、最近のアンは亡き母に似てきたという。もしそうであれば、嬉しかった。

海賊王と言われた父を、少しだけ、ほんの少しだけ名前が知られてしまった人、とし。我がままでだっ子で、愛しい人だと言っていた、双子をこの世に送り出すただけに20カ月もの間、体内に命を留めていた強き母に似てきたと言われるのは、幸せな事だ。

死に分かれたとしても、ここに父と母の命の先がある。

そう思えば、誇りとなった。

（そういえばエース、なにひとりで悶絶してるの？）

会議室まであと少しというところで、アンが畳の上で転がっている半身に話しかける。

（お前なっ　ちよつとまで、ルフィ、おれは遊んでんじゃねエ、ぐあ…）

（ふははー。ふたりで楽しそう。あ、話あとね、会議室着いちゃった）

先行していたエリキと視線があったアンは、青雉との手を解かぬまま走り寄る。

「ああ、艦長を確保してきてくれたんですね。御苦労さま、アン」
いえいえどういたしまして。

確保されたのはアンだったが、説明するのが両者共に面倒だという思考ががつつりと腕を組み、このままで行こうと相成った。

後で必ず、部屋に入室すると指切りをし、青雉を扉の向こう側に追いやる。そしてアンは廊下で複数名の副官と書類を交換し合い、今後の予定をすり合わせた。この会議が終わるまでは青雉艦隊の副長、だ。別艦に移ることになるだろうが、エリキとふたりで示し合う。

会議の席は大将や中將にとって本部の基本方針を直接声で聞き、質問が出来る場だ。それと同時に各艦隊にとっても、連携を確認し合う貴重な寄合になっている。

会議室の対面には小会議室があり、副長達は其中や廊下で艦長を待った。アンは人の垣を越え黄猿の艦の副長を探す。

「こつちですよ、アン」

エリキに呼ばれ、見当違いの方向に進んでいた歩みを、返す。

案内された輪の中にはドレークの姿もあった。黄猿艦内で、副長

の補佐に入ったのだという。

「じゃあ今度の副長会議で会えるかもしれないね。…何処に所属するかにもよるだろうけれど」

5年近くも海軍に居れば、馬の合う、合わないがどうしても出てくる。

自身を否定されても、別段気にはならなかった。年齢や業績、その他に関しても誰かの手を必ず借りて事成していたからだ。なにひとつとつても、自力ではじめから終わりまで、出来た試しがなかった。

だから自身の悪口を言われたとしてもどうという事は無い。言いたいならば言わせておけばいいのだ。義祖父や、デイハルドの威を借るつもりもない。

だが唯一、アンが許せないと思うものがある。

それは自身の名を餌に同僚の名を、貶める時だ。

勿論、そういう時はアンも黙ってはいない。

笑って見過ごしたり、沈黙、感情的に怒っては相手の思いつばだ。

だから、相手が優位に見下げ優越感に浸る為に放った言葉を、こことくへし折る。

たかが16歳と思うなかれ、だ。

そういう事を何度かしていると、面と向かって言われはしなくなった。裏ではなにやら、愚痴っているようだが、人間誰しもストレスを抱え込む。そこまで否定するのは、アンとしても本意ではない。

しかし。偶に公の席で咳払いはある。

仕事をしている時は出来るだけ私情をはさまず任務を優先さるのだが、今日のようにドレークや所属した事のある艦隊の顔見知りと

会えば、どうしても会話が弾む。

「ごめんなさい」

そういう時は相手の目を見て、ほほ笑んだ。
笑顔に勝る感謝は無い。

「それじゃあ、お仕事してきます」

書類一式をエリキに渡し、踵を返す。純白のコートが風を孕むように揺れた。

会議は滞る事無く進行してゆく。

開始直前に入室した大佐、に数名の中将が詰問を寄せたが、青雫と元帥の言を受け着席を許された。とはいえ椅子は用意されていない。3時間近く続く会議中、立って過ごす事になるが、大将達にしがかる1時間と比べれば容易い。

「膝において」

「謹んでご遠慮させて頂きます」

ぽんぽんと膝を叩いた上司に、拒否の意を伝える。しかし伸びてきた手に軽々と体を持ち上げられ、結局のところ座らされてしまった。

横に座る赤犬の眉がピクリと動き、義祖父に至っては拳を握りしめている。

黄猿は周囲の状況を楽しんでいるようだった。

見なかった事、気付かなかった事にしよう。

アンはアイマスクをし、浅い睡眠に入ったクザンをちらりと見、配られていた書類にざっと目を通してゆく。

四皇の勢力均衡図は目立って変わっていない。
さすが統治の長い白ひげとビックマムの領海は安定している。
小競り合いがあるのは、赤髪とカイドウだ。

島の名前を見て思わず吹きだしそうになった。

深呼吸をして、鼓動を静める。

数週間前にシャンクスの船に乗り連れて行って貰った場所だったからだ。

赤髪海賊団は新世界のあらゆる場所を自由に航行していた。支配地を持たず、ただ海を往く。確たる支配地を持たない事で、赤髪海賊団は四皇の地位を得た。

否、だ。あの船に乗るみんなは、そんな呼び名など必要としてはいない。ただ海軍が彼らをそう呼んでいるだけに過ぎなかった。しかしながら、海軍が四皇だと彼らをそう呼べば、周囲も右へと倣う。シャンクスは誰の領地であろうと気にしない。奪うつもりで上陸するわけではなく、ただ食糧の買い出しと休憩の為に立ち寄る。

訪れた島は秋、ふたりは買い出し先行隊に同行した。
そこで、だ。

エースと久々に大喧嘩してしまった。

きっかけは些細な事だった、と思う。

曖昧なのは両者ともに覚えていなかったからだ。たしか二股に分かれた路のどちらかに行くか、だったような気がする。

普段はどちらかが折れ、そこまで酷い言い争いにはならない。

だがその日はどちら共、腹の虫の居場所が悪かった。六式の使用こそ無かったものの、ふたりの喧嘩は、多くの意識不明者を出したという。

後ほど聞いた話だが、そこで一番の煽りを受けたのが、その島を任されているカイドウの一部隊だったのだ。

止めに入ってくれたらしい。
彼のお気に入りの島だから、余り暴れないほうがいいと、教えてくれたらしい。

シヤンクス達は何度か兄弟げんかの現場を目撃しているため、余計な手出しはしなかった。

途中で止めると、燃え草が残るからだ。
綺麗に全部、燃やしつくせば後腐れも残らない。

最も苛烈に言い合っている所へ、その部隊長が割り込んでしまったのが運の尽きだったと全てを目撃していた船員達から聞いたのだが。

その時の記憶を掘り起こしても、覚えていないアンが居た。

エースに聞いても、そんなヤツ居たっけ、だ。

その喧嘩のせいで、赤髪とカイドウの間に火種を生んでしまった。ベックマンも気にするなどは言ってくれたが、海兵の身としては、申し訳ないやら、海軍に報告など出来る訳も無く、悶々としてしまっている。

そんなに悪いと思うなら、おれんどこに来いよ。乗組員の粗相ならむしろ喜んで被ってやるぞ、と誘われたが、いつものごとくお断りしたのは言うまでも無い。

海兵だから、と言えるのは今年で最後だ。

それよりも気になっていたのは朝食時に、義祖父が今年こそ任せおけ、などと言いながら兄弟達と戦闘的な食事をしていた事、だ。

お昼までに終わればいいなあ。

アンはルフィの足りねえ。

その一言に恐れを感じていた。何事ありませんようにと願う。
出かけるときは一言かけて貰えるようにエースには言い置いてきたが、野生児ふたりを町に解き放つとどうなるのか、少しでも心配ではあった。

買い食いに出るのは別段、心配してはいない。お財布も渡してあるし、日常的にお金を使う機会の少ないエースとはいえ、支払い方は理解している。

マリンフォードには基本、海軍に所属する兵員とその家族、許可を得て商売をしている商人達だけが暮らしていた。

しかしどこにでも絡んでくる人物は居るものだ。

エースとルフィは人目を引く。オーラ、とでもいうのだろうか。

森で暮らしているふたりが衣服を選ぶ際、動きやすいモノを重点的に選択する。

だがちゃんと自分達の好みで着たい物を選ばせると、びっくりするほど趣味がいいのだ。

ルフィは途中で面倒になり、何でも良いと言い出すが、じゃあこれを着ろ、そうエースから言われれば文句を言わず袖を通す。

衣服のせいではない。雑踏の中に紛れていても、無意識に視線を向けられてしまうのがふたり、だった。

サボを含め、兄弟達は美男子ではない。ではないが、人を引き付ける魅力を持っていた。

”不確かな物の終着駅”^{グレイターミナル}を抜けて町に行けば、食い逃げはするし、裏町で喧嘩は買うし、立派な不良少年をしている。

だがその喧嘩は、アンの目から見れば子供同士のじゃれあいだ。面倒くさいと言いながらもエースは相手をしてやるし、ルフィは幾人かと挨拶を交わしながら、終わるのを待っている。

それはきつと、仲良くなりたいたい、そういう現れの裏返しじゃなからうかとアンは思っていた。

無条件で横に立たせて貰っている視線で見ても、エースは先頭に立ちにくいと、集団を引っ張ってゆくタイプだ。

基本的にエースは優しい。

生まれを知り、ダダンに預けられ、義祖父の分かりにくい愛情表現で多少は尖ってしまったが、弟やサボを想う時に見せるまなざしは穏やかだ。

側に寄り添えば、安心感も覚える。

そして一度懐に入れた存在には、限りなく甘い。

その雰囲気を、端町に追いやられた者達も感じとっているのかもしれない。

ただし、懐に入るまでのハードルがやたらに高いのだが、それを町のチンピラ達に教えても所詮無い。

議題は進む。

新人と呼ばれる、”偉大なる航路”グランドラインの半分を走破してきた海賊達の話だ。

久々に億を超える懸賞金がかけられた大物新人の名が出ていた。けれど東の海出身者は、このところ、不作らしい。それだけ海賊になろうと思うものが少ない海、なのだろう。

被害は報告されているが、他の海と比べれば、極小と言ったところだった。

その為ジンベエが七武海入りした時に解放された魚人がある島を支配し、悪政を行っている事実を認識しても小さな事だと取り合っていない。

その他の海ではもっと悲惨な状況だったからだ。魚人島に関しては記載もされていない。

人間にとって、所詮、魚人とは遠い世界の住人なのだ。海底で一体何が起こり、どんな思いが渦巻き、何が願われているのか。

地上で暮らす人々の多くが、知らない。知らされてはいない。

ジンベエと仲良くなり、言葉としては聞いてはいなかったが、心が人間に対する悲しみと恨み、そしてやるせない怒りを感じとっていた。

人間が魚人に死を運ぶ。

それは、間違いではない。

かの奴隷解放を行った、英雄も人に関わり死んでいる。

いま世界で出回っている真相と呼ばれているそれと、多くは間違っ
つてはいなかったが、詳細は違った。彼は人の血によって生かされるのを拒否したのだ。

人に飼われ、権力の末が生み出した狂気の宴を見、それでも人を嫌いにはなってくれるなど、どの口を開いて言えるものか。

人間がどこまでも残酷に、冷徹になれる事を、アンは身を以って知っている。

だから言えなかった。謝罪の言葉を。言っても、彼らの心をかき乱してしまうだけになる。

魚人海賊団の船に足を踏み入れ、声なき思いに身を浸せば余計にだ。

けれど意志は強く受け継がれている。太陽の下へと願う声は、今は小さくとも、きっと大きく育つのだと信じた。

例え幾年かかったとしても、彼らは行い続けるだろう。

アンが出来ることがあるとすれば、次の世界会議が行われる席で、デイハルドへ一言、お願い事をするくらいだろう。魚人達の声に耳を傾けてください、と。

多くの世界貴族達が失笑し笑い飛ばすに違いない。だが口を噤んでいてはいつまで経っても物事は動かないのだ。

支部からの申し送りや人員派遣など、細かな異動にチェックを入れ、後ほどエリキが見れば分かるように、下線と追加文を書いておく。

その他、めばしい件は魔の三角地帯フロリアン・トライアングルで行方不明の船が多発し、世界政府から対処するように言及されていること、くらいか。

たしかこの海域を拠点としていたのは、七武海のゲッコー・モリアだったとアンは思考の戸棚から、情報を引き出してゆく。

余り外には出て来ない人物であるため、その容姿は聞いたものだった。

フラミンゴ曰く、死体愛好者。ミホーク曰く、他力本願。
だという。

聞いただけではいまいちよくわからない人物だ。

ペンを指先で遊びながら、彼、に関して知っている情報を並べてゆく。

ジンベエは会った事が無いと言っていた。

ただかなりの大物であるらしい。超人系悪魔の実、カゲカゲの能力者で、自分や他人の影を操るのだそうだ。ただ木や建物などは扱えないらしい。有機物限定なのだろう。

部下、と言えるかどうかは分からないが、彼は死者を操り軍団と
している。

なんでも新世界で人生の転機を迎えたのだとか、世界屈指の名医と言われていた人物を傘下に怪しい生体実験を行っているとか、かつて四皇であるカイドウと何度もやり合った事があるとか、聞こえてくる噂は曖昧な、噂らしいものばかりだが、そのどれもに真実が含まれているのは確かだ。

それをどうにかする対処と言っても、七武海は世界政府より赦免状を交付されてはいても、海賊である。

各々が好き勝手に、やりたい事を行っている私掠者達なのだ。

言う事を聞けと言っても、聞くとは限らない曲者揃いばかりが在席している。

一応は。

政府の監視下に入り、何処に居るかという所在も知らせれば、召集が掛ければ聖地にも数名、足を運んでくる。盟約を結んでいるとはいえ、それぞれの思惑が絡み合つての合意だ。協力関係と言ってもこれほど弱く、もろいものは無い。

アンはそんな七武海達と、頻繁にはないが会っていた。

最も回数が多いのはジンベエだ。政府が発行する、七武海に何らかを要請する書状を渡しに赴く。

他のメンバーには伝書バットを使って送られるのだが、ジンベエだけは海の中を航行し、なかなかつかまらないからだ。その点アンであれば海水を飛び越えて、シャボンで覆われた船内に跳躍出来た。次いでミホーク、くま、フラミンゴ、と続く。

「対処、ねえ……」

議論は白熱していた。

議長である元帥をはじめ、3人の大将と義祖父、長年中将の位に就いている人物達は若手の熱意溢れる言論に耳を澄ませている。

実力行使でなんとかなっているならば、とうの昔にこの問題は解決しているはずだ。

アンは発言者が発する幾つかの問題点を、紙にさらりと書き出す。

魔の三角地帯は7つある前半の航路上全てに覆いかぶさる、最後の難関ともいえる霧地帯だ。ここを外して通過しようと思うならば、風へと入らなければならぬ。軍艦も商船も、そして海賊船も、平等に霧は覆う。

ここを根城にしているのが、ゲッコー・モリア、だ。

アンもその海域を何度か往復しているが、一度も出くわした事がない。それどころか霧さえ晴れて、晴天の元、航路を進む方が多かった。

議題を話し合う、いくつもの声が効果的な手を打ち出せないまま、末尾をしぼめて行く。

「…海軍としては、世界政府としては、か。新世界に入る海賊達を抑えてくれる良質な網、としての効果を期待しての加入要請だった。けれど近年は益より害の方が顕著になってきている。これをどうにかしなければならぬ」

とんとん、とテーブルを叩く小さなペンの音が喧騒を静めた。

「武力で行くのは論外。相手は死者、いくらでも替えがきくし実力を兼ね備えた海兵が行ったところで、影を取られに行くようなもの。とはいえ将校以下を投入したところで、戦力の無駄遣いになってしまう」

それでも前半の海をなんとか越えてきた雑魚を片付けるのにはまだ有効といえるだろう。

ただそのせいで、モリアの戦力が着々と大きくなっているのが政府は気に入らないのだと、簡単に見通せた。

海軍、そして政府が王下七武海を養っているのは、海賊という存在の共食いを望んでいるからに過ぎない。政府や海軍、加盟国に損

害を与えなければ、何をやっても基本的に赦されるのだ。

少女の視線は文字を追う。

「商船の食べられっぷりも酷い。ここ3年に区切っても合算すると72%がこの海域で行方不明になってる。見つかったとしても中身は空、能力によって影を取られた後に光を受けたか、殺されたか」

首輪を付け、鎖で留め置いているはずの狗に、半ば歯向かわれているのと変わらない状態であるといえるだろう。

役に立たないならば代替えすればいいのだが、ネームバリュー、モリアが持つ名の価値、実力以上を兼ね備え、それでなお且つ、政府の下にくだつても良いとする海賊がなかなか見つけれずにいる訳だ。

見つけたとしても、政府のラブコールを受けるかどうかは、海賊次第であり、強制は出来ない。

「税が取れていないというよりも、希少金属を乗せた船も消え失せてるっていうのが、ね。それを待ちに待っていたどこぞの、角を生やした天竜人に役人がせっつかれ、その役人が海軍を、っていうのが本当のところかな」

船名で大体どういうものが積まれているか、おつるの元で居たアンは把握していた。

「交渉決裂させたな…。情報を与え過ぎて、じゃオレの物ってされたっばいな。

これを海軍に何とかしろって押しつける所がえげつな。なんのネゴシエーター為に交渉者を政府内で育成してるのか分からないじゃない」

横に座る赤犬が卓に肘をつけ、面白そうに黒髪の少女のひとりこ

とを聞く。

集中しすぎて雄弁になる癖がまだ抜けていなかったのかと、笑みを結んでいた。

「へえ旗艦つて島一つ使ってるんだ。この大きさで海賊船つて…一度行つてみたいな。おじやましーすつて行けば、入れてくれるかしら」

目を輝かせて文章を読み込み始める。何かが琴線に触れたらしい。青雫がアイマスクの下で薄く目を開いた。

「お休み取れたら行つてみようかな。くまさんに頼むのが確実だよ。そうなれば。」

…戦力的に脅威となるのはやる気を出したゲッコー・モリアと、その配下のゾンビ兵たち」

カゲカゲの実については後ほど本を見るなり、世界に情報を流してもらえば解るだろう。

ただ行き先を告げて、果たして行かせて貰えるかがネックだった。

「ダメ元で釣つてみるかなあ」

元帥とおじいちゃん。ふたりの好物いっぱい作つて、お酒もいっぱい出してお願いすれば、その内首が縦に振れるかもしれない。

「他力本願で無気力症候群になつてゐるらしいから、自らが動く、とは思えないけれど。ゾンビが無限に出てきたら嫌だなあ。サカズキおじさんに来て貰う訳にもいかないだろうし」

そのつぶやきの情報源は一体どこなのかと、黄猿は腕を組んで少女を見た。

「去年は確か軍艦も2隻、使い物にならなくなって戻ってきてる

んだったつけ。後方支援艦は確かに狙い目。海賊らしいといえらしいけどなあ。なんのために、が問題だよな」

海軍全体が痛まない方法でお灸を据え、大人しくさせる方法が無いわけでは無い。

ただ、行かせて貰えるか、が問題だった。

人員を割く余裕はまだ生まれていない。内部改革のお陰で、なんとかとんとん、になってきてはいたが、まだまだ一部の部署に大きなしわ寄せをしまっている。

「目の上のタンコブ、とはよく出来た言葉、だよな」

頭をぽんぽん、とクザンに撫でられ、ふと意識を周囲に向ける。集まっている視線に、アンはしまった、と笑顔を浮かべた。

必殺、愛想笑い、だ。

「ポートガス、あとで部屋に来るように」

「……はい」

青雫によしよとされながら、元帥に返答する。

「いや…まア…モリアに関しては、だいたいそんな感じだからな」

もう発言なんてするものかと、涙目になりながら、両手で口を塞ぐアンが後ろからの声に身を捻れば、アイマスクを上げたクザンがアンを慰める。

周りを見回せば、多くの人物が笑みを浮かべていた。

ここに座る人物達の多くは、11歳の頃からアンを知っているのだから致し方ない。

16歳になった幼子は、海兵としてひとり立ちしてもおかしくは無い実力と、思考を兼ね備えた。

祖父に似たのか、悪くみもなかなか出来るようになってきている。こんな場所で暴露してしまうくらいであるならば、まだ可愛いとすら思えた。

その後、つつがなく会議は進み終了となる。

いつもと変わらずアンを持ち帰ろうとする青雉を、ガープを含む黄猿、赤犬が止め、恒例のボールが入った箱が目の前に示された。

「……………」

右隣上方向から舌打ちが聞こえたが、横に立つ娘は苦笑するしかない。

「ところで中将、安心して引くが良い、とはどういうことですか」
義祖父を見上げ、アンは尋ねる。朝、本部へ歩いてくる時に言われた言葉だ。

「引いてみれば分かる」

自信ありげな笑みに、受け取った箱を机の上に置き、中に手を突っ込む。

「…なんだかいつもと違う、気がする」

いつもの年はこんなに、球が多かっただろうか。この1年で身長も伸び手のひらもエースほどではないが大きくなったはずだ。

確か去年までは手の甲まで埋まらなかった。

今年はいつたい、いくつ入ってた？

中將の入れ替えが多少あったとはいえ、投入された数は殆ど変わらないはずだ。

ちらりと見れば、義祖父がそれはもう、期待に満ちたまなざしを向けて来ている。

ホントにおじいちゃん、なにしたの。

指先に触れる手触りの良い球を幾つか弾き、混ぜる。

箱の中身を見聞色で覗けるのなら選ぶのも楽なのだが、相手の気配を感じ、読み、聞く能力だ。薄い紙の向こう側はどんなに頑張っても見えない。

これ、と決めた球を握りしめ、そろっと引き抜く。

色は白、だった。

大将ではない。

「あ。おじいちゃんのだ」

思わずいつもの呼び名が口から洩れる。

「よくやった！！」

ガープが孫娘を抱き上げる。苦節6年、ようやく望んでいた孫が己の元へ配属されるのだ。その喜びはひとしおなのだろう。

アンもされるがままに、どうにでもしてと力を抜いて義祖父の好きにさせた。

赤犬や黄猿は、やれやれ、とそんなガープを見ている。なにかを知っているような顔だ。

「決まったな。ポートガス、部屋で待つ。ガープと共に来い」

「はい」

アンは床に下ろして貰い敬礼で元帥を送る。

結果が知れば、この部屋に留まる理由は無。会議室に残るのは3名の大將とガープ、そしてアンだけとなった。

「おじいちゃん、タネ明かし、してくれるよね」

何かが引つ掛かって仕方が無いアンは、義祖父を見上げる。

「いいじゃろっ」

にい、と笑みを浮かべた義祖父が箱を孫に放り投げた。

「おおっと」

中を見てご覧。黄猿に促されて開けてみると、中身は白一色だった。

名前を見てみると、すべてガープの名が書いてある。

「わしも手伝わされたわ」

振りかえればサカズキが肩に手を当て、首を左右に振っていた。

「まさか、これって……」

それ以上は言わないように。青雉が口元に指を添えてくる。

絶対何か、みんなで企んでるね？

アンはがぶり、と青雉の指に噛みつきながら、保護者たちの謀りごとに唸りを上げた。

46 - 異邦人

コーヒーの香りが漂う。

店は静かに、開店の時間を待っていた。

床から上げられた椅子はひっくり返されテーブルの上に並べられている。

店主がひとり、湯を沸かし、黒の液体が落ちるのを待ちながら香を楽しんでいた。

そして聞こえる足音に視線を階段へと向ける。

「シノブ。良く眠れたかい」

「マスター。おはようございます。ええ、お陰さまで」

古びた木がきしみを上げる。ゆっくりと姿を現した女性に、この酒場を経営している男がカウンターに誘った。

畑に揺れるような、黄金の麦と同じ色をした長髪の女が、その声が指し示す席へと座る。

「良い香り」

女は瞼を閉じ、笑う。

人懐っこい笑みに、店主もつられ、唇を弧にした。

シノブがこの島にやってきたのは、数日前だ。

その日もこうやって、男がコーヒーを入れ、ひとりの時間を満喫している時に姿を見せた。

この辺りを巡る定期船でこの島を訪れたのだと、店主が聞きもしない内に、勝手に話し出した。

もし頂けるなら、とコーヒーを指さし席に座る。

砂糖もミルクも無い、ただ入れただけを白のカップに入れ、男は

出した。

それを嬉しそうに飲みながら、女は店主に訊ねる。

「ねえ、マスター。私、旅の演奏者なの。場所を貸して頂けないかしら」

娯楽が多くない町だ。人口も他の島と比べれば、少ない。

以前も音楽家たちが立ち寄った際、広場で演奏会を開いていた。

雇って貰いたいのであれば、町長のところにいけばいい、店主は”旅の演奏者”にそう教えるが、あてが違ったようで言い方が悪かったと言ひ直す。

「そういうのではないの」

女はそう言い、少し考えたそぶりをしてからこう云った。

「お金はそんなに必要なくて。ピアノを弾きながら、唄を歌いたいの。設えられた場所で、ではなく、酒場（バー）で」

店主は首を横に振る。店としては雇う余裕がないのだと女に伝えた。

海賊がログを得て走る航路から離れた、”偉大なる航海”（グランドライン）内でも辺境と言われるこの列島では、確かに安定した生活はあれど、景気の良い話はなかなか流れてはこない。

はやり多少の危険と引き換えに、盛況を呼び込む主だった線上中継島のほうから聞こえてくる話のほうが繁華だった。

島内で酒類の需要が無いわけではない。

ただどんなに質が良くても、変わり映えの少ない生活を送る人々はこの島に見切りを付け、他に移住する者も少なくはなかった。

若者は特に、都会に憧れる。

そうしてこの島からどんどんと人が流出し、閑散、とまではいかないが以前と比べれば寂しくなっていた。

最近では港の方に出来た混ぜ物をした安い酒を提供する店に客が流れ、たまにやってくる常連たちと言葉少なく語るのみだ。

言葉少なく、拒否を示した店主にきよとした瞳を向けた。

「じゃあ、私がお客を呼ぶわ」

客が少ない事、がこの場所で弾き、歌うことが出来ない理由ならばそれを覆せばいいだけの話だ。

自信あり気に女は立ち上がると、荷物をカウンターに置き、宣言する。

「もし客寄せが出来たならば、寝る場所と食事、下さいな」

女はそう言い、町の中心にある広場で踊り歌い、その夜にはこの店の椅子を全て埋めてみせた。

かつての姿だった。

流れていた、疎遠となっていた知人たちも久しぶりに顔を見せ、

店主は女、シノブが求めたふたつを用立てざるを得なくなる。

そして今を迎えていた。

連日、この歌い手が居なくなるまでだろうが、賑わいは途絶えてはいない。

「あら… なんだか賑やか、ですね」

通りに面した窓の外に、シノブが視線を投げると道行く人の数が、いつもよりも多い気がして疑問を店主に投げる。

「ああ、軍艦が立ち寄っているからな。物資の補給がてら、海兵が町に繰り出して来てるのさ」

ふうん。

シノブ、は相槌を打ち、店主が作ったランチに手を付ける。

厚切りのパンにバターをたっぷり塗り、焼いたものと近場の農家から朝届けられた新鮮な野菜と卵焼きで、飲み物は淹れたてのコー

ヒーだった。

時計を見れば、13時を回っている。

「随分と寝ちゃったなあ」

シノブはひとりごちた。

昨日は良い額のおひねりが出て、張り切ってしまったのだ。

だりい。

リクエストに応え過ぎて喉も痛え…

高音ばかりの曲を立て続けに歌ったのがいけなかったと、シノブはパンに齧りつきながら思う。

この地方で歌われている農耕の唄や、子供たちが歌う遊び歌を多少アレンジした。

所変われば品変わる通り、調べや詩なども変化する。

留学先を卒業したならば、一定額を貯めて世界を旅しようと決めていた。

それが図らずも、別世界で果たされているのだから、夢がどう叶うかなど実現するまで分からないものだ。

「マスター、ところでその軍艦というのはどなたが乗っているのかご存知？」

「さあな。興味あるなら通りを歩いてる海兵にでも聞けばいい」
つつけんどんな言い方に、シノブはそれも仕方が無いと野菜を口に入れる。

この島は”偉大なる航路”^{グランドライン}内とは言っても、風地帯を挟めば東の海という立地にある。しかも岬から突きあたりに至るまでのログには示されない島なのと言う。

しかも近くに支部があり、海賊被害が少ない土地柄もあってか外部に対して閉鎖的だった。

被害に喘ぐ島に住む住人からすれば、恵まれた環境なのだろう。だがこの町では海兵に余り良い感情を持ってはいない。どちらかと言えば否定的だ。

用が無いなら、さっさと出て行ってくれ。もし町に入るなら金を落として行ってくれ。そういった冷めた感情が大部分を占めている。

それもそのはずだ。

この辺りの海兵は質が悪すぎるのだ。

近辺の島を1週間ほど、長ければ10日前後の期間を滞在し渡り歩いているが、この近辺の島々では基本的に海兵へ好意を持ってはいない。

今までも何度か、海軍の船と鉢合わせになってはいた。だが聞いた事のない名前だったり、海賊と変わらない傲慢な人物であったりと、本当にここは該当するその世界なのかと、いぶかしんだりもした事もある。

身一つで助けられた場所で何とか会話は学んだが、文字まで至れず、まだ解読に難航していた。だからニュース・クーが運ぶ新聞を読むのも一苦勞し、情報収集はもっぱら、こうして会話から得る。

からり、とドアベルと蝶番が鳴る。

「こんにちは。こちらレアヒ・ムデルさんのお店で間違いないでしょうか」

丁寧な言葉遣いで入ってきたのは、海兵だった。歳の頃は15か16程、幼さを残す少女が会釈しながら入店する。

「ああ、それなら私だが」

「ユード町長からの紹介で参りました。ポートガスと申します」

会釈をし笑顔を送らせる少女に視線をちらりと向ける。
へえ。

シノブは今まで出会った事のないタイプの海兵を本格的に両の目で見た。

コートを纏っているならば階級が少尉以上のはずだ。しかもポートガス、この名前は忘れようがない。良くある名前なのかもしれないが、思い浮かぶ続きの名前は、D・エース。

シナリオ通り進むのならば、白ひげ海賊団の2番隊隊長となる人物の名だった。

それとも何かが原因で、目の前の人物が実はそうなのだろうか考える。男では無く女として生まれ、ガープが無理矢理海軍に押し入れた、とか。

まさかそれはあり得ないだろう。

シノブは自身の考えを否定する。今からそれを見に行くのだ。介入はまだ考えてはいない。

出来るならばもっと早くにこっち側に来ていて、幼少の頃、に間に合っていたのならば絶対に助けていただろう人物がいる。

それはシルクハットの少年、サボだ。

もし彼が生き残り、後日作者が描いた扉絵のように3名が揃って青年となって海へ出られるならば、必死になったかもしれない思った。

だが実際には既に終わってしまった出来事だ。

世界はおおよそ、作者が描いている通りに進行しているようだった。そうなれば主人公の旅立ちまであと4年、その兄であるエースであれば1年、時間があつたはずだ。こちらに来てからというもの必死に状況を把握した。無為に時間を過ごしているつもりもなく、期間までに目的地には至れる予定だ。

注意深く少女をシノブは見る。

「…っ」

視線が合う。

黒い瞳がこちらを覗きこんでくるような感覚に陥る。そう、黒い渦に引つ張られ飲みこまれるような、そんな気さえした。思わずきつく瞼を閉じ、目元を抑える。

「ええ、こちらでは質の良い果実酒を取り扱っていらつしやると教えて頂きました。お願いすれば多少は分けて貰えるかも、とお聞きして、参った次第です」

ゆっくりと逸らされた目が主人へと向かう。

シノブは動悸を悟られぬよう、ゆっくりと息を吐いた。手のひらを額に当て目を瞼の上から触れる。

「…ありがとうございます。ではそれはこちらで交渉させて頂きますね。樽は後ほど、数名に取りに来させます。手付けとして半額、お納めください」

ほんの数秒目を閉じていただけのつもりだった。しかし実際に聞こえてきた言葉は終わりを告げる文脈で、え、と時間が飛んだ事を認識する。果実酒を分けて貰いたいという話はいつの間にか終わっていたようだ。小さなカタツムリをポケットから取り出すと、部下に店に何名か来てくれるように話しかけていた。

そして靴音が向かってくるのは、こちら、だと気付いたシノブは慌てて顔を上げる。そして手元にあったフォークに突き刺さっているパンを口の中に放りこんで咀嚼し、コーヒード流し込んだ。

初めまして。お隣よろしいですか。

笑顔で問われた言葉に、シノブはどうぞ、と応えるしかない。

少女は店主にコーヒーを牛乳入りで注文する。

本当はそのまま飲めるのが、味や香りを楽しむには良いとは知っている。けれども少し色を濁してもらえないだろうか。

少女が海軍で飲むコーヒーが余りにも苦くて、苦手になってしまったのだと、ため息交じりに語る。

店主が薄く笑みを浮かべたかと思えば、なにも入れずに、そのまま飲んでみる事を勧めた。

「…頑張ってみます」

人の字を書いて、飲み込む。

それは緊張した時にするんじゃないかと、シノブもくすくすと笑みを漏らした。

「あ。美味しい」

苦味もあるが、程良い酸味やすっきりとした後味にすつと喉を通ると言葉する。

「うわぁ。これなら飲める」

驚きの声はそのまま、店主への褒め言葉となった。

店主のコーヒー談議が始まる。シノブも二日目の朝に聞かされた話だ。

そうしている内に扉が開き、海兵が入って来た。

「大佐、荷車と4名、到着しました」

「お疲れ様です。では船への運び込み、宜しくお願いします」

敬礼を返し少女が笑む。

果実酒は裏の樽に保存されているという。店主を伴い、海兵達がそちらへ向かった。

「あなたは行かなくていいの？」

「はい、わたしが居なくても、みんな優秀ですから」

冷たくなならないうちに、少女はコーヒーを飲み干す。

ごちそうさまでした。

手を合わせて言う礼儀に目を奪われる。

こちらの世界では、余り目にしない所作だったからだ。

「お話というのは、軍艦で歌って頂けないかというお願いだったのですが、いかがでしょう」

少女が上目づかいでシノブを見上げる。

この世界の人間は、基本的に背が長身である者が多い。先ほど出て行った店主や海兵達も170センチ台だ。シノブですら彼らと並べるくらいの高さを持っている。以前と比べれば数センチ低かったが、特に不便に思った事は無かった。

変わって少女だが、小さかった。160も無い。157、8前後といったところだろうか。

手のひらひとつ分くらいはしっかりと広げられる差だった。男達と並んで歩けばすっぽりとその姿が隠れてしまうほどだ。

「ごめんなさいね。私、ここが気に入っていて当分はここに居るつもりなの」

値段交渉に入ろうとしていた会話を切る。だからすぐに出発する軍艦には乗ることが出来ないと断る算段だった。

が、しかし、そう簡単に問屋が卸してはくれなかった。

「そうでしたか」

につこりと笑う少女は、それならば丁度良いと言ったふうに、

「当艦は本日一日、こちらに停泊する予定なのです」

と、続けた。

こいつ天下の海軍に楯突くなと言わんばかりだな。

シノブはなぜか、不自然なほどに親しげに話しかけてくる少女にきつめの視線を流す。

しばらく続けてみても全く効果は無かった。

「昨日、喉を痛めてしまったようでお断りさせて頂きたいの。ごめんなさいね」

と言え、ピアノだけでも構わないから弾いて貰えないだろうか
と食い付いてくる。

こいつなんなの。

はつきりと海軍とは関わりたくないと言ってやろうかと考え、実際に添う口に出そうとする前に、新たなカードを切ったのは少女だった。

「果実酒を買いに来たのは本当。艦内に娯楽の提供が必要で、町長さんに歌い手が居ると聞いてお誘いに来たのも本当」

まとう雰囲気はそのままに、爆弾を投下した。

「初めまして、エトランジェ異邦人」

がたりとシノブは席を立つ。

久々に聞いた言語、日本語だ。なぜそれを知っている。

口から心臓が飛び出てもおかしくは無い、衝撃が走った。

この人物は何を言っているのかと、錯乱し真っ白になった思考の中で必死に考える。

「心配しないでください。政府の役人に告げたり、あなたをあなただと認識して監視下に置きに来たわけじゃない」

ついでに言えばあちこちで歌っている歌の意味も知っているし、
ボーネクリフ内容が”歴史の本文”にかかっているのも分かっている。

少女は席を立たず。丁度視線が合うその席をくりと回した。

「ようこそこちらの世界へ」

何者だとシノブが少女に問えば、いとも簡単に口を滑らせた。

「あなたと同じ外来者……といつてもわたしはこちらでも生まれて
いるから、違うともいえるのだけれど。少しお話がしたくて」

両手の指を絡めながら、恥ずかしそうに視線を泳がせる。

もしシノブが誰かにこの少女が異世界からやってきた、と告げ口
するとは思わないのだろうか。そんな事を思う。

「あ、でも。船で歌って貰いたいっていうのは本当。喉を痛めて
いるならば、ピアノだけでもというのも本音。中將にも了承を貰っ
ているし、訓練ばかりで娯楽が少ないから兵たちの気晴らしにもな
るだろうって」

表情がくるくるとかわる。

きつとあちらの世界でも、こんなに豊かな感情を表に出す、この
年頃は少ないだろう。

習い事に、塾、宿題、学校での悩み、家族とのすれ違い。受験や
進路、就職まで。

拳げればきりがない。

どうやって笑えばいいのか、思い出せない時期がシノブにもあつ
た。

「で、会ってみた感想は？」

「意外と緊張する。ていうか、してる。ジェネレーションギャッ
プが無い程度だと嬉しいな、とか。もし会えたら話したい事、考え
ていたはずなのに」

両頬に手を当て、アンは火照りを隠す。

「これが例の、真っ白になるって言っあれ!!」

拳を握りしめはしゃいでいる姿は、容姿よりも幼い感じがした。

その真っ白思考、今さっきあんたが俺にやったことだろうが。な

に言ってるんだか。

裏から海兵たちの掛け声が聞こえる。木樽を荷台にのせているのだろう。

少女がスツールから降り、シノブを見上げる。

「よければ、なんですけれど歩きながらお話出来ませんか」

ああ…

そう答えてしまってから、シノブはしまった、と口を抑える。いつの間にか引き込まれてしまっていた。話術が巧みだったわけではない。

驚愕の事実を突きつけてきたただけだ。

ここが異世界である、と心のどこかで認めたくなかった否定を破り捨てた。

しかし同じ境遇の人物が、すでに此方側に居て生きている姿を見ると、孤独感がなぜか和らいだ。

話したかった、そういう気持ちも分かる。

言葉が分ならず、意味も理解できず、年甲斐もなく泣き叫んだ日もあったからだ。

「話はまとまったかね」

「はい、詳しくは船に至る道ですることになりました。ね、シノブさん」

飲んでいたコーヒーをシノブは嘔き出しそうになった。

しかもいつそいう話になったのか、説明して貰おうかと聞こうとした最中、この世界の共通語が少女の口から発せられ、驚きのあまり気管に入った痛みに咳を連発する。

言語の切り替えが早い。シノブは思わず、日本語を口にしそうになった。

しかもまだ名前を教えてもいないのに、少女が名を呼んだ違和感にも疑問が生まれる。

ああそうか。町長に会ったって言ってたな。そこで名前を聞いたか。

自己解決しつつ、口に手を上げ涙目になりながらカウンターの木目に肘をついた。

「おいおい、大丈夫か」

「ええ、軍艦へお呼ばれだなんて初めてだったから」

必死に本来の言葉遣いになりそうな自分を戒め、シノブは表情を取り繕う。

食べ終えるまで待つて貰えるかと聞けば、了承の言葉が戻ってきた。

海兵達に先に帰るよう指示する少女を横目で見る。

ちやっかり主人からおかわりのコーヒを貰い、椅子へ座りなおし嬉しそうな顔をして飲んでいた。

先ほどのやりとりで、今までの海兵とは違う、そう思ったのだから。

この店の店主は、気難しくて有名ならしい。シノブ自身はそんなにとっつきにくいと思わなかったが、昨日の夜、来ていた客が言っていた。それにしても初対面でここまで愛想良くなるとは、町の者が見ればなんと言っただろう。

世間話をしながら、主人と少女は歓談していた。その横で必死にシノブは食物を口に入れ胃に押し入れる。

カラン、とフォークが空になった皿の上で音を立てた時には、すっかり打ち解けて会話する両者の姿があった。出会って、ものの30分ほどしか経っていない。

少女を傍から見ていて思った感想は、聞き上手である、ことだらうか。

話を引きだし、語らせる。

どこぞの接待を彷彿させるような、感覚を得る。

…こいつも見た目通りじゃねえな？

シノブはコップに残ったジュースを飲み干すと、手を合わせた。

「ごちそうさま、マスターじゃあ少し外に出てきます」

「ああ」

海兵も身軽に椅子から降り、シノブから半歩ほど遅れて歩きだす。美味しいコーヒーをありがとうございました。

笑顔で会釈するのも忘れない。

扉の外は光で満たされていた。

港よりも高い位置にある町からは、軍艦が良く見えた。犬を船首に据えた大きな船だ。

少女は時折すれ違う海兵と親しげに会話し、手を振って別れる。

見た事がある船だと、シノブは記憶を手繰る。

確か、たしか…ウォーターセブンで出て来ていたはずだ。

そう、ガープ、初めて原作キャラと遭遇かと胸を高鳴らす。

となればまさか。悪い予感を振り切るように数回頭を振った。

会ってみたくて東の海に向かっちゃいるが、まさか、な。本当にエースが女で生まれてるっていうのはごめんだぞ。

ちらりと見た海兵姿の少女と視線が合う。

「ふうん、原作、ね。わたしが居た世界ともちよつと違うのか。多重螺旋世界っていう話を、何かの本で見た事はあったけれど。そ

れかな」

涼しい顔をして横を歩いていった顔に笑みが浮かぶ。
見上げてくる視線は猫のような、悪戯心を宿したような光があった。

「それが、あなたの素？」

「一面、と言って欲しいな。言葉遣いもそのままどうぞ。日本語が話しやすいのだったら、そっちでも構わないよ」

このやろつ。

店では猫被ってやがったな。

「…ちよつと加減しろよ」

シノブは肩をすくめながら小声で以前の口ぶりを披露した。

「えへへ」

照れたように、少女が笑う。

褒めてないと言っても、この手のタイプは無視するだろう。こちらの言葉を都合の良いように解釈し、話を聞かない。

「そんな事ありませんよう。ちゃんと人の意見も聞くし、無理なお願いは出来るだけしない主義です」

きりつと、今さらされても仕方が無い。人間同士、初対面の印象は大切だ。

「ちよつとまで。もしかして、見聞色使えるのか」

「ええ。しっかりと意識を締めてくださいね。丸聞こえです」

基本的に人間は感情を垂れ流してしまう生き物だから、出来るだけ聞かぬよう、気にしないようにはしているけれど、横に居ればどうしても聞こえてしまう訳で。

説明を受け、シノブはため息をつく。

「…それを最初に言っておいてくれないか」

え。だって。

少女が困ったような顔をする。

「あなたの世界では、この世界そのものが漫画という手段で現されていたわけでしょう？」

知ってるものと。

ちよつとまてやああああああ。

シノブは音声として絶叫する事だけはなんとか、懸命に押しとどめ、横を歩く少女に視線を落とし睨みつける。

「そこまで分かってて、何様だ。こっちの思考読みやがって、神にでもなった気分なのか？ 実際のところは俺を笑いに來たつてのが本音だろうが。はっ、」

シノブの感情が言葉となり放たれる。少女はそれが止まるまで待った。

そしてあなたは重大な見当違いをしていると前置きし、

「こっちに來てからも、神様なんかと会った事なんてないよ。神様になる気もなってる気も無い。そんな力があつたら、とつくの昔に世界をひっくり返してる。はつきり言つてこっちの世界も理不尽な事ばかり。支配するものとされるもの。至る所で戦争が行われ、利権をかけて醜い争いが続けられている」

少女は視線を、シノブから逸らさない。

その瞳には感情が含まれてはいなかった。

「笑いに來た？ 冗談じゃない。わざわざそんな事をやつてる暇なんてないもの。わたしには残された時間が余りにも少ない。あなたに構つてる暇があつたら、そちらを優先する」

挑発が含まれている気がした。いや、違う。少女は普通に、ただ

現状を語っているだけに過ぎない。

しかし感情が収まらなかった。

「…お前に、なにが分かる！！ 気付けばここに居た、俺の苦しみが！！」

「…同情されたいの？」

その言葉に、シノブは齒を食いしばる。

啞然とした。少女の一言が胸に刺さる。

「……そんなつもりじゃ」

少女は無表情だった頬をほころばせる。

道からそれた芝生の上へシノブを引きつれ、そこに座らせた。

両手で頬に触れ、シノブの頭部をぎゅっと胸に抱く。

「ひとりじゃないよ。大丈夫、あなたを知る、わたしがいるからもう、大丈夫」

小さな囁きが、シノブの耳に届く。

「…もういい、落ちついた」

数分後、そう言っで密着していた体を離す。柔らかな匂いに、落ちつかされてしまった。

そうして思った事を思考に置きかえる。

それにしても胸ねえな。

「一言多いっ」

肩を突き放すが、腰に回していた手がかつちりとそれを阻む。

言葉には出してはいない。内心で思ったただけだ。

見聞色をただ便利な技能だと思っていたシノブは、意外な欠点に気付きほくそ笑む。

「ほーほー、気にしてたのか、そりゃ悪かった」

シノブは豊かな胸を見せつけながら視線を上げた。

「むきー！！ わたしだって、その内に、きっと出てくるんだからっ」

不思議だった。

わだかまりが、一瞬で消えたような気がする。

あれだけ胸の内で苛んでいた何かがすっかりそげ落ちた感じた。

「唄だっけ、歌ってやるよ。その代りと言っちゃなんだが、連れて行って欲しい所があるんだ」

「何処？ 航海上の拠点であれば、わたしの権限でも乗せられるとは思っけれど」

少女が行き先をたずねると、今から向かう方向だという。

「丁度良かった。わたし達もドーン島に行くところだったの。中将にお願いしてみるね。ダメなら他にも手はあるし」

そう言って少女は立ち上がる。

差し出された手を取り、シノブも並んだ。

「あ、言わなくても分かるだろうが……」

「うん、モチロン秘密。そんなこと言ったら、間違いなく頭大丈夫か、って言われるし」

ふたりはテレビ番組の話をしながら丘を下る。

「まあいろいろと、心積もりだけはしておいてね？」

ああそうそう、まだ名前を名乗っていなかったよね。ん、まあ、それも後でいいか。

少女と道なりに戻り、歩んだ先で、その言葉通り、シノブは大絶叫することとなる。

47・セイレーン

なめらかに動く指が弦を弾く。

音が生まれ、流れる調べは海兵達の耳に届き、暫し聞き入る者もいた。

出会ったその日、船で歌う事を了承したシノブは、船長であるガープと対面した。

がっしりとした体躯に、左目に沿ってついた傷跡、話し方、どれもが想像していた通りの人物で、思わず本物だと叫びそうになったのは言うまでも無い。

表紙上にだけ見ていた二次元をこの目で見る事が出来た時の感動はひとしおだ。

余りにもガン見してしまった為、中將のファンだとされてしまったのが後の祭りだったが、それでも原作にあった人物達と触れ合え、ここが現実だと思い知らされていた。

怪我をすれば血も流れ、痛みもある。

笑いもすれば喜びもある。

ガープ中將が船長を務めるこの船は、規律を守りながらも程良く緩く、居心地が良い船だった。

だから真昼間にハーブを持ちだし、弾いても注意を受けたりもしない。

あの日、ポートガスと名乗る少女との出会いが、自分の分岐点だったのだろうとシノブは考えていた。

手を取るか、はたまた拒否するか。

強引に引っ張られた感もあるが、巡り合えてよかったのだと思いたくありません。

そう思わないと、やっていけないからだ。漫画の中で見ていたキヤラ達が、こんなにも賑やかを通り越して騒がしい、五月蠅い、黙ってる、までになるとは思ってもみなかった、が本音だからだ。

「シノブ、あれ歌いてエ！！ あれ弾いてくれ！！」

「ルフィ、もう今日は他のものを弾かせて」

リクエストされた曲は海兵達が普段聞く曲ではない。

昨日にアンが口ずさんでいた音を拾って弾いてみると、ビンクスの酒となった。分からないように歌っていたらしいが、シノブは前髪を掻き上げ、音大生を舐めるなと鼻で笑った、まではよかったのだ。

その歌知ってる、シャンクス達が歌っていたものと飛びついてきたのがルフィだ。

心許す姉が親しく話し、兄も、姉ほどではないが会話を増やしていた人物に、弟が人見知りする訳もない。そもそもルフィという存在は、人見知りをしない性格なのだろう。本能的に自分を助けるものに興味を引き付けられ、それを懐の中に内包する。

シノブは兄弟が初めて出会った場面を”知っている”。そしてその後、どうなるのかもある程度、紙面上にあったものだけは”覚えていた”。

たったひとり、加わるだけでこんなにも変わるものかと、内心でこつそり思ったのも本当だ。D兄弟が知る海兵と言えば、祖父であるグループ以外には存在していなかった。それが双子というただひとりが居るだけで、海軍の船に乗って故郷に帰るといふ、考えられない展開になっているのだ。性格は多少尖っているようだが、問題ない程度だ。思春期の年頃相当の、健全さがある。

このまま進めば、時代が終わるあの瞬間もどうなるのか。

先の見えない未来に、目的があると語った友人に、一筋の光を見

たような気がした。

「なあシノブ！！ 弾いてくれよ！！」

「後でね、後で。あれは夜の方が楽しげな雰囲気が出ていいと思うのよ？」

なんとか晩に1曲だけ弾くと約束して、シノブが奏でたのはベートーヴェンと同時代に活躍していたドウセクの曲だ。妻や友人たちにハープ奏者が多く、他の作曲家に比べ、多数の曲を残している。

シノブが持っている楽器はサウルハープと言われる一番小型の豎琴だった。

専門はピアノだが、一応バイオリンも弾ける。ハープに至っては趣味で、曲を作る時に使っていたくらいだ。それが今や主な演奏楽器となっていた。

こちらの世界でも楽器は多種多様に存在している。あちらとほぼ変わらない程度で、調律師も存在していた。

「あんまりシノブさんを困らせちゃだめだよ、ルフィ」

書類を持ったアンが、甲板に無音で出現する。気配を消している訳ではないらしいが、いつの間にかそういう足運びになっていたのだと言う。

「げえ、もう終わったのか。じいちゃん出て来なくていいのに」

心底嫌な顔をして、ルフィが姉を見る。

「もう。そういう顔をしないの。可愛い顔が台無しよ」

びよんと片頬を伸ばしながら、アンがほほ笑む。書類を持って何処に行くのかと聞けば、マリンフォードへこれから跳ぶという。

「アン、この書類は持って行かんのか」

「民間人乗艦申請書でしょ。もう面倒だから、付属権限で、って

思っただけねど……」

デイハルドの名前を使うと、政府に目を付けられる可能性もあるのか。

うーむと悩み、葛藤した結果、書く事にしたらしい。

「シノブさん、ここにサインお願いします」

船に乗り込んでから、苦手としていた書き文字を、シノブはスパルタされた。

教師はアンだ。英語に綴りが似ているから日常的に使うものだけでもと、ざっと教え込まれた。

横に座っていたのはルフイだ。

「読み書きは基本！ 航海先のご飯屋さんで、メニューが見れないとご飯食べられないわよ。さあ、観念して覚えましょうね」

副長としての書類仕事をしつつ、姉は弟の教育に余念が無かった。机を隔てた向こう側では、エースが航海術の本を流し読みしている。分らない所があれば、アンに聞いていた。

兄と姉が出来すぎるのも弟に悪影響を及ぼしているのではないかと、シノブは思うが口には出さない。

このふたりは何でも出来すぎるのだ。理解力もあれば応用も出来る。

「おじいちゃん、こちら辺で救助したって事にしとくね。わたしの知り合いだって書いたら、絶対クザンがCP動かしそうな気がする」

「そこら辺は好きにせい。あやつは……お前に関しては小細工に気付きよるからな」

にい、と笑うガープ中將の笑みに、孫娘が乾いた笑いを返す。

祖父権限で、マリンフォードに朝食を食べに來ただけだった兄弟は、艦に乗せられ東の海へ向かうこととなった経緯を、シノブは耳にたこが出来るほど聞かされていた。

原因のほぼ90%位はルフィの食欲だった訳だが、ここ数日の食事風景を見るとエースもどっこいどっこの量を食べているのを目撃している。一体こいつらの胃袋はどうなっているのかと思いつつも、さらりと流し読みしていたシノブは、現物をみて啞然となった。

「これでも腹8分目位なんじゃないかな」

本来の食事を聞いてゲンナリとしたのもいい思い出。分量は記憶にとどめず、忘れてしまった方が精神的にも楽になれる、そんなレベルだった。

その時に、アンが持つ特殊能力も知ったのだ。

制約があるとはいえ、瞬間移動が出来る利点は大きい。

「シノブもなんかおもしれエカ、あったりするのか」

「さあ、どうでしょう」

手すりの斜面を滑るルフィの問いをさらりと流す。

それじゃあ本部にちよつと行ってくる、そうアンが言葉した直後、海の彼方を見て動きを止めた。

「見えるか、あれ」

「うん…」

「どくろが見えるぞ！！ 海賊だ！！」

D兄弟達が視線を向ける先を、監視の役割を持つ海兵が望遠鏡を向ける。

「アンさん、まだこちらでは識別不明です」

慌ただしく海兵達が動きだす。

シノブは邪魔にならぬよう、そつと場所を移動した。

数日前にも海賊との戦闘があつた。

海兵は海賊を悪、と断ずる。それは間違いではない。

海兵側に居るから、ではなく、行いを指してだと言う。

「普通にこの海を航海するなら、しても良いと思つてゐる。暴力行為を行わず、奪わず、往くなら」

しかし多くの海賊は奪い、黷り、殺す。

それが海賊たる所以だと言わんばかりに、だ。

この世界に生きる人々にとって、海賊は、賊である者達は害悪ではない。

「ONE PIECE を求めるにしても、もうちょっと考えれば良いのにね」

最初は誰もが野望や夢を追いかけるために海へ出る。

だがいつしか、追いかけている存在の遠さに諦めるのか、割り切るのか。

理由の為の手段から、手段を正当化する理由を重ねるようになる。そうなれば奪略の、辱めの、殺人すら海賊であればやってもいいと己を貶めていくのだと、悲しそうに笑つた。

「海賊は悪だよ」

シノブは啞然とした。

ゴール・D・ロジャーの血筋ならば、追いかけて止まないと思つていたのだ。

例え生まれ変わったとしても、あちらの常識で自分を縛つていても、囁かれないはずはない。間接的に関わっているシノブであつても、歌を唄ってしまうのだ。運命が中核の中に生まれた存在を放っておくわけがない。

「ありやあ、フラスコ海賊団か」

舷に腕をかけ、ガープも海原の先を見る。

「わざわざ西海から遠征？」

最近よく聞くようになった海賊の名前だ。額を上げる度に刷られる手配書には謎の液体を構えるピエロのような顔がにこやかに写っていた。

「行く？」

そうじゃのう。孫娘の言にガープ中將が腕を組む。

ボガード副長も、中將がなにを言おうと直ぐに行動に移せるよう後方で待機していた。

「いいや、アンは予定通り本部へ行け。あの海賊はわしが責任をもって沈めよう」

「はい」

アンは敬礼し、兄弟達へ手を振って姿を掻き消す。あつという間だった。

瞬間移動を見慣れている海兵達は、なんという事も無く見送ったが、初めて見るシノブは目をぱちくりとさせ、思わず声を上げた。それくらい見事な消えっぷりだったのだ。

「ボガード、先陣を切るアンの代わりを探せ」

了解、副長がそう応え選定へと入る。

英雄と呼ばれ、慕われているガープの元に集う海兵達は誰もが優秀だ。のびのびと、それぞれが得意とする分野を伸ばし、得意とする分野で活躍していた。

「おれが行く。いつもアンがやってる事なら知ってるからな。穴埋めしてやるよ」

無造作な物言いを放ち、エースが海兵たちの間に混ざる。

その様子をガープが面白そうに眺めていた。

「海兵になる心積もりでも始めたか？」

エースが行くならおれも行くぞ、と鼻息の荒い弟の頭を押さえながら、そっけなくエースが答えた。

「なわけあるか。……アンがな。この艦の奴らとそいつの事心配してやがるんだ」

混ざる理由はそれで十分だと吐き捨てる。

「素直じゃないのう。馬鹿孫めらが」

ガープが目くばせするまでもなく、ボガードが兄弟の側に移動していた。気心のしれた腹心だ。ある程度の秘密も事あることにこぼしていたが、驚く事無く、全てにおいて冷静な判断を下している。

「あとな、やるなら一撃で仕留めろ、だと」

エースは数段上の位置に立つこの船の責任者を見る。

その一言でガープは海賊船がどのような状態になっているのか、に気付いた。

「配置につけい！！」

中将の言の元、海兵が訓練された一糸乱れず動き出す。

自然風以外の動力を作動させ、軍艦はそうして海賊船と接舷した。

風に血なまぐさい匂いが混ざる。吐き気を催すような、鉄と血と、硝煙が、鼻孔を刺激した。

衛生兵が流れ弾に当たり、苦悶の表情を見せる海兵の応急処置を行っているその横で。

握りしめた拳が手を紫色に変えていた。

「……こんな、こんな殺し合いふざけてる！！」

シノブが叫ぶ。命の価値は、生きている限り変わらない。殺していい命も、殺されてもいい命も、あるわけが無かった。海賊だから殺す、海兵だから殺す。

それを黙って見ていられるほど、達観など出来はしない。

目の前で倒れた海兵から流れ出た血だまりが、靴先に届く。

「動くな、死にたいのか」

鋭い眼光がシノブへ下る。横に立つガープが腕を伸ばし制した。

「抵抗する者が居る限り、抜いた刃を収められん」

ガープが静かに言葉する。

海賊達も、自らを海賊と称した時点から、覚悟は出来ているはずなのだ。海軍と会えばどうなるか、同業者と会えばどうなるか。

それでも。それでも、だ。

気持ち割れきれなかった。

偽善と言われるだろうが、そんな事はどうでもよかった。

漫画の世界ならば、さらりと、流せていたのが不思議でならない。

アニメでもそうだ。淡々と話が進み、その中のキャラ達が現実をさっさと受け入れては先に進む。

命のやり取りが紙面で踊っても、それは現実では無いから受け入れられていたのだ。

目の前で惨状を見せられ、そうですか、と黙ってられる方がおかしい。

自分にも何かできるはずだと、何かしなければと、焦燥感に襲われる。

現実いた世界でも戦争は起こり、飢饉もあれば食べ物を捨てるほど裕福な国もあった。

だがそれを知っていて、身の回りのことだけに目を奪われ、生きていられるのは遠い世界の出来事だからこそだ。

”命が勿体ない”

シノブも思っていた。

頂上決戦のシーンで、戦うほどに乾く、とその言葉通りどうやってこの乱闘が収まるのかと。

正義だ悪だという言葉も突きつめればこじつけに過ぎない。

やっている事は、両者とも変わらない、人殺しだ。

所詮、戦争が無い国で生まれ、船上の生々しさや戦う両者の理由や、その根底にある願い、水面下で行われている駆け引きなど全く分らない。

だが命というものは尊いものだとかえられてきた。

目には目を、歯には歯を。

間違っていないのだろう。武力でしか守れないのだろう。だがそれを、だからといって簡単には受け入れられなかった。

この思いは、わがままだ。物事の筋道が通していないのは、シノブだった。

海軍は世界の、世界政府が作り上げた道理で動いている。人々を守るために、海軍は、理にかなった行為をしているにすぎない。

納得できない、というわがままだ。

「止めてやるよ、この戦い。ひとり残らず戦いをやめたら、海兵も引いてもらおうか」

「ほう」

英雄の目が一度見開き、面白そうに細められる。

「ならば約束しよう」

ガープの言を聞き、シノブは自身の姿を変えた。

……能力者じゃったか。

ガープは物言いを変えた女性へ目をやる。

向けられた眼光には怒りが含まれていた。やりどころのない、苛

立ちだ。

流れる金髪はそのままに、腕は翼に、両の足が人魚のごとく形成かたちなす。

長年生きてきたが、見た事のない生き物の姿だった。

流れ出たのは歌声だ。

戦いの中、怒号が響き渡っている。喊声、雄叫び、助けを呼び、苦痛に喘ぐ。

その中を歌声が渡る。

動物系幻獣種の悪魔の実、セイレーン。

普通悪魔の実を食べれば海に嫌われかならずちになっってしまうが、人魚の姿になれば水の中を自由に動き回れ、鳥の姿になれば空も飛べるという両得な能力だ。

ただし人の姿で海に落ちれば、能力は発動せず、そのまま溺死してしまうという、限定的な優遇がなされている。

シノブはその能力を使い、海と島を幾つも渡ってきた。

難点であるのは、まだこの実の能力を使う際、人間の形を成したまま、発動できないということだ。人のままでは歌声は響いても、効果は発動しない。

その中を声音が、意識の槍となり全てへと突きささる。

しかし喧騒は収まらない。剣戟が、銃声が鳴り止まず、叫喚が続く。

（エース、ルフィに伝えて。側舷から離れてって。…すぐ戻る。それまで何とかお願い）

急に何事だと、エースが弟を探す。騒ぎの中心を見れば大体そこ

にいる、と兄はゴムゴムの体を使って海兵に混じり、海賊達へ打撃を与えていたルフィを視野に収める。

薙がれる白い鉄光を読み、避けながら人と人の間をすり抜けた。見聞色で動きを読めば、相手の何手も先を簡単に予測出来るようになる。

「こいつはおれの弟なんだ。手出しは無用で頼む」

六式の技を使い、海賊が力を込めて振りかぶった剣を片手でエースは受け止めた。鉄塊は便利な技だ。肉体を鉄以上の固さに、鍛錬の度合いで変化させる事が出来る。

腕を払い、相手の体勢が傾いたその瞬間を狙い、ふわりと身を空中に浮かせ嵐脚を両足から放ち、押し寄せていた人垣を崩した。

方割れの気配を感じ、空に目を向ける。

「こんなにやろう！！ エースにばかり、いいところもって行かれてたまるか！！！」

繰り出したのは銃を複数回叩き入れる、銃乱打だ。ヒストル
ガトリング

「つたく、船壊してどうする」

離れさせろ、と言っていたのはこれかと、エースは身をひるがえした。

能力者にとって、海で戦う場合足場が重要となる。

剃は覚えても、月歩はまだ習得できてはいない弟の手を兄が掴み取り、空を蹴った。

空から歌声が降る。

「シノブさん！！ 折角の詩、怒りが籠ってたら煽っちゃうよ！肩の力を抜いて！！ 折角の美人さんが目がつり上がって鬼の形相してるよ」

正義のコートが風を受け音を立てる。海賊船のマストに降り立ったアンが旋律に沿って言葉を紡ぎ出した。

「…分かつてるわよ、それくらい!」

すまし顔をしたシノブが目を瞑る。鼻孔から息を吸い、聞こえる声に添うように高らかに歌い出す。

その声音は鈴を振るような、甘さや誘いを含む。誰もが戦いを忘れてその場に立ちつくした。そして力が抜けた手のひらから、剣を、銃を手から落としてゆく。敵味方入り混じりまどろむような恍惚とした面持ちへと変化し。瞼が落ち、今すぐにも倒れてしまいそうな表情を誰もが浮かべていた。

「おっと」

エースは間一髪で眠りに落ち倒れる寸前の弟の体を捕まえる。

「能力者だったのか」

柔らかな歌だった。耳に心地よく響き、どこことなく安心できるような雰囲気がある。

「これね、子守唄なの」

いつの間にか弟を背負ったエースの横に、アンが降り立っていた。

「良い歌でしょ」

ねむれよい子よ 庭や牧場に

鳥もひつじも みんなねむれば

月はまどから 銀の光を

そそぐ この夜

ねむれよい子よ ねむれや

家の内外 音はしずまり

たなのねずみも みんなねむれば

奥のへやから 声のひそかに

ひびくばかりよ

ねむれよい子よ ねむれや

いつも楽しい しあわせな子よ
おもちゃいろいろ あまいお菓子^{かし}も
みんなそなたの めざめ待つゆえ
夢にこよいを
ねむれよい子よ ねむれや

アンもエース達に分かる言葉で詩を歌う。

「これはね、フリースの子守唄って言われてて、有名な曲なのよ
あちら側の母に良く歌って貰っていた。懐かしい思いが胸にこみ
上げてくる。」

「それ、小さい頃歌ってたやつだな」

「あ、うん。ひっそり歌ってたつもりだったんだけど」
頬を染めてはにかむアンの頭に、エースが顎を乗せる。

心に大きなわだかまりが生まれ、そしてそれがしこりとなる前に
溶かした歌だ。忘れるはずもない。

海賊船だけでなく、今まで戦いの最中にあつた両者共々、その場
に崩れ落ちていた。

「すげエ能力だな、あれ」
そうだね。

アンもガッツポーズをする、シノブを見た。唇が変える形に満面
の笑みを浮かべる。

「運良くシノブさんの能力も見れた事だし。ロープで縛ろうか」
義祖父も立つたまま、鼻提灯を作って眠っている。

今現在この2隻の船の中で、起きているのはシノブと双子だけだ。
実の力によって眠らされた海賊は、海兵も含めて手荒に扱っても
なかなか目を覚まさない。

「本気で歌ったのに」

渡り板を伝ってやってきた姿にふたりが目線を向けた。シノブが悔しそうに笑んでいる。

「生きた海楼石って言われてますからね。実の力を無効化するくらい、お手の物です」

言葉の意味を考える。

海楼石は能力者の力を一時的にだが無効化する海の鉱物だったはずだ。

エースと握りあつた手、それが歌の効力をかき消したと言う訳か。周囲の状況を見回し、腰に手を当て息をついた。

手の内にある謎はまだある、と暗に示され、シノブは口角を吊上げる。

「秘め事は後幾つほど？」

「さあ。秘密の果実は酸いか甘いか。お楽しみ、ということだ」

その内語ってくれるのだろうか。

シノブは言及せず、戦いの終わりを告げた。

「ええ、歌姫のおっしゃる通りに」

軍艦の倉庫より大量のロープを引っ張り出し、手際良く海賊達の体にかけてゆく。

その縛り方は鮮やかだった。時折、これはヤバいんじゃないだろうかという縛りもあり、シノブは苦笑しながら指をさした。数はひとつだけだったが、亀の甲羅を模した縄の形はやめておけと思う。

答えは唇の前に差し出された人差し指だ。

「ここだと、モーガンさんが居る支部が近かったと思うから、曳航出来るかな」

たぶん、きつと。

支部からテキーラウルフに”労働力”として送られるだろう。

そういう仕組みを、作ったからだ。シノブは、知らない。知ればきっと怒るだろうなあ。そんな予感がした。

向こうとこちらでは、徹底的に社会の地盤が違う。

あちらでの悪と善が、こちら側ではイコールで繋がる考え方ではない。

時代により、世代により、暮らす地により、価値観や考え方が違うように、こちらのあるがままを受け入れなければ、世界を否定しなければならぬ。今ある全てが偽りだと、アンには言えなかった。世界には今の体制に疑問を抱かず、穏やかに暮らしている人もいる。その人達にあなた達は間違っている、と、革命軍のようには叫べなかった。

こうあるべきではない、と。

長きに渡る、世界貴族を頂点とした世界政府の支配に疑問が投げかけられ始めている。

この動きはもう止まらない。

そうなった時に、シノブはきっと近い考え方をもち、革命軍に身を寄せるだろう。

構わないと思った。

選択は無数に、ある。その中でこれ、と選ぶ道ならば二股の路をそれぞれ進むんでも、いい。

今の仕組みのまま。存続させる手立ても、ある。

幾つかその選択肢が、両の手の中に落とされていた。政治的にも、武力的にも。揮える力を渡されていた。

けれどそれは、その気持ちは傲慢だった。心に色があるならば、その思いは闇といえる。全てを塗りつぶす、黒。

アンはほぼ笑みの仮面を被り、必死に押し殺す。

48 - underground

その人物と出会ったのは、本当に偶然だった。

とある任務で顔を合わせ、それぞれの所属も任務も違った為、もう会おう事は無いだろう。そう思っていた人物だった。

名前も初対面時に名乗られたマニエ、とだけしか知らない。

義祖父の権限を使い調べてみたが、そのような人物は世界政府のどこにも存在してはいなかった。

これ以上踏み込んではいけない。本能が警告を発したのに従い、足を後退させる。

アンはここまで、と調べる事を止め、引き返す。

好奇心はあったが、これ以上の詮索は無用、と打ち切った。

踏み込めばどうなるか、容易に想像がついたからだ。CP9も秘匿された情報であったが、暗闇度はその比ではない。

臆した、といえばそうなのだろう。

…怖かった。

深い深い、闇の中に落ちる事が。

既に足を突っ込んでいたとしても、抵抗があったのだ。

表現できない畏怖。

知ってしまった、ああこんなものなのだ、と思うかもしれない。

だが二度とそこからは、這い上がっては来れない何かに囚われそうで、伸ばした手を握りしめ引き戻した。何も世界の裏側をこの手に支配したいと願っている訳ではないのだ。

「あら。お久しぶりね」

「こんにちは。えっと…麗しの君」

世界政府の紋を入ったブレザーを着、長い髪をアップにまとめ

てにこやかに立っている人物へ、動揺を悟られないように話しかける。

極度ではないが、自分が緊張状態にあるとアンは自身を感じていた。

「うふふ。随分と気を使って下さるのね」

女性は紅をさした口元に弧を作る。

以前は無表情に近く、口調も抑揚無い話し方をしていた。しかし今日の前にいる人物は表情を凜とさせた有能な秘書官だ。

女性も内心では再会の奇遇に驚いていた。

一度遭遇した誰かとは会いにくい、そういう環境を選ばれ次の特務を任じられる。

初回から数えて1年半ぶりとなるが、今までにない経験だった。

どこまでこちら側を認識しているのかは不詳だが、ある程度の『事』を知っている、そういう判断に基づいた思考に切り替える。

「久しぶりですから。気にしていませんわ。ファム、とお呼びください」

ガストレイ・ファム。

それが彼女の、今現在名乗る名だった。

しかし全てを海兵の少女へ伝えはしない。例え知ったとして、意味のない事だろう。

これが最後の再会になる可能性もある。

もしかた、奇遇にでも出会えたのならば、今日のように再び名乗ればいいだけの話なのだから。

「はい、ファムさん。この書類の受諾をお願いします。元帥よりお預かりして参りました」

につこりとほほ笑んで茶封筒に入った、元帥からの託しものを受

付カウンターのの上に置く。宛名は書かれていない。だが彼女は中身の数枚を確認しただけで、誰への届けものであるかを把握したように見えた。

ここは研究機関だった。

世界政府が秘密裏に隠し持つ、病原菌やら細菌やらを集めた場所だ。

一般に出回る風邪菌から最高危険度とされるAAAまで、よりどりみどりで揃っている。

かつて住んでいた世界では、映画やゲームの題材にもされていた。実際に、どこにそれがあるか、は秘匿されているものの、そういうものを扱っている、という情報は一般市民であったアンの目にも入って来ていた。

使うのが目的、ではない。

使われた時の対処法を模索するための、研究、としてだ。

友人の勧めで格闘ゲームを数多く世に送り出してきた某会社が出した、ゾンビものの傑作、映画にもなった作品ほどではないが、それに似たような話もちらほらと、こちらでも耳にしたことがある。

目的とあらば手段を選ばない。

そういう人物がいるのは、否めなかった。研究者、科学者、なにが没頭して事なす人々のごく一部に、一般的に流布されている道徳心や、心のバランスを崩して狂気に走ってしまう個体がいる。

ある意味Dr.ベガバンクもそうだ。

奇抜な大発見や大発明をして、世を騒がせている。

先日突然、よれよれの白衣のまま研究塔から出てきたと思えばパシフィスタ計画実行書プランを嬉しそうに見せてくれたのだ。

丁度本部でカンズメになっていたから良かったものの、航海に出ているらどうしていたつもりかと、博士をたしなめるのも一苦勞だった。夢中になればなるほど、博士の行動が読めなくなっている。戦桃丸が忽然と消えた博士を探して右往左往したのは、いつもの笑い話となって消えていた。

アンは期待に満ちた博士の視線を側面に受けつつ、気になった箇所を幾つか指摘し、訂正しながら、余白に短く文字を羅列する。

5年もの付き合いになると、大体の気心も知れてくるものだ。

それぞれの用紙が計算式と細かな文字で埋められたものを見て、博士は嬉しそうに理論を語りながらその場で倒れた。興奮しすぎたらしい。以前にもこういう事があった。

なのでアンは計画書のページを確認し厳重に封をする。

博士を医療階へ運んだ後、博士の研究室という名の私室に置いてきた。塔の入り口と各所に置かれた監視機器セキュリティにはアンの網膜情報が入力されており、カードだけでは入れない場所も、すいすいに入る事が出来る。

これは研究塔所員と同じ待遇だ。

元帥や義祖父でもカードパスを使って塔へ入るというのに、破格だといえるだろう。

部隊を移動する度訂正が行われ、情報が残っている。

どれだけ博士は自分をお気に入りしているのかと、多少、身に危険を感じることも、ままある。だが示される提案は、実に自身にとっても甘美だった。

もしそれが実現するならば、ほぼアンの思惑は達成されるからだ。

なので時に大量の血液を採取されたり、組織を提供したり、試薬を飲まされたりと、顔を合わす機会が多いのも確かだった。

目の前の人物は、時に、世界政府内にて抱えてはいるが目障りとなった、利用価値を見いだせなくなった、これ以上許容できなくなった人物に対し、下された決断の鎌を振りおろす役目をおっている。

CPとはまた別の組織だ。

名も形も、役職すら。

特命を帯びた任務を着々とこなす。

出会いとなった島でも、作られた台本通りテロルの手によってとある中將が戦死し、彼が握りこんでいた情報を残らず回収した手腕を見せた。

出来るならば、敵に回したくない人物といえるだろう。

あの島がその後どうなったのか、ファムは興味などないだろう。既に終わった事柄であるし、知ったところでそれがどうしたと、割り切っているはずだ。

アンは珈琲は好き？時間があるならば一緒にどうかしら、と誘った女性の後を歩く。ひらりと正義の文字が書かれたコートが揺れた。

誰もがその白を見ておっかなびっくりしつつも頭を下げる。

「あなたの姿が珍しいのね」

口元に指先を当て、ファムは笑む。

元帥が、センゴク小父が義祖父と夕食の後、恒例となった一献を交わし始める前に、休日出勤となるが、と前置きし茶封筒を手渡してきた。

目的地は口頭で伝えられた。

この研究所は誰も近づけない、もし知ったとしても行き方が分からない場所に存在している。

まさか、そんな所にあるなんて。が聞いた直後の感想だった。

実際にこうして書類を渡せている時点で、嘘でも虚偽でも無かった訳だが、どつきりでしたーであればよかったのに。そう思う。

「さすが英雄といわれるモンキー中将のお孫さんね」

「……どうも」

そんな事を思っている時に話しかけられ、咄嗟に相槌をうつ。

「この場所を教えられたという事は、あなたもこちら側の住人になった、ということかしら」

目の前に出された香り良い珈琲の前に、にこやかな表情を変えずに問うファムを見る。

「だって、一体誰が想像するかしら。赤い大陸にこんな所があるだなんて」

正確には、壁の中腹、が正しい。

研究者たちをどのように運んだのか、どうやってこの施設を作ったのだとか、どうやって物資を運搬しているのだとか、いろいろ突っ込みたい所は山ほどあるが、最低限、月歩が使えなければ単体でこの場所に来る事すら出来ないだろう。

かつてマリージョアの奴隷解放を行った、かの魚人、フィッシュ・タイガーのように素手でほぼ直立にそびえる崖に登るなど、一般市民からしてみれば考えられない自殺行為だ。

しかも万が一侵入を許しここにあるモノが持ち去られようとなれば、全ての出入り口が遮断されるという。

出口は無く、そのまま破棄される。

だがこの研究所で働く者達は、その事実を知らされてはいないようだった。

仕方の無い話、とアンはしたくは無い。しかし何か手が打てるのかと聞かれても、手の中にはカードが一枚も存在していなかった。何も出来はしない。ただ黙って通りすぎるしかなかった。

「そうですね。半信半疑で来ましたもん」

アンは珈琲に口を付ける。

苦さと甘さが口内で広がった。ごくりと無理矢理喉へ流し込む。海軍といえば珈琲といわれるくらい、一般的に飲まれていた。アンの場合どちらかといえば義祖父の影響を受け、お茶、を良く飲んでいるが、会議の席では大概、黒い飲み物が出てくる。

以前よりは飲み下せるようにはなってはいたが、相変わらず、苦手ではあった。

「一線を跨ぐ手前で、なんとか踏み留まっています。後ろからこうして突かれてはいますけれど」

これに関しては苦笑しか出ない。ただのお使いにしては、刺激が強すぎるだろう。

「じゃあ私も、その後ろ側にまわらせて頂こうかしら」
ファムは静かにアンへほほ笑む。

海軍本部最上階では人払いがされ、部屋には書類へサインを続けるセンゴクと、ばりばりとせんべいをほうばるガープの姿だけがあった。

ちらりと眼鏡奥の目が時計を捕らえると、筆音が止まる。

「そろそろか」

「とつくに到着はしとるじゃろっ」

なんでもそつなくこなす孫娘の事だ。

今頃、施設の誰かと懇意を受け案内などされているやもしれない。ガープはセンゴクが件を孫娘に見せると言い出した時、構わんとふたつ返事した。

たった5年だ。

父親も海賊として名を上げ始めてから、怒涛の勢いで頂きにまで駆け上がったといったものと、若かった己も含め懐かしく思い返す。その子供を牢で託された時にはどうしよすべきかと悩んだ。

軍へ差し出すべきか、それとも隠すか。

考え抜いた末に、ガープは後者を選択した。どれほどロジャーが世界に仇を成す所業を重ねてきたとしても、生まれてくる子供にはなんの関係もない。まっさらな命に親の過ちを押しつけ断罪されるなど、あつてはならぬのだと判断した。

そうしてゴール・D・ロジャーの処刑が行われ、教えられた地で見つけたかの女性は、自らの命を賭してまっさらな命を生みだした。手元に置いておきたかったが、海兵という職業柄、ましてやもう海賊王の子種は残っていないだろうと撤退した島に、休暇を使って密かに訪れたガープを見張っている目があるのは解っていた。

手厚く保護する素振りを見せれば、すぐに周囲を洗いはじめるだろう。

だから森へ、盗賊家業に身を落としていた昔馴染みに苦汁の選択をして預けたのだ。

故郷であれば休暇毎に帰ったとしても不審に思われる事は無い。それに森へ放り投げて来たと言えば、艦内に潜む間者もそれ以上追う事はないだろう。そう思っただけの行動だった。

子供達は思っていた以上に逞しく成長した。

孫がふたりから三人となり、その中のひとりがなんとか海軍へ所

属してくれたものの、残る兄弟はなんの因果か、海賊になるのだとギャーギャー騒いでいる。しかもそのきっかけというのが赤髪のシヤンクスだという。孫に何をしてきているのだと一言叫んでやりたかったが、なかなかそうする機会が恵まれず、果たされてはいなかった。

そう、孫らは祖父の心配などお構いなしに、だ。

しかもそれぞれ、孫達の潜在能力が計り知れない、ときている。

瓜の蔓に茄子はならぬ、の通りだ。

島で未だくすぶっている兄弟に関しては未知数だが、アンに限って言えばガープにも一切悟られず独自の情報網を敷き、長年この海軍に席を置いている己よりも正確な報告を提示してくるまでになっている。その網の中にはグレイゾーンに位置する、諜報機関にも足場が築かれていた。

そして今回は政府が抱える暗がりの一部へ放りこんだ訳だ。知る事、にどん欲な孫娘にとっては絶好の餌だろう。なにが起こっても動揺など見せず、対処しきるに違いない。

任期もあと2カ月と終わりが見えている。

どう動くのかを、上司として、家族として見守っていた。ある意味道楽だ。そこら辺に転がっている賭け事よりも、危険性の高い一発勝負に挑んでいるような感じがしている。

海軍は、言いかえれば世界政府はポートガス・D・アンという存在を、手放すつもりなど無い。

出ようとするならば、出られなくするまでだと、最深部に繋がる扉を開けさせた。

家族の特権として、17の誕生日を迎える日以降、なにを目的として海に漕ぎ出すかを聞いていたガープは複雑な心境だった。

親と同じ路を歩ませるまいと尽力したつもりだったが、片割れは絶賛同方向に向いてばく進中だ。もう片一方は海賊にはならないと

言い張っているが、周囲が海賊といえば海賊となってしまう。

しかもルフィまでが赤髪という海賊に毒され、それに倣うと宣言しているのだ。

頭が痛いというのはまさしく、これらと言えた。

難儀じゃのう。

細めた視線をガープはセンゴクへと向ける。

アンを差し向けた本人は、素知らぬ顔で書類に向かっていた。

世界政府が禁じている幾つかの品物がある。

最も広く出回っているのは歴史の本文ボーン・グレイフに関するなにか、だ。

これはただ、そういうものがあると知っているだけでは罰せられない。興味を持ち、しらべようと動きだすまではまだ、捕縛した海兵が情状酌量の余地を認めれば解放される。

だが考古学者となり、海へ出れば話が違った。
罰するもの、へと変わる。

そしてその中のひとつとして、生物兵器に關しての研究を禁じていた。

かつておつるの元へ配属されていた孫娘が関わった事件に、これらが関わっていた事があったのだ。

一言で海兵と総じられていても、様々な分野を得意とする者達が本部に駐留している。

かつての同僚に、防疫と細菌戦の研究指揮に携わっていた人物が居た。

ガープのように実戦部隊ではなく、科学者上がりという正反対の位置づけから昇格してきた男だ。

世界政府が生物兵器となり得る細菌を保有しているのは、なにも使う為ではない。

使われた時、どういう対応をすれば最も被害を抑えられるか、を起点に研究が行われている。

孫娘が愚痴を吐きだしているのを聞いた事があったが、

「細菌兵器は軍隊で使うべきものじゃないもの。あんなに効果が不完全で、どこに流れていくかも予想できず、放ってしまえば効果の実証をどこまで確実に、評価するのか。果たして目標に達するのか。曖昧すぎるし制御出来ないものを使うなんて、意味のない事だもん」

そう零していた。

余り後味が良くなかったそうだが、機密が漏れて、多くの人々が苦しむよりはマシであったと付け加えてもいた。

革命軍だけが、政府を打ち倒そうとしている勢力では無い。

軍として使えないものでも、政府を打倒しようとする勢力が、ただ殺戮の道具として使う。

肩を叩く手が止まり、目的に対して手段を選ばない者たちの手に渡る事が、一番嫌だと小さな声でつぶやいていた。

人間は、見た事のないもの、を恐れる事が出来ない。

不可視への恐怖も、感じた事のある何かに置き替えて怖いと感じている。

孫娘は嬉々として戻ってくるのか、はたまた憂鬱な顔をしているのか。

ガープは最後のせんべいを食べ終え、袋をさかさまにし、残りを口の中に入ると立ちあがった。

49 - 理由

髪を切った。

伸ばし続け、背の半分ほどまで届いていた黒髪をばっさりとおつるに整えて貰ったのは、昨日の事だ。

何も聞かずハサミを入れる手は優しかった。

17歳。

出航の日と決めた年齢だ。

日の出を迎え、アンはその年齢に達した。

出航前にささやかだが、フーシャ村で誕生日会をしてくれるのだと聞いている。

久々に食べる、マキノの料理が待ち遠しく思う。

本部では最終日に花や電伝虫を貰い、押しつけられ、送別会では浴びるほどのアルコールを飲まされた。未成年だと言っても、明日からは好きなだけ眠れるのだから、これもまた経験だと樽をひっくり返してみたのだ。

楽しかった。

後任に引き継ぎを申し伝え、さっぱりとした机を見て、ほんの少しだけ寂しくなったのは内緒だ。

コートをはじめとする支給品はクリーニングに出し、片付けは済んでいる。

義祖父の家にはまだ服や本が山積みになっているが、家となる船を手に入れるまでは置かせて貰うつもりだった。

ひっそりと瞬間移動で戻ってくれば、誰とも会わずに私物を回収できるだろう。

時計の針は7時を指し示していた。

あと1時間もすれば、いつもならば。本部へと向かうが、退役した今はゆつたりとしたものだ。

「おじいちゃん、朝ご飯出来たよ？　ってあれ、いつの間にかけちゃったんだろう」

献立は青魚の味噌漬けとタコときゅうりの酢の物、そして貝の味噌汁だ。

食べたいと、義祖父から昨夜、頼まれた品だった。

酢がきついだの、砂取りが未熟だの、味噌の付け具合が甘いだの、散々文句を言われながらようやく最近及第点を貰った品々だ。

家の中をばたばたと走り回り、確かについさっきまであったはずの姿を探す。

土鍋で炊いたご飯をおひつに入れ、テーブルに出しながら、見聞色を広く展開した。

気配を探れば、本部に近い場所にある。

そして余り感じたく無かったものが3つ、こちらに近づいて来ていた。

用事があるからとDr.ベガバンクに研究塔に呼ばれていたが、準備がまだ出来ていないから翌日にもう一度来て欲しいと言われ、義祖父の家で朝を迎えたのは選択ミスだったようだ。

エースに話しかけると既に、出航の準備は出来ているという。

あとはアンがドーン島に戻るだけだ。

このまま飛んでしまえば、例え大將格でも追っては来れない。船を出して追跡となつても、10日前後の時間は稼げるはずだ。

冷蔵庫におかず類をなおし、急いで部屋に向かう。そして最低限の荷物をまとめた肩掛けカバンを持ち玄関へと急ぐ。

靴を履きいつものように跳ばうと試みるが、なぜか力は発動しなかった。

何かに邪魔をされるような感じがしたのだ。例えるならばそう、ぶよぶよしたような壁のような何かが目の前に立ちはだかっている。

（エース、最悪の事態になったら先に出航しておいて）

通じてはいるが、返答は戻って来ない。じっとこちら側の様子を見ているのだろう。

跳べないとなると、選択肢が大幅に減る。

大きく分けて2択だ。

そのどちらとも、右死亡、左死亡、前後、上下、どれをとっても嫌な結末にしかない。

「話して分かってくれるような人達じゃないしなあ」

義祖父が消えたのは、介入しない為だろう。

家族を何より大切にする人だ。アンの身に何事かあれば、大将達の前に立ちはだかってしまう。歳を取ってしまったとは言うものの、その底力は、未だにサカズキすら信頼を置いているのだ。

若かりし頃の義祖父がどれだけ絶大な破壊力を有していたのか、歴然とした実績と大勢の信望が物語っている。

「どうやって、切り抜ける？」

アンは乾いた唇を濡らし、考える。

靴は置いて行く事にした。荷物は動きを阻害するからだ。

靴も頑丈な軍用のブーツに履き替える。

紐をきつく締め、玄関の先を見つめた。

付近には民家もある。住人の全てが海軍関係者ではあるが、よもやこんな所で溶岩を流したり、氷漬けにはしないだろう。

となれば、攻撃の要はボルサリーノか。とはいえ光でも高出力と

なれば、貫通、溶解はあり得る。

ピカピカの実を初めとする、大将達的能力を身をもって知らしめられているアンとしては、出来れば、避けて通りたい。が、それは叶わぬ願いだとも分かっている。

意を決めて、立ち上がり玄関を出た。

「おはようございます。こんなに朝早くから、お揃いで。どのような御用件でしょうか」

真正面に立つ3人の人物へしらじらしくも言い切ってみる。

「なあに、昨日センゴクさんに出した辞表をねえ、取り下げてください。あつし達はすぐにでも退散するよ」

直、本題だった。

ボルサリーノの言葉を反芻する。

取り下げてください、という事は、まだ受理されていないのだから。う。

おつるが管轄する事務処理班で止めているに違いない。

答えはNO、に決まっていた。

自分に課した誓いはなによりも重い。

「聞き入れちゃあくれないか」

クザンがゆっくりと唇を動かす。

2年前もそうだった。

あの時は義祖父が隣に居てくれたおかげで取り乱さずに済んだが、今はひとりだ。

冷気が足元にひんやりとした空気を運んできた。

いつでも技を繰り出す準備が出来ているという合図だ。

「通してもらいます。意地でも」
アンは拳を握る。

今まで一度も勝利を収めた事のない、3大将戦が始まった。

形勢ははっきりと言って不利だ。

優位になるなんて事は、天と地がひっくり返りでもない限り、あり得ないだろう。

もしここに、エースが居たならば話は別だが、その半身は遠く、ドーン島にある。

瞬間移動と一言で括っては居ても、様々な手段が考えられた。そのひとつが遠くの物を手元に運んでくる見方だが、アンは今まで己の身をここでは無いもうひとつの支点に飛ばす力しか具現した事が無かった。

やり方や方法など、ぼんやりとは形になっていたものの、もし、を考えた場合、踏ん切りがつかなかったのだ。瞬間移動という能力については、海軍本部がその実験権を主張し、行っていた。行っ場所も行く先も、海軍の息がかかった土地、というわけだ。

しかしその先に住んでいる住民もいる。関わる人員も居た。もし何か事故のようなものが、この能力で起きるのが怖かったのだ。

自身だけが傷つくならば別に構わない。だがそこに第三者が存在する事をいつも考えてしまうのだ。

だから能力の開発をあえて進言せず、行わなかった。
それが徒となってしまうている。

エースの助けが無ければ、ボルサリーノが放った初弾に合わせて動いた、クザンに捕獲されてしまっていただろう。それくらい相手

は容赦なかった。

否、これでも手加減をしているのだろう。本気を出した大将の力はこんなものではないからだ。だから半身が感覚を繋いで見聞色の補助に入ってくれているだけで、随分と楽に捌けてはいる。

ただし、まだ赤は参戦していない。

黄と青だけでも忙しいのに、赤まで加われば一気に、なし崩しの負けが確定してしまう。

アンが望む事はただひとつ、この場を乗りきり島に帰ってエースと共に海に出る事だ。

武装色が使えるアンにとって、自然系特有のの防^{ロキア}御力はたいして意味を成さない。だがアンからは一切、攻撃の手を出してはいなかった。

出す気も無い。

この期に及んで何を言い出すのかと言われるだろうが、大将達を敵だとアンは思っていないかった。確かに邪魔をされている。だがそれは、アンの都合であって彼らと認識を異にしているだけなのだ。ただ兄弟が待つ島に帰り、誕生日を祝って海原へ出航したいと願う、アンとは。

「ほおんと、強くなったよねえ」

「鍛えられましたから」

エースのお陰で軽口を叩けるくらいはまだ、余力がある。

覇気と並び、実の力を抑制する能動的な能力は、きっちりと発動していたからだ。

何らかの作用により封じられているのは、遠距離移動できる瞬間移動だけだと把握していた。

ベガバンク

博士が何かを息抜きにと発明したのだろう。

パシフェスタ計画も順調に進んでいるから、多少寄り道しても

問題ない。

根毛胚から培養した細胞も、幾つかの実験段階を経て、予想よりも上出来な結果が上がっているとも聞いていた。

黄猿が繰り出す腕の突きをいなし、青雉の股下を搔い潜る。

立ちほだったのは赤犬だ。後方からの追撃が迫る。

思わず空間を掴み、風を起こした。

アンを中心とし暴風が吹き荒れる。

その隙に移動しようと思ったものの、サカズキは動かない。

「サカズキおじさん、どいて!!」

「そりゃあ聞けん願いじゃのう」

帽子の向こう側にある眼光が細まる。

「どこに行くのかは聞いとりやせんが、みすみす前途有望な若芽を他の畑に出せんのは、わかるだろう」

ちくりと胸に痛みが刺す。

サカズキの願いが流れてくる。

この人物は出会った時から考えられないほど、穏やかな表情をするようになった。これは諭す時の声音だ。

だが苦虫を噛み潰すかのような表情をアンは浮かべる。

自分の存在を必要としてくれるのは嬉しかった。けれどアンは、命の使い先を既に決めてしまっている。ここでは無い。

奥歯を噛む。言葉を飲み込んだ。

どんなに所望されたとしても、ここには留まっていられない理由があった。

義祖父が何とかしてくれるだろう、そんな展望を持っていた時期もある。

だが未来はある一点を違えなかった。

脈々と名に受け継がれてきた意志がその先へ進めと急かすのか、それともそれはもう動かせない決定事項であって、どんなに足掻いても無駄なのか。

自身の糸も大きな絡まりに捕まってしまっている。ほぐそうと懸命になっているが、頑丈すぎるそれにぐいぐいと引っ張られているような感じも受けていた。

「どいて…下さいっ」

アンは拳に力を込める。両側からは、左に黄猿、右に青雉が迫って来ていた。

赤犬は武装色だ。見聞色で先を読み、剃と紙絵で合間を縫えば、突破できる。

そう踏み、左右へ嵐脚を放ちながら赤犬の脇をすり抜けようと試みる。

いつまでも無く見せかけの動作も忘れない。

「無駄じゃけ。どれだけ見てきたと思う」

手のひらが目の前に、路が閉ざされる。だがそれは予定に折り込み済みだ。

その腕をとり、重心を乗せて跳ぶ。

空中に逃げれば、アンには月歩がある。そのまま青を背に、瞬間移動が出来る範囲に逃げてしまえばこちらの勝ち、だ。

「甘いねえ」

実の能力が無くとも、大将格は体技だけで一般の海兵を凌駕する。アンも今まで、十二分に味わわれてきた。甘いと言われても油断している訳ではない。

「ボルおじさんが、わたしの癖を知っているように、わたしも知ってるよ」

足技を使う時、僅かに揺らぐつま先のブレ、そのわずかの空間を上手く利用する。

「さすが子飼いの部下、きっちり育ってくれちゃって」
つぶやきを耳に受けつつアンはさらに上空へ逃げる。

「しまっ！！！」

いつの間にか上空にあった姿を捉えきれていなかった。アンは両腕で振りあげられていた踵落としを受ける。体勢が崩れ頭が下となり、落下速度があがった。

重力に引かれる重さは、クザンの方が強い。それを利用、加速し青雉はさらに追い打ちをかける。

咄嗟に鉄塊を使うが、僅かに鳩尾へ入った。

痛みに視界が一瞬ぼやける。動きが止まったアンを青雉が見逃すわけがない。

そのまま地面へと叩きつける蹴りを放つ。

エースの声でアンはくると空中で体勢を変え両腕でそれを受けるが、流しきれぬ力では無い。

容赦のない一撃だった。

地面がべこりと、アンの背を受け止めへこむ。その際の衝撃音が耳に二度響くほど大きなものだった。

朝食を食べずにいて良かったと、アンは胃液を吐き出しながら思う。衝撃で落ちた地点から口元を拭いながらゆっくりと視線を上上げた。さすがに半端ない。たったひとりで億を超える賞金首を何人も相手に出来る大將なだけはある。

ただ。骨にも、内蔵系にもそんなにダメージはきていない。
まだ動ける。

「さすがに丈夫だな」

そついう風に躑けたのはおれだが、と青雉がゆつくりと歩みを進める。

「…後悔？」

「いんや…もつと手放せなくなった」

大将がわざわざ3名もそろい踏みで、自分を留めに来るなど、海軍の歴史をひっくり返しても前代未聞の出来事になるだろう。

「ガープさんも歳だ。いい具合に育つたお前が跡を継げば、おれもまあ…なんだ」

「わしらもそれを望んじよる」

赤犬が青雉の言葉を繋ぎ、前へ出た。

地面に座り込んだままのアンの腕を取り、立ち上がらせる。

「あの人はロジャーの時代から元帥と共にこの海軍を率いてきた。その功績をお前が引き継いでも誰も文句は言わん」

「…わたしじゃ、ダメなの」

黄猿はここまで強情に我を張るアンを訝しんでいた。なにがそうさせるのか、理由が見当たらなかったからだ。御老人が隠し続けている何か、に由来するならば、それを聞き出せない限り首を縦に振らせる事は出来ないだろう。

「わつしにも話せない事かい」

アンは顔を曇らせ、眉を寄せて首を振る。

「困ったねえ」

ならば、と赤犬はアンの身をボルサリーノに渡し、草陰に隠してあつた何かを破壊する。

「わしを倒してゆけ。誰もを納得させてみい」

（アン）

遠くから自分を呼ぶ、半身の声が聞こえた。

（大丈夫、わたしはエースと共にあると決めてる。だから、留まらない。死んでも帰る）

能力を封じていた何かは感じなくなっている。

サカズキが壊したそれ、が妨害していたのだろう。

「瞬時に動くそれも、お前の持ち味じゃけ。相手をしてやろう」
サカズキの額に刻まれた深いしわが見てとれた。だがそれは、怒りからでは無い。

選択を悔いてはいなかった。全てを分かって欲しいと願っていた訳では無かったが、過ごした年月は確かに、絆を繋ぐには十分な刻を刻んでいた。

心の内を叫べたら、どんなに楽であったか。

この身に流れる血が誰のものであるか、その血がもたらす世界への影響力を、話せる時代であればどれだけ良かったか。

「…わかった。でもここじゃ周りの人達に迷惑がかかるから
いつもの施設でいいかな。」

アンは静かに笑む。

「先に行って、待ってるね」

切なさを含んだ表情を残し、その姿は瞬時に消えた。

「まったく、サカズキさんは甘いんだから」

その声を背で受け、赤犬は歩きだす。

「これはガープ中将に問い質すしかないねえ」

ボルサリーノも赤犬の後に続いた。

それぞれの意図を胸中に秘め、足が向かうその先へと急ぐ。

50・トリカゴ

じゃらり、と鎖が鳴る。

手首は石壁に固定され、足首には鋼鉄の塊がふたつついた枷が嵌められていた。

能力者の力をも奪ってしまう海楼石が含まれた特別製だ。牢の一角にはランプが置かれている。中に踊るものは炎ではない。

プラズマだ。

ボールの中で揺らめく繊維状の構造が揺らめいている。

Dr・ベガバンクが作ったものなのだろう。アンが持つ能力の一切を無効化するなにか、を発生させていた。

この場所に繋がれてそろそろ5日が経とうとしている。地下にあるとはいえ、時間感覚が狂うほど入れられている訳ではない。エースとも感覚が繋がっている。大体の時間帯は把握できていた。

食事や水は定期的に与えられてはいたが塩分を抜かれ、多少思考能力が落ちて来てはいた。がまだ無気力までは至ってはいない。

衣類も毎日新しいものを義祖父が持つて来てくれている。

湯ではないが、監視付きで身を清める時間もあった。

太陽の光がそろそろ恋しくなってきたが、それは我慢だ。

そう、ここは海軍本部内にある牢だった。

時折海兵が捕らえた海賊を収監するために入ってくる。しかし事情を知らされているのか、視線を合わせないように背けながら、目の前を通過してゆく。

響くのは海賊が放つ罵声だけだ。

(…先に船出している?)

意識で繋がる向こう側では、エースが待っていた。
出航日をアンが海軍を辞める日とし、準備を整えていたのだ。
しかしアンが捕縛されるという、エースにとっては予想内の展開
が起り出航を遅らせていた。

いつものあの丘で青の先を見続けている。

（明日まで待つ）

（もう、そればかり）

アンは苦笑を浮かべる。

その時、重い扉が開かれ、石畳を叩く革靴の音が響く。見知った
気配だった。

檻の前で止まる。

「…やあ、おじいちゃん」

「なんじゃ起きとったのか。アン」

名を呼ばれゆつくりと視線を上げる。

暗がりの中だどうしてもうとうととしてしまい、昨日は義祖父が
様子を見に来てくれた時には爆睡していたという。いつでもどこで
もどんな場所でも、眠れるのは特技と言ってしまってもいいかもしれ
ない。

「…出来んか」

義祖父の感情を押し殺した声に応えたのは笑みだった。

「むーりー。以前から言ってたでしょう？」

瞳からは力が消えてはいない。

幾日も最小限度の食しか与えられていないと聞いていた。気力を
減退させる事のない孫娘にガープは嘆息する。よもや父が捕らえら

れて牢にその子まで繋がれるとは思ってもみなかった。
在りし日のロジャーと邂逅しているような錯覚を見る。

「お前も頑張るのう」

「優遇されてるしねえ」

目が細められる。

確かに、海賊達に比べれば水浴びも出来れば、傷の手当てもされていた。

だが今、この牢の周りはかつてないほどの警備が敷かれている。

「わしの跡を継ぐのがそんなに嫌か？」

「嫌ってわけじゃない…このまま進むのが一番良い未来なのかもしれない。誰もがみんな優しく接してくれる。たぶん…秘密を知っても、それがどうしたって…」

そういう風に義祖父は持つて行ってくれるだろう。

だがエースは別、だ。

もしもエースが、ルフィが海兵となっていたならば、なにも悩まなかっただろう。

だが所詮は、もしも、の話だ。現実は今まさに海へ、かつて父がその生涯を掛けて居続けた海へ漕ぎだそうとしている。

意志は確固として揺らがない。

「ごめんね、おじいちゃん。海軍に、留まる事は…できないの」

青雉が語った話を思い返す。

英雄の引退は世間の動揺を呼ぶ事になりかねない為、海軍での役職を中将補佐とし、新たにその席に座る孫娘のご意見番としてあり続ける。

世界的に見ても弱冠17歳が中将に任命されるなど前代未聞だろ
う。

後ろでかつての英雄が支えるといっても、だ。

退役願いを義祖父に出し、留まる事を否定したアンは出発の日、
3大将と対峙した。

このまま海軍に根を下ろすなら良し、もし出るというのなら3人
を倒してから行け。

そう、立ち塞がった。

瞬間移動で逃げられぬように、特殊な磁場を発生させられたアン
は善戦する。

だがしかし、その他であれば潜り抜けられた戦線もたったひとり、
赤犬大将が提案した通り行っても、阻まれてしまい成す術なく捕ら
えられてしまった。

止めを刺そうとする青雉を制したのは赤犬だった。

「禍根が残ればわしが刈り取る」

青雉もまさか赤犬が止めるとは思わず、目を見開いていたのが印
象的だった。

だからアンもその時は抵抗を辞め、大人しく牢まで赤犬に手を引
かれやって来たのだ。

葛藤が無かったわけではない。

6年近くを過ごした場所だ。

繋がりある全てを投げ捨てるには余りある様々がここには詰まっ
ている。

「このまま残ってどうしろって？」

既にエースの船出は決定的だ。ルフィーも3年後に出てくるだろう。

「わたしは嫌だよ。兄弟で殺し合うなんて」

兄弟を捕まえるなどはもつての外だ。例えそれが正義という名の下に望まれたとしても、もしアンが海軍に捕らえられたまま行えと強制されたとしても、順ずる気は無かった。

アンにとって地位も名誉も、金銭さえもこの場所へ留める制約とはならない。たったひとつだけ、望むのはエースの傍らに在る事だけだ。この思いだけは何かあってもぶれない。

「だから諦めて、おじいちゃん」

につこりと笑む孫娘にガーブは額を押さえる。この話の持つて行き方は、亡きロジャーと瓜二つだった。血は争えない。

「また明日来る。もう一晩ゆつくりと考える」

靴音が遠ざかり、重い扉が閉められた。

いくら時間を掛けても、変わるわけがないと義祖父も分かっているのだろう。

しかしそれしか言葉が掛けられないのも、アンは分かっていた。

ガーブは海軍本部中将だ。

海賊となりゆく人物を野放しには出来ない。

3人の大将や元帥もそう、育て上げた次世代を解き放つわけにはいかなかった。

内にあれば頼もしい戦力だが、対抗勢力となれば、アン一人に幾人を見向かわせなければならぬのか。損失を考えれば眉間のしわも増えるだろうし、重い溜息が落とされるのも解る。

ベガバンクの研究が実を結び、効果が発せられたプラズマで何とか捕らえてはいるものの、海原に解き放たれれば、その身に纏う力

を如何なく發揮し、すぐに台頭してくると思われているのは間違いない。

しかも海軍から海賊に身を落とした英雄として、情報を扱う者達は書き立てるだろう。

予想はしていた。

サボが行方不明となったあの日、進む未来は決定されたと言っても過言ではない。

義祖父も兄弟全員を海兵にしたければ、もっとやり方があったはずなのだ。

しかしすでに過ぎ去った日々をとやかく言っても意味が無い。

悔やんでも後の祭り、昨日には手を振って見送って明日を見る。

「さあて。どうしようかな。かつての大海賊達は、どうやって切り抜けた？」

不敵な笑みを口元に寄せ、アンは目を閉じる。

牢から出た先に、青雉が立っていた。

「…今日もダメでしたか」

「ああ」

返答は短い。

こうなるだろうとは予想はしていた。

ここまで頭角を現すとは思ってもいなかったが、さすがに血は争えないのだろう。

3年という約束が終わりを迎えた日に、覚悟はしていたつもりだった。

出来れば手の内に残ってくれるようにも、この1年、尽力してき

たつもりだ。

「一筋縄にはいかんわい」

いつまでも腕の中で大人しく見上げる子供であって欲しかったと願う半面、意志を貫く姿にさすがわしの孫だと誇る気持ちもあった。子供はいつか巣立つ。

親の都合などお構いなしだ。

親とは別の道を歩んで欲しかった。強い海兵になれと口やかましく言っていたのも、もしかすれば少しでも興味を持ってくれたならば、と期待していた。

「…上手くいかんもんじゃ」

コートを揺らしいつもと変わらぬ調子で歩き抜けようとする、かつての恩人に青雉は視線を動かさず問う。

「それでいいんですかい、アンタは」

絞り出すような感情が込められた言葉に、ガープは応える術を持たなかった。

クザンにも、望む答えは戻っては、こない。

……

鍵束の音が聞こえ、浅い眠りの中を波に揺れるようにたゆたっていた意識をゆっくりともたげる。

鉄の棒が回され、下りていた錠が外された。

格子をくぐって中に入ってきたのは、心地いい衣擦れの音の元となる人物だ。

久しぶりの姿に自然と表情がほころぶ。

「やあ、デイ。ラン。久しぶり。今日はどうしたの？」

ぼやぼやとした寝ぼけ眼のアンを見て、デイハルドは嘆息した。悠長に挨拶してくるなど、お前は馬鹿かと言いたくなってくる。

しかもこんな場所で膝立ちのまま眠れるとは、神経が太いにもほどがあつた。だが考え方を変えれば、この環境がアンにとって苦痛では無く、気負うものではないのだろう。

「僕との待ち合わせを放置するとは。仕方のない奴だ」

「あ。満月……」

そこまでは認識していなかったと表情が語る。

「まったく、お前は思慮深いのか浅はかなのか。時々分からなくなる」

そこがまたいいのだが。

デイハルドはにっこりと笑む。その表情がいかに残酷な思考の最中であるのか、何度もその現場に立ち会っているランがひっそりと喉を動かす。

今まで約束を破った事のない想い人をデイハルドは待った。

貴族間で行われる会議が翌日控えていたが、そちらよりも待ち合わせを優先したのだ。

しかし、朝日が昇るまで待てど、その姿は現れなかった。

待ち人がなぜ来ないという怒りよりも、何事があつたのかと胸騒

ぎが先立つ。

その実力は海兵であれば中将に遜色がないほど、海賊にあつては七武海とも対等にやりあえる程と言われている。何事かがあれば、本部も慌ただしくなっているはずだ。

デイハルドはランを呼び、すぐさま状況を調べるよう指示を出し、今に至る。

「で、どうしたいのだ。言ってみるがいい」

最初は愉快だった。軟禁されるだろう事は海兵を辞めると聞いた時、このような展開になるだろうとは薄々と予感はしていたのだ。折れぬならば海軍からアンを引き取って、世界へ解き放てばいいとすら思っていた。

満月の日に来れなかったのも、周囲への配慮の為だろう。手紙もよこせないほど切迫しているならばこちらから会いに行っても構わない。その際に伝書鳩でも贈り、今後約束を反故すれば本人の意志関係無く、奴隷にしてやると脅してもいい。

だがそれも詳しい情報が入ってくるや否や焦りへと変わった。地下牢に捕らわれているのだという。

海軍は知っているはずだ。アンはデイハルドの所有物である、とふつつつと燃えたぎるマグマのような怒りへと変わるのにその時間にはかからない。

アンには無かった。このような仕打ちを行った海軍へ、だ。

公式にデイハルド聖の持ちものとして発表されているアンを拘束している事もさることながら、そのような場所へ幽閉し、天竜人である自分との約束を故意に破らせた事、への腹立ちが限界点を突破したのだ。

「アン」

デihalドは名を呼んだ人物の顎を指で上に向かせる。血色の良かった桃色の頬が、白く見えた。

今頃本部の上階では慌ただしくなっていることだろう。

世界貴族がわざわざ、こんな場所まで足を運ぶ事など前代未聞だからだ。

そう、わざわざやってきてやったのだ。

所有物を受け取りに。

その際ひとつやふたつの権限を発動しても、文句など言えまい。

デihalドは薄く笑む。

そもそも世界貴族とは下々民にとって不条理な存在だ。いずれはその権力が地に落ちる未来もあり得るが、今はまだ、政府が偽りの歴史を世界へ必死に流布している。ならばありがたく、デihalドとしては使っただけだ。組織として下部にある海軍相手に”我がまま”を発動させてしまっても、なんら問題はない。なりもしない。

海軍にとって最も深刻になる事態とは、アンが海軍から外へ出る事だ。

この人物が第三勢力の中に移動する事により、3つの均衡が崩れるのは目に見えて分かっている。

だから、こそだ。

鳥かごの中に収めてしまふのは余りにも勿体無い。

「アン、僕にその願いを叶えさせる」

デihalドは膝を折り、想い人と視線を合かし頬に触れて囁く。

しかしアンは視線を泳がせ閉じ、上目づかいで天竜人を見る。その様はまるで、口に出す意志を固めていかのようにも見える。

デihalド。

いつもは愛称のディ、で呼ぶ名を、アンは最後まで紡ぐ。

今から自分が発する言葉が、どういう意味を持つのか。そしてそ

の選択によって生じる責任を噛みしめるようにゆっくりと唇を開く。

「…外に、出たい。わたしを、青の海へ出して」

絞り出すような声だ。

ランから報告を聞いた時、デイハルドは耳を疑った。

3人の大將が揃い踏みで、脱出を阻止したというのだ。

馬鹿げている、が最初の感想だった。たったひとり、そう、今までも海兵が海賊に身を落とし海軍に反旗を翻して来ている事例は幾つもある。

手放したくない人材であるのは確かだろうが、こんなやり方でアンが屈する訳がない。

此方側の陣営に踏みとどまらせたいのであれば、効果的な攻め方がもつと他にあるのだ。そのずさんさも、デイハルドの怒りを買った。

「僕はお前が自由に飛び回る姿が好きなんだ」

頬に触れる手が首へと至る。

「これがある限り、どこに在っても僕の物なのだから」

唇に触れるだけの口付けが落ちる。

「ラン、断ち切れ」

立ちあがったデイハルドの言に従い、ひずめの印を押された従順な僕が鉄^{しん}だけを割る。

居合だった。

アンの体に傷一つ付けず、身を封じていた枷が外される。

「海軍にも言い渡しておこう。僕の持ち物を今後一切、縛するなと」

想い人の能力を抑えつける役割を担っていたプラズマをも奴隷に破壊させ、デイハルドは傲慢に笑む。

「満月の夜、いつもの部屋で待つ。必ず来い」

幾つかの言葉をやり取りし、アンが姿を消すと、下僕を従いデイハルドは地上へと上がる。

「さあて、センゴクめ。どうしてくれようか」

いつにも増してどす黒い気配を漂わせる主人に、ランは心の内で友人に悪態を付きながら後を追う。

51 - 海原の路(1)

三角帆が風を孕み、船首が青の波を掻き分け進む。

天気は上々、海原も穏やかだ。

フーシャ村の漁師から格安で譲って貰ったバルシャは、修繕され新品同様とはいかないまでも、海水を良く弾いてくれている。

「エース、このままいけば明日には…」

アンが海図を広げ、羅針盤コンパスを使って方向を確かめながら、帆を操るエースに声をかけようとし、言葉を止めた。

「ん、どうした？」

「ちょっとだけ見惚れてただけ」

なんだよそれは、と眉を寄せるエースに父と母の面影を見た、などとは言えない。

伝わっているかも知れなかったが、口では紡がなかった。

航海は順調に進んでいる。

風の向きも微調整は必要だったが、欲しいと思う方向から、まるでその船出の背を押すかのように恵まれていた。

束縛から解放された後、アンがまず跳んだのは義祖父の家だった。本当は誰よりも自分の身を案じ、奥歯を噛んで拳を握りしめていたエースの元へ戻りたかったが、そこはぐつと感情を我慢して庭に出る。住宅街が広がるその地区は、基本的に静かだ。学び舎としての学校や、未来の海兵が通う士官学校がある内は、子供たちの姿も見えない。時折ご近所の奥様方が井戸端会議をしているくらいだ。

家の主は本部に居り、見慣れた屋内は、当たり前ながらに無人だった。

時計を見れば昼をまわったばかり、そろそろお昼ご飯の時間だ。

「ただいま」

アンは足裏についた砂を縁側で払い落とし、鍵をかけずに開け放っていた立て戸より中に入る。とてとと向かうのは自分の部屋だ。障子を開けると大将達が迎えに来た時のまま、時を止めていた。

居間に行くと、干していた洗濯物が取り入れられ、山となっている。

「もう、おじいちゃんたら。あれほど自分のくらは畳んでつてお願いしてるのに」

日々の習慣的にその場にべたりと座って畳み、立ちあがった。

あの日、荷物をどこに置いて出たっけ。

アンは絡まった記憶を解きほぐそうと試みるが、ぼーっとした脳では考えるに考えられず、とりあえずは横においておく事にする。

欲求を抑え込みマリノフォード内に移動したのは、これからの旅で絶対的に必要になるであろう物品があったからだ。

廊下を横切って台所に入れば、テーブルの上に山と積まれて果物類が目に入った。

量的にいつでも義祖父ひとりで食べるには余りある多さだ。きつと誰かが持つて来てくれたものなのだろう。

椅子の上に投げ出されている風呂敷を見つけ、ああこれは、おつるさんからのだと思い至った。良く見ればアンが好む果物ばかりが目につく。

「この果物は冷蔵庫に入れておかなきゃダメだって…」

その時、小さなメモがひらりと舞い床に落ちた。

拾って文字を追えば、じんわりと瞳が潤み、頬をなにかが流れ落ちる。

大きく息を吸ってから、アンは手の甲で目元を拭う。

触れる温かさが欲しかった。

義祖父の懷から、その手を振り切つて出た今、代償無くすがれる存在は半身であるエースだけとなる。震える身をぎゅっと、その腕に抱きしめて欲しかった。

きつとルフィも大丈夫だと言いながら飛びかかつてきてくれるだろう。

繋がれている時は気丈に振る舞つてはいたが、それでも囚われていればその身に疲労が蓄積してゆく。

アンにとって海軍は、身を拘束し鎖に繋いで牢に閉じ込めたとはいえ、敵ではなかった。

もし自分が義祖父の立場にあり、今まさに手の内から飛び出そうとして、策を講じる時間が無ければ同じ事をしていただろう。相手に嫌われたとしても、それが周囲の感情を逆撫でせず、一応の終息をみせるならば、悪役を買つて出ても構わない。

ガープ中将がとつた行動に、怒りは無かった。

それよりも無理をさせ、最近は何分か、和らいでいた眉間のしわを深くしてしまつたのではないかと、そちらを心配してしまう。

「…立場も、」

唇をぐつと、結ぶ。

アンは風呂敷に義祖父分を残して全部包み、荷物に加えた。

目が赤くなつてきているだろうが、そんな事はお構いなしに風呂敷を抱えて目当ての荷物を探す。

それは。出航と決めた日に用意していた手荷物は、玄関に置かれていた。

大きめの籠の中に無造作に入れられてはいるが、来客者が気に止めないようなさりげない場所にあった。

中身を開けて確かめる。当面の資金として引き出しておいた金銭もあった。色が付いているような気もしたが、ありがたく受け取っ

て置くことにする。

コンパス ログボックス

地図と羅針盤、記録指針、全てを確認し、肩にかける。そして、靴を履いた玄関で、随分と長い間寢床となってくれた家へ頭を下げた後、半身の元へ跳躍した。

出迎えてくれたのはエースとルフィだった。

ふたりが両手を広げ、落ちてくるアンを抱きしめる。

「おかえり」

「ただいま」

涙を隠す事無く、アンは満面の笑みを浮かべる兄弟達のように、笑った。

直ぐに出航すると言われ、コルボ山の海岸へと急いで向かう。

そこには既にダダン一味と村長、マキノが待っていた。

ダダンは家から動かなかったという。

出て行ってくれてせいせいすると言いつつも、実のところ寂しいのだと、マグラがのんびりとした口調で言った。

「突然の船出だったからー」

なんでもエースが昨日の夕方に、明日出航すると知らせに走ったのだという。

まるでアンが戻ってくる事を予見していたかのようにだと、こっそりマキノが教えてくれた。

複雑な表情をしていた村長や、お弁当を作ってくれていたマキノ、わざわざ見送りに来てくれた頭を除いた一味に、感謝と伝言を残し海原へと出る。

エースはその姿が視界に捉えられなくなるまで手を振っていた。ひとりでも操作できるように設えた船は、潮の流れに乗りぐんぐんと沖へと進む。

「エース、ありがとう。待っていてくれて」

返事は無かったが、テンガロンハットの奥にある瞳が静かに気持ちを伝えてくる。

地下牢で6日、過ごしていた期間はエースにとっても長かったはずだ。

Dr・ベガバンクが作ったあのプラズマを壊す術は幾つか考えてついていた。だがそれを実行すれば、あの場所から逃亡する事になってしまう。能力を抑える、あの膜のようなふわふわを突き破ろうと思えば、出来たかも知れない。しかしそれは避けたかった。

海軍に弓を引くつもりは無い。

アンは言葉ではなく、行動でそう主張していたつもりだ。

だから、という訳ではないが、抵抗しなかったからこそ水浴びが出来たり、傷の手当てもして貰え、義祖父が毎日顔を見せにやって来れたのかとも思っていた。

デイハルドという合の手が入り、こうして今、海に出られた訳だが、数日間本部内はてんやわんやだろう。

「エース、その包帯、まだ痛む？」

「いや、痛みはもうねエんだけど、あと2、3日は様子を見ろって言われてさ」

羽織ったシャツから見える左腕の包帯に視線を落とし、エースが笑う。

刺青を入れる時、多少の痛みをアンも感じた。我慢できない程ではないが、その痛みが長時間続くと、なにかを壊してストレスを発散したくなるような、じくじくとした痛みが疼くのだ。

今は何ともないが、入れている最中は酷かった。

実際に一度、我慢できなくなり、丁度来ていた義祖父にがぶりと噛みついてしまった程だ。

捕らわれた翌日、ここを出るのは時間がかかりそうだから、先に
出航しておいてほしいとアンは願った。だが明日まで待つ、を繰り返して
いた半身に、それなら以前から刺青を入れたいと言っていたのを思い出し、
待ち時間の間に彫って貰ってはどうかと提案した。
簡単な物であれば2日ほどで入る。

そうしてエースはマキノ経由で村長から紹介してもらった村の彫師に4つの文字を彫って貰ったのだ。シンプルなそれには、エースの願いが込められている。

胸の中に存在する”彼”とも、共にいくのだ。

マキノに作って貰った手作り弁当と誕生日ケーキの代わりだと、入っていたシフォンケーキをふたりでほうばりながら、アンはコンパスで方向を確かめる。

（エース、ちよつと北に流れてるから、あっち方面に）

（ん。わかった）

もぐもぐとふたりともに口を動かしつつ、前方に見えてくるはずの、突き出した半島を目指して船を進める。

出発してから3時間ほどが経ち、上手く風と海流に乗ったおかげでコノミ諸島最東にあるハイカスの村までの航路が書き上がった。

マリンフォードから飛び出してきたばかりだったが、カームベルト風地帯を抜ければこの小さな船でも1カ月かからずにシャボンディ諸島に辿り着く事も出来る。

だがそれではあまりにも、折角海に出た面白みが無いし、冒険の匂いもしない。

アンはエースが望んだ選択に、新しい出会いを感じながら胸を躍らせる。

サボが一番、エースとアンが今2番手として海に出、そして3年後にルフィが追いかけてくる。

それまでにおれが海賊王になってたりしてな。

エースは海と空を分け隔てる水平線を、何かに挑むかのように見ていた。

「まあ頑張つて」

アンとしてはそういう他ない。

「お父さんが没してから21年、未だに名を継ぐ者が現れていない。ここはまだふたりでもなんとかなる海だけれど、偉大なる航海グランドラインに入ったら、ひとつひとつ、小片を集めなきゃね」

「それくらいじゃなきゃ面白くねエだろう？ その前に仲間と船だよな」

さすがにエースもこの船で双子岬を越え、”偉大なる航海”グランドラインに入るつもりはなかった。月に一度は赤髪の船に行つた際に、航海士から様々な話を聞いていたからだ。

「良い船と人、に巡り合えたらいいよね」

例えば草原を走る馬のような。

話をしているとあつという間に時間が過ぎ去る。

離れていた時間を埋めるように、弟の話をした。ルフィの話で盛り上がるのは今のところ、エースとシャンクス率いる赤髪海賊団だけだ。

この手の話でネタは尽きない。

出発してから2日目、予定通りハイカスの村に到着した。あまり船が寄らない村であるのか、久々の旅人に歓迎の声を掛けられながら宿に案内され、朝を迎える。

のどかな村にある小さな食堂で、朝食のパンをフォークに指しながら、アンは海図を手にとどの航路を通るか悩んでいた。エースは既に5食分をぺろりと平らげている。

「なんか問題でもあんのか」

次のおかわりを頼みつつ、悩む片割れの横顔を見た。

「いやあ、食糧補給的にはここの、両島の間を通った方がいいんだけれど」

問題があるとするば。

コンパスの針で刺したのは、ひとつの島だ。

「アーロンパーク」

がちゃん、と音が鳴った。手に持っていたコップが割れたらしい。カウンターに立っていた主人が身を引いている。

頭にはてなを浮かべるエースに、数年前に出来た魚人の縄張りがある事を教えた。

「魚人って言うのはね」

問われる前にアンは説明に入る。

魚人とはなにか。簡単に説明するならば、水中生活に適応した人間、と言うべき存在だ。

魚類の特性が全身に現れ出た個体を魚人、下半身のみ魚の尾を持った個体を人魚と一応は区別されている。

陸上に住む人間は、長い間、それこそ空白の百年を跨いだ過去から、水中に住まう事が出来る魚人達を虐げてきた。

諸説は様々だが、魚という水の中でしか生きられない生き物の遺伝子を持つ、呪われた種族だといわれていたらしい。そういう人間も元を辿れば単細胞生物から進化して今の姿になっているわけだが、そんな正論は差別を行う存在にとって問題では無い。

ヒトは。

あちらの世界でも己と違う者に恐怖する。理解できないモノを恐れる。

それがヒト自身が作り上げたバケモノだとするならば、余計に、だろう。

有名な思想をひとつ挙げるなら、白人至上主義がある。自分たちの種こそ偉大であり、肌の色が濃い者らは劣等生物だと言論し、場合によっては同じ人間としてすら認めない。種を区別する差別を生んだ。

これはアンが存在する世界においては、人間と魚人に当てはめれば嫌なくらい符合する。

「魚人と人間って血液型同じなんだよね。外見は違うけれど中身は同じ。人間は海中で生活出来ないけれど、魚人とか人魚は海中でもえら呼吸出来るし。進化の具合で言えば、魚人の方が一步先んでいるって言うてもいいくらいだと思ってるの、個人的には」

だが一部のヒトはそれを認めない。

否、認められない。認めてはいけないのだと思っている。

かつて触れた、神のみが知る、DNAマップという命の設計図に手を加えて、生みだそうとしていたそれを、決して明るみにしてはいけないが故に。

滅ぼされた王国利用し、本当を隠したのはそれだけではないのだが、いまさら根ほり葉ほり明るみにせずとも良いだろう。それらはしかるべき時に、しかるべき誰かが公開する。その時に世界がどう反応するかは、この世界に暮らす全ての人々が選択すべき問題だ。

ルフィ。

アンは弟の姿を瞼の裏に描く。

わたしはきつと、いろんなものをあなたに背負わせちゃうと思うんだけど。

許してとは言わない。

お姉ちゃんなんて嫌いだなって、それだけは言わないでね。

目を開き息を深く吸い、思考を切り替えて元の話題へと戻る。

「実際に会った方が、どういう人達なのか、分かるんだろうけれど」

会うと言ってもこの東の海では人に、100%敵対意志を持つ魚人しか存在しない。

コネのある魚人と言えば、ジンベエ以下、魚人海賊団の面々だけだ。

空白期から数えるとしても、900年以上続くこの迫害がどれだけ根深いものであるか、想像するに容易い。

「なあ、トムさん、あの人は魚人じゃねえの？」

「はっ、そうだ、トムさん魚人だ」

エースに言われてハッと気付く。あまりにも近し過ぎて、すっかり忘れてしまっていた。

「差別、ねエ」

口にくわえたフォークをひよこひよこ動かしながら、エースは視線をアンに寄せる。

幼い頃から迫害の現場を見、己自身も父の名により悪意を受けて育ってきたエースにとってみれば、行われる側の心境のほうが分かりやすかった。

ただ黙ってそのまま、成すがままになっているかどうかは、別問題だったが。

「アーロンパークのボス張ってる人物がこれまた、好戦的な人でね」

魚人だから、ではない。人間でも温和な性格である人や、攻撃的な、内向的な、多種多様な性格がある。

アーロンはサメの遺伝子が表に現れた魚人で、今現在はたった2000万ベリーの賞金首だが、元は億越えの値を付けていた。アンはこの魚人が解き放たれた経緯を知っている。

そしてアーロンがどうして人間をそこまで毛嫌いするのも、だ。七武海に加入したジンベエが当時、2億5000万だったから、同等の実力を持ち、なおかつ残虐性も強かったのだと予想出来た。だがしかし、賞金の掛け方が本部で行われる会議のさじ加減という意味合いにおいては、余り信用のおけない設定金額であるとも思える。

「よつてくのか」

「考え中」

最初は驚いていた主人も新たな客が入ってくると、そちらの方に向かい聞いた会話を忘れようとしているかのように見えた。

それは仕方の無い話だ。

立ち向かえば確実に死ぬ。それが分かっている立ち向かうのは無謀者か、死にたがりのどちらかだろう。無力感に、罪悪感を感じながらも、打つ手の出ない己を隠す。どうしようもないとうな垂れる。アンはそれを責める気はない。

それが普通の反応だからだ。誰もが命が欲しい。生きていたい。逃げたとしても、誰も責めてはいけない。責められない。

「すごく頑張ってる子が居るんだよね」

苦汁を選択し、罵られたとしても不敵に笑いながら、ああそうだと前を向く。

その心の内は何度もアーロンに蹂躪されぼろぼろだと言うのに、それでも足掻きつつづけている。足掻いて、己に目的を言い聞かせ、本当を殺して生きている。

周囲を取り囲む人々もそうだ。

その子の選択を知り、先ほどの食堂の主人のように己の無力さに苛みながら、ただじつと耐えている。反乱を起こせばその子にも矛盾が向く。その子の頑張りが無意味と成す。

「ねえエース」

ルート、こう通ろうと思ってるんだけれど、どうかな。

コンパスの針でっー、と船の航路を指し示せば、

「それでいいんじゃないね。会ったらあったで何とかすりゃいい話だから。」

しっかりと食べきった皿の上にフォークを置いたエースが口元に力強い笑みを結ぶ。

「じゃ、そういうことで」

おじさん、御代金ここに置いておきますね。ごちそうさまでした。アンは立ち上がりエースの後に続く。

52・海原の路(2)

長く連なつた幾つかの海峡のふたつめ目を順調に進む船は、後方バルンヤからの風に押され、予定している次の寄港地に近づいていた。

船が大きければもう少し長距離航行が可能なのだが、大体2日か3日に一度、食料調達という主な目的の為、見えた港に入っている。手持ちの金額はまだ余裕があるとはいえ、船を買うには足りず、人を雇うにもこの小型船ではあと一人乗れるか、といったところだろう。

海峡の旅は、時折漁船を遠目に見るくらいで大きな船の姿も無くのんびりとしていた。

薄雲が掛かった空から降る光も強過ぎず、眠気に誘われれば互いに融通しながら舵とりを代わる。そして他愛の無い話を交わし合い、一日、一日を過ごしていた。

ここにルフイが居たならば、島での生活とほぼ変わらないだろう。それぞれの目的、そして目指すもののため、船出は共に出来なかったが、お互いがお互いの最も良き理解者となり得ていた。

男同士だけの約束が交わされているのも、アンは知っている。

内容まではどうせふたりだけの秘密だとかで話してくれなさそうな口ぶりだった事もあり、踏み込まなかったが、兄弟が楽しそうであるならば別に構わないと思う。

そう言えばこの前、聞きそびれていたルフイの寝言の結末はどうだったの？

なにかと必死に戦いつつ、なにかを食べ、叫びながら転げまわっていた話の続きを尋ねる。

「どこまで話してたっけ」

「焼き豚が走ってくるなんてウマすぎる、だよ」

「そっからか」

時間を忘れて笑い続けていたふたりは、夕焼け空になる頃ようやく気付いた。

「めし」

「ご飯」

同時に出た言葉は、空腹を知らせる音を伴い波の音に混ざる。

数日前に積み込んだ食糧も後わずかだ。

「ん。いつの間にかの向かい風に阻まれて今日中に村に着けないかも」

先日立ち寄った小さな漁村で金銭を払い、分けて貰ったパンも大きなバケツがひとつだけ残っている。

言わずもがな、足りるわけがない。

「…足りねエ」

つぶやきは切実だった。それはそうだろう。

島に居る時は獲物が森に溢れていた。木の実もあればきのこや野草もふんだんに生えていて食べ放題だったのだ。しかし船を浮かべての航海ではそういかない。

魚を採るにしてもまずは海に潜り、捕獲すれば捌かねばならなかった。

この小さな船の上で火をおこせば、火事になる可能性もある。だが問題はそこでは無い。

この小さな船ではエースが満腹になるだろう量を備えた魚を、受け切れないだろう事が切実なのだ。小魚では満足しきれない胃であるのは、共に生まれて17年、良く思い知らされている。腹の足しになるどころか、もっと腹減った、そのたまいかねない危険性すらあった。

大きな魚を潜って取るのは簡単だ。海兵であった時に、ハムの在庫が少なくなってきたと料理長が言えば、艦長の許可を取って現れ

た海王類を獲った事も一度や二度では無い。

だがしかし、一番小さな細長い海王類ものを選んだ所で、どう考えても重さに耐えきれず船が沈む。

とはいえ腹を減らしたままのエースを放置するほど、怖ろしい事象はなかった。

すべからく飢えた獣は凶暴性が増す。

「アン、腹減った…」

見上げてくる目に、残り時間が少ない事をアンは悟る。

ぞわり、と身の危険を背筋に感じた。このままでは自身が食べられかねない。

最悪の場合、フーシャ村に跳びマキノにご飯を作って貰う方法を考えていたが、そろそろ自身が海軍より出奔した事実がこの東の海にある支部にもいき届いているだろう。

故郷に網を張るのは常とう手段だ。

戻れば村の人々や、ダダン一味にも迷惑をかけかねない。

「エース、あとどれくらい我慢出来そう？」

「もー無理。昼飯食いそびれてるから、な」

満面の笑顔が怖かった。

海賊デビューは今のところ何とか回避されているが、いつ何時、海賊船と遭遇するか解らない。海に出て翌日に、エースとアンは賞金稼ぎと遭遇した。

海賊旗も無く、小さな船にたったふたりきりであったのが幸いして、東の海に生息する海賊達の手配書を見せて貰うことが出来た。その中にはまだアンの手配書は無かったが、今年は東の海は新人ルキが大量出現しているらしく、他の海を縄張りになっている賞金稼ぎも続々と入ってきているという。

小金を稼ぐにはもってこい、の穴場になっているのだそうだ。

「なあ、アン、あれ船だよな」
「そーだね、船だねー」

宵闇が迫る、人の目が最も見え難くなる水面に、船影を見つけてしまったのだ。通りかかった船の不運に手を組み、祈る。

しかもよくよく見てみれば、黒い旗を掲げていた。

エースはぺろりと唇を舐める。なにを考えているのか、分かってしまったアンは、出来るだけ穏便に事が終わるよう願うばかりだ。

アンは潮の流れを読みながら海賊船へと進路をとる。小指の爪ほどだった影がみるみるうちに近づいてきた。あちらの船も、こちらに気付いたようだった。小舟を捉えられる距離まで近づくと、威嚇のように大砲の弾を一発、飛ばしてくる。

狙撃手の腕がいまいちであるのか、それともあえて逸らしてくれたのか。随分と離れた場所で飛沫があがった。

「ちよつくら行ってくる」

「はあい、船番してるね」

ひらひらと手を振り月歩で暮れなずむ橙の空を駆けるエースの背を見送る。元海兵のアンが行けば、長年の所属で身についた海賊は殲滅すべし、をさらりと日頃の行いとしてしまう。

その点、島で野生児として育ったエースが行く方がまだ、波風が立たないような気もするような、しないような。ただ、そう、ただ保有する力の値として、エースは少なくとも条件付きではあったが中将級だと言われていたアンをも凌いでいる。戦闘に突入すれば、どうなるかは想像に容易い。

砲弾は続かない。

望遠鏡でこちらを見たのだろう。小さな船にたつたふたり、載せている物品も期待できず手を出すのも面倒だ。気まぐれに遊ぶにも宵の時刻である。火を焚いてまで姿を照らし、襲撃するまでの獲物では無い、そう判断されたのかもしれない。

なにかあればエースの横に跳べばいいと、船の揺れに身をまかせながら、半身の意識に添う。

エースは黒く闇を先取りしたような海を眼下に、空を駆けていた。風を受けなびく伸びてきた髪を払い、大きな船へを上空から近づいてゆく。船の揺れは思っていたより平気だった。小さな船ほど波に揺られやすいと聞いていたが、それほど気にはならなかった。

世界で名を上げるために手つとり早い方法は、一般的に悪と認知されている海賊行為を行うに限る。船出を決めた当初ならば、それすら生きるためには仕方ないと思っていた。どうせ生まれて来てはならなかった命ならば、どんなに憎まれようが恨まれようが、構わないと思っていたのだ。

しかし共に生まれたもうひとりが居た。初めて友と呼べる親友が出来た。生きていて欲しいと願った弟が叫んだ。

仕方なく生きるつもりだった生に、重さが加わった。

そして世界を間接的にだが、もうひとりを介して知ることが出来たのは、思いの外大きな収穫だったといえるだろう。

トン。

立てた物音はそれだけだった。ブーツの底が着地の際に小さく、鳴り合わさった。

羽織るシャツが海風に揺られ、飛ばないように手をあてたテングロンハットの奥から、周囲を見識する。

闇に落ちる直前の薄暗い視野の中、突如現れた影に気付いた数名が何事だと声を上げた。周囲には目立った船は無かったはずだと、誰かが叫ぶ。

なんの用だと尋ねられ、素直にエースは答えた。

「大した用事じゃないんだが……ちょっとばかり食べ物を分けて欲しくてね」

若い。

船員が放たれた声に注視する。

テンガロンハットを被った、容姿から推測するに、まだ子供と言ってもおかしくは無い年齢だろう。だが音も無くこの船に辿り着いた若造を、ただの子供だと見る船員達は居なかった。

船の中からも応援が駆けつけ、それぞれが刃を抜き、銃に手をかける。

「バカ言ってるじゃねえ。海賊に飯たかろうってか、マヌケな面して何様だ」

「おれは別に、争いに来たわけじゃねえんだけどな」

ただちよつと近くを通った縁というヤツで分けて欲しいだけなんだ。

でもやるってんなら。

エースは笑みを浮かべる。

「売られた喧嘩は買う主義だ」

放たれた銃弾が開始の合図となった。煙が星のきらめきを広げた空へ灰色のもやを生む。行動の先を読む事など、造作でもなかった。確かに海賊達は戦い慣れはしていた。だがそれは一方的な力の振るい方、悪く言えば弱者へ暴力を振るう術だけなのだと、ひらり、ひらりと避けながら見る。

技を使うまでも無い。

常時纏う見聞色だけで相手の動きの先読みが出来、周囲の動きが合わさってもどこにどう動けば同士討ちさせるかすら分かっている。

戯れに首筋に手刀を落としてみたり、足払いをかければ、なにをやっているのかと仲間を罵倒する言葉が飛ぶ。

こんな集団も海を渡っていけるんだな。

エースは自身が思い描いていた海賊像が、想像の中だけにある理想なのだと気付く。

確かに赤髪が率いる海賊団だけを見れば、その通りだろう。だがそれはごく一部だけなのだ。

エースは相手から喧嘩を買ったとはいえ、同情してしまっていた。

ほらあいつ、仲間を切っちまいそうだ。

そんな事を思えば、振りかぶったナイフがエースの体を通り越して、味方の脇腹に突き刺さった。

「気をつけろ！ 手当なんざ後だ、たった一人になんの体たらく晒してる！」

東の海つてのはこんなもんなのか。

ついた溜息にくすくすと笑いを含む双子へ向かって聞けば、この海は極端から極端なのだという。

その最たるは、たぶんという推測を込めてエースであり、ルフィであると前置きした上で、十数名が徒党を組めば普通に暮らし営みを過ごしている人達にしてみれば十分に脅威だと言葉が伝わってきた。

（例えれば幼かったわたし達とブルージャン達、じゃないかな）

納得は出来なかったが、大体は分かった。

守るべきものがあるならば、例え力及ばなくても抗うのがエースだ。

しかし抗う力を持たない人々は、命を失う選択を良しとせず、奪われたとしてもまた一から作り直せばよいと考える。

それぞれの立場によって考え方が違うのが当たり前だが、まだエースは自分を中心とする、必要としてくれる存在だけを包容する小さな世界を見ていた。

アンは別にそれが悪いとは思っていない。人はみな、身近な存在を認識し少しずつ、少しずつ範囲を大きくしてゆく。それはあちらの世界で言う学校、が大きな役割を果たしているのだが、残念ながらこちらにはそういう施設自体が少なかった。大きな町であれば教諭を集めて学校を運営している都市もある。

村では村長や有識者が私塾を開いて子供達に読み書きを教える場合もあるが、そこに通うにも、わずかとはいえ金銭が必要だった。貴族に関しては語るまでもないだろう。

この世界では教育を受けられる者とそうでない者の差は大きい。

他愛の無いやり取りや考え事をしている内に、船上はいつの間にか静かになっていた。

全員生きてはいる。

低いうめき声が響いていた。

エースを見上げる視線が怯えの色を宿し、一步步くだけで体をピクリと過剰反応させる。

海賊となる覚悟。

何時も、何度も考えてきた。

海に出れば自分より強い存在が屯たむろしているのだらうと、想像していた。

実際にガープやアン、赤髪を中核とし組まれた部隊頭とその船員達、船大工であるトムですら驚くほど力を有していたのだ。

…これじゃまるで。

ごみ山で肩を寄せながら、振るわれる暴力から逃げ惑う子供たちを襲う暴漢達のような、とエースはため息する。

「エースがこの海では強すぎるのよ。骨のある人達と出会いたいのであれば、最低限でも”偉大なる航路”グランドラインに入らなきゃね」

いつの間にか船を繋ぎ、甲板まで上がってきたアンにエースは手を上げる。

「準備運動にもならなかったでしょ」

「なんか、すっげエ後味悪い」

そんなものだと言は笑む。

「エース、お願いがあるの」

「ん？」

「エースは、エースだけはこの感覚に慣れないで。違和感を持つてて」

「…分かった」

真意は分からなかったが、泣きそうになっていたアンを笑わせるためにエースは頷く。

ありがとう、は満面に咲いた笑顔だった。

その後船室の幾つかを漁り、2人分の食料を調達した後、見つけた電伝虫で一応、連絡しておくかとアンは、気の進まないような顔

をしながら電話をかけた。

出たのは顔見知りだったらしく、安否を気にする言葉が幾つも並べられる。

「大丈夫です、あれくらいで衰弱するとかありませんから。あ。

良ければ海賊船の捕獲をお願いしたいんですけれど」

船を動かすための舵と帆を壊しておきますから。

さらりと海賊達が青くなる言葉をアンが発する。

ついでにシエルズタウン行き的大海流に乗せておくので、出来るだけ早くの”救出”をお願いします、とも付け加えた。

賞金稼ぎじゃないからお金も要らないし、登録するつもりもないからと強引に切り、再度溜息を落としたアンの髪を、エースはくしやくしやと撫でる。

水を一樽と暴飲暴食しなければ、3日は持つだろう食糧を頂いてきたふたりは、バルシャで再び波を切り始めた。海賊船にもちゃんと、食べ物に残して来ている。

船上で飢えるほど苦しいものは無いからだ。必要最小限だけを貰ってきた。

ただし、お宝関係はこっそりとアンが袋に詰めたのをエースは知っている。

「だって。海軍がああ船を回収したら、これ、全部没収なんだから。行き先は……うん、まあ、その。いろいろだけれど。宝の地図が2枚と、金銭に変えられる装飾類は貰っても大丈夫。彼らにとっては、宝の持ち腐れになるから」

につこりと平気で言えるアンに、エースは自分より海賊としての素質があるのではないかとすら思った。だが本人いわく、海賊では

無く航海者、なのだそうだ。

同じものだとも思うのだが、そこは明確に違うと否定する。

「おれもアンみてエにもっと力があればいいんだけどな」

「どの口がなにを言うのかな」

カンテラが照らす淡い光の中、風を操り方向を変えるアンに、エースがぼつりとつぶやいた。アンからしてみればエースの方が羨ましいくらいに強い。

強いだけでなく、優しいし、^{おご}驕らない。

世が世ならば、こんな良好物件が女性達から放っておかれる訳が無いのだ。

生まれが多少、特殊と言えば特殊だが、そんな事など関係が無いと、父を受け入れた母のような存在もいるはずだ。

「隣の芝は青いつていうけれど」

双子同士でそれをやってても不毛だから、ね？

腹が満たされうとうとし始めたエースに毛布をかけ、カンテラの炎を吹き消す。

数多の輝きを指針に帆の向きを確かめながら星座すら埋めてしま
う白を仰ぐ。

波が導くさざ波の路は、次の海峡へと入った。

53 - 悪魔の実

同行者が増えていた。

拾い上げて2日経つが、まだ一言も声を発してはいない。どうしてあんな場所、コノミ諸島の沖合で漂流していたのかも聞けず仕舞いだ。声帯を痛めて話せない、という訳でもなさそうで、とりあえずは陸地に着くまではこのままで行こう、という事になった。

船は海峡を抜け、アーロンパークがある島を左手に見ながら、ローグタウンへ向かう海流に乗っている。十二分に食料を積んだはずだったのだが、どうやら目測を誤ってしまったようだ。

残念ながら魚人からの襲撃は受けてはいない。

もし来れば、幹部のひとりくらいは引っ張り出してここ数日分の運動不足を解消してやろうと待ちかまえていたのだが、近場に現れることはなかった。

小さな舟だから見逃してくれた、とも考えられない。人間を見ればとりあえず、殺しておくか、という思考の集団だ。

この周辺を、コノミ諸島にある海軍支部の責任者と、アーロンが繋がっているという噂も聞いている。そっちを伸しても良かったのだが、わざわざ会いに行つてやるのも面倒だった。

少女の事は気になつてはいたが、夢の内容を信じるならば、ここは弟の狩り場だ。

こちらからはあえて手出しせず、もしあちら側から攻撃意志を發したならば。

壊滅するまで全てを破壊しつくす、と結論した。

アーロン率いる一団も海賊なのだから、それなりの腹を決めているだろう。

アーンという差しさわりの無い脅威よりも、アーンは眼前の状況に頭を痛めていた。

搭乗者がひとり増え、食事も当初予定していた分量より2倍近くとなっている。当たり前に分かっていたことだが、考えが甘かったと言わざるを得ない。

航海に出てから、日々悩むのは食事情だった。

島引き伝説が残る巨人族のオーズのように、船に島を括りつけて航海出来ればどれだけ楽だろう。

それくらい貧窮していた。

これはやばい。

エースの胃が空腹で爆発しない内に食糧調達をしなければ、この船に乗り込んでいる3名との命が危険に晒される。

3日前に運良く商船と出会い、食料を分けて貰ってから全く、船影すら影形が水平線にかすりもしなかった。水だけが豊富であることだけが救いだろうか。

アンを除くふたりは、よく食べよく眠った。

エースとは夜の見張りと進路の保持を分担し、名も知らぬ少年には昼間に帆の番をして貰っている。動く手があるならば使う。身元が分からなくても、名前を名乗らなくても人手が足りないこの船に乘る限りは働かざる者食うべからず、だ。

ゆつたりとした船旅ではあるが、意外と食糧事情に切迫した日々を過ごすアーンは本格的に30名程が乗れる船とそれぞれの役割分担が出来る仲間の必要性を感じていた。

だがどこでどうやって調達するのか、乗組員を募集するにしても、どのようにして誘うのか。

普通にある村や町で、海賊になりませんか、と聞いたところで答えはNO、に決まっている。ゴール・D・ロジャーが死の間際に言

に残した台詞の真意を求めて、海へ漕ぎ出した多くは夢半ばで息絶えるか、インペルダウンへ幽閉されるか、テキーラウルフで労働に当てられるか、だ。残ったごく一部が勢力を確立し、世界の一翼が作られている。

アンのには一般市民に声をかけ、船旅に同乗させるのは出来ればやめたかった。

怖いもの見たさの一時的な興味で踏み込んで良い裏道では無いからだ。

弟のように憧れから確固とした、目的を見出した人物ならば誘いの手を掛けたいと思う。だが航海の危険性を知り、命の覚悟までもが出来ている人物は遠慮したかった。

海でしか生きていけない、八方塞でもうどうにもならず、失望の中で明日が見えない。

出来ればそういった人材がいい。ついでに航海に必要な技能を持つていれば言う事無しだ。

かつてシャンクスがルフィに語っていた言葉が重く感じる。

海への誘いは、その人物の命を背負うと言うことと、同意義だからだ。

今まで己を確立させてきた一切を捨てられなければ、安易に海賊という身分に落ちるべきではない。なぜなら所詮は賊、だからだ。確かに力ある海賊によって和平が保たれている場所もある。あるが多くの地域は平安よりも苦難と辛酸を多く舐め続けていた。

海兵の汚職があつたとしても、海賊からの被害を考えればまだまだし、だと諦めにも似た許容があるのもそこら辺が影響している。おつるの下へ配属されていた頃に、いくつも監査を入れ人事の置き換えも行い、少しはマシになってはきているものの、大きな組織のため時間がかかるのが問題点だった。

エースは一度、受け入れた仲間を決して見捨てはしないだろう。その背は受け入れた者達を守り、時には壁となって命を救おうとする。

だから同じ船に乗り込む誰かを探すのならば、エースに命を託しながらも、決して己の命を粗末にしない者達であって欲しい。

さて、エース船長はこの問題をどうするつもりなのかな？

最終判断は全て、エースに任せるつもりにしていた。

アンは広く浅く、出来るだけ広範囲に見聞色を展開し人の声を探す。

「じゃ、おれも」

目を閉じ集中していた耳元で声が囁かれ、そこにエースが相乗りしてきた。

アンが伸ばした範囲の、その向こうへと詮索の手が伸びる。

ほんの数秒後、見つけた、と位置を把握したエースが笑みを浮かべ、視線をその方向へと投げた。

「ありがとうエース、助かった」

「なあに、大したことはしてないさ」

お前が伸ばした足場があったから、出来たんだしな。

にしし、と笑い広げた海図で現在地と目的地、そして見つけた船の位置を並べ、風と潮の流れを考えて船首の向きを変える。

そんな賑やかなふたりの会話を少年は不思議そうに眺めていた。ふたりは兄弟なのと言う。どちらが年長であるかは問題でないらしい。普通は先に生まれた方が兄、姉と呼ばれるものだが、同時に生まれたとしても序列が生まれる。だが両者に関しては全くの対等とした存在同士に見えた。お互いがお互いを認め合っている。

少年の脳裏に浮かんだのは幼馴染だった。幼い頃から一緒に育ってきた。彼、が今ここに居る理由も、その少女との小さな衝突が原因だ。売り言葉に買い言葉、が生んだ亀裂によってこんな場所まで来てしまっていた。

ふたりは名前こそ尋ねてきたが、出身や漂流していた理由などは全く聞いて来なかった。どこか陸が見えたなら、もしくは海軍と出会ったならば、連絡を付けるか、もしくはそちらへ乗り移るように言われたただけだ。

海賊では無いらしいが、賞金稼ぎでも無いと言う。

航海者、だと胸を張って女が言くと、自称だと男が笑って額をはねていた。

「はい、お水。飲んで」

コップに汲み入れた水が手渡される。本当は沸騰させたいところなんだけれど、と前置きされた水にはレモンを切り入れ、さわやかな酸味と香りで飲みやすくされていた。

「エース、あと2、3時間くらいで接舷出来ると思う」

「ああ、鉢合わせにならなきゃいいけどな」

視線を交わし合い、女が溜息を重ねる。

「“脱落組”だとは思っただけど、人数が結構、残ってるっぽいよね」

自分と同じく海流の関係でこちら側の海へ出てしまったのだろう。東は4つある方角を示す海の中で最も程度が低い海だと聞いていた。生活水準や文化レベルではない。出現する海賊の強さ、だ。賞金額ひとつとっても、他の海より4割程度低く見積もられている。

岨地帯はその名の通り、風が吹かず海流の流れも緩やかな場所だ。カームヘルト
グランドラインしかし偉大なる航海で時折起きる不規則な激流により、岨へ追いや

られる事があつた。

どんなに他を凌駕する力を持っていたとしても、自然の脅威には敵わない。

少年は詰め寄る獲物の相談をしている双方を見た。

ふたりの実力は未知数だった。

お手並み拝見、としようか。

静かに少年は水を飲み干し、目を閉じた。

人は容易く妥協する。

頑張ったんだ、この辺でいいじゃないか。

相對する意見はもつともだ。だがこのままであれば平行線をたどる。ならば両者がほんの少しでいい、歩み寄り、纏めようじゃないか。

それは相對する人物に対してだったり、己の置かれた状況だったり、それらは様々だ。

けれども自らの願いを貫き、どうあつてもやり通すという気概を持つ人物は限られている。

かつて多くの男達はロマンを追い求めて海へ漕ぎ出た。

一般に荒くれ者、と呼ばれる者達だけではない。

今でもそうだ。賞金稼ぎも、商人も、冒険者、学者達ですらたつたひとつを得るために海へ出る。

夢半ばで命を終える者達がこの”偉大なる航路”グランドラインでは、最も幸せなのかもしれないとアンは時々思う。

海はただ広がっているだけだ。

無限ではない。だが有限ある青を漂う多くが、願う場所に辿りつけないでいる。

それはなぜか。

こうだろうと思う理由、^{わけ}違つかもしれない推測、様々が混在し、絡まった系の解き手が現れないでいるからだ。

時が満ちていないのか、それとも既にほぐされた事実が表に現れていないだけなのかは解らない。確かであるのは、父が宣言した”ひと繋ぎの財宝”に辿り着いた存在が、とある選択をせねばならない、ということだ。

手のひらには、多くの欠片^{ピース}が生まれながらにして手渡されている。だがそれが全てでは無い。

20年前、父が辿り着いた時にはまだ時期尚早であつたという。では今は、どうなのだろう。

たった20年だ。されど20年でもある。

時は熟し始めてはいるのだろう。

だが今が食べごろかと聞かれれば、果たしてどうだろう、そう答える事しか出来ない。

行ってみるしかないんだろうな。

アンは手綱で風を受ける帆を操るエースを見上げる。

その時、小さな舌打ちが聞こえた。

理由は簡単だ。

商船が襲われているのだ。風向きが海賊船を押したのだろう。剣戟と銃声が耳に届いている。

「あなたはここに居て」

一刻を争う事態に陥っていた。

^{カムベルト}風地帯を運良く、命からがら抜け出た海賊達は生きて出た高揚感からか、息絶えて横たわる屍までも必要に傷つけている。

生きている命は必至の抵抗をしているとはいえ、岬を越え”偉大なる航路”^{グランドライン}へ入ったツワモノ達相手では分が悪いといえるだろう。

アンはちらりとエースへ視線を向ける。

「心配するなって。大丈夫だ」

信じる。

そう心で伝え、もう一度少年にこの船から出る事無かれと念押し、エースと手を繋ぐ。

瞼を閉じた刻は数秒だ。それでふたつの接舷する船と、点在する人の位置を読みとった。

「行くよ、エース」

瞬間、少年の眼前からふたりの姿が掻き消える。

「……！」

思わず立ち上がり、周囲を見回してしまっただくらい吃驚した。

「……どういふ、事だよ」

丸く見開いた目が捉えたのは、大きな船の上で飛び回っている姿だった。

ひとりは大人数に囲まれているにも関わらずその輪を軽々と打ち破り、もうひとりは風に舞うように多くを霍乱し続けている。

「すげえ……」

近づくなと言われたが、もっと近くで見たいと言う欲求が擡げてくる。

船の舵は帆と手漕ぎの櫂だけだ。

迷っている暇は無かった。

あのふたりは強い。海賊との戦いに勝つだろう。だがその後、きつと自分の技術が役に立つと彼自身は確信していた。

海へ平らに削られている部位を挿し入れ、漕ぐ。

商船へ添うように寄せると、何かの拍子に落ちたのだろう、縄は

しごが下りている部分へロープを結びつけよじ登る。

海へいつか出ると決めてからは、鍛錬を欠かさず毎日やってきていた。そして船に見習いとして乗り込ませて貰ってからもさぼった事はない。

腕には覚えがある、そう言いかけた。

船上では船室から見つけた悪魔の実を海賊達が戦勝品として掲げている所だった。

そこへエースとアンが瞬間移動によって勝利の歓声を挙げ始めた男達の声を引きつらせる。

「どっから出て来やがった」

「子供が二人、おい、方割れは殺すなよ、いい値で売れそうだ！」

「って、言われてるぞ」

「言わせておけばいいと思うよ？」

くすくすとアンはほほえみを含む。

元が付くとはいえ海軍本部大佐を捕まえ、それ以上の实力を持つエースを殺そうと目論む、男達が哀れでならなかった。

エースは島から出ず、顔の露出が無かった為仕方がないだろう。

だがアンは、幾度も新聞の表紙を賑わせている。多少服装や髪型が違った所で、わからないほうが悪い。

エースは自然体のままカタールを手につつ大柄の男へと無造作に近づいてゆく。

男はにたと笑みを張り付かせていた。わざわざ獲物が間合いの範囲内に来てくれたのだと、勘違いしているのか。

大きく振りかぶった曲刀は確かに、黒髪の青年の肩口に切り込ん

だはずだった。

「遅エ」

しかしその姿は眼前に無く、つぶやかれた言葉は男の側面から放たれる。

男は慌てるがしかし、白く光る刀身は勢い余り床を成す木の狭間に囚われていた。

六式を使うまでもない。

見聞色も普段張り巡らせている分で十分だった。

エースが男の脇の当たりをとん、と掌底で押せばバランスを崩し横ばいに転倒する。

気配を感じ視線を空に投げれば、風と戯れながら関節に指銃を放ち確実に無力化していた。さすがに对人戦慣れしているとエースは思いながら、手加減の具合を間違えないよう手首の力を抜く。

そこへ新たな何かが乱入した。

見つけたのはアンだ。上空から、その姿を捉えた。

エースもアンも、海賊船と今乗りこんでいる商船の人員の位置把握と、先読みにのみ見聞色を使用していた。外からの来客を想定してはいない。

潮の位置からして、両船に近づくのは出来ないと言い切れないまでも難しかったはずだ。

見誤った。

同時にふたりはこの後の展開を練り直す。

船内を物色していた海賊船の数名が甲板戦になだれ込んできた。樽の中に入れられていた果実をぶちまけ、奇声をあげている。咀嚼しながら長剣を振りまわし、商船の乗員と赤へと沈める目は、狂気に支配されていた。

空腹が満たされた歓喜ではない。
血潮が散らされる行為への高揚からだ。

「おまえらあ、能力者か。いいぜえ、相手してやるよ。」偉大な
グランドライン
航路”から生きて出て来れた、我がなアアア!!”

カチャリと撃鉄^{ハンマー}が下ろされる。

「…やっかついた」

小さなつぶやきにぬらりと銃を持つ男の視線が揺れる。

エースは大男の相手で忙しく、アンも弓使いと対峙していた。
生かさず^に殺すだけならば、こんなにも苦勞はしていない。

アンが海軍で多くの命を刈り取っている事を、エースは知っている。
だがそれは、繋がっているとはいえその時の感覚は間接的な手
触りだ。

同じ人に対して直に死を与えるのは、まだ未経験だった。一線を
越えてしまえばなんの事は無い。だがその線を越えてしまうまでが
異様に高い壁なのだ。

躊躇が生まれると、アンは知っている。

慣れるものかと思っ^ていても、屍の山を幾つも築けば、知らず知
らずのうちに無関心になっ^てしま^う。そうならないようにしてきた
つもりでも、首筋の動脈を掻き切り、血潮に濡れても胸の内に感じ
る痛みはどんどん鈍くなっ^てゆく。

だからアンはエースに強要しない。

戦い方も半身に合わせて、殺さずを守る。

だがしかし、少年の出現によって男の標的が変わってしまった。
エースが走る。

男が引き金を引いたのだ。
それよりも速く。

体を盾に少年の後頭部に向けられた鉄弾の前に立ち塞がった。

アンは瞬時に弓を撃つ男の横へ跳ぶ。

出来るだろうかと自分の思考を疑う暇もなく、腰に吊るしていた矢筒の中にある矢に触れ、思い描く。

男がその矢によって体中を射られている様を。

そしてそれは実在となった。だがそれを確認する視線は無い。

鼓動が嫌に耳に響く。

唐草模様が見えた。

周囲がコマ送りのように再生される画面を見るがごとく、ゆっく
りとした動きの中を懸命に走る。そして転がっているリンゴの形を
した悪魔の実を掴み、半身の真横へと跳んだ。

この際力加減をしている暇など無い。最悪口の中に実が入ればい
い。

咀嚼し飲み込まずとも、味覚が味を感じれば、実の中に封じ込ま
れた悪魔はその人物に宿る。

少年へ向かう銃弾の盾となったエースの視線が何事だとアンは横
顔を捉えれば、がり、とこぎみよい音が口元から聞こえた。同時に、
銃弾を受けた体がかぐりと膝を落とす。大量の血液と共に唐草
模様の果実が吐き出された。

「フヒヤヒヤハハー!!」

銃弾を撃った男の勝ちどきが耳に届く。

脇腹の内側に突き刺すような痛みが襲ったが、これは自身の傷で

は無いと認識していた。まだ体は動く。蹲りたくなる体に鞭打ち、腰ベルトにさしていた使い慣れたナイフを横振りに投げる。

だがそれはエースが相手をしていた大男が持つ長剣によって弾かれてしまった。

「痛エ…お前なあ。おれの歯、砕く気かよ」
ちよつとは加減しろよな。

膝をついてしまったアンの真横でけほ、と口から喉に溜まった血を吐きだしながら、エースは切った唇をぺろりと舐めて立ち上がる。
「痛みも勝手に持つてくな」

「え、あ…む」

そんなつもりは無かったのだと言おうとすれば、むにと唇を掴まれた。それ以上言うなといった所だろう。

あんな不味イものを噛ませてくるな、と手の甲で血を拭いながら言い捨てたエースがにかりと笑む。

「…怪我、は？」

「怪我？　そう言えば、おれ、あのガキを庇って」

何が起ったか、エースにも分かっていないようだった。

だが確かに熱さを感じた。殆どの痛覚を無意識に、だろぅが持つていかれた体にはなにも無かった、はずがないのだ。

「なアン、喰わせたのはもしかして」

「しなくても悪魔の実、ですがなにか」

どさくさに紛れて何を食わす気だ、お前はとエースがアンの両頬に手をあてる。

「だって、悪魔の実だったら体自身が変化するから、どんなに大けがしても助かるかな、って。ごめんごめん、ほった引つ張っちゃいやよ、お願いはらやへてー」

脇腹を押えながら、いひやいと繰り返すアンの頬をつねる。

「喰っちまったもんは仕方ねエ。さっさと片付けるぞ」

「了解」

赤くなつた頬に当てていた両手を下げ、殲滅戦へ意識を切り替える。

海賊達は戦闘を行っていたのにもかかわらず、襲撃者による見事な無視っぷりにより、啞然としていた。無論攻撃の手を止めると言われた訳ではない。中には果敢に挑んだ者も居たが、ある一定距離まで近づくと、なぜか海へと落とされていた。

目に見えない恐怖が伝播した、と言つても過言ではない。

再び時間が動き始めたのは、エースが自身に宿つた力がどんなものなのか試すように、眼前で掌を揺らめく紅に変えた、その時だった。

薄く笑む青年の、眼光が細められ炎が舞う。

指先を揺れ動く焰に変えて銃弾のように撃ち出し、掌を横に薙いで男たちを焼いた。その操りはいい先ほど能力者になったばかりとは思えない使いっぷりだ。実の能力を把握し、変わってしまった体を最初は誰もが持て余してしまうのが普通なのだが、エースは身の内に宿した焰を用途ごとに使い分けている。

銃を持つ男に炎が肉迫した。いつまでも好き勝手にやられているばかりでは無い。

そう言わんばかりに声に気合を込め、大男が長剣を振るうが、その刃はもう意味を成さない。斬られた個所が炎と化し、斬撃を無効化するからだ。銃も放たれるが、同じだった。

男は紅に包まれる。

がしかし、ただで包まれはしなかった。

羽織っていた衣類を広げればそこには筒状の火薬入れが並んでいたのだ。

叫びがそこかしこで生まれる。最悪この船自体が沈んでしまいかねない火薬量だったからだ。

炎はその場から動かない。そこへアンが風を纏ったかのような動きで駆け入る。

男の体に触れ、海賊旗が揺れるその更の上へと一瞬へと至らせた。爆発が起きる。炎が黒く、煙を含んで空に立ち上ってゆく。

青の中に黒と赤が弾ける。

甲板上には少女の姿だけがあり、伏せていた目が周囲に向けられれば、男達はたじろいだ。今まで戦ってきた相手とは全く違う、なにかだ。そう、化け物と言ってしまっても誰も異議は唱えないだろう。

「さあ、どうする？　まだやるかい」

ふたりが並び揃えば、海賊達の緊張も極限まで引きあげられる。苦悶の呻きが響き、恐怖が商船に押し寄せていた海賊達に伝染していった。そうなればもう、雪崩れるだけだ。

少年は目を見開いていた。

庇われたのが衝撃だった訳ではない。戦技に見入られてしまったのだ。

炎と風、それぞれが能力者なのだろう。

出身の海でも偶にだが、悪魔の実の能力者を見たことがあった。だがこれほどまでに鮮やかな色は初めて見る。

咄嗟の判断とはいえ、偶然手にした悪魔の実を正確に口内へねじ

込んだ精確さも、どうやって移動したのか爆弾を所持していた男を空へと放り投げ、洗練された動きに魅入られてしまったのだ。

ふたりは逃げる海賊を追わなかった。

黒く焦げた木にくすぶる炎を消して回り、息ある商船の人員を助けて回る。

「体の調子はどう？」

「って言われてもな。食うの初めてだったし、よくわからねエ」

聞いた話なんだけれど、悪魔の実ってふたつ食べると、呪いによって体が爆発しちゃうんだって。

アンがくすくすと笑みながら言えば、分かっただけで食わせただろうとエースの足元に転がっていた、己の血で汚れた実を半身へ投げる。それを両手で受け取ると、何の疑いも持たずしゃり、と実を噛めば、アンは心底口にした事を悔やむ表情を浮かべた。

「まずいと言うより、なんだろう。食べ物愚弄するような味がする」

口に入れた食べ物は吐かない。

ごくりと飲み込み、二度と食べるものと額を押さえる。

悪魔の力は既にエースに宿り、実はただの、アン曰く食べ物を愚弄するような味がする果実と化してはいるが、それを平気で口にする安直さに、少年は言葉を失っていた。

「ガキ、さつさと上がってこい」

少年はしぶしぶと足をかけていた縄はしごから側舷を乗り越え床に足を付ける。

「ったく、言う事を聞かねエガキにはこうだ」

優しくは無い、でこピンに少年は思わず声を放つ。

「なんだ、声出るんじゃない」

しかも結構な美声だ。耳に心地の良い声、とでも言うのだろうか。声変わりを迎えるのが惜しい、そんな声音だ。

「…あんたの傷はおれが責任をもって、みる」

悪魔の身を口にしてからの傷は大した事はないが、その前に負つた、アンからの一撃によって口元と顎のあたりがずきずきと痛んではいる。

「別に怪我はしてなさそうだけどな」

診てくれるというのだから、好意を受けるのもいいかもね。

そう言われて、頬を人差し指でかきながら、じゃあ、と了承した。

「おれはロー、トラファルガー・ロー、医者…の見習いだ」

ぶっきらぼうに答えた少年に、ふたりは顔を見合わせ同時に彼を見た。

「名前、やつと教えてくれたね」

「医者には初めて掛かるんだ。よくわからねエが頼むよ」

テンガロンハットの中で目が細められ、ローを見た。

54・うおんてつど

情報管理室に慌ただしく駆ける足音が響く。

数日前に一度、そして今まさに現在、東の海に現存する船を出しきって搜索している人物からの連絡が入ったのだ。

既に元帥には第一報を入れてある。

確かに東の海と一言で括ってしまうには、余りにも広い地域を指す。

だが全くといって消息が掴めずにいたその人からの連絡は今まさに切られようとしていた。

「だからそんな大事おおいごとにしないでくださいってば、聞いてる？ ブランニュー」

「ですからもうしばらくこのままで」

数秒の沈黙の後、電波が途絶えた。

逆探知するまでもなく、現在地を口頭で言っていたものの、今すぐにそちらへ近場の船を向かわせた所で、きっと入れ違いになってしまうに違いない。

彼女が、将来を約束され將の位まで目前と言われていた人物が突如出奔したと聞いたのは、つい数日前の事だった。

表面的には長期休暇となっており、東の海で海賊船をひっ捕らえ、商船を助け、連絡してきた事実は全て、機密として伏せられている。

「現状を報告せよ」

「はっ」

ブランニューは背後から聞こえた声に背筋を伸ばし、その場で敬礼する。通信室に足を踏み入れたのは、海軍本部の頂点に座す元帥だった。眉間にしわを寄せ、口髭を蓄えた唇を真横に結んだ表情は厳しい。

「今しがたポートガス・D・アン大佐より連絡が入り、現在位置を東の海、^{イストブル}ローグタウンより南東に下ったペルシアナという町に滞在しているとのことです」

元帥到着まであと一歩という所で切られてしまった電伝虫をちらりと見れば、我関せずと言わんばかりにそれは目を伏せ眠っていた。冷たい汗を背筋に感じながら、一気に文言を伝えきる。

聞いたことが無い町の名だとセンゴクがつぶやけば、

「東の海では有名な町なんじゃがのう」

後方よりセンゴクとは真反対に楽しげな表情をしたガープが扉にもたれ室内を眺めていた。

「なにをしている」

「気にするな」

「そうもいかん」

「なら見学つてことにしておいてくれ」

そういう問題では無いとセンゴクはいつものように、ガープを切り捨てる。

今までにも海兵であつた者が海賊に墜ちた実例は何十とあつた。

だが今回ばかりは政府からお達しが出るを待たず、^{かんこう}箱口を引き行方を追わせたが、なかなか捕まらないでいる。まるで網の目の隙間を知っているかのごとく、そう、ことごとくすり抜けていた。

手塩にかけて育てた人材が流出した、だけでは済まされない。英雄の孫である事実は世界中に広く知られている。それが海賊となつたとあらば、民衆は激しい動揺を見せ、精神的に脆い者達は恐慌状態に陥る可能性も考えられた。

世界に与える危険度を示すならば、新世界に居座る四皇とその配下を省けば、現在進行形に置いて最も危険が高い人物に挙げられる。とある事情において下手に手配書を回すわけにもいかず、ここ1カ月内で最も頭が痛い事案だつた。

「ローグタウンには連隊が駐屯しとる。ペルシアナの近くには支部もあるんじゃ」

そのうち捉まるだろうとガープは事も無げに軽々しく、安易にそう言いきった。

どうせ偉大なる航路グランドラインに入って来る筈だ。そうなれば張る区域も限定される。

しかしセンゴクは焦っていた。こんなにも焦燥感に狩られるのはどれ程だろうかと振り返るほど、若かりし頃に感じた切迫を身近にしていた。

「悠長に待つてはおれん」

デイハルド聖が解き放った獣は、政府の中枢、それが抱える闇も知っている。

連れ戻せるならば出来るだけ早くに、もし出来ないのであれば、それ相当の被害を想定した部隊を送ることも検討しなければならないだろう。

老人達では無かったが、せつつかれているのだ。遠まわしにだが、海軍への予算をちらつかせられていた。

コングがなんとか世界貴族内の愚痴を引き受けてくれているお陰で、予算の件もうやむやと前年度と同じ金額が下りてくるとはされている。

だがしかし、現状を鑑みれば結果は散々といえるだろう。

全ての海で海賊を取り締まっても、被害は減少どころか増加の一步を辿っている。

その中でなんとか削減された人員の賄いや、物資運搬の見直し、海兵としての意識改革などが成されようやく軌道に乗ってきたところだったのだ。

計画の中心人物が消えるなど、以ての外だった。

幼いながらもその頭脳の中に秘めた機構を構築する力は、今現在

の海軍に最も必要とされる素質とセンゴクは考えていたからだ。
やむを得ないのか。

真一文字に引かれた唇が動くことは無く、固い表情のままセンゴクは情報管理室からその姿を消した。

「それはおれのだ」

「…さつき丸ごと一匹食べただろ」

何度目かのそんなやり取りを、アンは楽しげに眺めていた。
取り合っているのは鳥の丸焼きだ。

現在乗る船には、持っていた所持金以上の設備が乗せられている。
先日助けた、海賊に襲われていた商人が快く譲ってくれたのだ。
名前をようやく教えてくれた少年は、エースの治療をしつつ、ふたりから基本的な戦闘のノウハウを学んでいた。空間把握だけを例に挙げてみても、ルフィより高い応用能力を持っているようにも思える。ただ相手を無効化し、戦闘能力を奪うという点では、やはり弟の方が勝っていた。

風は良好、航海を邪魔するものは何もなく、大きすぎるからと遠慮したかった船によって波を切る速度も上がり、予想以上に早くローグタウンへ到着する見込みとなっていた。

ローグタウン、別名、始まりと終わりの町。東の海でなくとも、後者の方が町の名としては有名だろう。空白の100年を含めた、近代史の中で唯一、海賊王の称号を手に入れた男が生まれ、死んだ町の名称だ。

海軍は海賊王を、見せしめとして公開処刑した。だがそれは間違っていたと、言わざるを得ない、と個人的にアンは思っている。
なぜなら海の王位に就いた男に、わざわざ舞台を整えてやった、と同義だからだ。

しかも海賊王はその命と引き換えに、新しい時代の幕上げを宣言してしまった。義祖父も何か企んでいると、気付いても良かったはずなのだが、妙な所で気の合う関係だったらしいし、あえて、最後に打ち上げる特大の花火を邪魔しなかったとも思える。

結果的に世界へ終わりを告げるはずの処断が、始まりを鳴らす鐘となった。

しかも多くのものを魅了し、死んだ父は予定通りとほくそ笑んでいるに違いない。

それからローグタウンは東の海の中で、一大観光地と化した。その様は某、夢と魔法の王国とそっくりだとアンは思う。

海軍は一般的にも、そして海賊に対しても、本部直属の一団をローグタウンという町に配置せざるを得なくなった。

理由は挿して推し量れるだろうが、海賊王にあやかろうと、この町を訪れる無法者たちが溢れかえりかねなかったからだ。事実、海賊王の処刑時には今現在、新世界で名を轟かせる、または七武海として名を馳せる者達がそれを静かに見ていたという。

いくら他の海に比べて、平和という二文字が似合う方角ではあったが、それでも海賊が居ない訳ではない。

処刑が行われてから数年間は、流れ物が多く蔓延り、荒れたと言う。東の海に配置されている人員では、役不足だったのだ。

当時の資料を漁れば、定期的にガープ中将が掃除に訪れていた事が解る。また偉大なる航路内グランドラインで鍛えられた、大佐の位を持つ人物が代々、その町の守りに入ってから、表沙汰にはそう、大きな事件は起きてはいない、と明記されていた。

アンはカモメの鳴き声を真上に聞き、視線を上げる。陸が近いのだ。

波を良く切り、小舟バルシャと比べれば揺れも少ない新たな住処となった、この船の名はまだない。

船首にはエースの希望で取り付けられた馬の像が飾られている。

アンは黒く染められた予備の帆に針を通していた。ある程度の事はなんでも自力でこなしてしまうエースだが、裁縫だけは苦手としている。布を通過した先にはなぜか指がいつもあり、何度赤い血で染めたのか、数え切れないほどだ。

（ああそうか、ロギアだったら怪我しても直ぐに治っちゃうから、練習して貰うっていうのも手だよな）

アンはぼーっと思考を垂れ流す。

ルフィの場合はそもそもさせる方が間違いであると気付いてからは、裁縫関係をマキノに一任してお願ひしていた。元々マキノも料理と同じく、衣服を作るのが好きで、幼い頃は良く縫って貰ったものだ。

「焼いちまうぞ」

「あー、うん。大丈夫、能力抑えてあげるよ」

聞こえてくる声に緊張感のかけらもないのんびりとした返答が戻る。

アンがエースの口に突っ込んだ悪魔の実は炎だった。確たる名称は図鑑を見なければ分からないが、自然系であることは間違いないだろう。体の感じは以前と変わりないらしいが、何かをしようとすると炎が生まれ、上手く実体を保ってられないような気がする、らしい。

アンは意識し、揺らぎ無い水面を思い浮かべる。

訓練し始めた頃は直に触れていなければ効果が発動しなかったが、今ではある程度の範囲内であれば、力を御すことが出来るようになっていた。

発火してみて、と言われ、エースは試しにと指先を振るう。

「お？」

「なんでだ？」

エースとローの疑問符が重なった。

「タネも仕掛けありません」

両手を空に掲げ、アンがにへらと笑う。

笑いながら、これからの事をアンは考える。

悪魔の実の力をエースが得たことで、ふたりは狙われやすくなった。爆発的なまでの攻撃力を有する、海軍式に言えば要注意人物となつたわけだ。

元々アンが同行している時点で、目をつけられていると同意義なのだが、エースまで悪魔の実を食べたと知れば義祖父はどんな顔をするのだろうか。しかも海賊の旗揚げをしていないものの、絶賛偉大なる航路グランドラインに向けて航行中であると知ったならば、なんと云うだろうか。

「絶対に……」

「腹捻らせて笑い終わった後に拳骨だな」

ふたりの意見が重なる。

愛ある拳と語る義祖父の拳骨は脳げんこつしんとつを起こしてしまうほど、痛い。痛いというより気が遠くなる。あの拳を受けて、平気でいられる生命は、この地上のどこを探してもいないだろう。それくらい痛い。想像するだけで痛みをひりひりと感じるほどに、ふたりの体には刻みこまれていた。思い出したエースがぞくりと体を震わせている。

戦い方もこれから変化するだろう。

否、変えざるを得なかった。

今までと同じであれば、いつかは自分の癖を良く知る大将達に拿捕されてしまう。

安定した力を放棄するのは決断が必要だ。

一度捨て、新たに構築した土台の上に今まで培ってきた、技術や

知識を組めばいい。

これもひとつのパズルだ。

その欠片をエースは手にした。

ならばアンも取り急ぎ、ばらさなくてはならないだろう。

だが力技を中心に組む訳にもいかない。体格や腕力、敏捷性など基礎から誰かに師事出来る訳もなく、方向性を変えながらも技巧を中核に組むしかなかった。

針を羊の毛を丸めて作った針山に刺し、立ち上がる。

空模様は変わらないが、風が微妙に向きを変化させたのだ。

アンが水平線の向こう側に視線を泳がせる。

「ローグタウンまではこの航路で大丈夫そうだね。エース、少しだけフォアコース動かしてくる。舵見てて」

地図を見ることがもせず、甲板からマストへと飛ぶ。その姿はまさしく空を自由に羽ばたく鳥のようだ。

海兵が使う体術のひとつだと、ローは聞いた。

「ところでロー、次の島に着いたら帰るんだろ」

「ああ。あんたの傷もほぼ完治してるし、な」

ロギアだから、ではなく、エースという存在そのものの治癒力が半端無く高かった結果、効果的な医術を施した事により、予想していたよりも早く治癒したのだ。

とはいえっても撃たれた銃創は、悪魔の実を食べた直後だったため、深い傷になってはおらず、どちらかと言えば顎の部分に出来た打撲のほづが傷らしいといえた。

医者のお、の視点から見ても異様な回復力を見せたエースの体は、完治と言っているほど整っている。

ありがとうという声に上空を仰ぎ見れば、ニユース・クーから新聞を受け取ったアンがマストを支える支柱の上で手を振っていた。

すたん、と下にくだり舵の向きを固定してから新聞を広げれば、その中からふわりと数枚の紙が舞い落ちる。

それは一見、手配書だった。

だが踊る文字は” DEAD OR ALIVE ”ではない。” ALIVE ”のみ印字され、桁が描かれている場所には” LIKE HOPE ”とある。

写真は横顔が写るものだが、特徴は分かった。

「生け捕りが絶対条件だよ」

「7年近く海軍に居たけど、こういうのは初めてだよ」

ローは驚愕の事実を知る。

一見、この脳みそに花が咲いたような、緊張感の欠片も無い人物が実は、過去何度か新聞をにぎわせた風舞いその人であると、気付けなかった自分のフシアナに絶句する。

望みのままって、豪華だなあ。予算はどこから出すつもりなんだろう。

まるで他人事のように言うアンに、本当に大丈夫かとローは、思わず口に出しそうになった。

そしてなんでおれがヤツの事など心配してやらねばならん。

気が付き急いで胸中に沸いた不安をかき消したが、いつの間にか顔を覗きこんできていたアンにふい、と顔を背けて背を向ける。

出会ってからまだ10日も経っていなかった。だがパーソナルスペース、人が他者との間に保とうとする一定距離の空間、にするりと彼女は入り込んできた。

違う。

踏み込まれても緊迫しない、微妙な線を計らいながら、どんどんと心許せる場所に手を引かれたような感じた。

エースはある程度の距離を、持っていたように思う。付かず離れ

ず、様子を伺うような感じだった。しかしアンは違う。踏み込んで来るのではなく最初から己の懐へローを招き入れたのだ。否定なく手を引っ張った。それは許容、の意志だと気付いたのは親のように怒られた日の事だ。

どんなにローが交わりを受け付けず、口も聞かなくても拒まなかった。

ありのままを受け入れ、ありのまま変わらなかったのだ。

乗っていた船の事も、どうして漂流していたのかも、ふたりは聞かなかった。

会話するようになってから、疑問符をつけて問えば、

「話したかったら勝手にお前から口を開くだろう」
だった。

言いたくないことを無理矢理聞くつもりも、吐かせるつもりもない。

そう言いながらもふたりは巧みに言葉を引き出していった。

ローが北の海出身者であることや、いくつかの固有名詞を彼から得て、居住する島と町を探し出してしまったのには驚いた。

聞いたことがある海域だったのだとアンが照れたようにはにかめば、医療、特に外傷系の外科医療においては、有名だとエースが言葉続ける。

「医術の基つてすごく残酷だね。体の仕組みを知るために、かつて人は人の体を切り刻み、なにがどこにあるか、見たことの無い部位を開きながら描き留めていった」

命の価値が今よりもずっと軽かった頃、今であっても重さが平等では無い、争いが断続的に続く場所で、医者と呼ばれる人達は息絶えた死体を、息があっても敵側の肉体を蹂躪した。

命を救うのが医者使命と言われるけれど、命を絶つのも立派な

責務だよな。

どこか遠く、違う場所の何かを見つめるようにアンがこぼした一言にローは惹かれた。

人々は口々に助けてくれと強請る。

腕の良い医師のもとには連日、患者が溢れ、口々に望む願いを吐き出してゆく。

死にたくないともがく。

死と生の境目で必死に、救いあげようと手を尽くしても落ちてゆく命もあった。

そうすれば腕が悪い、何かミスをしたのではないか。あり得ないと糾弾する。

死ぬのは誰だって怖い。

エースのようにいつ死んだっていいと強がり言っても、その間際にはやっぱり、生き様に後悔は無くても、心残りは出ると思うんだよな。

アンが親指で例を示すように言えば、

「悔いの無いように、日々生きてなにが悪い。お前だってそうだろう」

「そうだよ」

違うとでも返ってくると思ったのだろうか。エースは勢いを削がれたように、柔らかく笑むアンに、なら文句はねエ、そう言っ足組んだ。

「いやまあ、なにが言いたいかと言えば」

生きる事、老いる事、病となる事、死ぬ事、はどんなに足掻いても、人間として生まれてきた限り避けることが出来ないんだよな。

アンは言葉を選びながらローの瞳をまっすぐに見た。

「生きたいと願う者には生を、苦しみの中で樂を得たいと願う者には終わりを渡す事が出来るのは、お医者様、だけなんだってことを言いたかったの」

医者ではなく、軍人だった自分が対峙した相手に下してきた命を絶つ行為は、渡すものではなく奪うものでしかなかった。

死神ですら首に鎌をあてたとしても、足掻く猶予を与えるというのに、ただ機械的にこなしてきた。いくら刈り取った命を背負うと決めていても、不本意な終わりをもたらすのだ。相手にとって不服でない訳がない。

ローは思わず手を伸ばす。

だがそれよりも先にエースがその頭に手を添え、柔らかなほほ笑みをこぼしていた。

言葉など必要の無い、絆の存在を感じるその視線に拳を握りしめる。

「ロー」

名が呼ばれる。

細い指が握ったそれに伸び、両の手が包み込んだ。

「この手はわたしに差し出してくれたもの、だよな」

貰う前に引つ込めるなんて男じゃないぞう。そう唇の両端を上げ、笑みを浮かべる。

「必要ない、なんて、ないよ」

口に出す前に言われてしまった言葉に視線を逸らせ、小さく舌打ちした。

素直では無い弟とよく似た年頃の少年を思わずアンは抱きついた。驚いたのは男達だ。

「可愛いなあ」

言葉を詰まらせていたふたりは、同時に叫ぶ。

「離れろ!!」

3人だけが乗る船はふたつの意味を含んだ叫び声を放ちながら、道しるべがある始まりと終わりの町へと近づいていた。

55・オワリノハジマリ

ローグタウン。

その名は世界に広く知れ渡っていた。

別名、始まりと終わりの町、かつての海賊王、ゴールド・ロジャ―が生まれ、処刑された場所として数多くの書籍にも名が連なっている。

海賊王。

どれだけの人物が、今の時代の幕開けと共に偉大なる航路グランドラインを登っていったのだろう。高みの海へ至るには力を示さねばならない。あるいは幸運でもいい。その地へ辿り着くだけの実力を証明しなければならぬ場所だ。

アンはたくさんの船を見てきた。

幾つもの船を沈めてきた。

数えることが出来ない命をその手で？いできた。死地へと送りだす基盤を作りだした。

それは海兵だったからこそ許された事だ。

しかしこれから行ふ全ては、ただひとり、個人の所業となる。

北の海にあったローの故郷は、船を泊めたローグタウンとは真逆の季節だった。

今、東は春と呼ばれる気候区域がゆつくりと、赤い土の大陸に添って進行中だ。ふたりの服装もそれに合わせて半袖だったり長袖に着替えたりする。ローを送り届けた島は丁度秋で、着ている衣服の違和感はなかった。夏の服装で冬に突っ込むのが一番厳しい。笑い話になるだろうが、水着のまま冬時間にレポートしてしまい、散々な目にあつた事もある。

別れの時、ふたりはローとひとつの約束をした。

「必ず会いに行く」

ローは挑戦的な視線を双子へ向け、自らの欲しているものを告げた。

普通は誰もが訳の分からない顔をしたり、笑い飛ばすが、ふたりは拳を目の前に突きだして言った。

「先に行つて待つてゐる。高みで会おう」

3つの拳が打ち鳴らされる。

そもそもローが医術をその手に習得したのは、鉄砲玉の幼馴染をどうにかしたいがため、だったという。聞けばその幼馴染は剣の修業を師事する人と外洋に出ると言ったが為に喧嘩し、ローもそれから海へ出てやる。

売り言葉に買い言葉、となつて東の海で漂流する羽目になったのだそうだ。

アンはその場にローを残し、エースと共に姿を消した。

次に会う時は敵か味方か、それとも盟友となり刃と酒を交わす間柄に、もしくは憎しみをぶつけ合う仇敵となるのか。それは再会してみないとわからない。

小指に残る感覚を握りしめる。必ずもう一度、出会つと、そう契つた指を信じて前に進む。

ふたり、へと戻つた双子は、ローグタウンのメインストリートへと入った。

人々が行き交いやすいように広く取られた道を挟むように、商店が区画ごとに分かれて並んでいる。

船は港で船舶料を払い、港へ繋いだ。基本船乗りは半舷上陸が基本なのだが、乗組員がたつたふたりしかない船で、それをしてしまつと身動きが取れなくなってしまう。なので、打開策として以前この町に来た時に知り合つた人物に船番を頼んで出て来ていた。た

だしそんなに長くは相手にも時間を取らせる訳にはいかない。必要な物資の買い出しを含めて3時間位しか無かった。船さえ盗られなければ、中は結構どうでもよかった、という理由もある。

しかもこの町には海軍本部から送り込まれた、大佐が陣取っている。東の海に限らず四方の海域に比べ、中央に陣取る偉大なる航路グランドラインを管轄する本部での階級は、それより二つほどの上の実力を指した話を聞けば何でも前任者が任期を終え、代わりがある、らしい。

その日程までは聞きそびれたが、今現在この町には、ふたつ分の連隊が存在していると考えた方がよい。

アンが知る大佐ではない誰かが今、この町を守備しているのだとすれば、出来るだけこっそり動かなければならないだろう。

前任者はある程度の融通が利く男だったが、今回はどうであるかは分からないからだ。

「まずは飯だな」

「その前に、換金。お金が無いとご飯も食べられないんだからね」
外食に関しては食い逃げが基本、としている片割れに苦笑する。

マキノのように、宝払いを待つてくれる店の方が貴重なのだ。

海賊船から巻きあげた金品を入れた袋を担いだアンが、エースの手を引き、裏道へと入る。表は観光客向けの煌びやかで人目を引く商品が多く飾られているだけで、盗品関係の買い取りをしてくれる店舗は無い。例えあったとしても足元を見られ、安く買い叩かれてしまいかねない。海賊から押収した物品であっても、元は誰かから奪った品であるのは変わりないからだ。そこそこ危ない品が紛れ込んでいる場合も多い。

海兵時代はそれらを仕分ける目利き達に任せていたが、時々、どこかの誰だれが、探している物品と類似している、という話も聞いたことがあった。なんでもそれは、代々伝わる家宝とかなんとかだった気がする。

そついう物を探す裏ルートなどもあり、無闇に表の店で換金すれ

ば足が付きかねないのだ。まだ本格的な海賊としてエースが大暴れしている訳では無かったが、アンの手配書が出回り始めている。”
グランドライン
偉大なる航路”に入るまでは慎重にいきたかった。目と鼻の先で捕まるなど、笑い話もいいところだ。

アンは歩き慣れた道を行くように薄暗い路地へと入ってゆく。そこはレンガで造られた建物が両端に連なる細い道だ。来たことの無い場所であるのに、エースは妙な感覚を得ていた。歩いたことがあるような気がする路、だったのだ。

「なあ、アン」

「ん？」

「変だ、おれここ知ってるかも知れねえ」

端町と同じような匂いがしているのは確かだ。辻の端に座り込んだ、鋭い目つきをした男達がこちらを値踏みするように視線を絡めてくる。

しかしふたりはそんなものがどうしたと、無視して歩く。しかもその様子は、表の路を歩いている時と変わらない。予定していた道とは違ったが、行きたい場所を伝えたとエースは、それならこつちだ、とアンの手を引き歩き出す。

幾つかの辻を曲がり、あともう少しで目的地に到着しそうだという所で、背広を着た恰幅の良い男が真一文字に唇を結んで往く手を阻んだ。

「ここから先は私有地だ。立ち去れ」

一般人ならば威圧に負けて引きさがらう。だがアンにとっては、微風もいいところだった。男が阻むその先が、目的の場所だと暗に教えてくれているようなものでもある。

「わたしはこの先に用事があるの。Mr・ジョワイヨにお会いしたい」

男は表情を変えず、沈黙したままだ。

「ポートガス・D・アンが会いに来たと伝えなさい」

周囲から感情のざわつきが聞こえた。

しばしの沈黙後、こつこつと石畳を打つ靴音が響く。

男の後方からもうひとり、同じ服装をした浅黒い肌をした人物が姿を見せ、こちらへ、と手のひらを進みたい方向へ向けた。

「お前」

「まあ、それなりに名前は広まってるから」

こういう時に使わねば損だと笑う。案内された場所はすぐ側、だった。男に止められた通路をすぐに左に曲がったところにある扉だ。エースが取っ手を握って押す。

「なんだ、ここ」

初っ端から見たことの無い装飾が目に入る。赤の中に散らばる様々な彩色のカーペットが敷かれ、路は続いていた。歩いてゆくと執事が立つひとつの扉へと行きつく。

恭しく頭を垂れ、ドアを開けた。

「ようこそ、英雄候補さん」

通路とはうって変わり、質素で使いこまれた家具が並ぶ部屋には、齢を重ねた老人が独り座っていた。

「初めまして」

にっこりと笑み、アンも挨拶を口にする。

「可愛らしいお嬢さんが一体このわしに何用かな」

わざわざ海兵として轟かした名を使い、半ば脅しのように道を開けさせた無謀さに敬意を表して、老人は若者を招いた。どんな用件を持ってきたのか、聞いてやろう。下らないものであれば、退出して貰えばいいだけの話だ。

英雄の孫、がどれだけ裏の社会において役に立たぬものなのか、知らしめるのもいい。

「フォー・オブ・ア・カインド」

ジョワイヨは役の名にぴくりと眉を寄せる。それはポーカー・ハ

ンドだった。

「あなたはハートの6とクローバーの3を捨てた。対してこちらは全てを変え、コインを残らずベット」

言っている意味が分からなかった。

だが、いつ行われたゲームなのか。思い付く節に、疑問符が生まれる。

「あなたはストレート」

だけれど、こちら側はフォー・オブ・ア・カインド。

「4種類のAと、抜いたはずのジョーカー。テーブルには確かに2枚のそれがあり、いかさまをした気配も無い」

すらすらと滑らかに口を滑らせていた存在が口元に笑みを形作る。

「賭けたものは…」

「…どこでその話を聞いた」

静かな声だった。しかし場の空気はこれ以上ないほど、張り詰めている。

エースは黙って周囲を警戒していた。なんの考えも無しにここまで来る訳が無いからだ。双子として生まれたが、片一方だけが知る情報や記憶もある。見たことも聞いたことも無い何かがあるとは知っていた。

「直接本人から」

あり得ない。

ジョワイヨは頭から否定した。しなければならなかった。

本人、とは既に故人だ。

目の前に立つ人物の年齢から見ても、それはあり得ない。

「嘘をつくのはやめなさい」

感情を抑え、努めて平穏を装うが声が震えているのは否めなかった。

「今度、会うまでには考えておく。それが何十年先になってもな」

老人は目を見開いた。

おれが死んだ後は… そうだな。カードの名を持つ奴等の言う事を聞いてやってくれ。

あの日の声がそのまま、耳元で聞こえた。

「まさか」

「母の姓名を名乗っています」

余りにも有名すぎる父の名は、口に出来ないからと少女が見上げたのは、横に立つもうひとりだった。

「…ポートガス・D・エース」

小突かれてようやく名乗ったその声を聞けば、老人は腹の底から笑い始める。

「そうか、船長の。いやいや、長生きはするもんだなあ」

こんなびつくり箱を、この歳で受け取るとは思わなかったとひとしきり腹を抱えた後、手を叩き茶の用意をするように伝え、ふたりへ席に着くよう促した。何事もハデに、戦いだけでなく、宴も遊びも、何もかもを面白おかしく、ひとときでも気を抜けばとんでも無い事を起こす男をジョワイヨは思い出す。

「この爺さん、だれだ」

ようやく場の緊張が解かれた後、エースがアンに訊ねる。

「ジョワイヨさん？お父さんの船に乗っていた人だよ。物資調達を一手に引き受けていた縁の下の力持ちなんだって聞いている」

ふうん、とただそれだけ答えると、アンを見習い沈み込む椅子へ嫌な顔をしながら座った。

「まずは、用件を聞こうか」

ジョワイヨは用意させた紅茶に口を付けながら尋ねる。

ふたりが敬愛していた船長の落としたねだというならば、聞いてやらねばならなかった。

「あなたを含む全てを、わたし達に下さい」

「は？」

何言っただお前、と反応したのはエースだった。

「だって。ジヨワイヨさんが持つてる情報網と、裏の市場に対しての影響力って大きいんだよ。それにジヨワイヨさんが抱える組織の支援が貰えたら、海賊船を襲う手間も省けるし、情報も仕入れるの簡単になるし、一石二鳥なのよ」

「裏ってなんだよ」

「いろいろ」

「いろいろってなんだよ」

「…内緒」

双子のやり取りを見つつ、ジヨワイヨは笑みをこぼす。こんなに笑ったのはいつ振りだろうかという位、腹を抱えた。

わしを手に入れてどうする、という問いをわざわざしなくても良くなった。

実情をどうやら、分かっただと把握したからだ。

「君達のバックアップをすればいいということだね」

主に金銭関係と物資について、と言葉を付け加えれば、アンがこくりと頷く。

「半年で新世界に入る予定なので、宝探しをしたり、敵対してきた海賊の処理をしている暇がないんですよね」

考えあぐね、どうしようか困っていた時に現れたのが、父だった。まるで見計らったように、今現在、困っている頃会いなんじゃないかと、あの、いつもの憎たらしいまでに楽しげな顔をして語りかけてきたのだ。

（ま。ありがとうって言っとく）

エースが小さな声を拾い、なんのことかと考え、見当が付いて口元に笑みを浮かべた。

絶対にそうなるか疑いもせず、話を勧めるその声がなぜかかつての日々を思い起こさせる。ここで断る、と言われるとは思っていない態度だ。

ふてぶてしいまでの自信は、父譲りなのだろうか、ジョワイヨが苦笑をこぼす。

聞いていた話と随分と違う。ゴール・D・ロジャーは魅力的な人物だった。この人になれば全てを預けられる。そう信じ、頼り、いつしか船長の夢がジョワイヨの夢となった。最後の日の事を今まで忘れたことなどない。船長の最後をしかと今は老いばれた両眼に焼きつけた。

それと同じ、今からもつと育とうとしている存在が現れた。会ってしまえば惹かれざるを得ないのだ。ふたつの違った輝きは、今まで手にしてきたどんな装飾品よりも気高く美しい。

跡を継ぐのかと問えば、たぶん、とそうだ、が重なる。

「たぶん、つてなんだよ」

「だって。わたしはあの場所に何かがあるのか大体知ってるし、一応だけれど航路も知ってるし、別に名前なんかどうだっていいもん」
エースがその名称を取りに行くというならば止めないし、一緒に行くだけの話だと笑む。

聞けば生みの母も死去しているらしく、育ての親は一応、ガープという事になっているのだという。語らぬいくつもの話もあるようだが、ジョワイヨは後援を承諾した。

「手の者らには連絡を付けておく」

ついでに換金して欲しいと、先ほど席に着くと同時に渡した戦利品の話をしながらアンは紅茶に口を付ける。

現在、奥の方でジョワイヨの部下が選別してくれているらしい。

「海賊つてもっと自由に出来るもんだと思ってた」

「自由だよ。少なくとも船長は誰よりも、なによりも自由だった」
だから誰もが放っておけなく、独りで突き進む背に手を伸ばして

いた。

止まれ、と。せめて、副船長を待てと。

思考が楽しかった、生きているという実感をありありと感じていた時間へと戻ってゆく。

「終わったようだな」

ガチャリと奥の扉が開き、複数名の男達が入って来た。その中に毛色の違うひとりが紛れ込んでいるとふたりは気付く。薄い、桜のような髪色をした人物に目を奪われた。

珍しい、だけでは済まされない色だ。

ジョワイヨは耳元で報告を受け、ふたりへ言葉にする。

「色付け無しでこれだけの値だという」

金額は1500万ベリーほどだった。それだけあれば当分はなんとかなりそうな感じだろう。

椅子からアンが立ちあがると、少年を紹介された。

「これを連れて行って欲しい。わしとのコネクションだと思ってくれて間違いは無い」

ブランドライン

世界各地、そして”偉大なる路海”内にあるジョワイヨの拠点を使う場合、その少年が力ギになると説明した。

名前はない、という。

「分かりました。それではこれで」

アンは少年をこっちにおいで、と呼ぶ。

エースが意味に気付く前にこの場を去らねばならなかった。

組織には冷徹な部分も少なくは無い。この少年は、言わば、組織の部品としての価値しか見出されてはいなかった。息をして生きているが、意志など必要なく、ただ言われた事をこなすだけの存在だ。エースが逆上し、この場所を燃やしてしまう前にとっと出た方が賢明だと判断した。

アンは現金を受け取り、エースと少年を連れ、入ってきた扉を出

る。

人は変わる。変わってしまう。変わらざるを得ない。

分かつてはいたが、分かつていなかったのだと、同じ思いを繰り返しながらアンは光満ちる場所へ跳んだ。

そしてまず入った店が食堂だ。

座ったのはもちろん、カウンターだった。

メニューを見ることなく、エースが適当な肉料理全部、とだけ指定する。

「腹減ったあ」

頬をカウンターのの上に乗せ、だらしなく背を丸めているエースにアンは笑む。大分無理をさせてしまったからだ。

「好きなだけ食べると良いと思うよ」

ふたりの間に少年を座らせ、アンも肘をつく。あの場所に居たのはせいぜい30分程度だ。腰を上げた時も別段引き留められはしなかった。

100%、父のコネとはいえ、信用している訳ではない。使えるものは使う。ただそれだけだ。少年に名前を聞けば、本当になさそうだった。一度も名称らしきもので呼ばれた事が無く、おい、や、お前、で済まされていたようだった。

「じゃあさくら、でいいかな」

「名前か？」

少年にさくら、は変だろうかと思いつつも、気に留める人物が他に居ないのもあり、ふたりは少年をそう呼ぶことにした。

「あなたの名前はさくら、いい？」

「はい、ご主人さま」

ん？

届いた、肉がゴロゴロと入ったピラフを口に運んでいたエースの手が止まる。

「ひゃんらつふえ」

「お行儀悪い。口の中の物、無くなってから話そうね」

こくこくとエースが頷くのを確認してから、アンはさくらへと伝える。

「わたしのことはアン、エースの事は、エース、そう呼んでくれると嬉しいかな」

「…はい、エース様、アン様」

放たれるのは見事なボーイソプラノ、だ。

その様付けも出来れば辞めて欲しいと言っても無表情のまま、じいと、瞳を見つめてくるばかりだった。妥協点はそこかと思いつつ、メニューを開く。

何が食べたいと聞けば、どう言えばいいのか分からないといった、突起が少ない感情の色彩が波立つ。

従順に躡けられたのだろう。

それが当たり前だとして、体と心に刻みつけられた。

まるで暗殺者を養成しているとある施設に視察に行かされた時のようだ。

元いた場所ではそれが普通だったかもしれないが、こちらに寄せた限りはこちらの色に染まって貰わなければならない。

（なあ、アン）

言葉無き声がエースから聞こえてくる。どうしたのかと聞けば、

（こいつ…）

（初めての乗組員だね。船という家で暮らす初めての家族、正しいと思うな）

わかった。言葉短く、どこか照れたような感情の色が見え隠れする。

問題はこの少年について、だ。

さあ今すぐ普通に振る舞え、始めろ、と言っても無理だろう。

長年培われてきた生活様式を急に変えるのは難しい。

こういうものはゆつくりと溶かしてゆくに限る。仕草や表情の変化が見えれば、新しい段階へと入ってゆけばいい。まずは以前いた所とは全く違う、という意識を見せることから始めなければならなかった。

アンも幾つかを注文し、取り皿を貰えるようにお願いする。

横目でちらりと見れば次々と重ねられるエースの皿はもう止まらない。

厨房で鍋を、フライパンを振るう料理人たちが大変そうだが、エースの腹が満ちるまでは頑張ってもらうしかなかった。

「この後は衣類の買い出し、ふたりともOK?」

こくこくと頷くエースを真似するさくらに、アンは笑みをこぼした。

物資の有無は海上生活者にとって生命線ともいえる。

何がどれくらいあり、あと何日もつか、を的確に知らなければ、確実に飢えるからだ。

ふたりの場合は、食料が尽きれば海の産物を獲ったり、町までアンが買い出しに行ける能力があるからそんなに神経質にならなくても済むが、普通の船ではそうはいかない。大体で物品を買いそろえられず、無ければ何が何でも買い集めなくてはならなかった。そうしなければ、死、がすぐ側にすり寄って来るからだ。

「衣類OK、水と保存食、生もの、野菜、果物は買った」

細々とした、衣料品や筆記用具類も既に船に運び込み終わっている。あとはお菓子系を買えば御の字だろうか。

この世界は本当にでたらめで、船に冷蔵庫なるものも積み込む事が出来る。

あとシステムキッチンとまではいかないが、しっかりと調理できる台所まで併設されているのだ。本当は材木船で、こんなことが

出来る筈がないのだが、世界の七不思議のうちひとつだと、アンはいつも思う。向こうの世界では絶対に考えられないことだった。

人々の喧騒の中、3人は手を繋いで道を歩いていた。真ん中に繋がれているのは、さくらだ。もしもルフィがここに居たならば、エースの背中にしがみついているか、ひとりで町の中を走り回っているに違いない。

そしてこの町の目玉によじ登るかして、この町に駐屯している海兵を呼び集めそうではある。

それは奥まった広場にあつた。

六角形のその場には面ごとに道が通り、東の海一番の観光地でもある、ゴールド・ロジャーへ死を与えた場所には多くの見物客が来ている。

周囲では飲み物を売る者、軽食を勧めて来る者、などが高々に声を上げながら商売をしていた。エースとアンもホットドックをひとつづつ買い、実の父が死んだ場所を横目で見ながら通過する。

半分に分けたウインナーを、さくらもぱくりと口に含む。言われた事をする、という機械的な行動は変わらないが、握った手のひらを不思議そうに見ている時、瞳が揺らめいたのを感じていた。

急がば回れ、だ。小さな変化を見落とさないようにすれば感情も戻ってくるだろう。

「わざわざ処刑台だけ見てもな」

「ま、ねえ」

始まりと終わりの町、とは誰が呼びはじめたのだろう。

終わりは次の始まりに続く、途中経過地点に過ぎない。ここから全てが始まっているとは、誰も気づいていないのだろうか。

（ルフィ？）

まさかと思いながら、視線はその姿を追う。途中、エースと目が

合った。

（今の、なんだ？）

『よし、いくか！』

風が吹き抜けるようにその声はふたりの間を通る。

麦わら帽子を頭上に乗せ、小さな背負い鞆をひとつ持ち、自信に満ちたまなざしを海に向けてる。

『海賊王に、おれはなる！！』

聞き慣れた言葉だった。

白昼夢、が目の前を駆け抜けてゆく。

ああ、やっぱり。

アンは思う。

海賊王への夢を語るのは、エースには申し訳ないけれども麦わら帽子を被るルフィのほうがよく似合う、と。

「さあて、航海者は航海者らしく、海に戻りましょうか」

「その前にやっぱ、あそこからの景色見とかねえ？」

エースは周囲に増えてきた海兵達の姿を確認しつつ、さくらを脇に抱えた。

あそこ、が指し示す場所には心辺りがあつた。

「ま、追いかけられるのは変わらないもんね」

口元にお互い笑みを浮かべ、視線を合わせる。次の瞬間には人々が見上げる処刑台の上へ降り立っていた。

「さすがに絶景だな」

「そりゃ、観光地なもの」

そのふたり、降りなさい！下の方から警備をしていた保安官が拳を振り上げて叫んでいる。エースはそんな叫びを無視し、テングロンハットのつばを指で持ちながら、彼方を見た。町並みの屋根が続く平らを過ぎれば、青の海が広がっている。

さわざわと声が上空にも聞こえるほど高く響き始めれば、ふたりはそのまま空へと跳び出した。階段を伝って海兵が上がってきたからだ。

残念でした。

ひらひらとアンはもう少しで処刑台だという所まで登って来ていた人物へ、肩越しに手を振る。

「逃げるが勝ち。さあ、”偉大なる航路”グランドラインへ入りましょ」

見知った顔を幾つも確認しつつ、アンは海兵達の声拾いながら、逃亡順路を導き出し、自信あり気に笑んだ。思ったよりも嚴重な包囲網に、久々の都市脱出を想定した作戦を脳内で組み立ててゆく。

「ケムリンとたしぎさん、あとはおじいちゃんの元部下のあの人が捉まらないように、がんばって脱出しよう」

56 - 双子岬

ローグタウンを出発した船は一路、灯台の光が指す一点を目指して進む。

”導きの灯”とは言われているが、所詮は灯台の灯^ひ、最後まで方向を示してくれるわけではない。

アンは地図とコンパスを取り出し、”赤い土の大陸”^{レッドライン}への突入角度を正確に測る。

始まりと終わりの町から”赤い土の大陸”^{レッドライン}に掛けての海域は、海流と気流の関係で、天候が安定しない地域だ。”^{カームベルト}風地帯”を抜けて東西南北の海へ出たこともあるが、共通して言えるのは、”偉大な^{グランドライン}航路”から^{グランドライン}風地帯へと吹く風の流れが少ないのに対し、それぞれ方向を冠した海から、^{グランドライン}風や偉大なる航路へと吹く、そして流れ込もうとする海流が数多く存在していた。

人々は風地帯を恐れる。

それは静かな風も吹かぬその辺りを、大型の海王類が住みかとしているからだ。

風が立たない、イコール海中も緩やかな流れこそあれ、穏やかな場所となる。生物はそれぞれ、住みやすく餌が潤沢にある環境を好んで住処とする。環境の変化が激しい”偉大なる航路”^{グランドライン}より、^{グランドライン}風地帯に集まるのも分からなくは無い。

アンは肌を感じる、今までの経験と勘を頼りにエースとさくらのふたりに指示を出して舵と帆の調整を行う。

本来ならば、最低でも10名前後の乗組員により動かす大きな船を、たった3名で事成しているのだ。それぞれの負担が大きくなるのは仕方が無い。

船に乗るのが初めてだというさくらにも過大な労働を課していた。行きはよいよい、帰りは怖い。

まさしくその言葉の通り、命をかけた航海の始まりは初っ端から目まぐるしい。

始まりの町からリヴァース・マウンテンにかけては気圧の変化が起りやすく、嵐が多く発生する地域だが今日という日に限っては青空が広がっている。遠方には黒い雲が見えるが、風の向きからしてこちら側に来る気配はない。航路に入った誰もがきつと言うだろう。嵐の中を突っ切った経験はあっても、青空の元である赤い山を見上げた事は無い、と。

「このまま進めば、運河の入り口にまっすぐ入れるはずだよ」

朝日が昇り始め、輝きだした海上を眺めながら、アンはぐったりと甲板上で大の字になるエースへココアを入れたコップを差し出した。さくらにははちみつが入ったミルクだ。

「運河に突入できるのはお昼前くらいかな」

自身も薄めのコーヒーに牛乳を多く入れたものを飲みながら、ペたりと木目の上に座る。

リヴァース・マウンテンは標高3000m級の山脈だ。正確には3848m、数年前に世界政府の依頼を受けた、登山調査隊が正確な標高を測ったばかりだった。

冬島に分類されているが万年雪が積もるこの山には合計4つの運河が通っている。

その全ては各海からひとつづつ、”偉大なる航路”^{グランドライン}へ注ぎ込む流れを生みだしていた。ぶつかり合った海流がそのまま、唯一の出口へ向かって下ってゆく。

エースがシャンクスから、このリヴァース・マウンテンの頂きから見る景色が絶景だと聞きさえしなければ、風地帯を越えてさつさと偉大なる航路^{グランドライン}へ入るつもりになっていた。だがしかし、折角の旅なのだし見たいと言いながら、頼む、とお願いされてしまったのは、アンとしては断れなかったのだ。

船は既に入口に至る海流に乗っている。あとは運河にまっすぐ入れる事を願うばかりだ。

別名、船喰い山、リヴァース・マウンテンはそう呼ばれている。

「ひとつ目の門だつて、確か言つてたな、前に」

被つていたテングロンハットを首に掛け、エースが飲みほしたコップを床に置く。

「東の海に限つた事じゃないんだけどね。山に向かう海流つていうのが3つあつて、その中のひとつに上手く乗せなきゃダメなのよ」
偉大なる航路グランドラインの流れは、それぞれの海の流れと違つて複雑怪奇に入り組んでいる。慣れればある一定の法則があると気付けるのだが、よほどカンの良い航海士でない限り、惑わされてしまふだろう。

入口はまさしく、航海士の腕と質が問われる。たった3つの海流も読めないのであれば、偉大なる航路グランドラインに入つてもくるくると同じ場所を回遊する魚のように、流れに捉まつて終わる可能性もあつた。

そもそもある一定以上の力量を持ち得ていなければ、自然に”偉大なる航路”グランドラインから淘汰される。それはまるで、資格ある者をふるい分けているかのようにも見えた。船や職業は関係無い。

広大な4つの海から細く、限られた地域ともいえる”偉大なる航路”グランドライン前半の海へ、そして”赤い土の大陸”レッドラインを越え、海賊王の称号を手渡す為に待つ存在の元へ繋がる後半の海、新世界へと続く路。

海兵がわざわざ駆逐しなくとも、全世界で確認されている海賊の半分が”偉大なる航路”グランドラインへ入るまでに死を迎え、例えその航路に入れたとしても、またその半分が前半で脱落する。

海底洞窟を抜けそして新世界に運良く入れたとしても、前半の海を渡れる実力を、5とするならば後半は10以上という場所だ。帰りたいと願い引き返そうとしても、全周囲に死亡フラグが立つ、そんな海だつた。だから”偉大なる航路”グランドライン前半が楽園と呼ばれている所以だ。
ゆえん

「おれが淹れて来てやるよ」

飲み終わったコップをじいと思つめていた紅の瞳に気付いたエースが、さくらが持つコップを上から掴み上げ、キッチンがある船室の扉へと向かう。自分のおかわりを入れるついでだ。

「舵見てろよ」

固定化してあるとはいえ、いつなんどき、風の影響を受けて海流から外れるか分からない。

「らじ、せんちょー」

アンがひらひらと手を振る。

「…らじ？」

さくらが真似をし、無表情で手を振る姿を横目で見ながら、扉を押した。

キッチンは綺麗に整理されている。アンの手にかかれば、どんなに散らかっていたとしても丸一日かけて、元の姿を取り戻す。その技術はダダンの家で培われたのだと、断言できた。海賊船なのであれば、雑に荷物を積みあげ蜘蛛の巣やネズミが走っている位が丁度いいのではないだろうかとも思うのだが、整理整頓がなよりの好物である方割れがいる限り、らしからぬ倉庫の姿になりそうだった。瓶分けされたココアをコップの中に入れ、少しぬるくなった鉄のやかんを両手で持つ。

手のひらを炎に変えれば、ぼこぼこ湯が沸いた。それを注ぐ。

ミルクにははちみつをいれ、少しだけ湯を注いでからミルクを投入する。

はちみつをすくったスプーンはエースの口の中だ。それくらいは入れに来た特権だろう。

エースは体を形作る炎の制御方法を模索していた。

普段の生活をする分には何も変わりがない。弟と同じく海に嫌われてしまったくらいだ。本当に泳げなくなったのかと試してみれば、

海水が体に絡みつくように、それこそ全身に鎖を取り付けられくぐいと底へ引つ張られるような感覚だった。ルフィが泣いて嫌がるだけはあった訳だ。

これからはエースも気を付けなければならない。

海中から空の青を見上げるのが好きだったのに、二度と見れないのかと思うと残念でならなかった。食べてしまったモノは仕方が無いのだ。直接の原因となったアンをどれだけ罵っても、生身に戻れる訳でもない。そんな事をするよりも、体と力のコントロールの仕方を早く身につけた方がいいと思う訳だ。

炎、という現象は気体が燃え光と熱を発生させるもの、なのだという。気体というのは普段吸っている空気らしく、目では見えない物質だとアンが言っていた。変わって火、とは物質が燃焼する時に発生する現象、平たく言えば、何かが燃える時に見えるものと考えれば分かりやすい。何が燃焼するかによって温度が変わってくるらしいのだが、説明が難し過ぎてエースは途中で考えるのを止めた。

ようはエース自身の質を高めればいいのだと結論したからだ。高温になるにつれ色が変わるらしいし、まずは赤の上である橙と黄色を目標に据えている。

光のエネルギーならば、可視光の波長により赤、橙、黄色、緑、青、藍、紫らしく、この順に登っていけば良い、らしい。そこで問題なのはどうかやって高めるか、だ。

技の種類は幾つか考えている。まだ試作段階で、実際に形にしてみないことには使えるかどうかの判断は出来ないが、これは何とかなりそうな気がしていた。

「どうすっかなあ」

両手にコップを持ち、ブーツを履いた足で器用にノブを回しドアを開く。

芝生が敷かれた甲板の上で寝転がるふたりの姿があった。空より

も低い場所をアンが指さす。視線を投げれば薄い雲に隠れるように、赤が広がっていた。

「でけえ!!!」

目を見開き、宝物を見つけた時のように心躍った。ここにルフィが居たならば、ふたり同時に叫んでいただろう。それくらい圧倒的な壁だった。

正確には山ではあるのだが、こんなに切り立った山など見るまであるとは思えない。

カップのひとつをさくらに渡した後、エースは一気飲み出来るくらいには温くなったココアを飲みほし、アンヘカップを放り舵を握る。

「いい流れた」

荒波に揺れる船体に足を踏ん張りながらエースは赤の大陸を見た。潮が渦を巻き、大陸へと当たって下へ潜り込む海流が読み難い潮を生む。だがエースは恐れてはいなかった。どんなに手慣れた航海士であろうとも、船一隻がようやく入れる、運河の入り口を見れば身をすくめる。目視できる運河は凄まじい勢いで斜面を登っていた。

「吸い込まれてるみてエだな」

「うわぁ…ジェットコースターみたい」

苦手なだけどなあ。

つぶやくようにアンが木製コースターに乗った時の、体感速度よりも軋む音と耳慣れたローラーががたがた震えて怖かったとか、とある場所のコースターは陸上と海上のふたつを走破する時、一気に上空まで持つて行かれ、自然落下する普通のものより落下感が背中をぞわぞわと駆け抜けてヤバかったとか、ブツブツ言っているのが聞こえてくる。

今ではほどほどに地上に近い場所へ瞬間移動できるようになってはいるが、最初の頃は酷かった。月歩が使えるようになってからは多少、上に放り出されても着地出来るようになったが、何度、海へとぼんと落とされた事かわからない。両手では数え切れないくらい

だ。上空から命綱無しで落下するのは大丈夫で、船に乗り水路を駆け登るのが怖いとかどういふ恐れ方なのだろう。両手を握り、怖くない怖くない怖くない、と繰り返している様がなんだか可笑しくて笑ってしまう。

そんなに怖いなら先に壁を側面から渡るかと尋ねながらエースはぎちぎち鳴る、今にも折れそうなほど軋む舵を握っていた。

「いい、このまま乗ってる」

気丈に振る舞ってはいるが、声が震えていた。

意外と肝が据わっているのがさくらだ。上下左右に揺れる船体に逆らわず、手にしていたコップから器用にミルクを飲み終われば、アンが受け取っていたコップも回収し、キッチンへと置きに行っていた。

戻ってくればちよこんとアンの横に座り、空を眺めている。

ぐん、と身を感じる加速が増す。アンが航路を計算した突入角度はどんぴしゃだった。海での生活が長いとはいえ、ここまで見事に合わせられる航海士は少ないだろう。

どうやって作られたのか、10本の入り口を示す門を潜り抜ける。

波が駆け上がる独特な水音に、エースは笑みを濃くした。

「行くぞ！　偉大なる航路」グランドライン！！」

登りはあつという間だった。波飛沫を立て、船は4つの海流が合流する頂上部分で魚のように飛びあがる。そして一気に急降下だ。

アンが絶叫しているが、それはどうでもいい。眼下に見える景色に、エースは大きく目を開いた。青々とした水面がただ、一面に広がっている。水平線の向こうには七色の光が見えた。そこへ、その先を目指す。

ここから始まる。決意を新たにしながら、左手に入れた文字のひとつに触れた。長い月日、待ちに待った偉大なる航路に、グランドライン今まさに入るのだ。

水しぶきを上げ、加速する船は水面に滑り降りる。

「エース、とりあえず双子岬に寄ろう。航路の選定もしなきゃだし、お腹すいたでしょ」

昇りの海流では震えていたアンが、下りになるとけろりとして船内を歩きはじめていた。上昇する短い空白が嫌なだけで、浮遊感にはならないらしい。

「灯台守をしてるって言うクロツカス医師にも会ってみたいし」
誰かの紹介かと聞いてみると、違う、という答えが返ってきた。ただ容姿は知っており、花弁のような、独特な髪型をした人物なのだという。

情報源がどこであるのかを何となく想像でき、エースは唯一帆を張っていたミズンマストを閉じに登るアンに目で合図しつつ、海原に飛び出した。

舵を左、とりかじに切る。

「ここが双子、岬」

エースは両岸に立つふたつの灯台を見ながら、変わった風の匂いに目を細める。

「偉大なる航海」^{グランドライン}の始まりであり、終わりでもあるこの灯台に、戻ってきた存在はただひとりだ。ここから、高みへ至る路が始まる。停泊できる岩場を見つけ、錨を下ろすのはアンだ。船の各所を器用に渡り歩き、準備を着々と行う。この手際はさすが海兵だった、と言っべきだろう。

陸地の方からなにやら、複数の声が聞こえてきていた。それをアンも分かっているのだろう。直ぐには動かせないように、ジアー（滑車）を固定し、ロープの結び目も知っていなければほ解き方が分からない特殊な形にしている。

「いいよー、固定化したからみんなで上がる」

「ああ」

エースはひよいとさくらを肩に担ぐと、膝を屈め、デッキから跳び上がった。そのまま月歩を使い、鉄梯子が下ろされているその上

へ向かう。

そこには幾つかのテントが張られ、木で出来た円卓と、丸太をただ並べただけの簡素な椅子が幾つか見えた。

「こんな辺鄙場所^{へんぴ}でなにを？」

疑問にはすぐ答えが得られた。本人達から直接聞くまでも無い。なにがあつたのか、周囲を見まわし、残る声を拾えばいいのだ。木っ端微塵。

そう形容するしかない惨状がつい、6日ほど前に起きた。船員は運河に投げ出され、命からがら生き残った者達が潮目に漂う物資を拾い集め、なんとか陸に上げたようだ。

「ようこそ海賊の墓場へ」

出迎えてくれたのは話して聞いていた通りの人物だった。

灯台守のクロツカス、そう名乗り偏屈そうな眼光を若者らに向ける。

「わたしはアン、エースにさくら。ここでお昼ご飯、食べさせて貰ってもいいですか」

「ああ構わん。その代りわしの分も作ってくれ
いいですよ。」

そうアンが応えようとした瞬間、エースは海へと視線を向ける。何かが深い海の下から、上ってくる気配がしたのだ。とてつもなく大きな何か、はどんどんと水面へと近づいてくる。

「その前にやる事が出来た」

クロツカスは座っていた丸太から立ち上がり、海へと向かう。

その背を見つつ、アンは事情を察したようだ。そして首をかくん、とエースに向かって傾げると、もの言いたげにじっと見つめてくる。

「…わかった。行つて来い」

「行つてきます！」

嬉しそうに崖を飛びおりるアンに気を付けろと声をかけながら盛

大な溜息をついた。

エースはさくらを地面に下ろし、がしがしと髪を搔く。海に入れるならば、飛びこむのは自分でありたかったと思いながら、灯台へ流れ着いていた者達が近づいてくる様子を見ていた。男のひとりが声をかける。

「あの船、あんた達のだよな」

「……そうだ」

エースは海へ飛び込んだアンの様子を伺いながら、ぎゅっとハーフパンツを握りしめてくるさくらの頭に手のひらを軽く乗せる。

「頼む！！」

がばりとその男に習い、がばりと頭を下げる。エースは余りの光景に、思わず後ろへ一歩引いた。

「俺たちや東の海でちよつとは名の知れた海賊だった。船は航路の入り口に入つたまでは良かったが、激流に耐えきれず大破した」

男は続ける。

「頼む！！ 次の島まででいい。おれ達を乗せて貰えないだろうか。何でもする！！」

そこまで、だった。

大きな黒の塊が海から突き上げてきたのだ。

そして咆哮する。耳をつんざくような、叫びが空へと放たれた。

否、空には無い。この山の向こう側へ、向けられている。

さくらは目を丸くし、耳を両手で必死に塞いでいた。以前アンに見せて貰った事のある、ムンクの叫びという絵にそっくりで、噴き出してしまった。そういうエースも人差し指を耳に突っ込んで、空気を震わせるそれが終わるのを待つ。

クジラとい種は主だって温厚な生きものだ。仲間と交信する際に海の中に放つ音波はあれど、ここまで大きな、悲痛な叫びをあげる例はない。

ざぶんと大きなしぶきを上げるクジラの中へ入った花の老人と、

眼元の上に乗ったアンに注意しつつ、耳を押さえていた男達がぼつぼつと話し始めたそれを聞く。

船長をはじめ航海士は死んでしまったが、雑用数名がこの岬へ辿り着いた。

故郷に帰ることも考えたが、クロツカスよりこの海の法則を聞き、脱出が困難だと判断したという。偉大なる航路の両端には^{グランドライン}岬地帯が広がり、そこを越えない限り故郷には行きつけない。

偉大なる航海に一度入った者は、1周巡らねば元の故郷には戻れないのだ。だから花のジジイが言った、海賊の墓場、という言葉はあながち間違いではない。

「別にかまわねエけど、手は出すなよ」

念のため、エースは頭を下げている人物達に釘を刺す。

「恩にきる、ありがてえ」

そしてクジラが突然出現した時よりも大きな叫びを上げる。

さくらが耳を押さえ、その場にうずくまった。ゼロ距離で音の波を受けたアンが、ちゃぽりと海へと落ちる。

思わず海へと飛び込みそうになり、エースはつんのめった。

（いや、大丈夫。鼓膜が破れそうなくらい、びりびりしてるけれど）

黒光りする肌になんとかしがみついて、くらくらと脳が揺れ動くまま、自然に回復するまでその体を世界最大と言われている哺乳類に寄せている。

海を見れば、クジラの目から涙らしき液体が流れているようだった。

（あんまり煽ってやるなよ）

（うん、ちよっとした未来を見せただけ。大丈夫、あとはルフィがなんとかしてくれるよ）

何を見せたのかはあえて聞かなかった。陸の状況を伝えれば、そ

れは船長の判断に任せると返ってくる。

（じゃあ魚獲って来るから火の用意だけ、お願いね）

海中に姿を消したままのアンが、エースの真上に凶暴な牙を持った深海魚を出現させる、数分前の出来事だった。

57 - 廃都

そこは廃都、だった。

辿り着いたのは冬島、雪は降っていなかったが、体が勝手に震えてしまうほどの冷気が漂っている。

「島だ!!!」

ひとり元気であるのはエースだけだった。

甲板に出てきていた乗組員達の誰もが厚着をし、襟元をしめているというのに、長袖のシャツにコートを羽織っただけの状態で船首像の上に立っている。

「我らが船長は元気だ」

白い息を吐き出したのは、眼鏡をかけたすらりとした銀髪の男だった。

ひとつ前の島でこの船に乗り込んだ。エース直々に、海に出たけりや連れて行ってやる、乗れ、と誘ったのだ。

航海士としての腕は上々で、測量室をアンから譲られるほど有能な人物だった。

グランドライン

”偉大なる航路”に入っただけの頃はたった3人だった乗組員も、今や20名を超す数を抱える集団となっている。しかも海賊船デビューも海軍相手に飾り、エースは船長として手配されるまでになった。

アンとしては余り嬉しくは無かったが、エース自身が喜んでいるのだから深く追求はしまいと思っただけのもの、

「くおらあ!!! ちょっとは自重しなさい!」

落ちて知らないんだから、と何度アンが叫んだか数えられない。

「まったく。ねえ、誰でもいいから海にだけは落ちないように見張ってて」

ため息交じりに船首像から動かないエースの見張りを船員の誰かに任せマストに登る女性へといくつもの声が応じる。

銀髪の男、ツヴァイはその様子を見ながらくつくつと笑みをこぼした。こんなに笑うようになったのは、この船に乗ってからだ。退屈という二文字が懐かしいくらい、ここでは何事かがあり続ける。

ツヴァイはポートガス・D・エースが船長を務める、この”スベード海賊団”の副船長を任せられ、運航にも関わっていたが今まで聞いたことも無い航路をこの船は通っていた。

普通は島と島を繋ぐ指針だけを頼りに、この偉大なる航路を進むしかない。だがこの船はいくつもの島をすり抜け、各要所、航路上に必要な最低限の記録指針^{ログボース}だけを貯めて突き進んでいる。描き残されていたワゴン（海図）には指針を全く使わず、乗り越えて来ている海もあった。それは航海士として言うならば、あり得ない、神の御技であるかのように見える。以前から乗っていた乗組員に聞いてみれば、確かにログなしでの航海に最初は不安はあったらしい。だが船長が絶対に大丈夫だと言い、言うとおりに嵐の中をも進めば、ログ通りに進路をとるよりも安全で確実な航海が確約されたのだという。それが幾度も重なれば、奇跡や神業などでは無く、さだめて信望されていったのだ教えてくれた。

船長は火拳のエースとして、その側にはいつも寄り添うようにして立つ、双子の女性の姿がある。

ツヴァイはこの船に乗り、本当に乗って良かったのかと自問自答した日々があった。なにが出来るかと聞かれ、故郷の島で船の管理をしていた事と測量の技術があると言えば、今まで彼女が取り仕切っていた航海士としての席をすなりと寄こした。船の指針を決める航海士は、船の命を預かると言っても過言ではない。それを貸し借り可能な物のように手渡す彼女に訳が分からなくなったのだ。既に航路は記録指針^{ログボース}通りに組まれており、渡された腕時計型の指針を見、どこまで出来るのか試されているのだらうとその時は納得した

のだ。

が、しかしツヴァイは数日前にニユース・クーが落として行った新聞を見て思い出した事がある。彼女、船長の傍らにある女性は、かつて海軍で英雄候補と呼ばれていた人物だったのだ。

本人に確認しに行けば、膝に抱いたさくらとあやとりをしながら、静かに笑んだ。

年齢的に言えば、ツヴァイの方が年上だったが、時折、経験を積んだ年長者の雰囲気を感じることもままあった。それはただのカンでしかなかったが、この船に乗る誰もが船長であるエースを、アンを大切な存在としているのだけは分かる。

「ここに居て欲しい。無理矢理エースが乗せたのだったら申し訳ないのだけれど。あなたがこの船に乗ってくれて嬉しいの。それにあなたがここに居たいと少しでも願ってくれるなら、わたしは大歓迎。航海士の役割をあなたに渡しても、この船の中ではやる事が山ほどあるから、反対に助かつちゃうの。改めて副船長として、航海士として、お願いできないかな」

ツヴァイはその後待ち構える100面相に呆氣にとられる事になるのだが、させる原因となった本人は本気で気付いていなかった。もしかして、副船長とか、航海士とか、本当はなりたくなくて、無理にさせちゃったのかな。それとも結構無茶な航路とってるから、なんだこいつー、とか思われてるとか。

どうしようさくら。

「落ちつくと、いいと思う。慌てすぎ、バツカでーい」

淡々とした口調と言いい方に、ツヴァイは思わず噴き出した。

それから数日間、ツヴァイはアンの姿を目につけば追ってみた。すれば至る所で、その背を見ることが出来た。

船長を諫めることは元より、帆の操作、戦闘で、航路の選定や、食料の買い出し、船の修繕まで、全て仕事を各々で分担していたが、最終的にはアンの元へ持ち込まれている。

最終決断は船長が全て行っていたが、メインデッキで船員を集めて輪を作る際も、意見をまとめていたのはアンだった。

副船長としてツヴァイが抜擢されてからは、進行役だけではなく意見の集約にも口をはさまなくなっていたが、見解を請われると的確な指摘を行う。

人は誰かに立ち位置を奪われる事に不安を感じ、出来るならば守ろうとする。

しかしそれが、アンには無かった。執着しないのだ。だからと言って何もかもを直ぐに手放す訳ではない。

この船に乗った人員が関わり、それが失われようとするのを力振るう事を容赦しなかった。船長であるエースも同じだ。一度懐に入れた存在に対しては、限りなく近い。そこへツヴァイも招かれている。居心地は良かった。

必要とされている。ただそれだけで、この船に乗って良かったのだと思えたからだ。

船が岸に接舷される。

マストをまとめたロープを根元で固定し合う声が、船内に響いた。

「準備は良いか、野郎ども！」

おう、という声が甲板から聞こえてくれば、はしごを渡し、船長をはじめとする人員が探検の為に陸地にあがってゆく。

「アンさん、どうします」

「ん？ ああ、今回わたしはお留守番」

エースが飛び出して行くのだし、自分が残るのは必然だと語る。

「ああ、でもね。行けるならば……」

そう言って視線を投げるのは、市街地であった場所だ。

ここは捨てられて久しい都だけれど、ひとつだけ素敵な場所が残っていると言さすのは時計台だった。その最上階からの景色が凄く綺麗なのだと笑む。

かつて寄った事がある島なのだという。

「食べもの系は、エースにくまでも鹿でも、何でもいから獲ってきてっお願いしてるから、大丈夫かなあ」

ツヴァイは船内の状態を確かめ、水の手配や、飛び出して行った乗組員たちの確保等を打ち合わせしてから、白の雪が積もる大地へと足を踏み出した。

「エース船長卑怯だ！！」

「へへ。船長特権だ。そんな玉、溶かしてやる！」

一先足に町へ走り込んで行った船員たちを集めながら、ツヴァイはエースの姿を目視した。白の弾が山と積まれ、なにを思ってたか、船長対、船員たちで雪合戦をしているのだ。楽しげに火の能力を使い、投げられた玉を溶かしながら柔らかめに握った玉を手加減なくぶち当てている。

その姿だけを見れば17歳という年齢にふさわしい姿だが、その実、ツヴァイの故郷で見せた海賊らしい、自由奔放さとその力は紛れもなく強大だと言えた。金額も次の更新月が来れば大幅に跳ねあがっているだろうと、懸賞金の設定方法を知っているらしいアンが頭を押さえて溜息をついていたくらいだ。

海賊の格として手配金の上昇を喜ぶ者たちが多い中、追われるものとしての自覚を持ち、ほんの少しでも構わないから理解して欲しいと、願うアンとツヴァイは意見を同じくしている。

あとひとつふたつの島を経由すれば、前半の海の終着点である赤い土の大陸に当たる予定になっていた。故郷である東の海を出発し、乗組員達を拾いがてらここまで、まだ3カ月ほどしか経っていないのだという。

聞けば聞くほど耳を疑うような航海の仕方だった。

だがツヴァイは風状態となり、航路の変更も視野に入れるかと悩んでいた時、1時間ほどで風が戻ってくると言われ、その通り、き

つかりと目的地に至るための望む風が吹いた現場に居合わせた事がある。

不思議そうに眺めていたのだろう。世界が教えてくれる。そう言
ってアンは笑んだ。

普通ならば笑い話だろうと、からかっているのかと言えるのだが、
確かに人の目には見えていない何かに触れているような、何かを感じ
たことがあった。

無茶度は船長に引けを取らない。

食糧が無くなりそうだとになれば、海に潜り海王類を仕留めてくる。
それが当たり前だと言わんばかりに、だ。

「船長、冒険はどうするんです」

雪を踏みしめながら近づいてくるツヴァイに、エースが顔を向け
る。その瞬間に投げられたいくつもの玉を、炎を放ち相殺すれば、
にやりと口元を笑みの形にした。

「甘エー!!」

手元に残っていた雪玉を全て投げ尽くし、死屍累々と倒れた乗組
員たちの姿を見て胸を張る。

「で、なんだったけ」

テンガロンハットの奥に見える人懐っこい目がツヴァイを見た。

「…冒険はしないんですか」

「行く。けど肉獲りにも行かなきゃなんだ」

海賊とは所詮、烏合の衆だと考えていた。恐怖で船員を縛り、掠
奪を行っている船も少なくはない。しかしこの海賊団は違った。乗
りこんでいる誰もが自由だ。自由だからこそそれぞれがきっちり
己の仕事をこなしている。

滞在中にログがたまればその航路通りに、もし更新されなければ
この島の先にある、海軍御用達のジェット海流に乗って一気にウオ
ーターセブンまで行く予定になっていた。

「大体5日くらいで着くって言うてたからな」

「ええ、そのように聞いています」

毎日の食事はどれくらいだったかとエースは思い浮かべ、向こう側へ投げた。

意識の向こう側で飲んでいたコーヒを吹きだしたアンが、だいたいの量を、獲物に換算してエースへと伝える。

「鹿で10頭、くまで2頭……くらいか。ま、それくらいならおれひとりでもなんとかかな」

つぶやく声にツヴァイは、どうなにかなるのか教えて欲しいと目で語る。水の確保は安易に出来るが、食料は難しいと考えていたからだ。

ここは長い冬と、短い春と夏、そして秋を繰り返す島だと聞いている。

常識的に現状を把握すればするほど、砕氷出来る船でなければ短い夏以外の季節にこの島を訪れる事が難しいのではないか、と思える場所なのだ。

だが船は偶然にも氷同士が流水によって砕かれ、通りやすい路が出来た間を縫うようにしてこの島へと到着した。

「大丈夫なんじゃね？アンが船に居る限り、あつちは何があつてもなんとかなるはずだ」

不確定要素を含んだ言葉に、ツヴァイが眉をひそめる。

疑問符が付いているのに、なんとかなるはずだという楽天的な思考に答えが欲しかった。

「例えオレ達がここで死んでも、アンさんは生き残るってこつた」なぜ。

雪玉に撃沈されていた乗組員達がのそのそと起きあがって来る。

衣類は雪だらけだ。それでも楽しげに笑みを、誰もが浮かべている。

「もし空から槍が降ってきて、当たらねえんだ」

「でもまあそんな事になったら、エース船長が飛びだして槍なんか焼き払うだろうし、アンさんも船長の後を追って身柄確保するだ

ろうしなあ」

仲間の言葉はそっくりそのまま、かつてツヴァイの目の前で繰り広げられた風景と重なる。決定的ななにか、をこれまでの旅で仲間達は見て来ているのだろう。荒くれ者である海賊が、自分より年下の船長の下に居る。理由を考えればすぐに分かるうものだ。

魅力的なのだろう。惹かれたのだろう。

その人物に。

惚れたからこそ、その能力や年齢、外見などに惑わされずここに居る。

自分もそうだった。

すっかりと思考のるつぼに嵌っていたと今更ながらおかしくなってくる。

「なんだよツヴァイ、変なヤツだな」

エースが白い息を吐き出しながら笑った。

「とりあえずエース船長は時計台まで冒険してきてください。私は数名を連れて狩に行ってきます。ただ皆さんと違って攻撃的スキルが不足してますから。あまり期待はしないでくださいね」

そう副船長が言えば、狩の技術を仕込まれた数名が副船長の元に集まった。

残りはエースと一緒に、時計台を目指す。

「冒険譚、楽しみにしてますよ」

「任せろ。そっちも肉頼むな」

集団は二手に分かれ、白の路を往く。

その頃、入り江に泊った船舶内では残った船員がかわるがわる、メインマストに取りつけられている見張り台に上っているアンの様子を見に甲板へ出てきていた。

みんなは温かな場所で居て。わたしは多少寒くても大丈夫だから、

と何度伝えてもこの船の仲間是一定時間ごとに声をかけに代わる代わる顔を見せに来る。

アンの能力は見張りに適していた。

目視での哨戒より、見聞色で周囲を広く浅く監視するほうが効率的にもいいからだ。

この島は遠洋から影になる場所が多く、そう簡単には見つかりはしないだろう。だが念には念を入れておいた方が、もしなにか、が起きた時の対応が素早くとれる。アンが見張りを進んで引き受けたのは、この周辺が既に、海軍の周回航路、ど真ん中にあるからだ。

商船が通る色の路やそれぞれの記録指針ログボースに従って偉大なる航路グランドラインを進むより、断然、海軍が使うこの路を使った方が赤い土の大陸まで早く到着できる。

出来るだけ過去、通った事のある潮の路を外してはいるが、常時出会う危険を孕んでいるのが唯一の難点だろうか。

寒くないようにと何枚もの毛布を持ち、マストに背を寄りかけていたアンが目を開く。

浅く広く拡げていた意識を己の周りに集約した。

風こそ冷たいが、厚く空を覆っていた重い色彩の雲も薄まり、所々に青を覗かせ始めている。

ふと視線を雲間に動かせば、なにやら黒い物体が必死に翼をはばたかせていた。舞い降りてきたのは伝書バットだ。

見慣れた書簡を付けた小さな体を、コートの中に入れてやる。カタカタと震えるその翼を手のひらで覆う。

「寒いところお疲れ様。苦手な場所まで遠路はるばる来てくれてありがとね。いい子」

アンは筒に入っている紙を取り出す。

差出人は、世界政府だった。見慣れた印が押された封を切る。

何度か見たことのある名前に、中身を確認せずとも大体、なにが

書いてあるのかの予想はついていた。

一応内容を流し読みし、とうとう目を付けてきたか、という感想を抱きながら、さあこちらの手はどう打とうかと考える。はつきり言ってしまうに遅いくらいだった。

今、このタイミングであるのは先の島で大暴れした際にアンが同乗していると確認できたからだろう。

旗を掲げ、人材も集まってきた。航路を走る商船への奪略はしないが、先手で攻められた時や売られた喧嘩はきっちり買い、何隻もの船を沈めてもいる。スピード海賊団の船長としてエースに、今年の新人、としては破格の懸賞金がつけられてもいた。

”火拳”というふたつ名がついたエースの技は派手だ。

六式を中心にちまちまと戦うスタンスをとるアンとは対照的に、得た炎の力を余すことなく効果的に使い、戦いの主導権を握る。途中で参ったと言われても手加減はしない。その場合は横からアンがこっそりと助け船を相手に出す事もしばしばだった。

炎を無効化し、生き残れば仕返しにやってくると言われても、それもまたよしと笑って送りだすのだ。その行為について、エースも船員達もアンを咎めない。

満月が近づいてきている。

会いに行くついでに、それまでにエースと、仲間達と話して決めればいい。

返答期限が示されていたが、無視する算段だった。

首元に巻かれた石にアンは触れる。

「さてさて。どういう風に立ち回ればしっくりと落ちつくかな」
相手はこちらがどう返答しても立ち回れるように、用意周到に周辺を地ならしして待ち構えているに違いなかった。やり方をなまじ、知っているだけに幾つかの方法は浮かんだ瞬間に地平線の彼方に放り投げる。

どうせ幾つかの条件をチラつかせてくるだろう。

だが相手の土俵までわざわざ、下りてゆくつもりもなかった。あちらが知略戦を挑んでくるならば、その裏の裏をかけばいい。

使えるものは使う。

既にもう、アンはひとりの航海者なのだ。

海兵でも、海賊でもない。

一般市民でも無ければ、裏の世界の住人でもない。

足場の無い場所に立っていても、それなりに止まり木は各所にある。

下から温かい飲み物でもどうかと、気遣いしてくれる仲間の下りと伝えて、毛布を折りたたんでからアンは身を空中へ躍らせた。

58・皓月（こうげつ）の戯れ

黄昏月が輝いている。

たそがれづき、雅な呼び方だと教えてくれたのは、満月ごとに訪れる人物だ。

満ち欠けを繰り返す銀に似た淡い光を見上げるために止めていた歩みを再び始める。

デイハルドは早めの食事と湯浴みをし、待ち人が来る前の間、当主として処理しなければならぬ書類を片付けるために書斎へと足を向けていた。

このところ夜会が続き、就きたくもない政府内の役職に無理矢理座らされたせいで、出さねばならない書類が積み上がっていたのだ。幾つかの用件は疲労がおしていても、最優先と対応したが、その他の雑多が残ってしまっている。

全く厄介だ。

そう思いながらも、生まれ落ちた境遇から逃れる術は無い。

必死にあがき抜け出たとしても、そこで何かを成せるわけでもなかった。デイハルドは己自身を冷静に見ている。この身分があるからこそ役立つ頭脳であり思考なのだ。

腹心として側においているランのように、外界に出て通用する剣術が出来るわけでもない。権威が無ければ何も出来ない、デイハルドは理解していた。

だからこそ、手の内に権力を握った。

世界の中心と言われている聖地マリージョアの中で、誰もがぐうの音すら出せないほどの影響力を欲し、手に入れた。

たとえそれが永遠に続かない砂の城、であつたとしても、だ。

「旦那様」

執務室まであと数歩というところで、眼鏡をかけた男が恭しく頭

を垂れている。

用ある時にしか姿を現さない執事長だ。

宛名のみが書かれている手紙をまず、手渡される。

内容をあらためる、という無言の提示だ。

父の代より変わらずこの屋敷で役目を滞りなく行うこの男には何
度も、デイハルドも世話になっている。

「老人たちからか」

なにかと思えば籠絡の指示が遠回しに書かれているご機嫌伺いだ
った。

世界政府内で世界の指針を決める役目を負っているのが、5人の
老人たちだ。彼らは武力の統率、例えば七武海や海軍の人事にも直
接指示出来、表裏の経済すらそのしわの寄った手で操っていた。

その下に10名の補佐的役割をもたされた円卓がある。

その卓に歴史上、最年少で座したのがデイハルド、だ。

基本的には世界貴族の中から抜擢される円卓の人員だが、代々役
人を務める由緒正しい家系からも有能な人材が抜擢されて責につい
ている。

円卓は五老星の決定を割り当てられた各分野ごとに手配し、采配
を振るう。

デイハルドが主だつて振り分けられているのは、経済に関して、
と家を守り続けている世界の根本に関する情報の集約だ。

前者、後者ともつつがなく政務をこなしており、なんらやり玉に
上げられる要因は無かったはずだった。

たったひとつ、を除いて。

「…対応する。暫く待て」

その報は既に受け取っていた。

海軍が危惧した通り、その力はたった3カ月で大将でなければ対
応できないほど大きな危険度を示すまでになっている。最初、その

手配書が出回った時、誤植ではないのかと賞金稼ぎから問い合わせがはいつたらしい。

海軍が今まで発行してきたもの、とは少々形式が違っていたからだ。

手配書の写真はそのままだったが、死の文字は省かれ、生存捕獲のみが賞金の対象となる。しかも報償限度がない。

多くの賞金稼ぎが淘汰されたと、円卓のひとりが嘆いていたのを聞いたことがある。

デイハルドは内心、ほくそ笑みながら退席した。

海軍にそうするよう、刷らせたのは、自分自身だったからだ。

出される報奨金も、デイハルドの個人資産から出る為、何ら問題はない。

来たる人の武勇伝は余すことなく全て仕入れていた。

乗り込んだ船の名前、乗組員達の詳細情報など、いくらでも裏から手を回せば手に入れることが出来る。

ふがないのは、たったひとり、その人物を欠いただけで足元をぐらつかせた海軍だ。

緘口令を引いたとしても、表舞台に双肩を並べて出てきたふたりの類似を、いつまでも隠しとおせる訳もない。

最近の情報では、とある事件に関わり、そのリベンジに向かった少将をもつとせず突破し、この聖地がある赤い土の大陸に怒涛の勢いで迫ってきているとも聞いていた。

がちやりとドアを開け、見慣れた両壁に本棚が並ぶ部屋に入ると、すれば淡く橙が残る海と空の狭間が見える窓辺に立つ影を見つけた。

ゆっくりと歩みを進め、いつの間にか見上げる事の無くなっていたその視線を受ける。

「……アン」

「久しぶり、デイハルド」

かつて見ていた笑顔と寸分たがわない、ほわほわとした表情に眼元が自然と緩んだ。

満月の約束は、野に放たれてから一度も変わらず果たされていた。

言葉無く腕を広げれば大人しく身を預けてくる。船に乗っているというのに、潮の匂いはしなかった。柔らかな体臭がデイハルドの理性を犯す。

「ん」

額に受ける口づけにくすぐったそうに身をよじるが、腰に回した腕を解くまでには至らない。

唇に軽く触れた後、割り込んできた人差し指をぺろりと舐める。

「デイ。婚約者^{フィアンセ}に妬かれるのはわたしなんだから。それ以上はだめ」

「僕は別に必要ないんだけどね、お高くまとまったお姫様は」

寸止めされ、デイハルドはやれやれと腰を縫い止めていた手を離す。

「いつもより早いな」

「ああ、うん、今日は星の島に着いたから」

ウオータセブンから東に下ったところにある、高級リゾートを有する島の名がほろりと出、デイハルドは疑問符を浮かべる。

「ああ、なるほど。ジョワイヨの手引きか」

「……うわあ、その名前知られてとは思わなかった」

「ふふん、甘いな。お前の名が匂う場所は調べ尽くすに決まっているだろう」

裏の市場ではその名を知らぬものは無いと言われるほど、暗がり
に眼光だけを浮かび上がらせ、存在感を示す人物だ。

今でこそ名が知られるようになったが、20年ほど前から勢力を伸ばし始めた彼、に興味本位で関わった全てには”呪い”と言わんばかりの不幸が襲ったという。

それは真実ではないかもしれない。

近づく者を牽制するために、わざわざ流した噂、である可能性も高い、そうデイハルドは考え、一応調べさせてみたのだ。

しかし真実は流れている噂以上に得体の知れない不可思議であった。付近の闇は濃く、安易に触れば死が這い寄るとまで、わざわざ流されている事自体が、良心と言っても良かった。

「僕としては、彼との関係が知りたいな」

アンはデイハルドが何を考えているのかが思い当たり、ころころと笑う。

「足長おじさん」

それ以外の何者でもないよ。

優しい声がデイハルドの耳朶近くで囁かれた。背筋がぞくりとするような声音にも聞こえ、飲んでしまった息をゆっくりと吐き出す。

「それで？」

デイハルドは月光が差し込む部屋の椅子に座り、重厚な執務机に腰を下ろしたアンに続きを問うた。

足長おじさんの続きでは無い。

急ぎの手紙に書かれていた用件は、黒の獣の行方に関してだった。結論は既に出ているはずだ。だが迷いがある。聞いて欲しいことがある。

そうでなければわざわざ、コングを待っていたらしい席からこちらへ来る訳が無い。

「もしかして、ばれてる、とか」

「ふん、侮るな。同じ聖地内だからな。通達も早い」

アンを抱きしめる前に机に置いた紙へ視線をすいとやれば、意味を察して文字を追う。

月光が反射する青白に溜息を落とし、実は、と口を開いた内容はデihalドが予想していた範囲内だった。

だがそれでは老人達に隙間を突かれ、その前にコングにしてやられるだろう。

「だからデイ。お願いがあるの」

やはりそう来るか。

くつくつと喉を震わせてデihalドが笑う。

「僕を窓口にするつもりだろ」

「何が楽しくて、王である世界政府に下らなきゃいけないのやら。どうせ血を浴びるなら、デイや家族のためがいいもん」

それに、と続く言葉は信頼されている証となるものだった。

「そこまで言われては、断れないじゃないか」

純情を弄ぶ小悪魔のような笑みに呆れつつも、デihalドは了承する。

「あのね、あと……」

「わかった。夕餉^{ゆうけ}を用意させておく」

風呂も必要ならばつけるが、と言われればこくりと頷き机から降りた。

嬉しげにスキップを踏むその背を見つつ、どちらが年下なのか分からなくなってくる。デihalドは空を自在に飛び回るアン^{アン}の姿を知っていた。その姿は太陽に匹敵するほどにまぶしいものだ。自分には無いものを持ち、叶える力を手の中に有しているからだろう。

それに首輪を嵌め、飼うという、自分にしか出来ない優越感を感じながら、椅子へ深く背を預ける。

「行ってきます」

「ああ、待っている」
その言葉を言い終わらないうちに、目の前にあつた姿は闇の中に溶けた。

視線を上げた先にあつたもの、それは月、だった。

白を基調とした部屋の中には5人の人物が座し、突然現れた人物にも驚きの声を上げない。まるで現れると、知っていたかのようにだ。

「ご機嫌様でございます」

煌びやかとは言えないが、清楚なワンピースの両裾を広げ、すいと影が会釈する。

幾つかのランプが暖色を拡げているが、大部分を支配しているのは白の静寂と、それぞれの所定位置に存在する人物達だった。

部屋を見回す事が出来るならば、品の良い、この聖地でなければ見ることが出来ないような調度品が置かれているのを知るだろう。

だが青海に住む人々は、空に近いこの地へ至る事は無い。この部屋へ通される人物達の目からすれば、それらは見慣れた品でしか無かった。

いつもならば既に、この部屋は閉ざされ無人になっているはずの時間だ。

「お待ちせしてしまつたようで」

影が一步前に進む。月光がその姿をゆっくりと明らかに照らし出した。

黒の目、髪はこの世界で珍しい色では無い。

だが老人のひとりはその色を気に入っていた。意志の強い目の奥に揺らめき潜む、狂気がたまらなく面白い。

「返答を持ってきた、という認識で構わんな」

口元に浮かべるのは微笑、沈黙は肯定の証だ。

「ならば聞かせて貰おうか」

老人達にしては性急な物言いだと思いつつも、アンは声帯を震わせ言葉を放つ。

「ポートガス・D・エース並びにアンは、世界政府の要請を拒否します」

王下七武海への要請に対し、エースは速攻いらねエ、と一蹴した。分かっていた答えだが、一応、聞いてみたのだ。自分に対し正直に、悔いの無いように生きる事がエースの目的だ。所属する事で旨みがあると、懇切丁寧に説明されたとしても、わざわざ世界政府に捕らわれる選択を選ぶ訳が無い。

「…だろうな」

拒絶されると予想していたひとりが薄く笑みながら、鋭い眼光を幼い顔立ちを残す女へ向ける。ただそれだけを言う為だけに、ここへ来たわけではないだろうからだ。

「何を欲しているのかね」

交渉の席において己の希望や主張を先に述べれば、応対する側についている隙を与える。

沈黙は叶える側に譲歩させる手段のひとつだ。

老人たちはそれを十分に理解した上で、会話を進めるためにあえて先を促した。

「なにも」

月光の中で瞳を閉じていた女が眼をしっかりと開き、老人達を見る。

「ではわざわざここまで来た理由を聞こうか」

火拳がこの要請に応えるとはまず無いだろうと話していた。なにせモンキー・D・ガープの血縁なのだ。そうそう簡単に、ひよっことはいえ折れぬだろう。

だが元々海兵だった身である女にとってみれば、政府の管理下に入るとはいえ、悪い話では無いはずだ。

七武海の要請に応えれば己の身にかかった懸賞金を破棄出来る上、政府公認の私掠も可能だ。青海に海賊として在りながらも、政府側として立てる。海兵としての知名度も高く、今まで築いてきた経歴や経験などを損なわずに使うことも可能だった。

「わたしは、世界の成り立ちを知っています。けれど今の世界をどうしようという気はありません」

その語りは静かだった。

「革命軍のように世界政府が絶対的に間違っているとも思っていない。それよりも、よくもまあ、ここまで平和を保っていられる、と感心するばかりです」

ポートガス・D・アン。

Dの名を持つ者が今を肯定するとは面白い。
眼鏡の奥が細められる。

「懸賞金もそのまま構いません。七武海をお断りしたのはぶつちやけ、面倒だからです」

あつけらかんとした物言いに、とある老人の眉が上がる。

決められた座席は7つ、誰かを退かしその席に着くのは遠慮したい。

「ですがわたしにしか出来ないところある事情、がある事も知っています」

だから、そのとある仕事、を受けても構わない。

「その代償はなにか、お嬢さん」

「特には望まないのだけれど。お願いした方がいいならば、何かを考えます」

老人のひとりが声を上げて笑う。

「興をそせるもの言いだ」

Dの血族が中枢に抱かれる事を良しとするなど、あり得なかった。今までは、否、今でも、だ。内にあるからと言って安心させてはくれない存在なのだ。今では無いいつか、必ず対合いする側に陣取り、危険因子となる道こそが運命であると言わんばかりに牙を剥く。

「御依頼の際は是非、デイハルド聖を介して頂けると助かります」

柔らかな口調で語られる口元の笑みは変わらず湛えられている。

それは交渉でも勧誘や籠絡の類ではなかった。

ただ、この場にいる誰もが知る事実に基づいて、相手側が望む願いを叶えても構わない。利権や優遇、対価すら要らないと言いきっている。

要は鎖を掛けさせないつもりなのだ。

五老星が握る手綱の先には虚空のみが存在する。実を持つのは、この力を振るう際に必要となるのは、若き世界貴族のひとりであるデイハルド聖と示していた。

名が拳がった少年は、確かに現、20ある天竜人の頂点に座している。

それを動かすには体面的にはあるが、五老星であろうとも世界政府としては、膝を折って願ひ伏せなければならなかった。

脅して言う事を聞かせる、などはご法度という訳だ。

きちんと理由と目的を説明し、デイハルド聖が諾と言わなければ、ポートガス・D・アンは動かない。

良く考えたものだ、老人のひとりが立ちあがる。

「小賢しいのう」

こつこつと杖で床を叩き、ほうほうと笑んだ。

「褒め言葉として頂いておきます」

アンは芝居がかった動きで、ワンピースの裾を上げ礼をとる。

「返答は急ぎません。ごゆるりと三思、下さいませ」

それでは今宵はこの辺りで。

現れた時と同じく、会釈をした影はあつという間に姿をかき消した。

立っていたであろう場所には、その人物が居た証はない。月光が映しだした虚ろいのような、不確かな言葉だけが老人たちへ残される。

「さてさて、どうしましょうかな」

光が届かぬ闇の中で楽しげな声音が５つ、響く。

「あのね、デイハルド」

「なんだ」

「どうしてデイハルドがそこにいるのかな、ってその理由^{わけ}、聞いてもいいよね」

アンはぽかんと、それこそ間抜けと言うほかない表情をして浴場の縁に座すその人を見た。

夕餉だと用意されていた食事で腹を満たし、献上品だと、いくら要らないと伝えてあったとしても寄こされて増えたという奴隷達の紹介を受け、そして湯浴みにと案内された場所で香りを落とした湯に浸かっていた所に現れた人物を見上げる。

「ここは僕の邸宅だ。僕を阻む者など誰もいない。当たり前だろう」

ぱくぱくと口を開閉するアンに、にんまりと両端を釣り上げた口元が告げる。

「そんな寸胴の胸無しに欲情するほど、飢えていない。安心しろ」
他の場所では老獠^{ろうかい}どもが煩くてかなわないのだ。

そう言いながらデイハルドは、さてさて何から話そうかと口角を釣り上げる。

ぎゃあー。

色気の無い叫びが何度も木霊する。

茹った所有物を主人がバスタオルに包んで出てくるまでゆうに1時間ほどあったとランは時計を見ながら、毒牙にかかった友人に同情した。

59 - 水の都

東の海を出て3カ月と6日、新造では無かったがそれなりに丈夫であつた船体も無茶な航海を続けたことで、各所に傷を負つていた。船大工ではなかったが、手先の器用な乗組員クルーが居てくれたおかげで、エースが実の力の向上の為、幾度となく燃やしかけた跡を残しながらもここまで辿り着くことが出来た。

新世界までの行程はあと残すところ、シャボンディ諸島でコーティングをし、魚人島を経由、アラナダ海中流に乗ってニューポートミューズに向かうだけとなる。

魚人島への道筋は、一応、ジンベエに聞いていており、その通りに進めば海底一万メートルまで下ることが出来る、はずだ。海中に潜るのは初めての経験だから、はつきり言つて何が待ち構えているか分からない。

ただそこまで辿り着くことが出来れば、前半の海よりも多彩な気候が混ざり合う新世界を縦横無人に渡れる船が待っている。

そう、トムが約束を守り到着を待ちわびてくれているのだ。

…トムさんに迎えに来て貰う、はやっぱり危険だよね。

アンは息をつく。確かな筋から、スパンダムがしつこく、いまだにトムの行方を探していると人伝に聞いていたからだ。意中の人物が在住する島は新世界の中にあつて、特に岩礁が多い地域に位置している。小型船が近づけば海獣により駆逐され、大きな船で近付くものなら、海王類の餌食になる、そんな場所にあつた。しかもこの水の都さながら、トムを中心に船大工を輩出する拠点となつており、棟梁を守る布陣は強固だつた。だからただのCPのメンバーが例え出向いたとしても簡単には辿りつけないし、島に入れば世界政府関係者だと知れば、めつためたにされると断言できるのだが、そこから出るとなれば話は別だ。

それにここ、ウォーターセブンから魚人島へ向かうには、樂園最後の難関と言われている、魔の三角地帯通り抜けなければならなかった。フロリアン・トライアングル

今月は20隻、既に行方不明になっているという。

誰の仕業であるのか、考えればすぐに解る。

そう、ゲッコー・モリアだ。以前、義祖父とセンゴクになんとか頼みこんで、1日だけ休暇を得た際に、くまに連れて行って貰ったのだ。

その際。悪魔の実の力でゾンビ化されていた、彼の手下は基本的に塩に弱いと解り、海水を彼の居城にぶちまけてやったのは、今は良い思い出となっている。

だがアンが海軍から去り、気が緩んでいるのだろう。

あの時は海水を掴んでくまに飛ばして貰う手法をとったが、今は海水をそのまま城内に転移させる事も出来る。

「そろそろ再びのお仕置きの時間かな」

封じられた魂が青の空に登っていく様は、壮観だった。

1年前は海兵だけの解放だったが、今はもう、アンを縛る軍機はない。

仄暗い何かを立ち上らせるアンに、エースはほどほどにと伸びた黒をばんぼんと撫でる。

町の頂きに噴水を有する造船の町、ウォーターセブンの全容に乗組員達の息も荒くなっていた。この町の名は海列車が走り、政府からの受注による恩恵が産業都市として再び名を轟かせるまでになっている。

5年前から始まった、シフト駅で悪い意味での名物となっているヨコヅナの体当たりを阻止し、駅員をしているココロと数日後に会う約束を取り交わした船は1と2番ドッグの間にある岬へと錨を下げた。

町の真正面、正面玄関には海列車の駅がある。その左右に、それぞれのドックに入る水門があるのだが、海賊旗を掲げた船が堂々とする訳にはいかなかった。なぜならここには数年前から小規模ではあるが、海兵が駐留しているからだ。

あまり知られてはいないが、ここウォーターセブンは特例的に世界政府へ加盟する国々の中に名を連ねている。海軍が使う戦艦の製造を一手に引き受けているこの町は、戦略上重要拠点として、赤い土の大陸を中心線に黄色、青といったふうに、区切られた中の赤点として守られている。

この世界の船は木造が基本だ。

しかも赤い土の大陸を除けば、残る世界のほぼ全てが海という立地である為、船という足がいかに必要不可欠であるかは語る必要すらないだろう。

蒸気船もあるにはあるが、統一した規格が未だに無い為、あまり作られてはいない。

時々、物好きが造船所に頼みこんで作らせるくらいだろう。木造船は基本、竜骨という家で言う大黒柱を組んでから周囲を形作った太さや木材の曲や重さなど職人が長年培ってきた経験則の中で荷重のバランスを取りながら建造する。

しかし鉄の船は全てをゼロから作る事が可能だ。しかし世界に統一した規格が存在しない為、それぞれの鉄工所が作った素材を組み合わせて作るしかない。

結果、戦艦などの湾曲を描く船を作った場合、大砲を撃てばその反対側の海へそのままひっくり返るといふ笑話になってしまう。

木造船だが実際に進水式で祝砲を撃ち、沈没してしまったスウェーデン籍軍艦”ワサ”がある。二層式ガレオンで、1200総トン、砲60門を積んだ肝入りの船だったが、あっけなく横ばいに沈んでしまったのだ。

「さて、わたしは見積もりして貰う為にガレーラに行ってくるね」
半舷上陸の人員を決め、先発組の中に紛れ込んだアンはさくらを抱いて船舷に乗る。

この町の情報は既に、良く知るアンから副船長であるツヴァイに伝えられていた。

どこが市場であるのか、水路が縦横無尽に流れる都市の移動方法、そしてエースの腹をたっぷりと満たしてなおかつお値打ちな飯場などなど。

後援を受けているとある場所からの定期収入を受け取るための窓口も、ツヴァイは知っている。

身バレしないようにと男装したアンは、ひとつにまとめた髪をキヤスケツトの中に隠していた。いつもとは違う服装に、エースだけでは無く、船に乗る誰もが違和感を感じていたが、あえて誰も口に出さない。

似合っではいるものの、わざわざそんな恰好をする必要があるのか、と思う訳だ。

アン曰く、今日は探偵ホームズ風、とのこと。なにがどう探偵ホームズなるものなのか、乗組員達は全く解らなかったが、本人がご満悦なのだから良いのだろう。

この船にはどんな力をもねじ伏せる両雄がいる。

賞金稼ぎが群れをなしてやってきたとしても、例え海軍が大砲を持ち出して至近距離で打ち出したとしても、ふたりは傷ひとつ負わないだろう。

そしてその変装の被害者となったのはさくらだ。

幼さも手伝って性別を区別するのが難しくはある、のは確かだった。

しかし今日は髪をツインテールに、赤と白のチェックリボンでま

とめられ、フリルチエニツクにふわふわのラッフルスカートを穿かされている。どこからどう見ても、今日のさくらは女の子にしか見えない。

アンをひとりで行かせる事に、エースは眉を寄せる。何か事を起こしそうな気がしたのだ。こういう時の予感、大抵、あたる。

「おれも行く」

「…諦めてください、船長。造船所は火気厳禁なんです」

「だけどっ」

それに金銭の受けとりもありますし、船長が居て下さらないと。ツヴァイにダメ押しをされ、エースは渋々買い出しについて行く事になった。

「本っ当に大丈夫なんだろうな」

「うん、何かあったらすぐに知らせるから大丈夫だよ」

にこにこ笑顔を浮かべるアンに、どうしても納得がいかないエースが何度も念を押す。

アンはブル乗り場に向かう仲間達の背を見送ると、船に残るメンバーに後を頼み、姿を消す。次の瞬間、像を結んだ場所は造船島、中心街にあるガラーラカンパニー本社の一室だった。

「こんにちは、アイスさん。お邪魔します」

突然降って沸いたような出現に、その部屋に居た人物達は揃って動きを止める。

さくらを床に下ろし、部屋を見れば世界政府の標を胸に縫い付けた人物があんぐりとこちらを見て口を開いていた。

「ああ、たしか…ダックス」と、お付きのAとB。

「ゴーギーだっ」

そうそう、確かそういう名前だったとアンは手のひらをぽんと打つ。

「ンマー、いつも通り突然だな」

えへへへ、と照れたように笑うアンの横手より、くぐもった咳払いが発せられる。

お前は一体誰だ、と無言の問責を視線だけで示唆していた。もしも世界政府役人である自分よりも劣る身分であるならばどうなるかわかっているのだろうか。

そんな意味も含まれていた。

コーギーはきつと、海兵の姿をしたアンであればそそくさと直ぐに退席しただろう。

なぜなら聖地で何度かすれ違った事があり、一般的に見知られている姿はそちらの方が断然多いからだ。

ここで名乗るのは容易いが、後々、説明するのが面倒なのでやめる。今現在、どういい訳をしようが、アンが乗っている船は紛れもなく海賊船だ。老人たちからの誘いを蹴り束縛を否定した後、彼らが下した結論をアンは知らない。月が満ちた日に、デイハルドから何かしらの言葉は聞けるだろうが、余り楽天的に考えないでいた方が賢明だろう。

と、なれば。

「アイスさん、今度、このダックスさんから小言聞いてあげてね」
アンは世界政府の役人3名が座るソファアの後ろ側に周り、その背をリズムカルにとん、とん、とんと触れる。

その瞬間、そこに居たはずの姿が順番に消えてしまった。

「……」

ぱんぱんと手を叩き、

「タネも仕掛けありません！」

「あつても教えてはくれんだろう、アン」

説明する気が皆無である友人に、アイスバーグは片眉を寄せた。

そうでもないんだよ。

アイスバーグは久々に姿を見せた友人に苦笑を洩らす。

「ンマー、息災でなによりだ」

「アイスさんこそ」

アンは小さなレディ、さくらを紹介しつつ単刀直入に用件を申し入れる。

「それは構わないが、焼け残りの跡がどれほどかによるな」

船の状況を一度見てみない事には、判断は出来ないと言う。

魚人島を通り、向こう側に居る師匠の元まで船を渡らせる。アイスバーグにとつてみれば、自分の手仕事を向こう岸にいるトムに見てもらふ絶好の機会でもあった。

それを知ってか知らずか。

ここウオータセブンは世界政府からも受注する世界有数の造船所だ。同時に修理も、たとえ誰であろうとも船の保持者^{オーナー}であれば受ける。だがアンは、毎年のごとく、世間を賑わせている新人の船に乗っていた。元海兵とはいえ本社に直接、しかも市長となったアイスバーグに今、持ちこんで来られる幸運が、はたまた豪気なのかは解らなかったが、タイミングが良かったのは確かだ。

しかも会話を重ねるほどに、海軍で在席していた時よりも自由奔放であるような気がした。船長である、双子のエース、も後ほど挨拶に来たがっているのだという。ただメラメラの実の能力者であるため、何かを燃やす可能性はあるのだが、それでも良いかと事前相談でもあった。

アイスバーグの答えは「構わない、」だった。

造船所という場所に興味を出していたらしく、エースが聞けば喜ぶと言いながら、

「ある程度のお金もちやんと用意してるの」

「生意気だぞ。お前から金を取ってみろ。後が怖い」

うわ、それは余りに酷いんだ。

頬を膨らませるアンにアイスバーグは、ここ数年の出来事を語つ

て聞かせる。若手だが”行程職”に腕が確かな青年が入った、とかフランキーが戻って来ている、などを簡潔に教えた。その若手に船の具合を見て来て貰うと電伝虫を手に入れば、ドアがノックされ、ひとりの女性が入ってくる。

「そろそろ終了のお時間だと……あら、アン。お久しぶりね」

「折角、いつもとは違う服着てるのにつ」

どうしてみんな分かつちゃうの。変装してるのに。

がつくりとソファに腕をつき、肩を落とすアンを通りすぎ、アイスバーグの秘書であるカリファが何枚かの書類を机の上に置いた。それはこの水の都、ウォーターセブンの市長としての仕事内容に関わるものだ。

アンには分からない内容を、ふたりが幾度か取り交わし紙上にサインを描く。

ふとアイスバーグがソファに寝ころんでいたアンを見れば、紹介された幼子の姿がどこにも無い事に気づいた。

「あ、うん、さくらは大丈夫」

ちよつとそこらへん、散歩してるんじゃないかな。

初めて訪れる町で気軽に散歩出来るものではないが、船のみんなも買い出しでここら辺にまで上がってきているはずだから、姿を見かけたら合流するだろう。そう言われてしまえば、それ以上の追及は出来ない。

「では査定の件は伝えておきます」

「ンマー、いい。今からドックに行くから直接伝えよう」

お前も来るか、と言われアンは頷き起きあがる。

久しぶりと心の中で思いながら、口にする言葉は初めまして、だった。

黒の瞳の中に映るその男は、ただ無表情に自分を見下ろしている。世界屈指の造船技術者の元には、日々弟子入りを求めるもの達が

門戸を叩いていた。

アンが見上げている男もそのひとりで、まだ2年と年数は浅いものの、手にした技術は職長が太鼓判を押す程だと言う。

「カクが戻ってくるまで暫くお待ちください」

ところでアイスバーグさん、これからの予定ですが。

カリファがアイスバーグの、市長として、ガレーラの社長としての予定を羅列しながら、時間の調整を取ってゆく様子を横眼で見つつ、飛び出して行ったカクが向かった先に視線を投げる。

岩場の岬では、留守番をしている仲間達が思い思いの場所でゆったりと過ごしているはずだ。カクであれば往復で30分ほどだろう。査定にかかる時間を10分と見繕っても、往復時間が20分もあれば彼には軽い。

「やあ、ルツチ。似合ってるじゃない」

「……………」

ここでも無口な男として通っているらしく、会話を担当するのはもっぱらハットリだ。

「お前が除隊したと聞いた時は、驚いた」

静かな声が降ってくる。

「まあいろいろと。あるんだよ」

ジャブラが血相を変えて、ブルーノのところに掛け込んで来てな。アンは淡々と話すルツチにくすくすと笑む。

狼男の彼とも数度、仕事を一緒にした事があった。良くも悪くも熱い男で、人を煽るのを得意としている。だが思いがけないところで優しかったり、状況把握に優れもしもの時の状況判断も悪くなかった。

木槌が打ち鳴らされ、かななが木を削る音に瞼を下ろしてふたつ目の音を拾う。

周囲にはこの会話は聞こえてはいない。言葉の中に語彙を挟み、二重の音を発しているのだ。初めてこの技術を聞いた時にはさっぱ

り意味不明だったのだが、おつるの元に居た時、1年間必死に聞き取りと舌の動かし方を練習した。

「…聞いたのか」

「ん、ああ、まだ。次に月が満ちた時に聞けるのかな」

朗報が。

ルツチを見上げ、アンは笑む。

その唇に、そつと己がモノを落とし、ルツチは口角を上げる。

「楽しみにしているといい」と。

岬に泊められていた船は、職人の言により修理可能とされ、ドックへ移動することとなった。

残っていた船員たちに訪れたカク、という人物から空いている2番へ入るように言伝ことづてを受けたのだ。出かけている船長が戻った際に動かして貰えればいいとも、添えられている。

船の作りにはあまり詳しくない船員に、分かりやすいようカクは説明した。

そのおかげでなんとか、幾つかの文言は漏れているだろうが、伝える役目を果たせそうなくらいの理解力をつける事が出来ている。

「おーい、おっさんがいねえから簡単な昼飯だけど、達者なヤツが作ってくれたぞ。見張り替わるから食べて来いよ」

それはありがたい。

見張り台に立っていた男がするするとロープを伝って下りてくる。甲板や船首、船尾に立っていた男達も腹減ったあ、と船室へと入っていった。

入れ替わりに出てきた男達は4手に分かれて、見張りにつく。

海風が陸に吹き上げる。

町の頂きにある噴水の影響か、この島は珍しく島から海へと流れる風の方が強かった。

安定した気候である事も要因なのだろうが、船員達は珍しい風に、さすが偉大なる航路と妙に納得した。

エースが船長を務める、このスピード海賊団に属する物達は偉大なる航路の様々な場所グランドラインで乗り込んだ烏合の衆だった。寄せ集めだからと言って、統率が取れていない訳ではない。多くの海賊船と比べれば、船長の事を大切に思い、その盾となる事も厭わない、それが全員に共通する意志と決意だ。

おれがこんな檻から連れ出してやると連れ出された者、恐怖で縛られていた船から連れて行って欲しいと懇願した者、気付けばここが自分の居場所だとしていた者もいる。

この船の中には、束縛が無い。

航海に必要な、それぞれの役目は確かにあったが、それ以外、強制されるなにかは存在していなかった。

自由が認められているのだ。

かつてこの船では無い場所で生活していた者は、下っ端が個室に3名集っただけで、その者らは殺されてしまうと言った。それは船内で何事かを謀っている、そう船長や幹部達に判断されるからなのだそうだ。

しかしこの船では少なくとも、エースは、船員へ信用している、そう言葉していた。

「信じなきゃ、同じ船に乗れねえだろ。なんかおれ、間違ってる事言ってるか」

ここは海賊である意味を、噛みしめる事が出来る場所だった。

他の船に乗った事のある誰もが雲泥の差を感じるほどに、船長は自由を理解し、日々の中で己に課した義務を果たしていた。

時に突拍子もない行動を起こし、突っ込みを入れられているのも愛嬌だ。

船長の求めるなにかに随行する。

いつしかそれぞれの目的の中に、自然と船長ありきが浸透していた。

そしてもうひとり、忘れてはならないのは船長の双生である存在だろう。

この人物も癖の強い、船員達をはらはらとさせる。

ただいまー。

のほほんとしたいつもの調子で船に返ってきたアンに、船員達がいつものようにおかえりなさい、と返した直後、幾人が衣類を血まみれにしていたその姿に驚きの声を上げた。

着ていたブラウスにはべったりと、朱が色づき、滲んでいる。

「何があつたんですか！」

「喧嘩を売った奴らは無事ですかい」

「心配すんのは相手かよ」

そんなやり取りをしつつ、ほほ笑みを崩さないアンに、わらわらと集まってくる。

アンと敵対して、無事に帰還出来る存在は片手で足りるほどしか、この船の船員達は知らない。

船に残っていた者達が手のひらを負傷し、気絶したさくらを連れ帰ったアンの元へ集う。小さな体を受け取った船員がどこかに怪我が無いかと、衣類を脱がし始めるのを止める間も無く絶叫が放たれた。

「ちょ、さくら女……?! 男、だよな。でもなんであるんだ」

「こいつマジか」

「初めて見た……」

アンも初めて見た時は吃驚した。話には聞いたことがあったが、遭遇するのは天文学的数字だからだ。

世界が違っても種としてはウン万という個体数を誇る人が居るならば、ひとりやふたり、存在していたとしても不思議は無い。

そう、さくらは両性具有体だった。

ふつくらと膨らみ始めた胸を、男達が頬を染めて見ている。

「はいはい、そこ、さくらをガン見しない。どこでもいいから血が付いた服を着替えさせて寝かせてあげて」

指示を出すアンの声に、生返事を返した船員が視線を泳がしながら船内へと入ってゆく。

「あんたは動かない」

「はい」

がつしりと体格の良い仲間に抱きとめられ、アンは身を固くする。留まっていた船医が知らせを受けて慌てて飛び出して来、大丈夫だと言い張るその手を見れば、深い切り傷が数本、骨には達していないが出血を続けるそれに、処置を行い始める。

「船長が見たらこの船を燃やしかねないですぜ」
折角修理して貰えるというのに。

「大丈夫だよ。たぶん」

にへらとこの人が笑む時ほど、大丈夫という言葉があてにならないと誰もが経験していた。

傷が癒着しやすいように手のひらをボールを受け止める形に固定させ、船医はぐるぐるときつめに包帯を巻く。

「絶対に激しい運動は禁止です。いいですね」

「善処します」

いくらダメと言われた所で、約束できない事柄には頷くことが出来ない。

だから善処、に留める。

エースには既に、怪我を負った瞬間に、アンの身に何が起きたのか理解したはずだ。

そして町中で発火しそうになっている。こういう時、繋がっている不便さを感じる事がままあった。

普通に生活している分には、別にばれて困るような事柄は無いが悪だくみをしている時はほんの少しだけ面倒だとは思う。けれど繋がっているこの感覚が消失したらしたで、慌てふためくだろう。

エースに内緒で進めていたとある計画に関しても、問い詰められるのは必死だ。

ツヴァイが必死にエースをなだめている様子が手に取るように伝わってくる。

離れていても会話可能であるのに何も言っていないのは、面と向かって喧嘩する気満々なのだ。たまには力の限りぶつかるのも悪くは無い。

血が付いていた服を脱ぎ、怪我をした掌に気を付けながら水で体を洗い流した後、いつものゆったりとした衣服に着替えてから甲板に出た。

空は青く、太陽が輝く空には雲ひとつない。航海中であれば、数日前のようにうとうととまどろんでいた陽気だ。

アンは仲間にカクからの伝言を聞きながら、エースとの喧嘩をどうしようかなあ、とまるで他人事のようにあくびをした。

59・水の都（後書き）

さくらつぼみ（サイドストーリー的ななにか） endorse

<http://ncode.syosetu.com/n0676>

q/12/

60・蒼穹の白（1）

喧騒、そう言ってしまったても誇張ではない騒がしさがあった。あの意味その店にとっては、まさしく戦場といってしまうもいい。注文された料理数が半端では無く、しかもいかつい顔つきをした男達が行儀よくテーブルと椅子に分かれ、次々と作られる料理を胃に収めているのだ。作っても作ってもキリが無い。しかもその男達に混じって、女性と子供が和気あいあいとした様子で座っているのも不思議な光景だと、料理を運ぶ者は思う。

「お待たせいたしました、ピラフ大盛りはどちら様で」

「おいオヤジ、こつちだ。ついでにこのロブスターの辛いヤツ、もう一皿持って来てくれ」

酒が尽きた。樽ごとたのむ。

注文がひっきりなしに飛び交い、店内は大わらわだ。

盛大な喧嘩という名の局地災害が起こした翌日、岬で起きた爆音について様々な憶測が飛ぶ街中で、スピード海賊団の面々は固まって昼食をとっていた。

ドックに入れた船を見に来たアイスバーグ曰く、

「ンマー、5日もあれば出来るだろう。それまでのんびりしておいてくれ」とのこと。

損傷箇所は手直しがきく場所ばかりで本当は2、3日の、工程らしいのだが、特別にいろいろと改造してくれるのだという。

「伝手というより、人脈ですね」

20名を超える仲間達が入れば、小さな飯屋は慌ただしくこつた返してしまった。しかも普段、海賊として海を駆け抜けている荒くれ者達だ。食べる量も半端ではない。

船員それぞれに5日分の滞在費を手渡しながら、ツヴァイが息

をつく。

用意した金銭の殆どが手元に残る形になったのは、これからの航海を考えれば喜ばしいのだが、この人物、アンに関しては謎ばかりが深まるばかりだ。例え海軍に所属し、かの英雄の孫であったとしてもここまで、人と人の繋がりが広い者などそうそうはいないだろう。

「お前ら、無駄使いすんなよ」

「船長はすぐに使い切りそうっすよね」

主に食費で。

笑い声と同意がいくつも上がる。

船員クルーの声に、本人も同意を示す。島に居た頃から、兄弟揃って食べる量が半端無いとは十分に解っていた事だ。皿を積み始めているエースがくい、と親指をアンに向ける。そしてごくりと嚙んでいた食べ物飲み込んでから、

「それは心配いらねエ。アンが…」

かくん。

言葉が急に途切れる。

フォークに突き刺したウイナーをそのままに、山盛になっている焼き飯の皿の上へ顔が落ち……かけた。

「まったく…」

いつもの事だとは分かっている、突然の寝落ちに対し端正な顔立の中にある眉に皺が寄る。横に座っていたツヴァイが咄嗟に手のひらを出し、船長の顔がうずもれる前に受け止めたのだ。至る所で中腰になった面々が、ほっと一息をつきながら席に着き直した。

至る場所で突然寝落ちる。

という現象はすっかりと船員におなじみのものとなってしまっていた。

これは特殊感染だと、アンは思っている。義祖父を初めとする、自分たちだけがかかっている病だ。何度も頑張ってみた。その瞬間を待ち構えもしてみた。しかし抵抗しようと頑張っても、意識が刈

り取られてしまった。どんなに睡眠をしつかり取り、絶対に大丈夫だとしても起つてしまう奇怪な現象なのだ。

これに関して聞くより見た方が早い。と、アンは新しく乗り込んでくる仲間に取り合えずをお願いし、最近ようやく、なんとか全員に浸透してきたようで、安心していられるようになっていた。エースの方が回数は多いが、アンにも不意にやってくるからだ。

「…なんだったっけか」

数分後、がばりと顔を起こしもぐもぐと再び食べ始める。

「そりゃね。買うもの殆ど無いし、エースの食費でも構わないのだけど…」

渡される金銭は、滞在費という名の給金だ。これは衣食住を保障し、乗せてやっているのだから、戦利品が手に入るまでは渡さない、必要無い、というのは詭弁だとアンは思っている。

基本的に海賊は誰かを襲って金品や食糧、奴隷を得て売りさばくのが主なお仕事内容だ。犯す危険が大きい分、実入りも確かに桁外れだ。しかしスピード海賊団はピースメインであり、金銭供給源を持っている。あちらの世界であったように、給金として支払ってもなんらおかしくは無い。ならば普通に使える場所に降り立ったなら、渡すのが筋というものだと思うている。お金という物質は、使う人物によって有益にも有害にもなり得る不思議なものだ。懐に貯め込んでも死ねば宝の持ち腐れになってしまう。ならば放出してしまう方が良い、と考えていた。

アンの見解にエースやツヴァイ、乗組員達もその方針に誰も異を唱えなかった。なので立ち上げ以来、ずっとこの形式が取られ続けている。

「何枚かさくらの服が欲しいくらいだし」

ぴくりとさくらが身をこわばらせる。

「…アン様」

「大丈夫、ちゃんと今日はさくらの好きな服、選んでいいから」
はふう。

安心した、という息を吐き、さくらは卵をぱくりと口に含む。

アンにとって問題なのは、だ。

ルツチがこの町に住んでいる、という一点だった。

なぜなのかは推して知るべし、なのだがここに居る仲間達には説明しにくい事情も絡んでいる。昨日ルツチと話した時に、前回の約束を果たして貰いたいと言ってきたのだ。

該当する約束はたったひとつ、明後日に休みがあるらしくその日、と指定もされてしまっている。

確かに今のアンであれば即座に叶えられた。場所も瞬間移動で向かえば、どこへだっていける。

しかも今回、宿は既に全員分確保してあった。以前義祖父と共に泊り、それから何度か利用させて貰っていた中央街のホテルに頼んでみると、即座にOKが出たのだ。自身が海賊だと知れているはずなのに、支配人は快く部屋を貸し出してくれた事に、アンは黙って頭を下げた。

ウォーターセブンはどちらかと言えば治安の良い町として知られている。

ツヴァイが船員^{クルー}達に渡した金額も結構な量で、歓楽街に個人的に繰り出してもきつと余るのではないかという量だ。日々を海で生活する男達を接待する色町も存在している。

そこに出発の日まで籠っていても十分過ごせる程の金額が手渡されていた。

ドーン島を出てからかれこれ3カ月、ずっと離れることなくエースや、途中乗船してきた仲間達と共に海を渡ってきている訳だが、そろそろ単独行動するのもいいかもと思い始めていた。

偶に、満月時以外にもひとりで出かけている時があったが、どの日も数時間程度で戻ってきている。

単独で行動するようになれば数日、長ければ1カ月くらいは船を

空ける事になるだろう。

とはいってもエースにはなにをしているのか、必死に隠さねば筒抜けだ。こそこそとしていれば、何か裏でやってるな、などと過去の蓄積で予測されてしまう。

「ついでく」

「…まだ何も言つて無いよ、わたし」

エースは真正面に座り、山盛りのサラダを突き刺しているアンを見る。

「…あのね」

「譲らねエ」

昨日の喧嘩がこの場で再び勃発かと、船員達クルーがごくりと息を飲む。炎が乱れる様は、一言でいって恐怖、だった。これが俗に言う地獄だと言わんばかりの灼熱が飛び交ったのだ。自然系ロキアの能力者であるエースと対峙しても、生身であるとは思えないほど引けを取らないそれぞれのぶつかり合いに、船に乗る誰もがぞくりと身を震わせた。

赤い土の大陸の先を知るアン曰く、エースであろうとも、たぶん今のままでは白ひげの足元にも及ばないという。さらに言うならば、アン自身が挑んでも10分持てばいい方だとため息交じりに理由も添えて説明された事がある。

だが船員達クルーにとつてみれば、既に双子の力は己たちを大きく越えており、それ以上にすごいと言われたところで、なにがどうすごいのか。さすがに想像域を突きぬけてしまっていた。

お待たせしました、フィッシュアンドチップスとチキンのグリルです。

ぱたぱたと店員が忙しそうにテーブルに料理を置いてゆく。双子はその間もじっと見つめ合ってたまだ。

「チキン食べないの？」

「食う」

湯気立つ料理にアンが視線を落とし、再びエースを見た。
折れるつもりは無いらしい。

となれば、船員のまとめ役として残るのは副船長であり、航海士でもあるツヴァイの仕事となる。

「じゃ、ちよつと散歩がてらに空島行く？」

「近所買い物に行くような口調で言い放つアンに、仲間達が目を点にした。

エースも想像していた何かとは違ったようで、きょんとしている。

「ちよつと待って下さいよ。空島って、本当にあるんですか」

「あるよ」

事も無げに、アンは仲間の言葉を肯定する。

青海では夢物語であるとか、伝説であると言われていたが、上空1万メートルの空には雲の海が横たわっているのを知っていた。

笑うべきなのか、それとも黙っておくべきなのか。乗組員達はごくりと喉を鳴らす。

「普通は、にわかには信じられないよね」

届けられたトマトソースの Pasta をフォークでくると巻きながら、面々の顔を見る。

口を開けて待ちかまえているさくらの口にそれを入れてから、ふたつある行き方を説明し始めた。

ひとつは赤い土の大陸にある幾つかの山脈の頂きから至る方法。

これは公式ではなかったが、海軍でも一度、まじめに試した事がある、空島へ行きつける手段のひとつだった。

「ただしこのルートは100名で挑んだとしたならば、その内の誰かひとりでも到達すれば成功だと言われる途^{みち}なのね」

もうひとつは”突きあげる海流^{ノックアップストリーム}”に乗っていく方法だと笑む。

「こちらは生か死、二択の方法」

仲間の屍を越えて最後のひとりに到達の意志を託すか、いちかばちか、0か100かの賭けに出るか、だった。

”突きあげる海流”^{ノックアップストリーム}に関してはジャヤの近くで数日に一度、空へ突き上げられている現象が確認されている。それを使って行く場所とはどんなところだ、というのが船員達の感想だった。

「そしてわたしだけの方法」

全てを言わなくても、誰もが思い当たる節を得る。

アンは空間と空間を結んで瞬間的に違うどこかに行きつく事が出来た。ただし、見知らぬ場所には行けず、同時に飛べる人物もひとりまでと制約がつく。が、海兵時代に様々な場所へ赴き、能力の開発を行っていた成果も重なって、写真や明確に風景を想像できる場所へならば行きつく事が可能になっていた。

その他、エースと海に出てから思考錯誤しつつ、技を増やしている。

半身に至ってはその身に宿る炎の色を変え、技の種類も増やし、どんどんと先につき進んでいる状態だ。

「私もご一緒したいのですが」

その言に一番驚いたのは、アンだった。

「ね。船長と副船長が居なくなったらこの集団、誰がまとめるの？」

それは至極もつともな問いだ。

「いけるだろ」

「数日不在でも、皆さん大丈夫ですよね」

暴れると言ってもこの町は比較的、秩序がありますし、なにより。

「偽船大工達が強い、だろ」

エースが最後のチキンソテーを口の中に放り込み、もぐもぐと咀嚼した。

ああなるほど、エースにはすっかりばれちゃってるのか。

さっきの顔もルッチが絡んでるって勘違いしたわけね。
アンは思考を隠さず、エースへと笑いかけた。

船大工達もその仕事柄により十分に一般人と比べれば強い部類に入るのだが、その中にCPが3人も紛れ込んでいる。誰にも知られていない事実だが海賊が暴れたとしても、瞬殺されるに決まっていた。ルッチも昔と比べ、海賊という文言に対し相変わらずの嫌悪感はあるものの、この潜伏を成功させるためなのか、むやみやたらに感情を荒立たせる事は無くなっている。

「騒ぎは出来るだけ起こさない事。もしトラブルに巻き込まれたら…アイスさんに頼んどく」

予定が決まったとなれば、船員^{クルー}たち善は急げと言わんばかりに注文した品々を胃に収めてゆく。

宿を中心に行動する事。

外出するならば、さくらに必ず言付けて出ていく事。

必ず誰かひとりとはさくらの相手をする事。

船が収められている場所には人が溢れかえっていた。

それもそのはずだ。ガレーラの社長自らが技術を披露しているのだから、職人たちがその技を目で盗もうと、囲いを作るのも分かった。

人垣を掻き分けてアンはこっそりとアイスバーグへ耳打ちする。

もちろんルッチやカリファ、カクへの対策をばっちりとして、だ。微かな舌打ちと、非難の視線がふたつほど突き刺さるが気にしない。

そうしてアイスバーグに2、3日の留守を伝え、何かあった時の対処を頼む。それとは別に廃材として出ていた鉄の塊を幾つか使っても良いか聞いた。

「ンマー、それは別に構わないが。なにに使うのか聞く方が野暮

だな。なら何でもいい。その土地の土産を頼む」

返事は承諾、町を歩く際には解体屋フランク一家に注意するように言われ、アンも分かったと頷いた。

そうなれば宿で支度をし、注意事を追加すればあとは空の上へと向かうだけとなる。

荷物は少なく、いつも持ち歩いている肩かけ鞆のみだ。エースに至っては手ぶらだし、ツヴァイもベルトに止めてある小さなサップとナイフだけだった。

「じゃ、行つてきます」

船員たちの見送りを受けて、アンはエースとツヴァイを伴い、姿を消した。

さくらはすう、と視線を遙か上空、雲の向こうを見上げる。

「アン様」

その声は小さく、船員の誰の耳にも届かない。

「ちよつとここで休憩、させてね」

体を慣らすためだとアンはその場で背伸びをしたり、柔軟体操をし始める。

連れて来られたふたりは、まさしく絶句、だった。

目の前に広がった景色に、エースは目を見開いている。

間接的に触れるのとはまた違った体感に、その表情は宝物を見つけた子供のように輝いていた。

「これは、一体」

是非随行したいと名乗り出たツヴァイも声を詰まらせている。

話に聞いていた通り、眼下一面に広がるのは白い雲だ。だがその白は見慣れた海のようにゆっくりと動き、淡い色合いではあるが青の彩りをしている。

触れば水のような感触を指に残した。

「すげエな！アン！」

「ええ、確かに夢物語では済まされない現実感を感じます」

「でしょう？ていうか現実だから。ツヴァイ、ほっぺた引っ張れば一発だよ」

大きな弾力のある、クッションのような場所に寝転がったアンがふたりの体調を尋ねながら、かつての景色を今を重ね合わせる。

そうして首をかくりと傾げ、やっぱり変わってるな、と結論付けた。以前来た時より島雲が増えているような気がしたのだ。青海と比べると限りある狭き海だが、緩やかな流れは存在している。

とはいえ、以前、と言っても4年ほど前になるのだから、変わっていてもおかしくは無い。今から向かう場所には半年に一度位は顔を見せてはいるが、アンにとって白海は久しぶりに訪れる場所だった。

「エース、ツヴァイ、体の調子、どう？」

アンが両名の顔を見れば、普段と変わらない面をしている。以外に平気そうだ。

自身も初めてここに来た時、空に住む人に驚かれたがなるほど、青海人の順応能力は凄まじいのもかもしれない。

「ここで大丈夫なら、一気に登っちゃってもいいかも」

「まだ上があるのですか」

こくり、とアンは頷き、もう一層上があると人差し指を指し示す。

「ここは海拔7000m上空にある、白海。しっかりした足場のある白々海はあと3000m上空にあるの。でも目的地はもうちょっと上」

海拔と標高、どちらも高さを表す言葉だ。

エースもツヴァイも航海士としての知識がある為か、それはなにかと尋ねてはこなかった。

「しかしすごいですね」

先ほどから繰り返される言葉は、同系統のものばかりだ。

それに関して解らないでもない。

ツヴァイは特に、目に見える現実に、想像が追い付かなくなっているのだろつ。

それとは相対的にエースは先ほどからはしゃぎっぱなしだった。基本的にエースは全てを否定しない。例え誰からか聞いた話でも、へえそうなのか、と受け止める。人によってひとつの物事に対し、感じ方は様々だ。だから自身が見聞するまで、それは違つ、とは言わなかつた。

「なあツヴァイ、ここならおれ、泳げるかな」

能力者となり水面に浮けなくなったエースが興味津津に副船長を振りかえっている。

「どうでしょうね。空と言っても海のようなもの、のようですし」なら試してみよう。百聞は一見にしかず、とエースはテンガロンハットを雲において、ていや、と飛び込む。

白の飛沫があがると同時に、アンが口を開き、

「あー。そうそう。言うの忘れてたけれどこの空海、海楼石成分で出来てるから飛び込んだら溺れるよ……って遅かつた」

ぶくぶくと沈むエースをツヴァイが必死に引き上げている姿を見て、アンが笑う。

「すげエ変な海だ。塩の味がしねエ」

抵抗が少なく、それでいて沈む速度は海水よりも早い。しかも底が無いと追加説明するアンに、落ちれば青海真つ逆さまだと聞けば、エースは眉を寄せて嫌な顔をした。

アンは肩かけかばんの中から小さなコップを3つと水筒、そして幾つかの果物を取り出す。

片手が包帯で塞がれているため、落とさないように気を付けながら、だ。そこにツヴァイが合の手を出し、コップに水が注がれた。

「ほどほどの運動も終わつただろつし、水分補給しようか。はい、

レモン、あとエースはこれ」

仰向けに寝転がるエースにレモンと小粒の赤い実を投げる。

ツヴァイには丸ごとの果実を手渡した。

ありがてエ、とエースは迷い無くぱくりと赤い実を口に含む。そして外皮を噛み、中の果実を舌で転がす。

ミラクリンとこちらで呼ばれているその実は、あちらではミラクルフルーツと呼ばれるものだ。

酸味を苦手とするエースの為に味覚の変化を起こさせる、ミラクリンをアンは宿に向かう途中、市場で買ってきた。アンにとってこちらが異世界であると余り思えない原因のひとつに、食べ物が挙げられる。以前暮らしていた世界とこちらは、植物の分布だけで見ると、結構重なり合っていた。

例えば名前は違うがキャベツやニンジン、トマト、なすび。イチゴやスイカ、パイナップルなんてものまである。ウォータセブンから線路で繋がる、セントポプラの市場でミラクルフルーツを見たときには、驚いた。これでエースの酸味対策が出来る。内心で拳を握ったのはここだけの話だ。

果物系で一番嬉しかったのがバナナがあった事だ。

食べてもよし、牛乳とジュースで粉砕してもよし、腹持ちもいいし、食を胃に詰め込むのが苦手なアンにとってこちらでも無くてはならない果物となっている。

バナナといえばよく、バナナケーキをマキノに作って貰っていた。柔らかなケーキポンジにたっぷり生クリームを乗せ、その上にバナナを一本乗せてくるりと巻く。

あちらでは男性も激甘スイーツを取り寄せて楽しむようになってはいたが、こちらでは余り、男がケーキをぱくつくと言う現場にお目にかかった事が無かった。

砂糖などの甘味料は広く出回っているものの、甘いものはやり、

女子供の食べ物とされているらしく、酒場に入れば、もっぱら男達は塩辛い食べ物ばかりをつまんでいる。

お酒に甘いものと重なれば、成人が罹ると言われている三大疾病になりやすくはある。

だがしかし、酒類は別としても、甘味だけは譲れなかった。

そのせいで、というのもなんだが、兄弟達は幼い頃からアンに付き合っけケーキを食べたり、プリンやパフェ、エクレアに砂糖まみれのドーナッツ、マシュマロなどをマキノの店で口に使っていたおかげもあって、すっかりと甘党に育っていた。

フーシャ村には幾つもの、あちら風にアレンジされた食べ物が並び、壁の向こう側からわざわざ食べに来る人まで居ると聞いている。

いつもはみかんすら嫌がって余り食べないエースが、剥いただけの黄色い果実を丸かじりする様子をツヴァイは信じられないといった様子で見ている。試しにどうか、と勧めてみれば、レモンを恐るおそる齧った瞬間、私に隠れてはちみつをかけましたね？と言わしめるまでの甘味を感じたらしい。

「人によってどこまでいけるかはそれぞれなだけだね」

エースに剥いて貰った房を口に入れ、酸味に唇をすばめながら食べる。

と。

横でもぐもぐと口を動かしていたエースが嘔き出した。

「お前っ、わざとだろっ」

いえいえ、酸っぱいのが苦手なエースに味覚を同調させたなど、そんなことあるわけないよ。そうにつこりと可愛らしく小首を傾げて事も無げに言うアンと、目尻に涙を浮かべるエースとの間に入ってしまったツヴァイは、ふたりが仲直りするまでその場から動けなかった。

「さて、残りの行程、行っちゃいましょうか」

仲が良いほど喧嘩するもんなんだよ。なんだぞ。

双子は和解後、すっかりと疲れ切ってしまったツヴァイへと胸を張って言い、鞆を肩にひっかけ、それぞれの腕に自分の腕を絡ませる。

手のひらの傷は船医によってしかと固定されており、昨夜の激突の際も外れないくらい頑丈だった。空島に出かけると言ったアンに船医は外れた時に巻き直す包帯と、薬をたっぷり持たせたのは言うまでも無い。傷の癒着が既に始まってはいたが、油断は禁物だとツヴァイや船長は余り暴れさせないようにうっかりと言い願っていたくらいだ。

エースとツヴァイに高山病の兆候が全く見えない事にアンは安堵しつつ、更なる上へと視線を向けた。

通常ならば低地から高地へ移動すると、酸素濃度の低下と共に、体への負担が大きくなってゆく。そして様々な障害が起きてくるのだ。その主な症状は頭痛及び吐き気、倦怠感や虚脱感、めまい、朦朧なのだが、このふたりには当てはまらないらしい。

アンは目を瞑り、今から跳ぶ場所への像を描く。そしてしっかりと更なる空へと視線を向け、空間を結んだ。

意外だがこちらの世界でも登山の文化は確立されていた。著書も数多く出ていて、高山病、という名目ではないが、それなりに平地から高地へ上る場合の注意点や、病状が示されている。

探検家が主にその引率役を果たしているのだが、ただあちらのように、「明日山登りに行かないか」などという気軽さはなかった。衣類や道具ひとつとっても基本的にあちらの方が機密性、便利性に富んだ装備が揃っているし、どちらかと言えばこちらは、山に住んでいる人達が雪解けとともに平地から登ってくる行楽客を迎える姿が一般的ではないだろうかと思う。

だが高地の環境に適した者達も、確かに存在していた。

そう、海に魚人や人魚が居るように、人里離れた高地には獣人が暮らしている。

ただ獣人の数そのものが世界で少なく、アンが把握している集落もひとつだけしかない。しかもそこは隠れ里で、そこを知ったのも偶然だった。細々と血を繋ぎ、人間の社会と交わろうとせず、安全が確保されている地域から出る事は殆ど無いらしい。

ちなみにこの隠れ里にも歴史の本文が^{ボーネクリフ}存在している。

「到着！」

次の瞬間、3人の視覚を染め上げたのは蒼だった。

そして大きな緑、大樹だ。

海拔12500メートル。久々に仰ぐ宇宙の色は相変わらず、濃い藍が広がっていた。

「船に戻ってこれをみんなに話しても、絶対に信じて貰えない自信、ありますよ」

ツヴァイのつぶやきが耳に届いているのか、エースは息を飲んでそれを見上げる。

これ、どっかで見たことあるぞ。

その声にアンはある有名なアニメに出てくるイメージを思い浮かべたが、まさかね、とエースをちらりと見た。

61 - 蒼穹の白(2)

炎が青の空に猛^{ただけ}猛しく彩る。

放たれたのは矢、だった、しかもご丁寧にも木製ではない。鉄、
のようではあるのだが、それらは溶けずに紅を突きぬけてきた。

となれば最善は避ける事、だ。

エースは確たる足場の位置を目で留め、射出地点を探す。

ツヴァイにはアンが補助に入り、矢から身を守っていた。

テングロンハットが風に煽られ、胸元に垂れていた紐によって背
に落ちる。

「…もしかしくなくてもこれ、海楼石入り、だよな？」

疑問形なのは、見慣れない光沢があつたからだ。

エースは小さく舌打ちする。飛んでくる矢の一本を掴んでみた。

アンのお陰なのか、能力者となっても海楼石に対する抵抗力があり、
急激に脱力する事は無いが、じんわりと触れた場所から、それでも
倦怠感が浸食してくる。

海楼石は唯一、自然系^{ロギア}に対して、普通の人間がやり合う事が出来
る物質だ。

「あんな所から飛ばしてんのか」

やつとのことで見つけた細い、撃ち出し口に目を細め、どうやっ
てあそこへ至るかを考える。

一番良いのはアンに跳躍して貰う方法だ。

目に見える場所であれば、そのものに触れられる接点に出られる。
だがエースはいくら探しても見えない、感じない、聞こえてこない
意識の違和感を覚えていた。

矢は休む事無く一定のテンポを、時折緩急をつけて撃たれ続けて
いる。

前方に見える大きな樹は島雲を根に包み込み浮いていた。

海雲に何本も下ろされた、大きな錨は小さな島雲に突き刺さっている。

根は抱いた白に絡みつくようにあり、目を凝らせば茶色い土も所々に見えていた。

「あれはなんなのか、聞いても」

いいですか、とツヴァイが口にしようとすれば、肩を押された瞬間矢が目の前を通過する。

「その前に。先に安全圏内に入っちゃおうか」

エース、行くよー。

全く動揺せず叫ぶアンに、ツヴァイは言葉を詰まらせる。

「なんだよ、知ってんなら先に教えるよな」

「だって。ここまでになつてるとは思わなかったんだもん。防衛範囲が広がってるんだよ。この前来た時より」

アンはふたりを連れて大樹の元へと像を結ぶ。

あの場所に出たのは両名に、一本の大樹が支える町の姿を見せたかったからだ、と言う。アンも初めてあの大樹を見た時、青い巨大な宝石はどこにあるのだろうか、雲の迷路内を探検をしたくらいだ。

ふたりは歩き慣れた、勝手知ったる道のように奥へと進んでゆく小さな背について行く。横幅が大きい、人がやっとひとり通れるかといった通路を越えれば、雲を加工したのだろうか。手触り的には固いがふわりとした白のそれを基盤として家が建てられ、こじんまりとしてはいるが集落が形成されていた。

通路を誰かが通ると鈴が鳴るように仕掛けられているらしく、来訪者に人々の目が向く。

ぱっと把握出来るだけで、20名くらいだろうか。

エースは目に見える何かに違和感を感じ、見聞色で気配を探りながらアンの後へ続く。

「アッシュさん、へそ！」

「いらっしやい、あぶあぶ、へそ！」

ちよつとまで、その会話は。

エースががす、つとアンの脳天を掴んだ。ひらひらと挨拶をするように手を振りながら発する言葉に、突っ込みを入れる。

そうすれば、あぶあぶとは久しぶり、へそとはこんにちは、と同義だとアッシュがにこやかに隻腕を挙げて近づいて来た。白のもしやもしした髭が特徴的な男の目元には深い皺が刻まれている。

「青海からわざわざ、いらっしやい」

3人はアッシュに連れられ、町の一角にある庭園へと通された。そこには色とりどりの花が咲き乱れている。椅子やテーブルをはじめとする家具は、町を守る大樹の裏側にある雲切り場から切りだし加工すると言う。

ちなみにエース達を迎撃してきたそのものは、仕組みとしては簡単な発射装置だった。

赤外線を応用して作られた、熱映像に対して、設定温度以上の物体に自動掃射されるように出来ている対悪魔の実兵器のひとつだとアンから説明を受けた。

「エースがさっき、集中して狙われていたのは熱源だったから、だね」

しかしエースにはまいち意味が判らず、とりあえず棚上げしたのは秘密だ。

ここにある機械類は、下よりもうんと技術的に進んでいるのだという。海軍で様々を生みだしているベガバンクよりも、数歩先を先んじているすごさを、楽しげに話すアンの声に潜む睡魔に、エースがうとうとし始めた頃、小さな足音が近づいてきた。

「…へそ」

白髪の少女が人数分のコップと、細長い実をひとつ持っている。年の頃は10、くらいだろうか。

出迎えた少女の姿を見て、ツヴァイが思わず立ち上がる。なぜなら姿そのものが異質だったからだ。

体全体を包帯で巻き、わずかに露出する肌には^{はんいん}瘢痕がある。

視線に晒され、少女は後から来ていた老女の後ろへと隠れた。

「気しねエからこつち来いよ。それよか暑くねエのか」

少女は目をぱちくりとさせ、自分の姿に異を見せない人物にゆつくりと頷く。

「大丈夫、怖くないよ。ふたりとも優しいお兄ちゃんだから。女の子には特にこつちは優しい」

にんまりと悪戯つ子のように上目で副船長を見る。

指名を受けたツヴァイは、「なつ、なんの話ですか」多少上ずつた声を出しながら、咳払いをした。

エースはここにきて、いよいよ違和感が色を見せはじめたのを知る。全体的にこの村は高齢の住人が多いように思えた。

どんなに小さな村であっても、老若男女、多少偏っていたとしても平均的に在しているはずだ。

「正解。ここは生き残った人達が懸命に生きている場所なんだ、よ」

かつてここは、ビルカと呼ばれる空島の中でも有数の都市だった。「だった？」

ツヴァイが疑問形を返せば、ビルカという国は、一度滅んだのだとアンは言う。

詳しい経緯は省かれたが、掻い摘んだ話を聞けば、数年前ビルカと呼ばれていた島雲は一度、散り散りになるまで壊滅したのだという。

しかも崩壊に至らせたのは、ここ、ビルカという科学都市に生ま

れた、たったひとりの青年だった。

フェアリーアース

遙か空に浮かぶ”限らない大地”、エースやツヴァイ達が月と呼ぶ天体をいつも見上げ、いつかそこに辿り着くと誰に言うのでもなく、力強く明言していたと、アッシュは懐かしそうに語る。

「…その彼とは」

「ええ。ええ、そうです。良く知っておりますとも。こんなにも小さな頃から」

過去の良き記憶を思い出し、皺を作りながらアッシュは続ける。

彼の両親はビルカの中でも常に頂きを争う研究者だったという。誰も彼もが彼の両親を恭しく語り、取り入ろうと必死だった。時に子供を経由し、なんとか自身をねじ込もうとした輩もいた。

だがその両親にしてみれば、彼、という存在は疎ましく、邪魔なものでしかなかったと、傍で見ているも分かるほどだった。

彼の両親は、彼の面倒を見ている暇があるならば、今現在取りかかっている研究を完成させる方が、有意義だと言いきっていたからだ。

彼、は生まれた時から出来て当たり前とされていた。なぜなら彼の両親は、それだけの頭脳を持っていたからだ。しかし親が持ち得るからと言って、子供に親と同じ能力があるとは限らない。彼も必死に頑張りはしたのだ。

彼自身の声を見捨て、周囲は騒ぎ立てた。

秀でた両親から生まれたのだから、当然と言わんばかりの期待に応えるように、彼自身を見捨てて全てが押し進められてゆく。だが結果は散々だった。

その結果両親は子に見せていた一欠片の興味も無くし、放置してしまっただけだ。

町の者達は彼、を腫れ物を触るかのように接し、同世代はせせら笑った。

そして彼、は荒れた。

当時アツシュは下から数えた方が早い、研究員として職についていた。人としては優し過ぎるくらいの部類で、誰かの足場にされ、末端から上がれない、万年使い走りだと言われ続けていたくらいだ。だから、ではないが椅子に腰かけ、寂しそうに絵本を読む幼い彼の姿をよく目にしていた事もあり、会えば話しかけ、次第に仲良くなつてゆく。

そして時に食事を共にし、時に彼が持ちかえった課題を共に解いた。

彼は彼を無視しないアツシュに、懐いてくれていた、と思う。
言葉を濁しながら先を語る。

ある時、彼が少しでも興味のあるものと、偶然に手に入れた青海の本を手渡し、ビルカの歴史を語って聞かせた。

彼はその話に夢中になった。

「かつて我らは大地にあった。限り無い程の土壌、二度と戻れない故郷、そこに置いてきてしまったものこそが、本当の宝であった、と」

だがそれが彼にとって良かったのか、悪かったのか。

アツシュは首を振る。

しかし彼はいつしか見上げ、見下げるふたつの大地への妄執に取りつかれてしまった。神の身であればかつてに至れると、漂流してきた青海がもたらした悪魔の実を口にしてしまう。

歴を伝える者達は必死に彼を止めようとした。月にはもう、なにも残っていないのだと。生きてゆく場所はここであり、多くを欲しではならない、と。

だがその声は終ぞ、彼には届かなかった。
それはそうだろう。

今までこの都市の者達は、彼を無視してきたのだ。今更聞いて下さいと、声を大にした所で、聞く耳を持つては貰えない。

夢を語る彼は、彼が望む力を手に入れてしまったのだ。そしてある日、彼は予言をした。

そしてその予言は、成就される。

巨大な漆黒、雷の塊を、彼自身を否定した存在が籠る島の中心へと放った。その瞬間、島を形成していた物質は組み上げられた電子構造を破壊され、脆くも霧散し、崩れ落ちる。

歴史が深く刻まれていた島雲そのものを崩壊させた力は圧倒的で、あつという間の出来事だった。

「確かにその力は神の御技のようにも思えるものでした」
かつての先祖が残り伝えていた遺物を再起動させ、彼、は様々を知った。

月に至れる方法を手に入れたのだ。
今は遠くスカイピアと呼ばれる、雲島の中でも大きな部類に入る場所で、持てる力を遺憾なく使い”神”として君臨している。

「無力だと嘆くつもりはありません」
何かをするために手段を見つけ、戦おうとする者達だけがこの地に留まり、いい訳を見つけてなにをやっても無駄だと、何もしたくない、忘れたいと願った者達は去った。

アッシュは口元を弧にし、多くの犠牲をエンジェル島の人々に敷いている彼、をどうにかしようと細々ではあるが準備を整えていると薄く笑んだ。

元々ここ、ビルカが有していた知識の多くは、光に関するものだ。光、とは視覚器官を保持する動物の感応を刺激して明るさを感じさせるものを指す。一般的に可視光線、とされているがビルカでは電磁波のひとつとして解明され、今なお研究が続けられている。

皮肉なもので、彼が得た悪魔の実の力は雷だった。それはこの国

にとって利用されていた電の力であり、性質も利用する術もここには存在している。

それはもはや運命としか言いようが無い。

「老骨に鞭を打って、どこまで出来るかはやってみなければわからないことですが」

エース達は細長い実から採れた、さっぱりとしながらも程良い甘みがある、ヘナツシュをごちそうになってから、広場へ移動した。

「…ついて来なくても良かったのに」

広い場所の方がいいと、アンが向かったのは入ってくる時に通った通路にほど近い場所に位置する、円形の、少し落ちくぼんだ場所だった。

「普段はここで土を撒き、植物を開花させるのに使うのですよ」

かぼちゃやにんじん、ほうれんそう、そして季節の花など、アンが持ちこんだ種が撒かれる。

「アツシュさん、ちょっと離れておいってくださいね」

アンは息を吐き、集中を始める。つい最近になってやっと安定してきた力を使う為だ。

「よし、じゃあ始めます」

アンが両手を前に出し、目を閉じる。

物に触れず、何かをこの場に移動させるには、自分が支点となつてどこかに跳ぶのとはまた違った感覚が必要だった。基本的には移動させる物質の像を結ぶ。だが近くに誰かがおり、そのものだけで無い、もしくは形が変わってしまったっている場合、その物らを空間に巻き込み、内部で凄まじい惨劇を生んで排出しまう危険な力でもあった。

例えば目の前に箱があるとする。中身もきつと入っているだろう。それをAという現在地から、Bへ移動させる、とする。移動させるアン自身はこの存在しか知らない為、箱だけをイメージして転

送する。そうすると、B地点に現れた箱の中身は、空っぽ、となつてしまう現象が起きる。中身だけがAからBに至るところかで迷子状態で放り出されてしまふ、という訳だ。

もし中身を知っている場合、果物が大量に入っているするならば、多少潰れて跡形も無くなっているものはあれど、殆どが形を留めて到着しているだろう。

また反対に、ここでは無いBという離れた地点からここ、現在地Aという場所にものを転移させるとする。アンが覚えたイメージは固定化されている為、もしA地点で形が変わっていた場合、B地点に出現するのは、そのイメージを具現化した、形に近いなにか、が現れた。

以前、実験的にこの力の使い勝手を調べるため、手頃な物質で試してみた事があった。その全てを見、把握した当人と数名の乗組員は数日の間、水すらも胃に受け付けないほどの光景を見てしまったのだ。

この力は諸刃の剣だと、アン自身、使い方を間違えれば、世界を一瞬で破壊する事も可能だと結論付けるほど危険な力だ、だった。

とはいえアンが移動させる事が出来るのは、せいぜい見て覚えられる程度、だ。ガレオン船を一隻、海軍で使っていたものでもよいが、それを飛ばせと言われても、きっと失敗するだろう。

アンの想うのは、質量云々の問題では無く、たぶん、イメージが追い付かないからだろうと考えていた。大きければ大きいほど、細部まで覚えていられないからだ。

だが小さなものならば、例えばリンゴやミカンなど、想像しやすい何かであれば壊さずに、例えばここビルカからダダンの家に届ける事も出来た。

アンは絶対にこの周辺に立ちいるべからず、そうお願いしていた

範囲の記憶を眼前に思い浮かべ、ぽん、と何かの合図であるように両手を打ち鳴らす。

その瞬間、金属が落下する重音が周囲に響いた。巻き込まれた人間、はいなかったようだが、何かが追加されていたらしい。

前衛的な形の、らせん状にくるりと綺麗に巻かれた鉄材が視界に写ったが、見なかった事にした。すげえ、とエースの声も聞こえるが、全く何も、聞こえない。

「お土産にその地ならではの物、って言う風に聞いているので何かあれば宜しくです」

物の経緯をアッシュに説明すれば、承諾の返事が戻ってきた。

「次来られる時で構わないから、肥料を持って来てくれないかい」「いいですよ」

アンは掛けられた声に、快く応じる。

空の上には基本土が存在しない。

海水に含まれる物資に関しては時々、世界各地に数ヶ所ある、突き上げる激流によってもたらされるが、大地に関しては全くのゼロだった。

だからかの地ではかつて、そして今も大地の支配権をめぐって、血みどろの収奪が続いているという。

確かに雲島に住む人々にとって、地上にあるもの全ては恵み、だった。

と同時に、麻薬でもあるといえるだろう。

なぜなら得てしまったが最後、もうそれなしでは生きていけなくなってしまうからだ。

植物も空島に自生するモノ以外は、空では育てられなかった。ごく稀にアンが持ちこんだマングローブなど島雲に根を張り、成長し続ける例外もあるが、基本的には地上にあるものは地上にある環境でのみ育成が可能となる。

ここビルカでは偶然にもアンが飛びこんできた幸いにより、海に生息するマングローブの苗木を入手出来たり、少量とはいえ希少な金属類を得ていた。

光の科学を研究するこの町で、植物を成長させるなど造作も無い。1年を待たずして、多くが破壊され、散り散りとなりながらも残った島の残骸を集め、今のビルカが成っている。

「となればダイアルだね」

廃材とはいえ、大量の金属と木材の礼となるものはと考えたアッシュがそう口にする。

新しいものは加工中であつたり、既に貰い手が決まっていたりしている為渡す事は出来ないが、個人的に予備で持っているダイアルならばと、自宅へ取りに背を向けた。

手さげかごをひとつだけと言っていたのに、あれもこれもと悩むくらいならいっそ、全部持ってしまうがいい。そう考えたアッシュがのんびりと、ゆったりと休憩しながら引きずる大きな籠に、余りに遅いと迎えにいったアンが「持って来すぎだよ！」との突っ込みを入れたのは言うまでもない。

広場に到着した後、好きな物を、という好意に甘えて、アンが選んだのは2種の貝だった。トントダイヤルとジョントダイヤル

そのふたつとは音貝と映像貝の2種だ。

前者は音声を録音し、再生できる物、後者は映像を記憶する物で、ビデオカメラの部品として使われていた。ツヴァイは興味深い、そう言いながら幾つかの貝を分けて貰っている。ちなみにビデオカメラは高価な品物で、殆ど出回っていない品物だった。写真を撮る、カメラもどちらかと言えば高いが、そこそこ、所持者も居る。

例えば海軍の広報部とか、新聞記者とか。アン的には余り良い思い出は、無い。

それとは別にアツシュから風貝を取りつけた、ボード型のヴェイバーをアンは受け取った。プレススタイル

「今までのお礼、として受け取って貰えれば。風貝では無く、プレススタイル噴風貝ジェットダイアルを使用しているの、乗る時は気をつけて」

絶滅種と言われている噴風貝だが、ここ、ビルカの近くでは偶に、それこそ数年に一度という頻度ではあるがまだ、採取されていた。彼による大破壊後は、白海に出られる人員も無く、入手は困難になっっているという。

貴重品ではあるが、大切に保管しておくべき物品でもない。使える者が使えばいい。そう言ってアツシュはアンへと手渡す。

年老いた住人たちでは、そのダイアルが装着された小舟に乗っても上手く乗れないのだと、珍しい空の幸を振る舞ってくれていた老夫人が笑む。

冬は雪山のスキーや、スノーボード、夏になればスケートボードを海辺に近い整地された広場で遊んでいたアンにとっては、慣れ親しんだ形の遊具だった。

「ね、エースも乗ってみる？」

海に落ちたらちゃんと引きあげるから。

ツヴァイは広場でアツシュから、ダイアルの特性について解説を受けけている。

どういう乗り物なのか、エースはアンより大体のコツを聞きながら町の入り口へと足を向けた。するとその背を包帯の少女がもじもじと、時折振り返るふたりにびくりとしながらついて来る。

この町には子供と言える年頃の姿は、ない。

アンが定期的訪れるようになり、ゆっくりとではあるが、良い変化も起きていると聞いていた。

人見知りには相変わらずだが、「手、繋ぐ？」そう手を差し出せば、嬉しそうな心の音を響かせながらそっと触れてくる。

さくらとはまた違う。

けれど触れた手の柔らかさに、アンは笑みをこぼした。

「来る…」

ぶるりと包帯の少女が体を震わせた。

最初は何事だと訝しんでいたが、アンは展開した見聞色に反応する。

「エマはわたしより、範囲が広いの」

空島では見聞色、ではなく、心網^{マントラ}と称される。

アンは試し乗りは後にしても構わないかとエースに言い、広場へと戻った。

15分後、アンの網にもビルカへ向かってくる幾つもの声が聞こえる。

「性懲りも無く…」

アンは大樹に向かっていくつももの気配に、視線を向けた。

「ったく、あの雷男。わたしが来るの先読みしてるのかしら」

直接は相對した事は無かった。会いたいとも思った事は、ない。

アンにとって雷男の心はぞわぞわとしていて余り好きではなかったからだ。ざらりとしてぬるつとした、そういう感覚がする。そう、意図的に狂わされ、不安感や焦燥感を掻きたてられるような不快感があった。根本的に、ウマが合わない、そういう存在だった。

どこかで高い音は緊張感を煽り、低い音は不安感を煽る。そういう言葉を聞いた事がある。

彼、にはそれしかない。

包帯の少女が小さく、お姉ちゃん、と不安げな声を発した。

「大丈夫だよ。エマの力は本物だし、あのビリビリより秀でてる。それは保証できる」

男の心網^{マントラ}があと一步、指先を伸ばしても及ばない絶妙な場所にビル力は陣取っている。アンがビリビリと呼ぶ男にしてみれば、かゆい場所にあと一步届かない、むず痒さを感じる距離にこの町は在っていた。

雷男に対し、包帯の少女、エマはこの地より、エンジェル島を含めたさらに向こう側までを覆ってなお、余りある見聞色を有している。

「ツヴァイ、あと30分以内に、作戦組み上げられる？」

主戦力は45歳以上の住人が37名、プラス少女がひとり。そして外部戦力として3、のみだ。

だがこの大樹まで相手を引き寄せるつもりはない。

言葉の意図を汲んだツヴァイが、一体誰に言っているつもりですか、と自信に満ちた視線を送れば、階段に座っていたエースが立ちあがり、町の入り口に向けててくてくと歩いてゆく。

「…お兄ちゃん、だめ」

エマが必死に制止する。

あれは、もう人じゃないの。

人の形をしたなにかなの。なにかにしてしまったのはみんななの。青の空にエマ達が居ちゃいけないんだって。

不自然なんだって。

生きてるのに。みんなここで、生きてるのに。

水珠が吸い込まれる包帯にエースは手を伸ばす。

泣き虫は嫌いだった。

何事があっても泣けば済むと、泣く事が子供の特権であるかのように、大声をあげて泣く姿を見るのが嫌だった。物心が付き、心無い言葉を投げつけられた時、泣きたい時もあった。だが泣ける環境でもなかった。唇を噛んで、泣いてなんかやるものかと睨みつけた。

涙を流す自分が、嫌いだったからだ。

「泣くな、そんな奴の為に泣いてやる事なんか、ねえんだ。今からその原因をぶっ潰して来てやるからさ」

「違うのお兄ちゃん、あの人は可哀想なの」

不得手とはいえ、エースもその力を有しているから分かる。

聞こえてしまったのだろう。

なにひとつ自分の欲しているものは手に入れない。その心の内を、覗かされてしまった。物ごとろつき、感受性の高い年頃にそんなものを見せられて、影響されない訳が無いのだ。

わざと見せたのだと、エースは小さく舌打ちする。

エマが見せられた全てが嘘では無い。だが作られた実も含まれているのだろう。

彼につき従う者達は、彼が持つ力に畏怖し、または心酔し、数多くの者らは己を曲げ屈辱に甘んじている。彼には逆らってはいけない。隣人を守るためには、言われたとおりの事を行うしかない。

エースはくしゃりと少女の髪を撫でる。

「気にすんな。お前は奴じゃねえ。同じ感情を持たなくても、いいんだ」

静かな声音が降る。それはどこか安心をもたらす気配をまとうせていた。

「…お兄ちゃん？」

生きる事、そのものが苦である時間をエースとアンは辿ってきた。親が居るからといって、幸せではない場合もある。逆に親が居ないからと言って、不幸せだという訳でもないのだ。周りがどんなに可哀そうだと、自分の価値観で判断をしても、それは本人達に関係の無い話で、押し付けられるものでもない。

実際に故郷では、様々な感情に右往左往されてきたのだ。

だから、負の感情に関しては、誰よりもよく解る。

幼心に、憎悪を植えつけた、のだ。

それもいつ芽吹くかと、楽しみにしながら今も待ち構えている。己が苦に感じた感情を、誰かに向けていいはずが無い。やればやるほど負の連鎖を生み、自分自身をがんじがらめにしてしまう。

気付けたのは、弟が教えてくれたからだ。

打ち切れたのも、弟となってくれたルフィが居てくれたからだ。

そして大人たちが向けてくる感情の全てを、どうという事も無いと、いつも笑って受け流していた、受けてしまったエースの手を離さなかったアンが居たからだ。

「ちょっとばかし、待っててくれな。そんでおれ達を見てればいい」

そう言いながらエースは、笑みを唇に結ぶ。

62・蒼穹の白(3)

エネルが来る。

その一言に住人達は身を固くした。

今までは同郷の者の命を奪うのを良しとしなかったビルカの民だが、“エネル”が出張ってくるとなれば話は変わってくる。

雷はその放電でこの地まで一瞬で移動できた。だが雷男はビルカの再興が成ってから、弄ぶように、思わせぶりな手を出しながらも、本格的に攻めてきたりはしなかった。

それはなぜか。

真意は雷男に直接聞いてみるしかない。

今回、彼は故郷へと凱旋、してくる。

エマが聞いたのだ。迎えにゆくから、支度をして待っているが良い、と。

住民たちは苦い想いを抱えながらも、迎え撃つしかなかった。この町に唯一残った、未来を奪われる訳にはいかないからだ。

とはいえここに住む民は基本的、非戦闘員しか存在していない。雷に対抗する術を幾つか用意しているものの、効果的かどうかは試してみないと解らない、状態だ。

頭の中では定義として、その通りに進むだろうと思われる事でも、実際に行ってみると差異が生まれるものではある。ただその説明が難しかった。

実のところ詳しい話を聞いても、アツシユ達の話がちんぷんかんぷんだったりする。

アンは光を科学するビルカの知識を語られても、いまいち理解し得なかった。

雷光は確かに光であり高速である為、秒速に換算すると30万キロメートルを進む事ができる。だが放電そのものは現象であるため、動くと言う概念は無い。ただ放電現象は電子崩壊によって出来る電子雪崩だ。雪は雪崩れるように、光という現象を伴って進むらしい。

理論上、作った道具で雷と化した彼、を止められるはずなのだが、実地試験が行われてはいなかった。それはそうだろう。出来ている方がおかしい。それは解かる。

ただエースに撃った、海楼石入りの矢だけに關してならば、効き目がありそうだという事は出来る。力が抜け、当たれば実体が危険だと半身が判断したからだ。

数学はまだ数式を解けば答えを求められたが、化け学と科学、物理の3つは余り得意では無かったアンは、額を押さえてきりきりと痛む脳に眉を寄せた。

頭はきつと悪くないはずだ。時間をかければきつと、納得出来る答えも見つけられる。だが今回は、さつとざつと、専門知識を持っていれば「ああ、うん、そうなんだ」となるのだろうが、如何せん基礎的知識が薄い状態での講義で、質問を投げかける土台が無かった。

それでもなんとか、大まかに噛み砕く。元大学生を舐めるなど、自尊心を引っ張り出して理解するため、最大限に想像を働かせる。エースはとうに説明を聞かず、ツヴァイと作戦をたてはじめていた。それをエマが横から覗いている。

アッシュの話のを要約すれば、エネルという男はその身に宿した悪魔の實の特性により、ありとあらゆる場所へ瞬時に移動できる、で間違いではないはずだ。

アンのように点と点を結ぶように移動するのではなく、現象的に

空に走る、雷と同じ動きをするのだらう。アツシュ曰く、雷速は秒速200キロメートルなのだそう。ちなみに光速は秒速30万キロメートル、音速は秒速0.35キロメートルなのだといふ。

「アツシュさんごめん、比べられても想像が追い付かなくてよくわからない」

素直な感想をアンは返す。

「でしようなあ」

知識としてはそうだと持ち得てはいても、実際にどういうものなのかは、人の身で体感する事は難しい。そう笑いながら言った。

とりあえずは彼、は余裕に構えていた。"神"として慈悲かどうかはわからないが、こちら側に準備の時間をくれるのは願ったりかなったりだ。ありがたく使わせて貰う事にする。

悪魔の実の能力者に対して、有効的な手段は基本的に弱点を突く事、に限る。

一番良いのは海へ叩き落とす事だが、あいにく空にはあの波打つ塩水は存在していない。形を変えて、ならば在るのだが、そこへ落とす前に青の空に身を、きつと翻すだらう。

それとは別に、空に浮かぶ"ストロングワールド"もあるが、出来ればそちらに関わりたくは無かった。

と、なるならば、だ。

個別の弱点を叩きつけるしかない。

弟を例にとってみれば、ゴムは弾力があり打撃系には傷つく事は無いが、鋭利な刃物で切られたり、凍らされた場合にはその弾力の効力は無くなってしまふ。

エースの場合をとってみても、炎は水に弱い。天候が雨である場合、水飛沫がたつ場所で戦う場合、その能力を存分に使えなくなる。

では雷の天敵は何か。直接的に考えて、電撃が通らないものを、を想像すればいい。

すぐに思い付くのは、やはりゴムだらう。だが弟をこの場に連れ

てくる訳にはいかなかった。呼びに行けば嬉々として、ついてくると言った後に約束があるからやっぱり行けない、と続けそうではある。

ビルカでの戦いは、エース率いるスピード海賊団の冒険譚だ。前置きにそれを伝え、ルフィを誘ったとしても、行かない、と言うだろう。ルフィの物語はまだ始まってはいない。数年の後に始まりを封切る為、今という時間を使っているはずだ。

だから本当はルフィが居た方がきつと楽しいし、エネルギーに対しても最も有効な手段をとれるが、ぐつと我慢した。

次いで思い出すのは、ガラス、紙、テフロンといった絶縁物だろうか。

ビルカの応戦武器である、自動掃射される矢には海楼石成分が含まれ、かつテフロン加工がなされていた。これはアンの案を取り入れて作られている。

青海で海楼石を採るには特殊な技術が必要なのだが、ここ空島では安易に生成出来た。なんでもパイロブロインという成分が空島や空海を形成しているそうで、地上であればわざわざ海楼石を採掘し、取り出さなければならぬ成分が空にはそのまま存在している。

なので地上から、鉄とテフロン、のふたつだけを持ちこんだ。ポリテトラフルオロエチレンは耐熱性に優れ、摩擦係数の低い物質として知られている。加熱によっても熱流動を起こさない。イコール雷によって生まれる電流で溶ける事が無い上、海楼石の成分が実体へ突き刺さり、能力を封印する。

矢の形状に固定したのは、作りやすさと加工のしやすさからだ。余り大きなものでは、住人の年齢を考えれば負担となる。

ビルカに住む人々だけならば防戦しか選択肢がないが、今回はエースとアン、そしてツヴァイが居る。

攻めは最大の防御なり、という名言通り、この人員が揃っている

ならば、守るよりも打って出る方が効果的だった。なぜなら双子が覇気の使い手であり、ツヴァイは彼の故郷が誇る、知略戦の専門家だからだ。

町の守備と、撃ち逃した残党の処理を副船長に任せ、船長とその片割れが頭を砕く。

武装色の覇気、これは体の周囲に見えない鎧のようなものを纏う力だ。鉄の鎧など、比では無いくらいの固さを誇る。またこの力は身を守るだけでは無く、攻撃にも転用できた。実体の無い自然系ロギアに対し、実の能力を無効化し、その体の実を捉える事が出来るのだ。

エースも悪魔の実の力を得て、実体をおぼろげな炎と変えた。

普通の、なんの特技も無い、ただ武器を振りまわすだけの相手に対しては、自然系の特色通り無敵となるが、しかしアンに対しては今まで通り回避もしなければならぬし、拳を受ければ痛みもあり血も流れる。

使い手を選ぶ覇気という能力だが、自然系ロギアだけでは無く悪魔の実の能力者全体へ、傷を負わせる事が出来るのだ。

雷を弾くのも、もちろん可能となる。

しかもアンは、海軍時代に能力者の力を封じる空間を生成出来るようになっていた。

今後一切、ビルカに手出しが出来ないよう、仕置く事も可能だ。

「数年ぶりの帰郷を忘れられない思い出にしてあげる」

仄暗い、邪な笑みを横眼で見ながら、エースはほどほどにしろよ、とその頭をくしゃり撫でながら、後を双子が信頼を置く、副長に任せて共に往く。

頬に当たる向かい風は行く手を阻むように吹きつづけていた。

だが白の雲海を進む力二には問題など在于るはずも無く、プレスタイアル、もしも途中で力二がばて、運航が不可となったとしても風貝を取りつけた

船はそんな逆風などものともせず進むだろう。乗り込んだ者達はそれぞれの手を持った杖を立て、口を真一文字に結んでいた。

「エネル様、ああ、エネル様。あなた様の高潔なお心を痛ませる、害悪までもう少しでございます」

うつとりとした表情で語るのは、エネルを神と崇め、神官のひとりとして数えられる人物だ。名をタットワ、と言い、彼女は唯一エネルの側に侍る事を許された神官でもある。

両手を組み、うつとりと彼女は瞼を閉じた。

思い浮かばせるのは、神^{トミ}エネルだ。

神々しい存在感は当たり前だが、空を統べるにふさわしい雷光の力を持ち、そしてあの万物を見下すかのような視線を思い出せば、心身が喜びに打ち震える。

超特急力二の背に乘せられた、貝船の上でタットワはよれよれとしなだれた。

「ああ…エネル様。あなた様の御許から離れるなど…この胸張り裂けてしまそうです」

ビル力に向かう船に同乗している、神兵たちは皆、神官の姿を視野の外に出し、出来るだけ関わらぬよう努めていた。もし目があったならば、そこからどれだけエネルが素晴らしい存在であるかを、懇懇と、説き聞かせ始めるからだ。もしそうならば何も出来ず、中途半端に聞けば怒りを買ひ、まじめに聞けばそうでしょう、そうでしょうと終わりの見えない話が続くのだ。

「ああ。エネル様。ワタクシの声が聞こえておいですか」

タットワは潤んだ瞳を神が座す島へと向けた。既に彼女にはエネルの存在を感じる事が出来なくなっていたが、それでも胸の内にある”神”の姿を思い描き、恍惚とした表情を浮かべる。

スカイピアを出発した一団は、エネルが神の国を建国するにあたって尽力した、元ビル力に居住していた者達が中核となり編成されていた。

そう。

彼は、彼の両親が背負っていた栄光という陰に埋もれながら、ビル力という都市の中で同じく落ちこぼれ、日の目を見られない者らを取りまとめ、ひとつの集団を作り上げ軍団と化した。

それが現在、スカイピアにて神と称するエネルギーの手足として動く者達だ。

その中でも特に力を持つ、エネルギー自らが手を下し、鍛錬を積みませ心網を開眼させた5人の存在を神官と呼んでいる。

そしてその下部として前”神”が使っていた神兵が居り、神の国アップバーヤードと呼ぶ大地にて、神の意に従順に守り人々を支配していた。

本来はスカイピアの治安維持を任務とする神隊であるホワイトベレー部隊も、今は住人を監視し、スカイピアへ辿り着いた入国者へ刑罰を宣言する番犬としての役割を、自ら喜んで買って出ている。

タットワにとって、否、彼女だけでは無く支配側にとっては、まさに神が支配する理想郷へと至る礎となっていた。

悪い統治の仕方では無い。

アンは何度かビル力を訪れ、スカイピアの現状を知るようになった時、エネルギーのつけた支配の形を秀逸だ、と評した。

なぜなら彼の目的はスカイピアに眠る、己の夢を現実にする術を手にすることであり、スカイピアに住む者たちの感情などどうでもいいからだ。その土地を支配し、住人をも統治するのであれば、住民感情も視野に入れなければならないが、エネルギーにとっては道端に転がる石よりも、空島に暮らす人々の命は軽く、空島そのもののへの嫌悪も絡まって、自分を慕う神官たちでさえ便利な道具としか見ていない。恐怖を蒔き、罪悪感を育てる。そして咲く花の名は絶望という暗色の感情だ。

そうそう出来る事では無い。

だがこの方法を探れる人物も珍しい。

その点に関しては、エネルギーという男は評価できた。誰もがとらないであろう方法を、自らの存在力を利用し、存分に行使しているのだから。

エースはあからさまに嫌悪するアンに、不思議なものを見た表情で語る。

「わたしだって嫌いっていう感情くらいあるよ」

頬を膨らませ、心外だと口にする。

「行くぞ」

アンはエースの言葉に頷く。手のひらを結び、向かってくる声が聞こえる場所に、跳んだ。

現れたのは白い雲を切りながらビルカに進行してくる船の真上だった。

隻数は5、それぞれに3名が乗っている。

どこに誰が居るのかを把握すれば、後は殲滅するだけだ。

アンはエースを先頭を走る船の甲板へ飛ばし、自分も身を捻りながら、まずは雲海を横向きに走る力二へと向かう。そして力二だけを、どこかに転移させた。座標などは決めずに、思い描くのは”どこか”という事だけだった。その後を深く考えていなかった、というもある。

出現した地域ではとても無い騒ぎになり、ふわふわの身をふんだんに使った力二食祭りが行われるのだが、それはまた別の誰かの物語だ。

カニが突如消えてしまった後の落下をものともせず、船は白海を進む。

アンは雲海へ落ちる手前で、後尾を走る船の一隻へと転移した。

奇妙な形の船だった。中央の甲板だけを覆い隠すような部位がある。今は開いているが、一体なんの為についているのかが解らない。前方では赤の炎が渦を巻いていた。

悲鳴が上がり、一体何が起こったのかと確認を求めるいくつもの声飛び交っている。アンが現れた船上でも、不安を発する声がいくつも聞こえていた。

「何者だ！」

杖を構えた男に問われるが、アンはあえて無視をする。

何者かで無ければ、この船を襲撃してはならない、とでもいう定めがあるのも無し。確かにいつもの心の状態では無いと認めはする。

この不愉快さに名前を付けるのだとすれば、嫌悪、が似つかわしいだろう。

にこりと笑み、アンは包帯がかかっている腕を伸ばした。そして掌を上、指を内側に何度か招く。

「さあ、誰からでもどうぞ」

後方で船が勢いよく二つ折りになり、炸裂音が響き渡る様子を眺めながら、エースはきつとやり過ぎではないと胸を張るだろうアン
の未来予想図を思い浮かべる。

最近の進化が、ふたり揃ってとめどなかった。

エースもそうだが、手にした力を試したくて仕方がなかった。

そしてどう使えば一番効果的なのか、有効使用するにはどういう条件下なのかを知るには、やはり実践するのが手っ取り早いともいえる。

アンが青海だと呼んでいた、空に白海があると知っているからこ
その呼び名だったと今なら分かる――偉大なる航路では、これら
の力を試す前に終わってしまうのが常だった。そう、スピード海賊
団が保有する戦力が、すでに前半の海で必要とする実力を大きく上
回っていたのだ。だから障害をもともせず、折り返しまでもうす

ぐというここまで上って来られた。

ただ今回ばかりは、いつもとは何か違う。アンの感情が乱れている。

理由も歩きながら教えられた。

見聞色を苦手としているが故なのか、なんとなくしか分からない感覚だった。エースにしてみれば、船で寝食を共にする仲間と、弟特定の人物以外の心情に対しては雑音にしか聞こえない。後は戦いの時に相手の動きが見えるくらいだ。

「その杖を下からこつちに振りあげて斜めに、か。芸がねエな」
まさしくその動きをとろうとしていた男が目を見開く。

「心網マントラの使い手か！」

たん、とその男は後方に跳び体勢を立て直す。心網を使う相手にはそれなりの戦い方があると言わんばかりに、口角を上げた。だが次の瞬間、男は炎に呑み込まれその場で喉をひっ掻きながら事切れる。エースは一瞥すらせず、半身に立ち、船上に降り立った人物を見た。

「容赦の無い。ですが面白い戦い方をなさる。どのような技で？
どのような道具で？どのような方法で？」

心網マントラ使いでもあるというそれに向かってタットワは高鳴る鼓動を隠しはしなかった。

「障りはお気に召しませんでしたようで、なによりですわ」

くつくつと細長い指を紅の唇に当てて笑う女にエースは応じない。
男の行動を読むまでも無かった、だけの話だ。

「下がりなさい。この相手は私がしましょう」

両手の指をすべて揃えたまま空に突き上げた女は胸の前で腕を交差し、

「ワタクシの名はタットワと申します。死にゆく定めのものに名乗ることこそが”神”の威を死の国にも轟かす得策かと。ねえ、そ

う思いませんか？」

そう、女は疑問符を口にした。

船上に立つ姿は確かに妖艶といえるだろう。男であれば思わず見てしまう位の容姿だ。

長く伸びた金を細く何本も編み、さらにそれを後方の一か所に集めて束ねている女は体の線がくつきりと出る薄手の服に身を包んでいた。それが己を引き立たせるのに、最も効果的だと、意図しての意匠であると知っていたからだ。

周囲に立つ男達も目のやり場に、苦勞している。

うわ、すごい美人さんだ。

違う船で船員を締め上げているアンの声が聞こえた。

「そうか？ おれはあんまりだと思っけどな」

呑気にもそんな会話を交わしながら、エースは女と真向かう。

見ているようで見てはいない。その双眸が映しているのはエースの像だが、その実、遙か彼方のなにかを結んでいた。

「…そいつが元凶か」

うふふふ。

なにが楽しいのかうつとりとタットワは青の空を見上げる。

「解らないのですね。解るはずもございませんね。偉大なる”神”の意など、所詮、俗物には理解しえないのですわね」

それも仕方がありません。

女はエースににこりとほほ笑む。

「”神”のうたたねが終わらぬよう、ワタクシがお相手させていただきますわ」

「サクリファイス」

”sacrificeのタットワ”が。

63・蒼穹の白（4）

「崇めよ。我が、神なり」

その男はまるで最初からそこにあつたと言わんばかりに、存在していた。

ぱりぱりと金のほとばしりが走り、白雲を進む船上へと突き刺さる。

その表情は不機嫌だ。表情は無に近く、下がった両の口角は不平の心境を現していた。

額から上を白の布で覆い、気だるく開いた三白眼、長く伸ばした耳朵が腰近くまでになっている。片膝を立てて座し、その肩に立掛けるのは金の杖だ。

「神・エネル」！

歡喜の声を上げたのはタットワだった。焦げた服の端を揺らしその足元に這い、見上げる。

「…未熟。折角の戯れも飽きてしまった」

タットワはぶらりと垂れていた片足の下に自ら、体を差し入れ神の台座となる。

その態度に幾分かは新所を満足させたのか、ヤハハハハ、という特徴的な笑いを上げ余りに退屈であつたため、少しばかり早くに着たと告げる。

「まだまだ甘い。帰って久々に修業を付けてやろう」

それは彼、独自の支配の形だった。

「…あ」

小さく声を上げたのはアンだ。両者の間に黒薔薇背景が見えてしまい、思わず数秒呆けてしまったのだ。一隻の船を雲海内に逃してしまった。なんの為に使うのかと訝しんでいたものは、潜水時に使用する囲いだったらしい。

一隻につき乗員数は3、さすがのアンも雲海に潜ってその船を追

いかけられるほど、空に浮かぶ海を熟知している訳ではない。

町に到達されるだろうが、ツヴァイに任せる。エマがこちらの声を拾っていると信じて、後は宜しく、と、メッセージを思う。

アンは足場に使っていた船に踵を落とせば船は真つ二つに割れ雲間に沈んでゆく。

月歩で最後に残った船へと移動すれば、そこに残るのは神を名乗る男と、それに使える官、そして青海からやってきた双子だけとなる。

「神を目の前にして頭が高い」

顎を上げ、男はふたりを見下ろす。だがされている方は涼やかだ。「ごっこは他でしてろ」

口角を上げ、エースは余裕の装いのまま白い歯を見せた。

瞬間、金の光が伸びるが、甲板にささった一本のなにかによって阻まれる。

エネルは片眉を跳ねあげた。

「女、なにをした」

しかしアンはなにも答えない。心にも思わない。

見聞色は大得意と言っても良い能だ。自らを神だと名乗る、痛い人物に心情を悟らせるのは嫌だった。これがまだヒーローに憧れる年頃ならば生暖かく見守れるだろうが、確実に、生まれはふたりより先であるだろう。

不意にエースから名を呼ばれる。

「なあに、エース」

「顔に出てるぞ」

「はっはー。隠すつもり無いもの。痛いよねえ、ホントに」

アンはにつこりと、これ以上無いという極上の笑みを浮かべ、毒を吐いた。

真つ先に動いたのはタツトワだった。

敬愛する神に対して余りにも屈辱的な言葉を並べられたのに我慢が成らなかったようで、”心網^{マントラ}”を使う時に必須とされる精神状態を平常に保つ、という事柄が出来ないまでとなっていた。

だがそれしきの事で使えなくなるなど、ちゃんちゃらおかしい話だ。

動揺などいくらでもする。その状態に、例え陥ったとしても、冷静に判断を下せるように訓練するのだ。それを人は、緊急対応マニュアルとして、文章に起こす。

もしくは定期的に自分を、断崖絶壁まで追いやり、精神的抑圧を経験しつづければ、なにが起こっても瞬時に動けるようになるだろう。

双子の場合、大体が後者で成り立っているのだが、周りから言わせれば異常だと言われるに違いない。

しかし素質があるとはいえ、5人もの人物に見聞色を開眼させたエンルという男は、確かに才能を持っているのだろうとも思えた。

ただ。そう多少目のやり場に困るくらいだろうか。

胸のラインや腰、色づきなどが透けて見えてしまっている。

恥じらいもひとそれぞれで、道徳が一律では無いこの世界で、恥ずかしいと思っているのはアンだけかも知れなかったのだが、それは二重の意味で仕方の無い事だと自分に言い聞かせた。

「じゃ、女同士の戦いつてことで」

大きな島雲の群れへ、アンは掴みかかってきたタツトワの手首をむんと掴み、転移する。

船に残された雷も、多少、日頃の運動不足を解消するかなと言わんばかりに、怠惰に立ちその場で能力を解放した。

「神の裁き（エル・ツール）」

普通の人間ならば電流を受ければひとたまりも無く、通電した体内は焼き焦げて命を失ってしまう。だがエースは炎でありかつ、武

装色の使い手だ。

「うまく避けたか」

落雷による災いは、大電流によってもたらされるジュール熱が物体に被害を発生させるのが主な原因だ。普通の人間は電撃による感電ショックにより、髄に通電し死に至る。そもそも人間の神経は微弱な電気信号であり、ここに受け止めきれない大きな容量が通過すればどうなるか。

しかし今回の戦いでは、物体に触れる事で起る熱の損傷は起らない。

それはエースが自然系の能力者であるが故の特別仕様だ。

足場に使っていた船は見るも無残に炎上し、白の海上で煙を上げている。

エースは空中でくるりとバク転し、そのまま月歩で身をひるがえした。

「逃げるか」

「お前こそ逃がしてやつてもかまわねエンだけどさ」

エースは余裕綽々のまま、肩越しに雷を見た。

「けど悪い。何発か殴らせて貰うな」

その言葉にエネルは薄い唇を歪ませる。神に齒向かう不届きさに加え、雷である自らを殴れるなど是在るはずも無い。

自らの体の事を、エネルは調べ尽くした。どんな武器を使おうとも、物理攻撃に対しては絶対的な無効を誇る。

どんなに、例えば青海にあるという能力者の力を奪う石があったとしても、雷であり続けるならば存在し続けるだろう。まさしく無敵、絶対的な支配者であるのだ。

「やれるものならば、やってみるがよい、小僧」

エネルは明白な事実を思い知らせるため、背に負った太鼓により

龍の顎門あぎとを開く。

その頃アンは、弾力ある不安定な足場の上でタットワの主要関節

を全て外し終えた所だった。虫の息となっているタットワに最後を下すか否か、思案していたのだ。本当であれば苦痛を長引かせるのはアンの本意に沿わない。だが流れ出して来る思考を遡れば、このまま放置し、生死の運命を世界にゆだねるという手もある。

「さてどうしようかな」

手にしていた武器は雷男と同じ杖だったが、その錬度は半分にも満てはいないように思えた。いろいろと仕込んだのはエネルギーなのだろう。だが弟子は師匠が持つ実力の半分しか、教えによって会得できないのが普通だ。そこから自分なりに技の熟練度や自分にあつた形を模索し、落とし込んでゆく。

「十分なんだろうけれど。弱い者いじめをするならば」

そう、その技をなんの受け身も取れない一般人に行うのであれば脅威だろう。

軍隊として訓練を受けた、4方向の支部勤めから出た事の無い海兵でも危うそうだ。

本部で日々、上官の元でぎりぎりの生死を潜り抜けている将であれば良い勝負となるだろう。そして少将位になると、現在のアンと同じく物足りなさを感じながら倒す事も出来るレベルか。

「…ああ、エネ、ルさ…ま」

タットワは5人の神官の中で最も優れた能力の持ち主だった。

『沼』『鉄』『玉』『紐』の試練を受け持つ同士達のさらに奥、生贄の祭壇を受け持ち、ゆるゆると生贄に選ばれた者達をその場では無く、森へと誘い神の偉大さと威厳を語りながら安らぎの彼方へと送り出してきたのだ。

神兵よりも、神官よりも神であるエネルギーの側に侍る事こそが矜持だった。

負けるはずがない。

負けるなどあつてはならない。

甲高い叫びが放たれる。

本来あるはずの場所から外した関節は、激痛を発する。動くことなど出来ず、動いたとすればそれは、神経を押しつぶすと同意だ。気を失ったとしてもおかしくは無い。

「…すごい精神力」

アンは、女の妄執ともいえる感情に声を漏らした。

ふらり、ふらりと不確かな足取りのまま立ち上がれば、体中に激痛が走っているのだろう、息を吸うのも吐くのも、引きつる高音が赤に染まった唇から出る。

「神の恩名を、讃えなさい！」

タットワは既に戦う力を失っていた。だがそれがどうしたのだ。痛みなどその内に、快楽へと変わる。痛みなど神の元に居られなくなる事を考えれば、些細だった。

唯一残っているのはこの心だ。

指をかぎ状にし、声を上げて走った。

実際には走れてはいないのだろう。

だがタットワはその爪で一撃を与え、崇拜する神の絶対が揺らがぬように努める事も、神官である意義であると固く信じた。

だから己の身がどうなろうと、神が神の座にあるのであればそれで満足できたのだ。それが狂気であるというのなら、喜んで彼女は肯定するだろう。

「ならばそれを、わたしは否定しよう。たとえ偽善と言われたとしても」

アンは伸ばされたタットワの掌を受けた。

包帯が巻かれたその上に、手入れされた爪が突き刺さる。

もうひとつの手が首へと伸びるが、それは手刀により払う。そしてアンは手首を手前に曲げ爪を抜くと、そのままタットワの手首を握り肘の関節を折った。

人骨がどういう風に軟骨により繋がっているかを知っていれば容易い。

そして腰紐に挿していたナイフを引き抜く。10年以上、使い続

けている手の延長ともいえる道具だ。

そのまま後方へ回り込み手にしていたナイフに覇気を込め、首を刎ねた。

赤が噴出し、くぼみへと貯まる。

ほんの数秒、意識は残るだろうがもう、痛みは感じないはずだ。

アンは足元に転がり、骸と化した元神官へ憐れみ線を落とす。

タットワと名乗った人物は、ものの数分でただの肉の塊へと化した。

息を、つく。

噴出が止まった体を横たえ、転がった頭部を拾い元あった場所に近い所へ置いた。

「恋は人を盲目にするっていうけれど」

アンは息を、もう一度ついた。

女にとってはきつと、心の救い主だったのだろう。

ころり。

女がしていた腰の飾り布から、フレイムダイアール炎貝と熱貝が転がり出た。

「使えなかった？それとも使わなかった？」

空に住む人々は、これらを武器に、戦うのだという。拾いあげながら、二度と聞けないその理由を振りきり、アンは続く、青い空に咲く金と赤の舞いに視線を上げる。

エースは遊んでいた。同じ自然系である雷男を相手に、ロギア今まで試したくても出来なかった、温度変化を初めとする技など用いて戯れている。

対するエネルギーは必至の形相になっていた。

余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）とした、誰かれ問わず見下げするような視線はない。

怒りや焦り、そして恐怖。

今まで与える側だった男が、享受する側にまわっていた。

しかもまだ20という年月も生きてはいない、青年によつていいようにあしらわれているのだ。井の中の蛙ならぬ、雲の上の雷とでも言つべきか。

エネルが雷獣^{キテン}という狼を模つた電撃を放てば、エースは両の指を交差させて作つた十字火^{じゅうじか}を放ち炎で巻いた。

腕を性質である雷に変え肉弾戦を始めれば、指先から炎を弾丸のように撃ち出しつつ、ふたつ名の由来となつた火拳による攻撃で雷を透過させる。

同じ自然系^{ロギア}同士の戦いにおいて、最も重要になってくるのは象る自然物同士の関係図だ。

例えばエースが食べたメラメラの炎は、ケムリンの煙に対して相殺の関係にある。なぜなら炎が発生した後、空に立ち上るのは煙だ。同系列の近い間柄、であるためお互いに技を放つたとしても殺傷には至らない。

そして雷男とエースの関係だが、これもまた同系列の近い間柄となる。

電気抵抗により生まれるのは熱だ。エースはその熱の塊ともいえる炎であり、その温度は瞬間的であれば白、にまで至る。

よつて幾ら両者が攻撃しあつたとしてもダメージを蓄積することはない。

ただエースは覇氣使いだ。

エネルはなにが起つているのか解らなかつた。

手足である神官も、手負いの小娘の手により声を消した。

想定外、が次々と積み重ねられる。

驚愕の表情をさらけ出していた。

相手は自らと同じ自然系の能力者であり、同じく物理攻撃が効かない炎であるとは解つた。その力もお互いに無効化し合い、全く無

益であるとも撃ち合い解った。

だがしかし、青海のサル一匹は、エネルの体を傷つけていた。
無効化ではない。

天敵でも無い。

炎である事に理由があるのか、それとは違うなにかがあるのか。
どちらも心網の使い手であるという。

「ならば！」

形ある雷であるならばどうだ。

エネルは手にしていた杖を^{グローム・バドリング}“雷冶金”し、矛を形成した。
伝導率の良い金属であるからこそ出来る、武器の生成だ。

エネルはその身を雷に変え、瞬間的にエースへと切迫する。目で
追える早さでは無い。呼吸をする行為が終わらぬ間に、姿がそこに
現れる。

だがエースはエネルの行動を前もって予測したかのように、掌を
雷が持つ矛があるだろう場所へ伸ばされていた。

熱源により矛が溶け、どろりと雲間に金が落ちる。

そしてエースは叫ぶ。双子の名を。

64 - 蒼穹の白 (5)

戦いを見て学ぶ。

技の掛けあいや間合いの取り方、そしてその人物特有の呼吸など、自分自身の体を動かす際、イメージが可能であればそれを思い浮かべながら何度も反復行動を練習出来る、という。

話をどこかで聞いた事があった。

それは友人だったか、近くにあった道場を覗いた時に聞いた話であつたのか、はたまた祖父からの言葉だったのか。

アンには両者の戦いを、会得する事は出来ない。

なぜなら双方ともが自然系ロキアの能力者であり、その力を基礎として戦っているからだ。

そもそも雷は刹那、炎は永続と存在する形態が違う。

エネルが本当に天狗であつて良かったと、アンは心の底から思った。

もし雷というそのものの特性をもっと熟考しており、その力を如何なく発揮できるようになつていたら、エースはともかく、アンは、即死していただろう。しかも世界のありようを変えるなど造作も無い位の力を保有している。地上では無く、月に意識を向けてくれて本当によかった。

お近づきになりたくない理由は、エネルという人物の精神構成が主ではあるのだが、アン自身のとある事情により、あまり雷には良い思い出が無い為だ。

二度、も雷に打たれて恐怖するなという方がおかしいだろう。だから、出来れば離れていて欲しいと願つてしまう。

アンもただ単に、エースとエネルの戦いを見ている訳ではない。神官ひとりと、神兵のほぼ7割を沈め、船もきつちりと破壊した

その後、をしつかりと観察していた。このまま放置していても白々海から白海、そして青海へと時間をかけて落ちてゆくだろう。神官には最後を手渡したが、神兵に対しては多少手心を加えた。運が良ければ白海から這い上がって来る者も出るかもしれない。そのまま青海に落ちればきつと、波乱万丈が待ち受けている。その人物それぞれが持つ幸運により、未来の選択肢が示されるだろう。

黒薔薇背景のお陰で通過した1隻が町へと至りそうなのだが、ツヴァイが陣取る場所に突っ込んでゆく彼らを密かに、気の毒だと彼らの未来を祈った。

副長であるツヴァイは、ある意味、残忍だ。

エースがこれくらいでいいか、と判断し、放置する事柄であつても、そのままにしておくとか船に乗る仲間に何かしらの危害が加わる可能性があつたならば、そつと入れ替わつて禍根を断ちに行く。

そうして今回、彼が考えて張つたトラップの種類は実に50を超えているようだった。

よくぞ30分でこれだけの罠を、最善だと思える場所へ配置し、それを有効に使えるまでに設置したと感嘆すら出る。

ビルカの方はきつと、大丈夫だろう。万が一内部にある町まで侵入されたとしても、ツヴァイが全て処理するに違いない。

ぱつと見、優男の外見だが、たつた一本の弓で首を狙い撃ちし、落とす技量を持っているのだ。任せても不安は、全く感じていなかった。

名を呼ばれ、アンは力を解放した。

いくら血液を分析してもどういう理由でそうなっているのかが全く分かつてはいない、海楼石成分を含む血による空間形成を行う。本人も海軍へ入隊するまで、保有している事実すら知らなかった。発見したのはDr.ベガバンクだ。”なにか”に使えるそうだと、何度も血を抜かれたのは、良い思い出と言えるのだろうか。

この力は能力者にのみ有効で、多くの人間に対しなんの意味も持たない。

海軍という多くの能力者と出会う可能性がある組織に所属してこそ、有効に使える力だ。海賊となったエースにくつついて来て以来、最小でしか使わなかったその力を、久しぶりに最大範囲で半透明の翼を広げる。

上空で能力をぶつけ合っていた両者は、特異な技能の不使用状態に陥り、弾力のある島雲の上へと降り立つ。

エネルは黙して居れば端正なその顔を歪め、舌打ちをした。なにをしたと聞いたとしても、きっと目の前の小僧は答ええないだろう。

そう判断する。

だが何が起こっているのかは把握した。

いつものように体を雷に変えようとしても、その現象が起きないのだ。

青海に能力者の力を封じる道具があると聞いた事があった。

それを使っているならば、それを破壊すればよい。

持っているのは対峙する男では無く、女のほうであろう。

エネルはエースに握られ、矛の一部を溶かされたその次には、手元に残っていた金を使い細みの剣を生成していた。それを振るい距離をとりながら着地する。

「神を不敬に扱った報いを受けるがよい」

エースは雷男がその台詞を言い終わる前に、駆け出していた。

わざわざ言い終わるのを待ち、正々堂々と戦うなどおかしな話だからだ。

低い体勢を保ちつつ走り込んだまま、相手のみぞおちに向かい拳を数度叩きつける。雷男の体はくの字に曲がり、エースは下段からの蹴りを顎に向かって振りあげた。だがエネルも黙って攻撃を受け

続けたりはしない。下りていた片腕を咄嗟に首下へと上げ、蹴りが喉元へ到達する前に受け切る。そうして剣を持っていた腕を斜めに薙いだ。

エースは慌てて体勢を、振っていた足に力を込め月歩を使い宙を蹴った。

後方に勢い良く引く体から、なびいた髪が一房、エネルの剣に散る。

「ほう、」

エネルは能力を封じられたのが自分だけでは無いと、片眉を跳ねた。

そのまま円を保つ。直線では無く揺らぐこの葉のように自由な曲線を描きながら、エースを雲際まで追い詰める。

剣の形状は細く平らだ。突剣といった方がしっくりくるだろう。

薄い唇を歪め最後のひとつきとばかりに力を込めるが、刃の先に炎は存在していなかった。

エースはアンが転移させた場所で、火炎をいくつも並べ、前方向に打ち出す。しかもそれは3連、連なつてだ。

アンも必死にその火の玉を避ける。どこのシューティングゲームだと思わんばかりの弾丸乱舞だった。これをなんと言っただろう。そう、弾幕だ。縦スクロールの画面で、敵弾を避けてもしくは無効化して出てくる、残機を無情にも次々に減らしてゆく敵に立ち向かうゲームだ。

閃いての使用だつたらしく、威力は均一では無い。ただ幾つかは雲間をつき抜け下に落ちたような気もする。

「ほう、」

その口元は面白そうに上がっている。

どうやって移動したのか、そして全ての場所で能力を使えないかと思いきや、力を具現化出来る地点も存在していると知れば、エネルは距離が開けば開くほど被弾確率が下がるその技を軽々とかわし、青を見上げた。

次にその目を細めながら見たのはもう一匹の子サルだった。

面白い能力を持っている。今進めている計画に組み込めば達成が早くなるかもしれない。目的が当初の予定より、早くに実現できるならば使すべきだ。

思考は早い。

「小僧、お前を這いつくばらせた後は、あの女を我が使つてやる」

くい、と唇についた汚れを指で拭えば、同等の条件であれば敗者になるはずがない、と言わんばかりの態度をエネルはとる。

「やれるもんなら、やってみろよ」

エースはその挑発に乗り、空から急降下した。

さて。

アンは視線だけでふたつの色を追いながら、この後どうしようかと考える。

背筋にぞくりと悪寒が走ったような気がしたのだが、あえて無視した。

アンにとってみれば、ここでエネルが倒されなくても別に構わなかった。冷酷だと言われるかもしれないが、ビルカに手を出されなければここで解放してしまっても良いのだ。スカイピアに住む住人達が、苦難の日々をこれからも続けなければならなくとも、だ。

支配される事に仕方の無いと抗いもせず、今を受け入れているのであれば、それに対してわざわざ手を出す謂れも無い。

ただエースとの対決で、どことなしかエネルを強化してしまっているような気はしていた。男達の対決は、なぜかそれぞれを、良し悪しは別として成長させる。それだけはなんとか、ゼロの状態に戻したいところではあった。

「…なんだかルフィの足跡が聞こえるんだよね」

未来という時間軸の先は不確実が多いのだが、この予感はあるような気がしてしまう。きっとルフィは仲間と共に、この空へくる

のだろう。

「まあ…ダメだったとしてもルフイに丸投げすればいいか」

決めれば早い。丸投げた。

強迫観念にも近い、月へ至りたいと言う私欲願望を叶えるため、利用されている人々には同情する。けれど被害者に甘んじているスカイピアの民には、もう少し苦難の中に身を置いていればいい、とも思えた。

英雄が現れて、なんの代償も無く救ってくれるのは、物語の中だけだ。

例え力があり、エネルギーという神を名乗る不屈き者を倒せる技量を持っていたとしても、振るうつもりは毛頭なかった。身にかかる火の粉は払っても、その日のこの元をなんとかするのは別の誰か、でありアンではないからだ。

今こうして対応しているのは、ビルカにちよっかいをこれ以上出させないため、に他ならない。

目的は欲をかず、一つに絞るべきでもある。

思えばエネルギーも可哀想な存在だった。

時代と世界が違えば、また別の生き方が出来ただろうに、とも思う。

人を惹きつける魅力を持ち、出会いを、関係を招くという福耳の持ち主でもある。

導く師がきちんとあり、今と違った途を歩んだとしたならきつと、神とは崇められないだろうが、人々から感謝される立場には立っていただろうと思える。

アンから見れば、今の雷男はどこぞの新興宗教のボス、にしか映らなかった。

人をひれ伏す力があっても、自分で神を名乗るのはどこの夢見る少年なのだろうか。

しかもエネルギーの元に集っている者達は、一枚岩でも無いらしい。

タットワのような愛情：と言っても良いモノかは分からないが、ひれ伏している者、その力に憧れ帰依している者、恐怖という精神の鎖により畏怖している者、そしてその力を利用している者、と様々だった。

あつて当たり前。

当たり前なのだろうが、なんとも世知辛い話でもある。

それに比べれば、エネルはまだ、方向性は斜め向いてどうしようも無いとはいえ、まっすぐなのだろう。

「ほんと、何をどうすれば丸く、なるのかな」

そんなもやもやとした感情に、雷男と対峙していたエースが溜息をついた。

よそ見している余裕に、エネルから剣の薙ぎが連続で仕掛けられる。エースはそれを上半身をそらせて避けた後、ブーツで剣を持つ手を蹴りあて腰を捻り、足払いをかけた。

受けて転倒するかと思いきや、雷男は足場の悪い島雲の上で両足を踏ん張り、耐える。

しかしエースは両の手で支えた体をもうひと回転させ、脇腹を膝を曲げ振り抜くと同時に踵をハンマーのように振り抜いた。大ふんぱつで鉄塊付き、だ。

「、かはっ」

エネルの眼球が白をむく。

ロギア

自然系の体を手に入れてから、痛みを感じない生活を送っていたからなのだろう。随分と苦痛に対して、弱かった。

東の海で炎の体となってしまう後、絶対に忘れてはならない感覚として、痛みを真っ先に挙げたアンには感謝せねばならないだろう。

（うし、エネル撃沈）

もうひとりの自分と言ってしまってもおかしくは無い半身が、ここまで感情を顕わにするのが珍しかった。それと同時に、一体何に對して心をざわめかせているのかと興味と不安が胸を絞める。双子として生まれたとはいえ、大概の事は秘密には出来ず、共に垂れ流しの状態だが、アンには幼い頃から立ち入れない扉を持っていた。鍵はかかつてはいない。だが開いても壁が見えるだけで、その先へは立ち入れなかった。

いつかそこに何があるのか、教えて貰えるのだろうか。

そんな事を考えながら拳を握れば、炎が揺れた。

「おっと」

エースは掌を振り紅を消す。いつの間にかアンが張ったドーナツツ型の力場から抜け出ていたようだ。

どうやったらそういう事が出来るようになるのか、アンは持てる力を存分に使い、悪魔の実の力を抑え込む領域を形成している。

「お疲れ様」と下からいつもの柔らかな感情を含んだ声が聞こえた。

とげとげしい気配より、いつもの穏やかな、それでいておらかな感情の方がアンらしい。傷が開かぬように、船医にぐるぐる巻きにされた白の片手が、大きく振りまわされている。

メラメラの実や、雷男が食べた悪魔の実よりも、えげつないと思うのは自分だけだろうか、エースは思いながら手を振り返した。

疲れた？

にこやかに迎えてくれたアンに、エースはがしがしと髪を掻く。なにをしようとしているのか。繋がる思考で解ってしまっていた。本当にそんな事が出来るのかと、多少の不審はあるのだが、アンはきつと出来るかもしれない。そう思えば不確かが面白いのだと笑われた。

「…ほどほどに、な」

「うん、分かってる。ほどほどに、ね」

本日何度目のほどほどかと、アンは唇を弧に描く。
そしてゆっくりとエネルギーへと近づいた。

半ば意識を失っている、自称、神様の耳元へ唇を寄せる。

とある本には語り始めが大切だと書かれていた。出来るだけはつきりとした言葉遣いを意識して話かける。

今日あった事は全て夢。

ビルカという国は、あなたが既に崩壊させあとかたも無く空に消えた。

生き残りなどいない。なぜならあなたが全て壊したから。

神兵たちが減ったのは、戦士たちの仕業。シャンディアの戦士たちにより、襲撃を受けた。

今日あった事は全て夢。

あなたに仕える神官は4人、タットワはあなたの心中だけにあるあなたの下僕。

目が醒めれば忘れてしまう。

眠りの中だけの存在。

神であるあなたに敵うものは居ない。

無敵ゆえ、神。

誰もがあなたを怯え、崇め、奉る。

不可能などありはしない。あなたは全能なる神、なのだから。

あった事は全て夢、うつつでは無く、夢よ。

「……ゆ……め……」

「そう、これは現に見る夢」

囁く声は温かさに満ちていた。母が子供に語りかけるような、優

しげな抑揚に、エネルギーは思わず耳を澄ませてしまった。

「ビル力という都市はもう、存在しない。声も聞こえない。そこにあるのはただの虚空」

あなたには見えない、聞こえない。幻の中にあるものなのだから。

人間は誰しも、消し去りたい記憶を持っているものだ。

幼い頃に遡るほど、後から聞けば身悶えしてしまうような、様々な話が飛び出してくる。特に自分より大人で、見守ってくれる立場にある人物が、そう言えばこんな事もあったよね。そう話し始めたら危険信号だ。両耳を塞いで終わるのを待つしかない。無理矢理止めさせても、後日、あの時の続き、となってしまう事が多い。

アンは自らを最強としていた自尊心を崩され、朦朧とした意識状態にあるエネルギーへ、暗示する言葉を伝えているだけに過ぎない。外界からの刺激や概念が締め出され、心そのものが真っ白になっている状態だと思えばいいだろう。

アンが知識と知っている催眠術、は正確な技では無かった。

見かじりの、似非ともいえる。

だからかかってくれるかどうかは、はっきり言って賭けだった。

効いてくれれば御の字で、もしだめだったとしても、何らかの形として精神に作用してくれれば、当分は攻めてくる事は無いだろうとも思う。

勝手に思っているだけなので、外れるかもしれないが、そうなったときはなんとか、して貰うしかないだろう。

エネルギーが座す椅子があるだろう場所へ、アンは男を跳ばした。現地に行った事が無い為、適当に転移させたが、あちらでなんとかしてくれるに違いない。柔らかなベットの上に優しく送れるほど、アンはスカイピアの立地を知らなかった。間接的に知った、神の社な

るソラマメの蔦のようなねじれた蔦の上にある島雲に上くらい、としたから、たぶん到着はしているだろう。
そしてふたりはビルカへと戻る。

待ち構えていたのはツヴァイだった。

両腕を組み、テンポよくリズムを刻む片足がなぜか怖い。

トラップマスターという称号を、短な時間帯で会得していた副船長に、アンは賞賛の拍手を送った。

「たった5つの罠で3人を仕留めたんだ」

「すげえな」

双子は興奮冷めやらぬビルカの人々から出迎えを受け、どういう風に侵入者を沈めたのかを教えられた。

しかし雲上での様子をエマから聞いていたらしく、敵の群れに飛び込んだふたりへ説教が開始される。船長であるエースと、その同腹であるあなた方を失えば、私達がどうなるか分かってやってますかと、ぐちぐち言い聞かされて30分が経過し、ようやく謝罪の言葉と引き換えに解放して貰えた。

お目付け役として着いてきたのに、意味が無いと言われ、物珍しさ故の随行では無かったのかと言えば、また怒られてしまう。

「まあともかく、効けば僥倖、そうでなくとも牽制にはなってる、いいかな」

アンは広場の椅子に座りながら、あくびをかみ殺す。

なにを最終的にやってきたのか、を住人達へ話していたのだ。

能力の使い過ぎは睡魔を呼ぶ。黄猿をはじめとする大将達や義祖父に鍛えられ、大分保つようになっていたが、今日ばかりは限界がきてしまったらしい。持ち得る殆どの力を全て出きった。

ウォーターセブンへ戻るのは明日でもいいかなあ。一日くらい、大丈夫だよな。アイスさん居るし、フランキーも生きてたし。会いに行きたいなあ。でもでもそうしたら、ルッチが気付きそう。意外とカリファも鋭いしな。あー、ココロさんとも飲む約束してるんだ

った。トムさんの事も話さなきゃ。

と睨みが自然と落ち、船を漕ぎながら考える。

後ろへ反りかえった体を支えたのはエースだった。空に浮いた手を掴み損ねたツヴァイが安堵の息を吐いた。突発性寝落ちではなかったが、双子は揃いも揃って心配をかけさせるのだ。それだけ周囲を認め、必要としてくれていたのだろうが、如何せんところ構わず意識を失うそれだけはいつも勘弁願いたかった。

「おっさん、寝かせられる場所、あったら貸してくれ」
いつも言葉遣いが間違っていると指摘する存在は、すやすやと夢の住人と化している。

間違っではないが、敬語になっていないと、副船長は苦笑した。独学で学んだとは思えないほど、ツヴァイの目から見ても、アンは礼儀をわきまえている。しかも船長から聞いた話によれば、生まれてからずっとそうなのだから、特異な素質でもあるのではないかと思ってしまう。

そもそも海賊に丁寧さを求める方がおかしい話なのだが、確立した道徳観念を持つアンという存在があるため、何となくではあるがスピード海賊団に所属する人員は、影響を受けている。酒場で飲み食いする時、いつもさせられているとはいえ、食べた食器をカウンセラーへ持っていくツワモノまで出ているくらいだ。

「こっち連れておいで」

エースは老婦人に呼ばれ、とある家のベットを借り、その姿を横たえた。

聞けばいつもここに来た時に、泊っていく家なのと言う。
不意にエースのハーフパンツがぐいっと引っ張られた。

「お兄ちゃんの炎…とても綺麗ね」

包帯の少女がその碧の目を見上げていた。

エマだ。

雷により発生した炎により全身の皮膚が焼けただれ、食事を作る

火ですら怖がつていたという少女が笑む。

「きて？」

エースは呼ばれるままに少女へついて行く。

そうすれば温かみのある木製の家具が置かれた一室へと入った。

少女の部屋なのだろう。

可愛らしい人形がベットのの上に幾つも置かれている。

「これ、お兄ちゃんにあげる」

差し出された物は赤の蓮玉だった。老夫人がドアから顔を覗かせれば、白々海でも滅多に獲る事が出来ない、大炎貝が育てる赤の珠だという。

少女の両親は、海に出て漁をする狩人だった。

「私のところにあるよりきつといい。これは星の色。空に瞬く、命の色」

お兄ちゃんを見たから、もう怖くない。

だからあげる。

背伸びをする少女に、エースは被っていたテングロンハットを脱ぎ、膝を折って首を下げた。

エマはありがとうと言いながら首飾りをエースの頭に通す。

「炎に強いから。お兄ちゃんが燃えてもきつと大丈夫、なの」

エースは首にかけられた赤珠に触れ、そしてくしゃくしゃと包帯から出る茶の髪を撫でる。

「くすぐつたい」

エースはその頭に、ぼすん、と帽子を乗せた。

「くれるの？」

「いいや、貸すだけだ」

「じゃあ、取り返してみて！」

声を上げて笑いながら走りだす少女に、なぜアンがここまで入れ

込むのか、なぜあちらを冷酷なまでに切り捨てるのか。ほんの少し
わかったような気がしながら、少女を追いかけ、その家を後にした。

65 - あわとしずく

赤い土の大陸間近にある、シャボンの島に辿り着いたのは、ウォー
ータセブンを出発して6日目の夜だった。繰り返される、耳に慣れ
たさざ波を聞きながら星を見上げていたエースもむくりと上半身を
起こす。甲板では船員達が錨を下ろし、帆をたたむためのロープを
引っ張ったり、マストに登った身軽な者達が手繰って折りたたみ、
それを固定化する作業をしていた。

「半分、か」

島を出てから長かったような、短かったような、複雑な気分だっ
た。振り返ればいつの間にか出来た仲間とここまで辿り着いている。
手のひらを握りしめ、開く。手に入れたいと願っていたものは、
着実に手の内に組み上がりつつある。だがそれが本当でないのも気
付いていた。

足りない。得ようと足掻くだけ、乾いてゆく。

無意識の舌打ちが小さく鳴る。

ニユース・クーが運ぶ新聞には、今年の新人、火拳が新世界に一
番乗りか、という記事も出ていた。今までの最短がこの記事を書い
た記者が知る限り双子岬周辺を出発点とし、9カ月だったというか
ら、2か月半近くも記録を塗り替えた、とあった。

別に騒がれるような事でも無い。順調な船旅が出来たのは、優秀
な船員が居てくれたこそだ。エースひとりだけではきつとうまくい
かなかっただろうし、例えアンだけが隣に居たとしても、もっと時
間がかかっていただろう。

「なあにひとりで黄昏てるのかな。おれなんかが居ても、なんて
口が裂けても言っちゃだめだよ」

ゆらりとランタンの灯が揺れ、最も慣れ親しんだ存在の声が降つ
てくる。

「…わかつてる」

エースは小さく言葉した。

ならいいんだけどね。

ことり、と音をたてランタンが床に置かれる。

そしていつものように背中合わせで座った。エースに、たまに発生するのだ。

小さな頃から胸の奥に抱える、生まれてきても良かったのか、という疑問が生んだ心の傷が、じくりと痛む。

子供は見ている。大人の行動や、その言葉を聞いている。

子供に言っても解らないと良く大人は言うが、意味は解らなくともどれが良い事なのか悪いことなのかくらいは見当がつくいた。

心ない言葉を叩きつけられ、感情に傷つけられる。

ダダンが本当の親ではないと知り、じゃあ自分の、本当の父と母はどういう人なのだろう。気にならないはずもない。

名は程なくして知る事が出来た。ダダンが話していたからだ。

どういう人なのだろう。

聞ける場所は限られていた。

どうして。なぜ。

問いかけを発し、言葉と共に周囲の環境を知り始める幼い頃の、苦い思い出が脳裏に流れた。

悪意に満ちた感情から逃れる術を知らず、次々と振り下ろされる刃に傷つけられてゆく。そしてそれが真実であるかのように、強迫観念にも似た思いに捕らわれる。

そうして辿り着いた疑問が、生まれてきても良かったのかな、だった。

断じて違う。

アンは言い切った。

少なくとも母は望んでくれていた。そして義祖父に生まれてくる

子供を頼む、そう託した父もそうだ。そしてアンも、共に生まれてきて良かったと思っている。特にルフィはエースが居ないなんて考えられねえとまっすぐに言い放つ。そしてどんな事があってもその手を離さない同盟をアンとがっちり組み固めていた。

エースは自己肯定感が低い。

自分は大切な人間だ。生きている価値がある。必要とされている。そういう気持ちがいずれに少ないのだ。

育った環境が環境だったから仕方が無いと言うつもりはなかった。共に育ったアンも世界にはわたしがなくて、生まれてきたのはなにかを成し遂げるためだと声高々に叫べはしない。たぶんあちら側という世界の記憶が無ければ、ふたり揃ってどん底まで落ちていたのだらう、とは思ふ。

思い出したくもない辛い記憶もあるが、ぎりぎりのところで命綱となつたのはもうひとつの世界だった。

育った場所は確かに、山賊達が暮らす山頂のアジトだった。

けれどそう悪くは無かったと、アンは思っている。

性格的に素直では無いダダンを補佐するように、ドグラとマグラが言葉を添えた。

確かに悪態が先に出るが、あれでいてダダンも心配性だったのだ。しかも以外に情にも厚い。

それはエースも分かっている。

こればかりはアンがどうこう出来る問題では無い。

側に居て、ひとりでは無いと行動で示す事が出来るが、耳を塞ぎ小さくしゃがみ込んでいる体を無理矢理引っ張り起こせはしないからだ。

ゆつくりと周囲との関係の中で、再構築して貰うほか、無かった。しかしエースはどんな人物にも一線を引いている。

近しい同円内にあるのは、ルフィとサボだけだ。

必要なものは分かっている。だがアンにはそれを補うだけの経

験が無かった。

アンではダメなのだ。エースにとってアンはどちらかと言えば、守るべき存在の部類に入っている。手を繋いで一緒に走っていてもエースの方が必ず、半歩前にあった。

そうではない。必要なのは、すくい上げてくれる誰か、の存在だった。

「みんなが気にしてるよ」

この船に乗る誰もが、エースという自分たちの命を預けた存在の、意気消沈した様子を見逃さない。放っておいて良い時と悪い時の区別をきちんと付けながらも、ここぞとばかりに船長を構い倒せる瞬間を狙っていた。

エースは少なくともこの船では、何事が起ころうとも中心にある。そんな美味しい時間を誰が見過ごすというのだろうか。

「おい、船長がまた変な事考えてっぞー」

「じゃ、ぱーつと宴だな」

「気分が落ち込んだ時は、騒ぐが一番だ」

さてみんなの行動は、と。

アンがそう思った時には、長テーブルが船室から運び出され、夜食にと作られていた料理が並び、残っていた酒樽が割られていた。

「補給出来るからいい…のかな」

視線の先にはツヴァイが黙認の頷きを返し、さくらが走って来ている。無表情の中にまじめさを分散したような、面白い顔をして全速力でエースに跳びつこうとしているようだ。

「まったく、うるせエなあ。静かに落ち込ませて貰えねエのかよ」
必死にこみ上げてくる笑みを肩を震わせ、我慢するもうひとりの自分に悪態をつながら、エースは眉を寄せ苦笑する。

フロリアン・トライアングル

魔の三角地帯を何事もなく抜けたスピード海賊団は、遊蛇海流や斬り鯨の群れに遭遇しながらも、無事辿り着く事が出来た。

到着後ほつと胸を撫で下ろしたのは、ツヴァイだけでは無い。

シャボンディ諸島近くでは、人狩りを行う奴隷船が数多く出ており、長時間に渡り気を張り詰めたままだったからだ。

約2名、不完全燃焼で納得がいかない顔をした人物達がいるが、ツヴァイは副船長として船員の命を優先した。

無理無茶無謀はいつもの事だ。

どんなに滅茶苦茶な要求がこようと、判断が間違つてはいないと思えるならば補佐する。

しかし、だ。

もうすぐ新世界だと思えば、乗組員達の気持ちも浮どこかついてしまうものだ。そういう時に引き締めなければ、なにかがあった時に取り返しの着かない事、が起る可能性もあった。

だからこそ、ツヴァイは苦言をあえて提言し続けた。

それでも霧地帯ではいつ”お化け島”と遭遇しても構わないように、アンがわくわくと待ちかまえていたのは言うまでもない。海水をどうやって切り取って城内に流し込むかを、仮想演習していたくらいだ。

一帯を何事も無く通過してしまった時の顔は、なんとも言えない。そういう表情も出来るのかというくらい、渋く、影を背負った老年の、凄みのある表情をしていた。そして無言のまま、終ぞ出会う事無く突っ切ってしまった海域へ舵を切りなおし、霧の中に再度突っ込もうとした。彼女を乗組員一同で、必死に止める様子は簡単に想像出来るだろう。

前半の終わりを告げる、赤い土の大陸を誰もが感慨深げに見上げる。

ツヴァイですらも今までの航海の中で、一番疲れた日々だったかもしれない。そう思えた。

そういう経緯を経て今。

ようやく一息つける状態になっている今、船員達が船長たちと親交を深めようと突撃してゆく機会を、止めはしなかった。

少しは実感として貰えたならば、と願う。

あなた達の存在無くては、もう私たちは立ち行かない、そんな所にまできているのだという事実を。

とくと思いい知るといい。

一味は随分と陽気に騒いだ後、就寝時間を知らせる消灯と共に、ぴたりと静寂の中に沈んだ。構い倒していた船長が寝落ちたからだ。月が細く、細かな星屑が満ちる空の下で、アンは見張り台の上に登り瞳を閉じる。

最初はふたりだった。両親は居なかったが、義祖父やダダン達に育てられた幼少の頃。小さなふたりだけで作っていた世界にサボが現れ、ルフィが加わる。もちろん、盗賊のみんなをはじめ、義祖父や村長、マキノ、村人達も見守ってくれていた。

思い返せばいろいろと、そう、語り尽くせないほど、いろいろあった。

濃い人生を歩んでいる、と我ながら思う。

5歳という低年齢で不確かな物の終着駅グレイターミナルに出入りし始め、11歳で海軍へ。17になってからは海賊船に乗っている。

「ホントに」

忙しかった。

自分の願いを叶えるためとはいえ、ここまで必死に物事をするのは初めてだ。

「…未来を、変えてみせる」
絶対に。

静かな波にたゆたう船で一夜を明かした翌日は、打ち合わせしていた通り、先発散策組と後発居残り組に分かれてシャボンディに降り立った。

「出来るだけ大人しく、ね。無法地帯って言われてるのはここからここまで、海兵がうるついているのはこちら辺で、遊園地とかは大丈夫かな。ただ世界貴族が買い物に来てるかもしれないから気を付けて」

全ての船員が集う、朝食争奪戦が繰り広げられる甲板でアンは叫んだ。

今日の朝食は掴みやすい細長のパンに切りこみを入れ、野菜や肉を挟んで食べるサンドイッチバイキングだ。自分の好きな具を詰め込む、この状態の時間が一番慌ただしい。アンは運ばれてくる前に食堂へ寄り、自分とさくらの分を先に確保している。そうでもしなければ、きれいサッパリ、皿の上に何も残らないからだ。パン屋に行つて買つてきた、120本のパンが、食事の片づけが始まる30分後には跡形もなくなっている事だろう。

「ちゃんと見ておいてね、特に先発組はしつかりと！」

この船のみんなは、実は聞いていないようで聞いていて、真剣に聞いていそうな時に限って聞いて無かつたりするから判断が難しい。真っ白な紙に手書きで描いた、8区域に分かれる島の概要を、船内への入り口へピンで止める。

アンはこの島を庭と言つていいほど細部まで知っていた。どこら辺が賞金稼ぎの巣になっているのか、海兵が好んで海賊を追い詰める場所はどこなのか。人攫いがどこどこに商品を隠しているのか、も大体把握していた。大きく育った根の空間は、良い隠れ場所でもある。下から洞窟のように潜り抜ける道も、何本か実際に使った事があつた。

シャボンディ諸島は新世界を目指す海賊にとって、前半の海最後の拠点だ。

ここで最終積み込みし、コーティングという船全体をこの島で産出されるシャボン成分を使って膜を張り、海底へと潜る。

面白い事に海賊達には暗黙の不文律があつた。シャボンディでは

”出来るだけ騒ぎを起こさず、この島の内部に居る限りは不可侵を通す”がどの年代、新人玄人等の区別無く、取り決めとされていた。どんなに因縁が深くとも、偉大なる航路（グランドライン）の折り返し地点まで至ったのだ。こんな所で潰しあっても、海軍が喜ぶだけとなる。それならば取り決め通り、新世界に入ってからまた、雌雄を決すれば良い。そうしてそれぞれが牙と爪を研ぎつつ、シャボンディに辿り着いた好敵手同士、牽制し合う。

今朝ニュース・クーが届けた朝刊には、スピード海賊団の記事が大きく出ていた。

『大物新人、火拳のエース率いるスピード海賊団の船が忽然と姿を消し3日、既にシャボンディに到着しているのか、はたまた魔の三角地帯に捕らわれているのか』とある。

新人（ルキ）として手配されているのは今のところ、エースと副船長のツヴァイのみだが、前半の海を怒涛の速さで駆け抜けている理由など、特集が組まれた事もあるくらい注目されているようだ。

中でも王下七武海を蹴ったと言う記事が色付き（カラー）で出た時が、一番襲撃が多かっただろうか。海軍だけでは無く賞金稼ぎ、同職の海賊までがこぞって名を挙げるために大挙してきた。

そう言えば、とアンは思う。確か自分にも懸賞金が掛けられていたはずだが、この所、新聞には挟まれなくなっている。自分自身で見ると恥ずかしいのだが、時折帰るフーシャ村では何よりの頼りだと喜ばれていた。村長からは小言をたくさん貰うが、それだけ身を案じてくれているのだろう。

スピード海賊団は潤沢な資金源を保持していた為、無益な略奪や殺戮は必要としなかった。時には海流を使って回避し、しつこい船は炎に巻いたりなどしながら、ほどほどの戦果を示し海戦の経験値を積み、シャボンディへと辿り着いた。

懸賞金もまあまあ、の額だ。

一番ではないが、ルフィはきつと、兄の手配書を見て喜んでいる

に違いない。

ここで今までの日々を水の泡にしない為にも、絶対に騒ぎを起こさない事、を船員達に徹底させる。

「世界貴族に手を出したら、大将が出張って来る。絶対にダメだからね」

エースやわたしでも、大将と対決すれば無傷では済まないと言いつつも、どれくらい自分の力量が上がったのか、試してみたい気もしていた。が、これは内緒だ。

娯楽施設だけでは無く、東の海から航海してきた多くの船員達にとっては、壁向こうの珍しい品々を扱う店舗もある。ウォーターセブンからそんなに日数は経ってはいないが、貴族達も寄ると言う華を売る高級館もここにはあった。見る物、触る物、何もかもが目を楽しませるだろう。

ただ一点、世界貴族に関してを除くならば。

口でいくら注意を促しても、世界貴族がこの島の住人に行う非道な仕打ちを見て、拳を握りながらも我慢できるのは果たして何名いるだろうか、アンは思う。

エースはきつと大丈夫。

いくら頭に血が昇っても、表沙汰になること、はしないと確信めいた思いがあった。

故郷のドーン島でも、あったからだ。壁によって隔てられた内側と外側が生む差別、それがここに、形を変えて存在していると知っている。

この島の現状を心得ているアンは、口を酸っぱくして何度も言い聞かせる。

赤い土の大陸を超えて新世界へ向かう為には、ここシャボンディ諸島で海中を進むためのコーティングをして貰わねばならない。

海兵時代は聖地を経由し、あちら側にあるG1基地にある船に乗り換えて新世界で任務についていたが、海賊であるスピードの面々が聖地横を通過できる訳もない。それに折角アイスバーグが特別仕様に設えてくれた船をここにおいて行く訳にはいかなかった。向こう側に居る、師匠に今の自分を見て貰いたい。そう願っての手入れだったからだ。

いつでも暇を作ってくれたら、連れていくよと言ってはいるのだが、

「ンマー、突然現れておいて良く言う」

そう言っついても断られている。市長は意外に、忙しいのだそうだ。

海兵時代にも同じことを伝えていたはずだが、答えは同じだったような気がして笑ってしまった。積もる所、会いたいけれど会えない、片思いの恋愛をしているようなものなのだ。独り立ちした造船技師が、師匠であるとはいえ会えばどうなるか。想像は容易い。世界政府から目をつけられている自分が、トムに会ってしまえばどうなるのか、も原因だろう。彼らの目的は設計図であって当人ではない。とはいえトムはプルトンの設計図を基礎にして海列車を作っている。詳細を知る存在は、確かに狙われる危険性も高いといえるだろう。

だからアイスバーグは様々な想いを込めて、船に手を入れたとアンは気付いていた。それとなく自分が手がけたのだという形跡を残している。トムもきつと船に施された仕事を見れば、わざわざ口頭で伝えなくとも、アイスバーグが行ったものだと分かる。

ここに想いが込められた船を置いて行くなどは論外だった。

スピード海賊団は、この海駆ける蹄に乗って新世界へ至る。

アンは後発組に出来るだけ早くコーティング職人に来て貰うから、

気は逸るだろうが我慢するように言い、その姿を空に浮かせる。最近では船番組に必ずさくらが陣取るようになっていた。副船長であるツヴァイはエースのお守りで着いて行くことが多い為、居残り組にアンとさくらが配置される。

どうしてもアンが船を離れなければならない時は、さくらを囲みながら船員達があたかも、ボディーガードのように守るのだ。最近のさくらは船員達のマスコットと化している。

男でも女でもない、性別を持つ存在は、どうやらその顔だちと性格のお陰で多くの人物に対し保護欲を刺激するらしい。

使えるものは使わないと損だと、教えたのがいけなかったのか。さくらもその日の気分で、衣類を替え、日々を楽しんでいるようではある。

ヤルキマンマングローブ木の根が陸地を形成するその上を往く。エースを初めとした先発隊に手を振ってから、アンは器用にシャボンの上を跳ねた。

その姿はふたつ名が示す通り、軽やかに空を舞っているように見える。

地面から浮かび上がるシャボンは、島を形成するマングローブの根から分泌される樹液だ。島を形成する特殊な環境が、幻想的なシャボンがふわりと空に浮く景色を作りだしている。

弾力性に富んだシャボンには乗る事や、中に入る事が出来た。

ただ空高くに覆い茂る枝葉より上ではシャボンが形を保っていない。パン、と割れて空に散ってしまう。

アンの姿を見て、幾人かが自分も、と挑戦してみる。

確かに乗る事は出来た。だがシャボンは円形をしており、すぐに体重のかけ方によって傾斜を変え、下へ落ちてしまう。

「おもしれエ！」

コツを掴み、乗ったのはエースだけだ。

テンガロンハットに手を添え、次々と上へと登ってゆく。

どこまでいけるのか試してみれば、緑の葉が途切れ、青の空が見えた辺りで、シャボンがどんどんと割れた。落下しつつ次の足場へと跳び、陸地へと降り立つ。

にこやかに笑んだ顔は堪能した証だ。

「よし、行こうぜ。なあ、ツヴァイ。まずはどこに遊びに行く？」
アンが描いた地図を手に使っていた副船長に問いかけながら、エースは歩きはじめる。

アンがまず手始めに向かったのは、海軍本部の駐屯地がある地区だった。ロブ・ルッチから面白い話を、また共に仕事をする機会があるかもしれない、と聞いたからだ。その真相をまずは確かめに行く。

海兵になった初年度からこの島には何度も訪れていた。正義のコードを肩にかけていた時は、誰もが親しげに声をかけて来たものだが、ほんの少し印象を変えるだけでこうも気付かれないものだと内心、吃驚する程だ。

（はいはい、エース、ボンチャリは買わない。この島を出たらほぼ使い物にならないんだから。使えて魚人島位だけれど、長期滞在はしないんでしょう？）

面白いものには目が無い半身に、苦笑しながらもかつて歩いた道を迷いなく進んでゆく。時折海兵が通りすぎるが、本部所属の精鋭達も気付かずにアンの横をすれ違った。

少しは気付いて欲しかったなあという寂しさと、案外気付かないものなのだという密かな優越というふたつの気持ち、感情の天秤を揺れ動かしながら、その場所へと到着した。

スピード海賊団が船舶を係留したのが、48番GR。観光地とされているが比較的閑静な住宅街が広がる地区だ。そこから50番台

を抜け、60へと至る。エース達一行は中央を抜け30番台に移動し、シャボンディパークでいろいろと楽しんでいるようだった。

観覧車やジェットコースター、話にだけ聞いていた乗りモノがここにはある。

試し乗りしたいと飛びつくのも分かった。

「こんにちは、お邪魔します」

駐屯地にでてくるとおくび無く、普通に入って行けば、誰に止められずに中まで入れてしまった。

「……これはこれで、警備が問題視されそうな気がするんだけど」

アンは周囲を観察しながらゆっくりと奥へと進む。その口元には笑みがあつた。

実は思い付きをためしていた、のだ。

そもそも見聞色、とは相手の気配を感じ取り、思考を先読みや相手の位置確認が出来る。普段は聞こえない心の声、を身近に聞きとる能力ともいえるだろう。

ならば反対に、己が発する垂れ流しの声を出来るだけ小さくし、可能であれば完全沈黙させればどうなるのだろう。と思った訳だ。船で試した時には、エースによってことごとく邪魔されたため、思うような実験が出来なかった。

ここ駐屯地であれば、思う存分、能力を使っても誰に止められる事もない。

そうして得た結果は、良好だった。

駐屯地の長は1年から2年が最長、早ければ半年ほどで入れ替わる。配属されている海兵達は3カ月を過ぎた頃、ある一定人数づつ、交代要員がやってくるという仕組みだ。

他の駐屯地、例えば東の海で偉大なる航路の入り口にある、ローグタウンでは最低3年はその地へ縛られる。理由として挙げられる

のは、余りにも短すぎれば統率する本部が慌ただしく、またその地で一定期間留まる事によって強まる各支部との繋がりを重視したからだ。その反面、癒着も生まれるがそこはそこ、おつるによって組まれた特別チームが毎年、抜き打ちを行っている為、以前よりはましにはなっていた。

それは全世界各地にある総支部と、各駐屯地の中から10か所、ランダムに決められる。

派遣されるチームも、どの方向へ向かうかは教えられるが、ここに行くかは到着するまでは知らないと言う徹底ぶりだ。しかも本隊では無いと見せかけた、分隊が実は、監査の本元だという面白い展開となる場合もあった。用意の時間を与えず、寝込みを襲うかの如く、襲来する。

東の海では賄賂によって見逃されている幾つかの支部を見つけていた。

機会があれば、もしマリンフォードに再び行く事が出来たならば、こっそりとおつるへその旨を伝えてもいいかもしれない。

アンは来る途中に拾っておいた、幾つかの小石をポケットから手のひらに握りしめた。目の前には、海軍本部シャボンディ諸島駐屯地司令室がある。

中にはたったひとりしかない。

ちよつとした悪戯だった。小石に意識を集中し、中に居る人物の頭上へと転移させる。すると小石は重力に従って、その人物へと落下するだろう。

本当にちよつとしたお遊びだった。

しかし、石を丁度、相手の頭上に具現化させたところで、扉の向こうから何かが飛んで来るのを察知する。片腕を支点に、ころりと前屈すれば次の瞬間、扉が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「うわあ……」

アンは目をぱちくりと開き、余りの惨状に声を出してしまった。蝶番まで見事に、おれまがつている。

中に居る人物は、よく知っていた。これくらいの悪戯では、うんともすんとも動かないだろうはずの、温和な人物なはずだ。

シャボンディに駐屯している間に、ストレスで性格が少しばかり凶暴になっている、とか、だろうか。

アンはそんな事を思いながらそつと、ドアの向こう側を覗きこんでみる。

「一体何を遊んでいる」

降ってきた声は、紛れも無く頭上からだ。

「モモンガ中将、お久しぶりです」

アンは以前は無かった目の下のくまを発見する。真上を見上げていた首に手をあててにつこりとほほ笑んだ。

見聞色を怠った訳ではない。

しかし余り機嫌の良く無い視線を刺してくる中将の顔は、記憶の中にあるものとは違っていた。

「お疲れ、ですねえ」

「誰かさんの尻拭いでな」

隠さない感情に、さつくりとアンは貫かれた。

その後肩たたきをしながら、半年前から現在に至るまでの経緯を聞くこととなる。

ぶつちやけると、中将の愚痴だらけだった。

ここに在籍している誰もが過度のストレスを抱えている為、最高責任者が酒を飲みながら愚痴をこぼすなど、出来る雰囲気でもないらしい。

中将が抱える一番のストレスは、『家に帰れない事』だ。

本部からシャボンディまで高速船を使えば数時間の距離なのだが、休暇であってもこの島から出る事が出来ないのだと言う。

モモンガ中将は、愛妻家で有名だ。その中将が、半年も家に帰れ

ずここ、シャボンディに縛り付けられている。細君が時折、子供達を連れてやってくるらしいのだが、買い物へ出かける時など、気が気ではないと言った。

「…確かに綺麗な方、ですもんね」

「天竜人が来ている日などは何度、肝が冷えたことか」

中将の言に、声がかすれる。

ちなみに昨日まで世界貴族が滞在していたらしく、まったく仮家にすら、この駐屯所から帰れなかったのだそう。

話は進み、アンに対する世界政府の方針が語られた。

はつきりと言って、にわかには信じられなかった。なぜなら条件が余りにも良すぎたからだ。裏にある真意を、はかりかねた。

無いわけが無い。有って普通なのだ。無いなど、天地がひっくり返る前触れかと訝しんでしまう。

あり得ない。

交渉手の読み合いにおいて、五老星はアンの何枚も上をゆく老獠ろうかい達である。

「いや、深く読みすぎ、なのかな。でもなあ、あの人達が搦め手をしてこない訳が無いし」

とりあえずは現政府に対し、アンは敵対しない、という態度をとった。

それに対して報いた、のだろう。

と、しておく。

全てを信じる事は出来ないが、こちら側からちよっかいを出さなければ、向こうからも余計な手出しはしてこない。という意思表示なのだろう。これぞまさしくスーパの冷めない距離、というやつだ。ただアンが思うに、上手に立ち位置を修正されたな、とは思えた。海賊船に乗ってはいるが海軍に所属している。

だが七武海ではない。政府の狗として飼われている立場で無いが、

政府の機関に堂々と入れる権限を付与されていた。

「一体お前は何者なのだと聞く者がいたとしたならば、なんと答えるのが適当だろうか。」

ともかく、五老星はアンの条件を飲んだ。

今やアンに唯一、命令を下す事の出来る人物は政府内だけでは無く、加盟国の王達にもその名を轟かせは始めている。

公式では未だに海軍所属であるため、式典や何らかの護衛任務には必ず、呼ばれるだろう。

その時に世界政府が、排除すべき側にも含まれている自身、をどのように説明するのが楽しみにも思える。

「アン、2日ほどこの椅子に座ってみないか」

そこをもう少し強めに、という注文を受けながらアンは丁重にお断りする。

意図はみえみえ、だ。

「随分と治安が良くなっているじゃないですか。さすが中将、目の光らせどころが違うんですね。わたしなんかが座るには、荷が重すぎます」

そう模範解答するアンに、モモンガは鼻で笑った。

「抜かせ…この町に限るならば、天竜人と同等の扱いを受けているお前に言われたくはないわ」

固く張った肩をほぐしながらアンが眉を八の字にして苦笑すれば、首元に巻かれた天然石が小さく音を立てる。

どういう手回しがされているのか、半年とはいえ海賊船に乗っていたアンには解らないが、ポートガス・D・アンの名は、まだ海軍名簿に載っているのだという。

しかも階級が中将（仮）となっているのだそうだ。

「センゴクおじさんってば、未だにおじいちゃんとわたしを入れ

替える気、満々ってことですよな」

「そうだろうな。实力的もこの半年で随分と伸ばしていると聞いている」

監視船が時折遠くからこちらを見ているなあとか、立ち寄った町で視線をいっぱい感じるなあという事が多々あったのだが、その全てが海軍ないし、CPだったと言う事、なのだろう。

「お前に掛けられている懸賞金に関してだがな……」

継続はされているらしい。だが手を出してくる事は、まず無いだろう、とのこと。

喧嘩を売るか否かは、それぞれの艦を指揮する長が取り決める事になっている。

だがガープをはじめ、3名の大將と、その息がかかっている将校に関しては、アンの身に限っては手を出すべからずという暗黙の了解が取り交わされている、らしい。

「サカズキ大將が発起人だ、と聞くと意外かな」

「反対に納得、しちゃいます」

どこまでも甘い。

あの強面の顔が、優しげに笑むのをアンは知っている。だから同時にくすぐったかった。そして、苦しかった。

「だがな、アン。お前が乗る船は別だぞ」

モモンガが引き出しを開け、取り出した手配書には、良く知る面々が数名ずらりと並んでいた。

「豪華、ですね」

「まったく。お前の事だから知らずに乗せたわけではないだろうが」

いえ、知りませんでした。

などとは言えない仲間の顔に、愛想笑いでなんとか誤魔化す。

「あ、でも中将。わたしが矢面に出た場合は…」

どうなるのかと言葉を続ける前に、それ以上は言ってくれなというモモンガの気配に、アンは黙って肩のしこりを押した。

66 - その男、その女

彼の名は様々な本に載るくらい、有名だった。

しかし彼の行方はぷつりと途絶えて久しく、生きているのかそれとも死んでいるのか、多岐にわたる推測がなされている。

あの人は今、という記者達がかつて話題に登ったこのとある有名な人の今を追いかける人気番組があるのだが、彼はその番組内でも人の目が一番集まる、最初に取り上げられているくらい、ゴールド・ロジャーばりに露出し続けていた。

なぜならば彼、の所業は海賊王と並んで遜色の無いほど、罪状まみれであるからだ。

最も、罪としたのは秩序を制定する世界政府であり、中には、これは違うだろう、そう思えるものも、多くあった。

例えば食い逃げ、とか。

エースやルフィ、父なら分かる。だが彼、がするだろうか。と、思っ訳だ。

海軍内情報でもシャボンディでは何度か、彼、が目撃されている。この諸島に隠れがあるのだとか、愛人を囲っているのだとか。住居があるとも噂されていたが、真実であるかどうかを確認する前に彼は、開閉やCPを煙に巻いてしまっていた。だからだろう、”本人である訳が無い”、と見かけた海兵が報告書を出さなかったり、上にあがっても途中で自然消滅してセンゴク元帥まで行き着かないのが常だが、アンは知っている。

消滅させているのは義祖父であり。

目撃されている人物は彼、本人である、と。

シルバース・レイリー。

冥王というふたつ名を持つ剣聖の名だ。

かつて偉大なる航路を制覇したゴール・D・ロジャーの腹心でもあり、新世界の四皇として名を馳せる赤髪ことシャンクスの師匠でもある。

直接の面識は無かったが、幾度となく見聞色という力を介してすれ違った事はあった。夢の中でも一度、一方的ではあるが出会ってはいる。

どういふ人物であるのかを語るには、人から聞いたものでしかないが、船長が好き勝手出来ていたのは、その人物がいたからだだったとか、伝説を作るものならたった2つとは言わず4つ、5つくらいは可能であつただろう、だとか、以外に茶目つ気が強いが大概のわがままには付き合ってくれた悪友だとか。

とりあえず聞いた話から推測するに、彼は思慮深い頭脳明晰、引き際をしっかりと見極められるタイプであり、なおかつその剣の腕は赤髪が師事するほど鮮やか。で大体は合っているはずだ。なにせあの、何をしでかすのか予想もつかない行動を起こす、父の手綱をとっていたというのだから、どういふ人物であるのかを想像するには容易い、ような気もした。

例にたとえるならば、シャンクスとベックマンという良い見本があるからだ。

アンは60番台から50番台に戻り、造船所とコーティング職人たちが軒を連ねる一角へと出た。コーティング、とは海中へ船で下れるようにヤルキマンマングローブの樹脂を加工した弾力を持つ液体を何十も重ね、空気を内包できるように膜を張る作業を指す。

人間は魚人達のように、水中を自由に泳ぐ事が出来ない。その為に水中を往く技術を手にした。元々は魚人島にある昔からの技法が基なのだが、それを知る職人たちが果たしているのかどうか。船に膜を張れ、海中に潜れるという事象そのものがアンにとってはオーパーツ足り得る。

一部の者らが追い求める過去も、夢という手段を情報を流しこま

れるが故に知っているだけなのだ。知ろうと過去を文献で遡ったとしても、果たしてそこまで探しつけるかどうかは解らない。デイハルドの邸宅にある、過去の遺物を満載した本棚を閲覧できる機会があれば、話は別だが。

コーティングやがこんなに軒を連ねていたとしても、片手ほど居れば多いと言えるだろう。

モモンガから教えて貰ったコーティング屋にも道すがら、寄ってみるが順番待ちが発生していた。政府、主に天竜人が使う船のコーティングを行っている工房だ。周囲にはまさしく技術屋であるという恰好をした者達が行き来している。確かな腕でなければ、指定を受ける事は出来ない。だが待ちは出来るだけ遠慮したいのが本音だ。アンは仕事の処理していた職人のひとりに感謝を伝え、道へと戻る。

実のところアンもまだ、魚人島へは一度も入った事が無かった。

ジンベエから招待を受けた事、はあったのだが、来年にはエースと共に新世界にどうせ行く事になるのだからと、楽しみを後に残す為にお断りしていたのだ。

しかも魚人島は白ひげと協定を結んでいる町でもある。興味はあるのだが、海兵が訪れ、いらぬ騒ぎを起こすのも癪しやくだった。

休暇や娯楽として赴くにしても、潜る船の7割ほどが沈むと言われている。

自分だけならともかく、多くの人を巻き込んでわざわざ死地へ突っ込ませるなど出来るはずもない。

海の藻屑となる説明は簡単だ。

いくつか原因はあるものの、大きく分けて3つに分類されるだろう。

ひとつはコーティング職人の腕が悪い場合、だ。船全体をまんべんなく、均一に膜を塗布する技術が無ければ、到達するまでに水圧に負け割れてしまい、そのまま溺れ絶命する。

ふたつめは回遊する海の生物たちに襲われる場合、だ。赤い土の大陸に近く、深海1万メートルにまで根を伸ばす陽樹イブの恩恵であるのか、海底には大型の海王類が、凧地帯に匹敵するほど生息していた。どちらの方が種が多いのかと比べられないほど、多種多様の海洋生物を見る事が出来る。

そしてみつめ、青の海を自由に、鳥のごとく泳ぎ回る魚人によって沈められるか、だ。何も海賊とは、人間だけの特権では無い。魚人も徒党を組み、人間を襲って生活の糧を得ていた。特にここシヤボンディに残る人身売買や島を訪れる人間によって魚人達に余り良い印象を与えてはいない。むしろ人間という種、自体が疎稀にいる可能性の方が高いと言えるだろう。

ただ全てが敵では無かった。白ひげ海賊団が魚人島を庇護した影響や、海の民とも言える魚人、人魚を束ねる王族が、人間全てを魚人の仇としている訳ではない事。そう流布してくれているおかげで、表立った怨恨が今のところ、ばつばつとしか出て来ては居ないのが幸いといえるだろう。

同じ命であればこそ、争いを止め、融和を目指すべきだ。
それは理想だった。

あちらの世界でも肌の色が違い、言語が違い、宗教が違えば紛争の火種となる。

過去を受け継がないと、例えそれが彼女の、海が伝える記憶だとしても、多くの魚人達が今までの仕打ちに対し、人を許せるかと問えばどうという答えが返ってくるか。

してきた側はそれをただやめるだけでいい。思いを、行動を改め、二度と同じ事を繰り返さないと、次の世代に教示すればいいだけだ。だがされてきた側は、してきた側より心の奥底にある感情が暗い。すぐに、はいそうですかと、手を取り合って笑える訳ではないのだ。もう本当に分け隔てられないのか、権利を認められるのか。

じつと、してきた側を見る。そうしてされてきた年数と同じ、それ以上となつてからやつと、差別が無くなったのだと思つて貰えるのだ。

そしてそこから、今後をようやく対話できる関係となれる。

通りには人の波が出来ていた。

この島に観光で来ている団体さんや、アン達のようにこれから海中に潜るための下準備にかかるうとする者、そしてこの界限を狩場とする賞金稼ぎ達が入り混ざっている。時折見える白の海兵服は、警邏^{けいろう}だろう。町として保安に当たる組織もあるが、主な勤務地は30から40にかけてのグロープに限られている。限定される理由は明確だ。普通の人間であれば対処可能だが、それ以外の、特に治外法権によつて好き勝手権を振るう存在や、法など基から守る義務を放棄したならず者たちに数で押したとしても敵う訳がない。それならば最初から対応出来る海軍に任せた方が得策だとして、海兵がこの島に限つて特別な優遇が成されている。ただ治外法権に関しては、海兵でもごく稀な人物を除いては、海兵もその言に従わなければならなかった。

賑やかな通りをアンはてくてくと歩く。

聞こえてくるのは職人たちが請け負つた船に技術を振るう会話や、値切り交渉を行う活気づいたやり取りの声。あとは美味しそうな賞金がかかった首を探す賞金稼ぎ達のぎらぎらとした視線くらいだろうか。

この諸島、シャボンディで船にコーティングを施さねばならないのは、魚人島へ向かう為の最低限の装備だ。それ無く海の底には至る事は出来ないし、未熟者に行程させれば途中で割れてしまう可能性も高い。店と職人の選択を任されたアンの肩には、船の命運が乗せられていると言っても過言ではなかった。良い腕を持つ職人を見つけ、船員の命を守ると言う大切な役を担う立場にある。

言うなれば、命を預けるに足りる信頼できる職人の選定、重要な選択を任されている、ということだ。

政府関係者や真つ当な商売をしている者であれば、安全に新世界へ入るため、聖地の横を通り抜ける方法を取る。しかし聖地の横を通るには多額の通行料が掛かり、ある程度のコネと資金が無ければ通ることが難しい。

「確かここら辺のはずなんだけれど……」

アンはもうひとつ、聞いた記憶を頼りに、辻を横切り細い路地から再び大きな通りへと抜け出る。そこは個人商店が並ぶ通りだった。どちらに進もうかと左右を見回す。

視線の先にある店は、先ほど通っていた職人通り、というよりは、その職人たちが使う道具や素材を扱う問屋街が続いている。

聞いた道筋はあっているはずだ。

もうひとつの伝手は工房では無く、材料を扱う店が並ぶ通りで、白髪、眼鏡、酒飲みのも3拍子が揃った老人を探せと言われていた。そういう格好の人物は至る所に居り、見分けがつかぬのかと聞けば、絶対に解るから、そう言われている。だが出会えるかどうかははっきりと運らしい。

海兵を辞める前にちよつとした所用もあつて、レッドフォースに寄った時にシャンクスが教えてくれたのだ。その人物であれば、海の中の旅へ向かうに当たって、命を預けるに足りる、と。

「……とはいえ出会えるかどうか分からない人を探す、というのもなかなか……」

骨が折れるとひとりごちたその時、ぱちりと視線が合った。

偶然合わせたのではない。それこそ必然と言わんばかりの邂逅だった。

その男はゆつたりと着こなした長のシャツを纏い、後方に掻き上げ流れるままに落ちる白の髪を持っていた。そして自然体であるのにも関わらず眼鏡の奥にある油断のならない眼光を受け、アンは蛇に睨まれた蛙のように竦みかける。

…これごときで。

視線を合わせた瞬間に世界が彼が持つ色へと変色したのを認識する。

周囲を巻き込まず、意中の人物だけをピンポイントで狙う難易度の高い使用方法だ。耐性が無ければ、対象に選ばれた瞬間に意識を刈り取られてしまう力でもある。

そこから抜け出るやり方はシャunksから、相手に吞まれてもそこから脱する方法を、身を以って嫌というほど躡けられていた。それはもうエースとふたりがかりで必死にならざるを得ない手段で、だ。物分かりの悪いふたりにこれで習得出来ないならば、約束通り美味しく料理させてもらう、とそれはもう今から思い出しても背に冷汗が流れるくらいの状況で身に叩きこまれた。だからアンは相手に奪われた主導権を手に握り返す。負ければお仕置きだからだ。それだけはなんとしてでも、回避しなければならぬ。

相手が支配する領域を、払拭すれば、風船がぱん、と割れるように元の、喧騒が戻ってきた。

「及第点をやりたいところだが、まだまだ、だな」

また来る、そう店主に言い置いて出てきた男をアンは見上げる。

「あなたが、シル…っ」

アンが唇を動かそうとした刹那、男の指が言葉の続きを止めた。

「その名を安易に呼んでくれるな。この島じゃ、コーティング屋の”レイさん”で通っている」

こくこくと首を縦に振り、了解の意を伝える。

直接顔を合わすのはこれがお互い初めてだったが、どうも初対面という感じがしなかった。

見聞色で探り合っていた、というのも理由の一つだが、親しくし

ている存在からその話を聞いていたからだろう。接触しなかったのはお互いにまだその時ではないと思っていたからだろうか。特にアンは意識的に、会うならばエースと共にと思っていたのもあり、避けていた。

相手の訳、は本人に聞くしかないが、アンが海兵であつた事も要因のひとつであるかもしれない。なにせ彼、は元、父の船に乗っており、相棒であつた。しかもシャンクスの師でありかつ、冥王というふたつ名を持つ剣豪でもあるのだ。

一度かけられた手配書は、確実に本人の死が確認されなければ取り下げられる事はない。ほんの少しでもなにか、引つかかる意図的な何かを担当官が感じれば、本部にある各4つの海の出来事をそれぞれ扱う部署で、差し戻しが出来る仕組みを構築していた。

レイリーはわたしやエースの事、どう思ってるんだろう。

もし興味が無かつただとか、どうでもいいと言われたら、泣いてしまつかもされない。

父の生きていた昔を知る誰かと会うのは、娘としてなぜか気恥かしい気持ちになつてしまふ。ゴール・D・ロジャーは既にその肉体は無く、残滓を残すだけの存在だが、人々の記憶にはまだ色濃く影響を与え続けていた。

「あ、あの」

意を決して口を開けば、くしゃりと髪が撫でられる。

「そう身構えなくてもいい。邪険に扱ったりはせんよ」
よく来た。

心の内を見透かすかのような、静かに語られる声にアンはぶるりと身を震わせる。いつもシャンクスが言い聞かせてくる時に耳元で囁く、悪魔のような甘言の本家はここかと気付いた。

「ほう、コーティングか。ふむふむ、何も言わなくてもいい。シ

ヤンクスに聞いて来たと。そうか元気にしているのか」

抵抗は、していた。

以前と比べ見聞色の覇気を絶えず纏うようになり、感情の流出を最小限に留めているはずなのだ。今の気持ちと用件を上手く言葉にできるのだろうかという心配をも読み取ったのか、次々と必要な情報を歩きながら取得されてゆく。

一体どういう仕組みで情報を摘み取っているのかと興味が出てきたアンは、見聞色を強めてみたり、弱めてみたりを繰り返す。その行為をレイリーも面白いと感じたのか、手を変え品を変え、するりと掌握しようとする追跡をかわしては探りを入れてくる。すでに必要としている知りたい事、は手に入れているはずなのに、どんどんと奥へ、奥へとやってきていた。それはまるで遊びに付き合ってくれているかのようにも思えるし、そう、ニンジンを鼻先にぶら下げられ走らされている馬のようにもとれる。しかも浸食されて行く様は、コンピューターウィルスのように浸食、増殖、進行といった段階を踏んで中へとやって来ていた。なるほど、と気付いて反応し返そうとすれば、ふっと全てが引かれる。

折角今から反撃ののろしを上げようとしていた所なのに、と視線をあげようとすれば、大きな手が頭に乘った。その手から伝わってくる思いに、

「う、嬉しくなんか…ないんだから、ないからね！」

舌を噛みそうになりながらなんとか言い終えると、赤くなった頬を両手で持ち上げる。

初老は苦手だった。

両親が先立つてからは、祖父に育てられていた向こうでもそうだったのだが、年配と接する事が多く、可愛がれていたのも影響しているのだろう。年齢を重ねる度に、もう子供では無いのに、いつまでも子供だと構ってくれるな、そう思いつつも可愛いと手を差し出して貰えて嬉しく感じている自分も存在していた。

レイリーは、それを知ってか知らずでか、同じような事をしてくれている。

こちらで改めて生を受け、こちらの感覚でいけば幼くして両親を無くすのはそう珍しい話では無い。気まぐれに出来たから生んだはよいが、生活が苦しくなり捨てるだとか、顔立ちが良いから奴隷船に口減らしの為に売るだとか、いつの時代かと、かつて住んでいた国の基準に照らし合わせれば思う事は多々ある。

だがそれが普通に行われる世界だった。

きちんと命を愛で、育んでいる国や地域、人も多い。文化や技術も差異はあるが、世界的に底辺はきつちりと最低水準が設けられてもいる。それでもあえて、だが、と続けなければならなかった。

あちらもこちらも、根本的には何も変わらない。

総勢が同じ水準の生活を出来るなどとは、夢物語にか過ぎない。それぞれが暮らす場所によって、習慣や考え方の違いもあるだろう。だがこちらでは闇が余りにも身近で、隠される事の無い、恐怖によってばやかされていた。平和すぎて生まれてきた、生きてゆく意味をわざわざ考えなければならなかったあちらと、大海賊時代という無法の中にあり、生まれてきた、生きてゆく意味を生きるのに必死で考える暇もなかったこちらが良かったのか、そんなことは分からない。

意識せずに握ってしまっていた男の袖口を慌てて外せば、いつの間にか13番GRにやって来ていた。

「えっと、ここは」

無法地帯と呼ばれる、海兵の巡回がほぼ行われない古木が集う地域だ。この辺りを訪れるのは主に、外周では滞在できない海賊や、高額を狙う賞金稼ぎくらいだろうか。アンが海兵を辞めてからは中心部へやってくる海兵も減っているはずだ。モモンガ中將がこの島の責任者になっていた事実を思い返せば、かつてこの地に駐屯していた者達も入れ変えられているだろう。今、この古木地帯にやって

来るのは好奇心に駆られたものの好きか、命知らずのどちらかに違い無い。

「来なさい」

案内されたのは、マングローブの盛り上がった根の上だった。階段が設えられられるようになっていて。そこには一件の建物があった。長い間ここにあるのだろう。そこかしこに苔があり、掛けられている看板には”シャツキー・SぼったくりBAR”とある。

シャツキー、という名に聞き覚えがあり、はて、とアンは首を傾げた。

促されるようにドアを開け、入ってみればそこには半月系のカウンター席が中央にあり、左右に壁に添うようにして置かれた半円のソファーがふたつ置かれている。ソファーの前には小ぶりの円卓があり、小瓶に一輪挿された花が活けられている。

「レイさん、お帰りなさい」

カウンターの向こう側から、20代前半位だろうか。きつちりと形を整えたショートボブの女性が、煙草を片手にこちら側を見た。すらりとした体軀は女性としての理想体型で、笑みを浮かべる唇には大人し目の紅がある。

「あら、あなたはポートガスちゃんね」

「え、あ、はい、初めまして」

アンは背筋を正して、にこりと笑む麗人を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2868p/>

ONE PIECE ~ Two one ~

2011年9月12日10時46分発行